

# 〈物語〉シリーズ プレシーズン 【裁物語】

ルヴァンシュ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

### 【裁物語】 壹

“この世に神は何柱も要りません——圧倒的な、ただ一柱だけが存在すればいいのです”

死闘を終えた阿良々木暦を待っていたのは、臥煙伊豆湖からの緊急指令。示された地に向かう暦と忍——二人はそこで、己と向きあう事になる。

それは傷と業にまみれた鬼への、裁き。

これぞ伝説の「怪異!」「怪異!」「怪異!」

青春は さばきなしでは過ごせない。

「120%悪なる小説です」

土曜日 24:30 更新

次回 : 裁物語 しのぶハート 其ノ伍——前篇

目次

衣物語

第壹話	おうぎヘルメット	其ノ壹	1
第壹話	おうぎヘルメット	其ノ貳	33
第貳話	しるしメイク	其ノ壹	66
第貳話	しるしメイク	其ノ貳	96
第貳話	しるしメイク	其ノ參	131
第貳話	しるしメイク	其ノ肆	162
ウラガタリ	おうぎヘルメット		205
ウラガタリ	しるしメイク(上)		229
ウラガタリ	しるしメイク(下)		245

裂物語

第參話	ひよりブレード	其ノ壹	262
第參話	ひよりブレード	其ノ貳	290
第參話	ひよりブレード	其ノ參	316
第參話	ひよりブレード	其ノ肆	338
第參話	ひよりブレード	其ノ伍	372
ウラガタリ	ひよりブレード(上)		410
ウラガタリ	ひよりブレード(下)		425

裔物語

第肆話	しるしスパイダー	其ノ壹	447
第肆話	しるしスパイダー	其ノ貳	475
第肆話	しるしスパイダー	其ノ參	507
第肆話	しるしスパイダー	其ノ肆	534
第肆話	しるしスパイダー	其ノ伍	558

第肆話 しるしスパイダー 其ノ陸

ウラガタリ しるしスパイダー(上) 619

裁物語

第伍話 しのぶハート 其ノ壹 627

第伍話 しのぶハート 其ノ貳 656

第伍話 しのぶハート 其ノ參 679

第伍話 しのぶハート 其ノ肆 713

惨劇童話

惨劇童話 せいれいの山 750

歴物語(短々編集)

第神話 まよいカースト 756

第過話 ひよりウエア 776

## 衣物語

### 第壹話 おうぎヘルメット 其ノ壹

〔001〕

忍野扇。

その名を聞くと、僕の心の中に言い知れぬ恐怖のようなものが芽生えてしまう。僕の行く先々で突然、しかし当然のように現れ、不気味な正しさを振りまいていく——如何にも扇ちゃんらしいこの行動が、どうしようもなく心をざわつかせる。

身がすくむ。

あの暗闇が人の形を借りて動いているような少女には、今まで幾度となく振り回された彼女には、もういつそ苦手意識さえも芽生えていると言ってもいい。僕にいつも影のように付いて回る彼女が、僕は苦手だ。

もつとも、扇ちゃんの正体を考えればその理由は明確で、自明であることなのだけれど——知っていることなのだけれど。

「私は何も知りません。あなたが知っているんです」

まるで僕の敬愛する聖母であるところの羽川翼の代名詞を真似たような言葉。だが、これも彼女の正体を考えれば、あまりにも直接的な表現であったことは明白であり、議論の余地さえない。

だからつまり、僕が何を言いたいのかという点、忍野扇はやはりどうしようもなく僕なのであり、そして、どこまでも借り物の存在であるということだ。

怪しくて異なる——怪異だということだ。

もつとも、今更そんなことを再確認したところで何の意味もない。そもそもそれは『僕』が一番わかっているのだろう。そして、そんな分かりきっていることをこうしてたらだらと喋っている僕を、あの子はいとも容易く嘲笑し、愚か者と蔑むのだろう。闇の衣を纏う、僕の相棒は。

——衣。

それは偽りの姿。己を隠す非存在証明。

己を守る、鎧。

鏡の世界から見事生還してから暫く後、僕たちはある怪異現象に立ち会った。否、立ち会ったと言うよりは立ち遭ったというべきだろう——いや、そういう被害者染みた言い方は、毎度のことながらとても出来ない。何故ならば、結局今回の事件は、いつものように愚かしく、また懲りもせず、自分から首を突っ込んだだけという話なのだから——その辺が愚かだという話なのだが——それはともかく。

それが今回の物語だ。新たな始まりの物語。キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードと殺し合い、羽川翼の裏を見て、戦場ヶ原ひたぎと出逢い、八九寺真宵と迷い、神原駿河に憎まれ、千石撫子を助け、再びブラック羽川と相対し、貝木泥舟と影縫余弦を退け、別時空を救い、忍野忍の過去を知り、死屍累生死郎と決闘し、老倉育と向き合い、蛇神に嬲られ、斧乃木余接に見張られて、臥煙伊豆湖に殺され、地獄から蘇り、忍野扇を受け入れた僕、阿良々木暦の、新たな怪異譚。

新たな始まりの物語——ファイナルが終わり、オフが始まる、その間の物語である。

「002」

「あれれ、阿良々木先輩じゃないですか。奇遇ですnee。奇遇も奇遇、偶然もいいところですよ」

それは、僕が直江津高校の卒業祝いに両親に買ってもらったニュービートルを勢い勇んで走らせていた時の話。

勢い勇んでとは言うけれど、免許を取り立てのペーパードライバーである僕にそんな度胸は皆無だ。勢いもないし勇んでもいない。僕がこうして平穩に車を走らせることが出来るのは、ここが車通りの少ない田舎だからという理由に他ならない。さもなければ、背後からのクラクション、煽りの嵐を受け、いとも容易く再起不能になってしまい、車になど二度と乗れなくなってしまうだろう。

と言うわけで弱くて薄い僕は、吸血鬼らしからぬ早朝にニュービー

トルを走らせていたのであった。

そしてその道中。のろのろと走るニュービートルの前方に、見覚えのある少女が突然飛び出してきて立ち塞がったではないか。というか、忍野扇が現れたではないか。

「……やあ、扇ちゃん」

慌てて僕はブレーキを踏んだ——まったく、運転初心者の僕に対してなんていうドツキリを仕掛けてくれるのだ。

心臓に悪すぎる。

「こんな朝っぱらからどうしたんだい」

「どうしたもこうしたもありませんよ。私は阿良々木先輩の居るところどこへでも馳せ参じ、どこにでも現れる忠実なる僕ですからね」

「主人の運転を妨害してくる忠実な僕なんて居てたまるか」

車から降りた僕は扇ちゃんを見た。

「……なんですか、じろじろ私を見て。私の魅惑のボディに見惚れているのですかこの愚か者」

「そんな訳ねえだろうが」

その胸でよく魅惑と自称できるものだ。僕を魅了したいのなら、羽川レベルの胸、もしくは、八九寺レベルの口り度になってから挑んでこいというものである。

念の為に釈明しておくが、僕は断じて扇ちゃんに見惚れていた訳ではない。扇ちゃんが怪我を負っていないかチェックしたのだ。

幾ら勝手に出て来たのは扇ちゃんとは言え、車で後輩にぶつかって怪我をさせたとあっては阿良々木暦の名が廃る。というか逮捕される。しかもご両親によつて。

「おやおや、流石阿良々木先輩。後輩の身をそこまで案じて下さるのですか。光栄の至りですね」

「そんな大袈裟なもんじゃねえよ……よし、大丈夫みたいだ」

僕は扇ちゃんから離れる——どうやら逮捕は免れたようだ。

「でも阿良々木先輩。私が証言しない限り、阿良々木先輩が逮捕されるなんてことはないでしょう。今ここに見物人は誰もいません。私と阿良々木先輩だけなのですから」

「ふん、僕を甘く見るなよ扇ちゃん。この僕がそんな罪悪感に耐えられると思っっているのか？　もしも君が証言しなくても、僕は全力で自首する所存だぜ」

「愚か極まりますねあなた」

まあ、世間の闇を知った僕が実際にするかどうか分からないが——少なくとも、純粋な子供時代の僕であれば——それこそ中学一年生くらいの僕であれば、迷いなく自首しただろう。そういう子供だっただろう。正義感溢れた立派で素直な子供だっただろう。

「昔の自分を美化しすぎじゃありません？」

「今の僕がこんななんだから、昔の僕くらい美化させてくれよ」

「何をどう美化したところで、その頃のあなたは老倉先輩の期待に答えられなかった愚か者だったのですがね」

「やめろ！　もうその話はやめてくれ！」

結構その事実、僕の胸に突き刺さりまくってるんだぞ！　トラウマと言ってもいいレベルなんだからな！

「しかも何ですか？　中学一年生どころかさらに昔の段階で、形式だけとは言えど同じ屋根の下で過ごしていたという、老倉先輩含む何人も幼馴染を纏めて忘却しているというではありませんか」

「あーあー聞こえない！　僕は知らん！」

「拳句の果てにそれらがついに衆目の目に晒されましたからねえ。地上波で」

「くそー！」

いやまあ自業自得と言えはそこまでののだが……つーか自分の黒歴史がここまで拡散されるとか、軽く死ぬるぞ。気分的に。

「アニメ終物語、絶賛放送中です」

「番宣をやめろ！」

まだ晒し足りねえのか！　もう十分だ畜生！

「安心してください。阿良々木先輩の黒歴史は、しっかりとDVD／BDに保存され、全国のお店で定価6000円或いは7000円で売られ、そこそこの売り上げを記録する筈ですから」

「売り上げとか言うな！　メタ発言が過ぎるぞ扇ちゃん!!」



くっ、嬉しいのか悲しいのかよく分からない……本当なんでこんな所までアニメしてしまったんだ？ 幾度となくもうアニメ化は終わったただの何だのと言いつつ続けたのに、まだ続くのか。

「原作の方も続きましたからねえ。オフシーズンとか言ってる」

「は？ 何だそりゃ。僕は知らないぞ、っーか呼ばれてないぞその企画」

「まあ阿良々木先輩は一切登場しないエピソード群の話でしたからね」

「なんだと!?! 僕こんなでも一応主人公なんだぞ!?!」

「アニメ恋物語が映像化されてしまった以上、全国の阿良々木派の何割かが貝木派に流れてしまったでしょうし、しかも終物語までアニメ化と。人気が下がる一方の貴方はもう用済み、ということなのかもしれないですね」

「マジか……」

それは凹むぞおい……今までなんだかんだで全話に登場することを許されていたのに、遂にそれさえ許されなくなったのか。

黒歴史の放流くらい悲しいぜ。

「でもこれについては私も少々意を呈したいのですよ、阿良々木先輩。阿良々木先輩が最新刊であるところの愚物語に出演していないことを」

「え？ そうなの?」

「勿論です」

なんだ、優しいところもあるじゃないか扇ちゃん。てつきり、扇ちゃんはまだ僕の脇腹をちくちくと突きつけてダメージを与えてくるような事しかない奴なんじゃないかと思いついていたところだったぜ。

「愚物語——『愚か』と題している癖に、シリーズきつての愚か者である阿良々木先輩を省くのは、少々理解出来ませんね」

「どうせそんな理由だと思っただよ!!」

前言撤回。やっぱりこの子ダメージ与えてくる事しかない。

「愚物語、全国の書店にて絶賛発売中です」

「はい、宣伝(こ)まで」

これ以上は流石にまずい。ギリギリセーフどころか、軽くアウトに足をつっ込んでいるような気がする。いや、足というか、首をつっ込んでいるというか――。

「愚か者といえは阿良々木先輩」

「そんな話の繋げ方されたくないんだが……なんだよ」

「こんな早朝から何をしてらっしやるのですか？ ニュービートルを走らせて、黄色いニュービートルを走らせて、何をしてらっしやるのですか？」

「お前、僕のニュービートル言外に馬鹿にしてないか？」

「やめてくださいよ。行間を読まないでください。お慕い申し上げている阿良々木先輩の所有物を馬鹿にするなんて、私にはとてもとても出来たものではありません」

「そうか。悪かったな、いちやもんつけるような事言つて――」

「私が馬鹿に出来るのは愚かで馬鹿な阿良々木先輩のことだけです。貴方の所有物は何も悪くありませんから」

「……………」

……僕何かした？

……こんなに罵倒されるようなこと、何かした？

「いいえ、貴方は何もしてません。強いて言うなら、そこに存在しているというのが理由ですかね」

「出演どころか存在さえ許されないのか僕は!？」

「最早貴方の栄光は過去のものなのです。いい加減受け入れてください」

「悲しいなあ」

これが時代の荒波か……昔は良かった。

……何が良かったんだろう？

「さてさて阿良々木先輩。昔ばかり見ても前に進めませんよ。物語もまるで進みません」

「ああ……まあそうだな」

「ですから早く次の章へ行くフラグを立てましょう。阿良々木先輩、

早く私の質問に答えてください」

「なんで車を走らせてたか、だっけ？」

「って言われてもな……正直理由なんて別にないんだよなあ。」

「だから、調子に乗っていたんでしよう？ 免許を取ったことを早く八九寺さんあたりに自慢したくて、けれど白昼堂々と練習するのは怖いから、車通りの少ない早朝に練習していたんでしよう？」

「分かっているんだったら聞くなよ!!」

「っーか言うなよ恥ずかしい!!」

「お前は僕を貶めること以外やることないのか!？」

「はい、もう地の文には反応しませんよ。いいから次です次々」

「適当だなあ」

「投げやりとも言う。展開の放棄。」

「わあー、阿良々木先輩って車持ってたんだなー、凄いなー、かつこいなー」

「扇ちゃんはニュービートルの周りをうろろうしながら言う——っーか白々しいわ。」

「是非ともこの私を乗せて頂きたいものですね。阿良々木先輩の運転を、拝見させてくださいよ」

「……………」

「嫌だなー。」

「すっげー嫌だ。この子に乗せるとか……なんかもう貝木とか老倉を乗せた方がマシに思えてくる。」

「阿良々木先輩、私とあなたの仲じゃあないですか。苦難を共にした不肖この私を乗せないというのは如何なる了見でしょう」

「苦難を共にしたどころか、君はその苦難を作った側にいるような奴なんだが」

「結局それも自業自得だが……あれ？ もしかして全部突き詰めれば、大体のことは僕が悪いってことになるのか？」

「ねえ、阿良々木先輩。良いんですか？ なんならこの制服を自分で汚して、貴方に乱暴されたと交番に駆け込んでも良いんですよ？」

「脅しだと!？」

「ふふふ、そうなるかどうかでしようね？　愉快愉快」

「ぼ、僕がそんな脅しに屈すると思うなよ！　つーか、僕は無罪を貫くからな！」

「このご時世、男性よりも女性の方が、こういう場合強いんですよねえ」

「くっ……！」

こいつ自分の性別さえ利用するのか……！　全く、どこまで僕を虐めたいんだこの子は――。

「さあ、どうします？　私を乗せるか、それとも貴方がパトカーに乗せられるか、どちらが良いですか？」

「……………」

選択の余地など、選択する自由など、僕にはまるで与えられていなかった。

「003」

「やっと進みましたね。　章も車も」

「車は余計だ……」

扇ちゃんを乗せるか、パトカーに乗せられるか。そんな選択肢などまるでないような問いを突き付けられ、僕が選んだのは、当然の如く扇ちゃんだ。

扇ちゃんが乗るのは後部座席。助手席に乗りたがっていたが、もしもどこかにぶつかったりしたらと考えると、前方の席に乗せるのは躊躇われた。なので頭を下げ、後部座席に乗ってもらったのであった。

「阿良々木先輩は無駄な気を使いすぎなんですよ。無駄に気を使い過ぎて、車のエンジンをかけてから約5分くらい進まない程度には」

「エンジンかけて急に動かしたら、燃費が悪くなるだろ」

「別に冬場って訳じゃないんですから……余計燃費が悪くなりますよ逆に」

「それに、周りに誰も居ないか、何もないかの確認も必要だろ」

「だからって何も約1分程度かけて確認するようなことでもないでしょうに」

「……………」

まあ、確かに扇ちゃんの言っていることは正論オブ正論なのだが——まああっていうかだがっていうか、反論の余地も何もないのだが。「やれやれ、確かにこれではとても走れたものではありませんね。こんな有様で車の多い時間帯を走ろうものなら、間違いなく事故を引き起こしますよ」

「……だからこうして練習してるんだろ」

しかし、実際にこうして運転してみると、その難しさが身に染みて分かる。世の大人たちが、どれほど高度なことをしているのかというのが、よく分かる。戦場ヶ原がどれだけ苦労したのかが、よく分かる。「戦場ヶ原先輩は貴方と違ってその辺如才ないですし、多分さらっと乗りこなせたんじゃないやありません？」

「言うな……」

「如才ないと言えばあの巨乳先輩も凄いですよねえ。軍用車ですよ軍用車」

「言うな……！」

自分のレベルの低さに悲しくなってくる……！

しかもあいつ、軍用車どころか戦闘機まで乗りこなしてやがるからな。もう言葉も出ない。

賞賛さえも、なんか安っぽく思えてくる。

「阿良々木先輩、今時速何kmで走っていますか？」

「え？」

僕はメーターを見た——時速38km。法定速度ギリギリである。

「38kmだけど——もしかして、これ以上速くしろっていうのか？」

おいおい、幾ら誰も見てないからって、ルールを破るのは良くないぜ扇ちゃん。君だっこの間、ルールを破って痛い目を見かけただろう？」

「阿良々木先輩、貴方の言っていることは紛れもなく法律から見れば正しいことではありますが、それが普段の道路で許されるかどうかは、少し疑問ではあるところですね」

「なんだよ、扇ちゃん、僕を法律を守らない、所謂DQN共と一緒にす

るのをやめて欲しいな。僕は法律を是とする、警察官の正義感高らかな息子だぜ」

「ほう？　では仮に周りの車が法定速度を越えた時速50kmで走っていたとしましょう。全部です。貴方はそれでも、時速38kmを貫くのですか？」

「なんつー前提なんだよ……」

まあ前提は兎も角として……その中でただ一台だけ遅いというのは、車の流れを著しく混乱させ、事故を誘発しかねない。となると、交通安全をポリシーとしている僕としては……。

「そいつら全員通報する」

「愚か者ですね貴方は」

冗談である。

過激が過ぎる……そんなもん逆に僕が通報されるわ。

「まあ、周りに合わせるしかないだろ。……不本意ながら」

「ですね。では実際問題、果たして時速38kmで走っているような車が、交通ルールを守っている車が、果たしてどのくらいいるのでしょうか？」

「……何が言いたいんだよ」

「ですから、そういった場合のことも想定した練習もすべきだと助言して差し上げている訳ですよ私は——勿論、法定速度を守るに越したことはありませんが、それを守らない愚か者は常に跋扈していますからね。臨機応変にいきましょう」

「臨機応変、ね」

まあ、そういう見方もあるのだろう。

どの方向から見ても正しい物事など存在しない。突き詰めれば、正しきなんて存在しない。僕はそれを、かつて痛感した。

そしてそれは、扇ちゃんも同じ——。

「まあ要は、事故しないように運転しましょう、ということですよ」

「……分かったよ」

確かに、何かに縛られすぎても、それは最早正しさとは言えまい。正しさとは多数決で決まってしまうもの。ならば正しさに臨機応変

に対応せねばなるまい。

僕は意を決し、アクセルを踏んだ。

メーターが上がっていく——39 km——40 km——41 km。  
ついに越えた。越えてしまった。

法を破ってしまった。

だが、妙な開放感があった——慣れないスピードに戸惑いつつも、もっと上げてみようと思った。

愚かにも、思った。

だから——天罰が下った。

ガン!!

「っ!!?」

何かにぶつかったかのような衝撃——何かを轢いてしまったかのような音。鈍い金属音。

それを感じた瞬間——聞いた瞬間、僕は何があっても絶対に法定速度を破らないと、心に深く誓ったのであった。

「004」

「あーあ、やってしまいましたねえ阿良々木先輩。ダメですよ、そうやって調子に乗るから」

「うわあうわあうわあうわあ」

冷や汗が噴き出す——おいおいおいおい冗談じゃねえぞふざけんな!  
な!

慌てて車から飛び降りる——何にぶつかった? いや、ぶつかった  
だけならまだいい、最悪なのは——何を轢いた!?

何を轢いた——人を轢いたって展開だけは勘弁してくれよ! ま  
だこの物語始まったばっかなんだぞ! 主人公の逮捕が原因で打ち  
切りとか、笑えねえよ!! いや戦場ヶ原とか斧乃木ちゃん辺りは笑い  
そうだけでも!!

「あれ?」

だが、焦る僕を嘲笑うかのように、そこには何もなかった。すぐ前  
方には何も無かったのだ。

「……あれ?」

「あれれー、おつかしいなあ。確かに衝撃があつた筈なんですけどね」

扇ちゃんも車から降りてきた——衝撃。

扇ちゃんまでもがしつかりと証言している——僕の気の所為、ということではなさそうだ。

「確かにすぐ前方には何もありませんねえ」

扇ちゃんも同じく確認した——確かめ、認めた。

車体もくまなく確認したが、どこにも傷は無かった。ほぼ真つさらな新品そのまま。ニュービートルのかっこいいデザインがそのまま保たれている。

「その描写要りますか?」

「要るんだよ僕にとつては」

語り手は僕なんだから、その辺は好きにさせて欲しい。

だが、どこも傷付いていないというのは嬉しい反面、奇妙でもある。

何故傷がない?

さっきの衝撃はなんだ?

僕も扇ちゃんも感じた筈なのに——。

「もしかすると、僕たち二人共全く同じ幻覚を感じたのかもな」

「そんな訳ないでしょう。愚か者ですか貴方は」

「……………」

そこまで言われる謂れはないと思うんだが。

「見てください、この窪みを」

「え?」

扇ちゃんに言われるまま、右側前輪のタイヤを見た——すると、タイヤが大きな窪みに嵌っているではないか。

「なんじゃこりゃ——これは一体?」

「さあ?」

扇ちゃんは首を傾げた。

こんな窪みここにあつたつけ——僕はその窪みを観察した。

それは窪みというより、何かによって穿たれた跡のようなもので



あった。何かに破壊された跡というか——ここに嵌った衝撃だったのか？

「いいえ、それは違うでしょうね」

扇ちゃんは遙か前方を見ながら言う——前方？ 何があるんだ？

「仮にその窪みに嵌ったのが衝撃の理由として、ではあの金属音はどうやって鳴ったのです？」

「あつ……」

そうだ。金属音。

あのぶつかつたような音——確かに、あれの謎が解かれていない。

「車の中身が揺れたとか、じゃねえよな」

「ですな」

扇ちゃんは見つめる先を示した——指し示しているのかどうかは、袖の所為でよく分からないが、とにかく腕を向けた。

「恐らく原因はあれでしょうね——見てください、阿良々木先輩」

扇ちゃんの見つめる遙か前方、そこに何があるのか。僕は目を細めるほどの距離も無かつた。僕の視力は吸血鬼化した影響で著しい上昇を見せているが、それを差し引いても、目を細めるまでの距離ではなかつた。

考慮していなかつたのは『跳ね飛ばした』という可能性だつた。僕のはてつきり、ぶつかつた、或いは轢いたものが、その場にずっと残っていると思っていたのだ。

だが、冷静に考えてみるとそうである。これ程の質量の物体——調子に乗って加速している物体がぶつかってくるのだから、衝突した物体は当然、物理の法則に従って吹き飛ぶ。

その場に留まっている筈がない——寧ろ、どうしてもっと吹き飛んでいないのかという新たな疑問が湧いてくるほどのものであつた。そこにあつた物体は。

「なんだこれ——兜？」

そう。

僕が跳ね飛ばした物体——轢いてしまった物体の正体は、兜であつた。

……いやいや。

いやいやいやいや。

おかしいおかしい——何でこんな道のご真ん中に兜が転がってるんだよ。まだコンクリートの塊とかの方が理解出来るわ。

兜って……路端どころか、どこのお宅にもあるとはお世辞にもいえないような品物だぞ。なんでこんなところにあるんだ。

「おやおや、兜ですか。阿良々木先輩にとっては懐かしい品物なんじゃないですか？」

「……どういふことだい、扇ちゃん」

僕は思わず身構えた——またぞろ僕が忘れていた過去、黒歴史を暴露されるのかと思ったからだ。だが、別にそんなことはなく。

「ほら、端午の節句とかで兜とか鎧を飾ったりするそうじゃないですか。阿良々木先輩は、そういうことなかったのですか？」

「兜飾りは確かにあったけれど、鎧を飾った覚えはないな」

鎧まで飾るとなると、さぞ豪華絢爛な事になるのだろうが。

「兜ねえ。端午の節句の兜飾りもそうだが、別のものも思い出してしまったよ」

「別のものとは？」

「ほら、あいつだよあいつ——初代怪異殺し」

初代怪異殺し。真名、死屍累生死郎。

忍の最初の眷属にして、僕の前任者。

「へえ。意外と意識していらっしやるんですね」

「そりゃあな……軽い言い方をすれば、忍の元カレなんだから」

まあ、僕と比べると僕が死にたくなる程の格好良さなんだが——忍に相応しいほどの格好良さなんだが。

「まあそんな事は置いておこうぜ、扇ちゃん。今はこの兜の謎が先だ」  
「ですね。アニメで貴方と初代さんの差が世間に知らしめられるのも、時間の問題ですしね」

「……………」

扇ちゃんの煽りにめげずに兜を手に取り、眺め回してみる。

日本の兜と言うより、どちらかというと西洋甲冑の兜と言った方が

適切なのだろうか——初代怪異殺しが被っていたような兜とは形状が違う。まるで魚を模して作られたかのような兜。

「……あれ?」

僕は目を凝らして兜を見る——だが、見当たらない。

「どうしました? 阿良々木先輩」

「いや……」

僕は兜を扇ちゃんに見せた。

「これ、全然傷が付いてねえぞ」

「ほう?」

扇ちゃんが興味深そうな声を上げた。

そう。傷一つない。新品のように。

これはどう考えてもおかしい——兜が転がっているという前提の時点でおかしいが、それは兎も角。

僕の車体には傷一つなかった——ぶつかったのがこの兜というのなら、確かに納得できることである。だが、ぶつけられた兜の方に傷が無いというのは、明らかにおかしい。

「ちよつと見せてください」

扇ちゃんは兜を奪い、しげしげと眺めた。

暫くして扇ちゃんは兜を地面に置き、思いつき蹴飛ばした。

「……つておい!

「扇ちゃん!」

「はい? 为什么呢しよう阿良々木先輩」

「いや、なんでしようつて……な、なんで蹴った!」

「いえ、少し強度を試したくなりましてね。阿良々木先輩の仰る通り、傷一つありませんでしたから——試しに蹴ってみました」

「蹴ってみましたつて……」

無茶苦茶やるなあこの子……流石忍野の姪っ子、怖いもの知らずである。

扇ちゃんは蹴り飛ばした兜を拾いあげ、砂を払った。

「はい、傷一つありませんね」

「ああ。……普通、コンクリートかなんかで削られた傷でも付いてな

いとおかしいのにな」

「ええ。仰る通りです——ふふふ、蹴り飛ばされても車に轢かれても、傷一つつかない兜ですか」

扇ちゃんは兜を地面に置いた。

「謎ですねえ、不思議ですねえ、怪しいですねえ——」

怪しい。

怪しくて、異なる。

怪異——。

「……扇ちゃん、これはまた君が設置した怪異現象、つて訳じゃないんだな？」

「私をお疑いですか？ 阿良々木先輩。酷いなあ、可愛い後輩を疑うだなんて」

「……………」

「ええ。私は無関係です。こんな怪異作った事ありませんし、何より作る意味がありません」

「作る意味……………」

「怪異にはそれに相応しい理由がある——ですが、この怪異の存在理由は、まるで分かりませんね」

「……………」

怪異にはそれに相応しい理由がある。

つまり、この一見意味のなさそうな怪異にも、何か理由があるということだ——それが善意であれ悪意であれ、なんらかの理由が。

作成者の意図が。無意識が。

ある筈なのだ。

「その辺をどうにかしないと、この怪異もどうにも出来ないってことか」

「どうにかする必要があるのかって話ですけどね——阿良々木先輩、ここは大人しくスルーしてみても如何でしょう」

「え？」

扇ちゃんが言う——スルー？

「おいおい扇ちゃん。見て見ぬ振りをするなんて、君らしくないぜ。

いつもなら寧ろ僕を煽る筈なのに」

「それは私がお膳立てしたものだからですよ——今回は全く違う」

全く違う——異なる。

「怪異なんていうのは、本来なら出来るだけ関わらないに越したことはないものなんですよ、阿良々木先輩——愚かにも首を突っ込むような事ではありません」

「……そうは言うけど、扇ちゃん。もしもこれが誰かに迷惑をかけるような、危険な怪異だったらどうするんだ？」

それこそ、もしも道路に現れ、ただ運転手を焦らせるような怪異だったとしたら——それは実害自体は無いにせよ、二次被害を与えかねない。

「だから、気負う必要はないんです——気を使う必要はないんです。そういうのを余計なお節介というのですよ。そうやって何でもかんでも首を突っ込んで、何度も何度も痛い目を見たのをお忘れですか、この愚か者」

「……忘れたことなんてないさ」

そう、忘れたことはない。

昔の記憶——僕の過去は兎も角として、少なくとも、高校三年生の春休みから始まる一連の出来事は、一連の後悔は、一片たりとも忘れたことはない。

「扇ちゃん、君は僕のそういうところをどうにかしたいんだろうけどさ」

「……………」

僕は兜を手に取った。どこにも傷一つ無い、作りたてのような兜。

「でも、やっぱり無理だ」

愚か者でも、何でもいい。

何と罵られようと——何度痛い目を見ようと、関係ない。

目に見える危険を、見て見ぬ振りなんて——僕には出来ない。

僕は、兜を頭上に掲げ——そして、被った。装備した。

「……阿良々木先輩」

「ん？」

兜の所為で声が反響する——どうやら息は出来るようだ。視界も、  
どういう原理かは分からないがしっかりとしている。

呆れたような顔の扇ちゃんが言った。

「なんで被ったんですか」

「……………」

……いや。

いやだつてさあ！

兜だよ？ あの兜だよ？

被りたくならない？

カツコいい鎧兜——男なら誰でも一度は憧れた筈だ。そして、被つてみたいと思つた筈だ。

だが、それが実現した男は、果たしてこの世に何人居るだろう？  
勿論、端午の節句の兜飾りを除いてだ。そう、殆ど居ないだろう。

つまり、この世の——いや言い過ぎか——日本中の男の大半が叶えられないであろう願望を、一介の男子であるところの僕、阿良々木暦は、こうして叶えてしまったということなのだ。

勝ち組である。

「阿良々木先輩……だから貴方は愚かだと言っているのです」

扇ちゃんが何か言っているが、知らん。この気持ちは女子には分かるまい。

「何を決意したような台詞を仰つたのかと思えば、そんなこと……阿良々木先輩、これからは愚か者先輩と呼ばせてください」

なんだか僕の株が急降下しているような気がするが、知らん。兜を見てはしゃぐ男子の気持ちは、きつと男性読者の諸君ならしっかりと汲んでくれるはずだろう。

……こういう事をしているから、呼びが掛からなくなったのかも  
しれないが。

「あれ、冷静になって考えてみると、僕何してるんだろう」

「愚かな事をしていることは確かですよ、愚か者先輩」

「愚か者？ 違う、僕の名前は阿良々木だ」

「あ行とら行が入ってますよ。大体一緒じゃないですか」  
「違う！」

全然違う！ いやなんかもう……色々違う！

「私に何を期待しているんですか。私は誰かの持ちネタを奪ったりは  
しませんよ」

「……………」

羽川と似た様な台詞言う癖に。

「あ？ あの余分な脂肪先輩がなんですって？」

「いえなんでもありませんすいません」

うん、やっぱり胸は慎ましやかな方がいいよね！ うん！ 僕も  
常々そう思っていたところなんだ！ うん！ 貧乳はステータスだ  
し、希少価値だもんね！

「阿良々木先輩、後で一年三組の教室に来て下さい」

「マジすいませんでした！」

はあ、と扇ちゃんは溜息を吐く——おお、なんだか新鮮な姿。

「……………」

「え？」

「兜ですよ——いつまで被っているのです？ 別に被っておく理由な  
んて特に無いのですから、外したら如何ですか」

「ああ、うん」

確かに——幻想が叶ったはいいけれど、実際のところ、声は反響す  
るわ蒸し暑いわ重いわで、邪魔極まりない。

幻滅である。

僕は兜を脱ごうと、兜を頭上へと持ち上げた。

持ち上げようとしたのだが。

「……………」

持ち、持ち上げようと、し、したのだが——。

あれ？

ちよつと待って、あれ？

「どうしたんですか？ 阿良々木先輩」

「……あの、扇ちゃん」

「はい？」

「扇ちゃん、この兜の中に、接着剤が何か塗ったりしてないよね」  
「塗ってませんよ。どれだけ疑われているのですか私は」

「……………」

「……阿良々木先輩、今どういう状況なんですか」

「……………」

僕は再び兜を持ち上げ、外そうとするが——取れない。持ち上げられない。外せない。

まるで接着剤で固定されたかのように——兜が頭から、外せなくなっていた。

「005」

「何とかしてよオウギえもんくー！」

「いやあ愚かですねぇ」

泣きつく僕に笑いかける扇ちゃん。笑いかけるっていうか、それはどうみても嘲りの嗤い、嘲笑であった。

「嘘だろおい…………ちよつと軽い気持ちで着けてみただけだったのに、マジかよ…………」

「はっはー。そうやっていつでも軽い気持ちでいるから、貴方はいつまで経っても愚か者のままで、進歩しないんですよー」

助けてくれるどころか傷口に塩を塗りたくってくる。流星は僕の大敵。一周回って惚れ惚れする。

「どうすんだよどうすんだよどうすんだよこれ！ どうやったら取れるんだよー！」

「知りませんよそんなもん」

突き放す扇ちゃん。その突き放した先が崖であるという事を、この子は分かっているのだろうか。分かっているのだろうか。分かってやっているのだろうか。それが忍野扇だ。

「もうそのまま一生暮らすしかないんじゃないですか？」

「兜被ったまま天寿を全うするとか嫌すぎるわ！」



「いいじゃないですか。憧れだったんでしよう？ 良かったですね夢が叶って。勝ち組ですね。わー、凄ーい、こよみん素敵ー」

「うるせえ!!」

僕は諦め悪く何度も何度も外そうと試みるが——駄目だ、ビクともしない。本当に外れない。頭と兜のサイズが合っていないとかではなく、接着されたかのように、梃子でも動かない。

「おい……まさか本当に死ぬまでこのままなんて事は無いだろうな……嫌だぞ、もう二度と八九寺にキス出来ないなんて」

「そこで恋人の名前が出て来ないのが貴方らしいですねえ」

いやまあ、恋人はね。

ちよつとね、恥ずかしいからね。

じゃあ八九寺となら恥ずかしくないのかという議論に発展しそうだが——でもさ、八九寺は恋人とかじゃなく、友達だろ？ 誰でも経験するって、友達とのキスくらい！

寧ろ僕は胸を張って言えるね！ 八九寺とキスしたいって！

「阿良々木先輩、そんなんだから阿良々木派が消えるんですよ」

「マジでか」

なんと。

そうなのか……僕はただ正直な気持ちを叫んでいるだけなのだが。

世知辛いなあ。

「いやそうじゃなくてそうじゃなくて。マジでどうすればいいのこれ？ 扇ちゃん、怪異の知識総動員して解決法を教えてくださいよ」

「えー？ どうしましょうかねー」

「頼む！ 一生のお願い！」

「一生のお願いって何回あるんですか」

「僕はまだそんなに言っていない筈だぞー」

「ほら、言ってるんじゃないですか」

「ちいっ！」

細かい事をぐちぐちと……！

斯くなる上は！

「土下座する！ 土下座するから！」

「誰に謝っているんですかねえ」

「土下座した！ 土下座したから！」

「阿良々木先輩引くわー」

くそっ！ この僕の世界一美しい土下座でも駄目だというのか！

留年をどうにかしてもらった実績を持つこの神なる最終奥義D O  
GEZAでも駄目なのか！

面倒臭え……っかこの子、忍みたいに釣れないのが難易度高くして  
るんだよなあ。忍ならドーナツ一つで一本釣り出来るのに。

……伝説の吸血鬼が今やドーナツで一本釣りされているという事  
実に、改めて悲しみを覚えるが。

「分かりましたよ阿良々木先輩。誠意は認めましょう」

「えっ！」

「いいでしょう。私が持つ怪異の知識を総動員して、その兜の正体を  
暴いてみせましょう」

「やったぜー」

「ちよつと、話しかけないで下さいねー」

扇ちゃんは直立したまま右手を左肘の置き場にし、左手を口元に  
持っていくという、探偵おきまりのポーズをとった。

ふう、良かった、これで解決だ。

流星にこのまま生活するのは困難だからな……僕は完全な吸血鬼  
じゃないし、空腹は耐えられないから——真面目に命の危機に直結す  
る。

命の危機とは別にしても、そもそもこの格好のまま知り合いに会う  
とか、恥ずかしすぎる。どんな公開処刑だ。罰ゲーム過ぎるわ。

況してやこの姿を妹たちに見られたらと思うとぞつとする。

火憐の場合。

「おお!? 兄ちゃんなんだその兜！ 超かっけえじゃん！ やべえ、  
すっげえ強そうに見えてきた！ よっしや兄ちゃん、久し振りにガチ  
バトルだ！」

とか何とかほざかれて、僕なのか何なのかよくわからないぐちゃぐ  
ちやの生ゴミレベルの物体になるまでボコボコにされるのは目に見

えている（吸血鬼が妹に負けるのかと笑うなかれ、あいつはマジでヤバイ）。

月火の場合。

「何その兜？ お兄ちゃん、私を舐めてるの？ 和服の私に對抗しよう、そんな子供みたいな手で対抗しようっていうの？ やだプラチナむかつく、殺そう」

とか何とかほざかれて、僕なのか何なのかよくわからないぐちゃぐちゃの生ゴミレベルの物体になるまでザクザク刺されるのは目に見えている（吸血鬼が妹に負けるのかと笑うなかれ、あいつもマジでヤバイ）。

……僕、妹恐れすぎだろ。

まあこんな事情だから、おちおち家にも帰れやしない——かと言って路上をウロウロしていれば、確実に不審者扱いされ警察に通報、お縄一直線で家族の恥決定である。

このまま兜が外れなければ、もう僕の人生軽く詰む——だから扇ちゃんが居てくれて助かった。

「阿良々木先輩、総動員し終わりましたよ」

「おお、漸くか扇ちゃん。全く先輩を待たせるなんて罪な後輩だな君は。さあ、勿体ぶらずに早く教えてくれ。どうやったらこの兜を外せるんだ？」

「分かりません」

「成る程、分からないか、そうだよなーっっておい!!」

衝撃的過ぎて普段はしないノリツツコミをしてしまった。

いや分からないって……おい!!

「分からないってどういうことだよ扇ちゃん!! 僕の貴重な時間を返せよ!! あれだけ調べてそれなのか!! くそっ、扇ちゃんを買いかぶりすぎた! もうお前とは絶交だもんねー!!」

「後半は恐らくツツコミ待ちでしょうから敢えて触れません。ええ、分からないんですよ阿良々木先輩。この私の知識を持ってしても」

ボケをスルーするというツツコミにあるまじき行為をしがったぞこいつ。

それはそれとして……嘘だろ？

忍野忍と死屍累生死郎の知識を持つ、圧倒的な怪異キラーであるところの扇ちゃんできえ——分からない？

「そ、それはアレ？ いつもの、ほら、羽川みたいな台詞の、アレ？」

「私は何も知りません——貴方が知っているんです」

「そ、そうそう、それぞれ——」

「ですから、私は何も知りませんし」

分かりません。

扇ちゃんは淡々と、事実だけを述べる機械のように——告げた。

〔006〕

扇ちゃんでも分からない。

僕の知る限り、怪異の知識に関しては上から三番目くらい（一番は臥煙さん、二番目は忍野）の知識量を誇る扇ちゃんが分からないとなると、いよいよ打つ手立てが無くなったように思えた。

絶望、である。

これはいよいよ身の振り方を考えねばなるまい——その為に、まずはこうなった経緯を家族に説明する必要がある訳だが——。

道端に兜が落ちていっているのに興奮したので着けてみたら取れなくなつた。

間抜けすぎる。

こんなもん説明出来る訳がない——どうすればいいのだ。どうしろというのだ。

「……阿良々木先輩」

「扇ちゃん、暫く黙っててくれないか。僕は未来の事を考えるのに必死なんだ」

「はい、分かりました」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………ごめん、さつき何言おうとしてたのか教えて」

折れた。

実際、一人で考えても仕方ない——人は一人で勝手に助かるだけだと言うが、しかし助け合うことも時には大事だとおもう阿良々木暦の今日この頃。

扇ちゃんの意見を仰ごう。

扇ちゃんの正体が正体なだけに、結局は一人で考える事に他ならない訳だが——まあ硬いこと言いつこなしである。

臨機応変にいこう。

「はっはー、阿良々木先輩。愚者阿良々木先輩」

「なんだい扇ちゃん。賢人扇ちゃん」

「悲観するのはまだまだ早計ですよ」

「え？」

早計？

「いやでも扇ちゃん、これはもうどうにもならないって——」

「私は分からないと言っただけで、どうにもならない、お手上げとは一言も言っていないですよ？」

「——!!」

確かに……言っていない。

言っていない！

「じゃあ、どうにかなる可能性はまだあるってことか!？」

「はい。尤も、その方法は些か横紙破りのようなものですが——」

「良い良い！ 横紙破りでもなんでも良い！ 教えてくれ扇ちゃん」

もう形振りなんて構っていられない。生命的に死ぬ前に、社会的に死ぬ前に、この危険極まりない怪異をどうにかしなければならぬ。

さて、扇ちゃんはその方法を告げた訳だが——これについては、僕が先に思いつくべき方法であった。

忍野忍と生死を誓い合った僕だからこそ——思いつくべきであった。

「忍野忍さん——旧ハートアンダーブレードの持つ『妖刀・心渡』を使って、その兜を斬ってしまえばいいんです」

——妖刀・心渡。

旧怪異殺しが、嘗ての忍野忍、即ちキスショットを殺す為、己の骨身を以って作り上げた一振りの刀。

怪異のみを斬り殺す刀であり、怪異に対しては一撃必殺の威力を持つ、最大の横紙破り。

そうだ、それがあつた。

どうして忘れていたのだろう——怪異絡みの事は忘れたことがないと豪語した僕が、何故忘れていたのだろうか？

「恐らく、無意識のうちに反則と思っていたのでしよう。これを使うのは卑怯だと——正しくない」と

正しくない。不正。チート。

確かに、このチート極まる刀を反則と思ったことが無いとは決して言えない。ブラック羽川のみを斬り裂き、苛虎を一刀の元に伏せた、怪異殺し。

とは言え、最早これしか方法はないのである。そんなこと言ったられるような余裕はない。

では、次のミッションである。

「忍——起きろ——」

忍野忍を召喚する。

また骨が折れそうな作業ではあるが——しかし、ここはもう財布に空腹を我慢して頂くことにしよう。

出なければ、僕が空腹で死んでしまう。

「忍——!! 今出てきたら、ドーナツ最低10個は絶対買ってやる! 神に誓う! 八九寺に誓う!!」

「ぱないの!!」

「うわっ」

僕の心の叫びが通じたのか——なんと、異例の速さで忍野忍を召喚することに成功した。影の中から勢いよく飛び出して来る。

その代償として、顎に一撃を喰らったが——大したダメージにはな

らなかった。

それどころか、ノーダメージ。

兜を被っていたおかげで助かった——人生、何が助けしてくれるか分かったものではない。

「くうっ……!!」

拳を抑えて痛そうな呻き声をあげながら蹲る金髪金眼の吸血鬼。即ち、忍野忍。

「ぬうっ……」

ギロリと、忍が僕を睨んだ。涙目になっている。すげー可愛い。

いや睨まれても、僕は別に悪くないのだけれど……寧ろ、登場していきなりアツパーカットを食らわせてきたお前が全面的に悪いのだが。

自業自得である。

「お前様よ……それは卑怯ではないか？ 防具をつけるというのは、流石に卑怯とは思わんのか？」

「知らん。僕は悪くない」

「ぬうっ……」

不満気に睨む忍——だが、それだけであった。

おや？

おかしいな——普段の忍なら、地団駄を踏んで悔しがったり、大人気なく僕の小指を全力で蹴飛ばしてきそうなものだが。

「お前様は儂をなんだと思っておるのじゃ——ふん、仕方あるまい。よりにもよって此奴がおるんじやからの」

忍は横目で扇ちゃんを見た。扇ちゃんは表情を崩さず、にこにここと笑みを浮かべている。

「初めまして——というべきかの。一応貴様に会うのは初めてじゃからう、忍野扇」

「はっはー、そうですね。私もこの目で貴女を見るのは初めてです。初めまして、忍野忍さん」

「貴様に会ったら一度文句を言ってやろうと思っておったところじゃ——よくも我があるじ様及び儂の邪魔をしてくれたな。儂が全盛期

の力を取り戻しておれば、貴様なんぞすぐにも喰らうてやったものを」

「これはこれはお蔵しいお言葉。私のような若輩者を相手にして下さっているだけでも感激なのに、まさか邪魔と思われていたとは！

嬉しいなあ、鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼であったところの旧キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードに、私程度の者が邪魔できていたなんて、天にも昇りそうな心地ですよ」

……あれー？

なんだこの険悪なムードは……っていうかそうか、忍つて実は扇ちゃんと直接会った事なかったんだよな……。

「かかつ、そのまま昇天してしまえば良かったものを。ぬけぬけとあの『くらやみ』から逃れおつてからに」

「いやあ、私もまさか貴女でさえも回避不可能だったあの『くらやみ』から逃げる事が出来るとは思いませんでしたよ。阿良々木先輩の助けもあったのですが、いやあ、貴女でさえも出来なかったことを成し遂げたなんて、照れますねえ」

あ、ヤバい。忍が押されてる。

「か……かかつ。口だけは達者なようじゃの小娘。うぬが何を知っておるといふのじゃ」

「私は何も知りません。阿良々木先輩が知ってるんです——尤も、貴女の知っている事は、私も余すところなく知っていますかね」

「……………」

あ、黙った。

「おや？ どうしました忍さん？ 黙っちゃって。はっはー、もしやアレですか。私如き三下とはもう何も話す事はない、ってかんじですか。サービスタイムは終わりですかー。残念だなー。もつとお話しましたかったなー」

「……………」

「まさか今は力を大幅に封印されているとはいえ、嘗ては伝説の吸血鬼、怪異の王とまで呼ばれた貴女が、私みたいない最近生まれた怪異に弁舌で負け、あまつさえ拗ねているなんてことはありませんよね



え」

「……………」

止めて！

止めてあげて！

ほらもうそうやって虐めるから忍が涙目になってる！ 可愛い！

「……………僕はもう帰る」

「待つて待つて待つて待つて忍ちゃん待ーってー!!」

影に再び沈み込もうとした忍の手を捕まえ、必死に引っ張り上げる。

「もういいじゃろう……………どうせ僕よりもあやつの方が今は優れておるのじゃ……………僕はもう疲れた」

「待つてくれ忍!! お前にしか出来ないことがあるんだ!!」

「僕にしか出来ないこと?」

忍が上目遣いで僕を見た。すげー可愛い。さっきから可愛いしか言っていないような気がするけれど、可愛いのだから仕方ない。

「そうだ、お前にしか出来ないことだ」

「僕にしか出来ないこと……………」

忍は扇ちゃんを見た。扇ちゃんは肩を竦める。

「はい。貴女にしか出来ないことです。貴女以上の知識量を保有する私であっても、出来ないことです」

「僕にしか出来ないこと……………」

「そうだ、お前だけが頼りなんだよ忍！ 僕を助けてくれ！」

「僕にしか出来ないこと!!」

忍は影から再び飛び出した。当たらないように避ける——双方にとつて最善のパターンである。

「かかっ、かかかっ！ そうかそうか、お前様達がそこまで頭を垂れてこの僕に乞うのであれば是非もない！ よかろう！ 何でも言ってみよ！ 僕はその全てを可能にする怪異の王、忍野忍であるぞ！」

僕達を見上げながら見下ろす忍。完全復活したらしい。怪異の王としてのプライドを無事取り戻したのだ。

「じゃあ忍」

「なんじや！ 言うてみよ！」

「心渡で、この兜を斬ってはくれないだろうか」

「なんじやそんなことか！ お安い御用！」

えっ、マジ？

早くない？

もうちよつと問答が要ると思っていたが——あのゴールデンウィーク程ではないにせよ、あっさりとやってくれるとはまるで思っていないかったのだが。

「なんじやお前様、意外そうな顔をして」

「いや……そんなに軽いノリでそれ使ってもらえると思つてなくてさ」

「かかつ、儂の懐のデカさを舐めるなよ。伊達に600年生きてはおらん！」

忍は自慢げにそう言うと、口の中にその右腕を突っ込み——そして、『それ』を引き出した。

まるで大道芸のように取り出したのは、全長2mほどの大太刀。美しい芸術品のような刀身に、黄金の紋様が刻まれた柄。鏢はない。

これこそ、規格外の横紙破り、『怪異殺し』妖刀・心渡である。

「ほう」

扇ちゃんはそれを目を細めて見る——これもまた、扇ちゃんは初見なんだったか。

忍は腕を慣らすように、心渡を何度か振ると——遂に構えた。

「お前様、動くなよ」

「あ、ああ」

動くな、と言われれば、勿論動くわけにはいかないのだが——しかし、その刀身を見ると、自然と身が竦む。

北白蛇神社。あそこで起こった出来事を思い出す——結果として僕は助かったものの、あの出来事はどうやら僕にとって、軽くトラウマになっているらしい。

「し、忍。止めろよ。手が滑ったとか、そういう冗談はマジでやめろよ。兜だけを斬ってくれよ。頼むぞ」

「注文の多い奴じゃのう。ビビりか」  
「ビビりだ」

少なくともこの件に関しては、この剣に関しては、ビビらずにはいられない。

「では……ゆくぞ!!」

「よ、よし! 来い!!」

忍が心渡を振りかぶる——僕は身を硬くした。絶対に動かないように——。

「はあっ!!」

「ひいっ!!」

居合の掛け声と共に、心渡が振り抜かれた。思わず恐怖の音が漏れる。目を瞑った。

だが、それと同時に安堵の気持ちはどこかにあった。良かった、これで妹達に殺されずに済むんだ——と。

思った。

思ったのに。

ガキイン!!

「なっ……!!?」

「おや」

「え?」

え?

何だ今の音は——金属音は。

まるで、刀が鎧に弾かれたかのような——。

目を開きたくない。

だが、現実を直視しなければならぬ——受け入れなければならぬ。それは、どう足掻いても避けられない運命なのだから——。

僕はゆっくりと目を開いた。

写ったのは、笑顔を張り付かせた忍野扇。

写ったのは、刀を取り落とし、困惑したように己の手と刀を見つめている忍野忍。

僕は、兜に手をやった。

「……………っ!!」

その兜には——どこにも、傷は無かった。  
思わず僕は、目を閉じた。

第壹話 おうぎヘルメット 其ノ貳

「007」

「……………」

「……………」

「はっはー」

まるで暗闇の中にいるような気分であった。

僕と忍は車の陰で体育座りに勤しんでいた——嘗ての学習塾跡時代を思い出すが、昔と違うのは僕も体育座りをしているということと、すぐ近くで茶化すように嗤う忍野扇が居るということだ。

しかしその姿を見ていると、やはり扇ちゃんは忍野メメに似ていると思う。彼女の『姪』という設定を差し引いても——。

「元氣いいねえ、何か良い事でもあったのかい？」

そう言つて嗤うあいつに——そうか、忍、お前はこんな気持ちを味わっていたんだな。

これは僕の想像に過ぎないけれど、こんな風に体育座りして鬱ぎ込んでいた忍に、黙っていた忍にどうでもいい怪異知識（まあそれによつて助かったこともある訳だから、言い切ることが出来ないのが残念だけれど）を無理矢理聞かせていたところから察するに、きつとあいつもこんな風に、嗤っていたのだろう。

……まあ、この子の嗤いの対象は忍ではなく、十中八九僕に対してなんだろうが。

愚かな僕になんだろうが。

「……………」

忍が力なく扇ちゃんを睨んだ。

刀が弾かれた。

絶対的な斬れ味を誇る最強の妖刀が——齒が立たなかった。

刃が立たなかった。

その事實は、忍のプライドを著しく傷つけた。この刀を作ったのは忍ではないが、しかし今となつては、それが彼女の所有物であることに相違ない。

自分の所有物が、通用しない。

自分にしか出来ないとまで言われたことさえも出来なかった。

元々プライドが強い忍野忍、その傷は余りにも深く突き刺さった。宛ら心渡が突き刺さったかのように。

忍の心は折れた。

ので、こうして昔のキャラに巻き戻ってしまった訳だが——しかし、また何日も鬱ぎ込むことはなく、こうして比較的すぐに復活しそうなところを見ると、なんだかんだで彼女も成長したのだなあ、と思う。

600年近く生きた伝説の存在と言えど。

まだまだ学ぶことはある——ということなのだろう。

まあ、600年なんてスケールがでか過ぎて、とても想像出来ないけれど。

閑話休題。

「貴様……黒娘よ」

「おや、渾名まで付けてくれるのですか？ 嬉しいですねえ。伝説の吸血鬼様に渾名を付けてもらえるなんて、私はなんと幸福なのでしょうね。わーい、わーい、わーい」

「……………」

頑張れ！ 頑張れ忍！

負けるんじゃない！ お前それある意味僕に負けてるようなもんなんだぞ！

「…………そうおちやらけた事を言っているほどの余裕があるというのなら、さっさと他の策を考えたらどうじゃ？ え？ 貴様は笑うしか能がない笑い袋か？」

「おやおや、怪異の王ともあろう者が、あろうことか私のような若輩者にお頼りなさるのですか？ いやいや、私如きでは貴女様のお眼鏡に叶うような案は出せませんよお。いくら私が貴女以上の知識を所有しているとはいえ、やはり私などまだまだ」

「減らず口を叩かずさっさと考えんか！ そ、そうじゃ！ 貴様の言う王の命令じゃ！ 王様の命令は絶対なんじゃぞ！ ほら、早く考え

ろ！ 考えるしか能のない若造め！」

「……………」

扇ちゃんはにこにここと忍を見つめた。

忍は目を伏せた。

「お前様あ……………あいつが虐める……………」

「うん……………扇ちゃんには多分、何言っても勝てないと思うよお前」

そもそも忍は弁舌がたつような奴じゃないのだ。その威風堂々とした態度から放たれるのがハツタリであれば恐らく右に出る奴はいないだろうが、論説となると……………。

「あーもういいもん！ そうじゃよー儂なんてなんにも出来ない、ただのミスタードーナツの広告塔ですよーだ！」

「子供か!!」

尊厳を失った今、威厳まで失ったら、お前マジでどうしようもねえんだぞこの状況！

「ミストブレンドコーヒー、10/27新発売じゃ」

「本当に宣伝しちゃった！」

「まあ儂は買わんがの」

「速攻で宣伝をぶち壊すな！」

「つーか買わんがのって言うけどな、買うのは僕なんだからな。ふざけんな。」

「儂が食べたいのはドーナツなんじゃぞ？ コーヒーなど飲まんわ」

まあ、確かに忍がコーヒーを飲んでる姿が思い浮かばない。

仮に飲んでいたとしても、砂糖とミルクを大量に投入しているであろう姿しか思い浮かばない。

しかも多分それでめっちゃ優雅に飲んでるんだぜ。

「コーヒーといえはお前様よ」

「まあおい、この話を広げるのか」

話が一向に進まない。

扇ちゃん何か喋りたそうにしているが、忍はお構いなく喋り続ける——あれ、これって忍が扇ちゃんに現在進行形で勝利してるってことになるんじゃないやね？

……まあ、それだと話が進まないから、忍に勝たれるのは困るのだけれど。

「今期アニメではあの喫茶店アニメと終物語、どちらが人気なんじゃろうな」

「対立煽りはやめろ馬鹿!!」

叩かれる!

「儂としては終物語の方が人気だと思っていたんじゃがのう。かかつ、二期と比べて作画は良くなったのじゃろうが、いまいち視聴されておらんようではないか。赤塚不二夫先生生誕80周年作品に追い抜かれていくようではないか。何がこころぴよんぴよんじゃ」

「おいそこまでにしとけ忍! 流石にやっていいメタネタとやってはいけないメタネタの区別はちゃんとつけろ!」

まあ。

真に区別を付けるべきなのは作者の方なのだが。

「おいおいお前様、作者とか言うのはいかんじゃろ。それはいかんじゃろ。原作の方でも敢えてやっておらんメタ中のメタを言っちゃまうのは一番タブーじゃろ。それを言ってしまうえば、儂らの行動全てが作者を盾にすることで許されてしまうではないか! いかんぞお前様、これはいかん」

「え、ええ?」

「あのなお前様よ……儂等の行動が作者によって決定されているなどと言う設定を発露してみろ、本当に冷めるぞ。全部が茶番になる」

「は、はい」

やべえ、忍の顔がマジだ。あれだけふざけたのに忍の顔がマジだ。流石に罪の意識を感じる——これって謝ったほうがいいのかな?

「あーあー、お前様の所為でもう色々と冷めた。いかんぞお前様そのネタはいかんわ」

「す、すいませんでした」

頭を下げる僕——ああ、成る程。確かにこれは冷めるな。

うん……もう二度とこのネタは使わない。八九寺に誓う。

「興醒めした。話を進めるぞ」



おお、話が進みそうだ——もしかしてこのネタって、強制的に話を進めてしまうのか？

うわあ……もう絶対使わない。

「はっはー。雑談はおしまいですか？」

「そうじゃ。ほら、この時間で何か思いついたんじやろう。早く言え。解決策を早く言え」

「ええー。でもなあ、私をほったらかしにしてぺちやくちやと喋り続けて、特段聞きたいとも思わないような雑談を聞かせて、謝りもなしですか？ はっはー、まるで叔父さんみたいですね」

「……………」

ああ……忍がまた黙った。話が止まった。停滞した。

「扇さま、ごめんなさい。儂が悪かったです。これからは偉そうな態度をとりません」はい、どうぞ」

「言えるかそんなもん!!」

忍は転がっていた心渡を拾うと、扇ちゃんの首筋に突き付けた。

っておい！

「四の五の言わずにさっさといい忍野扇——元委員長にやったような手が儂に通じると思うなよ。儂は誰にも阿らないし、従わん——我があるじ様以外にはな」

「……私もある意味では、貴女のあるじ様とも言えるんですけどね」

「貴様は『忍野扇』じやろう？ 儂のあるじ様は『阿良々木暦』じゃ」

「……………」

「扇様はともかくとして、偉そうな態度をとるなというのは心底我慢ならん!!」

そこかよ。

っーか扇様でもいいのか……いいのかお前。

忍は刃を首筋から離さない。あと少し、ほんの少し揺らすだけで、扇ちゃんの首に切り込みを入れることの出来る距離。

「……………はっはー」

扇ちゃんは両手を上に挙げた——降参した。

忍野忍が忍野扇に、勝利した。

「いいでしょう、負けを認めましょう——分かりました。もう一つの解決策をお教えします。ですから」

心渡を仕舞ってください。

扇ちゃんは笑顔を崩さずに言った。

「……………」

忍は刀を慎重に首筋から離すと、無言でその刀を喰った。身体の中に収納した。

「ありがとうございます」

扇ちゃんは両手を降ろす。

「では、そろそろ時間もないのでお教えしましょう。この状況を解決する方法——もう一つの方法。それは——」

僕は一言たりとも聞き逃すまいと耳を澄ました。扇ちゃんのことだ、聞き逃せば再びそれを聞き直すまで、さらに時間がかかるに違いないのだから。

時間がない。

それはどうしようもない問題だった——時間だけは、どうすることもできない。

今は早朝。まだ太陽は出てこそいないものの、僕は家族に隠れて出て来てしまっている。バレれば、何があるか分からない。

何をされるか分からない。

だから、こうして扇ちゃんがすぐに話してくれるのはありがたいことだった——忍にも感謝したい。忍の判断力がなければ、間違いなく、解決の糸口が掴めるまでまだまだ時間を要しただろう。

扇ちゃんは続けた。

それは——。

「——それにはまず、心渡が必要です」

「……………」

「……………」

忍はキレた。

[008]

「貴様ふざけるなよ儂に対する敬意はどこいった貴様ふざけるなよ何のために儂が貴様の言うことに大人しく従い心渡を仕舞ったと思つとるんじや貴様ふざけるなよ殴るぞ蹴るぞ泣き喚くぞおいこら貴様ふざけるなよこの慇懃無礼者が儂王様じやぞ怪異の王じやぞおい聞いておるのか貴様ふざけるなよ全くこれだから若造は困るんじや年上に対する敬意が足りんのじや畜生貴様ふざけるなよ儂を騙しやがつて一億回打ち首にしてもたらんわ貴様ふざけるなよおいこつちを向け貴様聞けよ儂のありがたいお言葉を貴様ふざけるなよああもう本当マジで貴様ふざけるなよ!!」

「はい、息継ぎなしで長台詞ありがとうございました」

「貴様ふざけるなよ!!」

ぜえぜえと肩で息をしている忍を嘲笑うかのように——というか嘲笑いながら——扇ちゃんの手を叩く。

「いえいえ、別に騙すつもりはありませんでしたし、嵌めるつもりもありませんでした。確かに仕舞ってくださいとは言いましたけれど、まさか本当に仕舞うとは思わなくて」

「やかましいわ!! どう聞いても嵌める気満々だったじやろうが貴様!! この比較的シリアスな状況をギャグシーンにしおつて、空気を読め貴様ふざけるなよ!!」

「いやいや全く失態でした。ごめんなさい忍さん。私は貴女の愚かさを考慮していませんでした」

「儂を愚か呼ばわりじやと?」

「そうですね。稀代の愚か者であるところの阿良々木先輩とツーマンセルなので、当然貴女も愚か者であると判断すべきでした。これは私のミスです。重ね重ね、お詫び申し上げます」

「貴様がお詫び申し上げるべきなのは読者に対してじやろうが!!」

「さて、忍さんが愚かであることは証明し終えたので、本題に戻りましょう」

「話を聞けえ!!」

忍が全く歯牙にも掛けられていない。忍が勝利していたと思われていた状況を、たった一言でひっくり返すとは。流石は忍野扇である。

「お前様も何感心しとるのじゃ！ 二人であいつ殺そう！ 儂らなら出来るはずじゃ！ 虐められてる儂を、お前様は助けてくれんのか!?」

「ごめんな、忍——僕はお前を、助けない」

「吸血鬼パンチ!!」

「うわっ」

「くうっ……!」

我を忘れて殴りかかってきた忍。だがその拳の行く先はまたも兜で覆われた顔面であり、忍の攻撃は再び自爆に終わった。

「扇ちゃん、続けてくれ。心渡が、どうして必要なんだ?」

僕は忍の頭を撫でながら、扇ちゃんに聞いた。

「簡単な話ですよ、阿良々木先輩。簡単で単純です——心渡はあらゆる怪異を斬り殺す業物の刀。ですがそれは、怪異の体が柔らかいことに所以するというのも否定できません」

「怪異の体が——柔らかい?」

僕は忍を抱いた。うむ、柔らかい。

「柔らかいというより、実体を持たないと言った方が正確かもしれません。いくら硬い殻に覆われているタイプの怪異といえど、実際はそこにいない——無いんですから」

実際はそこにいない——無い。

何処にでも居て、何処にも居ない——それが怪異。

「それが、今までの怪異の常識です。今までの怪異の在り方でした。初代怪異殺しが作り上げた、鍛え上げたその刀は、それを前提として作られているのです」

「……つまり、この怪異は実体を持った怪異だつていうのか。扇ちゃん」

「ええ。ほぼ間違いなく。でなければ、心渡が弾かれた理由がつかえません。怪異に対するワールドカードであるところのその刀が、無効化

されたことに」

新たな怪異——今までの常識を覆す怪異。

実体を持つ、硬い怪異。

だが、そんなものが何故現れた？ なにも怪異という存在が現れたのは最近と言うわけではあるまい。いや、怪異は人間がいるから、人間に認識されるから成り立つのであって、ということは地球の歴史から見れば、ごくごく最近のことなのだろうけれど。

「怪異つてのは、全部実体を持たないんじゃないのか？ どうしてこれだけ——例外なんて、あり得るのか？」

「例外、というか、イレギュラーといった感じですかね、それは」

扇ちゃんは僕の頭に触れた——兜に触れた。

「実体がある——それがこの怪異の特徴の一つなのでしょうね。この怪異に与えられた、役割なのでしょう」

「役割……」

「悪意、と言っても差し支えないかもしれませんが」

扇ちゃんは手を兜に押し付けた。

ぐりぐり。

「私の持つ知識には、少なくともこんな怪異は存在しません。兜の形状をした怪異はいくつも存在しますが、その何も実体を持ち、心渡で斬り殺す、斬り伏せることの出来る代物です。或いは——」

旧型です。

扇ちゃんは言った。

旧型。

古い存在——時代遅れ。

「だから、この怪異は新しいタイプなのですよ、阿良々木先輩——時代遅れの古惚けた、埃を被った骨董品の刀では、刃も立たないような」  
扇ちゃんは兜から手を離さない。

「……扇ちゃん、さつきから何やってるの？ その兜に何かあるのかい？」

「何かと言えば間違いなく何かしらあるでしょう——いえいえ、少しばかり情報を読み取っていただけです。そしてそれは今しがた達

成いたしました」

扇ちゃんは兜から手を離した。

「情報を読み取る……そんな事まで出来るのか、君は」

「幾ら新型の怪異といえど、その本質は同じです。ならば同じ怪異同士であれば、その怪異を読み取ることが出来るのは自然なことです」

「自然、なのか」

「不自然といえれば不自然ですが——まあ、目には目を、歯には歯を、怪異には怪異を、ですよ」

扇ちゃんはにこやかに言った——忍野扇。

怪異特攻の刃が心渡ならば、彼女は怪異特攻の怪異。

怪異でありながら、怪異の専門家。

それもまた——ある種、新型と言えるのかもしれない。

「……でも扇ちゃん、こいつの情報を読み取ったところで、どうするんだ？ まさか情報を読み取っただけで、こいつの退治方法が分かった訳でもないだろうに」

「ええ、分かりません。ですが、無理矢理消し飛ばす事は出来るようになりませんでした」

「え？」

「忍さん。申し訳ありませんが、もう一度心渡を出して頂けませんか？」

扇ちゃんは忍の方を向き、言った。

「……貴様の言うところの骨董品であるこの刀を使って、何になるというのじゃ。また儂を嵌める気か？ その手には乗らんぞ」

「いえ、これはマジです。ですから最初に言ったじゃないですか。心渡が必要だと」

「……………」

忍は黙り込み、扇ちゃんを睨んだ。全盛期の彼女であれば、その行動だけで、扇ちゃんを殺すことが出来るだろう。

だが扇ちゃんは、笑みを浮かべ、その劣化を嘲笑うかのように、立っている。

「……………」

「お願いします、忍さん。それとも頭を下げましょうか？」  
「……………」

忍は沈黙を続ける。僕は慌てて言った。

「頼む忍。今回は扇ちゃんの言う通りにしてくれ。後で僕の財力が許す限りのドーナツを買ってやる。だから頼む」

扇ちゃんに頭を下げさせる訳にはいかない——それは、忍野扇のキャラじゃない。

怪異にとつて、キャラクターから外れるというのは重大な罪——二度とあの子を、もう一人の僕を、あの圧倒的な『くらやみ』に、襲わせるものか。

「…………約束じゃぞ」

「ああ、約束する」

「僕はゴールドデンチョコレートを所望する」

「ああ、ゴールドデンチョコレートでも何でも、お前が望むもの全て買ってやるさ」

まあ、こいつが望むもの全て買ったら、僕が破産するのだが——それだけにとどまらず、ミスタードーナツからドーナツが全て消えて、ミスターだけになるのだが。

「…………ふん、よかろう」

忍はゆらりと立ち上がった。

「おい黒娘、忍野扇。次は無いと思えよ。幾ら貴様が無害認定を受けているとはいえ、怪異の専門家でもなんでもない儂にとつてはそんな認定に意味はないし、貴様はただの携帯食でしかないのじゃからな——肝に銘じておけ」

「…………喜んで」

「ふん」

忍は扇ちゃんに釘を刺し、そして——再び妖刀・心渡を取り出した。「…………で？ どうするのじゃ、黒娘。まさか再びこれを仕舞えというのではあるまいな？」

「まさか。そんな三度手間かせません。少しその刀身に触れさせて頂いてもよろしいですか？」

「……………許す」

「ありがとうございます」

扇ちゃんは心渡の刀身に触れた。美しい、芸術品のような——骨董品のような刀。

「扇ちゃん、何をするつもりなんだ？」

「この刀は古い——新型に対応出来ない旧型です。ならば、アップグレードしてやればいいんです」

「アップグレード？」

心渡のアップグレード——そんな事が可能なのか？

「ええ、可能です——ですが、このアップグレードはこの硬さを持った怪異を斬ることが出来るようになるというアップグレード以外の何物でもありません。別に斬れ味が強化されるという訳でもありません——これ以上切れ味をよくすると、今度は旧型さえも斬れなくなりますから」

心渡は、怪異以外を斬ることが出来ない刀。それは、切れ味があまりにも良すぎることに所以する。

心渡で人を斬ると、余りにも切れ味が良すぎて、その断面は斬られたことに気付かない。即ち、斬られていないのと同義となってしまう。故に、心渡は対人戦において、鈍ら同然の刀なのだ。

対し、怪異を斬る場合においては、その超常的な切れ味は、同じく超常的な存在である怪異を斬るのに最適なものである。怪異には怪異を。最早怪異と言っても差し支えないその刀は、故に、対怪異戦において、鋭利同然の刀となる。

それさえ出来なくなる——つまり、怪異でさえも、その斬撃に気付かず、認識しなくなるということ。

より鋭利にすることで——本物の鈍らとなる。

「オーケーです。終わりました」

扇ちゃんは心渡から手を離れた。

「……………特に何も変わつとらんように見えるが」

忍は心渡を見回した。

確かに、その刀身には何の変化もないように見える。刃が一回り大



きくなったということもなければ、紋様が刻まれる訳でもない、ましてや妙なオーラを纏ったりしている訳でもなかったのであった。

「ええ、外見は以前のもものと変わりありません。アップグレードとは言いましたが、精々これはこの怪異を斬れるようにしただけの更新——例えるなら、ver1.0から、ver1.1に変わったというだけの話です。怪異を斬れないという不具合を、直した形ですかね」  
「ふむ」

忍は刀を何度か振った。試すように。

「つまり——これでこの兜を斬ることが出来る、と」  
「そういうことです」

扇ちゃんは言う。何でもないことのように。

実際、何でもないことと言えば何でもないことだ——怪異を斬る刀である心渡が怪異を斬ることが出来るのは、当然のことなのだから。「だけど扇ちゃん、なんでアップグレードが出来たんだ？ 物質のアップグレードが出来るような能力を君は持っていたのかい？」  
「持つてるわけないじゃないですか。愚かですねえ阿良々木先輩」  
「……………」

「だから——この怪異の情報ですよ」

扇ちゃんが言った。

「怪異の情報を読み取る事が出来るなら、同じく与えることが出来る——旧型の情報を新型に流すことは出来ませんが、逆は出来る」

……………そういうものなのか。

普通は逆のようなものだが——旧型の情報がインプットされている新型のゲームなんかには、旧型の情報を送ることが出来て、しかし逆に、新型の情報など一切持たない旧型のゲームには、新型の情報を送ることが出来ないものだが——それが普通なのだが。

……………だからこそなのかもしれない。

怪異は普通と真逆をいく存在——それは旧型であろうと新型であろうと同じこと。

真逆——普通の逆。

だから、アップグレードか。

「さあ、やっちゃってください。忍さん」

「貴様に言われずとも、すぐにでもやってやるわ」

忍は刀を構える。

「動くなよお前様——動けば、お前様も死ぬぞ」

「ああ、動かないさ」

覚悟は決めた。

もう二度と、あの世になんざ行くものか——それこそ次がない。ここに夢渡はないのだから。

怪異を殺すなら、その一部分だけを斬り取るだけで事足りる。ブラック羽川や苛虎のような強大な怪異ならともかく、こいつはただの兜なのだから。

ちよつと硬いだけの——ただの衣なのだから。

「——はあっ!!」

「ひいっ!!」

居合の掛け声と共に、心渡が振り抜かれた。思わず恐怖の声が漏れる。目を瞑った。

次こそは——流石にもう失敗しないだろうと思う反面、心のどこかに『また失敗しそうだなあ』と思う気持ちが無かったとは言えなかった。

そう思った。

だけど。

「……ふん」

その気持ちは——鎧が斬られ、消滅したお陰で頭が少し軽くなったことで、裏切られたのであった。

忍は得意げな顔で笑った。

「009」

「かかっ! どうじゃお前様儂の腕前は! 見事なものじゃろう!?

かかっ! もしかしたら最初に斬りつけた時兜が斬れなかったの

は、儂が本気を出していなかったからかもしれない!? かかっ!

よく考えたら確かにあの時本気で斬ろうとしていた記憶がない!

「かっ！」

「それだだてめえの記憶力が悪いだけじゃねえのか」

車の中で偉そうに踏ん返り返り僕の露出した頭を蹴りながら（実際は足の長さが足りていないので背中中のシートを蹴っているだけなのだ）、気持ち的には頭を蹴っているつもりなのだろう）忍は得意げに言った。

どうも忍は助手席に乗りたかったらしい。だが、扇ちゃんに言ったのと同じ理由で、見事却下となった。

「いやあ、流石ですね忍さん。流石は元伝説の吸血鬼にして元怪異の王。老いても、否、若返ってもその実力は健在といったところですかねえ。いやあ、勉強になりました」

「じゃろう！ そうじゃろう！ かっ！ 漸く儂の凄さが分かったと見える！ そうじゃ、儂は凄いのじゃ！ は！「はは！「ははは！」」忍お馴染みの哄笑まで始めやがった。

つーか扇ちゃんも煽るなよ。なんでこういう面倒臭い時に限ってそいつに味方するんだよ。こういう時こそ虐めに苛め抜いて黙らせろや。

とことんまで僕の嫌がらせを得意とする子である。

「——ところで阿良々木先輩。家に帰らないのですか？」

「え？」

扇ちゃんが聞いた。

「……………」

——そう、僕は家に向かって車を走らせている訳ではない。寧ろ逆方向に走らせている。

兜を消し去った後、扇ちゃんは言った。

これは、作られた怪異だと。

「作られた——怪異？」

「そう。悪意を以て、作られた——創られた怪異です」  
作られた怪異。

それは、普通の怪異なんじゃないかと思った。怪異はもともと自然発生する訳ではなく、必ず何者かの意図が絡んでいる。言うなれば、

全ての怪異は、作られた怪異なのだ。

鬼も。

猫も。

蟹も。

蝸牛も。

猿も。

蛇も。

蜂も。

子規も。

人形も。

虎も。

そして——もう一人の僕も。

全てが作られたもので——異なるもの。

怪しくて、異なるもの。

怪異。

「ええ、確かにその通りです——貴方の仰る通りです」

扇ちゃんは肯定した。

「ですが言ったでしょう。これは今までの怪異とは違う、と」

「ああ、言っただけど」

「つまり——その作られ方が違うと言っているのですよ、私は」

「作られ方？」

作られ方——製造方法。

「どうということだい、扇ちゃん」

「怪異というのは人工的なもの——ですが、限りなく自然的なものとも言えるのです」

「自然的……」

「自然的——つまり、制御の利かないもの」

制御の利かないもの。

確かにそう言われてみればそうだ。今まで僕は幾つもの怪異現象に遭遇し、その原因となった者に会ってきたけれど、それらは全て、制御されているとは言い難いものであった。

「制御、つまり、自分の思うような性質、役割を怪異に与える」

扇ちゃんは続ける。

「そんなことが出来た例は今まで一つたりともありません——あの羽川先輩でさえ、己が作り出した、切り離れた怪異に手を焼いていたでしょう?」

「……………」

「だからこそ、柔らかいんです——実体がない。染まりやすい。変質しやすい」

己の思うように、動かない。

扇ちゃんは言う。

「しかしこの怪異は違います。この悪意を以て作られた怪異は硬い——実体があり、染まらず、変質しない」  
製作者の思うがままに動く。

扇ちゃんと言う。

「自然的でない怪異——どこまでも人工的で、自然を圧倒する最新型の怪異です」

人工的な怪異——硬い怪異。

製造者の思うがままに動く、最新型。

だけどそれは——。

「なんで、そんなことが出来るんだ」

今までに一例もそんな例が確認されていないということは、そもそもそんなことが出来ないということだ。

まさか今までにそのような試みをしようとした人がいない訳あるまい——怪異作りを生業とする一族だっているのだから、いない訳がない。そして、そんな彼ら、彼女らでさえも達成できなかったことなのだ。

それが何故今になって——しかも、こんな形で?

「寧ろ今だからこそ、でしょう。技術の進歩といえますか」

「進歩……何のために?」

「それは分かりません」

「駄目じゃねえか」

「ですが、何らかの理由があるのは間違いないでしょう——あの兜が作られた理由があるのは」

怪異には、それに相応しい理由がある。

あの兜に、硬いという特性が与えられた理由も——ある。

「ですが、今ここで重要視すべきは」

扇ちゃんは僕を見た。全てを呑み込むような、真っ暗い暗闇のような瞳——。

『どうして』ではなく——『誰が』なんですよ」

「……誰が」

誰がこんなことをした。悪戯にしてはあまりにも過ぎるようなことを——誰がしたんだ。

「……悪意を以て怪異を正確に作る、か」

言葉にしてみると恐ろしすぎる——何なのだそれは。チートすぎる。

貝木みたいに偽物の怪異を作るのではなく、本物の怪異を作る——それこそ、もうそいつそのものが怪異のようなものではないか。

しかもそいつは悪意を持っている——悪意。害意。

そんなものが野放しにされているなんて——。

「阿良々木先輩」

「……なんだい扇ちゃん」

「まさか、また首を突っ込むつもりではありませんよね？」

「……そんなことする訳ないだろ。なんでそんなことしなきゃ駄目なんだよ。悪意のある怪異制作者とか、そんなのと僕が相對して、僕が勝てると思ってるのか？ 末端みたいなあの兜にさえ手を焼いたんだぜ」

とても勝てる訳がない。

勝てる訳もない——見込みもない。

無いんだけれど——。

「まさか阿良々木先輩がここまで愚かだとは思いませんでしたよ」

扇ちゃんは僕の露出した頭を蹴る——足の長さは十分足りている

ので、本当に蹴っている。

「まだ痛い目を見足りないのですか？ 阿良々木先輩、少しは成長しましょうよ。これは阿良々木先輩が、私達が踏み込むべき問題ではありません。専門家達に任せるべき案件です」

「分かっているよ……」

分かっている——分かってはいるけれど、矢張り放つてはおけない。

「あんなもんをそこら中にばら撒かれたら、いい迷惑だ。だからさつさと犯人見つけて、この街から出て行ってもらおう」

「出来ると思っっているのですか？ 貴方ごときが」

「……………」

思わない。

というか、思える訳がない——悪意を以て怪異を作るような奴と会話が成立するなんて、とても思えない。

けれど——何もしないよりはマシだ。

「扇ちゃん、僕はそいつの被害を被ったんだ。立場としては、十分文句を言える立場だと思うぜ」

「立場云々の問題じゃあないんですけれどねえ」

「いざとなったら伝家の宝刀、土下座でなんとかするさ」

「取り敢えず困ったら土下座とかいう考えをやめてくれませんか。貴方の頭重すぎなんですよ。ある意味軽いとも言えますが」

「……………」

まあね。

否定しない。

「…………それ以前に、どうやって探すおつもりですか？ あの兜から居場所の手掛かりが掴めたのなら別ですが」

「…………まあ、当てはないよ」

「当てもなく車を走らせているのですか？ 愚かですねえ」

「……………」

当てもなく車を走らせるのは、僕がいつもやっていることだった。だからつまり、僕は別に何ら変わったことをしていないのだ。いつ

も通り、運転の練習をしているというだけ。

ただその目的が、一つ追加されたというだけの話で――。

「……………ん？」

僕は前方を見た――いや、車を運転しているのだから、勿論前方を見ているのは当たり前のことなのだが。

車のライトに照らされたのに気付いたのか、前方に居た少女――うん、少女だ――は、右端に移動した。

こんな朝早くから何をしているのだろうか？ 非常に気になるところだが、しかしそれはその少女の、当てのない散歩という理由に他ならない。

巨大なリュックに、ツインテール。

ロリっ子。

何てことはない――思考する必要さえなかった。その後ろ姿を辞任した瞬間、音速を超えるスピードで理解した。

北白蛇神社に住む、この街の神様。

蛇神。

八九寺真宵であった。

「010」

さて、章が変わったが――え？ 何？ 章が変わったってことは、僕八九寺と絡まなきや駄目なの？ 嘘マジ？

え、なんで？

いや素朴な疑問なんだけどさ。

どうして八九寺真宵が登場しただけで章が変わるのだ。確かにあの子はここら一帯を修め、治める神であり、特別といえれば特別な存在と言えなくもないのだが――え？ そんな理由？

おかしくない？

ちよつと八九寺を特別扱いしすぎじゃないかと僕は物申したい――いや分かるよ、分かるけど。そりゃあ神様だからね、特別扱いしないと祟りかなんかがありそうなのはよく分かるよ、うん。基本的に無知な阿良々木暦君だって分かるよそれは。



分かるけども。

だからといって章を変える必要はないだろう。こんな風に章が変わると、まるで八九寺と何らかの絡みをしなくてはいけないような脅迫感を感じるではないか。

特別扱いつていうなら、八九寺の台詞だけフォントをデカくするかアンダーラインを引くとか、そういうので十分じゃないか。なんで章を変える必要があるんだ？ 甚だ理解出来ない。

いや、なんで僕がこの事についてたらたらと文句を言っているかというところ——読者の皆様すみません、うちの不手際の所為でこんなどうでもいいモノログを見せることになって——迷惑だからだ。

迷惑、困惑——まあどっちでもいいけれど、兎に角僕がやり辛い。語り部というのは意外と大変なのだ——僕もこの役柄を長いこと演じているから言うけどさ、物申すけどさ、いや本当大変なんだよ？ 行を変えたり行動を描写したり注意書き入れたり、章が変わったらその理由を模索し、話を進めなければならぬ——こんな風に、色々なことに気を遣わなければならぬのが語り部という役割なのだ。

いや、僕も正直なところこの役目をどつか誰かに譲って——それこそ、様々な作品に出演しなさっている我らが語り部業界のエースであるところの地の文さんに交代したいところなのだけれど、しかしこうして僕が語り部に抜擢され続けているのは、それが通例だからなのだ。

まったく恐ろしい話である。流れやパターンというものは。

まあ僕の苦労はさておき、話は章が変わったことである。

章が変わった、つまりそれは、僕が何らかのアクションを起こさなければならぬというお達しなのである。これが困る。

どうしろと。

いつものアレをやれというのか。

全く迷惑なんだよなー（ハンドルから手を離しつつ）、僕これでも疲れてるんだぜ？ 変な兎をどうにかしたと思ったら、黒幕の存在まで示唆されて……その上でアレをやれっていうのかい？

鬼畜かよ。

つーか僕はアレについても物申したい。流れ流れ言うけどさ、結局アレを期待している読者なんて何人いるんだ？ いや分かるよ、流れっていうのはそういうものじゃない、っていうのはちゃんと分かってるよ。分かっているけどさあ。

でも正直どうなのだろう、集計すれば、期待している読者なんて全体の十分の一も居ないのではないだろうか。

だとすれば、そんなパターン、流れに、果たして存在価値はあるのだろうか。いやない。

そう、僕が言いたいののは、もうみんないい加減呆れ果て、飽きているであろうということだ。繰り返しネタと言えば聞こえがいいが、結局それを突き詰めてしまえば、ただの使い回しでしかないのだから。

まあこれについては僕に責任の一端があるとは言えなくもないのだけれど——八九寺ねえ。

八九寺真宵ねえ。

正直もうどうでもいいんだよなあ、こいつの事なんて。いや、それこそ僕を冷血野郎と責める方はいらつしやるのだろうけれど、しかし冷静になって考えて頂きたい。あの少女のどこにそんな魅力があるのだろうか。

確かにその柔らかかで、かつ肉付きの少ない奇跡のような二の腕やふとももは素晴らしいものだ。あの魅惑の物質を何度しやぶり尽くしたいと思ったかは計り知れない。まあ昔の話だけれど。

確かにその寸胴ボディは素晴らしいものだ。発展途上の胸はまな板と呼べる程ぺったんこというわけではなく、程よい膨らみを形作っている。括れもまだないけれど、しかしそこがいいと思っっている方も少なくはないと僕は確信している。まあ昔の話だけれど。

まあ昔の話だけれど。

そう、全部昔の話なのだ——過去の物語。

昔の八九寺は確かなかなか危なっかしい奴だったし、一回地獄に落ちちゃったから心配して過剰なスキンシップを目論んだりもしたけれど、しかし今彼女は神様なのだ。

少女ではあるものの、神なのだ。

神、ゴツド。

まよいゴツドである。

神様なのだから、もう何も心配する必要なんてないのだ。自分の身を自分で守らないようでは、そもそも神様失格と言っても過言ではない。神という職業に就いたのであれば、しっかりとその責務を責任を持って全うすべきだと僕は思うのだ。語り部という職に就く立場から、思うのだ。

というか、なんでそんな風に散歩している余裕があるのか、なんでそんな風に遊んでいる時間があるのかと嫉妬したくなる。

激昂したくなる。

全く冗談じゃない、僕は現在進行形でこうして激務を果たしているというのに、なんでお前はそんな風に自由なんだ、と。

激おこである——いや古いか。

古い。

古い。

そんな旧型のやりとりなんてさっぱり面白くない。使い古されたネタを何度もやっても面白くないのだ。だからさつきとアンケートをとって展開の方針を変えろ。

いいか、次はないからな、スタッフ！

……はあ………。

はあ………。

心の中で僕は溜息を吐いた——はいはい分かった分かった分かりました。やればいいんでしようやれば。

全く冗談ではない(ドアに手を掛けつつ)、どうしてこの貴重な時間をあんな少女に費やさなければならぬのか理解に苦しむよ。

まあいいさ。もう文句は言わない。散々毒付いてすつきりしたしな。

これが最後だ、きつちりやろう。どうせアンケート結果は散々なものに違いない。そして次からは八九寺に出会っても、普通に肩を叩いて「よ、八九寺」って言うだけになるのだ。間違いない。

はーあ、さーてと、やろうかなやろうかな、ああ嫌だ嫌だ、面倒臭

いったらありやしないぜ。

これでも一応僕高校卒業生なんだぜ？　子供じゃないんだから、少年法も僕を守ってくれないんだぜ？　もしも僕が逮捕されたら、ちゃんと僕を擁護してくれよ、分かったなスタッフ！　非実在少年にもなれないんだからな！

……よし。

覚悟は決めた。

じゃあ行こうか——今は早朝だ。幸い誰も見ていないだろう。しかしまだ眠っている方も多いだろうから、出来るだけ静かに、静かに。それくらい許しておくれよ？

はいじゃあ位置についてよい。  
ドン。

「八九寺いい！！！！」

僕は扉を勢いよく開けると八九寺目掛けて全力疾走、八九寺に飛びつき抱き付いた。

「ぎやー!!」

「八九寺ー!!　八九寺ー!!　八九寺ー!!!」

「ぎやー!!　ぎやー!!!」

「いやっほい八九寺だ八九寺だわーいわーいわーいわーいつ!!　神様だかなんだかなんてどうでもいいいやわあーいつ!!」

「ぎやー!!　ぎやー!!　ぎやー!!!」

暴れる八九寺。

抱きついて離さない僕。

「ああもう八九寺八九寺!　どっからどう抱き付いても僕の八九寺だ!　八九寺万歳!　いやもう使い古しとか使い回されたとかそんなのどうでもいいよ!!　みんな期待してなくても僕がやりたいんだい!!　全く八九寺お前って奴はどんだけ魅力的なんだ畜生!　この頭、この眼球、この鼻、この耳たぶ、この唇、この八重歯、この舌、この髪質、このツインテール、この服、この首筋、この乳房、この肋骨、この鎖骨、このお腹、この肩、この二の腕、この太腿、この肘、この膝、

この膝裏、この踝、この指、この爪、この下着!! くっそ、どつか魅力的じゃない場所作りやがれてめえ! どんだけ襲われたんだ八九寺! 僕はそんな子に育てた覚えはないぞ! いやっほい!! でもこれを独り占めするのは僕だもんねー!! ああもう可愛いなあ美味しいなあお前は! くっそ、汗を垂らすな! 舐めなきゃいけないだろうが!! ああもうつるつるすべすべしてて本当もう神つていうか天使だよお前は! 何で神様なんかやってんだよふぎけん!! ええい、もつと触らせろもつと抱きつかせろもつと舐めさせろー!!!」

「ぎゃー! ぎゃー!! ぎゃー!! ぎゃー!!!」

「こら! 暴れるな! パンツを脱がせにくいだろうが!!」

「ぎゃー!!!! ……がうっ!!」

噛みつかれた。

児童の全力で噛みつかれた。

「ぎゃー!!」

今度は僕が悲鳴をあげる番であった——つうか痛え!! これが全力だつていうのか!? こいつ牙でも生えてるんじゃないかと思うくらい痛えぞ!!

「がうっ! がうっがうっがうっがうっがうっ!!」

「痛い痛い痛い痛い!! 何すんだこのガキ!!」

痛いのも、何すんだこいつも、全て僕だった。

「011」

「全く……神様に対する敬意というものが、荒らげさんには欠如しているように見受けられるのですが!」

「敬意は兎も角として八九寺、僕のことをまるで息子を怒鳴っている親父さんの声を表す動詞のような呼び方で呼ぶな。そんなんだから敬意も払ってもらえないんだよ。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼。噛みました」

「違う、わざとだ……」

「噛みまみた」

「わざとじゃない!?!」

「叱りました。ばっかもーん!!!」

「予想以上に声がデカい!!」

うむ、流石は名前ネタの本家本元八九寺真宵大明神。扇ちゃんなんかとは訳が違うぜ。

「いや、褒めても何も出ませんよ阿良々木さん。それどころかも一回雷を落として差し上げましょう」

「おいおい八九寺、この一連の流れを引つ張るのは厳禁じゃなかったのか？　いくらこの話が本編じゃないからって、ちゃんとルールは守れよ」

「あの叱りましたを一連の流れと誤っているのならそれは大間違いだ」とご忠告しておきましようか阿良々木さん！　あれは私の本気の怒りです!!」

「え、マジで!?　僕なんか悪い事した!」

「自分の胸カチ割って聞いてみたら如何ですかね!!　なんなら手伝って差し上げましようか阿良々木さん!!」

流石に胸をカチ割ると死んでしまうので、僕は胸に掌を当てた。

……一瞬凄まじい罪の意識の奔流を感じたが、そこは歴戦の阿良々木曆、しっかりと耐える。

「いや、なんでそこで耐えてしまうんですか。感じましようよ罪悪感を」

「悪いな八九寺、僕は昔のことを振り返らない男なんだ。僕は今しか見ていない、目の前にいる八九寺の事しか考えていないような男なんだぜ」

「カツコいい事言ってるように見えて内容はマジで最低ですね」

「すみませんでした!!」

謝った。

「さあ八九寺、車に乗れよ」

「ちよつと待つてください阿良々木さん、まさかあんな適当極まる謝罪で貴女の罪を清算できると本気でお思いではないでしょうね?」

「だからこうして埋め合わせをしようとしているんじゃないか。ほら、八九寺。僕の愛車にご挨拶は?」

「ああ、初めまして。私、この街の神様をやっております、八九寺真宵と申します、って何言わせてんですか貴女は!!」

怒っていてもしつかりノリツツコミをしてくれるあたり、流石歴戦の八九寺真宵といった感じだ。敬意も払いたくなるというものである。

「全く、あんな事して許されると思ってらっしやるのはこの世広しと言えどあなただけでしようよ阿良々木さん」

「おいおい八九寺、世の中を舐めるなよ。そんな事考えてる奴なんぞ、その辺にごろごろいるのがこの世界なんだからな」

「地獄すぎます……」

地獄を知っている八九寺が言うくらいなのだから、現世は地獄なのだろう。間違いない。

「はあ……まあいいですけどね。私が犠牲になることで他の誰かがあなたの魔手から逃れられるというのであれば、私は喜んで人柱になりましょう」

「マジで?! じゃあもっかいやる?!」

「いいえやりません! あれはワンエピソードにつき一回だけです!」

ちえつ。

まあどうせ別のエピソードでもまた会うだろうし、別にいいんだけどね。アンケートを取ろうがアンケート結果がどうなるうが需要があるうがなかるうが知ったことではない。

僕は僕の道を行くのだから。

「格好良いこと言ってるように聞こえますけれど、実際は相当に格好悪いですよ、バカラギさん」

「ストレートな僕への罵倒を織り交ぜるな。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼。噛みました」

「違う、わざとだ……」

「噛みまみた」

「わざとじゃない?!」

「怒りました。まったくもう!!」

「レベルが下がった!？」

僕との会話の中で怒りが沈静化してきたようだ。よかったよかった。

「いや何も良くありませんよ阿良々木さん」

「もういいだろ八九寺ー、続きは車の中でしようぜ。乗ってくれよー」

「誰が性犯罪者の車に乗るとお思いですか!!」

「僕が性犯罪者だと? なんて人間きの悪い!」

「では不審者とも言い換えましようか!! 不審者の車に乗ってはいけないと、学校で何度も習ったものでして!!」

「ちつ、これだから学校ってやつは嫌いなんだよ。僕の邪魔しやがって」

「教育を毒突くより、まず御自分が不審者と思われぬような振る舞いをしては如何かと思うのですが」

まあ、正論である。

しかし、正論というものは時に人を傷付けるものなのだ。それほどうしようもなく真理であり、心理なのだ。

「上手くない言葉遊びなんてやっている暇があるのであれば、即刻私の前から立ち去ってください!」

「おいおいそりゃあ酷いぜ八九寺」

「触らないでください! 私はあなたのことが嫌いです!」

「ごめんなさい!! もうしません!!」

お前に嫌われるのだけは本当に嫌だ!!

老倉から幾度となく嫌い嫌いと言われ続けた僕ではあるけれど、やはりこいつに嫌いと言われるのが一番くる。

心がバキボキにされてしまう——心の背骨が折れ、土下座してしまう。

「うわあ……」

八九寺がゴミを見るような目で僕を見てくる。やめろよ、興奮するじゃないか。

「興奮しないでくださいよ気持ち悪い」

「おお、その罵倒さえも興奮に変わるぞ八九寺!」



「キモっ、死んでください。もう一回地獄に落ちて下さい」

むう……八九寺に死んでくださいと言われると死にたくなってくる。何故だろう。

不思議だなあ。

「それはあなたが変態だからですよ、阿良々木さん」

……八九寺から僕への好感度がジェットコースターの下り以上のスピードで急降下しているような気がする。

まあ、気の所為だろうが。

「まだ気の所為とか思えるその頭のおめでたさには私も白旗ですよ」

「おいおい八九寺、僕とお前の仲だろ？ これくらいのこと僕たちの関係は何も変わらないさ」

「この一連の行為をこれくらいで済ませることが出来るのはあなただけとは言わずとも、相当おイカれになられた思考回路ですね」

「だから早く車に乗ってよ、ねえ」

「嫌ですよ!! 何でそこまで執拗に誘ってくるのですか！ 本当に犯罪者にしか見えませんよ!」

「だから僕は犯罪者じゃねえよ!」

「胸を張って言えますか!?!」

「言えるさ!」

僕は胸を張った。

「僕は犯罪者なんかじゃない。健全な男だ」

「救いようがありませんねあなた」

むう。

なんだか今日の八九寺は冷たいように感じる。何故だろう。

「はあ……」

「ちよつとちよつとちよつと八九寺さん八九寺さん、え、何？ どこ行こうとしているの?」

溜息を吐きながら歩き始めた八九寺。どこへいこうというのだろうか。

「変態に教える道などありません。さようなら」

「あつ、ちよ——」

僕は逃げ去ろうとする八九寺に慌てて手を伸ばした。僕はもう二度と八九寺と離れたくないのだから、八九寺の逃亡を防ごうとするのは至極当然のことであった。

——僕のこの行動は正しかったのかどうかは分からない。この後起きた結果から考えても、恐らくこの行動は正しかった、というより、必要なかつたと言うべきであろう。

類は友を呼ぶという言葉があるように、親友同士というのは似通ったところがあるものなのだ。

僕と八九寺もまた、例外にあらず。

僕が八九寺に触れるか触れないかのところで——それが聞こえた。

「きやあああああ~~~~っ!!」

「っ!!」

どこからか聞こえてきた——悲鳴。

それは余りにも小さなものであった——遠くから響いてきたものようだ。

僕と八九寺は一瞬目を合わせると、互いに頷き、ニュービートルに乗車した。

「おや、お帰りなさい阿良々木先輩。待ちくたびれましたよ」

「迷子娘との逢瀬は終わったか——って、なんでお前が乗ってくるんじゃないや迷子娘」

車の中で結構な時間待ち惚けを食らった二人——お前達には悪いが、少し僕達の我儘に付き合ってもらおうことにしよう。

「阿良々木さん!!」

「分かってる!!」

僕はアクセルを踏む。

どんどん加速していく僕の愛車——そのスピードはついに、時速40kmを超えたのであった。

「012」

後日談というか、今回のオチ——というにはまだ早過ぎる。まだこの話は終わってない——寧ろ、これから始まると言っても過言ではな

いのだから。

少々変則的だが、キリの悪いところで終わらざるを得ない——読者には申し訳ない限りだけれど、次のエピソードを待っていてほしい。「悲鳴、ですか——はっはー。なるほどなるほど。詰まる所、また貴方は懲りもせず愚かにも首を突っ込むということですか。本当に成長しませんね貴方」

扇ちゃんが僕の頭を蹴りながら言う。

確かに、これについては扇ちゃんに全面降伏するしかない。お手上げだ。僕の今とついている行動はどうしようもなく愚かで、成長していないものではあった。

目先の事しか見えてない愚か者——臥煙さんにも指摘されたことである。

若さ、と言えば聞こえは良いけれど。

「ふん、儂にはそんなもの聞こえんかったがのう。本当か？ 幻聴ではないのか」

忍が助手席を蹴りながら言う。

あの悲鳴は非常に小さなものであった。車の外にでも出ていなければ、間違いなく僕も聞き逃していただろうから。

え？ なんで忍が助手席を蹴っているか？

それは——。

「もう、痛っ、忍さんってば、痛っ、これは、痛っ、不可抗力、痛っ、なんですってば！」

「……………」

八九寺が助手席に乗っているからである。

どうもこいつ、自分が助手席に乗れなかったのをまだ根に持っているらしい。600歳の癖に器が小さすぎる。

個人的な感情としては、愛する八九寺を蹴り飛ばしているのだからドーナツの約束を全面的に反故にしたい気分なのだが——そうとは言わずとも、拳骨一つ入れたい気分なのだが。

しかし残念ながら今は運転中だ——しかも禁断の法定速度超えを果たしている。ちゃんと前を向いて運転しなければならぬ。

誰かを助けに行つて、その癖自分が事故つて助けてもらふなんて、笑い話もいとこだ——僕だけなら兎も角、今この車内には、扇ぢやん、忍、八九寺が乗っている。何としてでも事故だけは避けなければならぬ。

しかし、これが他人を乗せるというプレツシャーか……正直こんなプレツシャー、二度と味わいたくないというのが本音だ。

自転車の二人乗りより怖い。

慣れの問題かもしれないが。

僕は車を走らせた——予想外に遠いが——もしかすると、もう手遅れなのか？

だとすればとんだお笑いだが——笑えない話だが。

そんな事を考えながら、カーブを曲がつた（幾ら直線ではスピードを出しまくっているとはいえ、流石にカーブは怖いので超減速）——そこで僕が見たのは、衝撃的な光景であつた。

「……はっは——」

「……ああ？」

「な、何ですかあれ!？」

三者三様、それを見た反応である。

そして僕の反応は。

「——っ!!」

これ——戦慄である。

実際戦慄もしよう——それは余りにも、僕の想像を超えたものだったのだから。

曲がつた先で倒れていたのは少女だった。歳は月火と同一年くらいだろうか。田舎には不似合いな金髪のショートカット、全身を覆う真っ黒い服装——ゴスロリとでも言うのだろうか——から、何処か西洋風な雰囲気か漂っていた。

確かにそれは僕の想像を遥かに超えたものであつた——金髪といえば忍で見慣れているけれど、やはり田舎に金髪というのは慣れない。

だが——僕が戦慄したのは、だから、そつちではない。いや、普段



## 第貳話 しるしメイク 其ノ壹

〔001〕

織崎記を巡る一連の物語を語るのならば、まずは始まりとなるこの物語は絶対に語らなければならぬまい。何事も始まりというものは必ず描写しなければならぬものだから。

とはいえ、最近の風潮としては、第一話に始まりを据えずに、全てが終わった後に、つまり最終回を迎え大団円となったにも関わらず、もう一つの第一話とか、第0話とかの謳い文句と共に、最後の最後で始まりが解禁されるというのも少なくはないのだけれど——いや、僕は何もそういった手法を否定しようと試みている訳では決してない。そうではない。

ただ、僕のスタンスとして——これからの僕としては、そういった事は、ちゃんと最初に話しておこうと決めた、というだけの話である。後回しにするまいと、心に決めただけの話——後回し。

なあなあにする。

僕にはそのような事が許されていないのだから——そんなことをしたが最後、僕の自己批判精神の権化であるところのあの子がニヤニヤとした笑みを浮かべながら、また鋭い刀で抉りこんでくるのだろう——切り込んでくるのだろう。

誤解されると心外なのだけれど、僕は何も彼女を恐れてこのような行動に出ている訳ではない。そうではないのだ。

こう言うのと傲慢に聞こえるかもしれないけれど、これは僕の数少ない成長の一つなのである。扇ちゃんに幾度となく嘲られている僕ではあるけれど、成長しない愚かさを嘆かれている僕だけれど、これは僕が修正された結果なのだ。

なあなあにしない。

それはほんの些細な事だけれど——それは確かに、あの子が望んだ成長の一つであった。

だから僕はこの話を語る。

それはつまり、この話が、あまり積極的に語りたくないような物語













を振るった瞬間、悪魔が両断された瞬間、まるで掻き消されたように消えた。最初からそこには何もなかったかのような、虚空だけが広がっていた。

「ありがとう、忍」

「ふん、礼には及ばんわお前様——ありとあらゆるドーナツを儂に貢いでくれるという約束、忘れるでないぞ」

「約束を捏造するな」

まあ、ありとあらゆるとは言わずとも、普段より多めのドーナツを貢ぐ覚悟は出来てる。つーか、僕から進んで貢いでやる。

ちゃんと感謝はする男なのだ、僕は。

「ドーナツと言えばお前様よ、なんでも、ミスターパリブレストなるものがクリスマス限定で発売中だそうではないか。チョコブラウニー、アマンド、ストロベリーの三種類があるとか——儂はその三種を所望したい」

「宣伝始まった!?!」

「かか、忍野忍のミスド宣伝タイムじゃ——値段は税込み216円だそうじゃの。それに、クリスマス限定といえばポン・デ・リースなるものもあるとか。こちらもチョコ、ストロベリー、ホワイトチョコの三種類——税込み162円だそうじゃ」

「お前ミスドの回し者すぎるだろ」

ミスタードーナツに魂を売り過ぎだ。どんだけ好きなんだよお前。

まあ、悪魔に魂を売るよりは遥かにマシだろうが——というか、悪魔と比較するのはミスタードーナツにとって失礼すぎる行為なのだが。

「かか、儂はミスタードーナツの妖精じゃ」

「うるせえ、吸血鬼が妖精を名乗るな」

「いつかあのライオンを倒し、儂がミスドのマスコットキャラとなる」

「怖い野望を抱くな! お前の敵は太陽じゃなかったのかよ!?!」

「太陽? ハッ、あんなもん二の次三の次じゃ。今の儂はあんなの眼中にない——今視界に映つとるのはただ一つ、ポンデライオン!!」

「規制が仕事してなさすぎる!!」

お前にとつてのミスドの比率、デカすぎだろ！ 本当にお前ドーナの妖精か何かに見えてきたぞ！

……っーか、『くらやみ』が来るんだよ！ 目指すな!!

「ちっ、世の中ままならんもんじやのう」

忍はそう言い捨てると、心渡を体内に収納した。

「……さて」

閑話休題、である。

僕は倒れ込んでいる少女の方を向いた。すると、近くで扇ちゃんがかがみ込んでいた。

「扇ちゃん、何やってるの?」

「何をやっているのかと聞かれれば、まあ、この少女の生死を確認していた、と答えましょうか」

僕は慄いた。

扇ちゃんが、あの扇ちゃんが、見も知らぬ少女の生死を確認しただって?!

そ、そんな協力的なこと——お、扇ちゃんがやってくれるなんて! 「お、お前偽物か!? 僕の知る扇ちゃんはそんなに優しくないし、そんなに協力的じゃねえ!!」

「おや、敬愛する阿良々木先輩にそんな風に思われていたとは心外です。私としても凹んでしまいます。えーん、です」

扇ちゃんは騙す気がこれっぽっちもないような泣き真似をした——うん、この適当さ、間違いなく扇ちゃんだ。

「適当さで人を判断するって、どんな判断基準なんですか」

「だってそれが君のキャラだろ扇ちゃん」

「まあ、否定はしませんが……はっはー、面と向かって言われると少々向っ腹が立ちますね」

そう言われたくないのなら凝れよ。

パスワードを1234とかにするのをやめろよ。

……曖昧や誤魔化しを許さない扇ちゃんが、基本的に自分のことに関しては適当っていうのは意外なところではあるのだが。

いや——自分のことだからこそ、か。

「まあそれは兎も角として……扇ちゃん、その子の容体はどうだ?」  
「ええ、特にどこもおかしな所は無いですね。外傷もありません。  
心的外傷はどうかは知りませんが」  
「そうか」

扇ちゃんがそう言うならそうなのだろう——推理小説を好むという扇ちゃんのことだ、その観察眼は当てにしてもいい……筈だ。そしてこれはちゃんとした僕の意見、の筈。

「駄目だな……君が絡むとどうも僕の認識を疑ってしまう」

「おや。考え無しの頃よりは成長したじゃないですか阿良々木先輩。ですが考え過ぎというのもしけませんねえ。何よりも必要なのは臨機応変、バランスですよ」

「バランス……」

「鏡の時も、考え過ぎで痛い目を見たでしょう? 痛い姿を衆目に晒したでしょう?」

「あの話もうやめてくれ!!」

アニメ派の読者だつて居るんだから、そういうアニメ化されるかされないかの瀬戸際にある話は止めろ!

「え? 今更アニメ派の方々のご心配をなさるのですか? ここまで散々ネタバレをばら撒いておいて何を仰るのやら」

「うるせえ! その辺はアニメ化する事が確実視されているから兎も角、鏡の話に関してはアニメ化しねーんだから、そういうこと言うの止めろ!」

「あのですねえ、阿良々木先輩。そう都合よくいくとお思いですか?

普通に考えて製作されるでしょう。阿良々木先輩の痴態が地上波で放送される日もそう遠い未来ではありません」

「僕のプライバシー侵害だ!!」

ただでさえつい最近、あの学級会やら勉強会やらの事について晒されたつてのに、まだ僕の黒歴史を晒すつてのか、畜生!

死体蹴りもいいところだ!

「死体蹴りと言えば、寧ろ斧乃木さんは阿良々木さんを蹴る側に回りそうですね」

「八九寺、唐突に会話に入ってくるんじゃない！」

お前と扇ちゃんは敬語かつ慇懃無礼という属性が似ているから、同時に出てくると読者が混乱するんだよ！

……まあそれは後でじっくりと語り合うとして——まずはこの女子。この何者か分からない女子を車に運ばねば。

いや全く、雑談などしている場合ではなかった——僕はこの子を抱き上げた。

「おやおやおやおや？ 阿良々木先輩、愚かなる阿良々木先輩。何をしてらっしゃるのですか？ まさかその少女を車に乗せよう、なんて事を考えていらっしゃる訳ではないでしょうね？」

扇ちゃんが僕の行く手を阻むように両手を広げ、立ちはだかった。

「……扇ちゃん。関わるなって言いたいのだらうけれど、目の前で倒れている女の子をそのまま無視して走り去ることが出来るほど、僕は冷たい人間じゃないんだ。それくらい君も知っているだろう？」

「私は何も知りません。あなたが知っています——少しは考えてください愚か者。行き当たりばったりに行動すれば、必ずどこかで痛いしっぺ返しを食らうと、いい加減学習したら如何ですか」

「だから、これは考えた上での行動なんだよ。女の子が道端に転がっていたら、いつ何時誰に襲われるか分かったもんじゃないだろ。保護だよ保護。僕のご両親がやってみたいいな——」

「考えるべきところはそこではないでしょう阿良々木先輩」  
「え？」

扇ちゃんは女の子に手を伸ばす——慌てて遠ざけた。

「何するんだ、扇ちゃん」

「冷静に考えて下さい。悪魔に襲われた所為で動転しているのですか？」

「おいおい、僕を見くびるなよ扇ちゃん。一度殺されかけてトラウマになってはいるものの、もうあの程度では驚かねーよ」

「そこではありません」

扇ちゃんは溜息を吐いた。両手を広げたままな所為か、どこか演技染みしていた。

「だから——あなたが真に考えるべきことは、どうしてその女子が、悪魔になんて襲われていたのか——ということですよ」

「どうして——」

どうして悪魔に襲われていたのか。それが、僕が真に考えるべきことだと扇ちゃんは言った。

だが、それなら尚更である——襲われているということは、少なくとも、何か退つ引きならない事情があるのは間違いない。

怪異には、それに相応しい理由がある。

ならば余計ここに放置していくのは危険と思われる。人ならば兎も角——いや、人の方が危険なパターンだって数多くあるのだけれど——人ならざるものに再び襲われる可能性だって十分にあるのだ。

どうして襲われたのか。それは後で考えればいい——今は、この子を助けることが先決だ。

僕がその旨を扇ちゃんに告げると、彼女は笑みを潜め、処置なしとでも言うように、ゆっくりと首を振った。

「はいはい、いいです。分かりましたよ。成る程、あなたはどうやら全く成長していないと見える。そこまで目先の事しか見えていないとは、全く、愚かですねえ」

扇ちゃんは僕らに背を向け、歩き出した。

「あれ？ 扇ちゃん、どこへ行くんだい」

「どこへ行くのかと問われれば、別にどこへも行きませんかね——いえ、申し訳有りませんが、少しばかりあなたに失望してしまいましたね。ここで私は退場させて頂きましょう」

「え？」

「まあ、痛い目を見て目覚めて下さいということですよ——睡眠学習の時間は終わりです、阿良々木先輩。これからはちゃんと起きて勉強して下さい」

では。

そう言っつて扇ちゃんはつかつかと歩いていく。一瞬引き止めようと思っただけれど、しかしよく考えてみれば、あの子がここまで来たのはあの子が勝手にしたことなのだ。ならば勝手に退場するという自



由意志も、認められてしかるべきだろう。

後から思えば、この決断はまあ結果オーライ、正解といえれば正解だったのだけれど——そもそもここで扇ちゃんの言うことを聞いていれば、この一連の物語が無かったのではないかと思うと、一概に正解とは思えない。

伸ばした手は既に扇ちゃんには届かない。扇ちゃんはまだ薄暗い早朝の闇の中へと消えた。

「003」

扇ちゃんの言うことを愚かにも聞かず、結局僕はその女子を車の中に連れ込んだ。

こう言うところか犯罪の匂いがするけれど、決して僕にはそんなやましい気持ちは無いということを、読者諸兄に述べておかねばなるまい。

そもそもこの場には、忍と八九寺——即ち、幼女と少女のコンビが居るのだ。どうして僕が中学生くらいの女子に現を抜かそうか。まあ、忍は影に潜っているけれど——。

「阿良々木さん。その言い方だと、阿良々木さんが途轍もなくレベルの高いロリコンであると読者の皆さんに認識されそうなのですけれども」

「マジかよ」

それは困る。僕は健全なる主人公を目指しているというのに。

「マジかよ」

「おいおい八九寺、僕の台詞をまるまるパクるなんてお前らしくないぜ」

「すみません、アジヤラ木さんの仰ったことがあまりにも衝撃的すぎてつい」

「一体どこが衝撃的だったのかは後で問い詰めるとして、しかし八九寺。僕の名前を某狩猟ゲームに出てくる蛇型モンスターのようになうな。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼。噛みました」

「違う、わざとだ……」

「かみまみた」

「わざとじゃない!？」

「噛りみやし、あ、失礼。噛みました」

「本当に噛んじやった!」

持ちネタ失敗してんじゃねーよ! いや、ある意味美味しいパターンではあるのだろうけれども!

少々変則的ではあるがネタも終了したので、僕は八九寺に聞いた。「衝撃的というなら今のこそ衝撃的なんだが……さっきの僕の発言のどこに衝撃的な要素があったんだ?」

僕はただ純粹に、主人公としての心構えの程を述べただけだったのだが。

「阿良々木さんに主人公としての自覚があったことにまず驚きですけど、それ以上に健全な主人公を目指していたことには驚愕ですよ。あれだけ私にセクハラなさってにおいて、よくもまあそんなことが言えたものですね」

「おいおい八九寺。あれはセクハラじゃなくて、ただのコミュニケーションシオンだろ? 僕とお前の仲じゃあないか。あんなのノーカンだよ」「そうやって己の犯罪行為を正当化している辺りがもう既に健全とは程遠いということをご自覚なさってください」「なんと」

八九寺がまるで犯罪者を見るかのような目つきで僕を睨んだのをバックミラー越しに確認した(八九寺は後部座席に座っている。忍が影に沈み、扇ちゃんか離脱したおかげでスペースが空いたのだ。拾った女の子も後部座席)。そうか……僕は健全じゃなかったのか。……だからオフシーズン、呼ばれなかったのかなあ。

「因みに、オフシーズンには不肖私もお呼ばれしております」

「マジか……」

八九寺まで呼ばれてるのか……じゃあ寧ろ、誰が呼ばれてないんだ? 「

申し訳ありませんが、関係者以外にキャスト情報を流す気はさらさ

「らざいません」

「僕はもう関係者ですらないのか!？」

くそう、プロデューサー呼んでこい！ 直談判してやる！

「はあ、プロデューサーですか？ それは私です。八九寺Pですよ」

「プロデューサーはしれつと続投してる！」

そりやお呼ばれどころか、お呼びする側じゃねえかお前！

つか、お前の所為かよ！ 僕がオフシーズンに呼ばれてないのつて！ 何しれつとした顔でプレシーズンにまで参加してんだよお前！

「因みに、プレシーズンのプロデューサーも私です」

「プロデューサーし過ぎだろ!!」

二作品もプロデューサーするとか、その歳にして敏腕プロデューサーかよ！ 侮れねえなおい！

「いやあ、本来ならどちらにも阿良々木さんをお呼びするのはやめようと思ったのですが、如何せん他のキャストからの反発が強くてですね」

「おお、僕が居ないことに抗議してくれる奴がまだ居たのか。因みに、それは誰だい？」

「戦場ヶ原さんです」

「ありがとうひたぎー!!」

世界の中心でなくとも、町の中心で愛を叫びたい！ ありがとう！

「あれ、じゃあオフシーズンの方は？」

「あちらに関してはプレシーズンの失敗を踏まえ、戦場ヶ原さんはお呼びしていません。今のところ」

「僕が出演すること自体が失敗なのか!？」

「当たり前です！ 何を仰っているのですか!？ 噛りますよ！」

「怒られた!？」

まあ、運転中なので齧られることはなかったけれど。

「しかしそれでも流石の阿良々木さんです。意図せずにオフシーズンの本番撮影中に見事乱入なさるとは……いやはや私も迂闊でした」

「え？ 僕知らないぞ」

「そりやあそうですよ。時系列が違いますからね。オフシーズンは今から未来の話ですし」

「時空が乱れまくってんじゃねえか」

「いいのか？ 過去にいる僕がそれを知っちゃっていいのか？ パラドックスが起きるぞ？」

「ええ、まあその辺は問題ないでしょう。既に愚物語は発売済みです——まあ、業物語の方に影響が出るかもしれませんが……その辺は編集で何とかしましょう」

「わざわざ編集される程なのか僕は……お前、プロデューサーの癖に編集も兼任してんの？」

「いえ、編集担当は斧乃木さんです」

「斧乃木ちゃん……」

確かにあの子は編集に向いてるといえば向いてるだろうな……少なくともカットは無慈悲に行えるだろう。感情がない分。それ以外のことをこなせるのかは分からないけれど……。

「もしも阿良々木さんが間違つて出演した場合、そのシーンは斧乃木さんが魔法少女のコスプレをしたシーンに差し替えられます」

「何それ超見たい!!」

なんとという重大な情報を漏らしやがるんだ八九寺P——こうしちゃいられない、僕もオフシーズンの撮影現場に出向けるだけ出向かねば。そうすれば、斧乃木ちゃんの魔法少女コスプレシーンが大量に!

「だからそういうこと考えてるから健全とは程遠いのでしょうか……」

「おっと」

いけないいけない……こんなことじゃあ、正式にお呼ばれする日なんて夢のまた夢じゃあないか。何とかして八九寺Pに認められなくては。媚を売らなくては。

「八九寺。何か僕にしてほしいことはないか」

「じゃあ死んでください」

「ふざけんな!!」

僕は一瞬で媚びを売る姿勢を崩した。

何が『じゃあ』だよ。腹の底で何考えてんだこのプロデューサー。「まづいな……お前と話していると楽しすぎて話が弾むけれど話が進まない」

「分かりやすい言葉で喋ってください阿良々木さん。取り敢えず言葉を重複させておけば言葉遊びになると思ったら大間違いですよ」

「厳しいなー」

くそ、急に態度をデカくしやがって。お前なんて扇ちゃんが居れば……。

……………。

こいつと扇ちゃん、すげー意気投合しそうな気がする。

「全く、阿良々木さんの所為ですよ？ 阿良々木さんが我儘言つて扇さんを怒らせるから、お話出来るチャンスが損なわれたじゃないですか」

「わ、悪かったよ」

悪かったけど……。

「それにしたつて、扇ちゃんにも問題があるだろ。気を失っている子を放置しろつて——道徳的にもそれはどうかと僕は思うね」

「……扇さんの考えていることは、私存じ上げている訳ではありませんんが」

八九寺は声のトーンを落として言う。シリアスモードだ。僕も切り替えよう。

「ですが、全くの考えなしで、それこそ、あなたがその女の方に現を抜かすから、などという考えではないでしょう」

「……なんでそう言えるんだい」

「私は扇さんの事をよく知っている訳ではありませんけれども、臥煙さんから少しだけ聞いておりますので、その正体自体は臆げに知っています」

「臥煙さんから……？」

なんでそんなことを——と思ったが、すぐに合点がいった。

八九寺はここら周辺の神となった時、臥煙さんから軽い手解きのよ

うなものを受けたと聞く。その時だろう。

神ならば、その統治地区のことを知っておかなくてはならない。その地に存在する怪異のことも――。

「女装した阿良々木さんですよね」

「違う!!」

惜しいけれども。

「阿良々木さんの影――臥煙さんの言うところのダーク阿良々木さんである彼女は、阿良々木さんとは反転した性質を持っています。阿良々木さんが考えなしで動くのならば、当然、あの方は考えありきで動くと見てよいでしょう」

「……………」

考えなし。

扇ちゃんはそう言ったけれど――そう言うのならば、果たして僕は、何を考えていないのだろうか。その答えは明確で明白だった。

『この女の子はどうして悪魔に襲われていたのか』。

確かにそれは重要な事だけれど――でも、なんでそれがこの子を拒絶する理由になるのだろうか？

扇ちゃんはもう――知っているのか？

私は何も知りません。あなたが知っているんです――扇ちゃんはそう嘯くだろうけれど、しかし残念ながら、この件について僕が知っている事など、これっぽっちもない。

扇ちゃんは、何を知っているんだ？

僕の知らない、何を――。

「……………んっ」

「!!」

後部座席から声が聞こえた。

慌ててブレーキをかける――もしもここが公道ならば大事故を引き起こしていたであろう行為だけれど、幸いな事にここは路地。しかも早朝故誰も通り掛からない。

僕は後ろを振り返って彼女を見る――ゆつくりと起き上がった彼女は、焦点の定まらない目で僕を見た。

「……あの、どうして私、知らない男の人の車に乗せられているのでしょうか?」

「……………」

字面が健全とは程遠かった。

〔004〕

織崎記。彼女はそう名乗った。

彼女が発したもつともな疑問に答え(焦った僕を八九寺がフォローしてくれただ。有難い)、恐らくされているであろう誤解を解き(八九寺が)、巧みな話術で緊張を解きほぐした(八九寺が)後のことだ。

……僕、八九寺に頼りっぱなしじゃあ——いや、考えるのをやめよう。これ以上考えると、辛うじて許されている作品への出演さえ辞退してしまいそうで……。

「……取り敢えずお礼申し上げますわ。ありがとうございます」

織崎は頭を下げた(車は停めたままなので後ろを振り向くことが出来る)。

「別に礼を言われるようなことなんてやってないよ。それに、人は一人で勝手に助かるだけなんだからな。別に僕は君を助けた訳でもないし、何かやったと言え、こうして君を車の中に連れ込んだってだけさ」

「阿良々木さん。その台詞からは少々ナルシストな雰囲気を感じられます」

八九寺からダメ出しが出た。流石八九寺P、台詞に関しては厳しいな。

「いいえ、阿良々木さん。私が厳しいのはあなたに対してです」

「そうだろうな!」

僕が出演しただけでそのシーンの編集を指示するくらいだもんな!

「つーか、いや、悪いが八九寺。今はお前と会話するパートじゃないんだ。楽しい雑談は後でしょう」

「私が楽しんでいるとお思いですか?」

「……………」

気にしない。

僕は織崎ちゃんに視線を戻した。

「えーっと……………」

「……………」

……………どうしよう、凄く気まずい。

どうする？ 何を話せばいいんだ？ というより、何から聞けばいいんだ？ 同年代ならまだしも、相手は小さい方の妹と同年代っぽい女子だ——下手に喋れば、八九寺のお陰で少しは晴れた不審者疑惑がまた浮上してしまう。いや、こんな早朝に行く当てもなく車を走らせている時点で相当不審者染みているけれども。

かと言って、いきなり悪魔のことを切り出す訳にもいくまい——こういうのは脈絡が大事なのだから。物語でも、会話でも。

ならば僕のとるべき行動は一つしかない。

「ねえ、織崎ちゃん。こんな朝早くから、道端で何やってたの？ 光合成をするにも、まだ陽が出てないから日光が足りないぜ」

道化を演じる。

というか、要は雑談である——適度にボケを挟みながらの会話は相手の警戒心を緩め、空気を和ませるのに一役買ってくれるのだ。ならば今すべきは、雑談以外あるまい。

重要なことは後回し。後でも十分考えられるだろうし。

僕の雑談スキルの見せ所である——嘗て正弦と相對した時に頼られたスキルだが、あの時はそもそも正弦と会話が成立していたとは言い辛い状況だったため、発動は出来なかったが——今こそ、スキルの見せ所である。

主人公の力、とくにご覧あれ。

「私は植物ではありません」

「え？ ああ、うん、そうだね。そうだったそうだった、うっかりしてたぜ。そうだな、君はどこからどう見ても人間だ」

想定外の端的な返しにも臆せず、会話続行。突然投げられた鋭利なナイフを見事掴み、地面に刺した形である（どういう意味だ）。



まあ、ナイフなんて投げられ慣れてるしな。どこかの小さい奴のお陰で。

……この比較的平和な日本という社会において、ナイフを投げられ慣れてる人物など、果たして何人いるのだろうか。

「人間ですか……そう見えます?」

「え? そりゃあそうだろう——人間じゃなかったら、君は何なんだい」

「またもや想定外の返し——意外性のある子だ。必死に食い付かねば、会話が続きそうにない。」

「私は何でしょうね? うふふ、まあなんでもよろしいですわ。あなたにとってはね」

「……………」

会話を終わらせに来やがった。つーか、切り上げやがった。

もしかしてこの子、僕と話したくないんじゃないのか、という疑問が湧いてくる——まあそれもやむなしだろう。何せ彼女にとって僕は、ついさつきまで会ったことも無かった、赤の他人以外の何物でもないのだから。警戒するのも当然と言える。

しかし、ここで話を切り上げられては話にならない——別の話題を振ろう。

「織崎ちゃん、個性的な喋り方をするね。それには、何か理由があったりするのかい?」

「それを知ってあなたに何の得があるのでしょうか」

「……いや、別に得、は無いけど……単純に興味があるだけで」

「あなたが持ち得る必要の無い興味ですわ」

……悉く僕の台詞を封殺してくる。警戒心が強すぎではないのだろうか。

だが、僕もここで引き下がるつもりはない。食い下がるつもりしかない。

「そう言わず、教えてくれよ。ああ、そうだ。君、金髪だけど、ハーフ?」

「昔は」

「昔は？」

「そう。昔は」

「じゃあ、今は何なんだい？」

「さあ？ 知りませんの」

「……………」

どこまで僕と話したくないんだ。そんなに僕が嫌か。

……いやまて、僕が嫌いというより、これは学校で教えられた対処法が何かなのではないのだろうか？ そうだ、そう考えればこの冷たい態度にも合点がいく——いくのか？ いくんだらう。いく。

しかしながらその理由だと、やはり僕を不審者と思いついて警戒しているということの証明となってしまうが——八九寺何やってんだ。誤解が全く解けてないじゃねえか。

……そうだ、八九寺に任そう。会話のエキスパートのあいっなら、この子ともそれなりに話し合える筈だ。手持ち無沙汰に窓の外を眺めてるし——いや待て。

やっぱり却下だ。さつきもそうだが、僕は八九寺に頼りすぎだ。困った時の神頼みとは言うけれど、なんでもかんでも神様に頼むのは良くないのではないか。

……やはりここは僕がやるしかない。

「ねえ、その服どこで買ったの？ 似合ってるね」

「どこで買ったか知って、あなたに得があるのですか？ それともまた興味？ 中学生の服装に興味があるとは、まさしく変態ですわね」

「……………」

ぐうの音も出なかった。

無理だ……僕にはどうしようもない。僕の雑談スキルはこの程度だったのか。

「阿良々木さん。今のは紛う事なき自滅でしたよ」

「八九寺いいーっ!!」

思わず運転席から腰を浮かす——何故だろう、八九寺の声を聞いた瞬間、冷えた心が一瞬にして温められ、活力が湧いてきた。解凍される冷凍マグロの気持ちがよく分かった。

よし、もうこうなったら、単刀直入にいこう。余計な回り道はやめた。そもそも僕は腹芸が得意な方ではないのだから。

「織崎ちゃん。単刀直入に聞くぞ」  
「どうぞ」

「君は誰かに憎まれるようなことをしたことはあるかい？ 心当たりは——」

「雑魚い」

「え？」

「いいえ、ありません」

「ああ、そうか……」

今、『雑魚い』と言ったように聞こえたが——雑魚い？ 雑魚ってことか？ 何が？

いやまて、早まるな阿良々木暦。言い間違えだっただろうするんだ。再び指摘すれば最後、辛うじて成立した会話がまた終わってしまう。慎重にいけ——。

「じゃあ……」

……じゃあ、なんだ？

何を聞けばいいんだ——忍野や臥煙さん、扇ちゃん辺りなら、この後も鋭い質問を投げかけるのだからうけれど、生憎僕は怪異関係についてはからつきしである。怪異現象に何度か行き遭ったとは言えど、その知識なんて僕にはない。

扇ちゃんが居ないことが悔やまれる——そうだ、扇ちゃん。

扇ちゃんは、何故この子に乗せるのを執拗に嫌がったんだ？ 八九寺は、間違いなく理由があると言っていたが——。

「阿良々木暦」

「え、何だい？」

まさかのまさかである。向こうから話しかけてくれるとは。僕への警戒心が少しは解れたということなのだろうか？ もしそうだとすれば、やはり僕の雑談スキルは捨てたものではない——。

「織崎さんと仰りましたか」

「……はい？」

おや。

ここに来てまたもやまさかまさかの八九寺乱入だ——八九寺のやつ、ついに黙ってられなくなったのか。しかし、僕はもう八九寺に助けられないと決めたのだ。申し訳ないが、もう少し黙っていてもらおう。

「八九寺、悪い。もう少しの間でいいから、喋るのを我慢してもらえるか」

「黙るのは阿良々木さんの方ですよ」

「え？」

「織崎さん。あなた、どうして阿良々木さんの名前を知っているのでしょうか」

「え？」

あれ、そう言えば——阿良々木暦って言ってたな。

あれあれ？

「自己紹介して下さったでしょう。阿良々木暦と八九寺真宵って」

「言ったつけ……？」

記憶にないけれど——まあ、そう言うのならそうなのだろう。そう考えなければ説明がつかないし。そうだ、したに違いない——。

「いいえ、してません」

「……………」

八九寺は織崎ちゃんを睨んだ——どうしたんだ？ 妙に八九寺が攻撃的だが……。してませんか？ 何を言っているのだろうか。

「なあ、八九寺。今僕が事情を聞こうと奮闘しているのだから、ちよつと静かに——」

「静かにすべきはあなただ、と、先刻申し上げた筈ですけれども！」

「つ……………」

な、なんだ？ 八九寺、どうしたんだ？

織崎ちゃんを睨んだまま、目を離さない——織崎ちゃんをどうしてそこまで敵視するんだ？ 扇ちゃん然り——。

「阿良々木さん。やはり車から降ろしましょう」

「え？」

「ういふら」

織崎ちゃんは足を組み、ドアに肘を置き、頬杖をついた。

……いやいや、くつろぎ過ぎだろう。警戒心が解けた人というのは、ここまで態度を変えられることが出来るのだろうか。

ここまでくつろがれると、車から降ろす訳にはいかない——くつろぐということは、居心地が良いということ。僕の手でくつろいでくれるとは、全く光栄である。

「阿良々木さん!!」

「落ち着けよ八九寺。ああ、分かった。お前、嫉妬してるんだな？」

喋ってくれないからって。ほら、なんだかんだでお前も楽しんでたんじゃないか。どうしてあんなツンデレみたいなことを——」

「阿良々木さんっ!! どうなさったのですかっ! 私の話を聞いて下さいっ!!」

「話? 聞いてるだろ? つーか、そもそも僕は織崎ちゃんと話しているのだから、聞くも何も——」

「阿良々木さ——」

「阿良々木暦。私は貴方と二人きりで話がしたいですわ」  
「っ!?!」

「二人きりだっつて!?!」

いきなりなんということを言いだすのだこの子は——大胆にも程がある。幾ら打ち解けたとはいえ、先程まで他人同士だった僕と二人きりになるうだなんて……そんなに警戒レベルを下げられるようなこと、何かやったっけ? いやまあやったんだろうけれど。

流石に二人きりつてのは——いや待て、そもそも最初に歩み寄ったのは僕からだ。そして向こうも漸く歩み寄ろうとしてくれている。その気持ちを無下にすることは、今やこの子を裏切ることにつながるのではないだろうか? 折角打ち解けたというのに、再び元の木阿弥に戻そうというのか? 答えは否である。

「……八九寺。悪いが外に出てくれないか」

「阿良々木さん!?!」

「すまない。けれど、僕は出来るだけ、織崎ちゃんの要望に応えたいん

だ」

「阿良々木さん、おかしいとは思わないのですか!? 先程からのあなたの言動、とてもまともな精神状態とは思えません!!」

「おいおい八九寺。僕は冷静そのものだけ。冷凍マグロだってビックリする程さ」

「冷凍マグロを引き合いに出している時点でご自分が冷静でないということにお気付き下さいっ!!」

……何を慌てているのだろうか? 八九寺にしては我儘がすぎる——神と化した影響なのだろうか?

「我儘な神様は嫌われるぜ。八九寺、降りてくれ」

「嫌です!!」

嫌ときたか。

うーむ……僕の車から降りるのが嫌とは、全く嬉しいことを言ってくれる。僕の心をぐらぐらと揺さぶってくれるじゃあないか。

織崎ちゃんと八九寺、どちらをとるか……は、まあ、考えなくとも明確なだけけれど。

「八九寺」

「はい」

「降りてくれ」

「っ——!?!」

今僕が優先すべきは、織崎との会話だ。既に友好度がマックスである八九寺には、悪いが退場してもらおう。

「あ、阿良々木……あ、ありやりやぎさん……!」

「おいおい八九寺。噛むにしてももう少し凝ってくれ。お前らしくないぜ」

「~~~~っ!!」

八九寺は目に涙を溜めて僕を見る——揺さぶられる。激しく揺さぶられる。

けれど、僕は心を鬼にしなければならぬ——いや待て何故? え

? あれ? なんて僕は——あれ?

待て。

待て待て待て待て待ってくれ。

頭の中がごちゃごちゃやっていて解らない——なんで僕は親友を放棄して他人を取るんだ——。

「阿良々木暦。阿良々木暦。早くしてくださいまし」

「え？ あ、ああ、悪い」

僕は八九寺を見た。

「八九寺、頼む」

八九寺は救いを求めるかのような目付きで僕を見た——けれど、僕は言い放つ。

「降りてくれ」

「……………」

暫しの沈黙が車内を支配する。

そして。

「……………わかりました」

八九寺は、車のドアを開けた。

「……………阿良々木さん」

「ん？ どうした」

「……………どうかお氣をつけて」

「ああ。安全運転で行くよ」

「……………」

そう言うと八九寺は、車から降りた。

ボタン、と音を立てて、ドアが閉じられた。

「005」

「うふふ、さてさて二人きりになれましたわね。阿良々木暦」

「ああ、そうだね」

八九寺をその場に残し、僕は車を出した。速度は勿論法定速度。安全運転である。

織崎ちゃんの後部座席に寝転がりながら言った——そんなに居心地がいいのだろうか、その後部座席。

「先程は冷たい態度をとって申し訳ございませんでした。命の恩人に

なんたる無礼を」

「恩人なんて、そんな大それたもんじゃないよ。別に僕は何もしていない——」

「そう、何もしていない」

織崎ちゃんは起き上がった（勿論振り返ってなんかいない。バックミラー様々である）。

「何もしていない阿良々木暦。しかし私は有難く思っていますのよ。こうして私の言う通りにしてくれたことを」

「……その事なんだけど、なんで君は僕と二人きりになりたかったんだ？ 八九寺が居ても、別に話は出来たんじゃあ——」

「いいえ。八九寺真宵が居ては、難易度が高くなりますので」

「難易度？」

「あなたは気にしなくて良い事ですわ。それは置いておいて阿良々木暦」

「ん？ どうした」

はぐらかされたような気がしたが、そこにわざわざ触れて空気が悪くなるのは御免である。八九寺がこの場にはいないのでは、自浄作用も働かない。

居なくなつて初めて分かる、八九寺の大切さ。

「私はあなたに恩返ししたいのです。なので、私の家に来てはくれないでしょうか」

「織崎ちゃんの家？」

「はい。ミルクティーの一杯でも二杯でも三杯でも四杯でも五杯でも六杯でも七杯でも八杯でも九杯でもお出ししますわ」

「そんなに飲むほど僕は凶々しくねえよ！」

僕は一体どんな風に見えるんだ。

「いいえ、結局は一杯ですわよ。一杯お出ししますのでから」  
「判り辛え！」

「つーか一杯だけ確定なのか。変動することはないのか。」

「やれやれ、これは一本取られた……いや、ここは一杯取られた、と言った方が良いのか？」



「でも僕、君の家なんて知らないよ」

「私がナビゲートしますわ。ご心配なく。故にあなたは家に帰る必要などありません」

「え？」

あれ、なんでこの子、僕が家に向かってしていると知っていると知っているんだ？  
言ったっけ？

「言いましたわ。しっかりとこの耳で聞きました」

「そうか」

じゃあ言ったんだな。うん。この子が嘘を吐くわけがない。

……なんで嘘を吐くわけがないんだ？

まあいいや。

「阿良々木暦。あなたは随分と考え事を多くなさる方なのですね」

「え？」

そんなこと初めて言われたぞ——考え無しと言われたことは数知れずとも、考え事をよくするなんて、そんなこと言われたことがない。

少しだけ嬉しい、かな——いや、嬉しいか？ 嬉しいんだろう。嬉しい。

「考え事は結構ですけれど、ちゃんと運転にも集中してくださいね。あなたが勝手に事故って死ぬのは歓迎ですけれど、私が乗っているのですから」

「歓迎するなよ……」

そんなまるで死んで欲しいかのような言い方、やめてほしい。

しかしまあその通りだ。今は運転中である。集中しなければ。織崎ちゃんを乗せているのだから。事故を起こす訳にはいかない。

「そう、あなたは何も考えなくていい。私の言う通り、車を走らせているだけでいい」

「どうとう思考の自由さえ奪われるのか……」

とことんまで僕という存在を規制してくれる。出演さえもままならないのに……。

「台本通りに動いてください、阿良々木暦。そうすれば、物語は進みます——歴史は正しい方向へと向かうのですわ」

「歴史？」

突然歴史なんて壮大な話を始める織崎。歴史？　なんでここで歴史なんてものが出てくるんだ？

「ほらほら、阿良々木暦。考え事をせず前を見る。人が居ますわよ」  
「なっ!？」

僕は慌てて前を見た——すると確かに、そこには黒い雨合羽を着た男が立っていた。

僕は慌ててブレーキをかける——危ないところだった。織崎が居なければどうなっていたことか……いやまあ、織崎が居なければそもそも考え事なんてしていなかったのだけれども。

……織崎の所為か？

いや、お陰だろう。

車は、あわや激突かと思われた直前のギリギリで停止した。危ねえ……。

「あ、ありがとう織崎ちゃん」

「だから考え事をするなど言ったでしょうに」

「ああ。全く、君の言う通りだったぜ」

「ほら、早く謝ってきてくださいな」

「ああ」

僕は車のドアを開けた。怪我を負わせていないかどうか、念の為に確認しなければ。そして謝らなければ。

全く、不注意も良いところだ——僕、車の運転に向いていないのではないだろうか？

「すみません。僕の不注意で——大丈夫でしたか？」

僕は男に呼び掛けた。

雨合羽の男は、ゆっくりとこちらを向いた——あれ、雨合羽？　なんで雨合羽なんて着てるんだ？　雨合羽……。

雨合羽だと？

「っ——!?!？」

僕は戦慄した。どういうことだ？　こんな事、あり得るのか?!　いや、というより、どうして僕はもつと早く気付けなかった——!?!

こちらを振り向いた男の顔は、まるで猿のようなそれであった。雨合羽、そして猿——そこから導き出される答えは、ただ一つ。

「レイニー——！」

アンリミテッド・ルールブック  
「例外の方が多い規則」

レイニー・デヴィル。そう呟こうとした僕の台詞を上塗りするかのように、聞き覚えのある声が頭上から聞こえた。僕も、レイニー・デヴィルも、頭上を見た。

遙か彼方遠くにある小さな点——それは徐々に人の形を成し、地面に降り立った。

否——地面に降りたつたのではない。悪魔の上に降ってきたのだ。

落下してきた童女は悪魔をぐちゃりと踏み潰した。悪魔は一刀両断、というか一踏両断され、二つに分かれて左右に倒れ伏した。

降りたつた童女はスカートをはたきながら言った。

「やれやれ、また何か妙な事に巻き込まれているみたいだね——僕はあなたの監視役だけれど、お守りじゃないんだよ？」

童女——即ち、僕の家に住まう式神童女であるところの彼女。

死体人形、斧乃木余接は、まさしくキメ顔でそう言った。

無表情なのだけでも。

第貳話　しるしメイク　其ノ貳

〔006〕

「八九寺姉さんから頼まれてね」

突如現れたレイニー・デヴィルを突如現れた斧乃木ちゃんが討伐した後。目の前で起きたサプライズの連続に思考が追いつかず、驚愕に身を任せ硬直していた僕に、斧乃木ちゃんが言った。

「は、八九寺が——？」

「そう。あいつ、中々やるじゃないか。ついこの間神様になったばかりなのに、もう権限を使いこなしてる。蛇との相性を抜きにしても、臥煙さんの見立ては間違っていないかったようだね」

斧乃木ちゃんは悪魔の残骸を横目で見つつ、言う。

「八九寺が……なんで君に？　何を？　っていうか、どうやって伝えただんだ？　どうして——」

思わず捲し立てるように質問してしまう。疑問がまるで尽きない。

八九寺が斧乃木ちゃんを呼んだ理由が、僕にはまるで分からない。八九寺はこの悪魔の件を知らないはずだ。つまり、彼女を呼んだ理由は別にあるということだ。そしてそれは、八九寺の様子がおかしかったことと、何か関係があるのではないのか？

もう一つ、八九寺はどうやって斧乃木ちゃんを呼んだのか。八九寺が僕の家に向き着いたとは考えにくい。八九寺を降ろしてから暫く経ってはいるけれど、幾ら僕の家に向かっていたとはいえ、まだまだ遠い。徒歩で辿り着くには、時間は不十分だ。それに、家の中に入ることも出来ない筈だ。ちゃんと鍵は閉めておいたのだから。

「さあ、鬼いちゃん。僕をその黄色い車に乗せなよ」

「ちよつと待て斧乃木ちゃん。説明は一切無しなのか」

まさか質問をスルーされるとは思わなかった。この子も意外性のある返しをする子である。

「は？　嘘でしょ？　わざわざそんな一から十まで鬼いちゃんに説明しなきゃいけないの？　やだよ面倒臭い」

「一から十までとは言わずとも、聞いたことくらいは答えてくれよ」

何も分からないままに従わされるのはごめんだからな。

……あれ？　じゃあなんで僕、識崎ちゃんに従おうとしてたんだ？  
よく考えてみれば、あの子も僕が聞いたことを、何一つ答えていないような気が——する——ような——多分。

「ふむ」

斧乃木ちゃんはちらりと横目で、今度は車内の識崎ちゃんを見た。  
……すっげー睨んでるんだが。

何なのだろうか。そんなに僕が誰かと話しているのを見るのが嫌なのだろうか。だとすれば、何故そこまでご執心なのか知りたいところだけれど——あれ？　じゃあ、何で僕それを質問しなかったんだ？  
あれあれー？

記憶が混濁している——何故だろう、斧乃木ちゃんと話し出した途端、急にあの子に対する疑問が浮かんできたというか……。

「成る程ね。八九寺姉さんの依頼の意味が分かったよ。確かにこれは鬼いちゃんにはどうしようもない状況だ」

「え……う？」

僕にはどうしようもない状況？

どういうことだ——どういう状況なんだ、僕——え？　八九寺？  
なんで八九寺がそんなこと知っているんだ？

「仕方ない。どうやら混乱の最中にある鬼いちゃんに、この僕が懇切丁寧にある程度掻い摘んで説明してやろう。ありがたく思え」

「どうしてそんなに上から視線なのかとツッコみたいところだけれど、ここはぐっと抑えてやる。教えてくれ、斧乃木ちゃん」

「お前も結構上から視線だなおい。背低い癖に、生意気だぞ」  
「……………」

君よりは背が高いぞ。

それに、何も知らない人から見れば、寧ろ君の方が生意気な子供のように見えると思うのだが——。

「屁理屈を捏ねるな。なんならその下半身をぶっ飛ばしてやってもいいんだぜ」

「やめろ、もうそれは経験済みだ」

まあ、あの時ぶっ飛ばされたのは上半身だったのだが。  
つーか指を向けるのを止めろよ。マジで怖えじゃねえか。  
がくぶるである。

「まあいいや。鬼いちちゃんのムカつく言動は、ハーゲンダッツのワツフルコーン一個で許してやるよ」

「僕に渡米しろというのか」

無茶振りが過ぎる。流石に冗談だろうけれど。

「は？ 今のが冗談に聞こえたの？ 頭おかしいよ鬼いちちゃん。僕の目を見て。冗談言ってるような目に見えるかい」

「逆に君の冗談言ってるような目を見てみたいよ」

どう足掻いても無表情だろ、君。

「は、まあ冗談として」

「冗談だったのかよ！」

「まずは一つ目の質問からだね」

一つ目の質問——というと、八九寺が斧乃木を呼んだ理由だろうか。

「ぴーすぴーす」

「いや、今更キヤラを思い出したように横ピースしなくていい」

いちいちボケを挟まなきゃ気が済まないのか、この子は。

「いちいちツツコミを入れなきゃ気が済まないのか、お前は」

「……………」

ツツコミ役の性である。仕方あるまい。

「八九寺姉さんが僕を呼んだのは、まあ言ってしまうえば、貴方が危険に晒されているから——らしいんだよね」

「僕が危険に晒されている？」

「そう。實際来てみて、その情報は間違ってたかったけれど」

斧乃木ちゃんは悪魔の残骸を蹴り飛ばした。

「…………いやいや、待ってくれ斧乃木ちゃん。危険に晒されているのは僕じゃなくて、あの子なんだ」

「あの子？」

「そう。君もさつき見てたろ？ 金髪のあの子——識崎記っていう子

「なんだが」

「識崎だつて？」

「え？」

斧乃木ちゃんが驚いたように識崎ちゃんを見た。無表情の癖にここまで感情を豊かに伝えることが出来るとは——いや待て、感心している場合じゃない。

この反応——まさか斧乃木ちゃん、識崎ちゃんのことを知っているのか？

「いや、知っているか知らないかで言えば、別に知らないよ」

「じゃあその反応は何だよ」

「名前を聞いたことがあるっていうだけだ——どこで聞いたかは覚えていないけれど、確かに聞いたことはある」

「へえ……？」

斧乃木ちゃんが彼女の名前を聞いたことがある——何故？ どうして斧乃木ちゃんが——彼女とどういう関係なんだ？

「いや、別に関係とかはないけれど……まあでも僕が聞いたことあるってことは、十中八九怪異絡みだ」

「怪異絡み……」

怪異絡みと言えば、今まさにあの子は怪異に絡まれているのだけだ——ますます分からない。怪異を引き寄せる体質だったりするのだろうか？ 名前を知っているということは、それだけのネームバリューがあるということだ——。

「……取り敢えず、あの識崎っていう子のことは横へ置いておこう。これ以上僕に追求されても、答えられることは何もないからね」

「そうか」

「そうだ——じゃあ次、二つ目いくよ。ぴーすぴーす」

「無駄に横ピースをねじ込むのをやめろ」

人差し指と中指をくっ付けてやろうか。

「そんなことしやがってみろ、横ピースからエメリウム光線に変えてやるぞ」

「いや知らねえよ！ 勝手に変えろ！」

「いえーい、ビームビームになるぞ」

「好きにしるよ!」

アンリミテッド・ルールブック

「例外の方が多い規則の幅が横に広がるぞ」

「怖え!!」

人差し指だけでもあの破壊力だったのに、二本になったらどうなっ  
ちまうんだ。

それはそれとして。

「八九寺姉さんがどうやって僕を呼んだのか、だよね」

「ああ。そうだ」

「これはちよつと考えればすぐに分かるんじゃないかな——考えてみ  
てよ鬼いちちゃん」

「え?」

突然難題を仕掛けてくる斧乃木ちゃん——ちよつと考えればすぐ  
分かる?」

「……じゃあやっぱり、普通に八九寺は僕の家まで来て」

「違う」

「……………」

端的に否定された。後続のコメントもなし。扇ちゃんより酷いぞ。

「……ヒントはくれないのか」

「思い上がるな。貴方如きがヒントをもらえらると思っっているのかい?」

身の程を知れ」

「……………」

ヒント無しかよ……いや分かんねえよ。つーか誰も分からないだ  
ろう。読者も首を傾げている筈だ。

「ちっ、読者を縦にヒントを要求するとか、お前最低だな。本当に主人  
公か?」

「主人公だ」

誰に何と言われようと、出演のオフアアが掛からなからうと、僕は  
主人公だと主張し続けるぞ。

「しょうがないな——じゃあヒント。八九寺姉さんは何の神様?」

「何の神様……………」



八九寺は蛇神の札を呑んで神様になったのだから、蛇の神様——いや、もともと八九寺は蝸牛の怪異だ。蛇を抑制出来るからこそ神に選ばれた——なら、蝸牛の神様？

あれ？ この場合、どっちなんだ？

「えー？ 今のヒント、僕的には大ヒントだったんだけど。殆ど答え言っちゃったようなものなんだけど」

「いや分からねえよ。八九寺は何の神様なんだよ」

「それくらい考えろよ考え無し。お前の脳味噌は蟹味噌か」

「なんで蟹味噌……」

蟹といえはひたぎだが、そのひたぎ宜しく毒舌を振りまく斧乃木ちゃん。普通の人なら既に激昂しているだろうけれど、僕は寛容なのでこの程度ではカツとなったりしない。というか、僕はこの程度の毒舌、毒舌と認識していない。ひたぎの毒舌と比べれば、随分と可愛いものである。

「貴方、なんでそんな人と付き合ってるの？」

「なんでだろう」

これはこれで中々のミステリーだった。いや冗談抜きで、偶に本当に忘れそうになるから困る。

「いやいや、お前のことなんてどうでもいい。早く答えろ」

「無茶言うな。せめて何の神様か教えてくれ」

「それ言ったらもう答えなんだよ——蝸牛の方」

「蝸牛か」

蛇じゃなかったのか——確かに、千石のような蛇髪にはなっていないようだし、そう考えれば確かに、蝸牛のままであると考えるのが妥当か。

……蝸牛ねえ。

「……迷い牛としての能力の逆を使ったとか」

「もう彼女は迷い牛では無いのだから、迷い牛の力は使えないよ」

つーか逆なんて迷い牛時代でも使えないよ。

斧乃木ちゃんは言った。

マジかよ……本格的に分かんねえぞ。神様……神様……。

……駄目だ、考えても出てきそうにない。こうなったら、もうこのクイズから降りるしかない。

両手を挙げて降伏宣言だ。

「なあ斧乃木ちゃん。ギブアツ」

「ギブアツ制度なんて僕は認めていない」

「……………」

降りることの出来ないクイズらしかった。

「じゃあ土下座する！ 土下座するから！」

「土下座すればどうにかなると思ってたんじゃねえぞ」

「むう」

流石に僕の土下座芸も、やりすぎていまいち効果が薄くなってきたか。

土下座をやり過ぎたと言うと、まるでプライドのない奴のように見えるだろうが、プライドを捨てなければならぬ時というものが、この世には存在するのだ。

「土下座を自慢してる人なんて、世界広しといえど流石に貴方くらいだろうね」

「だろうな」

否定しない。

「……………しょうがないなあ。じゃあ教えてやるから今すぐアイス買ってこい」

「ごめん、今すぐは無理だ」

「無理なんてのは嘘つきの言葉なんだよ。いいからやってみろよ。鼻血だそうがぶっ倒れようがやれよ」

「危ないネタをやめろ!!」

訴えれたらどうするんだ！ っていうかネタが古い！

「その時こそ鬼いちやんの秘技・DOG E Z Aだね」

「なんでちょっと格好良さに言うんだよ」

「ぐだぐだ言ってるねえでさっさと買ってこい脳なし。エメリウム光線ぶっ放すぞ」

「ぐだぐだ言ってるねえでさっさと教えろ式神童女。スカートめくって

中身を詳細に記述してやるぞ」

「うわ怖っ」

斧乃木ちゃんは警戒したのかスカートを抑えた。

「僕は本気だぜ。一度は君に配慮して断念したスカート内の描写だが、今回は一切配慮無しだ。晒し捲つてやる。捲つて晒してやる」

「うわキモっ」

斧乃木ちゃんは車のすぐ真横にまで後ずさった。ふっ、勝ったぜ。

……なにか大事なものを失った気もするが、そんなもんは知らん。

「何勝ち誇つてるんだよこの変態。規制されろ、歩く18禁」

「否定したいが否定出来ないな」

いや実際、規制されてるしな……八九寺に。

出入り禁止令、発令中。

「いいだろう、負けだ。僕もわざわざスカートの中身を晒されたくない」

「最初からそう言えば良かったんだ」

え？ 既にフィギュアがあるから、それを下から覗けばスカートの中身は見れるって？ ふっ、甘いな。斧乃木ちゃんのスカーートの真の中身はあんなもんじゃないぞ。

「僕のスカーートの中身について語るな。本当変態だね、鬼いちちゃんは」  
「変態じゃない、紳士だ。いや待て、そう言えばなんでフィギュアと現実で中身が違うんだ？ ああいうのって、忠実に再現してるんじゃないのか？」

「鬼いちちゃんの方こそ甘いね。フィギュア作成用の撮影をするとき、まさか私服で来ると思ってるの？」

「え？ じゃあもしかしてああいうフィギュアのスカーートの中って」

「うん。あれ、全部嘘だよ」

「なんと」

「いや、正確に言えば大体嘘だよ。忠実に再現したのをウリにする場合もあるし——でも殆どの場合、あれ全部業者さんが用意したものだよ。言ってしまうえば見せパン」

「なんと……」

中々に夢を潰すカミングアウトであった——誤解しないで欲しいのだが、僕はそういったフィギュアを購入したことはないし、仮に購入したとしても、スカートの中身を覗くなんて、そんな卑怯なことではない。

僕はこれでも一応男だからな。スカートの中身を覗くときは、自分の力で、現実で捲って覗く。

「何でもかんでも正々堂々としてりゃあ許されると思うなよ——まあいいや。話が半分逸れたね」

「ああ。なんでだろうな」

「お前のせいだ」

「……………」

否定出来ない。

なんだかこの一連の会話で僕の人氣が著しく低下したように思えるけれど、まあいいや。

今更そんなこと気にしないさ。

「ちよつとは気にしなよ。主人公なんだから」

「主人公だからって人氣投票でベスト3に入らなきゃいけないなんてルールは無いんだぜ、斧乃木ちゃん」

某完璧生徒会長みたいにな。

「じゃあ遅くなっただけど始めようか。解答篇」

そう言うと、斧乃木ちゃんは語り出した。

「007」

「まず鬼いちちゃんは一つ知っておくべきことがある」

「知っておくべきこと?」

「うん。っていうか、知ってて然るべきことの筈なんだけどね」

知ってて然るべき——何だろう?」

「鬼いちちゃんがくだらないボケをかます前にさっさと引っちゃうけど——怪異として上級のものは、下位の存在を眷属にすることが出来る」

「くだらないって言うなよ……眷属——」

眷属。下僕。

成る程、僕が知ってて然るべきことだ——まさに僕がその眷属じゃあないか。旧キスシヨットの——。

「ただし、眷属として影響を与えやすいのは同種。旧キスシヨットなら吸血鬼、千石撫子なら蛇、そして、八九寺真宵の場合——」

——蛞蝓だ。

斧乃木ちゃんは言った。

蛞蝓。

軟体動物門腹足綱のうち、殻が退化しているものの総称。分類学的には蝸牛と同じ有肺亜綱の柄眼目に属し、蝸牛の一種とも呼べる生物。

確かに——眷属にするには十分だ。

「で、その蛞蝓の眷属が、どう関係するんだ？ まさか僕の家周辺に

隠れている蛞蝓に指示して文字を描かせたって訳でもないだろうに」

「そのまさかだよ」

「え？」

「まあ正解だね——なんだよ、やれば出来るじゃないか鬼いちちゃん」

「ちよつと待ってくれ、解説を終えるな。納得いってない」

蛞蝓に指示して文字を書かせた——助けを求めたって……いや、どうやって？

「な、蛞蝓が文字なんて、書けるのか？」

「蛞蝓にそんな知能はない——八九寺姉さんの指示通りに動いているだけだよ」

「え……文字を書いたって、どこに？」

「窓に」

「窓!？」

蛞蝓が窓まで這い上がってきて字を書く——なんだそのシユールな画は。

「……どうやって文字を書いたんだよ」

「そりゃあ、粘液で」

「……もしかしてそれ、まだへばり付いてる？」

「うん。掃除してないからね」

「マジかよ……」

八九寺には感謝するが……もつとなんかなかったのか。家に帰ってからやる事が増えたじゃねえか。

「贅沢言うね。助けてもらえただけありがたいと思えば？」

「贅沢とは言うがな斧乃木ちゃん。そんなもん、どうみても怪現象だろうが」

しかも、斧乃木ちゃんが視認できたということとは、その粘液が付けられたのは間違いなく月火の部屋の窓。月火の部屋の窓なのだ。賢明なる読者諸君なら、この状況の恐ろしさがよく分かるはずだ。

こうしてはいられない、急いで帰らなければ——と、ここで僕は識崎ちゃんの存在を思い出した。そうだ、識崎ちゃんが居たのだった。

すっかり車の中で待ち惚けを食らわせてしまったが、ネタも明かされたところだし、家まで送ってあげないと——折角築いた信頼関係がパアだ。

「そういえば、礼が遅れていたな。ありがとう、斧乃木ちゃん」

「礼には及ばないよ。でもどうしてもお礼をしたっていうのなら」

斧乃木ちゃんは車——いや、識崎ちゃんをか？——を、指差した。

「僕もあの車に乗せてほしいな」

「……………」

どうして皆、そんなに僕の車に乗りたがるのだろうか。僕が社会に出る前に、ドライビングテクニクを上昇させようと必死なのだろうか。

「いや、そんなつもりは一切ないよ」

「ないのかよ」

「ある訳ねえだろ。……僕はその子と喋りたいだけだよ」

「識崎と…………？」

珍しい。斧乃木ちゃんが自分から興味を抱くとは。しかもそれが見ず知らずの他人——いや、名前は聞いたことがあるのだったか。

「鬼いちゃんの認識では、どうやらあの子が怪異現象に巻き込まれているように見えているらしいからね」

「巻きこまれていているように見えている……?」

違うのか?

斧乃木ちゃんを疑う訳ではない——斧乃木ちゃんは式神とはいえ、怪異の専門家だ。僕の認識なんかよりもよっぽど信頼できるのだけだ。

だが——じゃあ、最初にこの子が悪魔に襲われていたことは、どう説明するんだ? あれはどう考えても——。

「鬼いちゃん」

「なんだよ」

「早く乗れ」

「え?」

「いいから早く乗れ。聞こえないのか」

「急にどうし——」

突然僕を急かし出した斧乃木ちゃん。もしやこの子も八九寺のようにおかしくなったのか——と思ったが、いや全く、おかしくなったのは僕と言わざるを得ない。

どうして気付かなかったのだろうか——あの悪魔の残骸が『残っていた』ということに。

心渡で斬り伏せた時は、破片一つたりとも残さず消滅した悪魔が、何故今回は残っていたのかということに——!

「こ、ろ、す! こ、ろ、す! こ、ろ、す! こ、ろ、す! こ、ろ、す! こ、こ、こ、こ、こ、殺す! 殺す! 殺す!」

「っ——!!」

僕は絶句した——こんな展開、予想出来てもおかしくはなかった筈なのに。

左右に別れたレイニー・デヴィルの残骸が、肉体が——再び一つに、結合したなんて。

可能性としては、十分あり得た筈なのに——!!

「アンリミテッド・ルールブック 例外の方が多い規則——ぴーすぴーす」

殺意の声をあげる、復活した悪魔——だが、斧乃木ちゃんは横ぴーすなどして戯けながら、蠢めくその体を再びアンリミテッド・ルールブック例外の方が多い規則で潰

した——ぶっ飛ばした。

今度は真正面からの、人差し指での攻撃である——悪魔の上半分どころではない、上から下まで、全てが至近距離の爆発染みた攻撃によって、消し飛んだ。

それを見て想起するのは、あの正弦の壮絶な死に様（まああれはただの人形だったらしいので、死に様とは言えないかもしれないが）だけれど、それを思い出して罪悪感に浸る間もなく、斧乃木は僕の襟首を掴んで走り出した。そして、車のドアを開け、僕を中にぶち込んだ。「ぐええっ！」

潰れた蛙みたいな声を出す——聞いたことがある訳ではないが。

「っ—か普通に痛え……おもいつきり背中にセレクトレバーが突き刺さった。」

「どうしたのです、阿良々木暦？ 随分とダイナミックな乗車です」とね」

「君にはこれが自分の意思による乗車に見えるのか!？」

識崎ちゃんにツッコむ僕。

いや、流石に古今東西、こんな乗り方をするドライバーは居ないだろう。いるなら早く免許剥奪される。

「ほら、早くアクセル踏めよ」

そう言いながら斧乃木ちゃんが僕を踏みつけ、助手席に滑り込んだ——おい、何勝手に八九寺の指定席に座ってるんだよ。

「いいから早く——またあいつが復活しても知らないよ」

「あ、ああ！ 分かってるよ！」

斧乃木ちゃんはシートベルトを締めながら言う——畜生、シートベルトまで締められたら、後ろに誘導出来ないじゃないか。

僕は仕方なく斧乃木ちゃんを助手席に乗せ、車を走らせた。背後から聞こえる殺意に満ちた声から逃げるように。

「こ——ろ——す——」

「008」

斧乃木ちゃんを乗せた。それはつまり、識崎ちゃんとの二人きりの



状態が破られたことであり、僕が識崎ちゃんに逆らったということの証明でもあった。

いや、だからどうして、僕は識崎ちゃんに従うことを前提としているのだろうか——そうだ、僕から歩み寄ったのだから、向こうの歩み寄りを拒否するのは自分勝手が過ぎる。これはあの子なりの歩み寄り方、キャラなんだから、尊重してあげないと駄目なのだ——駄目なのか？ 駄目なのだろう。駄目だ。

「ふうん、確かに重症だね。鬼いちゃん」

「重症？」

「うん、重症」

「阿良々木暦、そこを左ですわ」

「ああ、分かった」

ぼくはハンドルを切る——向かっているのは識崎の家。僕の家窓を掃除する前に、まずはこの子を家まで送り届けなくてはならない。

斧乃木ちゃんが乗車することを、快く承諾してくれた識崎ちゃん——あれ、快くだっけ？ まあいいか——だけれど、それ以降、僕への指示以外の言葉を全く発しなくなった。やはり僕と二人きりが良かったのだろうか。

「鬼いちゃん、話聞いている？」

「ん？ ああ、聞いている聞いている——ってどうかそうだ？」

「斧乃木ちゃん。あの子と喋りたいから乗ってきたんじゃないか？」

確かそんなようなことを言っていた。僕の車に乗りたいたいからではなく、識崎ちゃんと喋りたいから乗る、と——。

「……そういうところは都合よく覚えてるんだね、鬼いちゃん」

「都合よく？」

「いや、覚えてるってどうか、思い出したって感じかな——」

よく分からないことを言いながら、斧乃木ちゃんは振り向いた。どうせ喋るなら、後部座席に乗れば良かったのに。そうすれば、喋りや

すかった筈だ。案外考えなしなところもあるんだな、斧乃木ちゃんにも。

「誰が考えなしだ脳なし。ちよつと黙ってる」

「阿良々木暦、そこを右ですわ」

「ああ、分かった」

僕はハンドルを切った。

「……識崎記って言ったね。初めまして。ピーすピーす」

「……………」

君それ初対面の人に対してもやるのか。

童女の姿だからこそまだギリギリ許されているのだろうけれど、もしも斧乃木ちゃんが童女ではなく中学生、いや、高校生くらいの姿を見だつたのなら、もうただの痛い子にしか見えない。

「早速だけど、お前のことを教えてほしい。鬼いちゃんの話だと、お前、悪魔に襲われてたらしいな」

おお。斧乃木ちゃんが何やら専門家らしいことをしようとしている。僕では何の情報も得られなかったが、果たして本業の斧乃木ちゃんなら、どうなのだろうか。

「……それをあなたに教えて、何か私に得がありますの?」

「やましい事が無いなら喋ってみろ。本当に襲われてたのなら、僕がそれを解決してやるよ」

斧乃木ちゃんが珍しくカッコいい事を言っている。

あ、でも——。

「斧乃木ちゃん。でも君、さっきの攻撃失敗してなかったか? 後ろからまだ声が……」

「空気読めよ馬鹿。本当邪魔だなお前。大人しく運転してるだけの装置に殉じろよ」

「いや、僕は運転に命を賭けることは出来ない」

「そういうこと言ってるじゃねえんだよ」

「阿良々木暦、そこを右ですわ」

「ああ、分かったよ」

僕はハンドルを切った——全く斧乃木ちゃんも酷いことを言う。

そんなに僕と話したくないのか。識崎ちゃんを少しは見習ってほしいもんだね。

「……識崎記。教えろ」

「先程の会話から察する限り、貴女に教えても何の得も無さそうなので、何も教えることはありませんわ」

「ちっ」

斧乃木ちゃんは舌打ちをする——この程度で舌打ちをするとは、専門家としてどうなのだろうと思うが。

「貴方にだよ、鬼いちちゃん」

「え？ 僕に？」

僕、何かしたか？ 全く身に覚えがないけれど……。

「それだけですの？ それだけでしたら降りて頂けませんか、斧乃木余接。私は阿良々木暦と二人きりになりたいんですの」

再び僕と二人きりになろうとする識崎ちゃん——いやだから、なんでそこまで執拗に僕と二人きりで居たいのだ。

「識崎ちゃん——」

「識崎記——」

「——なんでそんなに僕と二人きりになりたいんだ？」

「——なんで僕の名前を知って——」

「それは勿論、阿良々木暦、貴方は私の恩人ですもの。もつと親密な関係になりたいと思うのは、助けられた側からすれば当然の心理ではなくて？」

当然、なのか？ ……まあ当然なんだろう。当然だ。というか、僕だって羽川と親密になろうとしたじゃないか。あの地獄から僕を引つ張り上げてくれた恩人、羽川翼——そうだ、そう考えれば、確かに自然なことだろう。

「君の言う通りだよ、識崎ちゃん。僕の考えが足りなかったらしい」  
「それで良いのですわ阿良々木暦。もつと考えを無くして下さいまし。ほら、そこを左」

「ああ」

僕はハンドルを切った。

そうか、そうだよな——なら、僕は識崎ちゃんの意向に従おう。経験したことの無い感情なら兎も角、経験したことのある感情だ。気持ちにはよく分かる——僕と羽川の人徳を同列に語るのは、おこがましいにも程があるけれど。

「じゃあ、そういう訳だから斧乃木ちゃん。降り——」

「それ以上ほざくとその頭力チ割るぞ、阿良々木暦」

「え?」

斧乃木ちゃんを降ろそうと車を停止させた僕——左を見ると、斧乃木ちゃんの人差し指が、僕のこめかみをまつすぐ指していた。

「お、斧乃木ちゃん?」

「黙れって言ってるんだよ——理解力ないなあ。早くアクセル踏め、走らせろ」

「斧乃木ちゃん、どうし——」

「早くしろ」

「っ——!!」

斧乃木ちゃんは脅すように——というか脅しながら、僕のこめかみにぐりぐりと触った。仕方なく僕はアクセルを踏む。

車は走り出した。

「……脅すなんて、まあ酷い方。こんな方に個人情報を明け渡すなんて、私怖くてとても出来ませんわ」

「そ、そうだぞ斧乃木ちゃん——」

「黙ってる脳なし——いい加減その猫を脱いだらどう? もうバレバレなんだよ、お前」

バレバレ? 何がバレバレなんだ? というか、猫?

「お、斧乃木ちゃん。猫は羽川——」

「いいから黙れって言ってるんだよ無能! 車を走らせることだけに集中すればいいんだよお前は!!」

「っ!」

斧乃木ちゃんが、怒鳴った——っていうか、怒ってるのか?

感情のない筈の斧乃木ちゃんが、怒鳴るなんて。それは——怪異としてのアイデンティティに関わることなんじゃ——。

「識崎記。曲がり角はないの？」

「……次の曲がり角、右ですわ」

「あ、ああ」

僕はハンドルを切った。

運転中に余所見をするなんて以ての外だけれど、思わず斧乃木ちゃんを横目で見た。あの斧乃木ちゃんが怒鳴るとは——相当である。

ここは斧乃木ちゃんに従うしかない——ここまで斧乃木ちゃんがキヤラを崩すとは、尋常ではない。八九寺のようにおかしくなっているとも考えられるが、今は黙ろう。

「漸く分かってくれたみたいだね、鬼いちゃん——さて、識崎記。楽しいお喋りを続けようか」

「……私、別に楽しんでませんの」

「楽しんでるフリも出来ないの？ 怪しまれるよ？」

「……………」

一体何をどう怪しまれるのかは定かではないが、斧乃木ちゃんは言った。

「早く猫を脱ぎなよ——衣を脱ぎ捨てなよ。そうすれば楽になるよ」

衣を脱ぎ捨てるとは、何と破廉恥なことを言うのだろう、けしからん！

と思ったけれど、また黙れと言われそうなので黙る。

「正体を晒したらどうだろう？ 安心して、別に僕はそれについて怒らないし、殺したりもしないよ。折檻するかもしれないけれど」

比較的柔らかい物腰の癖に物騒なことを言う斧乃木ちゃん——折檻？ 識崎ちゃんが何をしたというのだろうか？ 口には出さず疑問に思う。

「……そこ、左ですわ。そのあと真っ直ぐ行って、突き当たり」

「ああ」

僕はハンドルを切った——真っ直ぐ行けと言われたが、目の前にあるのは先の見えない一本道。家屋の影すらも見えない——それほど長いということなのだろうか。

「識崎記。お前は何がしたいの？ 鬼いちゃんを幻惑して——誘導し

て、何がしたいんだ」

僕を誘導して？ ……ああ、僕を家に呼んで、ということか。いやいや、それについては分かりきっているじゃないか。この子は僕に恩返しをしたいのだと——。

「傀儡みたいに操ってさ——お前からは、蜘蛛の匂いがするのだけだ」

「……………」

蜘蛛？

……斧乃木ちゃんは何を言っているのだろうか。確かに僕は全面的に識崎ちゃんに従う姿勢を示していたけれど、何も傀儡とまで言わなくてもいいじゃないかと思う。

「ねえ、何か言いなよ。それとも何？ これ以上何か喋ってボロを出すのを怖がってるの？」

「……………」

だんまりを決め込むのか、識崎ちゃんは喋らない——斧乃木ちゃんは挑発するように、お構いなく喋り続ける。

「だとしたらもう恐れなくていい。ここまでで散々ボロを出してたもの。これ以上出すボロなんて無いでしょ」

ボロとは何なのだろうか——いや、ボロの意味を知りたい訳ではなく、識崎ちゃんがどんなボロを出したのか、という話だ。出すようなボロがあるのか——？

斧乃木ちゃんは、何を言っている？

「だから喋りなよ。黙ってたら分からぬ。黙っていれば逃げる事が出来ると思えば大間違いだぜ、識崎記」

「……………」

斧乃木ちゃんは尚も喋り続ける——それでも、僕のこめかみから人差し指を離そうとしない。

「お前の目的は、なんだ」

「……………」

車内に殺伐とした空気が充満していた。いくら喋るなど言われても、この空気の中運転するのは流石に耐えられない。僕は斧乃木ちゃ

んに言った。

「お、斧乃木ちゃん。喋っていいかい？」

「……いいだろう」

「窓、開けていい？」

「理由は」

「ほら、空気悪いから……ちよつとだけ換気したいんだけど」

「……許す」

許されたので、ぼくは車の窓を開けた。

開いた窓から冷たい空気が入ってくる——それと同時に、車の走る音がより大きく車内に入ってきた。

斧乃木ちゃんと識崎ちゃんは何も喋らない。何を思っているのか——僕にはまるで計り知れない。

……斧乃木ちゃんは、何を考えている？

……識崎ちゃんは、何を考えている？

……何も考えていないのは、僕だけか？

「……す……」

ん？

何か声が聞こえた——思わず僕は喋ってしまった。

「斧乃木ちゃん、何か言った？」

「何も言っていないよ——ねえ、そろそろ換気は済んだんじゃない？  
窓閉めてよ」

「あ、ああ」

僕はパワーウインドウスイッチを押そうとした——集中パワーウインドウスイッチだ。運転手のみが扱える特権的スイッチである。

「——ろ——す——」

「……？」

風に混じり、また声のようなものが聞こえた——何だろう？

僕はブレーキを踏んでしっかり車を停止させてから、窓から顔を出して後ろを見た。そして——『それ』を見た。

「鬼いちゃん？ 何勝手に車停めてるの？ 早く——」

「斧乃木ちゃん、識崎ちゃん、シートベルト付けろ!!」





魔に襲われている身としては、流石にもう慣れつつあるのだ。いやまあ、今回襲われているのは識崎ちゃんなのだが——斧乃木ちゃんは違うと言っていたか？ あれ？ まあいいか。

しかし慣れると言えども克服することはまた別問題、難題な訳で、トラウマとして脳裏に刻み込まれたこの悪魔を見れば、条件反射的に全力で逃げ出してしまうということは、決して矛盾したことはない筈だ。

「矛盾したことなくとも、チキンであることの証明にはなるよね」  
斧乃木ちゃんが言う。

別に否定する気もないし、僕がチキンであるという命題は、既にあの羽川が証明済み。故に、今更僕がチキンであるという情報が漏れようが何しようが、どうせ読者諸兄は把握済みだろうから気にしていない。

「……貴方が鶏であるということを羽川翼が証明したのは、貴方が地獄と呼ぶあの春休みの出来事ではなくて？ あれ、まだアニメ化されてないですわ」

「迂闊だった!!」

そうだった！ まだ傷物語はアニメ化されていないのだったーあああつ!!

墓穴を掘った!!

ふざけんな、ただの自白じゃねーか——くそう、映画公開が延期されていなければ、こんな恥をかかずに済んだのに！

「シャフトさんが悪いように仰るのはいけませんことよ、阿良々木暦。有難くも貴方の黒歴史をより鮮明に見せるために延期という汚名を被ってまでクオリティアップに励んでくださっているのに。貴方は寧ろ感謝すべきですわ」

「黒歴史を鮮明に見せられたって、僕はどこに感謝すればいいんだよ」  
そもそも人の黒歴史を大画面で見せるな。地上波で流されるのとどっちがいいかと問われれば、まあ微妙なところだけれど。

「それによかったじゃないですの。もう第1部の時期は決まりましたし」

……ん？

おっと、この流れは？

「映画『傷物語 I 鉄血篇』2016年1月8日、全国ロードショーですわ」

「また宣伝かよ!!」

忍といい扇ちゃんといい、お前らは何に媚びてるんだ！

「全国共通特別前売券とムービーチケットは税込1300円。特典はオリジナルクリアファイルですわ」

「やめろ！ 宣伝するな！ 僕の黒歴史を拡散するなあ！」

「2015年10月9日より販売開始されておりますので、まだ購入されていない方は是非ご購入あれ。阿良々木暦が羽川翼のスカートの中身を詳細に描写するというお色気表現もありますわよ」

「それネタバレしちゃうともう殆どネタバレしたのと同義じゃないか!?!」

それが黒歴史だって言ってるんだよ！

「何を仰るやら。貴方よりも羽川翼の方がこの件に関しては黒歴史でしように」

ぐうの音も出ない。

そうか、改めて考えると、羽川のあるシーンやこんなシーンも劇場の大画面で晒されることになるのか。

地獄じゃねえか。

「……急によく喋るようになったなあお前」

斧乃木ちゃんが口を挟む。そう言われてみればそうである。

「いえ、別に。黙っていても確かにどうしようもないな、と思いましたもので。貴女が仰ったことでしょうか？ 斧乃木余接」

ああ、そういうことか。確かに斧乃木ちゃんはそんなようなことを言っていた。言われたことをちゃんと実践しようとしているとは、なんと素直な子なのだろうか。反抗期真っ最中であろう年齢の子にしては素直である。関心関心。

「お前も急に喋るようになったな脳なし。僕は一言も喋っていないなんて許可は出してないぞ」

「え？ 人差し指外したから、そういう意味なんじゃなかったの？」  
「無駄なところで深読みするな。もつと適切なところで深読みしろ」  
適切なところ？ どこだ？

「……もういいよ。どうせお前に何言ったって無駄ってことはよく分かったさ——黙っててよ鬼いちやん。僕は饒舌になつた識崎ちゃんと話したい」

「あら、私が話したいのは阿良々木暦ですよ？ 貴女と話したいなどとは一言も二言も三言も四言も五言も六言も七言も八言も九言も言つた覚えはありませんの」

九言というか、苦言は呈したいですけども——識崎ちゃんは言つた。

「……お前、いい加減何がしたいのか教えてくれる？ そろそろ僕の堪忍袋の尾が切れる」

「堪忍袋とは果たしてどの部位なのでしょう？ 無学な私に教えてくださいまし」

「話を逸らすな。そんな部位無えよ。急に喋りだしてどうしたんだ」  
「話など逸らした覚えはございませんの」

「会話してよ。そこじゃねえだろ反応するの。お前の意図を僕は聞いているんだ」

「……それよりいいのですか？ 阿良々木暦」  
「え？」

突如斧乃木ちゃんとの会話——会話になつてたか？ なつてたのだらう。なつてた——を切り上げ、僕に呼びかける識崎ちゃん。

「何がだい？」  
「窓の外を確認してみても如何？」

「窓の外——」

運転中に脇見をするとはなんたる事か、とは思うけれど、ぼくは識崎ちゃんの言うがままに右を向いた。

斧乃木ちゃんは僕を傀儡と表現したけれど、ならば僕は傀儡であることに感謝した——もしもここで識崎ちゃんに促されなければ、僕の頭は、場合によっては吹き飛んでいたかもしれないのだから。



「え？ 斧乃木ちゃんって影縫さんと呼べるの？」

もしそうだとすれば斧乃木ちゃんへの態度を改めなければならぬ。媚を売らなければ。斧乃木ちゃんの怒りを買って影縫さんと呼ばれたが最後、僕はミンチより酷いことになるだろう。モザイク処理をされてしまう。

いや、僕のこととは兎も角、もしも影縫さんが来たら、僕の妹が——。「すぐに媚びを売るなんて発想が信じられないね全く。主人公にあるまじき態度だ——まあ安心してよ。僕からお姉ちゃんに連絡することは出来ない。逆は出来るかもしれないけれど」

「そうか……」

ほっとした。胸をなで下ろす。

「ふん、影縫余弦なら今北極に居るのでしよう？ だとすれば、あの方ならどうせ呼んだところで来ませんわよ」

「お前もう隠す気無えな」

隠す気？ 斧乃木ちゃんは何を言っているんだ？

……まあ流石に、ちよつと違和感はあるような気がしてきたけれども。

「これでもまだちよつととか、お前本当頭の中お花畑だな。本当に頭カチ割って中身を見てみたいよ」

「やめろ、死ぬ」

か、どうかは正直分からないけれど……いや流石に死ぬだろう。

死ぬよね？

「まあ貴方が死んだところで、キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードが復活するのだから、身体が残っていれば生き返ることくらい造作も無いでしょうよ」

「まあ……」

手首から蘇らせるくらいだもんな、あいつ。身体まるまる残ってれば、そりゃあ手首より容易く蘇らせることが出来るだろう。

「鬼いちゃん、惚けてるの？ それともガチ？」

「何を言うんだ斧乃木ちゃん。ぼくはいつだってガチだぜ。喋るときもボケるときも君のスカートをめくるときも」

「本当に捲ってんじやねえよ。運転に集中しろ」

「いや、命懸けの体験をしたおかげで運転に慣れてきた。今なら片手運転だって楽勝だぜ」

「お前がやってるのは片手間運転だ。ナチュラルに童女のスカートを捲るとか、本当に頭おかしいんじゃないのかな」

「おいおい斧乃木ちゃん。僕の頭がおかしくなかった時なんて一時もないぜ」

「自慢するな」

自慢できることではない。そりやあね。

誤解の無いように注釈を入れておくが、僕はちゃんと前を向いて運転している。あくまでも斧乃木ちゃんのスカートを捲っているだけで、中身はまだ見ていない。安心して欲しい。

「僕が安心できないんだよ。こんなことならあの悪魔にぶつ殺してもらっておけば良かった」

「おいおい酷いことを言うなあ。僕ら、親友だろ？」

「お前と親友になった覚えはない。どこまでいっても友達止まりだよ僕らは」

つーか親友だったらなんでも許してもらえと思うなよ。

斧乃木ちゃんは言った。

「でもさ斧乃木ちゃん。親友である八九寺は、僕の過激なスキンシップにも笑って応えてくれるんだぜ」

「過激って分かっているならやめなよ。あんまりやりすぎると鬼いちゃん、祟られるよ」

「八九寺に祟られる……ふっ、悪くない」

「まず手始めに家中の窓に蛞蝓やら蝸牛が粘液を塗りたくるだろうね」

「最悪すぎる……!」

殺される! 実の妹に殺される!

「そして飛ばされた鬼いちゃんの死体を一瞥しながら僕は言うんだ。ざまあみろって」

「助けるよ!!」

「八九寺姉さんはそれを見てこう言うんだ。失礼、這いましたって」  
「八九寺も粘液を塗るのか!？」

うーむ、それなら悪くないように思えてきたぞ。八九寺の粘液……いやこれ以上は駄目だ。R-18タグを付けなければならなくなる。あくまでもこれは健全な小説なのだ。エロティシズムは一切ございません。

「じゃあ僕のスカートから手を放せよ。中身が丸見えのこの状況、どこにエロティシズムが無いつていうのさ」

「私はエロティシズムという言い方よりお色気という言いの方が好みですわ。無駄に横文字を使う傾向には反対ですの」

「黙ってる金髪。マジでさつきからどうしたお前、急に会話に参加しやがって」

確かに、そこは少し気になる。さつきまで黙っていた識崎ちゃんだが、あの悪魔が再来して以来、急に喋りだした。どんな心境の変化が？

「別に。私、斧乃木余接とも親交を深めたいと思い始めただけのことですわ」

「今更取り繕っても、だから、遅いんだって。まあもう聞かないけどさ。どうせ聞いても答えないだろうし」

取り繕う？ 何を取り繕うというのだろうか？ 斧乃木ちゃんもよく分からない……そろそろ僕がおかしいのではないのかと思いはじめたぞ。

「それで合ってるよ鬼いちやん。お前がおかしいんだよ」

「僕がおかしい……?」

どこがだろう？ 別に僕は何も間違ったことはやっていないだろうと思う。僕のキャラ的に考えても、常識的に考えてもだ。

「お前のキャラなんて微塵も興味ないけれど、常識的に考えておかしな状況をあなたの左手が作っているということにまだ気付かないのかな。早く放せよ」

「あ、悪い」

僕はスカートから手を離した。そういえばまだ掴んでいたな。

すっかり忘れてたぜ。

「もう僕の権限でお前を編集してやろうか。僕は編集長だぞ」

「あ、そういえばそうだった」

だとすれば今のはマズかったか——これでは僕の出番が本格的に削られる。いや、オフシーズンに出禁になった時点で相当削られているようなものだが——。

「正直お前、今回の件で大分ファン減ったと思うよ」

「知らん。これが阿良々木暦だ。僕は自分を偽らずに生きていたいね」

「格好良さげなこと言ってれば許してもらえと思うなチキン野郎。鳥並みの脳みそしか持ってねえ癖に」

「君の罵倒は本当にストレートだな……」

ひたぎみたいにカーブしないだけまだマシだけれども——カーブする罵倒ってなんだよ。

「私はチキンという言い方よりも鶏と言った方が好みですわ」

「お前はなんでそんなに横文字が嫌いなんだよ。金髪の癖に」

「日本文化を重んじているのです。何かおかしいことでも？ 碧髪童女」

日本文化を重んじているのか。ならおかしいところは何もないな。ないのか？ ないんだろう。ないったらない。

「ないったらないじゃねえよ……なんで僕がツツコミ役をやっているのさ。本来僕はボケキャラなんだけど」

「そりゃあ貴女。分かっていてるでしょう？」

「何がだよ」

「——キヤラ外れ」

「っ!!!」

斧乃木ちゃんは動揺したように目を見開いた——だろうと僕は想像した。いや、実際に彼女がどんな表情をしていたかなんて計り知れない。表情を、感情を表に出さない斧乃木ちゃんの反応など、とても想像できる訳がない。

じゃあ何故そう思ったのかというと——僕が、そんな表情をしてい



たからだろう。

——キャラ外れ。

ルール破り。

怪異の——ルール違反。

それが何を意味するのか分かってきた筈なのに——痛い程、痛感していた筈なのに。

目の前に生じたのは——闇。

突然そこにあつて、最初からそこにあつたような——何も無い『くらやみ』。

怪異を——世界を呑み込む、虚無の黒。

黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒黒。

「っ——!!」

「っ!!」

僕は絶句した——よりもよつてこの状況で『くらやみ』が生じるなんて——!!

僕は慌ててブレーキを踏む——だが、悪魔からの逃走し、さらにその後調子に乗って上げたスピードが仇となった。

法律違反。

違反を犯した者を罰する——意外でありながら、どこまでも状況にぴったりであった。

「そのまま二人仲良く、消えてくださいまし」

二人仲良く——消えろだと？

識崎ちゃん、君は、一体——!?

「鬼いちゃん!」

「な、なんだ!」

「僕、鬼いちゃんの筋肉が見たいな!」

「この状況で欲望に走るな!!」

!!  
今僕らは着実に闇に向かって走って走ってんだよ!! 危機感持ってくれ

僕は思わず目を瞑りかけた——こんな終わりなんて。こんなことなら、もっと主人公らしくしておけば良かった。あと、斧乃木ちゃん

のスカートの中身を見ておけば良かった——!!

念じるしか僕に出来ることはなかった。念じたところで、祈ったところでどうこうなるような相手ではないことは重々承知なのに——。

車は減速するものの、闇は迫る——もう、駄目だ——!!

さようなら、千石、神原、火憐ちゃん、月火ちゃん、扇ちゃん、羽川、ひたぎ、忍——。

「010」

「——あれ?」

思わず間拔けな声が出た。どれだけ走っても、意識がちやんとあ  
る。

いや、暗闇に呑まれたあと、もしかしたらちやんと意識はあつて、呑  
まれた側は気付かないのかも——などと思つたが、それは無いなとす  
ぐに考えを改めた。

あれ?

僕はまたまた愕然としてしまった——目の前にあつた広大な闇は、  
何故か一瞬のうちに無くなつているではないか。いや、世界を切り取  
り、無くしたように見える『くらやみ』なのだから、世界が元通りに  
修正されたというか——。

まさか、僕の祈りが通じたのか?

あれ、そんな話の通じるやつだったのか?

「そんな訳無いだろう」

助手席から斧乃木ちゃんが言う——思わず見てしまったが、その顔  
はいつも通り平然としている。霧氷のように冷めた無表情。

だが、そんな訳無いなら、どういう訳なんだ?

『あれ』は僕がキャラから外れてしまったから生じた——なら、ポケ  
キャラとしての本分を果たせば、『あれ』は消える」

「——!!」

そ、そうか——そうだった。

『あれ』はそういうものだった——ルール違反を許さないとは言え  
ど、再びルールを守れば見逃してくれるものなのだった。

「そういう点では随分と優しいね——なんて、正直全く思えないけどね」

斧乃木ちゃんの言う通りだ。僕も『あれ』を、認めたくはない。いや、視覚的には認めたくても認められないのだけれど——『あれ』はどこまでいつても、ただの『くらやみ』でしかないのだから。

忍を罰し、八九寺を追い詰め、扇ちゃんを罰しようとした『くらやみ』——幾ら世界のルールだなんだと言われたところで、僕は納得いってない。

全く。

とまあ、『くらやみ』を見事乗り越えた僕らだが、その後僕はアクセルを踏むことはなかった。

別にこの車のアクセルだけ『くらやみ』が呑み込んだとかそういう訳ではなく、純粋に、目的地に到着したからである。

『くらやみ』の所為で見えなかったのか——『くらやみ』が晴れた僕の目に映ったのは、巨大な屋敷であった。

いや、屋敷、というか——『元』屋敷というか。

「し、識崎ちゃん——もしかして、これ？」

「……これですわ」

いやはや全く驚いた——今日は驚きっぱなしである。平常心の阿良々木暦はどこへ行ったのか。

目の前にあったのは、ボロボロに朽ちた屋敷——識崎ちゃんには悪いけれど、言ってしまうえば、それはもう廃墟と呼ぶべきものであった。

「……君、本当にここで住んでるの？」

「本当にここに住んでいますの。悪いでしょうか？」

「いや、別に悪くはないけど——」

僕はエンジンを止め、車から降りた。

むう……どこからどう見ても廃墟である。老倉の家よりは大きい——屋敷という表現はあながち間違っていないさそうだ。

「これがお前の家？　ボロいね。ボロっちないね。今にも崩れそうだよ。ウケる——」

車から降りるなり斧乃木ちゃんは開口一番にこの屋敷を貶した。

いや、ボロいのは認めるけれど……ウケるって。エピソードじゃねえんだから。

「斧乃木ちゃん、少しは気遣いってもんを……」

「気遣い？ おかしなことを言うね。こいつは僕らを嵌めて消そうとした奴だよ？ どうしてそんな奴に気遣いなんて要るのさ」

「……………」

車のドアを開け、降りてきた識崎ちゃんを、僕は見る。

——そのまま二人仲良く、消えてくださいまし。

流石に今回ばかりは言い訳のしようがなかった——自分に言い訳のしようがなかった。

偽りなく生きていたとは言ったものの、結局僕は自分を偽った——僕は識崎ちゃんを疑いたくなかったのだ。この一連の黒幕が、彼女であるかもしれないということを——。

その所為で、八九寺や斧乃木ちゃんに多大な、取り返しの付かない程の迷惑を掛けてしまったが——しかし、事ここに至っては、最早どうしようもなかった。

識崎ちゃんは、僕らを睨んだ。

猫を脱ぎ捨てたように——衣を脱ぎ捨てたように。

本来の姿を、晒し出した。

「…………予想外でしたわね」

識崎ちゃんと言う。

「まさかトラップを全部回避されるなんて——レイニー・デヴィルも、

『くらやみ』も」

「識崎ちゃん、君は一体何者なんだ？」

僕は識崎ちゃんに聞いた。

先程まで斧乃木ちゃんが必死に尋ねていた質問だ——とうとう僕がする時が来た。

「…………いいでしょう」

識崎ちゃんは僕らの横をすり抜け、屋敷の扉に手を掛けた。

ガタン、と音を立てて、扉が開いた。

「…………お入りなさい。阿良々木暦、斧乃木余接——ここまで来れたご

褒美ですわ。ミルクティーの一杯や二杯や三杯や四杯や五杯や六杯や七杯や八杯や——九杯くらい、淹れて差し上げるわ」

識崎ちゃんは屋敷の中に広がる闇の中に消えた。

後に残されたのは、僕ら。斧乃木ちゃんと、僕——。

「……どうする？ 鬼いちゃん」

「どうする、って」

「今なら逃げられるよ」

斧乃木ちゃんは僕の車を指差した。奇跡的なことにどこも傷付いていない、新品同然のニュービートル。

「僕はまあ、あいつを敵と認識したから入るけど——鬼いちゃん。貴方はここまで確かに深く関わってしまったけれど、まだ引き返すことができる」

斧乃木ちゃんは言う。僕を諭すように。

「戻るか、それとも愚かにも進むのか——決めるのは、鬼いちゃんだ」  
賢明な判断をするのか。

それとも、愚かな判断をするのか。

……僕にとってその二択は選択肢でさえなかった——考えるまでもない。始めから決まりきっている。

僕という愚かな男が選ぶ選択肢なんて。

愚かな選択なんて。

「……行こう。斧乃木ちゃん」

僕は足を踏み出した。

ここまで散々主人公らしからぬ、無様な姿を晒したのだ——ならばここからは、格好良い姿を読者諸兄にお見せしなければなるまい。

人気なんて、どうでもいい。

ただ僕は、一人死地へと向かおうとする童女を、放っておけないだけの愚か者だというだけの話だ。

「……まさにキメ顔でそう言った——って感じだね、鬼いちゃん」

斧乃木ちゃんはそういうと、足を踏み出した。

キメ顔なんてそんな痛い真似、僕には出来ない。

生半可に痛い行動をするくらいなら、全力で痛々し過ぎる行動を僕

はとる。

斧乃木ちゃんを守る——そういう意味を込めて僕は斧乃木ちゃんの手を握ろうとしたが、いつもの癖でスカートの端を掴んでしまった。

「……………」

「……………」

格好つかないこと甚だしかった。

## 第貳話 しるしメイク 其ノ參

「011」

識崎家——家……と呼ぶのは多少抵抗があると言わざるを得ない。家と呼べないような家を訪れたことは何度かあるけれど、しかしこの屋敷もまたその系統の一つだろう。

この屋敷を見た第一印象は『廢墟』だったが、その内部もまた、外見に違わない荒れようであった。

木造の柱の殆どは折れ、彼方此方に硝子の破片のようなものが散乱し、石造りの床には深い罅がいくつも刻まれている。こういうものは比較するようなものではないのだろうけれど、しかし読者にわかりやすく提示するため敢えて比較するならば、老倉家とは比べものにならない程の荒廃具合であった。

「ねえ鬼いちちゃん。もしかして僕たち騙されてるんじゃないかな？ どう見ても家じゃないでしょこれ」

斧乃木ちゃんは足下に積み上げられた硝子の山を蹴飛ばしながら言った。

「……そうは言うけど斧乃木ちゃん。識崎ちゃんが家って言い張っているなら、家として扱うしかないだろ——それに、ここが家じゃないとしたらどこなんだ？」

「そんなの知らないよ。それこそ本当に廢墟なんじゃないの？ ……まともに住める環境じゃないと思うんだけど」

「まあ……」

確かに、お世辞にも生活出来るとは呼べないような屋敷である——老倉の家も中々の荒れ具合だったけれど、しかしある程度生活しようと思えば出来るレベルだった。それに、家庭内暴力を受けていたとは言え、一応親は居たので生活出来ていた、という側面もあるのだろう。

……あいつはそれを認めないだろうし、認めたくたいだろう。それは心理として理解出来るし、それについて僕はあることを責めることが出来ない。誰も出来ない。

対し、この家に住んでいるのは——。

「そういえばあの子、家族とかがっているのかな？」

「どうだろうね……この荒れようだと、同居はしてなさそうだけど」  
「だよな……」

——識崎記、ただ一人。

あいつは、何故ここに——。

「鬼いちゃん、止まって」

「え？」

斧乃木ちゃんが右腕を僕の前に翳し、停止を促す。僕はそれに従った。ここまでの道中、斧乃木ちゃんに迷惑を掛けっぱなしだったのだ。せめてここから先は斧乃木ちゃんの邪魔にならないようにしなければ。

「そう思うなら、付いて来てくれない方が、個人的には助かったのだけれどね」

「……………」

まあ、斧乃木ちゃんの言う通りである——前章で斧乃木ちゃんを守るなんて大見得を切ったけれど、僕の出来ることなんてたかが知れている。

僕は——結局、知りたいだけなのだ。

識崎ちゃんが、何者か——。

「隠れてないで出てこい。そこに居るのは分かってるぞ」

突然斧乃木ちゃんは立ち止まり、右手の人差し指を前方に向けて告げた。

前方にあるのは、代わり映えない廃墟の如き景色。人の気配も何も感じないが……。

「……………んっふっふっふ」

「っ!!」

突如、君の悪い笑い声が聞こえた——と思うと、天井から一人の女性が天井から舞い降りてきた。

30代くらいだろうか？ 着物を着た女だった。着物は薄桃色の地に花の模様が描かれたもので、濡羽色の前髪はおかっぱ。初期のひたぎを思い浮かべて頂ければ概ねその通りだ。しかし、ひたぎと違



うのは、その腰あたりまで伸ばした髪さえも切り揃えられているという点だ。着物をはためかせながら舞い降りるその姿は、舞い散る埃も相まって、どこか神々しくさえ見えた。

女は床に舞い降りた——と同時に、その周囲に散らばっていた瓦礫や硝子が吹き飛んだ——否、吹き飛んできた。

僕らへ向かって——！

「なっ——」

「ちっ」

斧乃木ちゃんは舌打ちすると近くにあつた大きな瓦礫を掴み、僕らの前に放り投げた。硝子や瓦礫がぶつかる音になる。

「アンリミテッド・ルールブック 例外の方が多い規則」

斧乃木ちゃんは必殺技を放った——瓦礫の壁は弾幕を防御するとともに、斧乃木ちゃんを隠すためでもあつたのだ。

肥大化した斧乃木ちゃんの人差し指が瓦礫の壁ごと前方を粉碎した。その衝撃で屋敷がさらに崩れ、柱も何本か折れた。埃と塵が舞う。

しかし改めて見るとなんつー威力だ——しかもこれよりまだ先があるんだろ？ 底知れねえな、斧乃木ちゃん。

人差し指は元の大きさに戻り、破壊された場所からは煙が立ち上る。黒い煙に邪魔され、女の安否は知れない。

「いや、知れる——失敗だ」

「え？」

失敗だつて？

「は、外したのか？」

「いや、外したわけではない——ヒットした感触はあつただけど、何て表現すればいいのかな、違和感を感じただよ」

「違和感？」

「そう——こう、あるんだよ。成功と失敗の違いみたいなものが」

どうやらその違和感は本人しか感じるものの出来ないもののものであつた。その辺りの事情はよく知らないが——当の斧乃木ちゃんが失敗と言うなら、失敗なのだろう。

「斧乃木ちゃん。あれはなんだ」

「そんなこと僕に聞かれても知らないよ。僕はただ怪異をぶつ殺すだけ——興味ないね」

知識はあっても興味はないのか。

まあ、分からないこともないが——例えば少々幼稚だけれど、学校の勉強だって、そんなものだから。

僕が興味を持ち、自分から進んで取り組んだのなんて数学くらいのものだ——だから、成績が伸び悩んでいたわけだが。

「んっふっふっふ」

「っ!!」

「……………」

煙が晴れた——そしてその姿は変わらずそこにあつた。

着物姿の女——気味の悪い声で笑いながら、僕達を見た。

斧乃木ちゃんは再び人差し指を構える。

「お前は誰だ」

そして、尋ねた。

「…………ふっふ——わちきは、誰だろうねえ?」

女は両手を広げた——思わず僕は身構えた。また何かを飛ばしてくるのかと思つたからだ。しかしそれは杞憂で、吹き飛ばしたのは埃や塵、煙だった。

わちき……江戸時代の遊女が使っていた一人称——だったか?

「わちき自身でもよく分からない——まあ、わちきのことなんてどうでもいい」

「どうでもいい?」

「そうさ。んっふっふ……まあ、わちきについて聞きたいならご主人から聞きな。わちきがあんた達に話すことなんて何もないね」

女は僕たちに背を向けると、そのまま少し歩き——立ち止まった。

「どうした? 付いて来なよ——ご主人からあんたらを案内するよう  
に言いつけられてねえ。全く人使いの荒いご主人だ——どうでもいいけどね」

「……………」

「……………」

僕たちは動かないという意見で一致した——と聞いたかったが、斧乃木ちゃんは女を追って歩き出した。

「お、おい斧乃木ちゃん」

「これが毘だと思う?」

「そ、そりゃあ——」

この道中、いくつもの毘を仕掛けてきた識崎ちゃんだ——屋敷内に毘を仕掛けていない訳がない。それに、こいつは現れるなり僕らを攻撃した。そんな奴を信じるなんて、無理な話である。

「まあ、そうだね——けれど、ここで立ち止まっても一緒だよ。毘だろうと何だろうと、案内してくれるっていうんだから、ここは信じよう——大丈夫、毘だったら全部纏めてぶっ飛ばせばいい」

「……………」

まあ。

僕に拒否権はないのだが——専門家の意見だ、従うしかあるまい。半端な僕の知識より、よっぽど信頼できる。

「そんな全面的に信頼されてもね——確かに僕はプロフェッショナルではあるけれど、あくまで専門家の式神だ。言わば偽物の専門家——本物の専門家に比べれば、間違いも多いよ」

「それでもだよ」

それでも——そうだとしても。

斧乃木ちゃんだから。

「友達を信じるのは、友達として当然の役目だからな」

「…………まあ、好きにしなよ」

斧乃木ちゃんは僕に背を向け歩き出す——置いて行かれないように僕も歩き出した。

僕達を案内するというその言葉は、どうも嘘ではないらしい——先頭に立ち、僕たちが歩きやすいように周囲の物体を左右に飛ばしながら、女は進む。

「…………なんか蛞蝓が通った跡みたいだね。これ」

「どうしてそこで蛞蝓を選んだ」

「ほら、鬼いちやんにこの後控えてるお仕事の事を思い出させてあげたかったから」

「余計な御世話だ」

忘れてたかったよ。変なところで真面目さを発揮するな。悪意の塊か君は。

「悪意の塊だって？ 聞き捨てならないね。僕がいつ貴方に悪意を発した」

「僕の忘れっぽさも大概だが斧乃木ちゃん、君も大概だな」

寧ろ君が僕に悪意を向けなかった時があつたのかと問いたい——いやまあ流石にそれは言い過ぎだけれど。

しかし純粋な善意を僕に向けたことはあるまい——この童女、腹の底で何を考えてるのかまるで読めん。今この時だって——。

「……ハーゲンダッツ食べたいな」

「考えてることダダ漏れじゃねえか！」

このシリアスな状況で何考えてんだ！

そんな好きなのかよ、ハーゲンダッツ！

「いや、ハーゲンダッツが特別好きって訳じゃないよ。僕は甘いもの全般が好きだ」

「じゃあなんでハーゲンダッツ狙い撃ちだったんだよ」

「特別好きではないけれど、他のと比べたら贈り物として及第点かな、っていうだけ」

「貢がれること前提かよ！」

君はいつそんなに偉くなったんだよ。偉いっていうか偉そぶってるだけだろ、君。

「偉そぶってるだけでも貢いでくれる奴がいるから増長するんだよ。つまりお前の所為だ」

「責任転嫁するな」

これからアイスの差し入れ減らすぞ。

忍の食べ掛けドーナツにしてやろうか。

「ちよつと、止めてよ。そんなこと冗談でも言わないでよ、気持ち悪い。あいつの食べ掛けドーナツとか……うっ、吐き気してきた」

「死体でも吐き気するのかよ」

「吐き気するよ——ごめん、マジで気持ち悪い。向こう向いてて、吐くから」

「そんなに嫌か!？」

「嫌に決まってるだろ」

ここからは、斧乃木ちゃんの人権（怪異権）に配慮して一部カットでお送りしよう。いやまあ一応さらつと書いておくけれど、マジ吐きしやがった。お食事の方ごめんなさい。

あれから恐らく眠っているとはいえ、この場には当の忍も居るというのに、容赦なさすぎる斧乃木ちゃんである——別に食べ掛けくらいなら問題ないだろうに。僕なら食べるぞ——幼女の食べ掛けドーナツを食べる事が出来るなんて、夢のようじゃないか。

「……お前、折角上がりかけた株を自分から下げるとか何考えてるの」「お、復活したか」

斧乃木ちゃんがよろよろと帰ってきた——流石に僕の眼前では嫌だったのか、遠く離れた場所までしてきたらしい。その間に進む訳にもいかず、僕はその場に立ち尽くしていた。着物の女も待っていてくれた。

「……さあ、行こう。早くあいつぶつ殺さない」と

「ぶつ殺すという物騒な単語は今はスルーするとして、斧乃木ちゃん、大丈夫か?」

「正直大丈夫じゃない……まだ微妙に気持ち悪さが残ってるよ」

「マジか」

「お前の所為だぞ、お前が気持ち悪いこと言うから——全く」

「わ、悪い」

斧乃木ちゃんは、それでもよろめきながらも、歩き出した。女はそれを一瞥すると、再び歩き出した。それを受け、僕も歩き出す。

その後は会話らしい会話はなかった。余程気持ち悪かったのだから、斧乃木ちゃんはふらふらとし続けている。そんなに気持ち悪かったのか……。

歩き続けてどれくらい経ったのだろうか。少なくとも5分や10

分ではなかつただろう。外側からは屋敷の全貌は掴めなかつたが、どうやら相当広い屋敷らしい。アニメ終物語における老倉家よりも大きい。

女は立ち止った。僕達も同じく立ち止った。

目の前にあつたのは巨大な扉だつた。ここまで道中には不釣り合いな、両開きの扉。ここまでが日本の城のようであるとするならば、この扉はまるで西洋の城にありそうなものだ。

「それじゃ、開けるぞ——んっふふふ、この先の光景を見て、目を潰さないようにしな」

相変わらず薄気味悪い笑いを零しながら、女は扉を開けた——目を潰さないように？ どういうことだ——またぞろトラップだろうか？ 扉を開けると同時に、大量の槍やら何やらが飛び出してくるとか——。

ここまでの経験から、こんな思考に至るのは当然のことである。僕と斧乃木ちゃんは身構えた。どんなトラップが来るのか——。

「っ!？」

「わお」

——結論として、僕たちの身構えは一切の意味を為さなかつたと言わざるを得ない。それは身構える意味がなかつたという意味でも、身構えてもどうしようもなかつたという意味でも。

両方において完敗であつた——凄まじいトラップだ。

扉の先に広がっていたのは、黄金の世界だつた。誇張表現ではない。本当に金ぴかだつたのだ。

あらゆるものが金色の輝きを放っている——テーブルも、壁も、床も、天井も、全てが金色。荘厳とはまさにこの部屋のためにあるのではないかとさえ思ったほどだ。

「ようこそいらつしやいました。阿良々木暦、斧乃木余接——」

目の眩むような黄金世界の中心に、一人少女が立っていた。スカートの両端を摘み上げ、片膝を軽く折って礼の姿勢。

意表を突かれた僕たちは、まさに先手を打たれた形だつた。こんなことで、この子に勝てるのだろうか？

「お待ちしておりましたわ」

そう言つて上げた顔は、歓迎の言葉とは裏腹に、拒絶を満面に漲らせていた。

扉が音を立て、閉じた。

「012」

「ここが私の家ですの」

識崎ちゃんは黄金のカップにミルクティーをなみなみと注ぎながら言った。なみなみというのは誇張表現でもなんでもなく、本当にカップスレスレまでミルクティーを注いでいた。横から見ると表面張力で水面が浮いている。

なんでこんな飲みにくいことを……僕たちに飲ませる気がそもそもないのか、と思つたけれど、自分の分にも同じ量を注いでいるのを見て、その考えを捨てた。

「……君、いつもそんな量で飲んでるの？ わざわざ一回でそんなに淹れなくても……」

「ふん、それを知つて貴方に得がありますの？ 教えて私に得がありますの？」

「いや無いけどさ、純粋な雑談としてだな」

「貴方は雑談をしにここへ来たのではないでしょう？」

そう言うのと識崎ちゃんはカップの端に唇を付け、中身を少し吸つた。まるで量が減っていない。

「ねえ、斧乃木余接？」

今度は斧乃木ちゃんの方を向いて、言う。

「散々ここまでしつこく質問してくれたですものね——まさかここに来て聞く気はない、なんて言うつもりはないでしょう？」

「……いやに素直じゃないか。車の中での陰気なお前はどうかした」

「今でも私は陰気ですわよ——だからご褒美ですわ。私のトラップを乗り切つた、ご褒美」

識崎ちゃんはそう言うのと、軽く手を二回叩いた。すると、どこからともなく、あの着物の女が現れた。

「椅子を出してくださいまし」

「んふふ」

何が楽しいのか、女は笑うと地面に転がる大量の金銀財宝（これも誇張表現ではない。本当にそこらじゅうに黄金の品々が転がっているのだ）の中から、同じく黄金の椅子を三脚取り出した。

女は僕たちの隣にそれぞれ椅子を配置した。配置し終わると、再び女は黄金の光の中へと消えた。

「どうぞ、お掛けになって」

「……………」

「……………」

僕たちは座らなかつた。またぞろトラップのようなものが仕掛けられていることを想定してだ。

「……………」

識崎ちゃんは舌打ちしながら椅子に座った——なんで舌打ち？

やはりトラップか何かが仕掛けられていたのだろうか。

「急に勘が鋭くなりましたわね、阿良々木暦——まあいいですわ。座りたくなければ座らなければいいし、好きになさいまし」

椅子に腰かけた識崎ちゃんはそう言うのと、再びミルクティーを啜つた。いや、中身全然無くなつてねえじゃねえか。だからか？ あんな風に少しずつしか飲まないから、いっぺんにあんなに淹れているのか？

「……………識崎ちゃん。あの女の人は誰だい」

僕は識崎ちゃんに聞いた。

自分のことはご主人に聞け——あの女はそう言つて取り合わなかつた。このまま女呼ばわりし続けるというのも、なんだか味気ない。

「貴方が気にするような事ではない——と言いたいところですけど……………まあ、いいでしょう」

識崎ちゃんはテーブルの上に置かれていたマカロンを食べた——

え？ 一つの間おうみしずめに置かれていたんだ？

「——淡海静おうみしずめ。私の従者ですわ」



淡海静。

それがあの女の名前か——淡海と言うと、湖のことか。湖——と言うと、何か因縁めいたものを感じるけれど。

嘗てこの地には広大な湖があったという。そこが北白蛇神社、嘗ての社だったとか——まあ、名前が何かキーになるようなことはないような気がするけれど。

「いや、目の付け所は良いかもね、鬼いちゃん」

「え？」

マカロンを齧りながら斧乃木ちゃんは言う——いや、何食ってんだ君。

「あいつは怪異だよ。それは鬼いちゃんから見てもすぐに分かったでしょ？」

「……ああ」

天井から舞い降りたり、大量の破片を飛ばすなど、人間業ではない。どこまでも怪しく、どうしようもなく異質な、怪異の為せる技だ。

「怪異っていうのは名前が重要なのだ。それは鬼いちゃんも重々承知のはずだよ」

「ああ」

名前で縛る。

忍や扇ちゃんが、まさにそれだ——忍野の名で雁字搦めに、縛られている。

「縛られているっていう観点から見れば、『静』が重要だろうね。静——つまり静めるってことでさ」

静める。

怪異を名前で縛り、静める——鎮める。

「まあ、それ以外にも意図はありそうだけれど——この辺の考察は後回しだね」

そう言うのと斧乃木ちゃんはマカロンを指で弾いた。弾かれたマカロンは識崎ちゃんのカップの中に見事カップイン。ミルクティーの液面が跳ね、テーブルに雫が溢れた。

……いやおい。何やってんだ。

「あ、ごめん」

「……………」

識崎ちゃんはカップを一瞬ちらりと見ると、斧乃木ちゃんを睨んだ——僕らを出迎えた時以上の壮絶な眼で。

「いや本当ごめん。そういうつもりは無かったんだ。ただお前の額に当てたかっただけで、他意はない」

他意つつーか悪意しかねえ。

どうすんだよすげーこっち睨んでるぞ……人間ってあんな顔出来るんだな……いや感心している場合ではなく。

「あー、識崎ちゃん」

「ふん」

僕が何か言おうとする前に、識崎ちゃんは鼻を鳴らし、足を組み直した。

「……私別に怒ってませんわ」

「いや、その顔で言っても何の説得力もないぞ」

僕を見ている時の老倉みたいな顔をしている。或いは機嫌の悪い時の月火の顔のようと言おうか。

「別につ……私のミルクティーに不純物が混ざったことなど……怒ってませんわ!!」

「めっちゃ怒ってらっしやる!?!」

カップを持つ手が震えている。その所為でさらにミルクティーがぱちゅぱちゅと溢れ、中身がどんどん減っていく。あんな一杯淹れるから……。

「ミルクティー一杯如きで大袈裟だね。淹れ直せばいいじゃないか」

「いや、君はもう少し罪の意識を持ってよ」

「だから謝ったじゃないか。ごめんって」

「謝ったつつーか誤ったんだらうが！　そもそもなんで額に当てようとした!」

「なんかゴージャスっぽさを演出しようとしてるのか凄く鼻についた。忍姉さんを思い出すし」

「どんだけ忍が嫌いなんだよ君は」

居るんだぞ、忍ここに居るんだぞ！　そして僕、その忍の主なんだぞ！　元眷属だけれども！

「斧乃木余接……貴女は何も分かってませんわ……純粋なものに不純物が混じるというこの気持ち悪さ、貴女には分からなくて!?」

「分からないよ。っていうかそもそもミルクティーだってミルクとティーの合作じゃないか。言ってみればそれだって不純物だよ」

「ミルクティーは例外ですわ。ゴージャスっぽいでしょう?」

「自分勝手だね……お前、もしかして馬鹿なんじゃないの?」

「マカロンをぶち込んだ挙句に罵倒とか、どんな育ち方したんですの貴女……」

「生憎僕は育ちが悪くてね。親にロクなのが居なかったんだ」

うん。

まあ——育ての親がこの子の作成者とするなら、あのオカルト研究会メンバーということになるからな。忍野、貝木、正弦、影縫さん、臥煙さんが親とか……想像もつかないし、したくない。

「つーか、なんでお前ゴージャスに拘るの?　今は廃墟に住むなんていう没落っぷりの癖に。いいとこのお嬢様だったの?」

斧乃木ちゃんはマカロンを手に取った。また弾くのかと思ったが、今度はちゃんと食べた。

「別に。お嬢様なんて、そんな大層なもんじゃありませんわ——私のご先祖様は、姫と呼ばれていたようですよ」

「姫……」

「じゃあなんで——」

「だからですわ」

識崎ちゃんはカップから手を離し、腕を組んだ。

「ご先祖様が高貴ならば——私も当然、高貴であるべきなのですわ」

「……何それ」

斧乃木ちゃんはミルクティーにマカロンを投入した。それを見た識崎ちゃんの顔が一瞬だけ凄まじいことになったが、それは置いておこう。

「私はご先祖様を心から崇拜しておりますの。ご先祖様に粗相のない

ように子孫は振る舞わなければならない——当然でしょう？」

識崎ちゃんは言う——当然、なのか？

別に、識崎ちゃんの姿勢は悪いものだとは全く思わない。寧ろ、良いものであるとさえ思う。自分の先祖を敬わない若者が増えた昨今、今なおそういう姿勢を保ち続けているのは、賞賛すべきことであるのは確かである。

僕なんて、自分の先祖のことを何一つ知らない。精々知っていても曾お婆ちゃんや曾お爺ちゃんくらいだし、僕の家系のルーツなんて考えたこともない。

「ご先祖様が高位に居たのにも関わらず、子孫である私がひもじい暮らしをするなど不遜もいいところ——だから、私はこの部屋を作りましたの」

素敵でしよう？

識崎ちゃんは両手を広げた。

「先代が高貴なら、後継もそれに恥じない生き方をしなければ。でないとご先祖様に笑われてしまいますわ」

識崎ちゃんは腕を組んだ——それでこの過剰なまでに派手な部屋を作ったのか。

正直、やり過ぎのように思えるけれど……こんなに常時部屋がきらきら光っていると、生活しにくそうだ。先祖に笑われるというのなら、寧ろそっちの方が笑われそうだけれど。

「つまり今の話を総合すると——」

斧乃木ちゃんが言う。

「——君は別に裕福なお嬢様とか高貴な身分の奴とかそういう訳ではなく、もっともらしい言い訳をつけてゴージャス生活に勤しみ、偽りのお姫様気分浸っているスイーツ系女子って訳だ」

「容赦なさすぎるだろ!!」

「つか言葉選びに悪意を感じるぞ！ 君、悪意を発したことなんて一度もないとか言っていたけれど、よくそんな事が言えたもんだな！ 悪意の塊もいいところだ——うわあ、また識崎ちゃん怒ってるよ！ 軸足を床に打ち付けまくってるよ！」

「言い訳ではありませんの……私は心の底から思ったことをこうして口に出したただけだというのに……これだから下賤の屑は」

「それ、凄く特大のブーメランなんだけど」

「っ……………!!」

またカップがカタカタ震えている——なんだろう、この子のやる事なす事全てが裏目に出るというか、全部空回りするというか……不憫っ子？ 最高だな。

「不憫っていうな変態野郎!!」

「あれ、声に出てた!？」

びっくりである。

まずいな、欲望の抑制が出来ていない。落ち着け、落ち着くんだけ阿良々木暦。僕は変態なんかじゃなくて、紳士なのだから。

「変態という名の紳士って奴ですの? ……ふん。まあいいですわ……………」

「え、いいんだ」

「良くないですけども!!」

識崎ちゃんはマカロンを四個一気に口に放り込んだ。そして噎せた。

「げほっ、げほっ、うぐっ……………」

「ねえ鬼いちちゃん。やっぱりこいつ馬鹿だよ」

「こら斧乃木ちゃん。思っても言っていない事と悪い事があるんだぞ」

「や、やかましいですわ!!」

識崎ちゃんは僕らを睨む——けれど、涙目な所為かいまいち迫力に欠けている。

「ちっ…………先程も申し上げましたけれど、私あなた方と雑談するため……この場を用意した訳ではありませんの!」

「ああ、そういえばそういう話だったな」

「ごちやごちやパフォーマンスしてるお前が悪いんだろ。さっさと言えよ」

「ぐぎぎや……………!!」

識崎ちゃんは歯をぎりぎり鳴らす。

……なんか可哀想に見えてきたな。

「可哀想に見せるのも、こいつのトラップかもね。……それはそれとして」

斧乃木ちゃんはマカロンを入れたミルクティーを飲んだ。ぐびぐびと、一気飲みである。

喉を鳴らした後、マカロンを咀嚼する——表情が変わらないので美味しいのか美味しくないのか分からない。どうなのだろう？

「話し辛いならもう一回きつかけを与えてやるよ。ありがたく思え」

「上から目線ですわね。それがものを頼む態度ですこと？」

「アンリミテッド例外の方が——」

「待て待て待て!!」

何やってんの君!? 全てが台無しになりかけたぞ、おい!

「だってこいつ必要以上にムカつくんだもん」

「我慢してくれ斧乃木ちゃん。まずは話を聞こう。攻撃はそれからだ」

「攻撃すること前提ですよ!」

まあ、僕としては穏便にことを済ませたいが——そうはいかないだろうということ、僕の勘が告げている。プラスな勘よりマイナスな勘の方が当たりやすいのが僕、阿良々木暦である。

「識崎ちゃん。どうして僕達を襲ったんだ？ 君の目的は、なんなんだ」

「……………」

識崎ちゃんは足を組み直し、ティーカップを手を取った。

「……いいですわ」

識崎ちゃんが言う。

「随分と遅くなりましたけれど、教えて差し上げましょう——あなた方の質問に答えて差し上げましょう」

解答タイムですわ。

識崎ちゃんはそういうと、マカロンの入ったミルクティーを飲んだ。マカロンを咀嚼した段階で一瞬だけ驚いたような顔をし、飲み込んでから——僕らを睨んだ。

……美味しかったのか。

〔013〕

「さあ、教えて差し上げましょう。私の正体を——私の目的を。

「……え？ マカロンは美味しかったか？

「……………」。

「それを知って貴方に得がありますの？

「……ふん。

「まあいいですわ。

「全く出鼻を挫くのが好きな方々ですことね——いつそのこと教えな  
いという選択肢も、私にはあるというのに。

「ふふふ。

「そうね、そうですわ！

「私散々弄られて業腹ですの。

「だから、ただで教えるという訳にはいきませんわね。ふふふ。

「そうね、どうしましょう？

「……………」。

「……そうだわ！

「土下座するなら、教えて差し上げても良くってよ！

「……………」。

「えっ。

「ちよ——な、なんでそんなすぐに土下座出来ますの？ 土下座です

わよ!? あ、阿良々木暦！ 貴方、恥も外聞も無いんですの!?

「ええ……………」。

「ド、ドン引きですわ……………まさかこの世に土下座が趣味の男が居るな  
んて……………」。

「………なんだか釈然としませんの。

「………けれどまあ、土下座はして頂いたことですし……………」。

「はあ……………」。

「教えますわ……………」。

「何ですの、この微妙な気分……………要求を飲ませることに成功したの

に、負けた気分ですわ……。

「ええと、何でしたっけ？ ああ、そうそう。」

「どうして私があなた方を狙ったのか、でしたわね。」

「そして、その目的は何か——この二つ。」

「一つ一つ解説しましょう——と言いたいところですけど、この二つは結局同じ質問ですの。」

「理由も、目的も。」

「全て同じ——ですわ。」

「私があなた方を攻撃する理由は、ただ一つ——あなた方を殺すため。ですわ。」

「別に意外な事でもないでしょう？ どうせ薄々感付いていた癖に。」

「あの鎧も、悪魔も、全て私のトラップ——ええ、そうですわ。あの『鎧』もですわ。」

「全くお笑いでしたわね。まさかあれを被るとは——被ったら脱げないようにしたのは保険みたいなものだったのですけれど、まさかその保険が発動するとは……予想外もいところでしたわ。」

「しかし、想定内ではありませんでしたの。」

「だって——妖刀『心渡』を使って下さったのですから。」

「怪異にはそれに相応しい理由がある——あの『鎧』の役目は、つまり、それですわ。」

「妖刀『心渡』のデータ回収——ですわ。」

「しっかりと役目を果たしてくれましたの。」

「あの『鎧』は。」

「刀には刀をぶつけるのが一番ですものね——え？ あれは刀に見えないって？」

「まあ、でしょうね。」

「何も知らなければ、あれはただの兜にしか見えませんかでしょうね——しかしあれは兜ではありませんわ。」

「『鎧』ですの。」

「『鎧』であり、刀でもある——遙か昔、私のご先祖様である刀鍛冶“四季崎記紀”が作りし“完成形変体刀”が一本——



「——”賊刀『鎧』”。

「それが、あの怪異の名前ですわ。

「まあ、元の性質からは少々アレンジを加えさせましたけれど——これは先代を強化したということ、ご先祖様のオリジナルを蔑ろにしている訳ではないということをやめゆめお忘れなく。

「まあ、私がどうして心渡のデータを欲したのかは、いずれ分かりますわ。

「いずれ、ね。

「兎に角、それがあの『鎧』ですわ。最初の洗礼、軽いトラップのつもりでしたけれど、意外に手こずってくれたようで。私満足ですわ。

「期待以上の働きをしたということですから——流石、ご先祖様の作りし刀。レプリカでも素晴らしいですわ。

「え？ 完成形変体刀はまだあるのかって？

「それを教えて私に得がありますの？

「あなた方には得があるんでしょうけれど——私、自分に損しかないようにすることはしない主義ですの。

「……え？ こうして目的を教えているのは損な行動じゃないのかって？

「……………」。

「……………」。

「……もう教えませんわよ。

「ええい、土下座を止め——って、ずっと土下座してたんですの!?! はあ!?!

「ど、どういう神経してますの貴方……こ、怖いですわ……怪異よりも怖いですわ……………」。

「わ、分かりましたわ。教えます、教えますから、その土下座を止めて下さいまし!!

「はあ……とんでもない男ですわね、貴方……」。

「ゴリ押しもいいところですよわ——ふん。

「まあいいですよわ。

「それこそ本当にどうでもいいですよわ——では、次のネタばらし。

「レイニー・デヴィル。」

「言うまでもなく、あれも私が用意させたものですわ。最初、心渡で切断されたものと、斧乃木余接が何度も撃退したものの、以上の二体。」

「そう、最初のレイニー・デヴィルも私のものですわ。私の演技、上手かったでしょう?」

「お陰で貴方をころっと騙せましたわ——それに、忍野扇を退場させることが出来た。」

「あの存在は厄介ですものね。様々な怪異のハイブリッド、正しく新種の怪異。」

「まあ、新種の怪異を作らせたのは、私も同じですけれど。」

「あれの所為で『鎧』が突破された訳ですしね。全く侮れませんわ。」

「閑話休題。」

「貴方を騙し、見事あのダサイ車に乗車することに成功し——」

「え? ダサイって言うな?」

「いやダサイでしょうあれは。何ですのあのフォルムにあの色! 私絶対にあんな車は買いませんことよ。」

「兎に角、あの車に乗りおおせた私——ですが、あの状況だと貴方と二人きりになれませんでしたの。」

「そうですね。二人きりになりたいというのは、本当。」

「貴方と親交を深める気なんて微塵もありませんでしたけれども。」

「だから八九寺真宵を退場させた——いっそのことここで正体を明かして八九寺真宵を潰してしまおうとも考えましたけれど、流石にそれはまだ早いと思い、退場に留めましたの。」

「しかし面白いように思い通りに動いてくれましたわね、貴方。」

「多少私が糸で操っていたとしても——それでもあそこまで貴方が愚かとは、私貴方を過大評価し過ぎていましたわ。」

「伝説の吸血鬼、キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの成れの果てを影で飼っている——こんな情報を知れば、そりゃあ誰だって貴方を過大評価しますわよ。」

「まあお陰でことは思い通りに進みましたわ。八九寺真宵は見事退場し、私と貴方は二人きりになることが出来た。」

「そして私は糸を強めた。

「見事なほど私の言う通り動いてくれましたわね、貴方。私が第二のレイニー・デヴィルの存在を貴方に警告したのも、油断しきった貴方を一撃で殺すため。

「ここまででは本当に上手くいってましたわ——ここまでは。

「問題はここからですの。

「八九寺真宵を退場させたことにより、八九寺真宵は自由の身となつてしまった。その所為で、ここから先の計画が全て狂いましたの。

「斧乃木余接。貴方の所為でね。

「本来ならレイニー・デヴィルに殺されておしまいだった筈なのに、貴方が逆にレイニー・デヴィルを潰してしまった——こちらもまた保険で再生機能を付けておいたからよかつたものの、もし付けておかなかつたら私の計画が全て台無しになるところでしたわ。

「全く恐ろしいですわ。

「しかも阿良々木暦と二人きりという状況も崩された——お陰で私の糸は弱まり、貴女を退場させることが出来なくなりましたの。

「でもせめて阿良々木暦は潰しておきたかつた——だから再びレイニー・デヴィルを使いましたの。

「レイニー・デヴィルが現れる直前、私饒舌になりましたでしょう？あれで気を逸らそうと必死だったのですわ。そして気を逸らすのに成功しましたの。

「しかし——貴方は、窓を閉めなかつた。

「その所為で斧乃木余接は容赦なくレイニー・デヴィルの頭を潰すことが出来た——作戦、大失敗ですわ。

「この時の私の焦りよう、想像出来て？ 私元々誰かを騙すのは苦手でしたし、ボロをボロボロ出していましたわ。貴方には気付かれませんでしたけれど、斧乃木余接にはバレバレも良いところ——このまま何もしなければ、確実に負ける。

「だから、最終手段を使いましたの。

『『くらやみ』——世界のルールにして、怪異の反物質。

「斧乃木余接にルール違反を犯させ、あなた方をまとめて消し飛ばそ

うとしましたわ。

「ですけど、これも失敗。

「まさか最終手段まで失敗するとは思いませんでしたの——結局あなた方はこの屋敷まで辿り着いてしまい、こうして私が種明かしをしているのでした、ということですよ。

「滑稽でしょう？」

「本当もう失敗続きですよ——全く、慣れないことはするものではありませんわね。

「……さて。

「私がおんな慣れないことをした理由を説明して欲しいのかしら？」

「仕方ありませんわね。

「お教えしましょう——とは言いましたが、あなた方が今から話すことについて理解できるとは思えませんし、私にとって得が一つもないことなのでですけど。

「——私がおなた方を殺そうとした理由。

「私がおなた方を殺そうとした目的。

「それは——歴史の改竄のため、ですよ」

「014」

「歴史の改竄……？」

僕は識崎ちゃんの台詞を反芻した。

改竄——どういうことだ？

僕は斧乃木ちゃんを見た。が、斧乃木ちゃんはいつも通りの無表情。そこから感情を読み取ることはできない。

斧乃木ちゃんには、意味が解っているのだろうか？ それとも。

——いや、そもそも——四季崎記紀だと。

完成形変体刀だと。

どうしてここでその名前が出てくるんだ——!?

「まあ、『改竄』というより『修正』と言った方が正しいですよわね」

「……どういう意味なんだよ」

「は……？」

「歴史の改竄とか、修正とか——意味わかんねーよ。そんな訳のわからない理由で、君は僕達を殺そうとしたっていうのか」

「ですから言ったでしょう？ あなた方が理解できると思ってはいない、と」

識崎ちゃんは僕達を睨み付けながら言う——まるで悪びれもせず、さも自分が言っていることが世界の真理であるかのように、識崎ちゃんは続けた。

「歴史の修正——即ち、本来の歴史を取り戻すということ」

「本来の——歴史」

「そう。なんて言っても、あなた方は解らないでしょう？」

「……分かんねーよ」

つまり、この子は歴史を変えるために動いている……つまり、未来を変えるために動いている、ということなのだろうか？

「そんな難しい話ではありませんの。未来なんて私には見えませんわ——」ご先祖様は見えたようですね」

「未来が、見えた？」

「四季崎の家系は代々、占術師の家系なのですわ。とは言え、それは昔の話。今では多様な血が混じり、占術の力は失われてしまいましたの。残念なことに」

未来を変えろという訳ではない……ならば、どういうことだ？

いや、そもそも歴史の改竄とはどういうことだ。歴史の修正とは。わざわざ説明するまでもないでしょう？ 至極簡単なことですよ」

「いや、分かんねーよ。君にとっては簡単な事だろうけれど……」

「いや、これは簡単なことだよ。鬼いちゃん」

「斧乃木ちゃん」

簡単だつて？

これが簡単だというのか——いや待て、斧乃木ちゃんの簡単は当てにならないと、僕は先程認識した筈ではなかったか。

「やれやれ、僕を信用しないんだね——まあいいけどさ」

「いや、信用するとか、しないじゃなくて……本当に分からないんだ

よ。どういうことなんだ？」

まさか、年表の一部を塗りつぶし、別の内容を上書きするというような、そんな単純なことでもあるまいに。

「いや、それで合ってるよ。なんだ、分かってるんじゃないか」「えっ？」

またぞろ斧乃木ちゃんの冗談かと思ったが、斧乃木ちゃんの目はマジだ。いや、無表情だから目はいつもマジなのだけけれど。

識崎ちゃんを見る。けれど、識崎ちゃんも別に否定するような素振りは見せていない。

歴史の改竄……ええ？

そんな単純な——簡単な解釈でいいのか？

改竄という言葉の意味から考えても、確かにそのままの意味過ぎるけれど——。

「まあ、流石にそのままって訳じゃないのだろうけれど——概ねそんなような意味だろう」

「……仮にそうだとしても、それと僕達を殺すことと、どういう関係があるっていうんだ？」

僕達の存在が気に入らないのなら、僕達の記述を、それこそ塗りつぶせばいいだけの話だ。僕達について記述された文章を消すだけでいい——さっきの定義通りなら、それで歴史の改竄は通用する筈だ。

「ええ、その通りですわ——けれど、それは真の改竄ではありませんの。ただの自己満足ですわ」

「自己満足……」

ならば彼女の行動は、自己満足ではないというのか。どんな大義名分を掲げて、こんなことを——。

「全ては四季崎の悲願を達成するためですわ」

「四季崎の——悲願？」

「ええ」

識崎ちゃんはマカロンを一口に入れた。そしてそれを流し込むかのように、ミルクティーを飲んだ——あれ、いつ注がれたんだ？

「歴史を偽り無きものにする——この偽りの、不完全の歴史から、お前

たちという不純物を取り除き、純粹な、完全な歴史を取り戻す。それが、私の目的ですわ」

「偽りの、歴史……」

この歴史が——間違っていると言いたいのか？

僕達はこの世界に存在してはならないと、彼女はそう言いたいのか？

不純物。

ならば完全な歴史とは一体なんなのだ。僕達が居ない歴史——僕達の居ない世界。

「で、でも、なんで僕達なんだ。どうやって僕と斧乃木ちゃんが不純物であると認定したんだ」

「あら？」

識崎ちゃんはマカロンを一つ齧ろうとした、が、その手を止めた。

「どうやら貴方、勘違いしていらっしやるようね」

「勘違い？」

僕の解釈が間違っていたということか？　じゃあ、えつと……いや、それ以外にどう解釈すれば——。

「いえ、解釈はそれで合ってますわよ」

「え？」

じゃあ、どこが間違っているというのだろうか——なんて、そんなことは分かりきっているじゃないか。

まだ僕は此の期に及んで——識崎ちゃんを、敵と思いたくないのか。

識崎ちゃんは、僕の誤答を訂正する。最も最悪な形に、最も僕が忌避した形に。

「ただ——不純物はあなた方二人だけではありませんの」

「っ——！！」

「阿良々木暦、戦場ヶ原ひたぎ、八九寺真宵、神原駿河、千石撫子、羽川翼、忍野忍、斧乃木余接、忍野扇、老倉育、沼地蠟花、忍野メメ、貝木泥舟、影縫余弦、臥煙伊豆湖、手折正弦、ドラマツルギー、エピソード——私の仕留めるべきターゲットですわ」

「015」

僕は思わず識崎ちゃんに掴みかかろうとした。

いや、後から考えてもその時点から考えても、なんと幼稚な行動なのだろうと思う。高校を卒業した男が中学生くらいの女子に掴みかかろうとするなど、言語道断の行為である。

でも。

それでも。

ここで激昂しないのであれば、それは間違いなく僕じゃない——阿良々木暦という愚か者ではない。

ここで激昂しない程の精神力を持っているのであれば、僕は愚か者と呼ばれることもなかったし、もう少しマシな生活を送っていただろう。

僕の友達が狙われている。

僕の知り合いを殺そうとしている。

そんなことを面と向かって宣言されて、正気でいられるような僕ではないのだ——正気でいられないのが正しいというのであれば、僕はそんな正しさはいらない。

……などと言ってみたけれど、実際は識崎ちゃんに触れることさえも出来なかった。

いや、別に識崎ちゃんの気迫に怯んだとか、女子の体に触れるのにやっぱり躊躇したとか、そういうことではない。

触れるどころか——動けなかった。

「っ——!？」

糸。

いつの間に施されたのか——僕と斧乃木ちゃんの体に何本もの細い糸が巻き付けられていた。糸は椅子と繋がっており、僕達の動きは完全に固定されてしまっていたのだ。

やはり椅子は罨だった——そしてやはり、座らないというパターンも想定された第二段階が用意されていたのだ。

動こうにも、糸が絡みつき、縛られ、動けない。普通の糸ならば簡



単に引き千切ることが出来るだろうが——しかし、恐らくこれは普通の糸ではない。

尋常ならざる強度の糸。

普通と異なる——怪異。

「やっぱりね——僕の睨んだとおりだ。お前、蜘蛛を飼ってるな」

「ふふん」

蜘蛛？

そういえば、車の中でそんなことを言っていた気がする——  
蜘蛛。

つまりこれは、蜘蛛の糸か。

「それを知ったところでどうなるということでもないでしょうに——  
ふふふ、私とお喋りして下さって感謝いたしますわ。お陰でこうして  
あなた方を、確実に殺せる」

確実に殺せる。

この糸にどんな副作用があるのかは定かではなかったが、少なくともピンチであることは疑いようのない事実のようであった。

「……斧乃木ちゃん」

「なんだい鬼いちゃん」

僕は小声で呟いた。呟いたと言っても唇を動かしているのが認識できない程に小さな声であり、斧乃木ちゃんに聞こえるかどうかは賭けのようなものであった——が、どうやら聞こえたようだ。同じく小さな声で返してきた。

「例外の方が多い規則で、この糸を引き千切ることが出来るか」

「無理だね」

即答であった。

「無理なのかよ」

「ああ、無理だ——あれを発動しても、この糸は解けないだろう。寧ろ肥大化した部位に深く食い込んで僕が傷を負う」

「そうか……」

「それに、何だか調子が悪い」

「調子が悪い……?」

どういうことだろうか？　まだ吐き気が残っているのだろうか？  
もしそうだとするならば、本当に僕はお荷物にしかなくなっていないと言えよう。

となれば、いよいよピンチであった。手出しなし。ハンズアップである。

どうも通用するらしい土下座も、動けないのでは意味がない——精神的には土下座している気分なのだが……。

「ふふふ。だから言いましたでしょう？　私、自分にとって損になることはしない主義だと——この場であなた方を殺してしまえば、何を聞こうと何を知ろうと、その全てが意味をなさないのでしょう？」

つまり——識崎ちゃんは、最初からそのつもりだったのか。この屋敷に誘い込んだ時点から、これを計画していたというのか。

トラップ。

この屋敷に入った時点で、僕達は蜘蛛の巣に迷い込んだ羽虫も同然だったということか。だとすれば全くお笑いである。自分から罠に飛び込んだということなのだから——。

「さて、と——では、物語を、歴史を、修正致しましょう——否定いたしましょう」

識崎ちゃんはそう言うと、財宝の絨毯の中から棒状の何かを取り出した。

それは刀だった。鏢の無い刀で、刀身から柄までの全てが漆黒。柄には花の模様が描かれており、どこか芸術品のような美しさを醸し出していた。

しかし。

その刀を見て僕が初めに抱いた印象は、『美しい』ではなかった。そう思ったのは飽くまで第二印象だ。

——『禍々しい』。

それが第一印象だ——柄は折れ曲がり、刃は鋸のようにぎざぎざな、歪な刀。そして、その刀から溢れ出す瘴気——どう考えても、普通の刀ではなかった。

「毒刀『鍍』」

刀を構えた識崎ちゃんは言った。

「四季崎記紀が作りし完成形変体刀が一つ——あなた方を殺すには勿体無い代物ですけれど、特別ですわ。有難く斬られなさい」

毒刀『鍍』。

それがこの怪異の名前か——怪異つつーか、完成形変態刀とやらの一本か。

「おい阿良々木曆」

「な、なんだよ」

モノローグを邪魔するなんてアリかよ。幾ら敵キャラだからって、やっていいことと悪いことがあるんだぞ。

「完成形変態”態”刀ではありませんの。完成形変態”体”刀！ 変態の態ではなく、全体の体！ なんですの。変態刀って！ 私の偉大なるご先祖様が、そんな卑猥な名前の刀を作ると思わないで下さいまし!!」  
「いや、へんたいって読みを態々付けた位なのだから、これ位の誤読、そのご先祖様だって意識してた筈だぜ」

まあ昔に変態なんて言葉があつたのかどうかなんて、僕は知らないけれど。戦場ヶ原とか羽川辺りなら知ってるかな？

「ご、ご先祖様を侮辱するとは——許すまじ阿良々木曆!!」

「わ、悪かったよ。後で土下座してやる」

「ホイホイ土下座土下座って、プライドは無いですの!?!」

「プライド? そんなもん、とうの昔にゴミ箱に捨てた」

エロ本と一緒にな。

「いつその事ご自分の命も棄てたら良かったのですわ!!」

「……………」

僕がイメージしてたのは、まさに命を棄てようとしていた時の事なのだけけれど。まあ、言わない。

識崎ちゃん風に言うなら、それを教えて何か僕にメリットがあるのか、という奴である。

「はあ……貴方と話していると調子が狂いますわ——調子どころか、予定もぐちゃぐちゃですわよ」

「そんなもん僕の所為にすんじゃねえよ」

「だからさっさと殺しましょう」

「え!？」

識崎ちゃんは刀を構え直した——くそつ、何とかして時間を稼ごうとしたのに、流石に限界か!？」

「ま、待て! 識崎ちゃん! 話し合おう! 今ならまだ分かり合える——」

「無駄だよ鬼いちちゃん」

「斧乃木ちゃん!？」

死の瀬戸際ということで必死に死刑執行を引き延ばそうとしている僕を邪魔する童女。

まさかまさかの斧乃木ちゃんである。

「無駄だ——こいつと僕たちは分かり合えない。絶対に無理だ」

「そこまで言うか……?？」

「そこまで言うよ。こいつと僕たちはまず思考回路が全く違う。狂人と仲良くすることなんて出来やしないのさ」

「お、おいおい。狂人だなんて」

「こんな状況にまで追いやられてもまだこいつを弁護するつもり?？」

「っ……………」

どうして僕はこの子をつい弁護してしまうのだろうか?

蜘蛛の糸——。

「そもそもこいつ自体が歩み寄る気が無いんじゃないよ。話にならないよ。そっでしよ?？」

「ふん、分かっているじゃありませんの」

歩み寄る気は無くとも、刀を構え、躡り寄ってくる。

歴史の修正と言ったか——こいつにとって、それは果たしてどれ程の比重を誇っているのだろうか?？」

四季崎の悲願。

それこそ、この子だって傀儡なんじゃあないのか? 先祖に操られている、操り人形なんじゃないのか?」

本当にこれは——この子の意思なのだろうか?」

「最後に言い残すことは?？」

「識崎ちゃんは刀を斧乃木ちゃんの首に掛け、言った——え？ 斧乃木ちゃんからなのか？ てつきり僕からだ——いや、そうか。僕を先に殺してしまうと、両方を殺せる確率が下がってしまうのか。」

キスシヨット・アセラオリオン・ハートアンダーブレードの復活。幾ら殺害対象に含めていても、ここで戦うのは避けたい筈である。ならば、殺しても何も無い、斧乃木ちゃんから殺するのが最善——。

「鬼いちゃん」

「え？」

刃を突き付けられながら、斧乃木ちゃんが言った。

「今までありがとう。友達以上として——ずっと大好きだったよ」

「え？」

今までありがとう。

大好きだった。

え？

こ、この状況で——何だよ、その唐突な、伏線も何もないカミングアウト。

笑えねえ——!!

「じゃあね。いえーい」

「斧乃木ちゃん！ 一体どういう——」

「死ね！ 斧乃木余接!!」

首筋に突き付けられた毒刀が、今、振り抜かれた。

表情無き——感情無き式神童女、斧乃木余接は。

その瞬間まで、キメ顔を貫いた。

無表情な訳だけでも。

第貳話 しるしメイク 其ノ肆

〔016〕

なんて、思わせ振りなことを言ってみたけれど、もちろん斧乃木ちゃんは死んでないし、首を刎ねられてもいない。あんな如何にもなところで切るあたり、ああ、これはフェイクだな、と思った読者が、果たして何人いるのだろうか。思わなかった読者から数える方が早い程度は居るだろう。

斧乃木ちゃんに突き付けられた毒の刀——毒刀『鍍』。振り抜かれたその刀は、しかし斧乃木ちゃんの首を切り落とすことは遂に叶わなかった。

斧乃木ちゃんの首が、刀では斬り落とせないほどに硬かったという訳ではない。死後硬直というものがあるけれど、斧乃木ちゃんはあくまで付喪神であり、キョンシーとかではないのだ。よつぎキョンシーではない。

況して、斧乃木ちゃんがギリギリで糸を千切ったという訳でもない。斧乃木ちゃんが先刻述べた通り、この糸を力尽くで引き千切るのには不可能だ。パワータイプの斧乃木ちゃんを的確に封じる恐ろしい罠であるといえよう。

では、どうして斧乃木ちゃんは首を斬り落とされなかったのだろうか。それは、斧乃木ちゃんに僕の影が掛かっていたことに由来する。ガキン！

と、毒刀が斧乃木の首に到達する寸前で、金属と金属のぶつかり合う金属音が鳴った。

「っ——！！」

毒刀と首の間に差し込まれたのは、見覚えのある日本刀。業物の一品であり逸品。

妖刀『心渡』——！

「ふん、勝手に死ぬると思うなよ、死体娘——儂が二度寝しているのいい事に、随分と好き勝手やってくれたのう」

かかっ——と。

その金髪金眼の少女は、凄惨な笑みを浮かべながら言い、そして――  
毒刀を弾き返した。

「うぬを殺すのは、この儂じゃ」

少女――即ち、鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼の成れの果て、  
忍野忍は、そう言つて斧乃木ちゃんを僕を見た。

……キメ顔以外の何物でもなかった。

「017」

「ウザッ」

「第一声がそれかうぬ?!」

助けてくれた恩人であるところの忍になんてことを言うのだ、と憤  
慨したくなつたが、しかし僕も似たようなことを考えてしまったので  
何も言えない。

いや、本当にキメ顔も良いところであつた。見下ろされながら見下  
すという低い場所にいる癖に高度なことをやってのけた忍だが、この  
部屋の豪華絢爛さ、黄金の輝きが忍の後光となり、キメ顔もキメ顔、最  
上級かつ最高級のキメ顔だつたのだ。嘗てキメ顔をしていた斧乃木  
ちゃんも、これには僕以上に思うところがあつたのだろう。

「だからあの頃に触れるなつてつてんだろ。黒歴史なんだよあれは」  
「かつ、あれごときを黒歴史とはよく言うわ。600年生きた儂に  
とつて、あんなものは黒歴史でも何でも無い。どうせすぐに忘れるん  
じゃしの!」

「流石後期高齢者。認知症に苦しんでるんだね、可哀想に」

「おいその金髪娘、邪魔して悪かつたな。こいつ殺せ」

「ごめんなさい忍様助けて下さいごめんなさい」

……弱っ!

強気の姿勢が一瞬で崩れたぞ……つーかわざわざ煽らなくていい  
じゃないか、斧乃木ちゃんも。

そんなに嫌いか。

「ちっ……貴女が出てくる前に話を終わらせたかったですけれど  
ね。忍野忍」

苦々しそうな顔をしながら、識崎ちゃんは毒刀を構えた——つて、不味い！

識崎ちゃんの狙いは僕達だけじゃあない。忍も殺害リストの中に入っているのだ！ 忍は、そのことを知らない！

「案ずるなお前様よ。この程度の相手、お前様とそこのお前に任せた」  
「えっ!？」

突然の無茶振りである——いや待て、どうしろと!?

「し、忍！ 滅茶苦茶細くて見えてないのかもしれないけれど、今僕達は——」

「糸に絡まれとる、じゃろう？ ふん、動いてみい」

忍は言う。いや、だから動けない訳で——僕は右足を前に出した。

……おお？

次は左足である——手足を順番に動かし、前へと進む。  
進めた。

「い、糸が——無い？」

どういうことだ？ 僕は斧乃木ちゃんを見た。斧乃木ちゃんの姿勢がさつきと変わっている——ということは、やはり僕たちの糸が消えたことに他ならない。

「かっ！ 消えたのではない、お前様よ。儂が斬ったのじゃ」

「き、斬った？ でもこの糸……」

斧乃木ちゃんの例外的なアンリミテッド・ルールブック方が多い規則でも破壊出来なかった糸を、忍は切断したと言うのか？ 斬ることが出来たというのか？ だとすれば、いつの間に……。

「……妖刀『心渡』——ふん、ま、多少硬かったようじゃが、儂の前ではただの糸に同じよ。まだあの兜の方が斬り甲斐があったぞ？ かっ！」

「……………」

識崎ちゃんは忍も睨み、じりじりと躡り寄ってくる。殺意を漲らせた目はギラギラと輝いている。

「動くな」

「！」



「……………」

左を見ると、糸から解放された斧乃木ちゃんが織崎ちゃんに人差し指を向けていた。人差し指——即ち、例外の方が多い規則の照準を合わせている、ということだ。

「糸がなくなつた今、お前を潰すのは僕にとつてとても容易いことだ。ちよつとでも動いてみる、死ぬよ」

「……………ふん」

織崎ちゃんは刀を構えたポーズのまま停止した。……わざわざその姿勢のまま止まる必要性はあつたのだろうか。

「よし、じゃあその刀を手から放せ。放さないで殺す」

「……………殺す以外の選択肢はくれませんか？ 物騒ですわね。流石感情無き死体人形」

「お前が言うな。ごちやごちや喋らずに従え」

「……………」

織崎ちゃんは毒刀から手を放した。落下した毒刀は大きな金属音を鳴らし、黄金の床に紛れ込んだ。

「……………私をどうするおつもりで？」

「当然臥煙さんに突き出させてもらう。怪異を作り、それを悪用した——これだけで、果たしてどれ程のお咎めを受けるかな？」

「……………」

……想像もしたくない。

あの人が専門家をやっている理由を、僕は詳しく把握しているわけではないのだけれど、しかしあの人は秩序に重きを置く人はずだ。扇ちゃんの件で協力してくれたのも、この町で起こる怪異現象を平定するため、という理由だった。

こともあろうに怪異を作り、しかも剩え、それを悪用する——臥煙さんが、最も嫌うタイプなのではないだろうか？

しかも——。

「その上、わざわざ殺害予告までやっちゃってくれた訳だしね。臥煙さんの命を狙うとか、命知らずも良いところだよ。よくこうも重い罪を重ねられたものだ」

——織崎ちゃんの標的の中には、臥煙さんも含まれていた。

斧乃木ちゃんの言う通り、正直命知らずという他ない。専門家の元締めであるところの臥煙さんを殺すなんて、リスクが高すぎる。それに、臥煙さんが殺されると思っていただけのだろうか？

……個人的に一番命知らずと思ったのは、影縫さんの名前が拳がった瞬間だったのだが——いや本当、勝ち目のない戦いすぎる。

僕みたいな一介の新大学生なら兎も角、臥煙さんを敵に回すなど——その道の専門家たち全員を敵に回すようなものである。

「織崎記。分かっているとと思うけど——」

「斧乃木余接。その脅しは脅しとして機能致しませんわ」

「！」

脅しとして——機能しない？

いやいや、これ以上の脅しがあると思っっているのだろうかこの子——と思っっていると、織崎ちゃんは姿勢を立て直し、パン、と手を叩いた。

動いた。

「動くなって言っただろ？ 本当に死にたいの？ 悪いけど、貴女が言ったように、僕は人間的な感情を持ち合わせていない——罪悪感もなく、躊躇なく殺せるんだぜ」

「でしたらやってみてくださいまし？ ほら、私は動きましたわよ」

「……………っ」

……………？

どうした？ 斧乃木ちゃんは、何故撃たない？ 人差し指の調子でも悪いのか？

——ん？

調子が悪い？

何だ、何が引つ掛かったんだ——いや、引つ掛かりとかそういうのは後でいい。今は斧乃木ちゃんが何故撃たないのかを——。

「おい死体娘。何やつとるんじゃ？ さっさと撃たんか。もしやうぬ、このタイミングで不思議なことが起きて感情が芽生えた、とか、そんな意味不明な展開が起こっているのではあるまいな？」

「そんな訳ないだろう……貴女は黙っててよ」

「ならさっさと撃てよ。どうした？ 怖気付いたか？ かかつ、もしそうじゃとするならば、うぬも落ちたもんじゃのう。颯爽と現れ、『よくないもの』の右半身をぶっ飛ばしていったあの頃とは比べものにならないわい」

「おい、やめろよ忍。何味方同士で煽りあつてんだよ。今は協力すべき時だろう。斧乃木ちゃん、どうして撃たないんだ？ 何か理由があるなら——」

「五月蠅いなあ。どうしてお前らはそんなに理由を知りたがるのさ——つーか元を正せば、全部お前らの所為なんだからな。僕が不調なのは、貴方と、そのロリ奴隷の所為なんだからな」

「え？」

不調、と言ったか？ ——不調？

……そういえば。

織崎ちゃんの糸を千切れないか聞いた時、そんなようなことを言っていたような——調子が悪い、と言っていたか。

僕たちの所為……というところ……。

……。

「お、斧乃木ちゃん」

「なんだい鬼いちゃん」

「あの、もしかしてだけどき。不調なのって、さつき吐いたから……とか？」

「……………」

斧乃木ちゃんは沈黙している。

……ああ、そうなんだ。

マジであれが理由なのか——嘘だろ、冗談抜きで僕、ただのお荷物じゃねえか。

何が協力すべき時だ、よく言えたものだ——味方を弱体化させておいて、よくものうのうと言えたものである。

「ふーん」

忍はどうでもよさそうな顔で深刻そうな斧乃木ちゃんを見た。い

や、ちよつとは興味持てよ。

「いや、それがどうしたんじや？ たかがその程度で弱体化などする訳あるまいよ。儂を騙そうたって、そうはいかんぞ」

「お前と僕を一緒にするなよ。ムカつくけど、お前と僕とでは怪異としてのスペックが違い過ぎるんだよ。僕は怪異としては下位の方だから、ちよつと些細な体調変化でも響くんた。多分今の僕は、普通の童女レベルの力しかない」

「かかつ、貧弱な奴じやのう。これじやから近頃の若いもんは」

「黙れ若作りババア」

「うぬ遂に言いやがったな?! 後期高齢者とかなんとか言ってた時点で業腹じゃったけど、遂に悪口のリミッター外しおったな?!」

……正直今のは、如何にも年寄りっぽいことを言った忍に原因があると思うのだが……いやいや、だから、今はギャグパートじゃない。シリアスパートだ。

そもそも、なんで織崎ちゃんは斧乃木ちゃんの不調を知っていた？ いや、それだけに限らず、彼女は一体、どこからどこまでを知っているのだ？

「それは勿論、静からの報告を受けたからですわよ。一応私はあれの主人ですし、言うことには従ってくださいの」

「静……」

淡海静か。そうだ、あいつが見ていた——案内役と言っていたが、僕たちの行動を監視する監視役でもあった訳だ。

「……織崎ちゃん。君は何を、どこまで知っているんだ？」

「それを教えて私にメリットがありますの？」

「っ……………」

もうこれ以上の情報を教える気はないということか。

「否定する」

織崎ちゃんは腕を左右に伸ばした。何をする気だ。

「私はあなた方を否定致しますわ——否定する、否定する、否定する。否と定めて否定致しますわ」

この偽りの歴史を——否定致しますわ！

織崎ちゃんがそう言った瞬間、黄金の床が捲れ上がった。いや、比喩表現では分かり辛いこと甚だしいだろう。申し訳なかった。

つまり、織崎ちゃんは指の先から大量の糸を出し、床を埋め尽くしていた黄金の物品を絡め取り、僕たちに投げつけてきた、ということである。

「っ——!!」

「うわやばっ」

「ちっ！ 結局儂がやらねばならんのか!!」

忍は悪態を付きつつも、しかし有難いことに僕達を見捨てる気は無いらしく、飛んでくる大量の品々を『心渡』で次々と両断した。

『心渡』で両断出来るということは、つまり、この物品全てが何らかの怪異である、ということだ——これだけの怪異を作る意味が、どこにあつたというのだろうか？

「あなた方は一つ勘違いしておられますわ」

糸を細かく操りながら、織崎ちゃんは言った。

「怪異を作っているのは、私ではありませんの——これら全てを作ったのは、静ですわよ」

「っ——!!」

「怪異を作る怪異——それが、淡海静ですわ」

[018]

怪異を作る怪異だと？ そんなもの、存在していいのか？

そんな無茶苦茶な怪異——と思ったが、しかし、僕の身近に居るではないか。怪異を作る怪異が。

忍野扇。

あの子もまた、怪異を作ることが出来ると言ってもいい——作るというより、それはコピーのようなものだが、彼女を構成する数多の怪異のコピーを、物質想像能力を用いて作り出しているのにすぎないのだが。

そう考えると、怪異を作る怪異という存在も、そこまで異常なものではないと思えてきた——いやそもそも、異常なのが怪異なのであつ

て、ならば怪異の枠にさえ嵌らなさそうな、そんな能力を持った存在は、怪異以上に怪異らしいと言えるのではないか。

「お前様よ」

「ど、どうした」

黄金の怪異を猛スピードで切り続けながら、忍が言う。

「一旦引くぞ。キリがない」

「うん、僕も忍姉さんに、不本意ながら賛成だ」

斧乃木ちゃんも言う。

「今この場でまともに戦えるのは、忍姉さん一人だ。いや、忍姉さんというか、『怪異殺し』ただ一振りだ。流石に分が悪すぎる」

「ああ」

僕は首を縦に振った。当然、賛成である。

斧乃木ちゃんと忍、二人の意見が見事合致したということは、つまりそういうことなのだ。勝ち目がない——このまま戦っても、ジリ貧で、いずれ負ける。

斧乃木ちゃんが戦えれば、少しは戦況が変わったのかもしれないが——しかしそれを責める訳にはいかない。というか、責められる訳がない。斧乃木ちゃんが弱体化した原因は、どうしようもなく、僕なのだから。

斧乃木ちゃんを守ると言っておいて、この体たらくである——土下座なんかよりも、よっぽどプライドが傷つくことだった。

「じゃあ鬼いちゃん、一、二の、三で忍姉さんをおぶって走り出して。僕は手伝わないけど」

「手伝わねえのかよ」

「これ以上気持ちの悪い思いはしたくない」

「どんだけ嫌いなんだ……」

「聞こえとるぞ死体娘！ 後で殺す!!」

相変わらず止まない黄金の雨を斬り裂きながら、忍が言う。殺すも何も、もう死んでいるのだけれど。

「じゃあいくよ、鬼いちゃん」

「ああ」

僕は背後を確認した。扉は開いている。これならすぐに逃げられるだろう——え？ 扉が開いている？ 何でだ？ 僕たちが部屋に入った後、閉まった筈なのに——。

「二の——」  
——いや、そんなことを考えてる暇はない。それは後回しだ。カウントが始まった。

僕は忍の位置を確認し、背を向けた。両手は既に忍のあばらに触れている。良いあばらだ。

「——三！」  
斧乃木ちゃんはその叫ぶや否や走り出した。僕も忍を腕でがっちりロックし、それを追う。

背後で金属音が鳴り響く。間近で聞くと、こんなに怖いものなのか。金属音ってやつは。

僕たちは扉を抜けた。しかし扉を閉めることは叶わず、相も変わらず背後からの追撃は止まない。

「おのれ、儂を体のいい盾にしおってからに!!」

そうはいいながらもしっかりと僕たちを守ってくれる忍。全く頭が上がらない。やはりこの辺りの度量の大きさは、伊達に600年生きてきた訳ではないのだと思わせる。

「債務がどんどん積み上がっておるぞお前様！ 覚悟はしておろうのう!!」

「ああ！ ドーナツだろうがなんだろうが好きだけ買ってやるよ！ 約束する!!」

「儂はミストのイメージキャラ変更を所望しておる!!」

「ごめん、それは出来ない!!」

ポンデライオンさんをあの座から引き摺り下ろすのは、僕程度の財力ではどうにもならないのである。

「不二家さんとのコラボで我慢しとけ!」

「なんじゃと!?!」

不二家さんより、『ドーナツチョコ』発売中だ！ 可愛い少女と幼女

が目印だ、セブナイレブンに急げ！

「お前様まで宣伝を始めたら誰が收拾つけるんじゃない!? ちゅーかそのコラボニヶ月程前のものじゃろうが! まだ売つとるのか!」

「知らん!!」

「お前らマジでいい加減にしろよ。状況考えろよ。危機感をちよつとは覚えろよ能天気馬鹿ロリ鬼畜ツーマンセル」

「いや斧乃木ちゃん、そこまで言わなくてもいいんじゃないか!」

しかも語呂悪いし!

ああ、この辺りがひたぎとの違いなんだな……直線的だなあ。  
しみじみ。

「悪口言われてしみじみって、あなた本格的に頭おかしいよ」

「今更その程度の悪口で傷つくような僕じゃあない。甘く見るなよ、斧乃木ちゃん。悪口は言われ慣れてるからな」

「凄いな貴方」

褒められた。嬉しくないけど。

いや、ここで一応釈明しておく、僕たちがこうして雑談しながら走っているのは、決しておちやらけている訳ではない。ちゃんと後付けの理由くらいあるのだ。

今僕たちは、正直追い詰められている。追い詰められて、後のない状況で必要なことは、互いを見失わないことである。

迷子にならないこと。

互いに呼びかけ合いながら進む——こうすることで、仲間の異変にすぐ気付けるし、何よりシリアスになり過ぎずに済む。

余裕がない時ほど、適度な余裕が必要なのである——シリアスな状況だからといってシリアスで居なければならぬ理由など、言ってしまうとどこにもない。

こんな感じで、僕たちは走り続けた。ある程度走り続け、背後からの追撃がいよいよ無くなった——その時、斧乃木ちゃんがそれに気付いた。

「——なんだ、この煙」

「え?」



僕たちは思わず立ち止まった。

辺りを見回すと、確かに、いつの間にか僕たちは深い煙に包まれていた。いつの間に——？

「斧乃木ちゃん、これは一体……？」

「怪異だ……でもどういう怪異なのか分からない。情報が少なすぎる……」

確かに、現段階ではただ煙が辺りに立ち込めているだけである。煙を生じさせる怪異——僕は怪異に詳しくはないけれど、しかし、この如何にもな現象を引き起こす怪異は、決して一種類だけということはあるまい。寧ろ、怪異にはよくあることと言っても過言ではないほど、メジャーな怪異現象だ。

「どうするんだ斧乃木ちゃん。道が見えないぜ」

「正体が分からない以上、退治方法も分からない——ねえ忍姉さん、煙を切ってみてくれない？」

「理由は？」

「それで切ることが出来れば、それでよし。出来なければ、この煙自体は怪異ではないということになって、怪異を絞り込める」

「ふん」

忍は刀を振るった。いや、僕はそれを見ていない。忍は僕の視界外にいる——けれど、感触で動きは分かった。

動いた感触があつてから暫く経ったが、煙は一向に晴れる気配がなく、寧ろより深くなっていった。

「役立たずめ」

「うぬを叩つ斬つてやろうか」

「おい、やめろよ」

なんで斧乃木ちゃんはこうも忍を煽るのだろうか——嫌いを通り越して、寧ろ好きなんじゃないか？

……好きと言えば、斧乃木ちゃんが言ったことを思い出した。けれど、それは今聞くべきことではないだろう。僕にだってそれくらいは分かる。

この屋敷を脱出してから、じつくりと聞くとしよう——なんて言う

と、まるで死亡フラグのようだけれど、しかし現実はそのようなお決まりの形に当て嵌まらないものだ。良い意味でも、悪い意味でも。

「でもまあ、これである程度は特定できたよ」

「え？」

言つちや悪いが、あんなことで特定出来るのか？ 煙自体が怪異でない怪異なんて、それでもまだ沢山居るだろうに。

「まあね。それでも種類によって煙の量とか濃度とかに差があるのさ。その辺りは専門的な話になるけれど——僕の予想が正しければ、この後煙の中に、何か映し出される筈だ」

「何かが——映し出される？」

煙の中に何かが映し出されるというと、僕程度の知識だと、蜃気楼くらいしか思い浮かばない——あれも確か、昔は怪異と思われていた筈だ。今では自然現象であることが証明され、蜃気楼は怪異では無くなったけれど。

「鬼いちゃんの癖に冴えてるね」

「ああ、それはどうも——つて、え？ 冴えてる？」

「うん。冴えてるね。要点を押さえてるよ」

「え？ じゃあ、マジで蜃気楼なのか？」

だとすればおかしい。臥煙さんの言を信じるならば、怪異は正体を暴かれることによつて消滅する筈だ。ならば、既に世間に正体が浸透している蜃気楼は、怪異として存在できない筈でないのか？

「そうだね——その通りだ。けれど、鬼いちゃんの認識には間違いがある」

「間違い？」

「蜃気楼と言われているのは、その”現象”だ。この煙の正体さ」

「ああ、だから——」

「でも、その”本体”は、どうだろう？」

「本体？」

蜃気楼の本体——煙の主。

つまり、暴かれたのは煙の部分だけで、本体は暴かれていない——。だから、煙は怪異じゃないのか。

だから、『心渡』で斬れなかったのか。

「蜃気楼は嘗て、巨大な蛤の怪異とされてきた。その時代の専門家たちは、蜃と呼ばれるその怪異を『暴く』ことで、見事倒した」

斧乃木ちゃんは言う——すると、確かに斧乃木ちゃんの言う通り、煙の中に、何かが浮かび上がってきた。

「けれど、実際には、それは煙の正体を暴いたにすぎない。大気による光の屈折現象——本体は幾多もの国に伝承され、形を変え、未だ暴かれてはいない」

斧乃木ちゃんは言う——煙の中に、ぼんやりとした影が浮かび上がる。小さい貝殻のようなものが沢山。これは、まるで——。

「蛤」

斧乃木ちゃんは言う。

「これで確定した——こいつは『逆さ蛤』だ。逆転した蛤——地味に厄介な怪異を仕掛けてきやがったな、あいつら」

貝だけに。

斧乃木ちゃんは言った——いや、上手くねえよ。

「こよみクラム」

蛤。

マルスダレガイ上科マルスダレガイ科に分類される二枚貝の一種。食用として重要な貝類の一つであり、春の季語としても知られている。

煙の中に浮かび上がってきたのは、まさしくその蛤だった。しかし二枚貝でありながら、その殻は分断されている——逆さ蛤と言ったか。その名の通り、殻は上下逆さまだった。

ここで、一応蜃気楼についても解説しておこう。解説と言っても怪異的な解説ではなく、通説の、暴かれた、科学的に証明された世間一般的な説明である。

蜃気楼とは、密度の異なる大気の中で光が屈折し、地上や水上の物体が浮き上がって見えたり、逆さまに見える現象である。光は通常直進するのだが、密度の異なる空気があると、密度の高い冷たい空気の

方へと進む性質がある。この性質の所為で光は通常とは違う角度から目のレンズに入り、認識の齟齬を引き起こす。これが蜃気楼である。

「逆さ蛤って怪異は、まさにその蜃気楼を引き起こす怪異の一種だ」

斧乃木ちゃんが言う。

「怪異の一種というか、派生と言うべきかな。元々蜃気楼を引き起こす怪異っていうのは、鬼いちゃんが最初に思い浮かべた『蜃』しか居なかった。巨大な蛤の怪異で、主に中国に伝わっていた怪異だ」

「デカイ蛤ねえ」

なんでよりにもよって蛤を想像したのか……いつも閉じられている二枚貝だからか？ こう、玉手箱の中から煙が出てきたみたいなのに、二枚貝を箱に見立てた、とか。

「いや、その辺は知らない。その辺は臥煙さんにでも聞いてよ——この蜃って奴が大元だね。こいつが様々な形で伝わった結果生じたバリエーションの一つが、この逆さ蛤だ」

「なんで伝わり方に齟齬が生じるんだ？」

巨大な蛤なんて、そんなの、別に複雑な姿でもないのだから、特に弄るような所はないような気がするのだけれど。

「それも知らない——けれど、そもそも蜃気楼っていうのはある意味幻覚みたいなものだからね。正体を暴かれる前までは、きっと幻覚ももっと強力なものだったのかもしれない。自分の姿を、偽りの姿に見せていたとか」

「ああ、成る程」

「というか、そう考えないと説明がつかないからね。こいつ、どうも自分の姿を竜に見せていた、っていう伝承もあるらしいし」

「マジかよ」

蛤と竜か……全くと言っていい程共通点がないように思えるが。自衛の手段、だったのだろうか？ いや、怪異をそんな普通の生物と同じようなものさしで測ってはいけけない。そもそも認識されることで怪異は生じるのだから、自衛は寧ろ身を滅ぼすことに繋がる、筈だ。「巨大な蛤が小さな蛤に、ねえ」

それは弱体化と言えるのではないか——いやだから、怪異をそんな常識で測ろうとすることが間違っているのだけれども。

「なんで逆さ蛤って名前なんだ？」

怪異は名前が重要——再三言われてきたことだし、今日斧乃木ちゃん自身も言っていたことだ。名前で縛られているということは、この怪異を突破する糸口も、その名前にある筈。

「考察が様になってきたね、鬼いちゃん。専門家からすればまだまだだけどき——場数を踏んで、馬鹿を踏んで、ちよつと調子に乗ってきたのかい？」

「それは褒められてるのか貶されてるのか、どっちだ」

「どっちもだ」

「どっちもかよ」

「まあ良いけど——今更言うのも遅いけどさ、鬼いちゃん、ちよつとこちら側に踏み込み過ぎじゃない？」

「え？」

本当に今更な話である——急にどうした？

「伝説の吸血鬼の眷属となった時点で、もう普通の生活を送るのは確かに厳しいのは分かるけどさ、でも、それでも多少吸血鬼性とロリ奴隷は残ったにせよ、貴方は半分以上人間に戻ったでしょう？　じゃあ、そのままログアウトしても良かった筈なのに」

「……僕にそんなこと出来ねーよ」

「なんで出来ないのだろう？　ヒーローごっこを楽しみたかったからかな？」

「いや、そんなガキみたいなこと……」

とは言え、あまり否定出来ないところもあった。

少し前、吸血鬼の力に頼り過ぎて、純正の吸血鬼になってしまいかけた事があった。その時は影縫さんや斧乃木ちゃん、臥煙さんに助けられたのだけれど、しかし、その時僕は、吸血鬼の力を得て、それこそ、調子に乗っていたことを実感した。実感せざるを得なかった。

ファイヤーシスターズ——今はもう解散したけれど——に対し、散々ガキだのなんだのと罵ってきたけれど、見事にカウンターを食

らった形だった。

元々僕自身、あいつらみたいなのをやっていた時期もあった——それ自体は、あの学級会で真の正義の姿を知ってしまい、止めたのだけれど、しかしそれでも、僕は僕の理想を、捨て切れなかったのだ。人助け。

ヒーロー。

正義の味方——そんな言葉に魅力を感じない僕であれば、今、こんなことに巻き込まれていないのだ。

ヒーローごっこと言えば、全くその通りである。羽川に、ひたぎに、八九寺に、神原に、千石に関わり、さらにその後も怪異に関わり続けた——馬鹿を踏み続け、首を突っ込み続けた僕を、その言葉以外でどう表現すれば良いのだろう。

「……ヒーローと言うには、些か格好悪すぎるけどな」

「まあ、ボコボコにされながら戦うヒーローなんて、居ないよね」

「ああ」

「つかそんなヒーロー見たくない。テレビで放映しても、間違いなく人気が出ない。」

ボコボコにされ続けるからこそ、ごっこなのだ——ヒーローになりきれない、ヒーローごっこ。

しかし。

それでも。

「僕はそれに、浸っていたいんだよ」

「……………」

「だから今更そんなこと言うな、斧乃木ちゃん。何を言われたって僕は戻らないし、後戻りもしない——少なくとも忍がいる限り、僕はごっこを続けるよ」

「あん？ 儂の所為か？ 責任転嫁しおってからに」

「4分の1位は間違いなくお前の所為だ！」

怪異を知ってしまったのは、忍と出逢ってからのだから。

首を突っ込む場所も増えたというものだ。

「さあ、斧乃木ちゃん。僕のこととはもういいから、こいつをどうにかし

ようぜ。雑談に花を咲かせてる時間もないだろうし——」

「んっふふっふっふっふふふふふ」

「っ!？」

「げっ」

「なんじゃ?」

切り替えていこう、という時に、突如君の悪い笑い声が聞こえた。

この声は——。

「淡海静か」

斧乃木ちゃんが言った。

淡海静。

「んっふっふふ……ふうん? わちきの事をご主人に聞いたのかい?

んっふっふふ……まあどうでもいいけどね」

声だけが煙の中から聞こえる。姿を見せる気は無いらしい。

「これを仕掛けたのはお前か」

「如何にも、わちきさ。んっふ、楽しんでくれているかい?」

「はっ、楽しめる訳あるまいよ。さっさとこの怪異を退かせ。さもな

くば、うぬを喰うぞ。オウミとやら」

「んっふっふ……怖い怖い。流石は旧キスショット・アセロラオリ

オン・ハートアンダーブレード——己を神と偽り、あの男を誑かすだ

けはある」

「あの男を誑かすじゃと?」

忍が鸚鵡返しに聞いた。

「惚けるんじゃないよ、偽神様——死屍累生死郎の件、わちきは忘れた

わけじゃあないんだからね」

「忘れた訳じゃない……? うぬ、一体何者じゃ」

「わちきが誰かなんてどうでもいいさ」

「なら何を知っている」

「わちきは何にも知る気はないよ——どうでもいいことなんか、知っ

ても意味がないしねえ」

「……………」

どういうことだ?

こいつ——死屍累生死郎を知っているのか？ それに、あの男つて、まるで実際に会ったことがあるかのような——。

「けれど、あんたの事は気に入った——阿良々木暦」

「……え、え？」

はい？

な、なんだ。唐突に何を言い出すんだ、こいつは？ 僕、別にこいつに気に入られるようなことをしていない筈だが——。

「久し振りに興味を持ったよ。だからお礼に、怪異のヒントを教えてくださいらう」

「怪異のヒント？」

……何がしたいんだ、こいつは？

僕達を足止めしたかと思えば、今度はヒントだと？ 行動が読めなさすぎる。その場の気分で動いているというか——。

「その逆さ蛤はわちぎのアレンジ怪異さ。けれどもその本質は変わってない——その死体人形が解決策を知ってるんだろう？ じゃあ頑張りな」

「お、おい！ 待てよ！」

「あん？」

声だけで返事をする淡海。

「な、何のつもりなんだ、お前は。僕達に何をさせたいんだ」

「あんた達に興味はない。だから興味あるのはあんただけなんだつて、阿良々木。わちぎはただあんたの行動を観察したいだけさ。それ以外でもそれ以上でもそれ未満でもない」

「つ………」

興味はない。

そうまで言い切るこいつが、どうして僕なんかに興味を抱いた？

……いや、考察は後回しだ。それこそ今はどうでもいいことである。

「斧乃木ちゃん、こいつはどうやれば退治できるんだ？」

「ああ、うん。話が逸れてたけどさ、こいつはその名前がヒント——つていうか、答えそのものの怪異だ」



「答えそのもの?」

「うん」

斧乃木ちゃんはしゃがむと、何かを掴み、僕に手渡した。

「これは……」

渡されたのは、二つに分かれた貝殻だった。

「それ、合わせてみて」

「ん、こうか?」

僕は二つの貝殻を元通りの姿になるよう、重ねてみた。すると、元の姿を取り戻した貝殻は、瞬く間に煙となって消えた。

「これは——?」

「だから、それが答えだよ。逆さ蛤——つまり、ぐりはまだ」

「ぐりはま?」

「江戸時代の遊びの一つ、貝合わせ——そこから来た言葉だ。本来は食い違うことを表す倒語なのだけれど、この場合は語源そのもの、つまり、貝合わせを表す」

貝合わせ。

蒔絵や金箔で彩られた蛤を使った江戸時代の遊び。今でいう神経衰弱のようなもので、カードが貝殻に変更されたヴァージョンである。蛤が採用されたのは、これら二枚貝は、対となる貝殻としか組み合わせることが出来ないという性質を持っていたからだ（引用：羽川ペディア）。

「つまり、同じ貝殻を合わせれば、この怪異は消えるってことか? で  
も……」

煙は一向に消える気配を見せない。先程消えた貝殻は、なんだった  
のだ?

「だから、それがアレンジなんだよ」

「え?」

「本来なら一つだけだった逆さ蛤を、個であったこの怪異を群にした  
——この場に散らばっているであろう大量の蛤の中から、本物を見つ  
け出し、それを消すことで、この怪異は退治できる」

「……………」

傍迷惑なアレンジだなおい!!

「……大量つて、どうして分かるんだい？」

「いや、見えてるじゃん」

「……………」

ああ、やつぱりそういうことなのか……これ、ただの映像だと思っ  
ていたのだけれど。

蜃気楼——全盛期の蜃ならいざ知らず、勘破された蜃気楼が映し出  
すのは、あくまでも地上、あるいは水上の風景しか過ぎない。そこに  
存在しないものは、映さない。

今この蜃気楼の中に映っているのは、夥しい程の貝殻の群れであっ  
た。煙一面が貝殻一色に染まっている。

……………」

……………」

……ふざけんな!!

「この中から探せってのか!? 無理だろ!」

「うん。だから厄介な怪異って言ったのさ」

「嘘だろ……」

マジかよ、何だよそれ。

いやいやいやいや無理だろ! え? 本物を探せ? はあ? こ  
の物量から?

「おい淡海!」

「なにさ」

「なにか」

「ヒントはどうした」

「だからさっきのがヒントだよ? もうないよ」

「さっきのあれ、どう考えてもヒントとして明言するほどのことでも  
なかっただろうが! こっちの方がよっぽどヒントにすべきなんだ  
よ! 僕に礼っていうなら、こっちのヒントを寄越せ!」

「嫌だね。どうでもいい」

「っ——!」

「っ——!」

どうでもいいどうでもいいって……ダメだ、こいつもこいつで、織  
崎ちゃんとは違うベクトルで話が通じない。意思疎通が出来ない奴

等が敵として、しかもコンビを組んでいるとか……なんだそれ。

無理難題もいいところである。

「忍、怪異殺しで一掃出来ないか？」

「ん？ いいのか、お前様？ わざわざこんなに行数を掛けて、こんな雑魚程度の説明をだらだらと記したのに、それらの努力が水泡と化してよいのか？」

「よーいー」

今までの努力とここからの努力は、最早比べるに値しない——努力がつかないか労力って感じだが。

「ぶった切ってやれ、忍!!」

「乱暴じゃのう。まあ儂は良いが——しかし蛤か。惜しいのう。食べたら美味しそうじゃのに」

「じゃあ今度蛤嫌っていうほど食わせてやるよ」

「嫌じゃ。そんなに食うならドーナツの方が良い」

我儘な奴である。

忍は斧乃木ちゃんの方を向いた——既に忍は降ろしてあるので、その動きは視認できる。あばらの感触が懐かしい。

「うぬはそれで良いか？ 専門家」

「ああ、別に良いよ。時間が掛からないのなら、やっちまってくれていい。どうせ僕達に出来ることなんて、貴女のそれを使うか、地道に地べたを這いずりまわって貝殻を探すか、そのどちらかしかないんだからね」

「うむ、では是非もない。ドーナツの為じゃ、協力してやろう」

忍は凄惨な笑みを浮かべながら、刀を構え直した——これ終わった後、果たして僕の財布の中身は、一体どうなってしまうのだろうか。戦々恐々である。

しかし改めて思う——こんな面倒な怪異さえも瞬殺してしまうこの妖刀は、どこまでチートなのだろうか。

斬れないものなど存在しない、業物の刀——しかも、扇ちゃんがアップグレードしたお陰で、今まで斬れなかった最新型にも対応出来るようになった。

そりやあ、専門家達も気が進まないよなあ。こんなもん、商売敵みたいなものだろうし。

なんて考えているうちに、忍の刀が振り抜かれた。はてさてどうなることやら——なんて、呑気に考えていた僕は、矢張り何も学習していなかった。

今この場でまともに怪異と戦えるのは、忍唯一人。

つまり、まともに怪異の攻撃を防ぐことが出来るのもまた——忍唯一人だったのだ。

「っ——!!」

忍は刀を振り抜いた勢いで半回転、僕達に背を向けた。

当然、それはパフォーマンスなんかではない。如何にも忍がやりそうなパフォーマンスだけれども、しかし、今回に限っては違った。

忍は、瓦礫を弾いたのだ。

僕達に向かって飛来してきた、瓦礫——どうして忘れていたのか。淡海静の能力を知る前に、あいつが使ってきた攻撃のことを、どうして忘れていた——!

「んっふっふっふっふっふっふっふっふっふ」

「ちいっ!!」

瓦礫が次々と撃ち込まれる。煙の中から連続して現れる瓦礫を、忍は怪異殺しで弾き飛ばす。

「お前様! 早くしろ!!」

「は、早くって——」

「その怪異を早く片付けよ! でなければ、負ける!!」

「っ——!!」

負ける。

忍の口からこんな言葉が出るとは、思いもしなかった——その理由は、忍の行動にあった。

何故忍は瓦礫を斬らず、弾くだけなのか? それは怪異殺しの性質にある。怪異殺しはあくまでも怪異を殺す刀であり、怪異意外に対しては鈍同然——故にこの瓦礫の前では、妖刀『心渡』はただの棒にすぎないのである。故に、弾くことしか出来ない。

やられた。忍を封じてきやがった、こいつ——！ 見つけろつつたつて、どうやって見つけなければいいんだ!?

僕は地面をひたすらに掻き回す——だが、感じる感触は貝殻、貝殻、貝殻。絶望的な量である。この中から本物を探すなど、砂漠の真ん中で薔薇を探すようなものである。

「お、斧乃木ちゃん！ 何か、手掛かりは?！」

「ごめん、思いつかない」

「即答じゃねえか!!」

悪い冗談もいいところだった。いや、悪くても、冗談であつて欲しかった。

斧乃木ちゃんにもどうすることも出来ない。忍にも頼れない。

——僕に、何が出来るといふんだ?

僕に出来ることなんて——。

その時、天井から再び声が聞こえた。だがその声は、先程までの声とはまるで別のものであった。

「逝ね!! 斧乃木余接!!」

「っ——!!」

その声は、どう聞いたところで、言い訳の余地なく、織崎ちゃんのものであった。

くそっ、完全に忘れていた——こいつ自身も僕達を追跡していたなんて、普通に考えれば、当たり前のことだったのに——!!

煙で見えないが、何かを落としたのか? 斧乃木ちゃんの上に?

だとしたら——まずい!!

「斧乃木ちゃん!! 伏せてろ!!」

「え?」

「っ——!!」

「お前様?」

僕は伏せた斧乃木ちゃんの上に覆い被さった。念の為に言っておくが、押し倒した訳では断じてない。明言しておこう。

織崎ちゃんが狙ったのは斧乃木ちゃんである。しかし、今の斧乃木ちゃんは対抗手段を持たない、言ってしまうえば、ただの童女なのだ。

対し、僕も同じく対抗手段なんて持っていないけれど、それでも、吸血鬼の血のお陰で、ある程度の傷なら耐えることができる。

なら、僕のすべきことは一つだった。

降ってくる何かから、斧乃木ちゃんを守る——それが出来るのは、他でもない、僕だけだったのだ。

「くっ……ぐあっ……い！」

思わず苦悶の声を上げてしまう——織崎ちゃんが落としたのは、大量の刀だった。斧乃木ちゃんに直撃するまでになんとか間に合ったが、しかし、身体のおちこちに刀が刺さり、血が吹き出た。

つか、痛みが尋常じゃねえ……！ これ位の痛み、それこそ何度も経験したけれど、それでも慣れる訳ねえだろうが……!!

「え？ ちよつと。マジで何やってんのさ鬼いちゃん。馬鹿なの？」

いや馬鹿なのつか、馬鹿だろお前」

「斧乃木ちゃん……労いの言葉くらいは……無いのか……」

「ある訳ねえよ。つか頼んでないし——貴方、死にたいの？ 何やってるのさ。これ位じゃあ僕は死なないよ。元々死体な訳だし、火でもなんでもないし——何やってるの、貴方」

中々辛辣な言い様だった。けれど、僕はそれを責める気にもならない。その通り、頼まれてなんかいない。僕が勝手にやって、勝手に痛い思いをしているだけなのだから。斧乃木ちゃんの言っていることは、正しい。

「斧乃木ちゃん……僕は、君を守る為に、付いてきたんだぜ」

ヒーローごっこというなら、それまでだ。

けれど、誰かが傷付けられようとしていて、しかし自分はそれから守ることが出来るのであれば、僕のとる行動は一つなのだ。

自分が出るのにやらないなんていうのは、ごっこなんていう以前に、ただの人でなしだ。

悪役である。

人でなしというのなら、それこそ、究極的には人ではない僕にぴつたりな言葉だが、けれど、僕は今や殆どが人間なのだ。

じゃあ、やらなきゃダメだろ。

打算なんて無い。僕は、僕がやって当然のことをしたまでだ。辛いだつて、本当は要らない。況してや人気なんて、それこそどうでもいい。

「守る為に付いてきたんだから——守らなきゃ、ダメだろ」

「……………」

「がはっ!!」

思わず僕は血肉を吐いた。吐瀉物を童女に浴びせるとか、とことんまで僕って奴は、主人公の器じゃないなあ。

「…………ペロリ」

「いや斧乃木ちゃん…………何で舐めた…………」

斧乃木ちゃんは僕の血肉を舐めた。この状況で何やってんだよ。

「何やら雑談の声が聞こえますわねえ——まだ死んでなかったか」  
「つ……………」

マズい、バレた——また、刀を降らす気か…………!

僕は忍を見た——忍にも限界がきているようで、息を切らしている。じりじりと後退を余儀なくされているようだ。

もう、駄目なのか？

どうしようもないのか——!?

「…………いや、どうしようもあるぜ」

「…………え？」

斧乃木ちゃんが言った。

「退いて、鬼いちゃん」

「な、何を——」

「いいから」

「うわっ!?!」

僕は斧乃木ちゃんに振り払われるように吹き飛ばされ、転がった。貝殻がじりじりと音を立てる。身体に突き刺さった刀はいつの間にか消えていた。織崎ちゃんが回収したのか？ 糸を使って——。

僕は斧乃木ちゃんをみた。すると、斧乃木ちゃんは立ち上がり、頭上に向け、人差し指を向けていた。

——人差し指、だつて？

そういえば、きつきのパワーはなんだ？ 斧乃木ちゃんは、普通の童女くらいの力しかないと言っていたが——まさか。

アンリミテッド・ルールブック  
「例外の方が多い規則——いえーい、びーむびーむ」

斧乃木ちゃんがその台詞を言うと同時に、その人差し指が肥大化し、煙を貫いた。その衝撃で周囲の煙が晴れ、蛤が散った。

まるで巨大な爆発のようなそれは——斧乃木余接の完全復活を意味していた。

「019」

「ちえっ、また外したか。今日は散々だぜ、全く」

斧乃木ちゃんはぼやいた。人差し指は既に元の大きさに戻り、その指先が示すのは、大破した天井だけだった。

「あの女、感付きやがったな。それで織崎記を助けに行ったか——ちよつと、そののロリ婆。なんでもつと長くあいつを拘束してなかったのさ」

「儂の所為にするな！ ちゅーかロリ婆っていうな！ 拘束するつちゅーか、寧ろ儂が拘束されとつたのじゃが！」

「じゃあなんでもつと長くあいつに拘束されてなかったのさ。お陰で仕留め損ねた」

「だから儂の所為にするなつちゅうに！」

疲弊しているとはいえ、相手は『心渡』を持った忍である。そんな彼女に対し、こうも齒に絹着せぬ事を言えるところだが、まさしく斧乃木ちゃんである。

「ちえっ……鬼いちちゃん、大丈夫？」

「あ、ああ……大丈夫……平気だ……」

嘘である。

気持ち的には平気だったが、肉体的には全く平気じゃなかった。

「やれやれお前様、また無茶をしおってからに……ほれ」

「……………」



忍は手首をポキリと折ると、その傷口から流れ落ちる血を僕に浴びせた。すると、僕の傷はみるみるうちに塞がり、それと同時に、忍の手首は消え、傷口からは新たな手首が生えてきた。

「悪かったな、忍。ありがとう」

「言葉だけで済むと思うとるか？　当然、胸を撫でてくれるのであるのだろうか？」

「ああ、胸でもあばらでもなんでも撫でてやるさ」

「かかつ、ならよいわ」

よいのかよ。

僕としては、さらにドーナツを上乗せされることを予期して恐れていたのだけれど、どうやら杞憂だったようだ。

「え？　それ、口に出して言わにやいかんかったのか？　儂が言うまでもなく、当然、お前様が自発的に上乗せしてくれると思っておったのじゃが」

「ですよねー！」

まあ、上乗せするけれども。言うまでもなく、当たり前だ。

「鬼いちゃん、忍姉さん。漫談するのは後にして」

斧乃木ちゃんは天井から目を離さずに言う。僕らも上を見た。

「……………」

「んふっふふふふ」

天井に張り巡らされていたのは、巨大な蜘蛛の巣だった。その上に、織崎記と淡海静は立っている。

「…………危なかったですわ。静が間に合わなかったらどうなっていたとか」

織崎ちゃんは僕らを睨みつけながら言った。その手には鏢のない刀が握られている。先程の毒刀も鏢無しの刀だったが、あれとは違い、特に目立つ装飾のない刀だった。あの刀で、斧乃木ちゃんの攻撃を防いだのか。

「残念だったね、織崎記。予習が足りなかったな。特に、鬼いちゃんの馬鹿さ加減については」

「そのようですわね…………予想外な行動をかましてくれますわね、阿

良々木曆

「……………」

「とは言え、私、ここでみすみすあなた方を見逃す気はございませんの。希望なんて否定して差し上げますわ」

「止められるかな？ 僕はある程度、回復したぜ」

「ええ、止めて差し上げますとも——視界を封じるという手によって！」

「あ」

斧乃木ちゃんが、そんな間の抜けたような声を出すのと殆ど同時に、再び煙が僕たちを包んだ——まだ逆さ蛤は機能しているのか。

「たかが二人？ それがどうしたのでしょうか——私達も二人ですわ。斧乃木余接と忍野忍、この二者を妨害すれば、残るのは阿良々木曆唯一人——阿良々木曆に出来ることは、床に這いつくばって、本物を必死に探すことしかできませんのよ」

確かに、その通りである——もしも向こうが一人か、或いはこちらが三人だったらよかったのだが、これでは結局、この怪異を退治することは出来ない。いや、根気強くやれば出来るのだろうが、今そんな時間の余裕はない。

「否定致しますわ——希望なんて否定する。否と定めて否定致しますわ」

「んふっんふふふ」

織崎ちゃんと淡海の姿は煙に隠れて見えない。どこから襲ってくるのかまるで分からない状況——戦局は未だ、僕らの方が圧倒的に不利だった。

「ふん、うぬと共闘するとはな——おい、裏切るなよ」

「お前こそ。間違つて僕の体なんて斬るなよな」

「僕の腕を甘く見るな」

「僕の指を甘く見るな」

忍と斧乃木ちゃんは、僕の前後にそれぞれ陣取り、刀と指を構えた。

「お前様、早く探せよ。それがお前様の仕事じゃ」

「出来ることをやるんでしょ？ じゃあやつて」

「……ああ」

言われなくても！

別に幼女と童女に頼まれたから、なんて不埒な理由ではないけれど、僕は奮起した。出来るだけ早く、本物を見つけ出してやる、と意気込んだ。

僕はその場でしやがみ込み、手近な貝殻を拾った。そして、合わせようとした——次の瞬間。

バキバキ——と、屋敷が軋むような音がした。

「何ですの!?!」

織崎ちゃんの声が聞こえた。

と同時に、煙が一瞬にして晴れた。何が起こったのか突然すぎて訳が分からなかったけれど、煙が晴れ、貝殻が一枚残らず消滅したその光景を見て、僕は得心した。

思わず、叫ぶ。

「だから——もうちよつと他になんかないのかよ!?!」

八九寺い!!

貝殻の代わりに床を埋め尽くしていたのは、今度は大量の蛞蝓であつた。

そして、蛞蝓が大量に雪崩れ込んできた所為で大破した壁近くで仁王立ちしている少女は、悪戯っぽくにかりと笑つた。

「失礼、這いました」

這うなんてレベルは、どう見てもとつくに通り越していた。

「020」

「八九寺真宵——!?! な、なんで——!!」

狼狽する織崎ちゃん。いや、狼狽えるというなら僕も相当狼狽えたが、この時の織崎ちゃんの動転は並大抵のものではなかったということをお伝えせねばなるまい。

「どうして貴女がここにいるんですの!?! あ、貴女は途中下車した筈——!」

「ふっふっふ、残念でしたね。私を甘く見ないことですよ、織崎さん。

途中で降りたからと言って、私が物語から降りると思ったたら大間違いです！ 何せ私はプロデューサーでして、絶対に降りてはならない身なんですよー。私が降りたら、打ち切りになってしまいますー！」

「ぐきぎきぎきぎき……!!」

悔しげに声を漏らす織崎ちゃん。それを見て満足げに八九寺は続ける。

「おやおや〜？ どうしたのですか織崎さん？ 随分と悔しそうですね〜。いえいえ、悔しいのは私の方なんですよ？ まさか阿良々木さんに拒絶されるとか、夢にも思いませんでしたよ！ 途中下車させられた時は、割と本気で心が折れかけましたけれど——いやしかし、神様にこうして逆らっておいて、なんの祟りもないと思っていたのなら、その考えは間違っています！ ミステイクです！ 神様を甘く見るとは、この万物信仰八百万の我が国においては言語道断！ 不肖この八九寺真宵、神様の一角、新参者のお仕事として、不敬な者を改めさせねばなりません！ ご覚悟！」

「かつけえーっ!!」  
思わず叫んでしまったけれど、いやマジでかつけえ!! 八九寺超かつけえ！ いつの間にそんな神様っぽくなっちゃったんだよお前！

くそっ、やばい。手を合わせたようになってきたぞ。二礼二拍一礼したくなってきた。特に信仰している神なんていない僕だけれど、こんなものを見せられてしまえば、魅せられてしまうじゃないか。八九寺神、信仰しちまうぞおい。

そうか、キリストを崇めてた人たちってこんな気持ちだったんだな……救世主っていうなら八九寺も今の僕たちにとっては救世主に他ならない訳で。

ロリ神信仰、これは流行る。っーか流行れ。

「相変わらず貴方はロリカッターですね、はまぐりさん」

「こんな状況でも嘔むというお前の緊張感の無さには呆れを通り越して感嘆を覚えるけれど、しかし八九寺。僕の名前をタイムリーな二枚貝みたいに言うな、僕の名前は阿良々木だ。っーか一文字も被ってね

えよ、母音も被ってねえわ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ……」

「かみまみだ」

「わざとじゃない!?!」

「神ました」

「後光が眩しすぎる!!」

壁を破壊して這入ってきた関係上、その壁からは光が差し込んできている訳で。八九寺は破壊して出来た穴の真ん前にいる訳で。リアルに後光が差ししていた。

「っ—か光が差ししてるってことは、もう陽が出ているのか……どうやって帰ろうか。いや、まだ車通りはない筈だし、大丈夫かな——」。

「何を呑気に話しておりますのよ!! 帰れると思って!?! 静! 逆さ蛤が機能していませんわよ!! 早く復活させなさい!!」

織崎ちゃんが叫ぶ。そうだ、逆さ蛤!

なんで煙が消えたんだ? 僕はまだ一枚も合わせていないのに——  
—蛞蝓の群れが、煙を遮っているのか?

「無駄ですよ幽霊さん。あの怪異を出したところで、この私がこの場にいる時点で機能することは決してありません!」

「どういうことですか!?!」

「んふふ……ご主人、少し考えれば分かるだろう?」

「えっ……?」

怪異の知識には疎いのか、どうして逆さ蛤が封殺されたのか分かっていない様子の織崎ちゃん。人のことを言えないが、なんか新鮮だな……。僕の周りにいる奴らって、鋭い奴ばっかだったし。

とはいえ、僕と一緒にしてはならないようだ。織崎ちゃんはすぐに分かったらしく、軽く舌打ちした。因みに言うまでもなく、僕は分かかってない。

「何だよ、お前分かかってなかったのかよ。考察も何もありませんねえぜ  
全く」

「専門家じゃねえんだから、専門家の真似事なんかやったところでど

うにかなる訳ねえだろうが。じゃあ、君は分かっているのか？」

「当たり前だろ。僕を誰だと思ってるんだい？ お前のご主人、斧乃木余接様だぜ」

「僕は君の下僕になった覚えはないが」

「そうじゃ、こやつは儂のあるじ様じゃ」

「じゃあお前も僕の下僕だね、忍姉さん」

「うぬの下僕になんぞ死んでもなりたくないわ！」

まあ、それは置いておこう。閑話休題だ。今はそんなおふぎけをしている場面でもない。おふぎけして行数稼ぎをするほど、行数が少ない訳ではないのだから。

「おいお前様よ。良いのか？ それはともかくで儂とうぬがこいつの下僕ということを見無視して良いのか？」

「それは後だ忍。取り敢えず今は我慢してくれ」

優先順位を見失うな——あんまり調子に乗っていると、いつ織崎ちゃん達が隙をついて殺しにくるか分からない。

「じゃあヒント。真宵姉さんは何の神様？」

斧乃木ちゃんは言う。これはすぐに分かった。一度同じヒントを出されたことがあるのだから。

「蝸牛の神様だな。でも、それが今回どう関係するんだ？」

前回の問題の答えは、蝸牛の近縁種であるところの蛞蝓を八九寺が操った、ということだったが——まさか今回も同じ訳はあるまい。

「いや同じだよ。なんで違うと思ったのさ」

「え？ マジで？ いやだって、蛞蝓と蛤って全然違うじゃん」

「馬鹿が」

「直球だなおい！」

「蝸牛と蛤——つまり貝は、近縁ではなくとも遠縁だ。蝸牛の神様なんて、言ってしまうえば陸貝の神様だ。そりゃあ、同じ貝類である蛤は支配できる」

……そんなもんなのか？

じゃあつまり、今この場にいた蛤は、全て八九寺の眷属と言っても差し支えない存在って訳か——おいおい、八九寺さん、あんたいつか

らそんなチートな存在になったんだい。本当にプロデューサーじゃねえか。

「まあ陸貝だから、海の貝は多少操り辛いかもしれないけど、蛤には虫偏が入っている。蝸牛と名乗っている分、蛤は操りやすいだろう」

八九寺さんばねえ。

この場にいる生命体のうち10分の9位が八九寺の配下ってことじゃん。なんだそれ。

改めて畏敬の念を込めて八九寺を見たが、八九寺は可愛らしく小首を傾げている。うん、こいつ絶対そんな細かいこと分かってねえ。感覚だけで動かしてやがる。

それはそれで恐ろしいのだが——兎も角。これで逆さ蛤は封殺したどころか、寧ろ味方になった訳だ。

「さあ、阿良々木さん。行きましようか」

八九寺が言う。

「え、行くってどこに」

「そりゃああなた、逃げるんですよ」

「逃すと思いませんか？」

僕が言葉を返す前に、織崎ちゃんが再び刀を構えた。今度は先程の刀——つまり、毒刀『鍍』を。

「この程度の虚仮威しで私は怯みませんわよ。寧ろ飛んで火に入る夏の虫——この場で貴女も始末致しますわ!!」

「それは無理だぜ織崎記」

斧乃木ちゃんが人差し指を織崎ちゃんに向けて言う。

「僕はもう回復した。動けば、今度こそお前をぶっ飛ばすことが出来る」

「っ——!!」

織崎ちゃんは絶句したが、助けを求めるように淡海を見た。けれど、淡海は首を振る。

「こりゃあ無理だねえ。何と言っても怪異殺しがわちきは怖い。それに神様だっている——二対三どころの話じゃない」

「そ、そんな……」

「今のところは諦めな、ご主人。殺すことよりも、寧ろわちき達が逃げる事を考えた方がいい」

「はあ!? 逃げる!?!」

「これでは分が悪すぎる——このまま特攻して死ぬか、ここで逃げて次のチャンスを待つか。わちきはどっちでもいいんだよ? どうでもいいし」

「ぐぎぎぎぎ……」

僕達を睨み付ける織崎ちゃん。まさか彼女も、ここまで戦況がひっくり返るとは思っていなかっただろう。僕も思ってたなかった。

「貴方と一緒にしないで頂きたいですね、阿良々木暦!!」

ぐう、と観念したような声を出すと、織崎ちゃんは言った。

「……分かりましたわ。静——では、逃げましょう!」

「はあい」

「逃がすとお思いですかね!?!」

「逃がさないぜ犯罪者」

「逃がさんぞキャラ被りめが!」

思った以上に好戦的な幼女と童女と少女の三人——童女と少女は分かるが、しかし幼女。お前はただの逆恨みじゃねえか。後お前が思ってる程、キャラ被ってねえよ。

「んふっふっふ——さあ移動の時間だ! 豪那!! ごうな この子達を追い出さな!!」

豪那——だと?

なんだそいつは、またぞろ新たな怪異か——などと僕が考えている間に、考えるまでも無く、僕たちは雪崩のように迫り来る蛞蝓の荒波に巻き込まれた。

「っ——忍! 僕の影に戻れ!」

「な、なんじやお前様よ! 儂にポケットなモンスターみたいな扱いをするとは!」

「うるせえ! いいから戻れ!」

「ちっ!!」

舌打ちすると、忍は僕の影に潜った。この状況ではぐれる訳にはい



かないのだ。僕と忍が離れると言う事は吸血鬼度の低下を意味し、ただでさえサンドバッグの役割しかないような僕が吸血鬼度を失えば、サンドバッグにさえなれないではないか。

「くっ、なんだこれ……！」

「わ、わわわ！」

斧乃木ちゃんと八九寺もまた、蛞蝓の波に吞まれていた。斧乃木ちゃんは兎も角としても、八九寺、お前それでいいのか——と思わないでもないが、しかしこんなものどうしようもないだろう。蛞蝓は別に怪異ではないのだから。

斜めになった床にへばりついていられるのは——下面が床にひつついている下層の蛞蝓に限られているのだから。

そう。

僕たちは雪崩に巻き込まれていたのではなかった。いや、確かに雪崩に押し流されてはいたのだけれど、しかし、それが原因で流されていたのではなかった。

真の原因はそれではない——僕たち自身も、その雪崩の中の一つであつたのだ。

斜めになった床——粘液も何も持たない僕達は、屋敷から転げ落ちていていなのだ。それはまるで重力が横にあるような奇妙な感覚で、僕達はなす術もなかった。

「おーっほっほっほ！ どうですか？ 阿良々木曆、斧乃木余接、八九寺真宵！ 豪那の前に手も足も出ないようですよわね！ 否、豪那の中で、というべきでしたか？ ふふふ、まあどちらでも良いでしょう！」

高らかに笑う織崎ちゃん（いやなんだよその笑い方）はというと、雪崩に巻き込まれていない。彼女は蜘蛛の糸を使い、この屋敷の壁に張り付いていた。

豪那の中——どういうことだ？ 斧乃木ちゃんなら何か知つていそうだけれど、生憎斧乃木ちゃんは僕から遠く離れた場所で落下していた。これでは尋ねることが出来ない。

僕達は八九寺が開けた壁の穴から転がり落ちた。いや、排出されたと言った方が正しいか——大量の蛞蝓の海ごと放り出された僕は、斜

めに傾いたその屋敷を見て、啞然とした。これが豪那なのか？　なんだ、この怪異は――。

「これで勝ったと思わないことですよ、阿良々木暦！　私たちがその気になれば、いつでもどこでもあなた方を殺せるということを努力お忘れなきよう！　では、ご機嫌麗しゅう――！」

「んっふっふっふっふ――」

蛞蝓の粘液が体中に纏わりつき、自由に動けない僕達を見下しながら、織崎ちゃんはそんな負け惜しみのようなことを言った。

すると、驚くべきことに、傾いた屋敷が段々と空中に浮かび始めたではないか。僕達はその光景を見て、再び啞然とした。いや、本当にこれ以外に合う言葉が見つからないのだ。

だって、浮き上がった屋敷の下には、大きな生き物がぶら下がっていたのだから――巨大な、甲殻類が。

これが豪那か――あの屋敷自体が、怪異だったということか。

屋敷が傾いたのは、何てことはない、あの甲殻類のような怪異が、屋敷を傾けたからなのだ。そう考えれば、屋敷が傾くなんていう怪奇現象にも説明がつく。いやまあ、あの甲殻類のような怪異について、一切も分からないので説明も何もあったものではないのだが――。

屋敷の怪異は、織崎ちゃんと淡海を乗せ、どんだん宙に浮いていった。甲殻類が空を飛ぶのか、と思ったけれど、よく見れば屋敷と甲殻類の部分に幾重にも蜘蛛の糸が巻き付けられている。これで引き揚げているのか？

蜘蛛の糸の強度は鋼鉄の約5倍という。況してやこれは怪異の糸。その強度は計り知れないものだろう。あの大きさの屋敷とその下にくっついていて何かを引き上げることなど、造作もないことなのかもしれない。問題は、何に引っ掛けて引っ張り上げているのか、というところだが――それも怪異だから、とかそういう理由で説明がつく――のか？　どうなんだろう？

……よく僕達生きてるな。あんな糸を使うような奴相手に――織崎ちゃん、あの子と蜘蛛、どんな関係があるのだろうか？　どんな関係があるにせよ、積極的に相手にしたくないのは確かである。

それに淡海。あの怪異もあいつが作ったものなのだとすれば、あいつの本領はどんなものなのだろうか。想像もしたくないし、想像もつかない。僕個人の意見を言わせてもらえば、織崎ちゃんよりあいつの方が厄介なように思える。

あの『鎧』を作ったのだから、淡海なのだ——道中のレイニー・デヴィルも、あの淡海が作ったものだろう。

などと考えている間に、あの巨大な屋敷は姿を消した。目の前に広がっていたのは、ただの荒れ地だった。

あの屋敷が、織崎ちゃん達がどこへ消えたのか、僕にはまるで分からないけれど、しかし、これだけははっきりしていた。

——これで勝ったと思わないことですわね！

織崎ちゃんその言葉通り——僕達は再び相見えることになるだろうということだけは、否応なく理解せざるを得なかった。それがいつになるのか、どんな形になるのかは、分からないけれど。

「021」

後日談というか、今回のオチ。

織崎ちゃん達を見事(?)撃退した僕たちは、退避する蛞蝓に手を振る八九寺に問うた。

「そーいや八九寺、なんでここが分かったんだ？ 蛞蝓に調べさせたのか？」

「いえ、私は蛞蝓の言葉は分かりません」

「じゃあなんで」

「扇さんが教えてくれました」

「……………」

扇ちゃんが絡んでいたようだ。

その言葉はどうやら嘘ではなかったようで——いや、別に八九寺を疑っていた訳ではなかったのだけれど——荒れ地から暫く歩いた先の曲がり角。八九寺に案内されるがままに曲がった僕たちが見たのは、僕の愛車の隣に、別の車——真つ黒いフォルクスワーゲン・ザ・ビートルが停まっていた光景だった。

それだけでもう何となく察したけれど、窓から乗り出し手を振る扇ちゃんを見て、確信した。

「君、無免許運転したな!？」

「はっはー、まあそう堅いこと仰らないでくださいよ、阿良々木先輩。臨機応変にいきましよう」

「何でもかんでも臨機応変と言っておけば許してもらえると違うな！

法定速度とかそんなレベルじゃねえよこれ！ 真っ黒だよ！」

「そりゃあダークこよみんである私ですし」

「うるせえ！」

本来なら警察に突き出すところだけれど、今回は見逃してやった。扇ちゃんのお陰で助けられたというのもあるし、何より、裁判なんかでは怪異である扇ちゃんは裁けないだろう。

人が裁けるのは、人だけなのだから。

「扇ちゃん、なんでここが分かったの?」

八九寺に聞いたのと同じことを聞いた。

「知ってたのかい?」

「私は何も知りませんよ。貴方が知っているんです——阿良々木暦あるところに忍野扇あり、ですよ。影は本体から離れることは出来ませんからね」

とのことだった。扇ちゃんらしい理由だ。

僕たちは、僕の愛車であるニュービートルに乗って家路についた。ザ・ビートルに乗るかどうかでは別に揉めなかった。というのも、この真っ黒い車、扇ちゃんの物質創造能力で作り出したものらしく、あるべきパーツがあつたりなかったりするらしい。もし万が一検車などをされた場合、僕は警察のお世話になってしまおうだろう。

運転手は勿論僕。扇ちゃんが志願したが、当然却下した。しかし、助手席に乗せることは渋々ながら了承した。

「扇さんの運転、凄く上手かったですよ！ 阿良々木さんが仮免許とするなら、扇さんはゴールド免許ですよ！ 絶対！」

とは、八九寺の談である。免許のグレードはそういうものではないのだけれど、まあ言わんとすることはよく伝わってきた。流石は僕の

真逆である扇ちゃん、僕の短所を悉く長所としてやがる。

といったお墨付きを貰った以上、邪険にするわけにはいかなかった。助手というなら、全く、これ以上ない程有能な助手だろうから。

八九寺と斧乃木ちゃんは後部座席に乗った。忍は眠いとかなんとかで影の中に潜った。何度寝だよおい。

全員が乗り込んだというところで、いざアクセルを踏もう、として、そこで慌てて止まった。そうだ、一つ聞きたいことがあったのだ。

「ねえ斧乃木ちゃん、あれってどういうこと？」

「あれ？」

「うん、友達以上として、ずっと大好きだったってやつ——あれ、まさか本気か？」

「本気な訳ねえだろ。都合良く解釈してんじやねえよばーか」

「……………」

一瞬で否定された。

「…………じゃあ、なんであんな状況であんなこと言ったんだ？ 冗談なんて言える空気じゃなかったろうに」

「まあね。あの時は僕も弱体化してたし、まさに手も足も出なかった——でも、口は動かせるだろ？ だから僕はそれに賭けたのさ」

「どういうことだ？」

「あなたを動揺させる——あなたの動揺は忍姉さんに伝わるらしいからね。忍姉さんに助けて貰うために、無理矢理起こす為に、あなたを動揺させたのさ」

僕と貴方は友達以上、親友未満の関係だ。

斧乃木ちゃんは言った。

そういう理由か…………。

確かにあの時の動揺といったら、織崎ちゃんの目的を聞いた時の動揺とさえ比較にならない程、洒落にならないほどの衝撃であった。そりゃあそれ程の動揺が伝われば、忍だって起きるだろう。

「僕としては作戦が成功して万々歳なんだけど。でも鬼いちちゃん、貴方、彼女が居る身の癖に、何童貞みたいなことで動揺してんだよ。そんなことでいいのか、お前」

「しようがないだろ。童女に告白なんてされて動揺しない男なんてこの世にいなえよ」

「動揺するなら兎も角、それを本気に捉えるような男はただの変態だ。ロリコンと言う名の」

「失礼な。僕はロリコンなんかじゃないぞ」

「だつてさ。真宵姉さん、今の発言どう思う?」

「真つ黒な嘘です。有罪です」

「だつてさ」

「僕はロリコンなんかじゃない信じてくれよ!!」

ロリコンと勘違いされる主人公か……全く、とことんまで主人公じゃねえよなあ、僕。

「いやいや、今回は主人公らしかったよ鬼いちちゃん」

「え?」

らしくもなく肯定するようなことを言う斧乃木ちゃん。しかし僕は経験則から知っている、こういうことを言う時の斧乃木ちゃんは、間違いなく続けて悪口を言ってくるものだ。

さて、今回はどんな直球を投げてるのだろうか。幾らでも受け止めてやるぜ、と意気込んだ僕に斧乃木ちゃんが投げてきたのは、直球も直球の言葉だった。

「ありがとう、鬼いちちゃん。お陰で助かった」

「ええっ!?!」

思わず僕は、一瞬だけアクセルを踏んでしまった。車が少し進んだ——というか跳ねた。感覚的に。

「お、お、斧乃木ちゃん!?! どうした!?! まだ気分が悪いのか!?!」

「貴方、僕をなんだと思ってるのさ。あと僕の名前は斧乃木だ」

「悪い、噛んだ」

「だろうね」

「繋がらねえ!」

うむ、やはりこれは八九寺と僕でしか出来ないネタなのだ、と再確認した上で(因みに今噛んだのはわざとじゃない)、僕は斧乃木を見た。普段とまるで変わらぬ、無表情。

「君が礼を言うなんて……どういふ風の吹き回しだ？ 助かったって……あれか？ 僕が君の盾になったことか？」

どうやら僕は斧乃木ちゃんを誤解していたようである。斧乃木ちゃんと言えば初期のひたぎのキャラを少しマイルドにしたような性格の子、お礼と言っても上から目線で労ってくるタイプの子だと思っていたのだが。まだまだ観察力が足りないな。これはもつとスカートの中をじっくりと……。

「斧乃木さん、気を付けてください。あのロリコン、お礼に託けて貴女のスカートの中を覗くつもりですよ」

「マジかよ。お礼の言い損もいいところだな」

やるな八九寺。もう僕の企みを見抜いてやがったか。

「まあ、僕が礼を言ったのは、確かに守ってくれたことにもなんだけど——それ以上に、あのタイミングで肉を食わせてくれたことに、僕は割と感謝している」

「肉？」

肉なんてどのタイミングで食べさせてあげたっけ、と思ったが、あの時か。内臓をぎつくぎくに刺され、思わず血を吐いた時。あの血の中に、そう言えば少量の肉が混じっていたような……。

あの時斧乃木ちゃんは僕の血肉を舐めていたけれど、あれのことか？

「まあ、マッチポンプでもあるんだけどね——肉を食べたお陰で、僕の体力はある程度回復したのさ」

「え？ 何その吸血鬼みたいな設定」

「吸血鬼じゃない、付喪神だ。それも死体のね——血は問題じゃあなくて、重要なのは肉の方だった。お前に気持ち悪いこと言われた所為で僕、吐いたろ？ あの時、僕は肉を吐いたんだよ——だからその補充が出来た」

死体の付喪神。

死体とは言うなれば、肉の集合体である。命を失った肉体は、ただの肉塊でしかなく、だからこそ体の一部である肉を失う事は、死体である彼女にとって大きな打撃となってしまうた。

しかし、その減った分の肉を僕の肉を食らうことで補充したという訳か——そういうことならつまり、斧乃木ちゃんは別に完全復活した訳ではなく、数パーセント力を取り戻したただけだったのか。

「まあ、そういう意味でだよ。でも、さっきも言ったけど、これただのマッチポンプだからね。お兄ちゃんがあんなこと言わなければ、そもそもここまで苦戦することはなかったであろうことをお忘れなく」  
「わ、悪かった……」

やれやれ、つくづく足手纏いな男だなあ、僕は。自分の責任を自分で取ったというだけで主人公らしいことをしたって扱われるって、これ実は僕、相当酷い扱いされてるんじゃないか？

普段の僕って一体……。

まあ、けれど、お礼を言ってもらえたという事実、ただそれだけで、僕がああの行動にでた価値があったというものだ。別に見返りを求めていた訳ではないけれど、こうして僕の行動が無駄ではなかったと伝えてくれるというのは、僕にとって非常に有難いことであった。

無駄と言えば、いつまでもこうして車の中で雑談しているのも中々無駄な時間だと気づいた僕は、慌ててアクセルを踏んだ。

僕の車はゆっくりと進む。この無駄に遅いスピードだといつ家に到着出来るか分かったものじゃないのだけれど、しかし車は確かに進んでいた。それは僕たちが死地から生還した証であり、未来へ進んでいる証でもあった。

〈衣物語 完〉

〈読了感謝〉

〈裂物語に続く〉



## ウラガタリ おうぎヘルメット

「001」

「はいはい、第一セクションは、〈物語〉シリーズ恒例の、メインキャラのフルネームから始まる語りですね。今回はおうぎヘルメットなので、不肖私、忍野扇が務めさせて頂いております」

「はっ、何がおうぎヘルメットじゃ。確かにうぬが活躍する回ではあるが、しかしどうじやろう、これ分ける意味があったのかの？」

「ええ、確かに。内容的には、次回のしるしメイクの完全なる前日譚ならぬ直前譚ですからね。しるしメイクの一部としても、違和感はありませんね」

「ほう。認めるのか」

「間違っていない事は認めますよ。正しいですからね——裏事情を話してしまうと、じつはこのプレシーズン、何らかの短編が一話、そして続きとなる長編が一話で一つの物語になる、という形式になる筈だったのですよ」

「む？ 裏事情とか喋ってよいのか？」

「裏設定や裏事情をお話するのが、このウラガタリですからね」

「……気になっておったが、なぜウラガタリという名前なんじゃ？」

副音声でもなければ裏音声でもない、アトガタリでも後書きでもなく、なぜウラガタリなのじゃ」

「あれ、聞いてなかったのですか？」

「聞いておらんわ。ちゅーかこの企画自体聞いておらんわ。聞いておったら事前にキャンセルしたものを」

「酷いですねえ。そんなに語りたくありませんか」

「うぬが嫌なんじゃ！」

「嫌な奴ですねえ。まあ、この名称については、先程挙げて頂いたアトガタリの影響が強いですかね。最初は普通に副音声にしよう、という話だったのですが、いや、そもそもこれ音声じゃねえじゃん、声出てねえじゃん、ということ、これは当然の如く却下となりました」

「同じ理由で裏音声もアウトか」

「ええ。しかし、かといつてアトガタリにするというのは、ちよつと違いますね。あれは二次元から離れた三次元の対談ですし。後書きはそもそも違いますしね」

「ほう」

「最初、予告では色々表記が変わってたりしたんですよ。そんなところまで覚えていらつしやる読者さんはおられないと思いますが、裏小説だったり副小説だったり、ちよこちよこ変わっていたんですよえ」

「迷惑な話じゃのう……」

「ええ、全くです。こういうのはきちんと決まってから予告するべきだと思えますね、私は」

「まあ、そうじゃな」

「話を戻しますが、この二つが結局却下されたのは、語呂的な事情なんですよ。副小説、裏小説、どちらもいまいちしくりこないでしよう？」

「それは人それぞれではないかのう」

「しくりこなかつたらしいんですよ、この作者は」

「む？ 作者ネタは使ってよいのか」

「よいです。ただし、本編では依然禁止ですがね」

「そうか」

「というわけで語呂がいいかんじになったがために選ばれたのがこちら、ウラガタリです。裏音声のウラと、アトガタリのガタリを組み合わせたもの。つまり、両方のハイブリッドみたいなも、という意味合いでしようか」

「ふむ……裏音声というか、副音声要素は、まあ入っておるのじやろうが、アトガタリ要素はどうやっていれるつもりじゃ」

「知りません。そこまでは聞いてませんから」

「ふん、役に立たん奴じゃ」

「おや、続終物語における私の活躍を知らないと仰る？」

「また宣伝か……」

「本編での宣伝要素は出来るだけ控えめになる予定らしいですが、こちらでは普通に入れていきますので、ご了承ください」

「そもそもやるなよ、という話じゃがの」

「さて、裏事情はここまで。本編について語り合いましたよう——あ、因みに、これにはアニメのように絵はありませんので、活字を読みながら、二人で語っております」

「面倒な形式じゃのう。なんじゃ、平均二万字前後って。もう少しどうにかならんかったのか」

「其ノ壹、とか題名に付けている辺り、どうやらアニメを意識した分割のようですね」

「にしては実際にアニメ化すると削られそうじゃがの。この語りとか、最たるものじゃろう」

「いきなりネタバレの嵐ですからね。もう少し自重する事はできなかったのでしょうか」

「……兜を衣と表現するには、多少無理があるような気がするが」

「衣を装着するものであると定義すれば、なんとか通じはします、かね」

「どうじゃろうなあ……」

「これで上手い事言えているつもりなのですから、生温かい目で勘弁してさしあげましょう」

「うぬの眼からは温度さえも感じんがな」

[002]

「OPですよー」

「OPはない」

「ですね」

「おい」

「はっはー。OPがあるとすれば、どうでしょうね？ 私の曲になるのでしょうかね」

「まあ、通例に従えばそうなるじゃろうな」

「例外もありますけどねえ。ねえ。ねえ」

「何度も言うな！　ちゅーかそこには触れるな！」

「そうですね。まあ流石にここまででは触れませんよ。この件については色々憶測が飛び交っておりますが、結局真実なんて当事者にしか分からないものですからね。何を言おうと、それは無意味というものでしょう」

「ならよいのじゃ」

「個人的には、忍さんがいやいやと嫌がった説を推したいのですが、如何でしょう？」

「儂をなんだと思つとるんじやうぬは!？」

「冒頭のあれを見せつけられた身としては、あなたを大人気ない嫌なロリババアとは思えませんが、ええ」

「おうぬ、この収録が終わった後スタジオ裏に來い」

「恋の告白ですか？」

「ぶっ殺すから」

「物騒ですねえ。穩便にいきましょうよ穩便に」

「セカンドシーズンから散々我があるじ様を引つ掻き回しおつたうぬが言うか？」

「ファーストシーズンから阿良々木先輩が怪異現象に巻き込まれるきつかけとなった貴女にだけは言われたくありませんね」

「だまれ、ファイナルシーズンでの負け犬めが」

「恐らくオフシーズンでまたもや過去の醜態を晒すであろう貴女の方がある意味負け組では？」

「業物語か……」

「いやあ、あれには作者も焦ったようですね。何せ場合によっては今後の物語が全部ひっくりかねないような内容のようですし」

「なんで語るかのう。鬼物語、終物語と来て、まだ儂の過去を語ろうというのか。うつくし姫で十分じやろうが」

「しかし、本家の方で回収されてない伏線の代表格と言うのが、まさに貴女の過去——吸血鬼になる以前、或いは吸血鬼になった時の話ですからね。こうして物語化されるのもやむなしと言ったところでしょ

う」

「酷いもんじゃわい」

「酷いのは貴女の美しさですけれどね」

「……話が逸れた、戻すぞ」

「はいはい。では、私からこの章に関して一つだけ」

「一つだけなのか？ うぬが語りまくっている場面じゃろうに」

「態々語るまでもない場面ですから。私が言いたいのは、注釈ですね。神原先輩をニュービートルに乗せたというところ」

「ふむ」

「あれ、私お馴染みの先取りメタ発言ですからね。この物語の時系列は、続終物語より後、花物語より前の時系列です。神原先輩はこの段階では、阿良々木先輩が車に乗っているという事さえも知りません」

「扇ちゃんの茶目っ気です」

「気持ち悪い」

「おっと、ストレートですねえ」

「死ね」

「直球ですねえ。直球すぎて特大ホームランを打たれそうですね」

「ちゅーか、何でここ、我があるじ様は反応しておらんのじゃ」

「はっはー。ここはただ単に聞き流しただけのようですねえ。お陰ではぐらかす手間が省かれましたよ」

「そんな理由じゃったのか……」

「はい、私からは以上です。忍さん、何かありますか？ なければ次の章に移りますが」

「業物語、1月15日発売じゃ」

「まあ、自分メインの巻ですし、なんだかんだ売れて欲しいですよね」

「買うだけ買って、箱だけ眺めて中身は読まないでほしい」

「内面を見られたくないようなものですかね」

「儂の内面はもっと見るな」

「死んじゃいますからね」

「不本意ながらじゃが」

「でもここまで語っておいて、実際読んでみると全然違う話だったりしたら笑えますよね」

「いやそれは笑えんじやろう」

「笑われちゃいますね」

「笑つちまうことにの」

「003」

「この辺り、賛否両論ありそうですね」

「ルールを守るべきか否か、か」

「おうぎフォーミュラで語られていましたけれど、正しさなんていうのは否応なく、どうしようもなく多数決で決まってしまうものですかね。それがどれだけ間違っていようと、多数派ならば、それに従わない者が間違いということになっていきますからね。現実には理想通りにいかないということですよ」

「ルールを守らなかつたところで、正しさの前では、ルールなど無意味、ということか」

「残念ですが、それが現実であり、現代社会が抱える闇でもありませんね」

「闇か……農らのことも、見逃してほしいもんじやがの」

「羨ましくはありませんが、しかしそれは危険思想と言えるでしょう。ルールに縛られているのが、本来あるべき、当たり前前の形なのですよ。怪異も、そして人間も」

「ふん。それはそうじやが、しかし農らの場合罰が重すぎるじやろう、ということじゃ。いい加減にしろよなあ『くらやみ』」

「私達、即ち怪異は、生き物と違って世界と繋がっていますからね。私達のルール違反は、世界そのもののルール違反と同義です。世界が間違いを犯す訳にはいきませんか?」

「むう……あれは、世界からの隠蔽工作の様なものということか?」

「さて、どうでしょう。私は何も知りません。こればかりは誰にも分かりませんし、分かりえないことでしょう。あくまでも私の仮説で

すよ。あれを模倣するにあたって、行動の軸としていたなんとなくの  
仮説」

「仮にそれが真実とするならば、恐れを通り越して怒りが湧いてくる  
の」

「怒り、ですか」

「そんな下らん理由の所為であの神隠しが起こったのだと考えると、  
本当に腹が立つ。それだけの理由であれだけの人間を抹消したとい  
うのは、当時神を騙っていた身からすれば、許しがたいものではある」  
「いやでも、そうは言いましたも、結局それが真実であれなんであれ、  
悪いのは騙った貴女なんですからね？ 責任転嫁するというのは頂  
けませんねえ」

「……仕方ないじゃろう、崇められたのじゃから」

「だからそこで否定しておけばよかったですよ。そうしなかった所  
為で色々狂ったのですからね。今回の事件も、半分はそれが原因なん  
ですから」

「は？」

「おっと、これはネタバレが過ぎましたね。忘れて下さい」

「いやおい、何さらっと」

「はい、次の章に行きますよー」

「嘘と誤魔化しの天敵とか名乗っておった奴が誤魔化すな！」

「004」

「次の章ですよー」

「本当に行きおった……」

「いやあ、本当にこの阿良々木先輩は愚かですよねえ。愚かの化身  
です」

「ここばかりは儂でも擁護しきれぬわ」

「あれ、今まで擁護していましたっけ？」

「さあな、忘れたわい」

「……これは要介護ですね」

「儂を後期高齢者扱いするな！」

「いやだって、ついさっきまで話していた内容を忘れるって……ちよつとこれは危険ですよ。認知症の可能性がありますね」

「いや今のはボケじやろうが！」

「おつと……ボケてきましたか……これはますます脳の障害が疑われますね」

「そっちのボケではないわ！ ボケとらん！」

「え？ ボケではなく、あんなことを言っていたのですか？ これは一旦アトガタリを中断して、介護施設かどこかで再開した方が……」

「ボケとるのはうぬの方じやろうがボケ！」

「私はボケてませんよ。健康な優良児です」

「その蒼白さでよく言うのう」

「ボケというなら、阿良々木先輩も相当なボケですよねこれ。二重の意味で」

「ボケというかバカという感じじやが」

「バカラギ先輩ですね」

「ネタをパクるな」

「失礼、パクリました」

「違……くないが、うぬ、誰かの持ちネタは使わんのではなかったか？」

「奪わないとは言いましたが、使わないとは言ってませんよ」

「屁理屈もいところじやのう」

「落ちているものを平然と手に取るなんて、中々どうしてどうかしていますよね」

「落ちているものを平然と食べるといふ行為よりはマシなような気がするがの」

「もしかしたら触れたら爆発するかもしれないのに、不用心なものです」

「蹴ったうぬも大概じやぞ。ちゅーか先に触れたのはうぬじや……なんじやい爆発って。どこの殺人鬼じや」

「いよいよあれもアニメ化ですか。感慨深いですね」



「これもこれで議論を呼んでおるようじゃが、所詮は事前情報、蓋を開けぬ限りは何も分からんよ」

「議論するだけ無駄ですね。無駄なんですよ無駄無駄」

「それは一つ前の部か、或いは一つ後の部じゃ」

「果たしてどこまでアニメ化するのやら。私というキャラ的には、ブックザバス戦が見たいので是非第5部もアニメ化してほしいところですね」

「また微妙なところを突くのう」

「第5部は愚か者しか出てきませんからねえ。そういう意味でも好きですよ、はい」

「5部ファンを敵に回したぞ、うぬ」

「大丈夫です。全ての罪は作者が代行してくれますから」

「いとも容易くえげつない事言うのう」

「というか、脱線し過ぎでしょう。これはあくまでも〈物語〉シリーズの二次創作ですよ、ジヨジヨの奇妙な冒険の二次創作ではありませんん」

「脱線させたのはうぬじやろうが」

「さて、何の事やら」

「お、認知症か？」

「ほほう、そのネタを覚えてらつしやるといふ事は、貴女が記憶障害をかかえているという疑いは少しだけ晴れましたね。よかったです」

「全部晴らせよ！」

[005]

「うぬ、これ本当に分からなかったのか？」

「本当ですよ。私は生まれてこの方嘘なんて吐いた事はありません」

『くらやみ』を演じた癖に」

「あれは私という怪異の特徴ですよ。絶対に避けられない宿命——いつか必ず消滅しなければならぬ怪異というのが、私達『くらやみ』もどきですよ。貴女の嘘とは根本が違います」

「うぬよ、本当に儂に対する敬意は一片もないんじゃない」

「いえいえ、お慕い申し上げておりますよ？ 全く人間きの悪い事を」

「じゃあ少しは敬意を見せろよ。儂を下げるのはやめんか」

「私はただ事実を告げているだけなのですが……え？ つまりこう言いたいのですか？ この私に嘘を吐けと？ そんなあ。敬い崇め奉るべき大先輩である忍さんの偉大なる雄姿を、こんな若輩者の一存で改変するだなんて、そんなとてもとても恐れ多い」

「ぶっ殺すぞ」

「それさつきも聞いたような気がしますね」

「また言わせるような事をうぬが言いやがるからじゃ」

「あれ、そんなこといつ言いましたっけー？ 私はただただ、忍さんについて嘘偽りなく飾らずに語っていただけなのにー」

「だからそういうことを言うからじゃー！」

「やれやれ、これだから嘘吐きさんは。そうやって自分を偽ってきたから痛い目を見たのでしょうか？ 嫌な奴どころか悪い奴ですね。嫌悪感を抱かれても知りませんよ？」

「今更じやろうが。ちゅーかうぬも人の事を言えんぞ？ そこまで儂を罵倒したのじゃ、当然、うぬの人気もダダ下がりじゃろうのう。かっ！」

「うわあ、人の暴落を見て笑いますか。最低ですな貴女」

「しまった！ 罵倒の口実を与えてしもうた！」

「そんなんでよく内面が美しいとか言われていましたね。命を差し出した方々、実は貴女の内面の醜さを見たくなくて、逃げる為に自決されたのではないのでしょうか？」

「内面も外面も真っ暗闇のうぬには言われたくないわ」

「それとも何です？ 吸血鬼化した影響なのでしょうかね、その変化は」

「……さてな」

「ま、この辺りに触れるのはまた別の機会にでも——話を本編に戻しますが、阿良々木先輩、妹さん達を恐れすぎですよね」

「いやいや、あれは中々にスリリングな連中だぞ？ 黒娘よ。カレン

の方はあのカゲヌイに及ばぬとしても、高速道路をぶつ壊すほどの力を秘めておる——アニメ版の誇張表現じゃが——それにツキヒ、あやつは何を考えておるのかまるで分からん。考えがまるで読めんのじゃ、あの不死鳥」

「ええ、知ってますとも。火憐ちゃんの方はいまいち絡みはありませんのでコメントし辛いですが、月火ちゃんの方、あれは本当に手ごわいと感じましたからねえ。恐ろしきは無知な者なり、ってね」

「ほう？ うぬ、あやつと会ったのか」

「ええ、会いましたよ。月火ちゃんにとつては遭ったというべきなのでしょうが。この辺りはまだアニメ化されていない部分ですし、詳しくはアニメ化を待つか、或いは終物語（下）をお読みください」

「露骨な宣伝じやのう」

「宣伝をすると宣言済みですし、問題ないでしょう。多分」

「多分か」

「多分です」

「妹、か。儂には妹なんておらんかったし、よう分からんわい」

「少なくとも、リアルな妹は萌えないということは確かなようですがね」

「かかつ、違うない」

「じゃあ、次行きましょう」

「本当、本編について語っておらんの……」

「006」

「かかつ、ここで救世主であるところの儂、忍野忍の登場じゃー！」

「役立たずな救世主もあつたものですねえ」

「役立たずとか言うなよ！」

「歯も立たなかつた癖に。刃で断てなかつた癖に」

「あ、あれは儂が悪いのではない！ 『心渡』が悪いのじゃー！」

「初代さんの所為にするのはやめましょう。あの人がお怒りになられますよ。あの人か」

「……また何か含みのあるような事を」

「まだ名前を言っではいけません。重大なネタバレですし」

「じゃからネタバレに触れるなよ。なんじゃ、名前を言っではいけないあの人って。どこの闇の帝王じゃ」

「闇の帝王って、あれ自称ってところが痛いですよねえ。自称出来るだけの實力をお持ちになられているというのもまた面倒です」

「自分の名前を態々アナグラムにするという凝りっぷりもまた痛いよなあ。中二病拗らせすぎじゃろう」

「拗らせてますよねえ、あれは。顔面蒼白ですし、どう見ても病気ですよ」

「それ、うぬが言うか？」

「しかし本当に貴女は怒りっぽいですねえ。ここでも私は別に貴女を貶めようとしている訳ではないというのに、どうしてここまで最悪な印象を抱かれたのでしょうか？」

「はっ、それさえも分からんのか、うぬ。なんじゃ、うぬも大した事ない奴じゃのう！ 推理小説好きとか、副音声で猿娘をワトソン呼ばわりしていた割には、全くなんにも分かっておらんではないか。推理出来ておらんではないか。かっ！ これではホームズどころか、忘却探偵にさえ届かんわい！」

「おい」

「おいってなんじゃ!？」

「私の否定はまあ許しますが、私をあの忘却探偵よりランク下に位置付けさせるのは止めて頂けませんかねえ？ あの方はどうもホルスタイン先輩を連想してしまって、苛々させられるのですよ」

「うぬごんだけ元委員長のこと嫌いなんじゃ」

「貴女が私の事を嫌っている度合いよりさらにランク上の嫌悪度です」

「死ぬほど分かりやすいのう」

「というか、あれ狙いすぎでしょう。見た目どころか、声優さんだって同じなのですよ。あれで連想するなど言われても無理ですよ。まあミスリードなんでしょうけど」

「ううむ。しかし、愚物語の時系列においては、どうやらあの元委員長、何やら事件に巻き込まれているようではないか。もしかすると」  
「幾らなんでもそれとこれとは無関係でしょうよ。それに、あの方は日本におりませんかね。まあ、真相はまだ分かりませんが——しかしあの方も災難ですねえ。まさかこうも——いやいや、何も言いませんよ」

「うぬ、ネタバレを楽しんでないか？」

「知る者の優越感ですよ。知らない貴女には分からないでしょうが」  
「……そういう発言をするから、悪印象を持たれるのだと思うがの」  
「其ノ壹、終了ですよー」

「007」

「其ノ貳ですよー」

「アニメでは二話目突入と言ったところか」

「この章が終了した辺りでOPですかね。Decent black」

「新曲ではないのか？」

「この作者に作詞能力がおりと思いますか？」

「思つとらん」

「おうぎダークにおいても、恐らく私が主題歌を歌う事になるのでしようけれど、その曲がこの話に合うかと言うと、微妙でしょうしね」  
「そういえばどうなるんじやろうな、それ含む三篇は」

「さてさて、どうなるのでしょうか？ しかしまずは暦物語ですよ。皆さん、スマートフォンアプリ『暦物語』ダウンロードしましたか？」  
「おっと強引に宣伝を挟みよるわこやつ」

「まだダウンロードしていない方は、まだ間に合いますよー。ここでしか見れない新作短編アニメーション『暦物語』が、2016年1月9日より毎週土曜日深夜公開されます。阿良々木先輩と12人のヒロインが繰り広げる激動の12ヶ月、是非お見逃しなく！」  
「まあ詳しくは各自ググレ」

「はい、宣伝は以上です」

「本編の話をするぞ」

「そうですねー。この章では、〈物語〉シリーズもう一つの恒例である、行開け台詞が登場していますね」

「今回はうぬの台詞じやの。このくっそふざけた台詞じやの！ 舐めとるのか儂を!!」

「貴女なんて舐めませんよ、気持ち悪い」

「儂の方から願い下げじゃそんなもん!」

「これくらいしかなかったのですよ。一応もう一つ候補となっていた台詞があるのですが、あちらはあらすじの方に使ってしまったので」

「作者の計画性のなさがよく分かるのう」

「というか、皆さん分かりました？ これ。台詞と地の文を開けているスタイルなので、少々分かり辛かったかと思うのですが、如何でしょう」

「まあ、意外と書いている時と実際読む時では、文字の大きさやら行の空き方が大分違うからのう。案外そうでもなかったかもしれないが」

「ならよいのですが。いえ、改善すべきところはしっかりと改善して頂かなくてはなりませんからね、作者に」

「作者ネタのオンパレードじやのう……」

「ウラガタリだから自由にやっていいというのは、間違っていると私は思いますかね。まあこうして文句を言えるということでもありませんし、とことん利用していきましよう」

「改善できるだけの手腕がこやつにあるかが問題なのじゃがな」

「そこら辺はちゃんとして頂きたいところですね」

「儂らからしても、読者からしても」

[008]

「まずはこの言葉を。お疲れさまでした」

「貴様ふざけるなよ!」

「おやおや、労いの言葉をかけたつもりだったのに、怒られてしまいましたよ？ 謎ですねえ、不思議ですねえ、ミステリーですねえ」

「黒い癖に白々しいわ！」

「黒と白と言えば、知ってますか？ ゴキブリって、脱皮直後は真っ白なのですよ」

「だからどうした!? それがなんじゃ!? どうでもよいわそんなもん!!」

「おや、若輩者である私からは知識を得たくないご様子ですね」

「そんな知識得たくはない……あのアロハ小僧の怪異知識以上にどうでもよいわ……」

「はっはー、手厳しいですねえ。そんなに年下がお嫌いですか」

「じゃからうぬが嫌いなんじゃ!!」

「酷いですー。うわーん、そんなはつきり言うだなんて、忍先輩酷いですー。えーんえーん」

「ぶん殴りたくなるほど下手糞な演技じやのう」

「暴力的ですねえ。すぐに暴力に訴えるなんて、あなたはジャイアンですか」

「違う、儂はノブえもんじゃ、オウギえもん」

「オウギえもんだと語呂が悪いですねえ。ドラマならぬオウミなんていうのはどうでしょう」

「名前がこれから出てくるキャラと被つとるし、何よりうぬが儂の妹なんて考えただけでもおぞましいわ！ これっぽっちも萌えん！」

「しのぶお姉ちゃん、だーいすきー」

「うわ気持ち悪っ!! 寒気さえ覚えたわ！ うぬにお姉ちゃんとか言われても何にも嬉しくない！ 可愛いロリに言われるならまだしも！」

「後半の問題発言はさておくとして、酷いですねえ。私にときめいてくださいよ」

「うぬには全くときめかんわ」

「じゃあゴキブリと私、妹にするならどちらが良いですか？」

「なんじゃそのどう足掻いても絶望しかない選択肢」

「おや、迷いますか」

「どっちも嫌じゃ。ちゅーかうぬは自分をゴキブリと同列に並べて悲しくならんのか」

「え？ ああ、はい。じゃあ泣きますね。うえーん、しのぶお姉ちゃんがいじめるー、えーんえーん」

「ええい見苦しい！ こんな意味不明な寸劇を見せられる読者の気持ちになれよ！ やめんかうざい！」

「要求しておいて我関せずとは、長生きしすぎるとここまで凶太くなれるものなんですねえ。ふむふむ、勉強になりますよ」

「悪意を感じる言い方じゃな」

「流石は反面教師忍野忍。伊達にロリババアやってませんね」

「悪意以外を感じぬ言い方じゃなあ！」

「それにしても、まさか本当にアップグレード出来るとは思いませんでした」

「そうなのか？」

「ええ。正直あれは土壇場で適当に思い付いた策ですからね。成功するかどうかは、賭けみたいなところがありました」

「その割にはもつともらしい理屈を並べておるが」

「理屈ではなく理論ですよ。こうすればこうなるという方程式、フォーミュラです」

「証明されてはおらんかったのか」

「ええ。ですが今回のアップグレードに成功したことで、見事証明完了、Q. E. D. という訳です」

「……うぬ、そんな不確定な理論を証明するために、儂の愛刀を利用したな？」

「悪気はありませんでしたよー」

「悪びれずにこ奴は……」

[009]

「さて、そんなこんなでこのウラガタリもめでたく1万字突破を果た



しましたね」

「本編の半分程度にしかすぎんがの」

「しかしまだ終わりませんよ。この章を含め、あと4章分語らねばなりません」

「まだそんなにあるのか……」

「それを言いたいのは読者の方かもしれませんよ？　これ、完全に内輪のノリですからね。付いていけませんよ誰も」

「やれやれ、全く誰の所為じゃ、ここまでグダグダにしたのは」

「全くですよ。誰でしょうねえ、グダグダと我が儘を言うのは」

「うぬか」

「貴方ですよ」

「しかしうぬよ、この時本当に儂の味方じゃったか？　改めて見ると、

ただの煽りに見えるのじゃが」

「はっはー。そこまで来ると人間不信ですねえ。いや、私不信ですか」

「己の行動を怨めよ。日ごろの行いが悪いから信用されんのじゃ」

「ほう、では貴女は日ごろの行いが良いと？」

「逆に悪いと思うのか？」

「まあ悪女ですよ」

「儂が悪女というならうぬはなんじゃ、悪魔か？」

「悪魔と言うなら貴女でしょう、元伝説の吸血鬼先輩。吸血鬼を悪魔

とみなす作品も幾つかありますからねえ」

「悪魔つちゅーか鬼じゃな。鬼娘じゃ」

「鬼娘というと鬼太郎さんを思い出しますねえ」

「何故そう連想した」

「確か前にもありましたね、鬼太郎ネタ」

「我があるじ様が鬼太郎で、ツンデレ娘が夢子ちゃんだったかの？

……ちゅーかなんでうぬがそれを知っておる」

「私は何も知りませんよ。阿良々木先輩が知っているんです」

「言うと思っただわ」

「私はあの巨乳と違ってサービス精神がありますからね。阿良々木先輩以外にも、ふられた場合は気前よく言いますよ」

「うぬが気前よくとは、よく言うわい」

「本当辛辣ですねえ。抜き身の刀のようですよ。おおこわいこわい」  
「叩つ斬つてやろうか」

「それはさておき。本編に戻りましょう」

「逃げおつてからに……うぬ、この段階ではどのくらいまで把握出来ておつたのじゃ？ 妙に語っておるではないか。これもアツプグレードの時と同じく、理論とやらに基づいた当てずっぽうか？」

「当てずっぽうとは人聞きが悪いですけど、まあそうですね。否定は出来ません。私は阿良々木先輩が知っていること、貴女が知っていること、或いは、初代怪異殺しが知っていることしか知りません」

「はっ、何にも知らんのじゃな、うぬは」

「だから、何も知らないんですよ、私は。さつきも言ったでしょう？ 私は何も知りません、と。初代さんの名前だって、私を構成する要素だからこそ知っていたのです」

「しかし儂らにとつては堪ったものではないの。儂がひた隠しにしていることなんかも、全部筒抜けではないか」

「ええ。ですから、業物語は私にとって、ただの復習、或いは復唱ではないのです」

「嫌な奴め」

「お褒めにあずかり光栄です」

「010」

「はいはい、これも恒例。ロリ少女を襲わんとする阿良々木先輩の無駄に長い無駄なモノローグですね」

「我があるじ様のことながら、何とまあ情けないことよのう」

「これ、身内にバレた場合はどうするつもりなのでしょうね？ 今のところ副音声でも露呈してはいないようですが」

「そりゃあもう然るべき機関に一直線じゃろう。交番にシユートじゃ」

「ダストシユートですね」

「ゴミ扱いするか……別に異論は無いが」

「というか、この方このまま社会に出すのは危険すぎるでしょう。絶対どこかで警察のお世話になりますよ」

「それは困る。我があるじ様が捕まると言う事は、儂も連带的に捕まってしまうと言う事じゃからな。刑務所の中ではドーナツが食えぬではないか」

「よし、後で通報しましょう」

「通報されるころにはうぬは八つ裂きになっておろうな」

「おやおや。そのネタを使うのはまだ早いですよ忍さん。刀語ネタは慎重に使って下さいよ。我々はあくまでもコラボさせて頂いている身なのですから」

「ふん、夢のコラボなら既に儂とツンデレ娘がやっておるわ。秘策士しのぶ」

「一生秘しておいて下さい」

「まさかあの奇策ならぬ秘策が失敗するとは思わなんだのう。あそこまで友達がおらんとは」

「仕方ありません。人間強度が下がりますからね」

「あのふざけた学級会の所為じゃ、全く……オイクラとやら、もしも儂が実際に会えば、間違いなく、それこそ八つ裂きにしておったじやろう」

「老倉先輩を責める気持ちは、まあ分らないでもないですがね。実際あそこで秘策が成功しなかった所為で、巡り巡って初代さんが復活してしまった訳ですしねえ。ですがそれだと、『くらやみ』が現れたあのタイミングで八九寺ちゃんと会う事は出来ていなかったでしょうし、八九寺ちゃんは地獄行きさえも許されず、存在そのものが抹消され、奇跡の復活劇も絶対にありえないことだったのでしょ」

「そしてうぬが生まれる事もなかったの」

「ええ。こう考えると、本当の全ての元凶というのは、老倉先輩なのかもしれませんねえ。まあ不幸に入り浸っているあの方にこれ以上を提供するのは酷というものですが」

「酷じやろうと、会えばうぬは突き付けるじやろう？ 今言った事を」

「当たり前じゃないですか。酷だから真実を告げないというのは、それはただの偽善であり戯言です。そういった事は、絶対に許しませんよ、私は」

「酷いな、うぬは」

「醜いでしょう?」

「醜いと言うならこのあるじ様もじやがな。かかつ」

「011」

「本当、息が合ったコンビですよねえ、阿良々木先輩と八九寺ちゃん」

「はっ! 生涯のパートナーである儂を差し置いて何やつとるのじゃ」

「妬いてるんですかあ?」

「妬いとらん」

「嘘吐きは『くらやみ』に吞まれますよ」

「その脅しマジで不愉快じゃからやめてくれんかの」

「言っている私だって不愉快なんですよ。ですが貴女が嫌がるからこうして嫌々ながら言っているのです。少しは私の気持ちを酌んでほしいものですねえ」

「ああん? とうとううぬ、化けの皮ならぬ化けの衣を脱いだな? とうとう本気で儂を敵に回したな?」

「そりゃあここまで徹底的に嫌われると、私も少し不快な気持ちになりますよ。ですがこの程度の冗談で済ませているだけマシな方ですよ。私の本気を知りませんね?」

「はっ! うぬが本気になるとどうなるというのじゃ」

「ここに携帯電話があります」

「残念じゃったな。その携帯は儂が折った」

「うわ、ちよつと。何やってるんですか。それ阿良々木先輩ですよ!」

「阿良々木先輩から拝借した携帯電話ですよ、それ。私のは、ほらここに。真黒いこれです」

「なっ……ちゅ、ちゅーかうぬ！　なんで我があるじ様のを——」

「そんなことは今重要ではありません。重要なのは、だから『どうして』ではなく、『誰が』なんですよ。『誰が』、つまり貴女が、阿良々木先輩の携帯電話をぶっ壊したという事が何よりも問題なのです」

「っ……………」

「やれやれですよ。まさか自分のあるじ様の所有物を壊してしまうとはねえ。嫌な奴とかジャイアンとか色々言ってきましたが、まさか本当に手を出すとは。恐ろしいですね」

「ち、違うー！」

「何が違うんですかあ？　教えて下さいよ。釈明があるならどうぞどうぞご自由に」

「う、うぬ、うぬは——」

「楽しみですねえ、どういう風に釈明するんでしょうねこのロリババアは？　そりゃあ勿論、軽く1000字くらいかけて釈明してくれるのでしょうかねえ。私の様な若輩者が及びもつかないような方法で、自分の無実を証明して下さるのでしょうねえ。さあどうぞ？　ほら早く早くー。あ、なんなら許して差し上げても良いんですよ？　『儂が愚かでした。これからは扇さんに一切生意気な口をききません、すいませんでした』、と言うならば許して差し上げましょう」

「っ……………!!」

「さあ、どうします？　くだらないプライドを守るため、破滅の道を選びますか？　それとも、一時だけの恥をかいて、今後も順風満帆とはいかずとも、後腐れのない道を選びますか？　とつと決めて下さいよ」

「……………ん、待て」

「はい？」

「儂が壊したのはうぬのではなく、我があるじ様のものじやろう？　うぬに許してもらおうがもうまいが、何の関係もないと思うのじやが」

「おっと、そこに気付いてしまいましたかあ。残念」

「おっ」

「では種明かしー。これは私が物質創造能力で作った阿良々木先輩の携帯電話のレプリカですよー」

「ああ!？」

「どっちも私のです。はっはー、私が阿良々木先輩から携帯電話を盗む理由がありませんよ。盗む意味もありませんからねえ。うふふ」

「……………」

「ちよつとひやつとしました？ 意趣返しですよー」

「……………」

「おおつと？ これはこれは、貴女が無言で構えたるは妖刀『心渡』じゃないですか。はっはー、元気がいいですねえ。何かいいことでもありました?」

「…………死ねえい!!」

「必殺、章変えリセット」

「012」

「はい、状況はリセットされましたよー」

「卑怯すぎるわ! なんじゃそれ!？」

「阿良々木先輩だったまに使っている技じゃないですか。阿良々木先輩に出来て私に出来ない事なんて、己の身を犠牲にすることくらいですよ」

「本当ありとあらゆる方面に喧嘩を売るのう、うぬは」

「さて、前章の話題をいつまでも引っ張ってでは、章変えした意味がありません。本編です本編」

「本編とは言うが、もうこれ最終章じゃぞ」

「おやおや、もうですか。早いですねえ」

「ここに至るまで殆ど本編についての話をしとらんど。どうするんじゃこれ」

「まあ、副音声ポジションですし、許容して下さいるでしょう。期待しましょう」

「読者に何かを求めるなよ」

「最後は如何にも、次回に続く！ なシーンで締めですね。ここまで本編ですが、ここからが本番です」

「しるしメイクじゃな」

「はい。で、このレイニー・デヴィルが立ちはだかった所で、EDです」「EDは何になるのじやろうな？」

「暦物語EDである『Whiz』が今のところ想定されております」

「……想定して何になるんじやろうな」

「さあ？ 作者の自己満足ですよ所詮」

「まさか、いちいち全部の物語に設定していくのか？ 無駄な事を」

「アニメ化されないことを本家ではネタにしていますけれど、こっちは冗談抜きでアニメ化されませんか。100%」

「もしもアニメ化してしまった場合、寧ろ企画者の頭を疑うのう。非公式作品までアニメにするとか、見境なさすぎるじやろう」

「それこそアニメ業界の末期でしょうね。まあ、まだまだアニメは衰退中でもないありません。バリバリ現役です」

「衰退していると言っても、某衰退小説レベルの衰退具合じやろうな。かっつ、あれで衰退とはよく言ったもんじやわい」

「んー。まあ、そういうことにおきましよう」

「は？」

「いえ、何でもありません。他作品のネタバレまで持ってくるほど、私は見境ない訳ではありませんからね——さてさて、そろそろなんだかんだ長かったウラガタリが終了致しますが、どうでしたか？ 忍さん」

「どうでしたか、とは」

「今回ウラガタリをやってみて、何か一言お願いします」

「ただひたすらにうぬがうざかった、以上」

「最後まで酷いですねえ。少しは友情が深まったと思っていましたのですが」

「本気でそう思っているのであれば、一度病院で診てもらうことをお勧めするわい」

「はっはー。まあ、ここで私に友情を感じた、とかほざかれたら、割と

本気で貴女の体調不良を疑うところでしたよ」

「じゃあ言うなよそんなこと！」

「扇ちゃんジヨークです。私は割と楽しかったですかね。貴女という愚か者を散々コケに出来て、結構愉快でしたよ。似た者同士のいいツーマンセルじゃあないですか。貴女と阿良々木先輩」

「褒めとるのか？ それとも貶しとるのか？」

「両方です。後者に比重はおかれていますよ」

「こいつは本当に……」

「さて、おわりの挨拶は後書きで」

「いや本文の方でやれよ」



## ウラガタリ しるしメイク（上）

「001」

「はい、〈物語〉シリーズ恒例となっております、メインキャラクターのフルネームから始まる前説！ 今回は「しるしメイク」ということで、織崎記さんですね！」

「織崎かあ。まあ、この露骨すぎる名前については後で触れるとして、相変わらず阿良々木先輩は色々私になすりつけてくるねえ。これ、殆ど『自分の意志じゃないよ、扇ちゃんの所為だよ』と言っているのと限りなくイコールじゃあないか」

「誤解されると心外なのだけれど、なんて、そういう反論を封じるかのような予防線を態々張ってくる辺り、流石阿良々木さんと言えましよう。無駄に用意周到と言いますか」

「私が望んだ成長、か。私としては、こうして私の話題を絡めることなく素直に自分から語ってくれるようになることを望んでいたのだけれどね。まあ、一応私は何も言ってませんし、成長と言えば成長なのかもしれないけれどね」

「ほう。では、扇さん的にはこの成長、何点くらいでしょう」

「27点だね」

「おっと低いですね！」

「200点満点中だよ」

「低いどころか落第点じゃあないですか！ いや、100点満点でも赤点でしたけれども……」

「私は他の方のように、阿良々木先輩に甘くないからね。いや、阿良々木先輩だけではなく、その他の方にも、甘くはないね」

「まあ確かに、なんだかんだで私達、あの方には少々甘いところがあるかもしれないですね」

「私から見れば少々どころじゃあないんだけれどね。老倉先輩レベルになつて漸く、それこそ及第点レベルさ」

「あの方を及第点と称しますか！ 凄いですね！」

「とは言え、私も最近は何々先輩には甘々なんだよ——えっと、このウラガタリが公開される頃には【裂物語】は全部公開されているのかな?」

「はい。【裂物語】どころか、【裔物語】の予告まで公開されています」  
「そうかい。じゃあ読者の皆様はもう私の醜態を見てしまっているという事か。やれやれ、私とした事が大失態だ。あの件については阿良々木先輩は自分が敗北したと思ってるらしいやうだけれど、私からすれば、あれは言い訳の余地が無いほどの敗北なんだけれどねえ」  
「おつと扇さん、そこまでですよ! 貴女はそういう発言をしても多少は許されるポジションですけど、私の目の黒い内はそうはいきません、頂けません! その話はここまでです」  
「ふむ。そうだね。ネタバレ程興冷めなものはないからねえ——承ったよ」

「ふふん。分かればいいんですよ、分かれば」

「002」

「レイニー・デヴィルですか……懐かしい怪異ですね」

「八九寺ちゃんにとってはそうかも知れないね。でも私にとってはルートとも言える怪異——懐かしいだけでは表現出来ない気持ちが多少は渦巻いているのさ」

「ほう、扇さんにしては曖昧な物言いですね。どうしたんですか?

曖昧とか誤魔化しとかの天敵を自負していらつしやるというのに、良いんですか? そんな体たらくで」

「はっはっは。私も他人に厳しいけれど、八九寺ちゃんも結構厳しいねえ。流石、祭り上げられたとは言え、神様となるに相応しい器を持った子だよ」

「褒めても嘸み芸しか出ないですよ、鵬喜さん」

「はっはー。八九寺ちゃん。私のことを、かの四国ゲームを生き抜いた薄弱メンタルな少女のように呼ばないでくれるかな。私の名前は忍野扇だよ」

「失礼、噛みました」

「いいえ、わざとです」

「かみまみた」

「おや、わざとでない？」

「掃きました」

「それは唯の箒だね」

「ま、まさか扇さんがノってくれるとは……！正直、無視された挙句に手酷いカウンターをぶちかましてくるのではないかと危惧していたのですが、杞憂でした！」

「ははは。私はそんなに酷くはないよ。厳しくはあるけれど、かと言って虐待したい訳じゃあないからね」

「そうですか。阿良々木さんとはその辺違いますね」

「阿良々木先輩だつて、別にそんなつもりはないと思うよ」

「いやまあ分かってますよ？寧ろ、あの方は虐待とかそういうのを心の底から嫌悪なさっているでしょうし——ですが、こう、日頃の行いが……」

「まあ、よろしくないよねえ。鏡の世界ではついに女装までしたし。する必要も無いのに」

「しかも一回だけならまだしも、この方実は二回女装してますからね」  
「私の制服に止まらず、フリルの付いたファンシーな魔法少女の服まで着ちゃったからねえ」

「困った変態野郎ですよ。その癖、要所要所で無駄に格好良いから何とも言えないんですよねえ、この方は」

「まあ、ね。私からしてみれば、それこそ最も矯正したいところなんだけれど——ヒーロー染みた行為は、全く己の為にならないと言うのにもいつも首を突っ込む。春休み時代なら兎も角、今のあの方では実力が伴っていない。そんなのは唯の無謀で、愚か者のする事です」

「ほほう？まあ確かにそうですが……しかし扇さん、貴女は阿良々木さんのそんなところに助けられたのではないのですか？なら、それを責めると言うのは筋違いの様な気がしますけれど」

「そんなところが無ければ、そもそも私は生まれなかつたんだよ——」

こうして阿良々木先輩を糾弾し、弾劾することもなかった」

「はあ。では、生まれてこなければよかったですとお思いですか？」

「当たり前だよ八九寺ちゃん。私みたいな奴は、居ない方がよっぽどいいのさ」

「……自虐しますね。その辺、阿良々木さんとそっくりですよ、貴女」  
「はっはー」

「003」

「ではでは自虐しながら次の章だよー。触れなかったけれど、今回の私の出番、終わったね」

「終わりましたねー。闇の中へと消えて行きましたねー」

「で、ここでは八九寺ちゃんと阿良々木先輩の雑談タイムだね。楽しそうにお喋りしているじゃあないか」

「ま、私が阿良々木さんに合わせて差し上げているだけ、なのですけれどねー」

「そうかい。じゃあ、今はどうなのかな？ 君は私に合わせてくれているのかな？」

「当たり前ですよ、何言ってるんですか。日本語の伝道師たるこの八九寺真宵と本来のレベルで会話できる方なんてそうそう居ませんよー！」

「ふうん。随分な自信だねえ」

「強いて言うなら羽川さんくらいですかね？ 私のレベルに付いてくれるのは」

「あつれー？ あれあれあれあつれえー？ ごつめーん、八九寺ちゃん、今何て言ったんですかあ？ 聞こえませんでしたあ。もう

一回、もう一回大きな声で、八九寺ちゃん本来のレベルでどうぞー」  
「……し、強いて言うなら羽川さんくらい」

「撤回してください」

「何故ですかっ!？」

「私よりあの巨乳の方があたかも格上であるかのような発言は即座に

速効撤回してください。一から十まで徹頭徹尾撤回して下さい今すぐに、すぐに、今すぐに！」

「いや貴女どれだけ羽川さんのこと嫌いなんですか!? そんなに自分より勝っている方がいるということが気に食わないのですか!？」

「違いますよー。私はそんなナルシストみたいな奴じゃありません。ただ、羽川先輩というあの方そのものが気に食わないだけです。専門家連中のことは別にそこまで嫌悪してませんって。奴だけが嫌いなんですよ。あの巨乳。巨乳。雌牛」

「いや雌牛は言いすぎじゃあないですか!？」

「いやいやあれは雌牛ですよ。ホルスタインですよ。【傷物語Ⅰ 鉄血篇】であの圧倒的なまでの乳揺れをこれでもかと思せつけて下さいましたからねえ。パンツだけでは飽き足らず。あんなぶるんぶるんと揺れていたんですから、そのまま千切れてしまえばよかったですよ」

「巨乳に対する恨みが深すぎますよ扇さん……! わ、分かりましたよ謝りますよ。だからさつきまでの喋り方に戻してください。私達喋り方がそつくりなんですから」

「ふむ、そうだね。いやあ、参った参った。柄にもなく熱くなっちゃったよ。キャラ崩壊も甚だしいね。おお、怖い怖い」

「ふう」

「じゃあ話を本編に戻そうか——で、どうなのかな? オフシーズンの方の進歩は。順調?」

「正直あまり順調とは言えません……何せ、阿良々木さんの出演をとうとう許してしまいましたからね……」

「おやおや」

「八九寺P、痛恨の大失態です……殻があったら入りたくらいですよ——まさか本当に出張って来るとは」

「なんだっけ? 【かれんオウガ】だっけ? 今現在スマートフォン限定の特設サイトがオープン中のエピソード」

「ええそうです。まさか語り部形式というルールさえ破って乱入してくるとは……戦場ヶ原さんだけではなく、忍さんも警戒しておくべき

でした」

「忍さんか。そういえば、かの決死にして万死にして必死の吸血鬼さんは今どの辺に居るのかな？」

「さあ……プロデューサー権限を全力で行使して何とか動向を探ってみたところ、どうやら羽川さんと関わったとか関わっていないとかそんな噂を耳にしたような」

「またあの巨乳か」

「はっ！ し、しくじりました」

「いえ、いや、別にいいよ。まあ、【ひたぎスリーピング】で散々な目に遭ってくれたから、私は満足さ。はっはー」

「……その散々な目に遭って疲弊しきった状態の羽川さんに、貴女は負けたんですけどね」

「……………」

「004」

「さあ、今度こそ本編について話しましょう！ ちよつと脱線しすぎですー」

「巨乳の所為でね」

「ああもう引き摺らないで下さいよ！ 貴女そんなキャラじゃないでしょう!？」

「残念、私はこう見えてねちねちとねちっこいキャラなんだよ」

「そうですか。陰湿ですねー！ 暗いですねー！ おうぎダークとはまさにこの事ですねー!! ひゃっほう!!」

「元気良いねえ」

「こうでもしないとやってられませんからね！ 何せこの章、私が阿良々木さんにごっぴどく苛められて為す術もなくすごすごと退場する章なんで！ ああ、思い出したら苛立ちが芽生えてきましたよ！

どうしてやりましょうかあのロリコン！」

「君も引き摺るねえ」

「なんてったって蝸牛ですからね！ えっへん！」

「偉ぶるようなこと言ったかな？」

「しかも神様ですし！ えっへん！」

「こんなねちっこい神様なんて誰が信仰してくれるんだろうねえ」

「そりゃあ、まあ、阿良々木さんに日和さん、それに、扇さんじゃあないですか？」

「私は何も信仰しないよ。特に君はね」

「て、手厳しい……！」

「私はご都合主義とか、そういうものが嫌いだからね——ええと、本編は、なんだっけ？ 君が邪魔者として排斥されたんだっけ？」

「何でしょう、貴女が言うのと毒味がありますね……」

「毒を含ませてるからね。にしても、ここからは阿良々木先輩の本領発揮と言うべきシーンが長々と続くね。いやあ、愚か愚か」

「何と言いますか、この自分で自分を言い聞かせているような感じ、貴女と居る時の阿良々木さんそのものですよね。愚か愚か」

「織崎記か。厄介なゴスロリ少女が出てきたねえ。織崎って、安易すぎるでしょう」

「中々安易な名前に思えますけれど、それでもこの作者が頭が足りないなりに考えた結果なんですから、苛めないであげて下さい。可哀想ですよ」

「君も結構酷い事言ってるよ」

「だってこの方の名前、最初の設定段階では、さらにそのまんまな四季崎記だったんですからね？ それよりはまだマシでしょう」

「マシというか最低ラインだよ、ただの」

「まあ苛めはこれくらいにして、さあさあ次の章へ参りましょう！  
×切が刻一刻と迫っています！」

「急にリアルな話をするね」

[005]

「はい、【しるしメイク 其ノ壹】最終章にして、格好良く斧之木さんの登場です！ ヒューツ！」

「斧之木ちゃんも最初に登場した時から随分出世したよね。初登場時、まさかここまで物語に食い込んでくるキャラだと誰が想像したのだろうか?..」

「まあ最初は明らかに悪役側のキャラでしたからね。キメ顔してましたし」

「悪、というか、正義なんだけどね、彼女のポジションは」

「ああ、そう言えばそうでしたね。正義の魔法少女、斧之木さんでした」

「魔法少女か。まあ本物の魔法少女は怪異じゃあないし、直江津の町には居ないけど。飛来してきたことはあるけれど」

「あの方も大概キャラ被ってますよね……まあ私の方が性格いいですけど」

「自分で性格いいと思ってるその人間性、というか神性は如何なものかと思うけれどね」

「まあそれは置いておいて。またレイニー・デヴィルですよ。何なんですかこれは」

「え? 言ってるいいのかい? 思いつきりネタバレになるけれど、思いきつちやっついていいのかい?..」

「いえ、遠慮しておきます!..」

「そうだよね」

「しかし、何でよりもよってレイニー・デヴィルなのでしょうか? 他にも色々居るじゃあないですか。蟹とか蛇とか」

「そこも詳しく説明しちゃうとネタバレになる——やれやれ、第一話というのは本当に話し辛いね。常にネタバレに気を使わなくっちゃあいけない」

「そんなことに気を使うのは貴女が臥煙さんくらいでしょうに……」

「えつと、ここらでEDかな? プロデューサー的には、どう?..」

「whiz」のままなのかな?..」

「いやあ……どうでしょうかね? 「whiz」も悪くはないですけどね、如何せん【歴物語】がありました……この曲はそっちのEDですかね」



「そういえば、結局【歴物語】はどういう意図で作ったんだい？ 作者は」

「あー、その辺は【まよいカースト】の『ウラバナシ』で語りますので、暫しお待ちを——とは言え、同日解禁ですけれどね」

「果たして出来るかな？ この『ウラガタリ』さえも結構ギリギリみただけけれど」

「出来る出来ないではなく、やるんですよ扇さん！ この『ウラガタリ』も、場合によってはリアルタイム更新にすればいいのですからー！」

「……それ、結構な禁じ手じゃあないかい？」

「大丈夫です！ きつと許してくれますよ！ 許されなくとも、謝るのは私達ではありませんからー！」

「んー。まあ、それもそうだね。曖昧の極致の様なものだけれど」

「でしよう？ と言う訳で、場合によってはリアルタイム更新になりますので、ご了承くださいー！」

「……無計画の極みですねえ」

[006]

「と言う訳で続けますよ！ ここからは【しるしメイク 其ノ貳】です！」

「斧之木ちゃんが阿良々木先輩の危機にタイミングよく駆けつけられた理由を話すところだね。問題提示風に」

「多分この章の途中辺りでOPが挿入されるのではないでしようかね？ 其ノ壹ではオミットされたOPが」

「誰が歌うんだい？ 織崎ちゃんかな？」

「はい、そうですね。曲は【否、と姫は全てを語らず】でお願いしたいところですよ」

「あれあれ、それって元は【刀語】のED曲じゃあなかった？」

「それはそうなのですけど、〈物語〉シリーズのEDに合うかどうかと考えると、やっぱりちよつと違うんですよ。どちらかと言えばOPっぽいかと思ってます」

「成程」

「織崎さんのイメージボイスは、そうですね、読者の皆様の殆どが想像しているであろうあの方で結構です。って、作者が」

「おっと、安全弁を差し込むのを忘れないねえ」

「ごつちにとぼつちりが来ても困りますからね。害は全部あつちへあつちへ！ その為の作者なんですから」

「はっはー。言いますねえ」

「言うべきことはちゃんと言いますからね。それはそれとして、本編の話へ戻しましょう」

「うーん、とは言っても、基本的にこの章は雑談しているだけに等しいからねえ。意外とこういう章について語るのって難しいよね。掴み所がないというか」

「まあどこを話せばいいのかいまいち分かりませんからね……んー、じゃあ、もう次行っちゃいます?」

「行っちゃおうか」

「結局メタな話しかしませんでしたね……」

「007」

「ほいほい、解答編だよー」

「いやあ……疲れましたね!」

「疲れたかい」

「疲れましたよそりゃあ! 神通力って、あれ結構精神を擦り減らすんですよ? ましてや今回操ったのは実体ある生物! 幾ら私の頼りになる眷属たちとは言えど、やっぱり実体のある存在を司るのは体力と精神力をフルに使いますよ、はい」

「そうかい。そりゃあお疲れさまだったね」

「ですよ。しかも距離はそれなりにあるし、複雑な動きをさせなければなりませんし、時間はありませんでしたし——もっと労って下さいよ!」

「君も結構ハードに働いてるよねえ——でも、それじゃあ何で阿良々

木先輩を助けるようなことをしたんだい？ 阿良々木先輩は君を捨てたのに」

「捨てたとはキツい言い方しますね……事実ですが——まあ、その辺が私達と扇さんの違いですよ。なんだかんだで助けてしまいうんですよええ、私達って」

「甘いねえ。全く甘いよ」

「ううむ、そう言われて返す言葉が余りないというのも辛いところですが……でもまあ、阿良々木さんには日頃から変質行為を受けながらもそれなりに良くしてもらっていますし、これくらいは許して下さいよ」

「はっはー。ここで仕方ないなあと言って許すのは私じゃあないよ。何度も言うけれど私は優しくないんだ。厳しく糾弾するのが、私と言う怪異なんでね」

「そうですか。では戦争をしましょう」

「武力行使かい？ 元気良いねえ。何か良い事でもあったのかい？」

「良い事ですか？ ここ最近良い事なんてありませんよ、本当——日和さんに関しては、あんまり話しちゃ駄目ですよ？」

「駄目だね。ネタバレだもの。というか、その日和という名前を出すだけでもかなりアウトなんだよ？」

「ですよー」

「です。はてさてそんな訳で、またまたレイニー・デヴィル復活&即撃退、次の章へ」

「レイニー・デヴィルさん活躍しすぎでしょう。これギャラとかちやんともらってるんですかね？」

「おっと、ギャラとかそういう世知辛い話をするのはやめようじゃないか八九寺ちゃん。流星にそれはちよつと駄目だ」

「冗談ですよ扇さん。私はその辺、ちゃんと分別が付いていますから」

「ならいいのだけだね」

「さあ、巻きで行きますよ！ せめて次の章までは何とか終わらせましょうっ！」

「おー」

「またお前かよ、レイニー・デヴィル!」

「ここ、誰もがそう思っただろうね」

「いい加減しつこいですよねえ。ちよつと不死身すぎませんか？ 斧之木さんの例外アンリミテッド・ルールブックの方が多い規則を至近距離からモロに喰らったと言うのにこの元気！ 忍野さんや扇さんではありませんが、何かいいことでもあつたのかと聞きたくなりますね!」

「まあこいつには良い事なんて間違いないだろうけどね。この怪異が持つのは負の感情のみ、良い事なんて、そういう正の感情は持ち合わせちゃあいないよ」

「何だかんだ言っても、悪魔ですからね。レイニー・デヴィルつて」

「まるで雑魚敵Aのような扱いではあるのだけけどね」

「この”蜘蛛”つていうのも気になるところですよ。扇さん、何か知っていますか?」

「私は何も知らないよ。阿良々木先輩が知っているんだ」

「いや阿良々木さんも知らないでしょう」

「まあね。でも一応フリには応えないといけないからねえ。思わずいつもの台詞を使つてしまったよ」

「サービス精神旺盛ですねえ、意外と」

「あの巨乳とは違うからね——そんなこと言っている間にタイムアツプだよ八九寺ちゃん」

「うわ本当です!?! あー、しまりましたねこれは……やっちゃいましたね」

「えつと、そう言う訳ですので、ここから先はリアルタイム更新となります。章が一つ終わる度に更新するので、更新を追いたい方は、どうぞ、よろしくお願いします」

「とは言いますが、やっぱり一気に見た方が良いという方の方が多い事は間違いないでしょうから、どうぞ、そんな方は本日の午後、また来ててください。お手数お掛けしますが、謹んでお詫び申し上げます」

す、って作者が言っていました」

「どんだんヘイトを稼いでいくねえ、作者」

「もうこれはアンチ・ヘイトタグを付けるべきですかね？ はっはっはー」

「ではでは、前代未聞のリアルタイム更新、スタートですよー」

「009」

「ふう、ここから時間を気にせず、のびのびとやってられますね！」

「次からはこういうことのないようにしないとね」

「そうですね。後で作者をフルボッコにしましょう」

「頑張つてね」

「あれ、私だけですか？」

「制限時間はなくなったとは言え、しかし急がなくてはならないのは確かだよ。巻き目でいこうか」

「そうですね。では本編について語りましょう」

「この織崎と言う方、中々容赦ないねえ。まさか『くらやみ』まで行使してくるとは」

『『くらやみ』……私としてはもう二度と関わりたくない現象ですね』

「君が道を外れなければ、今後出遭う事はないだろうけれど。基本的にこの現象は自業自得そのもだからね」

「確かにそうですが……でも今回のこれは自業自得とは言い辛いでしょうー」

「そうだねえ。ルールを破るように誘導して『くらやみ』を発生させるなんて、そんな自滅めいた方法なんて誰も使いたくないからね——そしてそれ故に、この織崎ちゃん本気で斧之木ちゃんと阿良々木先輩を消そうとしている、ということの証明となっている」

「まさに、怪異よりも怖い、って奴ですね」

「そうだね。世界のルールを平然と利用するとは、全く業の深い子だよ。どんな因果応報の結末が待ち構えているのやら」

「まあ、そうなったらそうなつたで、阿良々木さんは織崎さんを助ける

のでしょうけれどね」

「助けるべき相手を見失う——まずこれを止めて欲しい。本当に」

「切実ですね……」

「これをどうにかして頂かなくては、成長も何もあったものじゃあないよ。私が望む成長と言うのは、そういう成長だ」

「でもそれだと、阿良々木さんらしさというものが失われてしまいませんか?」

「らしき」なんて、所詮はその行動を看過してもらおう為の常套句ではないよ。その本質は只の良のがれであり、体の良い逃げ口上のさ」

「……ですか」

「だよ——じゃあ、次の章へ行こうか。次が最後、頑張ろう、八九寺ちゃん」

「そうですね、扇さん」

「010」

「最終章だよー」

「いよいよ織崎さんが本性を現しましたね！ 私達の視点からすれば、もう初登場時から本性剥き出しだったような気がしますが」

「剥きだしならまだしも、牙を剥いてきたからねえ。阿良々木先輩がどうしてこれに気付かなかったのか、というのは後々語られるだろうけれど、それにしても何にしても、愚かだよねえ」

「もう少しどうにかならなかったんですかね……」

「無理だろう。阿良々木先輩だし——だからそういう所を私は矯正したいんだって」

「扇さん、多分それ、無謀ですよ」

「無謀でも、私は諦めないよ。諦めの悪い、ねちねちした奴なのさ、この忍野扇は」

「ですか……もう執念と言ってもいいですね」

「いつだって最後に勝つのは執念だよ——探偵が犯人を突き止めるの

だって、それは執念が為せる業だからね」

「でもですよ、童女のスカートを掴むのがいつもの癖って、これどうやったら矯正出来るんですか？ 無理では？」

「八九寺ちゃん。君はどうも私の邪魔をしたいようだね。どうしてだいい？」

「あれ、最初に言いませんでしたっけ？ 私達は、敵同士だと」

「はっはー。成程ね。納得だ」

「納得して頂けたのなら幸いですよ——忍野扇」

「これは、私も全力を出さないとなあ。何せ相手は神様だ、生半可な執念では勝てないだろうね——八九寺真宵」

「さて、宣戦布告もほどほどに——って、殆ど本編について語ってないじゃあないですかっ！」

「上手くいかないねえ。どうしてだろうか」

「これは扇さん、ケジメ案件ですよ！ どう落とし前付けてくれるんですか！ 現金ですか！ 現金ですよね！」

「がめついねえ。いつそ清々しささえ感じるよ」

「そりゃあ私、神様ですし！ お賽銭は常時募集していますよー？」

「はっはー。で、どのくらい集まったのかな？ 今までで」

「大して集まってないからカースト最下位なんですよ私はっ!!」

「あーそうだっけ。ごめんごめん」

「ここまで気持ちの籠っていない謝罪を初めて聞きましたよ……私が言ったのを聞いて以来です」

「性格悪い神様だねえ——で、EDはどうするんだい？ 何か曖昧にされていたけれど」

「あー……つと、【border】はどうでしょう？ まだそれっぽいと思います」

「どうでしょうと私に聞かれても、私にはそんな権限、ないからねえ。八九寺ちゃんの意向に任せるよ」

「では、【border】ということだ」

「【border】ですか。アニメ〈物語〉シリーズの演出が大きく変化したのって、【憑物語】からだよね」

「いやあ、あれは度肝を抜かれましたよ！　カラフルでしたからね、何か！」

「本当、色々考えるものだよ——とまあこの話はここまで。閑話休題といこうじゃあないか」

「ですね。では、次の章へとレッツゴー！」

「いやだからこれが最終章だよ」

「失礼、間違えました」

「違う、わざとだね」

「間違えまみた」

「噛んだことで余計疑わしさが増したよ」

「失礼、噛みまみた」

「おっと、わざとでない？」

「去りました。だっ！」

「うん、じゃあね」

「ちよっ!?　止めて下さいよ！　ここまで付き合ってくれたんですから、最後までノって下さいよー！」

「残念。もしかしたら知らないかもしれないけれど、私は凄く優しくか  
らぬ奴なのさ」

「酷いですね」

「それも違う。私は、だから——醜いのさ」



## ウラガタリ しるしメイク（下）

「011」

「おい」

「おや、いきなりどうしました？ 第一声から穏やかじゃなさすぎですよ？」

「そりやあそうだ。おい。なんだよこれ。なんで『ウラガタリ』一発目で、僕、いきなりこんなもん見せられなくっちゃあならないんだ？ ふざけんなよ」

「おやおや〜？ どこかお気に召さない場面でもありましたか〜？」

「そのムカつく態度は、まあ僕の寛容さで許してやるとして——あのみさ、自分が吐いてる姿を否応なしに見せられるってさ、これ結構な虐めだぜ。虐めというか、もう惨めじゃあないか、これ」

「まあまあ落ち着いて下さいよ。あくまでも阿良々木さんの視点からなんですから、小間物までは描写されてませんって」

「そういう問題じゃねえんだよ——いやあのみさ、このシーンって、多分読者のうち何割かは引いたと思うんだよね。童女の嘔吐シーンなんて、誰が得するのさ。誰も得しないし、誰も望んでないよこんなもん」

「決めつけはよくありませんよ？ 斧之木さん。もしかしたら、童女の嘔吐が大好きなロリカッター変態野郎だっているかもしれないじゃないですか。そうやって決めつけるのは早計というものです」

「何でこんなことが決めつけられないんだよ。怖いよ、怖すぎるよ現代社会。もうそれロリカッターというか、カッターじゃないじゃん。格好良さが微塵もないよ」

「まあ人間として終わってそうなのは確かですけど、しかし私達は幾度となくそういう視線を向けられてきた、言わば歴戦の勇者！ 阿良々木さんに比べれば、全然大した事ありませんよ」

「そうだけど……鬼いちゃんって、異常性癖のハイブリッドモンスターだもんね」

「あそこまで行くと、いつそ格好良さささを感じる領域ですよ。しかも

それを私達には隠そうともしない」

「あいつが本性剥き出しにするのって、まあ真宵姉さんに対してくらいだよな——そのところ、どうなの？ 毎回毎回セクハラ喰らってるけどさ、真宵姉さん的にはどうなの」

「不快です」

「はつきり言ったね」

「まあ、確かに多少は期待しているところもなくはないですよ？ ですが、それとこれとは別問題です！ 阿良々木さんの変態行為にほとんど呆れ返っているのは、紛れもない事実です！」

「そりゃあそうだ」

「私は変態ではありませんので！ あくまでも私は誘い受けビッチなんかではなく、つつい人々を魅了してしまう罪なセクシーガールというだけです！」

「ん？」

「はい？」

「セクシーガールって、誰の事？」

「私の事ですよっ！」

「012」

「え？ 今のでオチがついたの？」

「みたいですね」

「おいおいマジかよ。内容について全然しゃべってないよ。不味いよ、これ放送事故級だよ」

「大丈夫です！ そこを何とかするのが、斧之木さん、貴女のお仕事です！」

「大丈夫じゃねえよ。丸投げしてるだけじゃねえか。僕にも出来る事と出来ない事があるんだぞ」

「いやいや。縁の下の力持ち、最上級のバイプレイヤーたる貴女なら出来ますよ。私が保証します！」

「貴女に保障されてもね」

「しかし貴女、『かれんオウガ』での手腕は見事の一言でしたよ！よくぞ阿良々木さんの出番をあこの程度に留めてくれましたと、心の底から感謝しております！」

「そんなに嫌なの？ 鬼いちゃんの出演が」

「嫌というか……いやだつて、『オフシーズン』なんですよ？ そりやあ出演しちや駄目でしょ」

「でも一応あいつ主人公だし、ちよつとくらい許してやってもいいんじゃないかと思うのだけれど」

「お、お、斧之木さんが阿良々木さんの擁護を?! ど、どど、どうしたのですか斧之木さん?! 阿良々木さんに何かされたんですか?!」

「慄きすぎだろ——いや別に。あいつの語りは比較的人気があると思うからね、売上の的にはかなり貢献してくれると思うのだけれど」

「いやいや。そうは言いますが斧之木さん。それは語り部が阿良々木さんだけだった頃の時代の話ですよ。今では羽川さんを筆頭に、結構な方々が語り部を担当していますからね。人気ランキングもかなり変動していますよ」

「そうなんだ。へえ。なんだよ、じゃああいつ要らないじゃん。あーあ、擁護して損した」

「清々しいほどの手のひら返しですね」

「貴重な尺をあいつの為に割いたのは、織崎記のミルクティーにマカロンをぶち込んだ並のミスだ」

「いや、あれわざとでしょう」

「失礼だな。あれは善意の行動だ。甘いものに甘いものを投入すればもつと甘くなる、つまり、必然的にもつと美味しくなる」

「適当な理論ですね……」

「僕なりに、人間の味覚と趣味嗜好を考慮してとつた行動だ。とやかに言うのはやめて欲しいな」

「全く反省してませんね貴女」

「当たり前だ。僕の辞書に反省の二文字はない」

「やれやれ、そんなんだから月火さんにアイスを食べてる姿を目撃されて、あまつさえ魔法少女の振りをすることになるんですよ」

「黙れ。触れるな。それは僕の黒歴史」

「あれを黒歴史にしてみましたと、斧之木さんの語り部担当作品が一つたりとも無くなるのですが、いいんですか？」

「別にいいさ。怪異で最初に語り部を担当したという栄誉が残れば、それでいい」

「いやいや、残りませんよ。【つきひアンドウ】が黒歴史になるとすれば、怪異初の語り部担当は、デストピア・ヴィルトウオーゾ・スーサイドマスターさんになる訳で、栄誉も何も残りませんよ」

「なんてこった。そんなトラップが仕掛けられていたなんて。くそっ、流石あの後期高齢者を吸血鬼にした張本鬼、揃って僕の邪魔をしやがる」

「どうですか？ これでも尚黒歴史と言い張りますか？」

「……ちっ」

「はっはは！ 私の勝ちですよ！ ははは！ これからは好きなのは魔法少女と呼ばせて頂きますね！ きやはっ！」

「……あのさ」

「何ですか？ 魔法少女斧之木さん！」

「本編の内容——全然語ってなくね？」

「あっ」

「013」

「はい、そろそろ真面目にやりましょう」

「だね。流石に僕も編集のしようがない」

「えっと、何ですか？ 織崎さんの独白……うわあ、一番触れ辛いところじゃないですか」

「正直この辺は何喋ってもネタバレになりかねないからね……じゃあ、前の章の話でもする？」

「グッドアイデアです！ では斧之木さん、淡海静さんについて、専門家的視点からの詳細な解説をどうぞ！」

「何のためにこの章への言及避けたか、もう一回言おうか？」

「あくまでも斧之木さんの私見です。ネタバレにはならないでしょう」

「いいの？ いいならまあ、言うけど」

「どうぞどうぞ」

「んー……なんて勿体ぶつたけれどさ、本編の方で語った以上の事は、あんまり僕には分からない」

「おや。弱気ですね、珍しい」

「だから、僕にも出来る事と出来ない事があってだな——確かに僕は専門家を名乗ってはいるけれど、正確に言うならば、僕は専門家の式神だ。言わば偽物——どうやっても知識量は本物には劣る」

「偽物、ですか」

「まあ、偽物と言うなら、それこそあの淡海静もそうなのだろうけれど——偽の名前を名乗っているという意味だね」

「淡海、静……名前で縛ると言いますが、しかしどこにも”織崎記”を連想させるワードがありませんよ」

「名前で縛ると言うのは、何も自分の名前を使うということとイコールじゃあない。あれはある種、その名前を持つ者に従えさせる為の縛りだ」

「なるほど……いや、だとすれば、おかしくないですか？ 淡海さんは織崎さんの従者らしいですし、これはつまり、織崎さんは淡海さんを従えさせているということでしょう？ これはどういう」

「そこで”静”が生きてくるのかもしれない。本編でも言ったけれど、”静め”は”鎮め”に繋がる——淡海静の反抗心を、”静”の字を使って封じているのかもしれない。或いは、別の方法かもしれない」

「確定的ではありませんね」

「確定するまでは確かな事は言えない。しかも、まだ判断材料が少なすぎる。お姉ちゃん、正弦、貝木おじさん、忍野お兄ちゃん、臥煙さんあたりならこれくらいで分かっちゃうかもしれないけれど」

「成程……では、この議論は後回しですか」

「そうだね。【しずめファントム】でその辺は語られるだろう」

「相当先の予告ですね!？」

「製物——」

「ちよつと! 何のためにこの章への言及を避けたか思い出させて差し上げましょうか!? ネタバレ! それ凄くネタバレ!」

「あ。やっべ」

「ああもうどうするんですか……もう殆ど言っちゃっているじゃありませんか! どうしてくれるんですか、これえ!」

「ごめん。編集さん、ここ、カットで」

「編集担当は貴女です!!」

「014」

「僕たちを殺そうとするとは全く許しがたい」

「命知らずも良いところですよ。どれだけ私達が数多くの超有能な専門家たちと知り合いか、ちゃんと分かってるんですかね?」

「しかも臥煙さんの殺害予告とか、命知らずなんてどころじゃあない。無謀に等しいよ。無茶だし、無理だし、無駄だ」

「へ物語〳シリーズ全キャストの殺害なんて、一人たりとも成し遂げられる気がしませんよ。専門家たちは言うまでもありませんし、他の方々も一筋縄ではいかない豪傑ばかりですし」

「殺害どころか、そもそももう死んでる奴とかもいるしね。沼地蠟花とか、貴女とか」

「しかし気になるのは、このリストの中にデストピアさんやトロピカレスクさん、ギロチンカッターさんが入っていないという点ですね。斧之木さん、どう見ます」

「そうだね。まず、最高齢吸血鬼が入っていないのは、これは単純に実力差だろうね。あの後期高齢者のことを”旧キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード”とは言わず”忍野忍”と言ったあたり、こいつは”忍野忍”の状態のまま殺そうとしている、つまり、最初からフルパワーモードの忍先生と戦う気はないということだ。怪異の王に勝てる訳ないし——なら、あれを生み出した吸血鬼にも手

を出す気はないという心理は当然の物と言える」

「ははあ、成る程。単純に作者の事情とかではなく」

「作者の事情とかではなく」

「では、トロピカレスクさんとギロチンカッターさんは？」

「その二人はもつと単純な理由だろう。そいつらはもう現世には居ない。影も形もない。存在が消滅した奴を殺す事は、流石に出来まいよ」

「ははあ、成る程。流石は斧之木さん、的確な分析をなさりますね。まさに、腐つても専門家ということでしょうか？」

「死体だけについてか——というかき、デストピアだのトロピカレスクだの言ってるけど、これってとんでもないネタバレなんじゃないの？

良いのかよ」

「まあ、冒頭の注意書きを強調しておけば大丈夫でしょう。既に発売から一カ月が経とうとしていますし」

「その良い訳もいい加減だけれどね……【裂物語】の時点で【業物語】のちよつとしたネタは使われている訳だし」

「改めて考えると、アニメのみを視聴している方にはとことんまで優しくない小説ですね、これ。原作最新刊までを読んでいる事が可読条件となっていると言っても過言ではありませんね」

「その辺、ハードル高いよね。文字数云々の問題以前に」

「では、次の章ではその辺りの対策についてじっくりと語り合いますしょう」

「いや、本編について語り合おうよ」

[015]

「きやあ、何と言う事でしょう！ 斧之木さんが死んでしまいました！」

「元から死体だけどね」

「両方とも人でなし！」

「お前もだろ」

「ほうほう、ここでさっきの嘔吐が影響してくる訳ですね。そうですね?」

「んー、実はその辺微妙」

「おや? 調子が悪いことが、糸を千切ろうとしても傷を負う原因ではないのですか」

「うん。調子が悪かったのはそれ以前の問題だし——仮にあの場面で気分が悪くなかったとしても、僕が例外的アンリミテッド・ルールブックの方が多い規則を使っても無駄だったろう。それ程にあの糸は強固だった」

「蜘蛛の糸、ですか。まあ蜘蛛の糸って、鋼鉄を上回る強度を誇るらしいですからね。しかも怪異ともなれば、尚更ということでしょうか」

「うん、まあ、怪異だよ」

「おや? 煮え切りませんね」

「いや、僕自身もちゃんと把握している訳じゃあないから——蜘蛛の怪異って、本当多いんだよ。あの特異なフォルム故に、蜘蛛自体が怪異と思われていた時期さえあるんだ。まだ判断材料が少なすぎる。人に憑き、糸を使う蜘蛛の怪異なんて、それだけじゃあまだ多すぎて絞り込めない」

「ほう。では、この話題は保留と言う事ですね」

「そうだね。その辺りは来週から更新開始する〈物語〉シリーズ プレシーズン 第三作【裔物語】で少し明らかになるのかもしれない」

「宣伝を入れてきますね」

「本来ならこっちの宣伝に力を入れなくちゃいけない筈なんだけどね。本家の方は、いちいちこっちで宣伝染みたことしなくても十分ベストセラーだし」

「宣伝と言いますが、まだあまり進んでいませんからね。宣伝のしようがないと言いますか……というか、作者がそこまで高望みしていないというのも理由の一つなのですから」

「欲がねえんだよこの作者。読者が急増したあの時、まさかの二週間何もなしの完全休載をかまשיやがった位だからね。多分あの休載で



大半の方が愛想尽かしたよ」

「老倉さんに一番感情移入が出来る方らしいですからね——おっと、そろそろ作者虐めを止めましょう。作者が喜んでしまいます」

「自虐に喜びを感じるとか、本当に人間として終わっているけれど——そうだね、止めよう。喜ばせたくないしね」

「では、次の章です」

「其ノ參、終わり」

「016」

「うわ出やがった。鬼婆だ」

「いやいや、これに関しては貴女の意図的な事でしょう!? ここで忍さんをデイスるのは如何なものかと」

「分かってるよ。分かってるけど、つい反射的に罵倒してしまうんだ」  
「もう、気を付けて下さいよ。一応この『ウラガタリ』内で話した事は世に出てしまうんですから、不用意な発言は控えた方が良いでしょう。今この場に忍さんが居ないとはいえ、あの方がこれを読まないとは限らないのですから」

「問題ない。今のあいつは所詮幼女。ロリババアだ。僕が負ける道理はないね」

「その割には足が震えてらっしゃいますが」

「僕自身の体温が冷たいからね。寒くて震えてるのさ」

「難儀な身体ですね……」

「まあ、仮に後で僕がボコボコにされるとしても、それは今じゃあない。じゃあ今のうちにボロクソ言っておくのが得策だ」

「怖いもの知らずというか、それこそ無謀ですよ貴女」

「いえーい。後期高齢者、見てるー? ばーかばーか。ぴーすぴーす」  
「織崎さんが手を出すまでもなく殺されそうなんですが!」

「言うだけならタダだ。へーいへーい、悔しかったらこここまで来てみるよ。無理だろうけどな。やーいやーい、金髪やーい」

「止めて下さい! 挑発しないで下さい! 本当に来たらどうするん

ですか!？」

「大丈夫さ。どうせこのウラガタリスタジオに這入って来る事なんて出来」

ガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガン  
ンガン!!!

「ひえっ」

「斧之木さああん!! 今すぐ謝って下さい!! このドアを連打している方が何者かは知りませんが、謝って下さいっ!!」

「いやあ、もう無駄だね。これは」

「ど、どうして嗅ぎつけられたのでしょうか!?!? これ、あの方ですよね!

絶対あの方ですよね!?!」

「どうやら時間が無いようだ。ここからはマジで巻きで行こうぜ」

「少しは反省して下さいっ!!」

ガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガン  
ンガン!!!

「017」

「やーいやーい、若作りババア」

「これ以上刺激するの止めて下さいます!?!」

「僕は本編の台詞を引用しただけだ」

ガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガン  
ンガン!!!

「ひいっ!?!? お、斧之木さん、本当に止めて下さい!?!? このままでは、私までやられてしまいますよ!?!」

「いいじゃねえか。地獄まで道連れだぜ」

「地獄とか私にとっては洒落になってないので止めて下さいよっ!!」

「大丈夫。所詮あいつに出来るのは、ドアを叩いてこの『ウラガタリ』を妨害する事だけだ。取るに足ら」

『聞こえ取るんじゃぞオノノキい!! これ以上儂の悪口を言えば、あらゆる手段を用いてうぬを甚振ってから惨たらしく殺す!!!』

「ひえっ」

「とうとう声まで聞こえてきましたよ!?!」

『ついでにそこにおける迷子娘も巻き添えにして殺す!!』

「ひいひい!!?! 謝って!! 謝って下さい!!」

「嫌だ。僕は絶対に謝らないぞ」

「変な強情さを発揮するの、止めて下さいませ!?!」

「大丈夫。声は聞こえても実際に這入って来る事はないだろうし。問題ない問題ない」

「いや問題しかありませんよ……どうやって帰るんですか。帰れませんよこれ。帰りを狙って殺しにかかってきますよ」

「その時は、一緒に逝こう」

「嫌ですよ!!」

『無事に帰れると思うなよ!! 否、無事に『ウラガタリ』を終えられると思うなよ!! 前代未聞の三人語りを実現させてやるわ!!』

「怖いです!! 殺気が既に部屋の中に侵入していますっ!!」

「真宵姉さん。腹括ろう」

「貴女の所為ですよ斧之木さんっ!!」

「018」

「不味いですよ……今回無茶苦茶じゃあないですか……どう責任とってくれるんですかこれ」

「僕に罵倒させる隙を作った忍姉さんが悪い」

『その舌『心渡』で切り裂いてやる!!』

「やれるものならやってみろ。その頃には貴女は八つ裂きになっているだろうけどな」

「何でそんな強気なんですか貴女……?」

『ほう、八つ裂きを所望するか! よかろう! ならばまずはうぬの手足を一本一本引き千切り、その舌も引き千切ってから殺す!!』

「斧之木さん! ご自分の未来の事も考えて下さいっ!」

「お前もな」

「何でそんな偉そうなんですかつ?」

ガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガンガン

「うわあああああああつ!!!」

「次の章行こうか。巻きで行こう」

「ま、待って下さい! まだこの内容について何も話していません!

「本編も今の状況と似たようなものじゃあないか。僕と忍姉さんが口論してるだけだ。特筆する事なんて何も無い」

「開き直ってますねえ! 開き直りまくりですぞねえ!!」

「ただ一つだけ言っておくと、忍姉さん。貴女がミスタードーナツのイメージキャラクターになった場合、売り上げは激減するだろう」

ガンッガンッガンッガンッガンッガンッガンッガンッガンッガンッガンッ  
ガンッガンッガンッガンッガンッガンッガンッガンッガンッ  
!!!

「斧之木いいいいっ!!!」

「うわっ、真宵姉さんのタメ口なんて初めて聞いた」

「なんなら私手ずから貴女の舌を引き千切ってやってもいいんだからな!! 今私は、本気でキレてるんだからな!!」

「ごめん。次の章行こう」

「次は大人しくして下さいね!!」

「こよみクラム」

「鬼いちちゃん、かつけー」

「身体を張って斧之木さんを助けるなんて、本当、男気を見せる時は見せるんですよ。今までの変態行為を全てチャラにしたいくなる程度の格好良さがありますよ」

「そして復活した僕も格好良いね。今までの無礼行為が全てチャラになるくらいに」

『チャラにならないぞ!!!』

「くそっ」

「まず貴女、謝りましょうよ。一言たりとも謝罪の言葉を口にしてませんよね、貴女」

「僕がこいつに謝罪するなんてありえない。だが、ハーゲンダッツを僕に献上すると言うのであれば謝ってやってもいい」

「上からですねえ!」

「聞いたか、忍姉さん。今すぐハーゲンダッツを持ってこい。1ダースから議論してやる」

「貝木さんみたいなことを……」

『うぬの身体をハーゲンダッツにしてやろうか!!!』

ガンツ! ガンツ! ガンツ! ガンツ! ガンツ!

ガンツ! ガンツ! ガンツ! ガンツ! ガンツ!

ガンツ! ガンツ! ガンツ! ガンツ!!!

「あいつ、何訳のわからない事言っているんだらう。僕の体がハーゲンダッツになる訳なんてないのに、馬鹿な奴」

「冗談抜きで死にますよ貴女」

「もう死んでる」

「そういう問題ではなくてですねっ!!」

「まあまあ、あんな乱入者は置いておいて、真面目な話をしよう」

「私はかなり真面目に私達の未来を憂えているのですが」

「なんかこの章だけ【こよみクラム】なんてサブタイトルがついているけれど、これは何で? きつと読者の大半が思っているよ。貴女、知ってるでしょう?」

「えつとですね。まず一つ、これは本来のタイトル【しるしメイク】に含まれていない怪異である蛤さんが中心となる回だからです」

「貝だけになってか」

「舌ひっこ抜きますよ」

「悪かったよ。で、他の理由は」

「二つ目が、まあ、今後の伏線の為ですね。はい」

「成る程。追求しちやあ駄目なやつか」

「その通りです」

「了解。じゃあ、次行こうか」

「……忍さんが急に静かになったのが、非常に気になるところなのですが」

「019」

「ヒューツ!! 私、格好良いーっ!!」

「悔しいけど、本当格好良いね。ここの真宵姉さん。神様の風格ばかりだよ。こんなの見せられたら誰だって信仰しちゃおうよ」

「いやあ、それ程でも、ありますがねっ!! ははは!!」

「まあ、このシーンだけを抜き取ればの話だけれどね。普段の貴女を知っている僕としては、まず間違いなく絶対に貴女の信者になる事は無いだろう」

「えー」

「残念だったな。僕は何も信仰しないぜ」

「でも斧之木さん、私が神になってからというものの、結構私に助けられていませんか? ほら、【つきひアンドウ】で」

「やめろ。やめろ。あれは僕の黒……」

「黒? 黒、なんですか? まさか、黒歴史とでも言うつもりですか?

言っちゃうつもりですか!?!」

「……忍にお前を生贄に捧げたら、僕助かるかもしれないな」

『助からんぞ。死なす』

「ちえっ」

「神を生贄にするとか、罰あたりもいいところな発想ですね」

「なんか妙に黙ってやがるから、もうあいつ居なくなっただと思っただけだなあ。やれやれ、現実ってのはそうそう上手くいかないってこと、かな」

「格好良さげなことを格好良さげに言うのやめてくれませんかね」

「ロリカッケーだろ」

「いえ、ただのロリです」

「忍姉さんこそただのロリだよ。偉そぶっているロリババアさ」

「まだ言いますか貴女……」



「は、はあ」

「さあ、どうした？　続けよ。さつきまで通り『ウラガタリ』を進めるがよからう」

「じゃ、じゃあ……やりますか？　斧之木さん」

「やりたいのはやまやまなんだけどさ、この状態だとどうしようもないんだよ。ねえ忍さん。降ろしてよ」

「ならん」

「そっかあ」

「すみません斧之木さん……流石の私でも、全盛期の忍さんを操る事はとても出来ません。自業自得と思って、このまま続けましょう」

「お前も大概鬼だな」

「えっと、何でしたっけ？　織崎さんが逃げたところでしたっけ？」

「やれやれ、みすみす逃してしまうとは情けない。儂が今のように全盛期状態であれば、奴らなぞに遅れをとることはなかったものを」

「そうだね。全盛期の貴女は凄いもんね。格好良いもんね。最強だもんね。ほら、褒めたんだから降ろしてよ」

「ならん」

「そっかあ」

「……っ、次行きましょうか」

「021」

「最終章ですな」

「【衣物語】最終章でもあるね」

「僕が鬼いちやんに言ったあの発言の答え合わせだね。まさかあれを本気でとらえた読者は居ないだろうよ」

「とは言え、シチュエーションがシチュエーションですからね。吊り橋効果というものもありますし、全員が全員騙されなかったという事はないでしょう——無理がありますけれども」

「しかし鬼いちやん、彼女持ちの身である動揺とか、マジ引くわ。あの人誰かと結婚したとしても、いつか浮気するんじゃないかな」



「今の時点で似たようなものですからね。幾ら阿良々木ハーレムが崩壊気味とは言えど、それでも二股かけているようなものですし」

「へえ。じゃあ忍さん、邪魔だね痛い痛い痛い痛い痛い」

「ああん？ 何か言ったかのう？」

「嘘です嘘ですマジごめん痛い痛い痛い痛いやめてよ」

「ふん、最初から殊勝な態度をとっておればいいものを」

「泣きたい」

「自業自得です」

「鬼。蝸牛。神」

「それは悪口なんですか？」

「悪口じゃあない。事実を述べているだけだ」

「私も事実を言ったままでですよ——というか、私を身代わりにしようとしておいて擁護してもらえろと思わないで下さいよ」

「世知辛いなあ。僕達親友だろ？ 何か良い事あったんじゃないやなかったのかよ」

「まさか忍さん呼び寄せてしまうとは想定外だったんです……私は強い方につく奴ですのー！」

「あとで痛い目見せてやる」

「忍さん」

「ごめんね真宵姉さん」

「いいでしょう。苦しゆうないです。ははは！」

「何だこの地獄は」

## 裂物語

### 第參話 ひよりブレード 其ノ壹

〔001〕

神崎日和——僕と彼女の出会いが果たして運命だったのだろうか。或いは偶然だったのだろうか。否、偶然ということはつまり運命であり、真に論ずるべきは人為的なものか、そうでないかである。

人為的——つまり、作られたもの。

人によつて生み出された、非自然的なもの。

それは僕たちの身の回りにごく自然にありふれている。それが存在しないのが、寧ろ不自然だと思える程に。

僕たちの世界を——侵食している。

そんなものの一つとしてぼくが挙げたいのは、機械と言われる人工物だろう。あれを差し置いて人工物は語れない。あれこそ正に非自然的なものであり、不自然を極めたもの——つまり、どうしようもなく、人工物という枠から決して出ること許されていない存在だからである。

今この地球上に生存している全人類のうち、果たして何割が機械に触れていることだろう。生まれてこのかた機械に触れる機会がなかった人間なんて、今では皆無であると言っても過言ではあるまい。赤子でさえ、保育器と呼ばれる機械に触れる時代である。

超自然的な存在である怪異にとっては、さぞ生き辛い環境だろう——人間目線ではなく、僕の血に多少宿る怪異の目線から見れば。

かと言つて怪異が生まれ辛い環境であると言う訳ではない。寧ろ限られた怪異はより力を増すだろう。

都市伝説。

街談巷説。

道聴塗説。

機械という制御出来ていながら出来ていないものが普及したお陰で、怪異は更に生まれることとなるだろう——そしてそれは、新種と

も呼べるのかもしれない。そんな中で最も恐ろしいタイプの怪異は、最早議論するまでもないだろう。

機械に人間の心が宿ることである。

制御不能。

懐柔不可能。

人間より圧倒的にスペックを上回る機械が牙を剥けば、僕たちに為す術はないだろう。そしてそれは人間だけに限らず、怪異でさえも例外ではない。

とにかく、これはそういう物語だ。人の心を持った機械の物語。

この世で最も恐ろしい怪異。

機械であり、奇怪な存在——その一振りに纏わる、怪異譚である。

〔002〕

早速だけれど、僕の話聞いて欲しい。なに、あまり長い話にはしないつもりなので、決して構える必要はない。僕だってその辺は心得ている。どれだけだらだらと喋ったところで、それを聞く、否、見る読者が居なければ話にならないことくらい、僕はよく理解している。数学の話をしたりするとひとが離れていくことくらい、僕は分かっている。

だからこれからするのは数学の話じゃあない。お勉強はしない。そんな固い話ではないので、肩の力を抜いて見て欲しい。

後日談というか、前回のオチ。パート2。

……いや、これが反則技であると言うことも僕はよく理解している。これを前回にちゃんと入れておけば、あんなに長くなった前回は良い具合に分割出来たかもしれないということを承知で、僕はこれを語るとしよう。

さて、前回——即ち衣物語の事だ——をお読み下さった読者の皆様でさえ、もしかしたら忘れているかもしれないけれど、あの事件の後僕の家はとんでもないことになっていた。

いや、僕の家というより、僕の家之窗——もつと言えば、僕のちっちゃい方の妹の窓なのだ——とにかくその窓がとんでもないこと

になっていたことを、読者諸兄は覚えているだろうか。

蛞蝓。

八九寺真宵大明神が、僕の家に住まう式神童女である斧乃木ちゃんに寄越しなされた使い魔、或いは眷属だ。

斧乃木ちゃんが言うには、その蛞蝓は彼女を呼ぶ為、窓を這い回ったという。そしてそのネットネットした粘液を利用して文字を書いたとか。全く器用なことをするものである。器用というか奇妙としか言いようがないが。

で、そのサインを斧乃木ちゃんは受け取り、僕に合流、そしてあの謎多きツーマンセル、識崎記と淡海静を撃退した訳で、僕は斧乃木ちゃんと八九寺には頭が上がらない。

しかし、問題はこれである。

真の問題はこれである——これというのはつまり、窓にべつとりとこびり付いた、ぬめぬめとした筋である。

あの蛞蝓の神様、果たしてこれを考慮していたのかしていなかったのかは不明だが、もう少しやりようがなかったのだろうか、と言いたくなる。いや、これについて文句を言うとはとんでもなく筋違いで、寧ろ僕は八九寺に心の底から感謝しなければならぬ立場なのだけけれど、しかしどうも釈然としないものがあるのは隠しようのない事実である。

大人気ない、という声もあろう。実際大人気ないと思う。しかしどうだろう、成人式を未だ迎えていない僕を、果たして大人と呼んで良いものだろうか？ 甚だ謎である。いや、自分でも揚げ足を取っているというか、それこそ本当に大人気ないことをしているというのはいく分かっているのだけれど、しかしそういう点から考えれば、僕は八九寺から見て子供の筈なのだ。

八九寺真宵——享年10歳。

あれから11年の歳月が経ち、このまま順当に成長すれば、少女八九寺は八九寺おねーさんに進化していた筈なのだ。21歳の大人になっっている筈なのだ。そこを考慮すれば、真に大人気ないのは八九寺の方ではないだろうか。

……いや、僕は何を論じているのだろう。大人気ないとか、そういう話をしているのでは、だからないのだ。

#### 閑話休題。

兎に角、その蛞蝓の通り道の後始末。家に帰還した僕がいの一歩に取り掛かったのは、それであつた。誰も手伝つてくれない中、一人だけでの掃除。精神的にかなりくるものがあつたが、その程度のことなら僕は何度も経験してきた。故に僕が苦言を呈したいのはそこではない。

精神的な苦痛は耐え切れても、肉体的な苦痛は、何度やつても慣れないのである——僕が脚立に乗つて月火の窓を拭いている最中、運の悪いことに、あのちつちやい妹は目を覚まし、そして窓を拭く僕を見やがつたのだ。

そこから酷かつた。悲鳴をあげるだけならまだ多少はかわいげがあつただろう。いや、そもそも悲鳴なんてあげられる筋合いは僕には無いのだ。窓を掃除してやっているのだから、それこそ僕は感謝されてもおかしくないはずなのだ。

しかしあのヒステリック小娘は、悲鳴をあげることにはなかつた。悲鳴はあげなかつたが、手を上げる増援を呼んだ。

「火憐ちゃんー！ お兄ちゃんぶつ殺してー！」

火憐と月火の部屋は、火憐が高校に進学するにあたり、別々の部屋となつた。故に月火は火憐を呼ぶ為、部屋からどたと飛び出して行つたのだ。

その隙を突いて僕は逃げ出そうとしたが、しかし僕は忘れていた。火憐が、よりにもよつて朝、この家の中に居るわけがないのだ。

火憐はいつも朝っぱらから町内を逆立ちで一周したり、北白蛇神社を十往復するなど、その精神性を疑うような奇行に繰り返している。その日に限つて、毎日欠かさずやつているような奇行をサボっているなど、ある筈がないのだ。

そしてそれは月火も忘れていた。いくらあいつと言えど、やはり寝起き。しつかりと混乱してはいたのだろう。その癡悲鳴もあげず、確実に僕を仕留めようとする一手を打とうとするのがあいつらしいと

どうか——兎も角、火憐は家の中には居なかった。確信を持って言える。

何故ならば。

「……何やってんだ兄ちゃん」

いつの間にか脚立の側に、火憐が逆立ちで立っていたのだ。

その後はもう酷い有様である。酷い有様というのはつまり、僕が火憐にボコボコにされたということの意味している——いや、このボコボコにされたという表現では、僕が受けた圧倒的な暴力を描写するには些か優しすぎる。正確には、ボコボコではなくボロボロが正しい。

そりやあもう、囲い火蜂の時を思い出すくらい捌られた——抵抗しようと思っただけで、しかしそれは叶わぬ願いだった。今までならまだ吸血鬼の力で殺しちゃうかも、とか、そんなことを考えていられる余裕があったのだが、今回はそれがまるでなく、隙もなく無駄もなく、一瞬たりとも手を緩められずに捌られた。抵抗しなかったのではなく、出来なかったのだ。

あいつ、蜂のときより明らかにレベルアップしてやがった。ベストコンディションなんて言っていたけれど、やはりあの高熱は火憐にとっては相当なハンデだったのだろう。これがあいつの本気……正直、死ぬかと思っただし、兄に対してここまでやるかと戦慄を覚えたものだ。

必死こいて火憐を説得した後、隙を生じさせぬ二段構えで僕を襲ったのは、月火による最悪の攻撃だった。いやもう本当、こいつだけは本当もう。流星は旧ファイヤーシスターズの参謀と言わざるを得ない。

あいつがとつた最も最悪な手段。それは即ち、”親に言う”。

……ここからの展開は記したくない。火憐にズタボロのボロ雑巾みたいにされた後の精神攻撃である。精神攻撃はまだどうにかなるみたいなことをさつき述べたけれど、すまない、あれは嘘だ。

キツかった。

しかも怒られている僕の横であの小さい奴、煽ってきやがるのだ。

あの時の僕の心情は、とても言葉なんてものでは収まらないにかとしか言いようがない。

結果、僕は罰として暫しの間、ニュービートルの鍵を没収されるという刑に処された。これも中々堪えた。

そんなかんじで、誤解に誤解を重ねられ、結果僕の善意は見事に裏切られた訳で、もう二度とあいつの窓なんて掃除するか、という固い覚悟を決めた僕は、不貞腐れてその辺を彷徨っていた。

高校を卒業し、もうすぐ大学生になろうとしている身で、不貞腐れてその辺を彷徨くなど、大人気ないとかそういう以前にただの不審者のみだけれど、幸いそんな僕を目撃する人は居なかった。

さて、後日談とは言っただけけれど、本番はここからである。

茶番は終わり。

僕は歩きながら思った。八九寺め、次会ったらどうしてやろうかと——勿論ただの逆恨みである。しかしここまでされたのだ、逆恨みの一つでもやりたくなるのが人情というものではないのだろうか。個人的には月火を苛めた方が一番のストレス発散になるのだが、有り体に、飾らずに言えば、怖い。

色んな意味で怖い。肉体的に殺されそうでもあるし、社会的にも殺されそうな相手なのだ、あいつは——妹になに怯えているんだこのチキン、などと言われるかもしれないけれど、しかし考えてみてほしい。千枚通しを常備しているような奴に、躊躇なくバールで殺そうとする奴に、果たして恐怖を感じないことが、可能なのだろうか。答えは言うまでもあるまい。

ならば僕はこの気持ちは何にぶつければ良いのか。八つ当たりなんて褒められた行動ではないけれど、しかし目の前に元凶であるところのツインテール蛞蝓大明神が居られるというのだから、このチャンスはしっかりとモノにしなければならぬ。

さて、そういう訳で皆様、お待たせしました。いつもと趣向を変えて、後日談の振りをした前振りにして見たが、如何だっただろうか。

僕は意気揚々とその場で準備体操を済ませ、いつも通りクラウチングスタートの姿勢をとった。狙うは、ツインテール少女神——!!





かの方法で死んでしまいたいそうだ……僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ……」

「かみまみだ」

「わざとじゃない!?!」

「狩りました」

「僕をか……」

狩られた気分だった。というか、刈られたい気分には駆られていた。

辛い。普段は楽しい筈のこの流れも、とても辛い……僕は、なんて愚かな馬鹿野郎なのだろうか。八九寺にまで拒絶されて……ああ、もう僕、これ死ぬんじゃないかな。

「ど、どうしました? 今日はいっになくネガティブシンキングですね阿良々木さん……私に飛び付けなかったのがそんなに堪えましたか」

「ああ……堪えたよ」

堪えきれないほどに堪えたよ。

「それはすみません。何分、この子の力を試したかったもので」

「この子……?」

僕は全力で顔を上げた。顔面がモザイク処理される程に酷い有様になっているのを見て、八九寺は少し引いたようだ。ああ、また罪悪感が……。

なんて考える暇もなく、僕は再び八つ当たりの炎を燃やした。対象は八九寺ではなく、八九寺が取り出した”それ”である。

「いやあ、本当に私にちゃんと従ってくれるのかどうかを知りたくて。神様特権って奴ですよ」

そんなことを言う八九寺がその手に持っていたのは、何を隠そう、今朝僕達を散々苦しめてくれた、二度と見たくない、嫌という程見たあの忌々しいボディだった。

蛤。

幻覚を見せる煙を吐く怪異——逆さ蛤である。

「蛤てめええええ!!」

僕は怒りを活力に変え、立ち上がると、八九寺の手から蛤を引っ手繰り、地面に叩きつけた。カン、という音がなり、蛤の殻の片割れは地面を幾度か跳ねた。

「僕と八九寺の間柄を邪魔しやがって! くそつ、こんなことならあの時全滅させとけばよかつたぜ——いい気になるなよな! 八九寺の第一従僕は、この僕なんだからな! 蛤の分際で生意気なんだよ!!」

「本当に何があつたんですか阿良々木さん!」

おっと、僕としたことが。思わず我を忘れてしまった。やれやれ、八九寺の前で格好悪い姿を見せちまつたぜ——しかし蛤め、まだ僕を邪魔しようというのか。そういえば忍が食いたがつたな……。

「落ち着いて下さい阿良々木さん! いつもの阿良々木さんとはなんか違いますよ!」

「おいおい何を言うんだい八九寺。僕は至っていつも通りの阿良々木さんだよ。八九寺を世界で一番信仰していると自負しているいつもの阿良々木さんだ」

「それは私としても有難いのですが、余りそのはまぐりさんを虐めるのを止めて頂けないでしょうか? 一応私の眷属なので」

「許し難し!!」

「止めて下さいよ!」

蛤を踏もうとした僕の片足に鋭い蹴りをいれてきた八九寺。その程度で僕は倒れたりしないけれど、流石に悪ふざけも過ぎたので、普通に足を下ろした。

「悪いな、八九寺……ちよつと気が立ってたんだ」

「気性荒すぎですよ荒良木さん」

「正直否定しようがないのでそれでいいような気がしてくるけれど、しかし八九寺。僕の名前は阿良々木だ。荒れていても阿良々木だぜ」

「失礼、わざとです」

「だらうな!」

そんなことを喋りながら、八九寺は蛤を回収した。リュックサックに入れてるのか……。

あれだけ暴走していた僕に対し、こうして普段通りに喋ってくれる八九寺。やはり神様は度量が違うぜ。

「暴走どころか爆走でしたね」

「それも見事失敗に終わったがな」

その蛤の所為でな。

「はまぐりさんと何張り合ってるんですか貴方は……しっかりと下さいよ。貴方は伝説の吸血鬼の眷属でしょう？ いいんですか？

蛤と同レベルになって」

「……………」

良い訳なかった。

流星に蛤と同格なんて、幾ら力を失っているとは言えど、誇りは余り失っていない忍が知れば、大いにショックを受けるだろう。

「何があったんです？ 阿良々木さんがここまでご乱心なされるとは……只事ではないと、この八九寺真宵、判断致しました」

「いやまあ……そんなにシリアスな案件ではないのだけれど」

「私の経験則から判断する限り、忍さんのことか、或いは、妹さん達と  
のこと、そのどちらかと予想しますが如何でしょう？」

完全に読まれてた。

すげえな八九寺……僕って奴は、そんなに分かりやすい男なのか。忍野には散々見透かされていた僕ではあるけれど、忍野どころか、僕の知人全員から見透かされているのかもしれないなかつた。

「……まあ、妹とのこと……と言えば、まあそうなんだけど」

「そうですか。それはそれは——では、不肖この私が、阿良々木さんの聞き手になって差し上げましょう。人のお話を聞くのも神様の仕事ですから」

「八九寺……」

天使だ……天使がここに顕現している。神様と天使、果たしてどちらが格上なのか僕は知らないけれど、その両方の属性を併せ持つ八九寺が一番格上なのは議論する余地さえなかった。

そんな八九寺の優しさに甘えた僕は、洗いざらい全て話した。先程長々と述べたこと以上に長い、長々とした語りだったけれど、八九寺は小気味いい相槌、合いの手をいれ、しっかりと聞いてくれた。本当、聞き上手な奴である。日本には八百万の神が居るといふけれど、八九寺はきつとその中でもかなり有能な方に違いないと思った。

僕の話聞き終わると、八九寺は頷き、言った。

「成る程——つまり、私のお陰で阿良々木さんは一人立ちへの第一歩を踏み出した、という訳ですね」

「お前は僕の話の何を聞いていたんだ!？」

「え？　そういうことじゃないんですか？　てつきり私は、大学生になっても親の脛を嚙って暮らそうとしていた阿良々木さんが、私のお陰で心を改め、家出と称して一人立ちの練習をなさっている、という話だと思っていたのですが」

「一言も言っただけよ、そんなこと！　お前のお陰っつーか、お前の所為って言っただよ！」

前言撤回。こいつ、聞き上手かもしれないが、話を自分にとって都合のいいように曲解しやがる。曲解に定評のあるレイニーデヴィルも真っ青である。

改変しやがって……ああ、こういうのを歴史の改変っていうのか？

織崎ちゃんが言っただことだが——。

「これはこれは聞き捨てなりませんね、阿良々木さん！　私の所為！　私の所為と仰いますか！　良かれと思って行動して差し上げた私の善意を、切って捨てますか！」

「いや、そういう訳じゃ……いやそういう訳だな、うん」

「マジですか阿良々木さん！　貴方がそんな方とは、私、これっぽっちも、露ほどにも思っておりませんでしたっ！」

「ご、ごめん八九寺。でも、僕は別にお前には怒ってないよ、本当だ」  
「しかし私に八つ当たりをしようとしたのは変わらない事実なのですが、そこどころ、何か釈明でもありますか？」

「すみません、無いです」

頭を下げた。二礼二拍一礼。小学五年生の少女に頭を下げる高校

卒業生の姿が、そこにはあった。

「やれやれですよ全く……あーあ、これじゃあ貴方はまぐりさん以下ですよ」

「蛤以下だと!?!」

とんでもないお達しだった——蛤以下。なんだそのこれ以上ない程屈辱的な称号は。土下座を百回やつても全くプライドが傷つかない僕だけれど、流石にこれはプライドが傷ついた。蛤以下だと!?! 畜生蛤め!!

「もう貴方は支部務めですね。本部には来ないでください」

「左遷された!?!」

「——か本部って何だ、支部ってなんだ!?!」

「勿論本部は北白蛇神社ですとも。あそこで働ける上級役員になるには、阿良々木さんは不敬過ぎます! 貴方には支部——即ち、ご自分の家で働いて下さい」

「自宅警備員になれと!?!」

一人立ちどうのこうのと言っていた奴の台詞じゃねえな、それ!

「あ、でも僕の自宅ってお前の支部って扱いなのか……そう考えると、自宅警備員も悪くない」

「阿良々木さんのニート化に一役買ってしまった!?!」

「そうだ! 僕は八九寺の下で働いているって設定なんだ! そうだ! ー それだ!」

「それだ! じゃないですよ! ちゃんと働いて下さいよ! 友達が

ニートとか、私他の神様に笑われてしまいます!」

「大丈夫だ。お前のことを笑うような神様は、僕が倒す」

「貴方が働けばそれで済む話なんですけど!?!」

全然格好良くありませんよ。八九寺は言う。

むう。

じゃあ僕はどうすれば良いのだ。どうすれば、僕は本部務めに昇格できるというのだろうか。

「そんなに私の下で働きたいんですか貴方は」

「当たり前前だ。僕はお前の信者第一号だぜ」

「第二号は果たして居るのでしょいかね……」  
「……………」

何とも言えなかった。場所が場所だけに、あの神社の参拝客は少ない。精々あそこを訪れるのは、怪異か、あそこを修繕する大工さん達くらいだろう。

「信仰、欲しいですねー」

「ストレートだなおい」

「神様になったお陰で、地縛霊時代とは比べものにならない程自由になりましたけれど、また違う制約が出来て……信仰がないと、私のこのパワーも、あまり使えません」

「心配ないぜ、八九寺。無い分の信仰は、僕の並外れた信仰で補うさ」  
「はい。そう言っ頂けると有難いですし、心強くはあるんですが……何分ゴッドカーストは信者の量で決まるので、阿良々木さん一人だけでは、私はいつまで経ってもカースト下位です」

ゴッドカーストなんてものがあるのか……どうやら八九寺の奴、かなり苦労しているらしい。スクールカーストも中々苛烈なものだけれど、ゴッドカーストともなると、果たしてどれ程のものなのだろうか。

「そりゃあ、上位カーストの神々からは虐められますよ」

「よし、虐められた神の名前を教えろ。殺す」

「物騒ですね!？」

八九寺を虐めるなんて、そんな奴を僕は許すことができない。それが例え神であろうともだ。神だろうがなんだろうが、八九寺を苛めたい免罪符にはならない。

それに、やろうと思えば、多分僕、神に対してもある程度は抗えるだろう。何せ伝説の吸血鬼の眷属なのだ、吸血鬼度をギリギリまで上げれば、神の石柱や二柱程度、倒せる筈。

「どんなことをされたんだ？ それによって刑量が変わる」

「そうですね。頭上に虫を落とされたり、境内を葉っぱで汚されたり……………」

「陰湿過ぎるー!」

壮大な上位存在の癖して、やってることが学生と何ら変わらねえぞ  
神様!

「偶に入っているお賽銭を搔つ攫われたりもしますね。50円くらい」

「スケール小せえよ!」

「困るんですよー。毎日毎日そんなことをされるのは」

「お前毎日虐められてんのか!?!」

衝撃の事実だった。妹達との諍いなんて心の底からどうでもよくなるような、胸糞悪い現実だった。

「マジかよ……なんで僕はそんなことに早く気付いてやれなかったんだ……!?! こんなすぐ近くに助けを求めている奴が居たっていうのに……!?!」

「助けだなんて。私、別に気にしてませんから……毎日されていることをこうしてメモに書いておくなんてこと、してませんから」

「滅茶苦茶気にしてるじゃねえか!?!」

くそつ、蛤なんか喧嘩を売っている暇じゃなかった。僕が真に喧嘩を売る相手は、すぐ間近に居たのだ。

「八九寺、今からお前の家に行くぞ」

「え?」

「お前が困っているのを放っておく訳にはいかない。虐めっ子は、僕が対峙する」

「虐めっ子って言いますが、貴方も私を虐めていたような……」

「気の所為だ」

それでも僕は、奴等のように陰湿な虐めを行っていた訳ではない。常に真正面からぶつかって、殴り合い、直接的な行為に出続けてきた。影でコソコソしているような連中と一緒にしてもらっては困るのだ。

……まあ、結局のところ同じ穴の貉のような気もするが……それを言い出したら僕は何も出来なくなるので、ここは目を瞑ろう。

「行くぞ八九寺。宣戦布告だ」

「やめて下さいよ! 私の立場これ以上ないほど悪くなるのですが!?!」

「大丈夫だ。全員潰せば問題ない」

「問題しかありませんって！」

「おいおい八九寺、何を恐れているんだ？ お前らしくないぜ。恐れ知らず負け知らず物怖じずの八九寺真宵は何処へ行ったんだ」

「そんなキヤツチコピーだったのですか私は!? ……でも阿良々木さん。社会に出ることって、きつとこういうものだと思うんですよ」

八九寺は声のトーンを落として言った。

「自分の嫌なことでも、我慢しなければならぬものなんです——攻撃力よりも耐久力の方を求められるのが、この現代社会なのですよ。どれだけ打たれてもへこたれないか……言わばこれは、社会進出するにあたってのイニシエーション、洗礼なのですよ」

遠い目で、そんな悟ったようなことを語る八九寺。そんな現実到现在進行形で晒されているが故に、下手に反論も出来なかった。

しかしそれでも——そんなことで、僕は八九寺が置かれている現状を看過することは出来なかった。許容出来るほど、僕はまだ大人びてはいない。

僕は八九寺の両肩を掴んだ。

「いいか、八九寺。お前はロリだ」

「いきなり何を仰るのかと思えば、本当に何を仰るのですか貴方は」

「ロリっ子が、そんな風に現実を語らざるを得ないような社会は、絶対に間違っている」

「私見掛けは10歳ですけれど、本来は21歳なのですが……」

「お前の時間はその当時で止まっている。だからお前は永遠に10歳のロリだし、子供だ。本来の年齢なんて関係ねえよ」

僕は八九寺の目を真っ直ぐに見て、言う。

「小さい子は、虐められちゃいけないんだ」

「すみません、良いことを言っているんですけど、ロリと言う単語をお使いになられている時点で全てが台無しになっています」

「マジか」

むう。

なんと意固地な奴なのだろうか。こうなったら意地でも僕の気持



ちを伝えねばなるまい。僕は決してロリコンなどではなく、純粋な善意から協力を申し出ているのだと言うことを伝えなくてはならない。どこかに助けを求めているロリっ子は居ないものか——と思いつながら辺りを見回してみると、なんと、居たのだ。困っているロリっ子が。

少し遠方にあつた自販機。高い場所にあるボタンを押そうと奮闘している児女が、そこには居た。草色の着物を着て、その上から黒い袖無し羽織を羽織っている。

「見てろ八九寺。僕が心の底からお前を心配してるってことを証明してやるよ。ロリコンだからとかそんな理由じゃあないってことを、証明してやる」

「それでそんなことの証明になると本気で思っているのですか貴方は」

まあ、証明するとかしないとかは兎も角、困っているなら無条件に助けねばなるまい。僕はその少女の元へと向かった。

背伸びをし、ボタンを押そうと躍起になっているあまり、僕の存在に気付いていないようだ。僕は話しかけた時に驚かさないように、忍び足では近付かず、わざと足音が聞こえるように歩いた。八九寺はその後ろから付いてきている。

歩きながら、僕は八九寺との出会いを思い出していた。あの時も困っている少女を助けようという一心で、僕は八九寺に近付いた。あの時の反省を生かし、争い合いにならないようにしよう。

僕は児女の後ろから近付き、軽く肩を叩いた。

「よう。何か困ってるのか？」

「……………」

こちらを向いた。おかつぱ頭で、丸い髪飾りを付けている。女の子は不思議そうな顔で僕を見ると、小さく首を傾げた。可愛い。

「どれが欲しいんだい？ お兄ちゃんに言ってみろよ」

「ぷぷっ、お兄ちゃんとか自称してますよ」

黙ってる八九寺。聞こえたらどうするんだ。……なんて思ってるあたり本末転倒だが。

「……あれ」

「あれ？」

女の子が指差したものは、自販機が一番上の列にあるボタンだった。それはなんの変哲もないお茶のボトルに対応したもので、特に変わったところのないボタンであった。

けれど、僕はそのボタンを押すことは出来なかった。いや、押すことは出来るだろうけれど、購入することは間違いなく不可能だろう。何故ならば――。

「君、お金入れた？」

――ボタンには光が灯っていなかったからである。

「004」

お茶を所望している闺女。しかし代金を入れていない。これは果たしてどうしたものか。当然、奢ってあげるしかないだろう。

僕は財布から150円を取り出し、自販機の中に入れた。全てのボタンに光が灯る。

「……ほう」

「？」

闺女が感嘆するような声を漏らした。変わったことはしていない筈なのだが――自販機を見たことないのだろうか？ まあ、これ位の年代の子なら、あり得るか。

「あれが欲しいのか？」

念の為にもう一度確認を取る。闺女は頷いた。僕はボタンを押した。一瞬間を置いてガコンと音を立て、お茶のボトルが落ちてきた。

僕はそれを取り出して、蓋を開けた。誤解無きように言っておくが、僕はお茶を飲もうとして蓋を開けたのではない。一度蓋を開ける前の蓋は大抵固いため、闺女の力では開けられないことが予想される。そうなれば、そのまま渡しても飲めないであろうことは自明であろう。なので、先に一度開け、開けやすくしてあげたのである。

「ほうよ」

僕は闺女にボトルを手渡した。

「……ありがとうございます」

受け取った闺女は、礼の言葉と共に僕に一礼した。礼儀正しい子だ。八九寺の時とは大違いである。

「では、もう一つお聞きして良いでしょうか」

「あ、ああ。いいぜ。なんでも言えよ」

思わずどもる僕。こんなキャラクター性の子に触れるのは初めてなので、気後れしてしまった。

「これはどのようにして開けるのでしょうか」

「え？ えっと、この蓋を——」

「蓋とはこの先っぽにくっついていているものでしょうか？」

「ああ。で、それを左に回すんだ」

「はい」

闺女は僕の言う通り、蓋を左に回した。蓋は既に緩んでいるので、すぐに開いた。それを見た闺女は、納得したように頷いた。

「ほう、このようにして開くのですか。とても面白いですね」

「いただきます、と言って闺女はお茶を飲んだ。」

不思議な子だな、と思った。最近の子にしては礼儀正しいし、蓋の回し方はともかく、蓋のことを知らなかったりと——僕は八九寺に耳打ちした。

「お前、あれ位の歳の時、自販機のこと知ってた？」

「流石に知ってましたよ。蓋だって自分で開けていましたよ」

「……………」

僕の勘が、何かを告げている——ような気がした。どうも訳ありな子のような気がしたのだ。

しかし、僕はその程度で怯んだりしない。訳ありの女子なら、今まで幾度となく見てきた——というか、僕の友人は訳ありの女子しかない。どうして臆しようか。

喉を鳴らしながらお茶を飲み続けている闺女に話し掛ける。

「君、なんて名前なんだ？」

「ぶはっ……………あたいの名前ですか」

あたい……………あたいとはまた珍しい一人称を使う。アニメとかの影

響だろうか？ いや、アニメの影響というなら、服装もコスプレ染みている。

「あたいは日和——かんざき ひより神崎日和です」

「日和ちゃんか。僕は阿良々木暦。あそこにいる僕より小さいお姉ちゃんは、八九寺真宵っていうんだよ」

「阿良々木さん、何やら聞き捨てならないことを仰っておいりましたが？ 小さいを強調しましたね？」

「何のことだろうな、僕は知らない」

「どれだけ自分の背丈にコンプレックス持つてるんですか。戦場ヶ原さんより身長低いからって」

「それは言わないで！」

そう、僕の身長はひたぎに負けている。アニメでは僕の方が背が高かったりしたらしいけれど、残念なことに、現実はそうはいかないのであった。

「阿良々木お兄ちゃんと八九寺お姉ちゃん」

日和ちゃんは言った。

「阿良々木さん、お姉ちゃんと言われたの、私初めてです」

「あれ、そうなのか。斧乃木ちゃんからは真宵姉さんだもんな。それがどうした？」

「凄くときめきました！」

「どうでもいいわ！」

八九寺は目を輝かせている——ここで日和ちゃんの身長を記述しておこう。忍と同じ位の身長なのである。そこから判断して、日和ちゃんは八九寺より年下であると結論付けた。

「もう一度！ 八九寺お姉ちゃんって！」

「……八九寺お姉ちゃん」

「もう一回！」

「……もう言いません」

「え!？」

断られ、ショックを受ける八九寺。初対面の相手に迫り過ぎだ。もつとスタイリッシュかつナチュラルにいこうぜ。

「怖がらせちゃったかな？ ははは、ごめんよ。じゃあ、もう一回僕のことを読んでくれるかな」

「申し訳ございませんがお断りします」  
「なっ……」

一度のチャンスさえ与えられなかった。八九寺はそんな僕を見てニヤニヤと笑う。くそう。

「子供は変質者に敏感なのですよ。意外と勘が鋭いですからねー」

「僕のことを変質者と呼ぶのをやめてもらおうか八九寺。僕は変質者でもなければ変態でもない。況してやロリコンなどでは断じてない！」

「変質者でもロリコンでもないにしても貴方は変態ですよ」

「何を。ジェントルマンの代表格であるこの僕のどこに変態要素があるというのだ」

「貴方という存在そのものと言っても過言ではありません」

「マジかよ」

そこまで言われるようなことを、僕はいつ八九寺に実行したというのだろうか。身に覚えがない。さつき顔面スライスした所為でその辺りの記憶は吹き飛んだからな。顔の皮と一緒に置いてきた。

「日和さん。お母さんとお父さんはどこかに居るのですか？ それともお一人様ですか？」

八九寺は言う。

「……一人ですが」

「どこから来たのです？」

「分かりません」

「分からない？」

「どこか遠いところから……瓦礫の山から来たような気がします」

瓦礫の山？

何のメタファーだろうか。その言葉からはどうやってもプラスな意味が掴めない。寧ろ思い浮かぶのは、マイナスな意味――。

「じゃあ、あなた、迷子ですか？」

「迷い子……そうなるのでしょうか」

迷子とな。これはますます八九寺の時を思い出す展開である。迷い牛のことを反射的に考えてしまったが、しかし迷い牛はもう居ない。厳密に言えば迷い牛だった奴は、今日の前に居るのだけれど。「ですがあたいはどこへ帰ればいいのでしょうか？　もうあたいはあそこに戻りたくはありません」

「あそこに戻りたくはない？」

僕と八九寺は顔を見合わせた。八九寺はどうもピンと来ていないようだが、どうしても僕は、それを連想できてしまう。

瓦礫の山。

帰りたくない。

ここから導き出されてしまうのは、導いてしまうのは、あまり考えたくない可能性だった。即ち、羽川や老倉のような家庭事情。

しかし、仮にそうだとすれば、この子をどこに連れて行くべきなのだろうか。然るべき機関というところ、やはり警察なのだろうかけれど、少々憚られてしまう。ロリコンとかいう犯罪者が蔓延するこの昨今、僕という青年が児女を警察に連れて行くという行為は、非常に危険を伴う。誤解に誤解を重ねられ、場合によってはお縄を掛けられてしまいかもしれない。冤罪の恐ろしさは、今朝身をもって味わった。

だとしても、このまま放置しておく訳にはいかない。ここは田舎だから、そんな犯罪者はそうそういないだろうけれど、万が一ということも考えられる。やはり僕はこの子と一緒に居るべきだと思う。

幸い、今この場には八九寺が居る。青年の男一人とロリ一人ではなく、ロリは二人居る。周囲の目も、多少はマシになるだろう——いや待て、無理だ。

八九寺は普通の人からは視認できない。八九寺と一緒に居ようと、結局はロリと二人きりに見えてしまう。しかも僕が八九寺と話せば、それは痛い独り言みたいになってしまうのだ。悪化している。

どうすれば——と、ここで僕は、日和ちゃんが八九寺を視認出来ていたということに気付いた。嘗て家に帰りたくない人ならば八九寺を視認することが出来たけれど、そのルールは今でも健在なのだろうか。

……いや、今考えるべきはそこではないだろう。まずはこの子をどうするか、だ。

「日和ちゃん、君、これからどうするつもりなの？」

「どうするつもりと聞かれても、あたいに行くところなんてありません。あたいはこの辺りをふらふらと歩くだけ」

行く当てはないようであった。

うーむ……。

僕は八九寺を見たが、八九寺も肩を竦めている。おいおい八九寺もお手上げなら、僕はどうすればいいんだよ。

「……あ、そうだ」

僕はそれに思い至った。あつたじゃないか、最終手段が。良い方法が。

僕は日和ちゃんに向き直った。ここは僕のご両親の真似事を、ささやかながらさせて頂こう。これならまだ危険度は低い筈だ。

僕は言った。

「どこにも行く場所がないんなら、僕の家に来るかい？　日和ちゃん」

「……………」

日和ちゃんに冷ややかな目で見上げられた。

〔005〕

念の為に注釈しておくが、僕は下心からこのような発言に出た訳ではない。しっかりとした理由がちゃんとあるのだ。

衆知の通り——僕としてはずっと隠し通したかったが、流石にもう知られているだろう——僕の両親は警察官である。熱血な正義感を持った、僕達兄妹の人格形成に一役買う程の信念を持った両親。

僕達がまだ小さい頃、どうやら両親は、虐待を受けていた子を何度かうちで預かっていたらしい。らしいというのはつまり、僕はそのことを覚えていないということだ——これについては僕が忘れっぽいとか、そういうことでもないようで、火憐や月火も、そのことを忘れてる。

僕はこのことを、あの老倉を巡る一件を通して知ったのだが——今

回はそれを踏襲しようとしたのだ。

リスペクト。

阿良々木センターを復活させようと試みたのだ。どうせ今なら火憐や月火も居るし、あいっならなら上手くやってくれるだろうと思う。僕なんかよりよっぽど小さい子の扱いには長けている筈だ。

あの小癩な連中の手を借りるのは、今朝冤罪を掛けられた身としては非常に耐えがたいものではあるのだが——しかしそれはそれ、これはこれである。ちゃんと区別し、分別のある行動をとらなければならぬ。

とまあ、そんな訳である。ご理解頂けただろうか。僕は決して下心から行動するような男ではないということ——ロリコンなどではないということ、分かって頂けただろうか。

「分かったか？ 八九寺」

「今更元の目的を思い出しましたね貴方」

そういえば、最初は僕、八九寺にロリコンでないことをアピールしようとしていたのだっけ。完全に忘れていた。

いや、また誤解なきよう言うておくが、別にこれは新たなロリの登場によりはしゃいでいた訳では断じてない。そんな事実はどこにも書いていない。そんな男じゃないんだぞ僕は！

「ロリが三人集まった状況を、桃源郷だとかボーナスステージだとかに例えていた方が何を仰るのやら」

「おいおい八九寺。そんな身も蓋もないこと言うなよ。僕のイメージがだだ下がりだぜ」

「では《鬼物語》を見て頂くといいのはどうでしょう？ 2011年9月28日好評発売中の原作書籍です。幼女と童女と少女が揃い踏みした、たまらない一冊ですよ！ さあ、お近くの書店へレッツゴー！」

「隙あらば宣伝しようとするな！」

「この私、八九寺真宵がある意味メインとなるお話です！ さあ、全国のロリカッター皆さん！ 書籍、或いは同じく発売中の《物語》シリーズセカンドシーズン 鬼物語 Blu-ray&DVD 第1巻及び第2巻》をお買い求めください!!」



「媚び過ぎにも程がある!!」

「つーかもうそれ何年前のやつだよ！ 宣伝するには時間が経ち過ぎてるぞ八九寺P！」

「いやあ、あの話はハンカチ無しでは見られませんね！」

「お前がそういうこと言うとおのシーンが色々台無しになるんだよ！

やめろ！」

「ハンカチどころか雑巾が必要とも言えるでしょう！」

「涙流し過ぎだろ！ 気持ちに分かるけども！」

「因みに、鬼物語の後日談《終物語（中）》も是非お買い求め下さい！

こちらが収録されているアニメ《終物語 第4巻及び第5巻》は、それぞれ2016年3月23日、4月27日に発売予定です！」

「もういいよ宣伝は!!」

宣伝タイムおしまい。

いやもう流石に露骨すぎる。これは酷い。ここまでダイレクトマーケティングするような小説が、果たして今までに存在しただろうか。これ以上やり過ぎると、宣伝タイムどころか、この作品自体が打ち切りになってしまう。礼節は守らなければ。

今更そんなこと言っても、もう散々好き勝手やってきたから遅いだろうけれど……。

閑話休題。

兎に角そんなかんじで、僕は日和ちゃんを家に招待しようとした訳だ。結果、返ってきたのは冷ややかな視線だけだったのだが、まあ、当然といえば当然だろう。

「……あなたの家に、あたいは行きません」

「はつきり言われた……」

明言されてしまった。

こうなるとどうしようもない。相手が嫌がっている以上、ここで無理矢理家に連れこめば、それこそただのロリコンであり犯罪者である。かと言ってその気にさせようと説得するのもまた犯罪以外の何物でもなからう。

行き詰まってしまった。僕はどうすれば良いのだ。

「……じゃあ、日和さん。どこか行きたいところとかってありますかね？」

八九寺が言った。成る程、その手があったか。能動的にはなく、自発的に行動させる。この子を一人にしておくのが駄目だというのであれば、要は一人にしなければいいのだ。

連れて行くのではなく、僕達が付いて行く——これはこれで犯罪の匂いがするけれど、しかし家に連れ込むよりはよっぽどベターなアイデアに思えた。流石は日本語の伝道師、恐れ知らずの八九寺真宵。僕とはレベルが違った。

「……行きたいところ、ですか」

日和ちゃんは、手に持ったボトルに視線を落とした。そしてその後、再び顔を上げた。

「行きたいところではありませんが——この大きなものの中にある飲み物を全て飲んでみたいですね」

「だそうですね阿良々木さん。頑張ってください」

「いや無理に決まってるだろ！」

凄まじい無理難題をふっかけてきた。幾ら一本の値段は安価とは言え、これだけの種類全てを購入するのは流石に不可能である。

僕はまだ破産する訳にはいかないのだ——今月末には小遣い日があるとは言え(冤罪の所為でそれも怪しいが)、忍にドーナツを買ってやらねばならない身としては、極力無駄使いは避けたいところであった。

「いけませんか」

「ごめん、無理だ」

「阿良々木さん、何子供達の夢をぶち壊しにしているんですか！ 良くないですよそういうの！」

「うるせえ！ 買う方の身にもなりやがれ！」

少しは恐れを知れ！

「そうですね……しかし行きたいところと言われましても、あたいはものを知りません。なので行きたいところはありません。申し訳ございません」

「いや、謝るなよ……」

妙な罪悪感を覚えてしまう。いや、本気で申し訳なさそうな顔をしてるのだ、この子。

「なので」

日和ちゃんは言った。

そしてその言葉を聞き、僕は、真に恐れ知らずなのは何も知らない子供なのだ、改めて深く実感した。不覚にも。

「あたいを面白いところに連れて行ってくれませんか。あたい、もつと多くのことを知りたいんです」

それは叶えたい注文ではあったが、しかし敵わない注文でもあった。

八九寺と僕は顔を見合わせ、一旦後ろを向くと、議論を始めた。

「……どうする、八九寺」

「……どうします、阿良々木さん」

「僕に聞くなよ」

「じゃあ私にも聞かないでくださいよ」

「いやマジでどうするんだよ……面白いところってなんだよ。僕知らないぞ」

「全く、阿良々木さんがケチらなければこんなことには……」

「あれをケチったというのかお前は……流石にやばいぞ。児女と二人きりとか、僕の立場が危機に晒される」

「世知辛い世の中になったものですね」

「全くだぜ、迂闊に親切に出来やしない」

「困りましたね」

「まあ僕の立場なんてこの際どうでもいいとして、面白いところって何だよ。八九寺、お前散々この町ほっつき歩いてたんだから、どこか知ってるか？」

「ほっつき歩いてたという言い方に多少なりとも悪意を感じますが……」

「……気の所為だ」

「……私もよくは知りません。あくまでも私は歩いていただけですか

らね。店に入ったことはございません」

「役に立たねえなおい」

「貴方にだけは言われたくありませんよ」

「じゃあどうする」

「……取り敢えず、歩きながら考えますか？」

「……じゃあ、それで」

議論終了。僕と八九寺は振り向いた。

「なあ日和ちゃん。僕達と一緒に、ちよつと歩こうぜ。それで、面白そうなところを見つけたら僕達に言えよ。連れて行ってやる」

まあ、流石に限度はあるが……それは言わない。それを言うことこそ、まさに子供の夢を壊すことだと僕は思う。

「本当ですか！」

日和ちゃんは笑顔になって言う——やべえ何だよこの純粋な笑顔。可愛すぎるだろ。てつきりまた無表情系キャラと思っていたけれど、こんな表情もするのか。穢れた心が浄化されて……ああ、いい……。

「阿良々木さん、その発言、ロリコンそのものです」

「そう思うのは八九寺、お前が穢れているからさ。ほら、見ろよこの笑顔。ロリコンなんて概念は忘れちまいな」

「誰ですか貴方……」

「僕は良々々木さ。阿るなんて穢れた心は棄て去り、良い部分だけ残った阿良々木暦だよ」

「違います、貴方は阿良々木さんです」

「いや、僕の名前は良々々木だ。なんだ阿良々木って。僕の名前を噛むんじゃない」

「失礼、噛みました——って噛んでません！ 何いつものパターン始めようとしているのですか！」

うむ、ここまで付き合ってくれるのなら上出来である。流石は八九寺、僕の大親友である。

勿論僕の名前は阿良々木だ。良々々木でも嫌良木でもない。

「でしたら、あたい、あそこのお店に行きたいです！」

「あそこ？」

日和ちゃんが指差したのは、少し遠めの場所にあるパチンコ屋だった。都会と比べれば控え目なのだろうが、ネオンがちかちかと輝いている。子供の目を引くには十分であった。

「……………」

「……………」

僕と八九寺は沈黙し、静かに首を振った。どうやらこのやり方も、早速限界が生じてきたようであった。

第參話 ひよりブレード 其ノ貳

〔006〕

いきなりパチンコ屋を要求されるといふデンジヤラスな始まりではあつたけれど、しかし結局それ以外良い方法が思い浮かばなかつたので、僕たちは日和ちゃんを連れ回すことにした。

いや、連れ回すという表現には語弊がある。語弊どころか悪意さえある。あくまでも連れ回されるのは日和ちゃんではなく、僕たちの方なのだ。僕たちは日和ちゃんに付いて行き、日和ちゃんが行きたいと思つたところへ案内する。そういうスタイルなのだ。

「ここに行きたいです！」

「ここもいいですね！」

「面白そうです！」

「ここに行つてもいいですか！」

こんな感じではしゃぐ日和ちゃん。振り回されているのは果たしてどちらなのだろう。日和ちゃんがこんな具合なお陰で、どうやら周りからは犯罪者ではなく、妹の子守をしてあげている親切なお兄さんと見られているらしかつた。それはとても有難いことなのだが、しかし子供の体力というのはここまで無尽蔵なものなのか。引つ切り無しに動いている。どこからそんな元気が湧いてくるのだろうか。

無表情キャラなんて、以ての外である。そんな評価はこの子には一番似合わない。ここまで表情豊かに表現してくれる子を、僕は今まで見たことがないかもしれない。というのはい言過ぎにしても、八九寺、忍に匹敵する程の可愛らしさであつたのは、最早特筆するまでもあるまい。

さて、そんなこんなで、午前中を丸つた丸々、全てこの子の探検に費やした後、流石にお腹が空いたのか、ミスタードーナツに入りがつたので、僕たちは入店した。

「ほうー。面白い形ですね！ 輪っかですか！ あたいこんな食べ物見たことありませんでしたよ！ なんてへんてこな形なのでしょう！ いたく心動かされました！」

「そうかい……」

心動かされるどころか、散々体を動かされ、僕たちの体力もまた限界に近付いていた。否、残念なことに、僕たちでは無いのであった。「ひゃっほー！ ドーナツですよ阿良々木さん！ 私かれこれ11年は食べておりません！ いやあ懐かしいですねこの形！ トポロジーを感じますー！」

「トポロジーを感じるってなんだ。トポロジーは感じるもんじゃねえよ」

トポロジーとは、オイラーやガウスが開祖として有名な、幾何学分野である。位相幾何学ともいい、やわらかい幾何学とも称される。

「はっ、出ましたよ。数学好きが知識をひけらかしてやがりますよ、全く！ これだから理系はウザいんですよ」

「ウ、ウザいって言うな！ 文系！」

そうか、僕は一応理系ということになるのか。理科の苦手な理系とは、全く意味が分からないけれど。

「トポロジー？ なんですかそれは」

日和ちゃんが聞いてきた。

「ほら、阿良々木さん。チャンスですよ。貴方の知識をこれでもかと嫌味つたらしく見せ付けるチャンスですよ！ ほらほら理系なんでしょう？ 私のトポロジー活用を否定して下さいたのですから、さぞかし素晴らしい解説をなさるのでしょね？ 楽しみですね！」

なんでそんなこと言うんだよ。おまえは理系に何か恨みがあるのか。

「いえ、別に理系に対して恨みがある訳ではありません。恨みがあるのは阿良々木さんにです」

酷い。

日和ちゃんは僕の目をまだまっすぐに見ている。もうやめてほしい。勢い付いてしまったけれど、そもそも僕はそこまで位相幾何学について詳しくないのだ。聞くなら老倉に聞いて欲しい。

「トポロジーっていうのは……まあ簡単に言えば、やわらかい図形について、共通する性質や特性を研究する数学分野だよ」

ふわつとした説明だった。

「うわっ、聞きました？ 日和さん。簡単に言えばですって！ あの如何にも自分はちゃんと分かっていますよ的な態度、鼻につきますねー」

「おい！ 日和ちゃんに変なこと吹き込むなよ！」

「しかも簡単にとか言っておきながら、やわらかい凶形とか専門用語使ってますよ！ 怖いですね……あれが駄目な理系の凡例ですよ、日和さん。ああなってはいけませんよ」

「駄目な理系とか言うなよ！ そんな意図は全くない！」

「はい、勉強になります。八九寺お姉ちゃん」

「日和ちゃん!? そっちにつくの!?!」

まさかの1対2である。嘘だろ、日和ちゃん……そんな奴の何が良いんだ。人を貶めてニヤニヤ笑ってるような穢れまくった墮天使みたいな少女の何が良いというのだ。

「まあ残念でしたね、阿良々木さん。もう貴方は用済みです。帰ってくれていいですよ」

「くっ……!」

凶に乗りやがって……ふっふっふ、だが僕には奥の手があるぞ。1対2だと？ 残念だったな、僕にはもう一人、頼れる援軍が居るんだよ！

「出でよ忍！ ミスタードーナツに来たぞ！ 好きなだけ食いやがれよ！」

「あ、セコっ!!」

セコいと言われようがズルいと言われようが、そんなことは知ったことではない！ 僕はありとあらゆる手段をありとあらゆる状況で利用する、男の中の男、阿良々木暦だ！ 卑怯者の謂れなど、意に介さねえぜ!!

「吸血鬼ばんち!!」

「ぐあぁっ!!」

ミスタードーナツを餌に召喚した幼女——伝説の吸血鬼のなれの果て、忍野忍。僕の影から飛び出した彼女は、どういう訳か、飛び出



した勢いで僕の顎にパンチを喰らわせやがった。仰向けに倒れる僕。

なんでだ……どういふことだ……ぱないの！ ではないのか？

お前の登舞台詞はそれだろ!?

「かかつ、お前様の醜態は、影の中からしつかりと観させてもらって  
おったからの。そりやあ、パンチの一つでもやりたくなるわい」

「な、なんだと？ お前、あれから寝てたんじゃなかったのかよ」

「たわけが」

忍はグリグリと僕の顔面を蹴ってくる——お忘れかもしれないが、  
ここはミスタードーナツの店内である。しかもショーケースのお膝  
元。他のお客さんが居ないのは不幸中の幸いではあったが、しかし店  
員さんからの視線があまりにも痛い。痛すぎる。

精神攻撃にもやつぱり弱い阿良々木くんであった。

「肉体攻撃にも弱いようじゃしう。忘れたか？ うぬと儂はペアリ  
ングで繋がっている——うぬが受けたダメージは、ダイレクトに儂も  
受けることになるということを」

「あつ………」

……あの時か。

僕が火憐ちゃんに、ボツコボコのズツタズタのボツロボロにされた  
時か。あの時、眠りについてた忍もまた、同じ分量のダメージを食  
らっていたのだ。

つまり、安眠妨害された訳だ——酷い目覚ましもあったものでは  
ある。しかもその後、顔面スライディングをかましたり、日和ちゃんに  
付き合っ歩き回ったりしていたのだ。そりやあ眠れる訳あるまい。

「さて、お前様よ。当然この分も、以前約束した分に し っ かり  
と 付け足されているのであろうな？」

「と、当然じゃないか。ぼ、ぼぼ、僕を誰だと思っっているんだい？ は、  
はは、ははは、はははは」

どうやら僕の財布は、暫くひもじい思いをすることになりそうであ  
る。そして、もうバイト始めようかな、と僕は思ったのであった。

「ばないの！ 全くお前様よ、やれば出来るのではないか！ 全品一つずつとはいえ、なんじゃ、買えるのではないか！ かかつ！ 流石に今回は褒めてつかわすぞ！」

「やるじゃないですか阿良々木さん！ ちよつとだけ見直しましたよ！ いやあ、まさか私の頼んだ分全て購入して下さいとは！ 持つべきものは友と言う名のお財布ですね！」

「わあおいしい！ ありがとうございますございます阿良々木お兄ちゃん！ あたいのために全て買ってくれるなんて、あたい、いたく感銘を受けました！ 打てば響く方とはまさにこの事！」

「もう嫌だ……」

何も言わずとも、賢明なる読者諸君はもうお分かりになられたと思うが、一応僕の口から言っておこう。いや言っておくような事でもないし、わざわざ注釈するのも阿呆らしいことなだけけれども。

忍を召喚したのは、勿論僕の味方をふやすためだったのだが、しかし残念なことに、彼女は僕の味方をしてくれることはなかった。

「忍野お姉ちゃん」

この一言だけで、忍は陥落した。忍野忍という姿になってからこつち、僕たちの中で最年少扱いされることの多かった忍だが、ここに来て、この姿のままでも年上扱いされたのである。しかもお姉ちゃんという、八九寺を一瞬で虜にした核爆弾級の最終兵器も添えて。

そりゃあ陥落するというものである。忍はあっさりと僕を見限り、日和ちゃん側についた。つまり、1対3の構図となってしまったのだ。助けを求めたつもりが、逆に自分で自分の首を絞める結果となつてしまったのだ。

流石にこうなると、僕に勝ち目は一切ない。例えこの場にあの式神童女が居たとして、都合良く僕の味方になってくれたと、で2対3。どう足掻いても僕の負けである。

なんとという魔性なのだろう、日和ちゃん。いや、勿論無意識かつ天然でやっているのだらうけれど（計算でやっているのであれば、それほどがっかりすることはない）、末恐ろしい児女である。百戦錬磨の阿良々木暦も、児女には勝てないという訳だ。

しかし、僕にも策はあった。策というか切り札、最終兵器が、ちゃんあった。

この中でお金を持っているのは、この僕だ。財布を握っているという最後の切り札、ここで使わない訳にはいかなかった。

が、阿良々木暦の策は失敗することに定評がある。今回も失敗した。

「全品買ってくれるなら、うぬについてもよい」

「全て食べてみたいですよ！」

「勿論私にもちゃあんと買って下さいますよね？ 何せお財布を握っていらっしやるのですからね」

なんて冷酷な奴等なのだろう。僕は財布の中身を、全てミスタードーナツに献上することになった。全品一つずつと忍は表現したが、しかし実際は全品二つずつプラスアルファだ。値段は尋常ではない。

僕のなけなしの金を使っても届かない金額だった。しかし、僕を妹たちに振り回されている哀れな兄とでも勘違いして下さったのか、有難いことに店員さんが僕にお掛けをしてくれた。10個で500円という破格の安さだ。それでも僕は財布の中身を全て失ったのだから、もしもお情けを掛けてくれなければ、果たしてどれ程の金額になっていたのだろうか。怖い。怖すぎる。

そんなかんじで、店員さんに心の底からの謝辞を述べつつ（もうこの人に足を向けて寝られない）、大量のドーナツをトレイに入れ、特別にテーブルを幾つか合体させて作って下さった巨大テーブルに置いた。いや本当、感謝感激雨霰である。どこまで人情深い店なのだろうか。泣けてくる。

丁度お客さんが居なかったというのもあるのだろうが、ここまでやってくれる店などそうそうないだろう。ミスタードーナツに敬礼。「……っ！かお前ら、買ったんだからちゃん全部食べるよ。絶対に残すんじゃないぞ。こんな狂った要求したのはお前らなんだからな」ここまでやって頂いて、その癖ドーナツを食べ切らず残すというのは、店員さんに対する侮辱に他ならない。ちゃんと苦勞に報いるくらいのことはいやがれこんちくしょう。

「安心せよお前様。ミスタードーナツは別腹じゃ。儂の大食っぷりを舐めるなよ」

「心配ありません！ 食べますよ！ あたいは全部食べますから！」  
「私はちやーんと食べられる分だけ頼みましたからね」

とのことだった。食べられる分だけ頼んだと言う八九寺に、何かしら感情が込み上げないではないが、それは置いてくとして、一番心配なのは日和ちゃんだった……食べるのか？

忍はまあ怪異だから心配ないとしても、日和ちゃんは普通の闺女である。これだけの量が入るとはとても思えないが……思えないなら買うなどという話だが。

「むぐむぐ……まあ心配いらんじやろう、お前様。こやつは大丈夫じゃ」

忍は言う。根拠もなく何言ってるんだ。お前と日和ちゃんはそもそも会ってから一時間も経ってねえだろ、お前が日和ちゃんの何を知っているんだ。

つーかものを食べながら喋るな。行儀が悪いぞ。日和ちゃんに悪影響が出たらどうするんだ。

「いちいち細かいのう、お前様は。自分だけドーナツがないからといって、そうカリカリせんでもよかろう」

「……………」

そう、僕は何も食べていない。この我儘三人組の無茶振りの所為で、自分自身の分のドーナツを頼むのは憚られたのだ。

流石に僕の分として、店員さんがドーナツをサービスしてくれるなんてことは無かった。そりやそうだ。ここまでやってくれただけで御の字なのに、これ以上何を望めよう。

……しかしこいつら、美味そうに食べやがって。満面の笑みなんか浮かべやがって。僕も食いたくなってくるじゃあないか。

「……なあ八九寺、ドーナツ一個くれないか？」

「はあ？ 何言ってるんですか貴方は。駄目に決まってるじゃないですか」

「……………」

癩に触る少女だった。逆にどうしてくれないんだ。買ったのはそもそも僕なんだぞ。

「……なあ忍」

「駄目じゃ。儂のものは儂のもの。欲しければ自分で買えよ、お前様」  
「……………」

その言葉をそのまま返してやりたいよ。偉そうに踏ん反り返りやがって。それ僕の金で買ったドーナツなんだからな。お前の金で買ったんじゃないんだからな。忘れんなよ。

「……なあ、日和ちゃん」

「あたいのこれ……えっと、ドーナツ？ 欲しいのですか」

「うん、頂戴。一個だけでいいからさ」

「……………」

「……………」

君もか。君もなのか。君もこの性悪二人組と同じなのか。ここまでの苦労があらゆる意味で虚しく思えてきた。

などと考えたが、しかし僕は日和ちゃんを甘く見ていたらしい。僕は忘れていた。この子は天然で魔性めいたことを平然とやってくれる子だと言うことを、僕はすっかりと失念していた。

日和ちゃんはストロベリーカスタードフレンチを掴み、僕の前に持ってきた。

「…………え？」

僕は呆氣にとられてしまった。墮天使二人組も、啞然としている。

「く、くれるの？」

「欲しいのですよね？」

「っ——！！」

僕はストロベリーカスタードフレンチを掴もうとしたが、日和ちゃんは手の届かない場所へと後退させた。

「……………」

そういうこと、すんの？

落胆した僕。しかしこの児女、本当に恐ろしかった。

「日和ちゃん…………」

「ほら、あーん」

「?!?!」

あーん。

凄んでいるのではない。男にとって一番されたいシチュエーションの一つ。あーん。

僕がドーナツに触れないようにしたのは、どうやらこれをやりたかったからしかなかった。なんとも微笑ましいことではないか。僕は言われるがまま口を開け、差し出されたドーナツを嚙った。ストロベリーについていない方である。

「おいしいですか」

日和ちゃんが笑顔で聞いてきた。

「……おいしいよ、日和ちゃん」

色んな意味で、美味しかった。

……ふぎけんなよまじふぎけんなよ。もう本当もうふぎけんなよ、なんなんだよこいつ。僕を萌え殺すつもりか。萌やし殺すつもりか。

もうこれは萌えなんてレベルじゃない、蕩れである。蕩けそうな程可愛い。

見たか、ツインテールと金髪。これが真に純粋な女の子なんだよ。お前らみたいな穢れた連中には出来まい！ ふははははは!!

いやもう天にも昇る心地である。天使はここにいたのだ。なんでもかんでも神を付ける風潮には反対だけれど、しかしこればかりは言わせて欲しい。日和ちゃんマジ神!!

そのツインテールと金髪は、ドーナツを食べる手を止め、ただただ口をぽかんと開けていた。その光景は全く爽快であった。お前らが僕にドーナツを一つでもくれていれば、そんな思いをすることはなかったろう。天罰が下ったのだ。さあ、お前達も僕に――。

一瞬の後、我に帰った二人の行動は早かった。即座にドーナツをトレイに置くと、日和ちゃんの方をすぐさま向いた。って、は？

「私にもやって下さいっ!!」

「儂にもやらんか!!」

「そつちかよ!!」

やってくれるんじゃないかと、やってもらおう方かよ！ 何でだ！  
やっぱお前ら穢れてるよとことんまで!!

しかも日和ちゃんは日和ちゃんで「いいですよ」なんていいながら二人にも同じことをやったのだ。僕だけ特別じゃなかったのか！  
誰にでもするののか！ くそつ、幸せそうな顔しやがって墮天使！ 可愛いじゃねえか天使共め!!

店員さんが冷めた目で僕達を見ている。やめて！ そんな目で僕達を見ないで下さい！ いや、っか、ごめんなさい!!

やれやれ、なんて未恐ろしい児女なんだ……一瞬で僕達を浄化しやがったぜ。プラズマクラスターもびっくりな清浄力だ。或いはカビキラーもびっくりな洗浄力だ。

カビキラーっつーか、ロリキラーっつて感じだが。

こんな児女を一人にしておくことは、尚更危険に思えた。こんなに可愛いのだ、犯罪者の少ないド田舎町とはいえ、この可愛さにあてられてしまえば誰でもロリコンに転職してしまうかもしれない。

あ、僕はロリコンじゃないぞ。ギリギリで踏みとどまってるからな。そこんとこ、宜しく頼むぜ！

その後は、特にこれといって変わったことはなく、普通に雑談しながらドーナツを食べた。僕は結局日和ちゃんがくれた分しか食べられなかったけれど、しかしあれだけでステーキ一皿を平らげたかの如き満腹感があったので苦ではなかった。

まあ、もう一度激震が走ったと言えば走ったことがある。なんだかんだドーナツを全部食べた日和ちゃん（あの体のどこにそんな入るんだよ）が、最後の一つを4等分しやがったのだ。

4等分ということはつまり、僕達全員が食べられるように分けてくれたということだ。日和ちゃんは天使だが、しかしながら残念なことに、僕達はどうしようもない程穢れた生命体であった。日和ちゃんにくれたドーナツを一欠片でも多く食べる為、僕達しかいない店内で醜すぎる争いを始めた。その争いは酸鼻を極めたが、結局、日和ちゃんの鶴の一声で、四人で一欠片ずつになった。いや、そもそも最初から日和ちゃんはそのつもりだったのだが。

色々騒動があつたが、僕達は見事ドーナツの山を完食し、店内を片付け、店員さんと店舗に敬礼してから、その場を後にしたのであつた。

〔008〕

ミスタードーナツに入店し、退店するまでに要した時間は約2時間。あれだけのドーナツを処理したのだ、寧ろこれは速いといえるほどのタイムだろう。いや、別にタイムアタックをしていた訳ではないのだけれど。

それにしても、2時間も僕達は店内にいたけれど、その間一人たりともお客さんが入ってきていないという事実には、多少思うところはあつた。恐らくそれは、田舎だからあまりドーナツという食べ物自体がメジャーに感じられていないのと、何より、僕達の存在が大きかつたのかもしれない。

机をくつつけたり、ドタバタと殴り合つたり——店内を独占していた僕達の奇行を見て、入店しようとしたお客さんが踵を返したという事態も十分に考えられる。もしもそれが実際に起きていたのなら、僕達はあの店舗から出禁を食らうかもしれないのであつた。

それは兎も角——いや、忍との円滑な関係を築くにあたってあの一軒しかない貴重な店舗は必要不可欠、兎も角なんて言葉で置いておくことは許されない。

とはいえ、それはそれで話が進まないのです、仕方あるまい、進めよう。

閑話休題。

退店した僕達は、その後も日和ちゃんに付き合わされた。気分的には付き合わさせて頂いているといった具合だが、この建前が崩壊してしまうと僕の社会的立場も崩壊してしまうので、ここはグツと我慢である。

我慢の出来る男、阿良々木暦である。

「阿良々木お兄ちゃん、踏みますよー」

「ああ、どんと来い！」

「すみません！」



「ぐっ……」

児女に踏まれても我慢する男、阿良々木曆である。いやまあ、児女に踏まれるとかご褒美でしかなく——い訳が無いだろう。痛いものは痛いし辛いものは辛い。そんなことを考えるのはロリコン野郎だけだ。僕は紳士だから我慢してるんだ。異論も認めないし反論も許さないし議論のテーブルに着く気もない。

などといきなり言われても、読者の皆様は困惑するしかあるまい。唐突に僕が踏まれているなどという展開が説明なしで罷り通るのは、忍とか斧乃木ちゃんとかひたぎとかあの辺の、僕を踏むのが日課になってるような連中だけである。

今回僕を踏んでいるのは、そんな連中とは最も対極にいると思われる天使、日和ちゃんである。流石に経緯を説明せねばなるまい。

事の発端は数分前に遡る。日和ちゃんに付き合わされた僕達は日和ちゃんに付いて行くまま、特に何をすることもなく歩き回っていた。何もなかったのだ。

いや、アニメ版のような荒野程ではないにせよ、何度も言うようにここは田舎、店が一軒あればその周囲には何も無い、なんていうのはザラである。

日和ちゃんの興味を引くようなものは無かったのだ。好奇心の化身とも言える彼女と言えど、無いものに興味を持つことは流石に出来ない。まあ、簡単に言えば暇だった。

やることなし。

ならばここで探検を終えるのか、と思ったが、日和ちゃんはそうはせずに歩き続けた。一体何が彼女を歩かせるのだろうと思ったが、まあ、児女の考えなんて、捻くれた高校卒業生に分かる筈もない。そして同じく、捻くれたロリ神様や捻くれた金髪ロリもまた、理解していないようだった。

僕達は日和ちゃんの後ろ姿を見ながら歩き続けた。誤解しないでほしい、周囲に何も無い現状、それ位しか見るものがなかったのだ。僕はロリコンじゃない。横の二人はどうか知らないが、僕は違う。断じて違う。身の潔白を証明する為なら、多少ウザがられようとも何度

だつて宣言するさ！ 僕はロリコンじゃねえ!!

それに、この危なっかしい児女を放っておくと、何を仕出かすか分かったものではないからだ。全力で阻止したパチンコ屋にでも入られたら、悪影響が日和ちゃんに……! !

え？ 僕達と一緒に居ることが悪影響って？ うるせえ。

僕達は見守っているだけなのだ。影響を与えるようなことを何もしていない。少なくとも僕はやっていない。僕は潔白だ。

とまあそんな感じで日和ちゃんを見つめ続けていた僕達墮悪三人組だけれど、そこは流石日和ちゃん、僕達なんかとは目線が違った。

「……あれは」

前だけを見つめていた僕達に対し、四方八方全てを視界に収めていた日和ちゃん。そんな彼女が見つけたのは、巨大な一本の木であった。樹齢何年かは分からないけれど、立派な木だった。ここら一帯の守り神と言っても通用しそうな程に。

日和ちゃんはこの木に興味を示したのか？ と思っただけれど、それもあるが、どうやら違うようで、彼女は木の上方を指差していた。上？

僕達は日和ちゃんが指差す先を見た——そこにあつたのは、今にも落ちてしまいそうな、トゲトゲしいイガだらけの殻斗であった。

イガの殻斗——なんでこんなところにこんなものが？ イガという、栗を思い出すけれど、こんな所に栗のなる木なんてあつたっけか？

日和ちゃんは、それを指差しながら言った。

「あれをあたいは食べたいです」

「いや、食べたいって言われても……」

僕は腕を組んで考えた。

栗ねえ。

栗って、生で食えるのかな？ いや、何もこの場で食べるなんて日和ちゃんは一言も言っていないのだから、そこは心配しなくていいとして、では、この栗は果たして採っていい栗なのだろうか。

どうということかと言つとつまり、この栗の木は誰かの所有物なので

はないだろうか、という心配である。もしも誰かの所有物ならば、これを勝手に採る僕達は泥棒にあたる。日曜日にやっている某国民的アニメ宜しく、追い掛け回されてしまおうだろう。

いや、あれが罷り通っているのは、実行犯が小学生だからだろう。彼の悪知恵は時折小学生なのかと疑う程のものではあるが、しかし世間的に、社会的に見てみれば、少なくとも年齢と外見は小学生だ。

対して僕はバリバリの青年である。どう足掻いても小学生では通用しないし、幾ら背が小さいとはいえ、中学生でも通用しないだろう。高校生とならまだなんとか見られるかもしれないが、しかしだから何なのだろう。高校生の時点で十分通報される対象である。こういった犯罪をお遊び感覚で楽しめてしまうのはギリギリでも中学生までなのだ。

え？　じゃあ八九寺に毎度の如く仕掛けているアレはなんだ、って？　あれは、ほら、あれだよ、仲が良いもの同士のスキンシップだよ。セクハラじゃあないからな。

話が逸れた。

まあつまりは、これを採ることは僕としては出来るだけ避けたいということである。朝っぱらから冤罪でこっぴどく絞られた奴が、昼になって本当に犯罪を犯すとか、笑えなさすぎる。

それに、日和ちゃんへの悪影響は恐らく僕が考えている以上のものとなるだろう。良い子は真似しないでね、なんて言う位に、子供というのは感受性の高過ぎる生き物だ。生きていく為に必要な知識を庇護されているうちに吸収しようとするその姿勢は、攻撃能力の低い人間だからこそその特徴ではあるけれど、しかし悲しいかな、知識がない故に、吸収する知識の取捨選択が出来ないのである。

総合すると、ここで栗を採らないというのが最も得策だと思える。やらないよりやる方がマシ、なんて言うけれど、やって後悔するのは遅いのだ。

「日和ちゃ——」

僕は日和ちゃんを見た。

時には心を鬼にすることも必要である。僕は親ではないけれど、し

かし躰をすることが許されるのは親だけという決まりなどあるいはしない。周囲の人間みんなで躰けなければならぬのである。

——とはいえ。

そうは言うものの、こればかりは失敗であった。ここで日和ちゃんを見てしまったのがどうしようもなく大失敗であった。ここで僕が真にとるべき行動は、日和ちゃんの腕を掴み、無理矢理引っ張っていくという行動だったのだ。

見た。

日和ちゃんを見てしまった——賢明なる読者諸兄なら、僕がこの子を視認してしまえばどうなるのか予想するのは容易いだろう。障子紙以上にスケスケのペラペラな阿良々木暦のくらい。日和ちゃんを天使天使言っていた阿良々木暦のことくらい。

日和ちゃんもまた、僕を上目遣いで見ていた。眉を少しハの字に曲げ、心配そうな顔つきで、こちらを見ていたのだ。

……んなもん。

そんなんさあ！

「よし、じゃあ僕が肩車してやるよ。採りな」

反則だろ!!

とてもではないが、この顔を見て期待を裏切ってしまうという残酷極まりない行為は、残念ながら僕には到底出来たものではなかったのだ。

この瞬間僕は思い知った。子供を躰けることが出来るのは、やはり親だけなのだ。

周囲の人々も一緒に躰けるべき？ 全くお笑いである。出来る訳ではないか。だって、ついつい甘やかしてしまうのだから。

親の甘やかすと他人の甘やかしとは訳が違うのである。親ならば、子供をきちんと育てなければならぬという、半ば強制された責任感が植え付けられる（まあ例外も無いではないが、そんなことを言い出せば何も言えなくなる。例外の方が多規則である）が、周囲の人々にとって、他人の子供というのはやはりどこまでいっても赤の他人。責任感も何もありません。あっても、親のそれとは比べ物

になるまい。

だからこそ、甘やかしてしまうのだ。責任感が少ないということ  
は、罪悪感という名のフィードバックもまた少ないということとイ  
コールといつてもいいからなのである。

……まあ色々言ったけど、要は可愛さに負けました。はい。

これは？偽りなき理由である。心を鬼にするといつても、どうせ僕  
自身、吸血鬼という名の鬼なのだから、心まで鬼にする必要もあるま  
い。

つーかそんな顔見せられて甘やかさねえ奴なんて居ねえよ。しか  
も採ることを許可してあげた時の顔ときたら……僕、生まれてきてよ  
かった。

「……………」

「……………」

忍と八九寺が呆れたように僕を見た。おいおい、お前らそんな顔し  
てるけどな、僕と同じ立場だったらどうだ？　ちゃんとこの子を律せ  
れたか？　というか、自分を律することが出来たか？　お姉ちゃん呼  
ばわりされただけで蕩けてしまうようなお前らに、それが出来たか？

出来ねえだろ！

と、そんなことを心の中で叫びながら、僕は日和ちゃんの股座に顔  
を突っ込んだ。

……この行動について、釈明する気は一切ない。何故なら僕は何も  
間違ったことをしていないからだ。日和ちゃんを肩車するという使  
命を果たすため、これは必要な行為だ。安心してほしいが、僕は児女の  
股座にかおを突っ込んだところで、肩車をしたところで、欲情するよ  
うな男ではない。

僕はそのまま立ち上がろうとした——ここで誤解されないように  
言っておくが、僕は決して上を向いてスカート——というか袴か、こ  
れは——の中身を確認したわけではない。これは天地神明に誓って  
宣言できる。

「ぐおっ!?!」

「ぬっ!?!」

にも関わらず日和ちゃんは立ち上がった僕から逃げるようにその場で跳躍し、その際僕の顎に両足でサマーソルトキックをヒツトさせた。思わず僕は仰向けにひっくり返り、火花が散る目で辛うじて日和ちゃんが空中で何度も回転し、地面に降り立つのを視認できた。

……な、なんだその身体能力!?

君、そんなキャラだったの……!?!? つーか、そんな動きにくそうな格好で——なんだその身体能力!?

お前、空中で何度も宙返りつて、火憐でも出来るか出来ないかってとこだぞ（どうせ出来るのだろうけれど）!

凄えな。最近の子供つて、まさかみんなこれを普通にこなすんじゃないだろうか？ いや、流石にそれはないと自分で言っていて思うけれど、いやはや、本当に末恐ろしい児女である。齢6歳でこれなのだから（外見で判断した年齢だ。忍よりちよつと背が低い）、今の——というか去年度の火憐と同じ歳になるころには、どれ程の成長を遂げているのだろうか。

まあ、僕は親でもないし、多分この子と二度と会うことはないと思うのだけれど——家に連れて帰ろうと何だろうと、多分最終的には親戚の家かどこかに預けられることになるだろうから——だとしても、ブルっちまうぜ。

願わくば、火憐より真っ当な方向にその身体能力を生かして欲しい。あんな暴力馬鹿にならないで欲しいな。

——なんて、他人の癖してまるで親のようなことを考えていた僕の真下から、苦しそうな呻き声が聞こえた。

「ぐっ……お、お前様……どけ……っー!」

「あ、悪い。忍」

僕は顎を撫でながら起き上がった。あの子下駄を履いている所為か、火憐にやられたときよりも痛い。両足つてのもあるのだろうが——。

「お前様……あまり軽率な行動はとるなよ。儂も相当な確率でお前様の巻き添えを食らうことになるんじゃないからな」

「ああ、悪いな。すみませんでした」

「ぬう!? なんて土下座するんじゃない?」

「これ以上償いのドーナツを要求されるのは敵わないからな」

僕の財布はもう空々なのだ。空々というとな某英雄を思い出すけれど、ドーナツを食うことは忍にとつては残念なことに暫く叶わない。空々くうではなく、空だからくえないのだ。

……言ってみて思ったが、あんまり上手くねえな。

「上手くないことを言ったからお前様よ、当然儂に美味しいドーナツを買ってくれるのだろうか? まあ流石に今すぐとは言わんが——土下座した上に滑った言葉遊びをかますなど言語道断じゃぞ」  
「くそっ!!」

言葉遊びに厳しい幼女だった。

ああ、また僕の野口さんが消える（樋口さんや野口さんを使うまではいかない。というかいけない）……。

僕は立ち上がり、ニヤついている八九寺をスルーし（絡めば絡んだでまた何か要求されそうだし）、日和ちゃんを見た。日和ちゃんもこちらを見ている。

「あの……日和ちゃん。なんで?」

「すみません。無礼な行為をお許してください」

「うん、まあ良いけどさ」

「肩車ではあの栗まで届かないと思ったのです。背の低い阿良々木お兄ちゃんに乗るというのに加え、あたいは座ることとなりますので体全体の身長を加えることが出来ません」

「ああ、成る程……君、今背低いつてさらつと言ったな」

「え? そうではないのですか? 八九寺お姉ちゃんが、阿良々木お兄ちゃんは背が低いって何回か言っていたので……」

「八九寺いい!!!」

八九寺はそっぽを向いて口笛を吹いていた。いやこつち向けよ!

早速悪影響出てんじゃないかねえか! お前色に染め上げるな!

「そうは仰りますが阿良々木さん、私は事実を教えたままでですよ? まさかこの幼気な児女に、嘘を吐くのも大切なことですよ、なんて、汚

れた大人の事情をお教えしろということではありませんよね?」

「そんなこと言ってねえよ! そうじゃなくて、言って良いことと悪いことの区別をだな!」

「阿良々木さん、子供はのびのびと育てるべきです! そんな区別なんて、小学生高学年になる頃に教えれば良いのですよ!」

「じゃあお前は区別をつけろ小五!」

「残念ながら悟りを開いている私にはそんな常識的通用しません。なんせ神ですし!」

「神だからってなんでも許されると思うなよ! そんな免罪符は鬼に通じねえよ!」

やれやれ、これだから汚れたガキは。すぐに反抗してきて困る。反抗期って奴かな?

八九寺と忍がまだ何か言いたそうにしているが、スルーする。これ以上議論すると章が長くなりすぎる。そして僕が論破されてしまう。

「まあ背が低いのは兎も角……まあ、日和ちゃんの言う通り、か」

確かにこの木は相当な高さを誇っている。栗が生っているのもかなり上方、肩車だけで届くかどうか……。

「じゃあ、どうする?」

「この距離からあたいが判断するに、地面から栗までの高さは約7尺5寸6分。阿良々木お兄ちゃんの背丈は約4尺3寸4分で、あたいの背丈は3尺2寸1分。あたいとお兄ちゃんの身長を足せば、届く距離です」

「お、おう」

果たしてその目測が正解なのかどうかは分からないが、この自信ありげな口調を聞くと、まるでそれが本当の事のように思えてくる。まさか本当に合ってるわけ……ないよな?

つーか尺貫法かよ。アニメの影響つつつても影響受けすぎだろ。吸収しすぎだよ、スポンジか君は。

二人の身長を合わせて届く、というなら……じゃあ、それはそれでどうするんだ?

「あたいがお兄ちゃんの肩に立てば良いのです」



「ああ、成る程。それなら、つておい」

「? なんでしょう」

きよとんと首を傾げる日和ちゃん。可愛いじゃねえか。

「いやいや、流石にそれは無理だろ。それに危ないよ。君を肩に立たせたまま立ち上がるなんて、そんな曲芸染みたこと、僕には出来ないぜ。それに、日和ちゃんだって、肩に立つことなんて出来るのか?」

「出来ますよ」

即答だった。

「私も出来ますよ」

「儂なら出来る」

お前らには聞いてない。つーかお前ら、見栄はってんじゃねえよ。

「阿良々木お兄ちゃんは、栗の真下に立って頂けるだけで良いです。私が跳んで、お兄ちゃんの肩に乗りますから」

「そ、そんなこと」

出来るのか……?」

確かに先程人間離れした、年齢離れした身体能力を見せ付けた日和ちゃんだけれども、そんな無理難題まで出来るのか?

本当に出来るとするならば、それはもう火憐さえも越えているが――

――まあ、付き合っただけで上げるとしよう。

僕は栗の真下に立った。子供の言うことを信じてやるのも年上の仕事だし、やってやるぜ。

なんて、偉そぶっていた訳だけれども。

「阿良々木お兄ちゃん、踏みますよー」

「ああ、どんと来い!」

「すみません!」

「ぐっ……」

そして、今に至る訳だ。

正直に白状すると、僕は日和ちゃんを嘗めていた。いや、まさかこの文脈でそんな誤解をする方は居ないと思うけれど、一応言っておくと、舌で舐めた訳ではない。当たり前だが、僕の名誉のため。

日和ちゃんは本当に僕の背丈程も跳躍し、両肩の上に足を乗せ、見

事宣言通り着地、というか着肩したのだ。その際下駄の歯が刺さって痛いなのなのって感じだったけど、ここはぐつと我慢した。

そんなに跳躍出来るなら、わざわざ僕に乗らずとも、普通にジャンプして栗を取ることが出来たかもしれない。僕を立てるためにやってくれたのだろうか？

まあ、この歳でそんな打算的なことは考えていないだろうけれど。純粋なこの子がそんなこと考える訳ない。そこで啞然としているツインテールと違ってな！　つーかやつぱり嘘じゃねえか！

ん？　しかし忍は特に驚く素振りを見せていない。こいつも出来るとは思えないが、なけなしのプライドが忍を平静にしているのだろうか？

「採れましたよ、阿良々木お兄ちゃん！」

「そうか！」

頭上からそんな声が聞こえた。

と、ここで今更ながら思い至った。そういえば、栗はイガ付き殻斗に包まれているけれど、痛くはないのだろうか。

「日和ちゃん、痛くないかい？」

「大丈夫です。痛くありません」

そんな返事が返ってきた。

本当か？　まさか我慢している訳じゃねえだろうな——僕が痛みを我慢しているからといって、この子まで我慢しなければならないって、そんな平等なルールは存在しないのだ。

つーかあつて堪るか、そんなルール。

しかし、ここで無理矢理日和ちゃんを止めるのは、それはそれで彼女の自尊心を著しく傷つけてしまう恐れがある。外側の傷より内側の傷の方が深く、そして痛い。程度によるけれど。

子供って意外と自尊心が強いからな。慎重に扱わねば——今更な気もするけれど。

僕は一旦日和ちゃんに降りることを提案したが、日和ちゃんはそのまま僕が動くことを要求した。普通は僕からの提案を押し通すところだが、ここは日和ちゃんのバランス感覚を信じてみようと思う。

僕は慎重に、日和ちゃんの指示に従って移動した。出来るだけ揺れないように、体軸をずらさないように。

栗は、先程採ったのと合わせて3個。僕はこのスリリングな移動を二度繰り返し、そして二度とやりたくないと思ったのであった。

[009]

「ありがとうございます！ 阿良々木お兄ちゃん！」

「なに、大した事じゃないさ。児女に踏まれるのが僕の仕事だからな」  
見事取得した栗を両手に抱えた日和ちゃんは、満面の笑みでそう言った。そしてそんな顔で見られれば、僕も見栄を張らない訳がないのであった。

栗狩りを終えた僕達は、その樹の下で座り込んでいた。と言うのも、今後どうするかを考えるためである。

「これ、どうやって食べましょうか」

「ん……」

栗は一応生で食べる事が出来る……らしい。しかし、やはりそれでも衛生上、何らかの調理を施した方が良いのは明白だろう。それに、生で食べるより、より美味しくなる。

採ったはいいものの、その後どうするかは全く考えていなかった。このまま持って帰るとしても、まさかずっと日和ちゃんが抱えている訳にもいくまい。ああは言っているが、きつと痛い筈なのだ。

「僕は別に生で食っても良いがの。味は確かに考慮すべき点ではあるが、しかしそこまで大差あるまい」

「いや、流石に大差あるだろうよ」

健啖家つつつてももうちよつと拘れよ。美食とまで行かずとも、せめて食えるものにしてから食えよ。

「所詮、ミスタードーナツには及ばんよ」

「血はどうした血は」

「血？ ああ、あの鉄臭い液体か。知るかあんなもん」

「おい吸血鬼」

本当、いいのかそれで。

いや、人類としては非常にありがたい限りなのだけれど、幾ら絞るかすとはいえ、嘗て伝説と呼ばれていた吸血鬼がこんな状況というのは、やはり思う所がないではないのだ。

お前を吸血鬼にした吸血鬼が泣くぞ。

どんな奴かは知らないけれど。

「あの、すみませんが阿良々木さん。あまり不用意な言動はやめて下さい。この辺りはオフシーズンで触れられるかもしれない要素なんですから、慎重に発言してくださいよ」

「かもしれないって何だよプロデューサー」

「かもしれないはかもしれないです」

「鴨鴨うるせえよ」

「鴨が鴨川で泳いでいるかもしれません。射撃のカモですネ！」

「最期が残酷すぎるわ！」

「つーか知らねえよ、僕がハブられた方の話なんて。そりゃあ僕だって把握しておきたいのはやまやまだけれど、情報遮断してるのはこの八九寺Pなんだぜ？」

主人公なのに……。

「……ん？いつもの宣伝はどうしたよ」

「ああ、あれは違う方に回しました。本編での宣伝禁止令が発令されたものでしてね」

「やっとか……」

「とうとう規制されたか。まあ、規制されて当然とも言える。幾ら二次創作だからと言って、やっていいことと悪いことはちゃんと区別をつけなければ。律しなければ。」

「って、違う方？」

「はい。ほら、裏小説の方」

「ああ、あっちね」

「あっちは自由度高いらしいから……作者ネタも解禁されてるとか何とか。」

「まあ、あれもプロデューサー八九寺ですからね。阿良々木さんは呼びませんよ」

「お前僕に何の恨みがあるんだよ！」

「恨みがあるといえば日和さんですよ！　こんなメタの中でもさらに内輪度の強い話で話題を消されるとか、堪ったもんじゃありませんからね！」

「お前の所為だろうが！」

そう言われればその通りである。日和ちゃんは手持ち無沙汰な様子で栗をぼうつと眺めていた。手持ち無沙汰というには、些か多くのものを抱えているけれど。

「さつきから何の話をしているのでしょうか」

「君は知らなくても良い話だよ」

メタなんて概念はまだこの子には早過ぎる。

メタ発言は置いておいて、さて、この栗をどうするかである。

「もう一層の事、スーパードチャツカマンでも買うかな。焼けば何とか食べられるだろう」

「おいおいお前様よ、儂にあれだけの大口を叩いておいて、随分と拘らぬ食べ方じゃのう。調理とも言えんわ」

「お前よりはマシだ」

まあ、別に僕も料理が出来ないというわけではない。ご両親が家に居ないのが殆ど常な阿良々木家では、料理は火憐、月火、僕の三人で交代で作ることになっている。

そのお陰で、中学の時の家庭科は数学に匹敵する程の点数を取れていた訳だが——まあそれは置いておいて。閑話休題。

今この場には、残念なことにも何もない。こんな何もない状況で何か洒落たものを作れと言われても、出来る訳がないのだ。三ツ星の料理人でも無理だろう。いや、仮に物資が揃っていても、彼らは一流のものを好むだろうし、どの道無理かもしれない——酷い偏見だな。自分で言っていて思っただけ。

「まあ、火を通せば食べられるだろう。少なくとも生よりは美味しい筈だぜ」

「ちよつと待ってください」

「ん？」

日和ちゃんが立ち上がろうとした僕の服の裾を掴んだ。少し腰を浮かせたが、また下ろす。

「何だよ。君も不満なのか？」

「いえ、そうではなく——火って、そんな簡単に起せるものではありませんよ？ 火打石と火打金がないと……」

「……………」

……これは、この子なりのボケなのだろうか。阿呆なことばかりやっている僕達に合わせてくれているのだろうか。

もしそうだったら悪いので、ツツコんでみよう。

「幾ら何でも火打石は古いよ！」

「えっ……………!?!」

「えっ……………!?!」

違うのか!?

どうやらボケとかそういう訳ではなく、本気で言っていたらしい。本気で火打石……………なんだろう、喋り方といい服装といい、凄く時代がかった子だなあ。

つーかどんなアニメだよそれ。なんか見たくなくなってきたのだけだ……………。

「では、どのようにして火をつけるのでしょうか!? あたい微塵も想像できません！」

「いや、普通にマッチとかだよ！」

「マッチとは何なのでしょう!? 火打石を略した言葉でしょうか!?!」

「違えよ！ 火打石のどこに”ま”があるんだよ！」

「……………」

「間じゃねえよ！」

まずいぞ、この子、どんどん僕たちに毒されてきている。ノリが完全に僕たち側になつてきている。影響出まくりだ……………いや待て、そもそもこの子はボケているのか？ 僕が一方的にツツコんでいるだけではないのか？ だとすれば今影響を与えているのは、僕なのでは!?!

これは非常に由々しき事態だ。僕の唯一にして随一のアイデンティティであるツツコミを封じられれば、僕には何が残るのだろうか。

ミジンコさえも残らない——いやだからミジンコは僕の構成要素に入っていないんだって。

「えつとだな……マッチって言うのは——」

マッチを説明しようとする僕。しかし、あれをいまいちどう説明すれば良いのか分からない。箱と木の棒のセットで、木の棒を箱に擦り付けると火がつく？ いや、なんか違うな……。

こういうのは論より証拠、実際に使ってみた方が分かりやすいものなのだが、生憎僕はマッチを所持していない。というか、果たしてこの世にマッチを常に所持している人なんているのだろうか。

どこかにマッチは——ある訳ないよな。そんな都合よくある訳ない。それこそ火打石ならまだしも、マッチなんて人工的なもの、その辺に転がっている訳——。

「あ、阿良々木お兄ちゃん！ 見てください！」  
「えっ？」

日和ちゃんが何かを指差した。また何か別のものに興味を持ったのだろうか。子供の好奇心旺盛さには、全く敵わないぜ。

僕、八九寺、忍は示された方向を向いた。そして、僕はそれを見て、日和ちゃんの興味の軸は決してブレていないということを理解した。

指差す先にあったのは、轟々と燃える炎だった。薪が組まれ、まるでキャンプファイアーの焚き火の様であった。近くには金色のテントが置かれ、木の椅子に誰かが座っている。

様だったというか——焚き火そのものじゃねえか！

「あれ、どうやって火を起こしているのでしょうか!? あたい、気になりますー！」

「それは違うキャラだ」

割と本気で、僕たちに汚染されつつあるのではと疑わせる言動をする日和ちゃんであった。

第參話 ひよりブレード 其ノ參

〔010〕

道の端つこで焚き火をする人物。正直、僕としてはお近付きになりたくないような存在であった。否、それは僕だけではないだろう。八九寺や忍にとつても、そんな人物は胡散臭く映った筈だ。

今の季節は春。まだ多少冷える日はあるが、焚き火を焚く程寒い日なんてない。そして今日は晴天。太陽は既に落ちつつあるけれど、特別寒い日という訳ではないのだ。しかも周囲もまだ暗くなっていない。

日和ちゃんが居なければ、まず絡もうとはしなかっただろう——日和ちゃんが居たとしても、絡みたくはないような人物であることは間違いない。

ないのだが。

「すみませーん！」

残念なことに絡まなければならぬようであった——日和ちゃんはカランコロンと下駄の音を鳴らし、焚き火へ向かって走り出したのだ。怖いもの知らず程怖いものはない。

僕と八九寺、忍は一瞬だけ顔を見合わせ、すぐに日和ちゃんを追った。

日和ちゃんを一人にしておくのは危険なのだ。それはここまでの道中で十分に学習していた。何をしでかすかまるで読めない兎女、それが神崎日和だ。

日和ちゃんの呼び掛けに気付いたのか、焚き火の側に座る人物は顔を上げ、走ってくる僕たちを見た。

その人物は、女性だった。まるで喪服のように真っ黒な衣装を着ている。首元には蜘蛛の巣模様が描かれたマフラーを巻き、真っ黒なトーク帽を被っている。目の色は翠色で、チラっと見える髪の色は金色だった。

近くに来て分かったのだが、椅子の傍には木刀が横たえられていた。テントまで張って、如何にもキャンプ中であるかのように見せて



はいるが、どうにもその一点が凄まじい不自然さを演出していた。それ以外にも色々あるにはあるが……。

「……どうしました？」

女は口を開いた。

「すみません。この焚き火で、これを焼かせて頂いてもよろしいでしょうか」

日和ちゃんは腕の中の栗を見せながら言った。初対面の相手にここまで親しげに話しかけることが出来るというのは、やはり子供故の物怖じなさが一役買っているのだろう。度胸があり過ぎる。こつちは肝が冷えつばなしだというのに。色々な意味で。

「……ええ。良いですわ」

「ありがとうございます！」

日和ちゃんは笑顔でそう言った。うーん、角度的に良く見えなかったのが残念である。

つーかここで許可するのもする方である。余程子供好きなお人好しなのか、或いは、別の目的があるのか——いやまあ勘繰りすぎだと思われるかもしれないけれど、この容姿を見ると誰だつて疑つてかかってしまうに決まっている。

日和ちゃんは栗の殻をテキパキと剥くと（まるで職人のように早かった。栗剥き職人つて居るのか？）、丁度近くに転がっていた三本の鉄串で突き刺し、日和ちゃんは火にくべた。

色々急展開過ぎてまるで頭の中が追い付いていない。本当に唐突すぎるのだ。

つーかツツコミ所が多すぎる。鉄串で栗がそんな簡単に突き刺せるって所とか、喪服姿の女とか、焚き火とか、丁度三本転がっていた鉄串とか、もうどこからツツコンでいいのか分からない。日和ちゃんのあの物怖じしなさはもう今更としても……。

僕はダブルロリガールに囁いた。

「おい、どこからツツコム」

「うぬ一人でやれよ」

「嫌だよ！ 矛先が僕にだけ向かってパターンを避けたいから言つて

るんだよ！」

「とうかダブルロリガールって何ですか。もう少しいい名前は無かったのですか、メラバギさん」

「お前こそもう少しいい噛み方は無かったのか！ なんだよメラバギさんって、メラなのかバギなのかハッキリしろよ！ 僕の名前は阿良々木だ！」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ……」

「かみまみた」

「わざとじゃない!!」

「バギマした」

「結局バギ系列か！」

うーむ、しかしここで下手に挑発するのはまずいか——今現在、読者の皆様を置いてけぼりで僕たちは話を進めているけれど、どうか許してほしい。後でちゃんと語ります。

まあぶつちやけ、読者の何割かは気付いてそうだが……なんだよあれ……あれマジでやってるのか？ あいつ、天然ボケか何かなのだからうか。

ごちやごちやと考えても、しかし何も始まらない。栗を楽しそうに焼いているところ申し訳ないが、このまま長時間放置しているのも、それはそれで危険なので僕から話しかけてみることにした。

「……あの、すみません。うちの子が迷惑をかけて」

「いえ、良いのですよ。随分天真爛漫な子ですね。貴方の妹さん？」

「えつと……まあ、そんなようなものですかね」

違うけれど。

そんなようなものでさえ無いけれど。

「……なんでこの時期に焼き火なんか？」

「うふふ、特に理由はありませんわ。ただ一言で申し上げるなら、誘蛾灯——と言うべきでしょうか」

「……………」

「まあ、これはわたくしの考えではありませんけれども——貴方、阿

良々木さん、と仰っていましたね？」

「……………」

名前を知っていることについては、別に不自然なことでは無かった。さつき八九寺といつもの名前トークをしたから、それを聞けば分かることだったからだ。それを差し引いても……………」

「……………貴方に折り入ってお願いがあるのですわ」

「……………お願い、ですか」

「はい」

「……………でしたらその前に、お名前を教えてくださいてもよろしいでしょうか」

「……………」

女は少し戸惑うような動きを見せた後、意を決したようにトーク帽を脱いだ。

帽子の中から零れ出たのは、やはり金色の髪だった。ショートヘアの金髪少女。

日和ちゃんはそれを見て、まるで驚いたように目を丸くした。無理もない。6歳の児女が金髪を実際に目にする機会なんて、そうそうないだろうから。

女は僕達の方を真っ直ぐ見て、こう名乗った。

「初めまして。わたくし、五十嵐いがらし織流しるし系と申しますわ」

「いや織崎ちゃんだろ、君」

「シキザキじやろうぬ」

「私を追い出した織崎さんですよね」

「っ————!!!」

女は、僕達三人のツツコミを受け、目を溢れんばかりに見開き、声にならない叫びをあげながら頭を抱えた。

……………っーか。

どう見ても、織崎記じやねえか!!

「なんで僕たちが分からねえと思ったんだよ! どう見てもバレバレだわ! 金髪もそうだし声もそうだし、喋り方もどう聞いたってお前にしか聞こえねえんだよ織崎ちゃん! 喋り方くらいもうちよつと

矯正しろ！ つーか登場するにしても今朝の今だぞ、もうちよつと間隔開けろや!!」

「かかつ、儂等も随分と舐められたもんじゃのう。こんなこれ見よがしに絡んで下さいと言わんばかりに奇異なことをしおつて。もう少し自然に登場出来んかったのかうぬは——三本だけの鉄串とか焚き火とか、あざとすぎるわ不自然じゃ！」

「私が貴方のことをお忘れだとお思いでしたか、織崎さん！ 忘れてませんよ、阿良々木さんの車から強制下車させられたこと！ 五十嵐識流系つて、もう少しいい名前は無かったですか！ ダブルロリガールの方が1.5倍はマシですよ!!」

「ぐつ、ぐぐつ……な、なんで……わたく、わたくし、私を——」

バレた恥ずかしさの所為か、僕達三人怒涛のツッコミの所為か、織崎ちゃんは呻きながら悶え苦しんでいる。そんなことになるならこんなことすんなや！

ええと。

このひよりブレードから読んでいる方もいるかもしれないので、一応この金髪少女について説明しておこう。

織崎記とは、何故か僕たちを殺そうとしている金髪少女である。以上、終わり。

……いや、本当にそれだけなのだ。四季崎記紀とかいう人物の子孫だとか、蜘蛛の怪異を操るとか色々あるけれど、本当に端的に表せば、たったそれだけで表現出来るような奴なのだ。そしてそれだけで事足りる。

何故か、と言ったが、これは今一僕が動機を理解出来ていないことに起因している。動機としては、この歴史を改竄するために、僕たちを殺そうとしているらしいのだが、今の段階では全くピンと来ていないのだ。

前回色々説明された筈なのだが……こいつ説明しているようで、なんにも説明してねえじゃねえかと、紹介していて、改めて思ったのだった。

閑話休題。

まあそんな奴である——そんな奴が、こんなコスプレ紛いのことを、恐らく大真面目にやっていたのだと思うと、シニールが過ぎる。しかも、それがバレて無駄に迫真な演技をしてやがる。

日和ちゃんなんかはそれを見て鉄串を取り落とした。体が震えている。そりゃあこんな奇行をする奇人を見て恐怖心を覚えない子供など居るものか。悪影響を通り越してトラウマになるわ。何てことしやがるんだ織崎ちゃん。

「あ、阿良々木、阿良々木暦——わ、わたく、私を——た、よくぞ、す——よくも」

……まだ続くのか、その演出。

レイニー・デヴィルの時や、あの金ピカ部屋の時もそうだが、つくづく演出好きな奴である。腹芸は苦手と言っていた癖に演技は好きとは……ある意味僕たちにとっては有難い設定であった。

無駄にバレバレなことばかりしてくれるのだから。

「くっ——わ、私、わたくし——」

「何をしておる?」

「っ——!!」

織崎ちゃんは傍に置いてあった木刀に、慌てて手を伸ばした——が、その木刀を忍は直ぐさま奪い、自分の足元に突き刺した。

絶句する織崎ちゃん——その反応もそうだが、地面に突き刺さる木刀という時点で、どう見てもそれはただの木刀ではないと思わせるに十分であった。

っ——か木刀って。

違和感ありすぎるわ。

「かかっ、どうせこれも碌でもないもんじゃろうな——怪異じゃろう? うぬの先祖であるシキザキキキとかが作った、完成形変体刀が一本、じやろう?」

織崎ちゃんの先祖である刀鍛冶、四季崎記紀。そいつは嘗て、完成形変体刀と呼ばれる刀を作ったという。その内の一本か。なるほど。

……なんて納得してみたけれど、この辺りも、正直ちゃんと理解しているかといえ、実は全く理解していない。というか、そもそもこ

の辺は少し触れられただけで、詳しい説明はまるでされていないのだ。

「ぐっ——私、わたく、私を——た、ふっ、ふふふふ」

それでも尚、織崎ちゃんは演技を続けようとした——が、流石にそろそろ無意味だと悟ったのか、不敵な笑いを浮かべた。

……いや遅えよ。もつと早く気付け。

お前相当な醜態を晒しているんだぞ。どこからそんな笑いが出てくるんだ。

「ふっふっふっふっふ——よくぞこの私だと見やぶりましたわね。阿良々木暦、忍野忍、八九寺真宵」

「あの、仕切り直そうと努力なさっておられるのは伝わってきますが、今更そんな大物感というか、そういうのは出さなくていいですよ。見苦しいですよ」

「ぐぎぎぎぎ……!!」

お前が悪い。

意味の分からないことをやったお前が悪い。そんなことをすれば八九寺の格好の的だぜ。

「ふん！好きなだけ笑うがいいですわ！全くこれだからこの愚か者共は——」

「いや愚か者なのはどう見てもうぬじやろう。愚かというか馬鹿じやろう。その阿呆みたいなプライドの高さは認めてやらんでもないが、しかし儂の方がプライドは高い」

お前は何で張り合ってやがる。あれか、まだキャラ被りを気にしてんのか。だからそれ程似てねえよ、お前と織崎ちゃん……。

「……………っ」

「……………ん？」

八九寺、忍ときて、さあて次は僕の番だ、ツツコミ担当主任であるところの阿良々木暦、どれだけ激しいツツコミをしてやろうか、と意気込んでいた所で、背後に気配を感じた。

振り向くと、そこにいたのは日和ちゃんだった。織崎ちゃんから僕を盾にするようにして隠れている。

「ああ、ごめんな。この変なお姉ちゃんは気にしなくていいから——」  
「お兄ちゃん、ごめんなさい」

「え？」

日和ちゃんは、突然僕に謝ってきた。

どうしたのだろうか？ 僕たちがこいつに絡まれる切っ掛けを作ってしまったことを謝っているのだろうか。そうだとすれば、なんと聡明な子なのだろうか。この歳にしてこの気遣い。将来大物になりそうだ。

「別にいいさ。君が悪いわけじゃ——」

「あたいを置いて今直ぐ逃げて」

「え？」

日和ちゃんは、これ以上なくシリアスな表情でそう言った。そして、織崎ちゃんはそれを見て、また不敵に嗤った。

……なんて凶太い奴なんだ。

「011」

あたいを置いて今直ぐ逃げて。

これはどう受け取ればいい言葉なのだろうか。そのまま額縁通りに受け取ればいい言葉なのか、それとも、別のなんらかの意味が込められているのだろうか。突然のその言葉は、僕の心を大いに惑わし、乱した。

どうしてそんなことを言うのだろうか—— 齢6歳にして自己犠牲精神を持つというのはかなりの早熟とは思うけれど、この状況でその精神を発揮するのは、どういう意図あつてのことだろう。

——いや、待て。

惑うな、阿良々木暦。

今の織崎ちゃんの表情を見る。あの表情から察するに、もしかするとあいつ、日和ちゃんに『糸』を仕掛けたのかもしれない。

まあ、その糸についてもよく分からないが——その糸とやらの所為で、今朝は散々な目に遭ったのだ、警戒しない訳がない。僕にも非がないかといえはそうでもないけれど……。

……織崎ちゃんについて僕、本当何も知らないな。

「逃げろって……どういことだよ」

「そのままの意味です。早くここから逃げてください。あたいとしたことが、完全に騙されてしまいました」

「騙された、って」

何をだ？

日和ちゃんは何を言っているんだ——まさか、織崎ちゃんのことを知っているのか？

「騙されたとは、随分な物言いですわね。日和号」

「っ……………」

織崎ちゃんは嗤いながら日和ちゃんに向かって言った——日和号？

何だ、そりやあ？

「ふん、私は騙すつもりなどありませんでしたのよ。ただ結果的に騙すことになったというだけの話——私にとっても想定外でしたけれど、まあ結果オーライ、ですわ」

「……あたいに近寄らないで」

「んん？」

日和ちゃんは僕だけに限らず、八九寺のスカートの裾も握った。おい、八九寺のスカートを握っていいのは僕だけなんだぞ。

まあ、そんな冗談はさておき。

「ふん、嫌われたものですわね。私が居なければ、ずっと歴史の闇の中に葬り去られたまま、永遠に瓦礫の山を守護していなければならなかったのですわよ？ 寧ろ感謝して欲しいくらいですの」

瓦礫の山——を、永遠に守護する？

どういことだ？ 全くと言っていいほど話についていけない。

こいつは、日和ちゃんの何を知っているんだ？

「……………」

「何ですか？ 阿良々木暦。私はその日和号と話をしていますの。邪魔しないで下さいまし」

「邪魔するに決まってるだろ。お前みたいな不審者に、日和ちゃんと



話す資格なんてねえよ」

「はっ、分かっておりませんわね。日和号にとって、不審者はあなた方なのですか？ 私は不審者どころか、寧ろ——家族ですわ」

「か、家族？」

え？

日和ちゃんと織崎ちゃんが——家族？

「……いや嘘だろ」

「嘘ですわよ？ だから言っているではありませんの。寧ろ、と」

「じゃあ不審者だろうが。つーか、さっきからその”日和号”ってのは何なんだよ」

日和号とは、如何にも機械のような呼び方である。歴とした人間であるところの彼女に対する呼称としては些か適していないように思える。

「家族とまで名乗るんなら、ちゃんと名前で呼んでやれよ。この子は

神崎——」

「いいえ、違いますわよ」

「え？」

織崎ちゃんは小さく溜息を吐いた。そして、ぱちん、と指を鳴らした。また今朝のように怪異か何かを呼ぶつもりか？ そして、一部火の中に置き去りになった鉄串を三本拾い上げ、僕達に突き付けた。

「ふん、成る程。名前さえも反逆しましたのね。どこまでも反抗的な人形ですわ」

「おい！ お前、人形なんてそんな——」

かんざしひより  
「釵 日和」

「！」

織崎ちゃんは鉄串を地面に突き刺した。

「それがその人形の名前ですわ。神崎日和？ 全くお笑いですわね。もう少しマシな名前にすることは出来ませんでしたの？ ふふ、まあそれ以外に思い浮かばなかったのでしょうか？」

「……………」

釵——日和？

僕は日和ちゃんを見た。日和ちゃんは一層強く、僕の服の裾を握った。体が震えているのか、握られている場所から小さな振動が伝わってきた。

日和ちゃんは、嘘を吐いていたのか？ いや、或いは、織崎ちゃんの妄言か？ さつきまであんな意味不明な態度を取り続けていた奴の言うことなんて、そう易々と信じる事が出来る筈もない。

それに――。

「さつきから日和ちゃんのことを人形人形って、いい加減にしろよ。日和ちゃんは人間だぜ。人形なんかじゃあない」

「いいえ、人形ですわ」

織崎ちゃんは、そう言い切った。

「そいつはただの人形。」人間らしさ」に重点を置いて作られた、人の形をしたもの――怪異ですわ」

「っ――!!」

「なっ……!!」

怪異、だと？ 日和ちゃんが？

こいつの言うことを信用する気はない。だが、今までの日和ちゃんの行動を見れば、あり得なくもないと思える、思えてしまう事象だった。

年相応とは言えない程の礼儀正しさと、最近の子とは思えない程の無知さ、そして、人間離れた身体能力の高さ――仮に、仮にこの子を怪異だと仮定すれば、その全てが総じて説明出来る。

八九寺は驚いたように日和ちゃんを見ている。だが、それと対照的に、忍は何でもないことのように平然とその場で腕組みして立っていた。

「……やはりな」

「し、忍――どういうことだよ」

「どうもこうもないわ。此奴は怪異じゃ。どうしようもない程に、人に非ざる存在じゃよ」

「分かったのか」

「寧ろ儂は分かった上で行動していると思っていたのじゃが？ 特段

伝えるような事でもないと判断したので、うぬに伝えんかっただけのこと」

「っ……………」

「それに、伝えたところでうぬはその児女を手放したか？」

「…………それは」

間違いなく、手放しはしなかっただろう。寧ろより庇護下に置こうとした筈だ。もっと手を強く握っていたことだろう。

——僕は日和ちゃんを再び見た。日和ちゃんは俯いたままで、僕の顔を見ようとしなない。

「そういうことですわ。阿良々木暦。それは怪異——それも、とびきり最新型の怪異。私たちの”新兵器”ですわ」

「…………新兵器だと？」

「ええ」

織崎ちゃんは鉄串を一本地面から引っこ抜き、ちらりと一瞬横目で道路を見ると、頭上で栗の刺さったままの串をくるくると回した。

「あなた方を殺す為、即ち、歴史を修正する為の武器。最終兵器ならぬ新兵器——それがその人形、通称『日和号』ですわ」

「日和号…………」

「そしてその正体はからくり、即ち機械仕掛けの人形…………私の尊敬すべき先祖である四季崎記紀が作りし十二本の”完成形変体刀”が一振り、その真名は——」

「やめて下さい!!」

日和ちゃんが、今までに出したこともないような大声で叫んだ。だが、織崎ちゃんはその呼び掛けに応じることなく、止まることなく、日和ちゃんの”真名”を告げた。

「——微刀『釵』」

その言葉を聞いた瞬間、裾を握っていた日和ちゃんの小さな手から、人間らしい温かみが一つ残らず失われた。それはどこまでも非人間的で、人工的な冷たさだった。

「うあああああああああああつ!!!」

日和ちゃんの余りにも冷たい手——突如失われた体温は、まるで人間性の喪失を意味しているように感じた。そしてそれは突然であり、裾を握っていた日和ちゃんの手が肌に触れた瞬間、僕は思わず日和ちゃんを振り払ってしまった。

その行動は後から思うと、本当に馬鹿で愚かで、疎かな行動だった——いや、後から思うまでもなかった。行動したその瞬間から、僕はそう思ったのだから。

振り払われた日和ちゃんは、跳ね飛ばされた日和ちゃんは、地面に尻餅をついた。そしてその手を見て——叫び声を上げた。

「ご、ごめん日和ちゃ——つ!!」

よくぞここで叫び声を上げ止まったと、僕は思う。今まで散々、散々な経験をして来たからこそ、ここで僕はある程度の冷静さを保てたのだから、経験というのは全く馬鹿に出来ないものである。

叫ぶのは至極当然であった。  
だつて。

「ひ、日和さんっ……その指……!!」

八九寺でさえ戦慄するそれは。

日和ちゃんの指——正確に言えば日和ちゃんの爪が、鋭利な刃物になつていたのである。

小さな刃——刀になつていたのである。

そして、それはどうやら見掛けだけではないらしく、先程まで日和ちゃんが握っていた袖は一部切り裂かれていた。

微刀と言ったか。

「い、嫌です!・嫌です嫌です嫌です嫌ですっ!!」

日和ちゃんは尻餅をついたまま、後退さる。

「あ、あたいは——あたいは——!」

「どう足掻いても無駄ですわよ、日和号」

日和ちゃんを否定する織崎ちゃん。その声は頭上から聞こえた。僕達が日和ちゃんに気を取られている間に織崎ちゃんは糸を空中に設置し、上空に逃げたのだ。行動が速い——いや、しかし、糸を今設

置したのではなく、既に設置していたと考えれば、不自然ではない――

「私はあなたの抗いを否定しますわ。否と定めて否定しますわ。微刀『釵』、あなたはもう運命からは逃げられない――自分が何の為に生まれたのか、よく思い出しなさい」

「い、嫌です！ あたいは、誰も、誰も斬りたくなんてありません！」「おかしなことを言いますのね。あなたはただの刀――私の新兵器。人形は大人しく主人の命令に唯々諾々と従っていれば良い。よろしくて？」

「嫌ですっ！」

「否定しますわ」

どこまでも日和ちゃんを否定する織崎ちゃん。この二人は、どういう関係なんだ――いや、分かりきっているか。

主従関係。

完成形変体刀、それが日和ちゃんの正体だと、本当にそうならば、日和ちゃんは織崎ちゃんが従える亡霊――即ち、淡海静によって作られたということになる。

主の主もまた、主ということか。

だが。

それがどうした。

「やめろ織崎ちゃん！」

「……………ふん？」

僕は日和ちゃんを庇うようにして、織崎ちゃんと日和ちゃんの間立った。

「それ以上日和ちゃんに何かすると許さないぜ。何をしてるのかよく分からないが、日和ちゃんを苦しませることは、この僕が許さない」「貴方に許されようと許されまいと、関係ありませんの。というか、貴方には関係ないことではなくて？ 主でもなんでもない貴方が何を言おうと、私と日和号には何の関係も……………」

「関係あるに決まってるだろ」

「はあ？」

肩を竦める織崎ちゃん。

確かに、彼女の言う通りだ。結局のところ、僕は彼女と日和ちゃんの関係に介入することは出来ない。それはよく分かっている——僕自身、その経験はあるし、現在進行形で経験中なのだから。

しかし、それは道理でしかない。

「僕とこいつは、友達だから」

「！」

ほんの数時間しか一緒に行動していない身で、何を言っているのだろうか。そう思われても仕方ないことだろう。日和ちゃんからもそう思われたかもしれない。

だが、少なくとも、僕はそう思っている。

道理を殺し、理屈っぽく無理を押し通すのが僕、阿良々木暦だ。相手の気持ちを顧みず、自分を省みない。そんな愚か者なのだ、僕は。

……人間強度？　なんだそれは。知らん。

「友達が苦しんでるのを助けようとして、何が悪い」

だから——関係あるとかないか、そういう話ではないのだ。もつと感情的な話である。

僕は日和ちゃんを見た。俯く彼女の表情は窺えない。

僕は日和ちゃんの写真を知っている。それは八九寺も、忍も一緒だ。さつきまでその笑顔に癒されていたのだから。

日和ちゃんの笑顔を失わせた——それは決して看過できる事ではない。彼女の笑顔を、僕は、もう一度見たい。

泣いている顔なんて、怯えている顔なんて、一度たりとも見たくはない。

「……………はあ」

織崎ちゃんは溜息を吐いた。

「……………まあ、なんとなく予想はしていましたけれどもね。今までの行動を鑑みれば、まあ、怪異だと明かされ、自分を殺すために作られた兵器だと明かされようと、それでも平気で馬鹿みたいに愚かしく助けようとするのは、火を見るよりも明らか——日を見るよりも明らかでしょうよ」

「……分かってんじやねえかよ」

「そりやあ調査済みですわよ、そんなこと——だからこそ、私もしつかりと手を打っている訳ですけども」

「何？」

手、だと？

「罨と言ひ替えますわ」

僕は周りを見回した——またレイニー・デヴィルが現れるのかと警戒したからだ。

「忍、怪異の気配はあるか」

「儂をリーダー代わりに使うな。儂はリーダーでもないし、そんなこと出来んわ——うぬ、儂、ハチクジ、ヒヨリ、木刀、そしてあやつしかこの場にはおらぬ」

「一応分かるんですね」

「儂を甘く見るなよハチクジ。遠方にいる怪異は分からずとも、近くにいる怪異程度なら把握出来る」

十分リーダーじゃねえかよ。

忍の言を信じるならば、仮にその罨とやらは遠くにいるということだ。今の段階では気にする必要はない——いやまあ、それが猛スピードでこっちに向かってきてきているとかなら、話は別だけれど。

「ハツタリをかますのがお好きなようですね、織崎さん。ですがどうやらそれも無駄になったみたいですよ？ またまた作戦失敗ですよ？ ぷぷぷ、醜態まで晒して、何か成果は得られましたか？」

煽る八九寺。自分が今のところ安全だと分かった瞬間にこれである。

つーか人見知り設定はどこ行った。

「人見知り設定？ あんなの昔の話ですよ。神となった私には、怖いものなんて饅頭くらいですし」

「そうなのか」

「そうです。饅頭くらいしか怖くありません」

「二度も言うな。要求すんじやねえよ、ついさつきドーナツ食ったろ」  
「儂はドーナツが怖い」

「うるせえ黙れ！」

こんな状況でも、僕から賽銭をせびろうとする神（本物）と神（偽物）であった。

「……なんか楽しそうに雑談してらっしゃるけれど、もしかして、私の今の発言、本気でハツタリと思いませんか？」

「え？」

「は？」

「む？」

三人揃って似たような声を出してしまった。なんだよえはむって。

「そんな訳ないでしょう——そんな意味のないハツタリ、私かましませんわ。私、意味のない行為はしない主義なので」

「……………」

じゃあ最初のあれはなんだ。あれこそ無意味の境地だぞ。

「……あれについては、まあ弁解する気はありませんわ。あなた方が勝手に忘れて下さることを期待しておりますわ」

「そうまで言われると絶対忘れたくねえな」

つーかあんなもん忘れられる訳ねえよ。あれは本当に酷かったぞ。

「まああれについては触れないでくださいまし。私も割と後悔していますのよ？ 後悔どころか、最大級の失敗として捉えておりますわ」

「意外と正当な評価してるな、お前」

「客観的に見ることでくらい出来ますので」

じゃああんなことするなって話なのだが。

「あらゆることを作戦として組み込む私としても、あれは想定外でしたもの——まあお陰で、こうして現在進行形で作戦が成功しているのですけれど」

「……さつきから何を言っているんだ」

「あら、分かりませんの？」

織崎ちゃんは残りの鉄串を地面から引っこ抜き、僕たちに突き付けた。栗はまだ刺さったままだ。

「時間稼ぎ——怪異が起動するまでの、時間稼ぎ」  
「！」



「……雑談、感謝致しますわ。阿良々木暦」

織崎ちゃんは、にやりと嗤った。するとその瞬間、串に刺さったままの栗が勢いよく弾け、中から小さな何かが大量に放たれた。

「な、何だ——」

「あ、あれは、リス!？」

八九寺が驚いたように叫んだ——栗鼠だと？

あんな小さい栗鼠がいたのか——いやまて、違う！ さっきまでの会話を忘れたのか？ 織崎ちゃんは時間稼ぎと言った。怪異が起動するまでの時間稼ぎと——それは言い換えれば、怪異が生まれるまでの時間稼ぎでもある。

栗鼠の、怪異——！

「さあ、もうあなた方は逃れられませんか。恨むことですわね、己の愚かさを、優しさを——そして、無駄なツツコミ体質を」

愚かさや優しさはともかくとしても、ツツコミ体質だけは、本気で直さないと駄目なのではないだろうか。僕は思った。

「013」

「律し鼠」

織崎ちゃんは、その小さな栗鼠型怪異の名を告げた——鼠。

栗鼠。

齧歯目リス科に属する哺乳類の総称。

”栗鼠”という字は、そのまま、栗色をした鼠というところから名付けられたという。齧歯目はネズミ目とも言われ、愛玩されること多いこの生物の根本のところは、どちらかというところと忌み嫌われることの多いあの鼠なのである。

律し鼠——律する鼠。

怪異の名前というと、大抵何らかの言葉遊びが含まれていたりするが、この場合はなんなのだろうか。”リス”からの連想で”りっす”——つまり”律す”になったということか？

名前に栗の要素がないが、しかしそれは特に珍しいことでもない、と思う。嘗て迷い牛という怪異に遭遇したが、あの時だって、名前自

体には”蝸”の要素はなかった。

名は体を表すとは言うものの、しかし表しているのは体ではなく、その内面なのだ。

本質。

重し蟹は重さに関することを。

迷い牛は迷わせることを。

レイニー・デヴィルは悪魔であることを。

蛇切縄は縛るものであることを。

障り猫は障ることを。

困い火蜂は熱に関することを。

しでの鳥は死がないことを。

逆さ蛤はぐりはまだということ。

それぞれ表している——ならばこの怪異の正体は名前から推測でききる。

律し鼠は、その名の通り、律することを。

律する——つまり……！

「お気付きになられたようですわね。中々の推理速度ですわ——でも」

遅い。

織崎ちゃんは言った。

そう、もう遅い——何故ならば、今こうして考察していながらも、僕たちは全く、この怪異に歯が立たなかつたのだから。

寧ろ歯を立てられた。

結論から言えば、僕たちは完全に身動きが取れなくなっていた。金縛りに遭っているかのように——体の自由を律されたかのように。

「律し鼠——その名の通り、”律する”怪異ですわ。鼠は病原菌の塊だと言うけれど、それは近縁種である栗鼠だつて例外ではありませんの。この律し鼠が運ぶのは、つまりはそれですわ。身動きをとれなくする——これがこの怪異の本質であり、律するとうこと。どうですか？ 私の作戦、大成功ですわよ？」

「っ………！！」

得意げに語る織崎ちゃん——実際、手も足も出ない今、そんな風に語られたところで、僕たちは織崎ちゃんに指一本さえも触れることが出来ないのだ。

成功も成功、大成功。

僕たちはまんまと罠にはまったのだ。完全に油断していたところを突かれた——そりやあ忍だつて、幾ら何でも生じる前の怪異のことなんて、解るはずがない。怪異は自然に発生するものなのだから。

そう考えれば、怪異を自由に生み出すことが出来る淡海静のチー卜つぷりがよくわかる——伝承とか歴史を抜きに作ることが出来るっばいし。

「ぐっ——」

「ふふふ」

律し鼠に噛まれたのは、僕たちだけではなかった。日和ちゃんも、その犠牲者の一人だったのだ。

同じく身動きの取れない日和ちゃんに、織崎ちゃんは近付いた。

「やれやれ、回収だけにこんな時間に時間をかけさせるとは、全く我儘な人形ですわね。”人間らしき”に重点を置いて作られたとは言え、少々過剰ではなくて?”

「っ……………」

「ふん、随分と反抗的な目ですわね。それがご主人様に向ける目ですの? まあ、それももうここまでですけれど」

織崎ちゃんは、動けない日和ちゃんを肩に担ぐと、僕たちの方を見て挑戦的に嗤った。

「まあそんな訳で、うちの日和号が迷惑をお掛けしましたわね。その毒はじきとれますし、動けるようになったら勝手に帰って頂いてもよろしくてよ」

「っ……………」

僕は口を開こうとするが、動かないのは顔の筋肉も例外ではない。内臓はちゃんと動いているようだ——。

「その怪異は、困い火蜂タイプですわ。あくまでも栗鼠は運び屋で、本体、即ち本質はその毒の方。あれよりも効果は短いですけど、もう

怪異は終わっておりますので、仮に怪異殺しなんかでどうかしようとしても、無駄ですわ」

「……………」

ぺらぺらと喋る織崎ちゃん。どこまで余裕をかましているんだ、こいつは。

まあ僕たちは、それを見ることしかできないのだが。

「私があなた方を見逃すのは、100%お情けを掛けてやっているということをお忘れなく。いつでも殺せますのよ？ ふふふ、でも私それどころではありませんの。早く日和号を”成長”させなければなりませんので、私はここで失礼しますわ」

態々お情けで見逃す、なんて、忍や八九寺が動けたのならば間違いなく本気で殺しにかかるであろう煽りをしながら、織崎ちゃんは日和ちゃんを担ぎ、ジャンプした。

ジャンプした織崎ちゃんは、空中に、否、空中に張り巡らされた糸の上に着糸した。そして再びジャンプしようとして、踏みとどまり、こちらを振り向いた。そして僕たちを見下しながら、こう言った。

「ああそうですわ。もしも——もしも、万が一、億が一、兆が一、京が一、垓が一、この日和号を取り返そうと、愚かにも馬鹿馬鹿しいことを考えていらつしやるのであれば……まあ、チャンス差し上げますわ」

どこまでも余裕の表情で、織崎ちゃんは告げた。

「本日深夜0時ぴったりに、思い出深いであろうあの学習塾跡に来れば——少しでもだけチャンスをくれてやりますわ。その内容までは言いませんわよ、勿論。そこまで私は優しくありませんの」

織崎ちゃんは、再び僕たちに背を向けた。

「易しくありませんわよ——こちらとしてはあなた方に死んでもらうつもりです。来るか来ないかは、ご自由に——ふふふ、これも情けですわよー」

「……………」

「……………ふふ、では」

織崎ちゃんは、何事か呟いた日和ちゃんを一瞥してから、もう一段

上の糸へと跳躍した。そして、そのまま空中ジャンプを繰り返し、既に紅く染まった雲の中に消えた。

僕たちはそれを、空をただ見つめることしか出来なかった——何も出来なかったのだ。

「——たすけてください——」

そんな呟きを聞きながらも、僕たちは結局、その期待に応えることが出来なかったのだった。

第參話 ひよりブレード 其ノ肆

〔014〕

織崎ちゃんが日和ちゃんを拉致し、暫くたった後ようやく動けるようになった僕たちは、織崎ちゃんが残していったテントや薪などを、このまま残しておくで近所迷惑になるので——まあ周りには家なんて殆どないが——僕たちで持ち帰ることにした。後始末くらい自分でやってほしいものである。

迷惑千万だが、しかし収穫がないでもなかった。栗のことではない。日和ちゃんとは別の、もう一つその場にあった怪異のことだ。

木刀。

見た目は完全にただの木刀——しかし地面に突き刺さっている時点で、ただの木刀ではないことは一目瞭然だが。

恐らくこれも、織崎ちゃんがいうところの完成形変体刀の一つだろうと判断した僕達は、今後これが何らかの悪影響を及ぼすかもしれない可能線を考慮し、これを『心渡』で破壊しようとした——のだが、何故か出来なかった。

理由はまるで分からない。いつぞやの『鎧』よろしく、まるで刃が立たなかったのだ。扇ちゃんにアップグレードしてもらった筈なのだが……あれは一回きりの効果だったのだろうか？

それで。

賢明なる読者諸兄ならお分かりになると思うが、そう、また忍は拗ねた。

ガラスのハートをお持ちなのだ、この少女は。

刃が立たなかった所為で、誇りが傷付いたのもあるのだろうか、しかし、それだけで影に沈む程拗ねることなどあるまい。ありそうだが、しかし忍はそこまで幼女退行してはいない。

栗鼠。

見事にしてやられたということも、決して無関係ではあるまい。見抜けなかった上に、殆ど抵抗する間もなく怪異にやられたのだ。元怪異の王であった彼女にとって、それは耐え難いことだったのだろう。

因みに、当の栗鼠はもう消滅していた。一匹残らず。毒の伝達という”役割”を終えたから消えたのだらう。

そんな訳で、この木刀を始末することは出来なかった。かと言ってこれもこのまま放置する訳にもいかず、僕か八九寺、どちらかが持つて帰ることになったのだ。

当然ながら言うまでもなく、双方とも嫌がった。こんな得体の知れないものを自分から持つて帰りたいなど、幾ら自己犠牲精神が割と強い僕たちでも、流石に思わない。

しかしこれはどう足掻いても避けて通ることはできない。僕たちは仕方なく、公正にして不公平な戦いをし、見事僕は八九寺に打ち勝ったのである。

え？　どんな勝負だったのか？　いや、それは勘弁してほしい。これを描写すると、少々どころではなくマジで警告タグが増えてしまう。大の高校卒業生が小学五年生のロリと暴力沙汰になった——この一文だけで全てを察してほしい。

……察してほしくないけど。

木刀は、敗北した八九寺が持つて帰ることになった。預けておきながら、それをどうするつもりなのか聞いてみたところ、取り敢えず賽銭箱の辺りに飾っておくつもりらしい。

まあ、それが妥当、というか妥協点だろう。織崎ちゃんの手元にあると危険であろうことは分かるが、これがどういうものなのか分からないのだ。下手に扱うわけにいかない。

だから壊しておきたかったのだが……もうこれは、全ての刀にこういった処理が為されていると考えるのが自然だろう。後何本あるのか分からないが、少なくとも、これを含めて三振りあるのは確定している。

この木刀。

織崎ちゃんが持っている、黒い刀。

そして——日和ちゃん。  
刀。

日和ちゃんが刀とは、どういうことなのだろうか？　織崎ちゃんは

彼女のことを何度も”人形”と表現したが、それはつまり、怪異としての姿を表しているのではないのか？ それとも、今の——神崎日和としての姿を指して、人形と表現したのか？

まあ、後者だろう。人形の刀とか、なんだそりや、って話だし。

微刀『釵』。

何がどう”微”で、”釵”なのか皆目分からないけれど、刀であることは確かな筈なのだから。

閑話休題。

そうは言ってもどうしようもないことはどうしようもなく、僕たちはなす術もなく、すぐすごと帰宅するしかなかった。

帰宅と言っても、先に帰ったのは八九寺だ。僕は八九寺を北白蛇神社へと送り届けた。木刀を預けたのは八九寺だが、その道中は僕が帯刀していた。もしも僕が持って何らかの影響があった場合、約束を全力で反故にしてぼくが持って帰る為——つまり、試し持ちである。

道中でのことは、記述しない。というか、記述できない。

というのも、実に辛気臭いことになっていたからだ——八九寺も僕も、いつものような楽しいお喋りを交わす程の心の余裕がなかったのだ。

日和ちゃんの居ない道中。

振り回されることのない帰り道。

たった数時間遊んだだけなのに、なんだ、この喪失感は。

好意的に、というか結局今起こったことは、あの子の家族が日和ちゃんを迎えに来た、ただそれだけなのだ。方法は些か乱暴であるにせよ、それは僕たちの最終目標だった筈だ——日和ちゃんを家族の元に送り届ける。

それは、僕の家に住候させるよりも、交番に連れていくよりも、最も望ましい展開の筈なのだ——なのに、なんだ、この気持ちは。

これで良かった筈なのに——。

「では阿良々木さん、私は帰りますね」

北白蛇神社の階段に到着すると、八九寺はそう言った。

神社の階段は、以前来た時よりもずっと朽ち果てているかのように



見えた。あちこちに罅が増え、落ち葉がそこら中に散らばっている。

「うわ……これは酷いな」

「ここ最近ずつとこんな調子ですよ。やれやれ、底辺は大変ですよ」

「底辺なんてそんな——」

「阿良々木さんの気持ちがあつてしまふじやないですか……」

「憐れんだ気持ちを返せ！」

僕は木刀を八九寺に手渡した——特にこれといって影響はなかった、ように感じた。八九寺はそれを受け取った。

「つたく、ふざけんな！ 何だよこれ！ やっぱ僕が神を斬り伏せるしかねえようだな」

「阿良々木さん、そんな乱暴な……」

「乱暴な気持ちにもなるぜ！ 僕の親友の家を荒らすとか、マジ信じられねえ！ 畜生、この場にロンギヌスの槍があれば今すぐ一掃してやるのに！」

「阿良々木さん、暴力はいけませんよ。我々は話術サイドなのですから、どつしりと構えていなければなりません」

「むう」

悟りきつたような表情で言う八九寺。なんだよ、勝手に大人になりやがって——いやまあ、八九寺の方が大人と言えば大人なのだけだ。

「阿良々木さん」

「ん？」

「どうするおつもりですか？」

「……………」

それは——日和ちゃんのことを言っているのだろうか。

……………。

「……よく分かんねえよ。どうした方が良いのか、僕にはまだ分からない」

「そうですか」

あいつにとつて、幸せなように僕は行動したい。もしも僕が余計なことをして日和ちゃんを不幸にしてしまうのなら、一層向かわない方

がいい。

の、だろうが……。

「残り時間一杯考えることにする。まあ考えたところで、今の気持ちとあんまり変わらないだろうけれど……。」

「ですか」

八九寺は木刀に目を落として言った。

「では、私もそうさせて頂きますでしょうか」

「え？」

「私も考えさせて頂きます」

八九寺は言う。

「もしも学習塾跡に行かれるのであれば、ほんの少しだけ、この場所に立ち寄って下さい。場合によっては、私もお供させて頂きますから」

「い、いや、駄目だろう！」

「何故ですか？」

思わず反射的に答えてしまったので、答えを用意していなかった。考える僕。

「いや何故って……あの織崎ちゃんが、穏便にことを済ませてくれるとはとても思えないぜ。多分のこのことやつて来た僕たちを一網打尽にするつもりだと思う。したら八九寺、お前に危険が……。」

「おやおやお忘れですか？ 阿良々木さん。今朝、貴方を助けたのはどこの神様でしょうかね？ ん？」

「……いやまあそうだけど、でもあれは殆ど偶然みたいなところがあったじゃねえか。次もまた操れるトラップかどうか分からねえぞ」

「私はそう簡単に倒されませんよ。倒される時は必ず阿良々木さんを道連れにする女ですからね、私は」

「やめろ。僕を巻き込むな」

今の状態でまた地獄に落ちたら、それこそ目も当てられない。逃亡罪も加わっている八九寺に至っては、次もまた復活出来るかどうか分からないのだ。

「八九寺、僕はお前を道連れには出来ない」

「私は貴方を道連れに出来ますよ」

八九寺は即答した。

「それは逆に言えば、貴方となら道連れになってもいいということですよ——つていうか、言わせないでくださいよ。今まで私と阿良々木さんでどれだけの冒険を重ねてきたとお思いですか？ これくらい汲み取って下さい」

「……………」

そんなに冒険を重ねてきた訳ではない、けれど。

それは今指摘するべきことではないだろう——そして八九寺も、そういうことを言いたい訳ではないのだ。

八九寺は僕に背を向け、階段に足を掛けた。

「それでは、私は帰りますね。いいですか、必ずここを通って下さいよ。場合によっては睡魔に負けた私が居ない可能性もありますけれど、その場合はスルーして下さいって構いませんので」

「睡魔に負ける程度の覚悟なのか、それ」

変な所で凶太い少女だった。というか、器が大きいと言うべきなのかもしれない。

この神様は。

「015」

八九寺とそんな会話を交わした僕は、特に怪現象に遭遇することもなく、普通に帰宅した。

態々こんな注釈をつけなければならぬ程に怪異現象に巻き込まれているという事実には、多少思うところが無いではないが——いや、違う。

巻き込まれているのではなくて、だから、首を突っ込んでいるのだ。

最初から今までずっと——。

「お。おかえり、兄ちゃん」

「あ。おかえり、お兄ちゃん」

そんなことを考えながらリビングに向かった僕を出迎えたのは、そんな声だった。生意気さが滲み出るような声——つまり、僕の妹達で

ある。

阿良々木火憐——でっかい方の妹で、旧ファイヤーシスターズの実戦担当。

阿良々木月火——ちっちゃい方の妹で、旧ファイヤーシスターズの参謀担当。

「ん……ただいま」

「いやあ、今朝は悪かったな兄ちゃん！ このあたしとしたことが、兄ちゃんのことを誤解しちゃったぜ！ 正義の塊であるファイヤーブラザーであるところの兄ちゃんが、覗きなんて悪行を働くわけねーもんなー！」

「ん？ ……あ、ああ。それか」

僕が入ってくるなり相変わらず成長しないハイテンションっぷりを見せつける火憐だった——いや、自分の非を認めるようになっただけ、成長したと言えるのか？

ただ、ここで成長っぷりを見せられても、反応に困る。正直、今朝のいざこぎについては完全に忘却していたのだから。

色々あり過ぎて、色々失くしすぎて忘れていたが——そうだ、僕はこいつらが原因でヘソを曲げて、逃げ出すように家から飛び出したのだった。

……なんだこのガキっぽい理由。改めて思い出すと下らなさ過ぎて笑えるぞ。いや笑えねえ。

「うーん、でもあれはお兄ちゃんも悪いと思うよ？ 幾ら私の窓を拭こうという見上げた忠誠心から私の窓に張り付いていたとしても、無断でああいうことをするのは、良くないと思うんだよねー、私はさ」  
月火が言う。割と正論なのがムカつく。プラチナむかつく（だっけ？）。

「私からの要請があつた時だけ動けばいいんだよ、お兄ちゃんはさ。奴隷のように唯々諾々と従えー！」

「てめえなんかの奴隷になった覚えはねえよー！」  
「ったく、こいつは……正論だけで止めておけば、一応僕は何も言い返さないものを、その余計な一言がある所為で、言い返したくなるん

じゃねえかよ。

参謀担当の癖に、その辺りの詰めが甘い——いや、煽って、怒らせれば勝ち、とか思っているのだろうか？　だとすれば今の僕は、見事にこいつの策にはまった形になるが。

「あれ？　お兄ちゃんってそういうキャラ設定じゃなかったの？　私ってつきり生まれてからずっと、私を守護する奴隷兵として見てたんだけど」

「お前僕のことをそんな風にしか見てなかったのかよ!？」

なんて奴だ。影縫さんに突き出してやろうか……いやしないけど。そんなことしたら、ついでに僕もぶつ殺されちゃうだろうから、しないけど。

「阿良々木カーストの最下位である奴隷階級が、お兄ちゃんと火憐ちゃんなんだよ？」

「……………」

こいつ何気に姉のことまで奴隷と言い切りやがった。火憐を奴隷というか。殺されるぞお前。

「へっへー、兄ちゃんと同じ階級か……悪くねーな！」

「……………」

ああ、そうだ。うん、忘れてた。こいつ馬鹿なんだった。

月火め……ここまで計算尽くか。幾ら火憐が馬鹿だとはいえ、奴隷という言葉を知らないとは流石に思えない。いや知らないかもしれないけれど——普通に面と向かってランク付けされた場合、火憐ちゃんはその場で月火ちゃんをぶん殴っていただろう。これは半分願望が混じっているが。

しかし、僕の名前を先に出すことによって、それを封じたのだ。去年の夏休み以来、無駄なところで僕に対して従順になりやがった火憐である、僕と同じ階級ということを先に提示しておけば、自分に一切危害が加えられないと踏んだのだろう。くそ、伊達に旧ファイヤーシスターズで参謀やってた訳じゃねえな、こいつ。

だが、火憐が暴力を振るわないなら是非もない、罪を全部火憐におつ被せて僕はさっさと部屋に退散しようと思っていたが、こうな

りや僕が手を出すしかない——何故かは知らないが、すつげえ暴力的な気分なのだ、今の僕は。

「まあその話は置いておいて、お兄ちゃん」

さあ殴るぞ、顔面にストレートのグーパンチを決めてやるぞ、と拳を構えようとしていたところで、こいつ、話題を変えてきた。

やるな……！　ここで咄嗟に話題を変えることによつて、僕の暴力を封殺しようという考えか！　うつつぜえ！

「一つ相談があるんだけど、良いかな？　良いよね？　良くなかったら爪の皮剥がす」

「地味に痛すぎる！」

爪じゃなくて爪の皮を選択するか——どこまでも頭が回る妹だ。確かにこういう場合、爪を剥がすというのがお決まりのパターンと言えるが、しかし爪を剥がした場合、人間の再生力では一年近くかかる。つまり、目立つのだ。

しかし爪の皮の場合、それよりも早く回復してしまう。しかも爪の皮という目立たない場所というのが肝だ。その上、爪より幾分かは自然である。恐ろしいことを考える奴だ。怪異より怖い……つつーか、怪異なのだけれど。

それ以前に兄を脅すつてどういうことだよ……いやそれを言うなら奴隷扱いがまずおかしい、奴隷扱いしておいて相談を聞いてもらえろと思つてんのかこのガキ。いや、思つてないから脅してるのか……。

「……なんだよ」

取り敢えず聞いてやることにした。皮を剥がされたくはないからな——いやマジでこいつはやるよ、有言実行しちゃうよ、うん。

「うむうむ、苦しゆうない。面を上げい」

「お前に下げる面なんてねえよ。さつさと言え、僕は忙しいんだ」

「何よ、忙しいなんて大人ぶっちゃつて。高校卒業したからつて調子に乗らないでよね」

「おいおい、それが人にものを頼む態度か？　寧ろお前が僕に頭を下げろ。おつと、僕より頭の位置が低いから、もう既に下がつてるな。

悪い悪危ねえっ！」

調子に乗って月火を煽っていた僕。しかし、いい加減僕も学ぶべきだろう。月火を煽ると必ずその代償——即ち、物理的な攻撃を食らうということ。

ギリギリで避けたものの、この小人、テレビのリモコンをぶん投げてきやがった。狙いは顔面、しかも正確。幾度となくこの攻撃を食らっている僕だからこそ避けることが出来たものの——。

「何すんだてめえ！」

「ねえ、何も聞かずに私の言うことを奴隷らしく大人しく聞いて」

「お前今の状況で聞いてもらえる立場にあると本気で思ってるのか」

「火憐ちゃん」

「了解！」

無駄に元気のいい声を出し（妹にいいように使われてんだぞ、プライドはないのか）、僕に手刀を繰り出してきた。余りに咄嗟のこと過ぎて動けなかったのだが、しかし手刀は僕の頭上ギリギリを掠めた。

身体中から、一気に冷や汗が出た——今起きたこれをアニメ的に表現するなら、僕のアホ毛が切り飛ばされたという状況となる。

「悪いな兄ちゃん……次は首を狙う」

「ひいひい……」

論より証拠。お分り頂けただろうか、僕がこいつらを恐れている理由を。少し前の章で散々こいつらの危険性を述べたが、実際、どうだろう。こんなもんである。大袈裟と思っていた方も居ただろうが、こんなんである。悲しいことに、事実なのだ。

「な、なんだよ。言ってみろよ。き、聞いてやる」

「わーい！ お兄ちゃんありがとー！ 大好きー！」

……イツカゼツタイコロシマス。

まあ一人は殺しても死なないし、一人には殺されるだろうけど……はっ、ああそうですよ、阿良々木家内カーズトでは最下位ですよ畜生が。

「あのね、何も言わずに答えて。ムーンファイヤーかファイヤーシスター、どっちがいいと思う？」

「どつちも良くねえよ！ ファイヤースター!? て、てめえそれ――」

「火憐ちゃん」

「ムーンファイヤームーンファイヤームーンファイヤー!! すみません何も言いません!」

妹の脅しに屈する兄の姿が、そこにはあった。

「うむ。ご協力ありがとうございます！ じゃあ、もう行っていいよ――」

「あっはい」

そして妹に良いように使われた拳句、唯々諾々と従ってしまう奴隷めいた姿が、そこにはあった――というか、僕だった。

もう情けない限りだけど、ブルつちまつたんだ。リモコンだけならまだしも、火憐にまで殺気を向けられると、マジで怖い。今朝の死地がテーマパークか何かのように思える程に。

なので、この場から去って良いというのなら文句も何も無い。満足顔の月火と火憐をその場に残し、自室に戻ったのであった。

……月火つつーか、ムーンファイヤーを。

結局、ファイヤースターズは解散しても、今まで通りの活動を続けるつもりのようなだった。僕としては、傍迷惑過ぎる話なのだが。

〔016〕

自室に戻ったからといって、特に何もすることはなく。かといって晩御飯を食べる程の食欲はなく、僕は徴収したキャンピングセットを部屋に置いてから、取り敢えず風呂に向かった。

尚、幾度となく注釈を入れているが、念の為にもう一度。この風呂は別にアニメ版の無駄にゴージャスな風呂という訳ではなく、どこにでもある一般家庭に備え付けられた一般的な風呂である。

体を洗い、そんな一般的な風呂の湯船に浸かった瞬間、水面から、ぬう、と、金髪の少女が現れた。

忍野忍である。

こちらにも注釈しておくが、別にアニメ版のように花びらが舞ったり



していない。特にエフェクトも何もなく、地味に、最初から浸かっていたかのように、普通に水面から顔を出しただけだ。

「……どうしたよ、忍」

「かかつ」

忍は笑った。

「どうしたもこうしたもあるまい——分かっているじやろう、お前様よ」

「ドーナツの礼か？」

「おお、そうじゃそうじゃ。ドーナツをたらふく食べて、僕は満足じゃ。ありがとうよお前様、なんて言うと思うたかこの阿呆が。誰が礼など言うか、死んでも礼など言わんわ」

ボケに乗ってくれた忍。こっちからありがとう。

でも死んでも礼は言わないってどうかと思うが……死人に口無しってか？ まあでも確かに、こいつが僕に礼を言ったことなんて、あの死に掛けの時以外ないような。

「ああ、そうだ。あのシーンがいよいよ映像化されたんだな。いやあ、長かった2012年だぜ」

「結局宣伝するのか」

「あくまでも出来るだけ控える、なんだから、嘘は吐いてねえよ」

「勝手じやのう」

「傷物語へI・鉄血篇、大ヒット上映中だぜ」

「暦物語も忘れずにな」

宣伝おしまい。

おふぎけが終わったところで、僕は忍と無言で向き合った。シリア  
スタイル。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「どうするつもりじゃ」

「……………」

どうするつもりとは、つまり、神崎ちゃんのことだろう。

「ハチクジにはああ言っておったが、どうせ、うぬの中ではもう決まっておるのじゃろう?」

「……どうしてそう思う?」

「質問を質問で返すか。しかもそんな自明なことを」

「自明とまで言うか」

「今までのうぬを見てれば分かるわ。どうせ、行くつもりじゃろう?」

うぬ

「……全部お見通しって訳か」

「儂を誰じゃと思っておる? うぬの生涯のパートナーじゃぞ、それくらい分からずしてどうする」

「……だよな」

忍は、束ね忘れた所為で湯船にワカメのように浮いている髪を弄りながら、弄ぶように、言う。

「しかしどうするつもりじゃ、と儂は聞いておる。うぬ、対策とかはしてあるのか?」

「対策つつつても……織崎ちゃんが言うところのチャンスってやつの内容が分からないのだから、対策のしようがないぜ」

「たわけ。もう大体予想がつくじゃろうが。あやつは儂らを殺そうとしておるのじゃぞ? そんなもん、あの刀娘とうぬを戦わせるに決まっておるじゃろうが」

あつさりという忍。

まあ……僕自身、恐らくそんな内容なんだろうな、という思いはあつたけれど、あまりそれを認めたいとは思わなかった。同じ戦うというのなら、織崎ちゃんと戦った方がまだマシだ。或いは、レイニー・デヴィル100連戦とか——いや、やっぱり後者は嫌だ。10連戦さえもしたくねえ。

微刀『釵』と戦うなんて——日和ちゃんなんて、戦いたくない。

「しかしそうは言っておれんぞ、お前様。あやつは金髪娘……蜘蛛娘……シキザキの武器なのじゃから、いずれは戦わねばならん運命じゃ」

「……運命」

織崎ちゃんの呼び名が決まっていなことに心中でツツコみつつ、僕は忍の台詞を復唱した。

新兵器——最終兵器ならぬ新兵器と、織崎ちゃんは言っていた。

完成形変体刀が一本、微刀『釵』——。

「じゃから、その辺は割り切れよ。迷うな。無駄に情けをかけるな。あやつの幸せのためだとかなんだと言っておったが、それこそ、うぬが負けてしまえば、あやつは確実に幸せになれんぞ」

「……分かつてるよ」

さつきはなんであんなことを考えていたのか、自分でも分からないが——日和ちゃんは織崎ちゃんの所から、そもそも逃げてきたのだ。逃げてきたというのはつまり、一緒に居たくない、ということに他ならない。なら、織崎ちゃんの支配下に置かれている状況が、果たして日和ちゃんにとって幸せなのだろうか？

なんて、そんなの、分かりきったことの筈なのに——そんなの、ノーに決まっている筈なのに。どうしてさつき、この結論を出せなかったのだろうか？

「でも、それはそれで対策のしようがないぜ。僕は日和ちゃんの戦法を何一つ知らない。対策と言っても、精々吸血鬼度をあげることしか……ねえよな……」

言いながら、僕は考える。

吸血鬼度を上げるのは、そもそも絶対条件として、それは対策にさえなっていない。

対策ということはつまり、日和ちゃん——即ち、日和号、微刀『釵』について、把握すること。つまり、知ることが一番の対策となる筈だ。

あれは、淡海静が作った怪異——伝承や伝説なんて関係なく怪異を作ることの出来る存在が作った怪異。しかし、日和ちゃんを含む完成形変体刀は、間違いなく、何らかの伝承や伝説、物語といった雛形がある筈だ。

織崎ちゃんの先祖が作ったという、完成形変体刀——過去に作られていたということを知っているということは、知ること

の出来る文献が存在するということの証明に他ならない。

だが、それが何だというのだ。文献があるからと言つても、それがどんな物なのか、僕は知らない。寡聞にして聞いたことがなかったし、そこまで有名なものではないということは明白である。

先祖代々受け継がれている禁断の書、とかならば、知れる訳がないのだ。別に僕は何でも知ってる訳じゃあ——ん？

何でも知っている。

何でも知っている。

……ああ、そうだ。

「……なあ、忍」

「なんじや、何か思いついたのか？」

「ああ。あのさ——」

僕は、対策について——日和号について知る方法を一つ、忍に提案した。それを聞いた忍は不快そうではあったけれど、しかし、初めからそれを予測していたように、賛同してくれた。

忍は、この案を僕に思い浮かべさせたかったのだろう。自分から言うのは腹立たしいから、僕自身に考えさせたかったのだ——そしてそれは、なんだかんだで、忍が”彼女”のことを、認めているということの証明でもあった。態々宣伝に乗ってくれたのも、”彼女”に思考がいきやすくなるためだったのかもしれない——いやそれはないか。

とにかく、風呂から上がった僕は、そのまま真っ直ぐ部屋に戻った。時刻は午後8時。今ならギリギリ寝ているかなと思いつつ、僕は”彼女”に電話を掛けた。

「017」

「——もしもし、阿良々木君？」

「よう、羽川……起きてたのか」

「起きてたっていうか、今起きたとこだね。目覚ましが鳴って、目覚ましを消したら、丁度電話が鳴ったところ」

「その割には随分シャキっとしてるな」

「寝起きのスイッチがはつきりしてるタイプみたいだからね、私。あ、

もしかして、寝惚けた私を期待したりしたの？」

「否定はしない」

「もう、阿良々木君ってば」

「しようがねえだろ。ひたぎから羽川の寝惚けた姿について聞いたことはあるけれど、実際に聞きたいじゃないか」

「なんで聞きたいのよそんなの……」

「寝惚けて”な”が”にや”になつてる声を聞きたいと思うのは当然のことじゃないのか？」

「どういう寝惚け方なのよそれ……というかそれただのブラック羽川じゃない」

「もう一度あの台詞を聞きたい。斜め77度の並びで泣く泣く嘸くナハン7台難なく並べて長眺め、のブラック羽川版」

「言いません！」

「冷たいなあ。外国に行つちまって変わつちまったな、羽川」

「今までもこれからも私はそんなこと言いません……阿良々木君の思い通りにはなりません」

「マジかよ」

「大真面目に」

「はあ……」

「溜息を吐きたいのは私の方だよ……というか阿良々木君。私に何か用があつて、朝早くからモーニングコールをしてくれたんでしよう？」

「鋭いな」

「阿良々木君の事くらい分かるよ。どうしたの？」

「……羽川。詳しい事情は、非常に長くなるので詳しく話せないのが心苦しいけれど、そこを了解してほしい」

「了解しました。阿良々木君、急いでるんだったら、そんな注釈なくもいいよ。私もあんまり余裕ないし、今の私に出来る範囲なら、なんでも言つてね」

「なんでも!?!」

「切るよ」

「すみません、今土下座してます!!」

「分かってるよ……で、本当にどうしたの？ 私に電話を掛けてくるということとは、結構退つ引きならない事情なんだよね？ それこそ、命を狙われているから助けてくれ、みたいなかんじの」

「お前、実はずつと僕を天から見守ってるんじゃないかねえのか？」

「私を死んだように言わないで。っていうか、え？ 阿良々木君もなの？」

「当てずっぽうかよ。ん？ ”も” ”も” ってなんだよ」

「んー……となると……うん、あんまり他人事じゃなさそうだね」

「ど、どういうことだよ。え？ お前もなんか事件に巻き込まれてんの？」

「まあ、ね。その話はまた今度。今はお互い余裕ないみたいだし、用件だけを済ませようか」

「いやいやいやいや、僕の話とかマジどうでもいいし！ え!?! 羽川、

お前何やってんの!?!」

「もう、私の話より阿良々木君の話！ 口振りから察するに、阿良々木君の方が切羽詰まってるんでしょう？ 早く言いなさい！」

「は、はい！ ……えっと、じゃあさ、羽川」

「何？」

「”微刀『釵』” って知ってるか？ なんか、江戸時代辺りで作られた、完成形変体刀つてやつの一つらしいんだが」

「うん、知ってるよ」

「知ってるのかよ……」

「微刀『釵』——別名、日和号。だよね？」

「お、おう」

「それがどうかしたの？」

「さらっと言うなあ……」

「さらっでもないよ。ちよつと忘れかけてた事だから、思い出すのに時間掛かっちゃったし」

「いや、2秒くらいで返答したよな。お前」

「私の中では結構時間掛かった方だよ」

「まあそうだけどさ……」

「それで？ 日和号がどうかしたの？」

「ああ。その、微刀『釵』ってのは、どういう刀なんだ？ どういう刀っていうのかは、つまり、ええと……」

「確 か、 四季崎記紀という空想上の刀鍛冶が作った、十二本の完成形変体刀の内の一本だったと思う」

「じゅ、十二本？」

「うん。十二本」

「十二本……じゃあ後九本も隠してんのか」

「後九本？」

「いや、こっちの話だ。続けてくれ」

「うん。阿良々木君の言っていた、微刀『釵』——これは、『人間らしさ』に主眼が置かれた刀で、刀でありながら人の形をしているっていう刀なの」

「よしちよつとタンマ」

「どうしたの？」

「聞きたい事は山ほどあるんだが、ちよつと待て。人の形をした刀？ 分からん分からん、さっぱり分からん。それは刀じゃねえだろ、もう」

「まあ……この時代にはおよそ相応しくない、ロボットといえる刀だからね」

「ロボットなのか刀なのかどっちだよ……その辺について、知らないのか？」

「うーん……私が読んだ文献では、日本で作られたから日本刀、っていうことになってたけれど」

「なんだそりゃ」

「でも私が思うに、多分そのロボットを刀と称したのは、四季崎記紀は”人を傷つける武器・兵器”を”刀”と定義したんじゃないかな、と思うんだよ。ほら、江戸時代って、刀以外に主流な近接武器って、あんまりないでしょ」

「ああ、そういう……まあ確かにそう考えたら、江戸時代にロボットな

んて概念、なかつただろうしな」

「刀を使って人を襲うロボットなんて概念は、今の時代にもないけれどね」

「まあ納得した。続けてくれ」

「了解。さつきロボットと表現したけれど、その作りは正しくロボットそのもの。歯車の回転によって動く機械の体を持つ人形——江戸時代にこんな発想があったことに驚きだけれど、それはまた今度話しましょう」

「ああ、分かった」

「後は……うーん、やっぱりこう、阿良々木君の今置かれている状況が分からないと、何を伝えればいいのか分からないな。本当に簡潔でいいから、教えてくれないかな」

「簡潔でいいのか？ 僕の持ちうる言語力を総動員して、要約するぞ？」

「どうぞ」

「日和号が現代に現れた」

「分かった。じゃあさっきの話と総合するに、阿良々木君は今、日和号に命を狙われていて、日和号がどんな手を使ってくるのか、どんな攻撃手段を持っているのか、ということが知りたいんだね。おっけー」

「え？ 私、何か変わったことしたかな？」

「凄えな、お前……いやまあ細部は違うけど、概ねその通りだよ」

「うーん、でもそれだと、電話口で話すには内容が多くなり過ぎるね。阿良々木君、急いでるみたいだけど、何時までが逃げていられる限界？」

「えっと……0時まで、かな。ああいや、こっちの時間で」

「了解、後4時間だね。じゃあ、その時間になるまで、メールで日和号について、色々送る。それを見て、対策を練って」

「そこまでしてくれるのかよ」

「どこまでしかしてくれないと思ったの？ 私を頼ったからには、徹底的に協力されると覚悟しておいてよね。中途半端で終わらせる気



はないから、そのつもりで」

「……ああ、覚悟してるさ」

「よろしい。それじゃあ、頑張ってるね。阿良々木君」

「あ、羽川。最後に一つだけ」

「何？」

「お前は何でも知ってるな」

「……何でも知らないわよ、知ってることだけ」

「018」

そんなやり取りをした後、暫く僕の携帯が鳴り止むことはなかった。というか、暫くどころではなく、ずっとと言ってもおかしくはない程に。

電話し終えてから、ざっと2時間半程。

羽川からのメールは続いた——勿論その間隔は一定ではない。最初の1時間はほぼ1分毎にメールが来たのだが、それ以降はまちまちになっていった。何があつたのだろうと心配しつつ、僕はそのメールの内容を全て暗記した。

受験勉強における暗記とは訳が違う。なにせ羽川から送られた羽川のメールであり、それは即ち羽川の言葉であると言っても過言ではない。羽川を神の如く信奉する僕が、羽川の言葉を一言一句たりとも忘れる訳がないのだ。

神崎ちゃん——日和号についてのあれこれを全て頭に叩き込んだ僕は、23時前に家を出た。途中であの大小に遭うかも、と思つたのだが、別にそんなこともなく。斧乃木ちゃん辺りが絡んでくるかなとも思つたが、別にそんなこともなく。

残念ながら、今の僕に許された移動手段は徒歩しかない。所有していたマウンテンバイクとママチャリは去年両方とも失い、お気に入りニュービートルは絶賛差し押さえ中なのだ。辛い。

そんな訳で、気持ち急ぎ足で僕は思い出深い学習塾跡に向かって歩いていて——何度も足繁く通つた場所故に道に迷うなんてことはないが、しかし決して近くはない距離である、呑気に歩いては約束

の時間に間に合わない。それに、北白蛇神社にも寄らなければならぬ。

急がねば——と、歩き出してから数刻、左側からよく知っている声が聞こえてきた。

「こんばんは、阿良々木先輩。こんな夜遅くに何をしているんです?」

「……やあ、扇ちゃん」

僕は思わず足を止めようとした——しかし、

「いえいえ、足を止めて頂く必要はありませんよ。お急ぎのようですし、そのままお歩きください。私が動きますから」

と、扇ちゃんは僕の真左に並び、同じ歩調で同じ歩幅で歩き出した。

僕は言う。

「扇ちゃんこそ、こんな夜遅くに何やってるんだい? 夜一人で女の子が出歩くんなんて、感心しないな」

「はっはー、私の事を心配して下さるとは、何と心優しい先輩なのでしょう。感激のあまり涙が出そうになりますよ——ですが、それと同じくらい、ご自分の事も心配して頂きたいものです」

「……………」

「まあ、私の事は貴方の事とも言えますが」

扇ちゃんは歩調を完全に僕とシンクロさせて付いてくる。

「扇ちゃん、君は何を知っているんだい」

「私は何も知りませんよ。貴方が知っているんです、阿良々木先輩」

「……だろうな」

「です。そしてそれはつまり、貴方があの乳牛先輩に助けを求めた事も、勿論把握しているということですよ」

「乳牛先輩って……」

胸に関する憎しみが深い扇ちゃんだった。

「つーか羽川の胸からは母乳なんて出ねえよ——うーむ、あの双乳房から滴る母乳かあ。なんだか、そそられるものがある。」

「……飲んでみたいなああっ!?!」

羽川の胸に思いを馳せていると、すぐ真横から僕の鳩尾にストレートな拳がめり込んだ。思わず僕はその場にうずくまった。

「あつれれー？ どうしたのですか、阿良々木先輩。誰かに鳩尾か何か殴られちゃいましたかあ？ いけませんねえ、これは許し難い狼藉ですよ。尊敬すべき阿良々木先輩を殴るだなんて、私には中々しようとは思えない暴挙ですわねえ」

うずくまった僕を囲むようにぐるぐると歩き回り続けながら、扇ちゃんはそんなことをほざく。どの口が……。

「あー。これはバチが当たったのかもしれませんが、阿良々木先輩。あの巨乳に一瞬でも心奪われて邪な妄想をしてしまったことを咎めるため、誰かさんはそれが正しくないと伝える為に脇腹パンチをかましたのかもしれませんがねえ」

いけしやあしやあとこいつは……っーかそうだ、完全に忘れていた。こいつは、暴力を日常的に振るわないものの、振るうこと自体には何の抵抗もない奴だった——何せ、あの忌まわしき教室に閉じ込められた際、扉を開ける為に、僕の腹を殴って胃液を出させ扉を開ける、というか溶かさせようとした奴なのだから。

怖いなあ。火憐ちゃんより怖い。いや火憐ちゃんの方がやっぱり怖い。

「ふふ。ふふふ。さてさて阿良々木先輩。そのご様子だと暫く歩けなさそうですね、ここは一つ私の話を聞いては頂けないでしょうか」

扇ちゃんは僕の前方で止まると、同じくしやがみ込み、僕の顔を覗き込んだ。その瞳は、光さえ飲み込むような、圧倒的な暗闇のようである。

「阿良々木先輩。この件から手を引いてください」  
「断る」

扇ちゃんは、ぐりぐりと僕の目を覗きながら言った。僕はそれを否定した。即答である。

僕は扇ちゃんを睨み返した。扇ちゃんは、何が面白いのかにやにやとした笑いを納めない——そして、僕と扇ちゃんの対決が、ここにきて幕を開けてしまった。

以下、台詞オンリー。

「ふむふむ。どうやら貴方、何も学んでいないようですねえ。学習能

力はありますか？ それとも、この12ヶ月間に起こった出来事だけでは、貴方を更生させるには不十分でしたか？」

「君こそ何も学んでないようだな。学習能力はねえのか。いや、君が見てきたこの半年間だけでは、君を諦めさせるには不十分だったか？」

「私は決して諦めませんよ、貴方を更生させることを——あの巨乳は諦めてしまったようですけれど、私は絶対に諦めません。私が生まれしてから死ぬまで一時たりとも、諦めることはないでしょう」

「そこまでして、僕に日和ちゃんを諦めさせたいか」

「日和ちゃん？ 誰ですかねそれ——」

「惚けるなよ、扇ちゃん。知ってるんだろう？ 僕が日和ちゃんを知っているんだからな——時間稼ぎしようとしても無駄だぜ」

「おやおや、随分な物言いですねえ。木刀を持っていた頃はもう少し冷静だったように思えるのですが」

「木刀？」

「木刀は木刀です。八九寺ちゃんが持つていったあれですよ。あれを持つている間、少し心が安らいでいるように感じませんでしたか？」

「……そうだったか」

「心が安らぐというか、悟りというか——まあ、その辺りはまだ阿良々木先輩も理解していないようなので、私も知りませんが」

「何が言いたいんだよ」

「だから言っているでしょう？ 貴方を更生させたいんですよ。だから、この件から手を引けと言っているんです」

「だから言ってるだろ。断るって」

「何故ですか。何故そこまで頑なに、敵の罠にみすみす引っかかりに行くのです。理解出来ませんねえ、愚か者の思考回路ってやつは」

「君は僕の対極なんだから、理解出来なくて当然だろ。僕だって君の考えを理解出来ねえよ。どうしてそんな簡単に見捨てるなんて言えるのか、訳が分からない」

「いやいや、貴方だって心の奥底では分かっているのでしょうか？ 自分の行為が無駄であるということ——日和ちゃんの為だと仰って

おりますが、しかしどうでしょう。果たしてそれは本当に幸せなのでしょうか？ 木刀を持ち、一時的に悟りを開いた貴方は、向こう側にいた方があの儿女は幸せだと、そう結論付けかけた筈ですが」

「いや、あれは僕の本当の考えじゃあ」

「悟りというものは、いつだって正しいんですよ。何故ならば、そこには一切混じりけがないからです。雑念が一切ないということは、公平かつ公正であるということ——圧倒的な正しさというものを、貴方は幾度となく見てきた筈ですし、ピンと来るのではありませんか？」

「……まあ、分からなくはないよ」

「でしたら」

「だけれども、扇ちゃん。僕は正しきなんて求めてないんだぜ」

「おやおや？」

「そう、君の知る通り、僕の知る通り、僕は正しさに憧れている。圧倒的な正義に憧れている。だけど、それと同時に、僕は正しさが苦手でもあるんだぜ」

「……それは、羽川先輩のことでしょうか。或いは、あの学級会でしようか。或いは——」

「或いは、その両方——だ」

「愚かですねえ。昔のことを随分と引つ張るじゃあないですか。まさか、今更あのこっぴどくさしい台詞を仰る訳はありませんよね」

「言う訳ねえよ。つーか、もう言えねえよ。今の僕には、友達が居るか  
らな」

「ですね」

「そして、日和ちゃんは友達だ」

「……………」

「友達を作ると人間強度が下がる——いや、割とこれは核心を突いてる言葉だと思うんだよ。だってさ、その友達を助けるために、僕は何  
度も死に掛けてるんだぜ」

「ですね。でしたら」

「でも、それは正しきの為なんかじゃあない。ヒーローに憧れはしたけれど、でも、正義になろうとは、あの日から一度たりとも思ったこ

とはない。全部、ただの自己満足だ」

「……では、貴方は何になるつもりなのですか」

「何にもならないさ——僕は僕だ」

「はっはー。それはつまり阿良々木先輩、貴方は神原遠江さんが仰るところの、ただの水であるということですよ。あちらの世界で聞きましたでしょう？ あの格言。なんでしたっけー？」

『薬になれなきや毒になれ。でなきやあんたはただの水だ』だっけ？

……ちゃんと覚えてないけど」

「ですす。それで合ってますよ」

「でもそれは、神原に言ったことだろう。あれは僕に対する言葉じゃない。僕は薬になる気も、毒になる気もないんだから」

「……ただの水でいいと」

「ただの水どころか、僕なんて泥水みたいなもんだろうよ。友達の為に何度も地面の土を舐めた僕の濁りっぷりを舐めるなよ」

「そんなものを自慢している時点で如何なものかと思うのですが」

「友達のために必死になることの、何が悪い」

「いえいえ、それは決して悪いことではありませんね。寧ろ、正しさよ  
りと言えるかもしれません」

「だろ？」

「ですねえ。ま、それがお節介焼きという人種の思考回路ですが」

「お節介焼き？ それは君のことだろう、扇ちゃん」

「……はい？」

「君の行動こそ、今の僕にとっては余計なお節介以外の何物でもねえよ。どうやら僕と同じ思考回路をちゃんと持っているようで、嬉しいぜ。扇ちゃん」

「……お節介と言いますか……私を」

「……………」

「……………」

「……………」

「……はいはい。分かりました分かりました。そんなに睨まないでください。怖いですねえ、何か良いことでもありましたか？」

「……扇ちゃん」

「仕方ありませんねえ。まあ、そこまでムキになるような案件ではありませんし、遅かれ早かれ、でしょう——貴方の意見も覆りそうにありませんからね……良いでしょう、ではどうぞ」

台詞オンリー、終わり。

長い舌戦の後、扇ちゃんは立ち上がり、両手を挙げながら元の立ち位置に戻った。それは負けを意味しているのだろうか……なんだろう、温情をかけられたような気がしてならない。

僕はゆつくりと立ち上がる。

「……折れてくれてありがとう、扇ちゃん」

「お礼の言葉なんて私は求めていませんよ。ですがどうしてもお礼とあるのであれば、回らないお寿司屋さんに連れて行ってくださいな」  
「ごめん、それは無理」

まだ寿司屋ネタを引つ張るか……まあ、回る寿司屋にでもいい加減連れて行ってあげたいのはやまやまのだけれど、生憎今僕の財布の中は、空っぽだ。

「でも、いつか連れて行ってやるよ。ある程度落ち着いたら、ちゃんと連れて行くよ」

「そうですか。では、そのいつかを信じて、私から一つだけ、お節介かもしれません」  
「助言？」

扇ちゃんが助言なんて珍しい——貝木以上に、僕に助言しなさそうな子なのに。

つか態々お節介かもしれないとか注釈を加えてくる辺り、実は結構ダメージを与えたんじゃないか？ もしそうだとすれば、すれば……別に何も思わないな。自分で自分を攻撃したようなものだからか？

「あの木刀についてです」

「ああ……悟りがどうかの木刀か。そう言えば、あれ、何故か『心渡』で斬れなかったんだ。あのアップグレードって一回きりのものなのか？」

「いえ。あれはずっと継続されますよ。木刀が斬れなかったのは、別の理由でしょう」

「別の理由……」

「まあそれはまだ推理段階なので、私はまだ触れませんけれど——ですが、もしもその理由が分かり、斬ることが出来るようになったとしても、あの木刀は壊さない方が良いでしょう」

「え？」

木刀を壊さない方がいい——と、言われても。

しかしあれは、完成形変体刀とやらの一つ——の筈だ。だったらそんな訳の分からないもの、早く壊した方が、よっぽど良いのではないか？

「これも推理段階ですが——しかし、あれは取り敢えず、触れずに安置しておくに越したことはないでしょう。北白蛇神社という場所は、あの意味ベストな安置場所です」

「……ふうん」

扇ちゃんがそう言うのなら、そうなのだろう。いや、今までのように何も考えずに頷いている訳ではなく、この子は恩を重ねさせるタイプだから、嘘ではないのだろうと思った。そういう理由からだ。

「じゃあ、その助言は有難く頂いておくよ」

「ありがとうございます。ところで、お時間は大丈夫ですか？」

「時間……うわ、やべえ!!」

扇ちゃんに促され、時計を見た——すると時計の長針は、6の数字を指していた。

23時30分——嘘だろ、こんな間に合うわけねえじゃねえか！

つか、お時間は大丈夫ですか？ じゃねえよ！ 君が突っ掛かって来たからお時間が心配になってきたんだろうが！ 文句の一つも言いたい気分だが、その時間さえ、最早惜しい。

「じゃ、じゃあ扇ちゃん！ そういう訳で——」

「はいはい。ではでは、ばいばいですよ」

「あ、ああ！ じゃあ！」

僕は挨拶もそこそこに、走り出した。今から走っても、果たして間



に合うだろうか？ 北白蛇神社に寄った後、学習塾跡——キツイ！

これはもう、神社に寄るのをやめようか——そうすれば、ギリギリ学習塾跡に着けるか？

「ああーつと、これは独り言ですがー！」

「!?」

僕は一瞬振り向きかけた、が、そのまま走り続けた。僕らしからぬ行動ではあるが、しかしそれ以上に扇ちゃんらしからぬ行動でもあったろう。彼女らしからぬ大声というのもそうだが、その後には続けられた言葉が——。

「困りましたねえ、北白蛇神社の階段前に駐めた私の車にキーを挿したままでしたー！ これではどこかの愚か者に乗り回されてしまうかもしれないねえ！ ああ、残念無念です!!」

「……………」

——というものであった。それを聞いた僕は北白蛇神社に直行することにした。扇ちゃんにとって残念かどうかは知らないが、僕は、愚か者なのだった。

随分と棒読み加減な台詞ではあったけれど、しかし最後の残念無念は、案外本心だったのかもしれない。そしてそう思ってしまうことによつて、しっかりと罪悪感という名のダメージを受けてしまう、僕なのであった。

「019」

そんな感じで、扇ちゃんとの対決に勝利した(?)僕は北白蛇神社に全力疾走し、見事八九寺との合流を果たしたのだった。

「遅かったですね!! 待ちくたびれましたよ!!」

と、半ばキレ気味で言われたが、僕はそれを意に介さずに八九寺を攫うかの如き手際で近くに停めてあった黒いフォルクスワーゲン・ザ・ビートルに乗せ(その過程で八九寺に何度も噛まれた。なんでだろう)、僕自身も運転席に乗り、エンジンをかけた。心の中で扇ちゃんに感謝しつつ、アクセルを踏んだ。

速度が50kmを超えた。法定速度を外れているが、今は緊急時と

いうことでどうか目を瞑ってほしい——いやまあ、そんな言い訳が通じる程、甘い世の中ではないのだけれど。

そんな捨て身の走りのお陰で、本当にギリギリの時間に、即ち0時0分ぴったりに、最早不可能とさえ思われていたそれを、成し遂げたのであった。

目的地、到着。

「……本当に来たんですのね。阿良々木暦、そして、八九寺真宵」

目的地、即ち学習塾跡に到着した僕たちがまず目にしたのは、広大な瓦礫の山だった。いや、それは池とでも呼ぶべき光景だったかもしれない。焼け野原となっていたその場所一帯を埋め尽くすほどの瓦礫の山——異様すぎる。

そして、そんな光景に思わず目を奪われた僕たちの不意を突くように歓迎の言葉を投げ掛けてきたのは、言うまでもない、僕たちを殺そうとしている”敵”——織崎記であった。いやまあ、歓迎とは言ったものの、全く迎合されてはいないのだけれど。

「お前が言っただら、織崎ちゃん。この時間までに、ここにきて」

「ええ。言いましたわね。言いましたけれど、まさか本当にこのこやって来るとは、私夢にも思いませんでしたわ。ここで待機していたのも、殆ど駄目元、念の為でしたし——相当な愚か者ですわね、貴方は」

「お前に言われても、全く傷つかないな」

僕は言う。実際、今まで何度愚か者呼ばわりされたのか、もう当の僕でさえ覚えていないし数えていない。覚えきれないほど、数え切れないほど言われたのは確かだろうけれど。

「ふん。意気がりますわね——というか、貴方以上に驚きなのが、八九寺真宵、貴女の方なのですけれど。どうして貴女は付いてきましたの？ 貴女も愚か者ですの？」

「いいえ、私は阿良々木さんとは違って愚かではありませんよ。阿良々木さんとは違って、阿良々木さんとは違って！」

強調すんじゃないよ。どれだけ僕とは違うアピールをしたいんだ。

僕と一緒に、嫌か？

「何せ、〈物語〉シリーズの七大賢者とまで言われている私ですからね。私と愚かは対極にある言葉ですよ」

「七大賢者あ？ 後六人は誰ですの」

「おやおややれやれ、どうやら、まよいマイマイアニメ版のOPをご存知ないと見えますね」

「……ちっ」

お前一人で七大賢者かよ！

役目として、一応ボケには心の中でツツコんでおく僕。織崎ちゃんめ、煽るだけ煽って放置かよ。会話の基本がなってねえな。

織崎ちゃんは舌打ちした後（っーか舌打ちって何だよ。ヘイト貯めるなあ）、パンと手を合わせた。

「……」馳走様でした？

「静、時間ですわ」

こいつ、また八九寺のボケをスルーしやがった。とことんまで好感度を上げるつもりはないらしいな。

ん？ っーか、静？ お、淡海静？ あいつも居るの？

「んっふっふっふっふ」

「うわっ、出た」

思わず声を上げてしまった——いや、別にこの笑い声が気持ち悪くて声を上げた訳ではなく、あくまでもこいつの事が苦手なので、思わず声が出ただけのことである。

淡海静——濡羽色のロングヘアは、前髪も後ろ髪も先端で切り揃えられており、薄桃色の着物を着た女性。言うまでもなく怪異であり、しかも、「怪異を作る」なんていう能力を持っている。そして、日和ちゃんの創造主でもあるのだ。

……それだけならまだ良いのだが、何故かは全く分からないが、どうやら僕はこいつに気に入られているらしい。心当たりが全くないのに殆ど初対面と言ってもいいような奴に気に入られるのは結構なストレスであり、せめて理由だけでも教えてくれれば、まだ多少はマシになりそうでならなさそうな気がする。

「待たせたね、ご主人。日和号のセッティングは完了だ——今から決闘を始めるのかい？」

「ええ、その通りですわ」

「決闘？」

「ええ、そうですわよ。阿良々木暦」

織崎ちゃんは、さも当然のように言う——まあある程度予想していたとはいえ、本当にそうだとはいえ……もう少しひねりのあるプランはなかったのだろうか。

「貴方には、このガラクタの土俵の上で、日和号と戦って頂きますわ」「こ、この上ですか」

「そうですわ。何か問題でも？」

「いや問題一つ一か、問題しかねえけど……」

僕は瓦礫——ガラクタの山を改めて見た。

彼方此方に起伏があり、不規則に段差がある——戦いにくそうだ。こういった起伏に富んだ場所だと、大抵身を隠すようなものがあるものだが、この山にはそれがなく、平地で戦う方がまだマシと言ってもいいフィールドだった。足場も定かではなさそうだし、不安定だ。こんな所で戦えというのか。

「……僕はともかく、日和ちゃんはこんな所で戦えるのか？　こんなもん、双方にとって不利なだけだろうが」

「いいえ。このガラクタの山こそが、日和号のメインフィールドですわ。」がらくた王女”の異名を持つ”微刀『釵』”にとっては、これ以上ない好条件なフィールド——不利なのは貴方だけでしてよ、阿良々木暦」

「卑怯な……」

「こちらは情けをかけてやっている方なのですわよ？　寧ろ感謝して頂きたいものですわね、阿良々木暦」

「土下座してやろうか」

「土下座は結構ですわ」

「ほん、と織崎ちゃんは咳払いする。

「で、ここに来たということは、決闘をするということですよね」

「当たり前ですよ。分かりきったことを言わないで頂けますか、この金髪！」

「金髪を馬鹿にするのをやめて頂けますかしら!? 我が先祖より代々受け継がれる金髪を馬鹿にするのをやめて頂けますかしら!」

「阿良々木さん! こいつやつと反応してくれました!」

「よし、八九寺。いい子だからちよつと黙ってろ」

「ぐぎぎぎ……」

勝ち誇ったような顔の八九寺を睨む織崎ちゃん。先祖を敬うっていう面から見れば、良い子なんだろうけどなあ。

「……じゃあ、受けるってことでいいですわね、阿良々木暦」

「ああ、受けて立とう」

僕は即答した。当たり前である。

扇ちゃんにあそこまで豪語しておいて、今更腰が引けるなんてこと、あつてはならない。そんなことをしたが最後、扇ちゃんに死ぬまで罵られるのだろう——心の底から蔑むような満面の笑みで。

「決闘のルールは至極簡単ですわ。一つ、対戦者はバトルフィールドから出た場所に足を着けてはならない。二つ、相手を戦闘続行不可能にした時点で勝利となる。三つ、敗者は勝者に何をされようと文句は言えない。四つ、敗者は勝者に危害を加えてはならない。以上、この4つだけですわ」

「……三番目が随分と物騒だな」

「そりゃあ、こちらに益のあるルールを設定しない訳がないですわ。負けて、ここから無事に帰れると思っていましたの?」

当たり前のように言う織崎ちゃん。

まあ、あくまでもこの戦いの仕掛け人は織崎ちゃんであり、ルールの設定だって織崎ちゃんの自由にしても文句は言えない。それどころか、この圧倒的優位な立場でたったこれだけのルールに止めておいてくれたのだから、寧ろ親切設計とさえ言えるだろう。

「異論はあり? 認めませんけれども」

「いや、ねえよ」

「そう。では、早速——」

「ちよつと待ってくれ」

「はあ?」

早速決闘を開始させようとする織崎ちゃんに、僕は待ったをかける。

「何ですか? 何かありますの?」

「ああ。……ちよつと、時間をくれないか。殆ど何も用意せずに来ちゃったんだよ」

決闘という内容自体は忍の予想の通りであったが、しかし大事なことをまだ行っていない。

日和ちゃん——日和号と戦う為に必要な、最低条件を、僕はまだ満たしていないのだ。というのも、羽川のメールをギリギリまで読んでいたお陰で、家にいる間はそれをしてい暇がなかったのである。

忍への血液供給。

僕の吸血鬼化。

と言っても、完全な吸血鬼化ではなく、吸血鬼度を上昇させるというだけなのだが——少し前までは固く禁じられていたこの行為だが、今回ばかりはやむを得ない。今回ばかりは見逃してもらおうしかない。羽川のアドバイスを完璧に生かす為にも——僕は、吸血鬼度を上げなければならぬのだ。

「……まあいいですわ」

「ああ、どうも——」

「ただし——」

織崎ちゃんは指を鳴らした。すると、背後に控えていた淡海が手を合わせた。何をする気だ? 僕は思わず身構える——いや、昨日の騒動がまだ僕の記憶にトラウマとして克明に残っているのだ。こいつの一挙一動で、何が起こるか分からない。

そしてやつぱり何か起きた。淡海が再び手を開くと、手と手の間からことりと丸い岩のようなものが零れ落ちた。落下したそれには傷一つ付いておらず、その場でころころと転がった。

それだけだった。

「……な、何だよあれ」

「ペナルティですわ——この怪異が起動するまで、好きにして下さって結構。用意でも準備でもお好きになさいまし」

「やっぱ怪異か……起動？ どうやって分かるんだよ」

「その時になれば分かりますわ。何せ目に見えて分かる怪異ですもの——この怪異が起動した時点で、ボーナスタイムは終了。決闘を始めさせて頂きますわ」

織崎ちゃんは言う。相変わらず一切説明しない奴である。

僕は淡海を見た。相変わらず気味悪く笑っているが、その目には油断も隙も感じられない。あの怪異、らしい石を、起動するまで守るつもりなのだろうか。

あれがどんな怪異なのかは分からないが、しかしペナルティであるということとは、この先厄介な障害になりうる怪異だということだ。僕も、油断してはならない。

再び僕は織崎ちゃんを見た。織崎ちゃんは胸元から取り出した懐中時計に目を落とし、挑戦的に言った。

「起動するのは、恐らく0時30前後——それまで、一時の生をご堪能なさいな。阿良々木暦」

## 第參話 ひよりブレード 其ノ伍

〔020〕

決闘が始まるまでの一時——つまりは、あの石型怪異が起動するまでの時間、僕が何をしていたかといえば、忍への血液供給である。

正弦の一件以来、長らく行っていないなかった血液供給だが、というか、長らくという程長い間ではないし、行っていないなかったのではなく行えなかった、つまりは禁止されていた行為だったのだが、一度地獄に落ちることによつて”慣れ”をリセットすることにより、再びある程度使用可能となったのだ。

忍への血液供給——それは、僕の吸血鬼度を上げる行為である。

吸血鬼度を上げるということは、僕は吸血鬼に近付くということだ——吸血鬼のような人間から、吸血鬼に限りなく近い人間に、成るということだ。

いやまあ、今は禁じられてはいないものの、今までのような過剰な使用は控えなければならぬ——吸血鬼に近付くということとは、僕という存在さえも吸血鬼に近付くということ、何度も繰り返せば僕は純正の吸血鬼になってしまう。それは避けたい。もう次はないだろうということとは、幾ら僕が愚か者とはいえ、分かる。

もしも次、同じ解決方法をとられたとしても、その時は恐らく、僕はそのまま死んでしまうのだろう。『怪異生かし』たる小太刀『夢渡』を使われることなく、阿鼻地獄で燃え盛り続ける羽目になるのだろう。

とはいえ、だからといってこのまま一切パワーアップせずに決闘に挑むのは、それはほぼ殺してくれと言っているようなものなので、今回ばかりは特例だ。特例だ。特例と言ったら特例だ畜生。

みたいなことを頭の片隅で考えつつ、僕は忍に首筋を噛まさせているのであった。

「……………ふふはいひゃほう」

僕の血を吸いながら、忍は言う。

「ふふはいひゃほう？ どうした、僕の血を吸えてそんなに嬉しい



のか」

「……………」

忍は僕の首筋から牙を離した。軽い貧血が僕を襲う——懐かしい感覚だ。忍への血液供給のあとは、少しだけこんな症状が現れるのだ。久々のことすぎてすっかり忘れていた。

「ひゃっほうではないわ、たわけ。儂を蚊か何かと一緒にするな。そんなことで喜ぶ程安い女ではないぞ。食にはうるさいんじや、儂は」  
「吸血鬼にとって血が一番のご馳走なんじやねえのか？　これで喜ばなかつたら何で喜ぶんだよ」

「ミスタードーナツ一生分!!」

「ああ、そうだ。もう暫くはミスド禁止だからなお前」

「何じやとお!？」

シヨックが大き過ぎたのか、大袈裟に膝から崩れ落ちた忍。ドーナツへの愛が深すぎる。

まあ僕だって、忍を喜ばせてやりたいのは偽りなき思いではあるのだけれど、何分金銭面がな……昨日は本当酷かったからな……。

「かかつ、まあ良いわ。あそこまで食わせてくれたのは、割と本心から感謝しとるからの。ここは譲歩してやる」

「上から目線だな……」

「かかつ、面をあげい」

「いや下げてねえよ」

というか、お前と話す為にはどうやっても顔を下に向けるかしゃがむかの二択しかないのだけれど。

「それなら良いんじやがのう」

「?　どういう意味だよ」

忍は不愉快そうに言った——ああ、さっきのはひゃっほうじゃなくてじゃのうで、ふふはいは不愉快だったのか。

不愉快じゃのう。

「うぬよ、携帯電話を見ながら喋るのは少々モラルに欠けるのではないか？　儂と喋るときは儂の目を見て話せよ」

「ああ、その事か」

僕は忍の方を向いた。

「いやほら、羽川からのメールを読んでたんだ。ちゃんと頭に叩き込んどかねーと、とても勝てそうにないからな」

携帯電話のメールボックスには羽川からのメールが大量に収められている。いや、大量という言い方でさえ不十分な程だ——何せ、このメールボックスの5分の4が、先程羽川から送られてきたメール群なのだから。

阿良々木家を出る直前にメールは終わったけれど、そしてそれを目見て完璧に記憶した僕だけれど、完璧とは言っても完全ではなく、細部が違うところも多々ある。なので、決戦が始まる寸前まで羽川の御言葉を心に刻み込んでおこうと足掻いている訳である。

しかし、確かにそれは人と話すにあたって不誠実な態度だったろう。反省しなければ。猛省しよう。

「いやいや、それ自体に僕は文句は言っておらんよ。そうではなく、僕と話すときはそういう態度を止めろと言っておるのじゃ」

「自己中にも程があるだろう！」

「僕だけを見て？」

「面倒臭え!!」

「面倒臭いとは言うがの、うぬ。これはツンデレ娘のキャラじゃぞ？」

彼女のことをそんな風に思っておったのか、うぬは「

「そういう事言うのが面倒臭えんだよ!!」

うーん。

やっぱり何か違うな。ひたぎのキャラに確かに似せてはいるのだけれど、どこか違和感があるような。

のじゃ口調が原因か？

「なあ忍、その喋り方、ちよつと変えてみるよ」

「嫌じゃ。これは六百年前からずっと続く僕のアイデンティティじゃぞ。今更変えられぬわ」

「ちよつとだけでいいからさ。何々なのじゃ、とかではなくて」

「絶対に嫌じゃ」

「……じゃあ笑い方を」

「言葉遣い以上に笑い方はマジで嫌じゃ。ハクが落ちる」

「……………」

意志が固い。つーか頑固というか。

そんなにキャラ設定を重視するか。もういつそこまできると何か特別な理由でもあるのではないかと思えてくるが……まあ、それは今気にすることでもないか。

話を振っておいてアレだが、今僕が考えるべきは忍の喋り方云々ではなく、日和ちゃんの対策である筈なのだ。お喋りに興じている暇はない。

……そういえば。

僕は携帯電話に目を落とそうとして、そこでふと思った。日和ちゃんはどこだ？

肝心の日和ちゃんが居ないではないか。改めて辺りを見回しても、見上げながら見下している忍、腕組みして石パキツの怪異を凝視している織崎ちゃん、相変わらずニヤニヤとした笑いを浮かべている淡海、そしてがらくたを漁っている八九寺——日和ちゃんが居ない。

時間が来たら、日和ちゃんが現れるのだろうか？

……いや、それも今は考えても仕方ない。僕は携帯電話に目を落とし、羽川からのアドバイスを網膜と脳裏に焼き付ける作業に戻った。

羽川からのメール——以下、羽川ペディアと表記する——に書かれていたのは、日和号が行ってくるであろう数々の攻撃のバリエーションが主な内容だった。そして、その攻撃に対する対処法もセットで記されている。ありがたい限りである。羽川様々。

ざっくりとまとめると、どうやら日和ちゃんパキツは刀を用いた攻撃を行ってくるらしい。まあ微“刀”なのだから、それは予想出来ていた。

しかしそのバリエーションが途方もなく……これ事前知識と事前準備がなパキツければ、絶対に勝てないタイプの奴じゃねーか。どう足掻いても斬り刻まれる。

八つ裂きになっちゃうぜ。

しかしその問題も、羽川のアドバイスの前では無意味であった——

しかしそこで生じてくる、というかこの決闘がセッティングされた段階で生じていた問題は、羽川の指示通りに僕は日和ちゃんの攻撃を避けられるのか、ということだ。

羽川からのアドバイスは、ほぼ全てが僕の動体視力をアテにしたものであった。つまり、僕の吸血鬼としての能力に頼ったものであるということパキツだ。

だからこそ、吸血鬼化することが本当に最低条件になった訳だが——しかし、パキツ見えたところで、それを見切れるかどうかが一番の問題であった。

つまり、体が思考に付いていくのか、ということだ。バトル展開になるのはこれが初めてではないし、9月終盤辺りからはほぼ毎日がバトル三昧だった訳だけれども、しかし何分、吸血鬼化するのは久し振りののだ。正月以来か——禁がパキツ解かれ、吸血鬼化が解禁されてから、初めての吸血鬼化である。

羽川ペディアを読むパキツ限りパキツ、今回の戦いは、千石の時程とはいかなくとも、神原戦レベルの激しさになりそうなのだ。ということはつまり、本来ならこんな不安要素だらけの状態で戦パキツうべき相手ではない、ということなのだ——さて、どうしたことか。……どうしたもこうしたも、羽川は僕を信じてくれているのだから、その期待に応えられるよう、パキパキ僕も全力を尽くす他ないのだが。

それに羽川の方も、何かヤバいことに巻き込まれているようだしな———そういうバリツえば忍野を連れて帰ってきた時、ボロボロというかズタボロだつバリツたけれど、あんなになる程の何を繰り返したのだろうか。どんな冒険を繰り返したのだろうか。

気になる。

今度羽川に会ったら、その辺も含めて、色々聞いてみバリツようと思つた——が、そもそもまず、羽川に会う為には、羽川がおかれています現在の状況がパキツどうにかならない限りはどうにもならパキツキツないのである。

マジで何やってるんだろう……海外に行くだけで、そんなに事件に

巻き込まれるとパキツは、日本ってバリツ平和なんだなあと思わされた阿良々木暦であパキツった。

……今僕がおパキツかれている状況は、まあ平和とはバリバリバリツ程遠いけれども。

「つーかさつきから何だよ！　うるせえよー！」

色々考えながら携帯電話の画面を見ていた僕だけでも、決して周囲の音が聞こえなくなるほど熱心に見ていた訳ではないのだ。いや、羽川の書いた文章を熱心に見ない訳がなく、あくまでこれは周囲をなんだかんだで一応警戒しておかなくてはならない状況だからこその特例であるということ、念の為に述べておきたい。

そんな僕の耳にさつきから入り込んでいる謎の音。まるで卵が割れるような、パキツ、パキパキツ、という音。地の文にまで侵食していることから分かるように、僕の思考を著しく邪魔しやがっているのだ。

考えている時に限って、こういう小さい音が気になりやすくなるのである。僕は音が聞こえる方を向いて、怒鳴った。

——そして、その怒鳴り声に返ってきたのは。

……これをどう表現すべきか、僕には分からない。この声を、果たして誰に考慮して描写すればいいのか、僕には定かではない。もしかしたら日本人だけではなく、外国の方も読んでいるかもしれないのだから。いやまあそんな可能性は限りなく低いだろうけれど——それでも。

僕には分からなかった。

それを、コケコッコーと表現するか、或いはクツクドゥドゥドゥドゥーと表現すべきか——兎に角、そんな声が返ってきた。

声の主は、さつきまで石が転がっていた場所に立っていた。その一羽の周囲には、まるで石灰のような破片が散乱していた。それが何を表しているのかは、もはや単純明快である。

——怪異が起動したのだ。

僕が石だと思っていたあの物体は、卵だった。そして卵の中から生まれたのは、鶏の姿をした怪異だった。

石の怪異ではなく——鶏の怪異。  
鶏。

キジ目キジ科の鳥で、その起源はインドや東南アジアに分布している野鶏に求められる。

代表的な家畜として世界中で飼育されており、食用にも、それ以外でも活躍する鳥である。読者の皆様も、一度はその肉、及び卵を食べたことがある筈だ。

鶏と言えば鳴き声であり、その鳴き声は、どういう訳か世界各地で表記が異なる。

日本では「コケコッコ」、アメリカでは「クックドゥードゥルドゥー」、中国では「??」、フランスでは「ココリコ」、イタリアでは「キツキリキー」、などと表現するらしい。捉え方の違いというべきか、文化の違いというべきか——所変わればものどころか、音まで変わるのである。

そんな（何がそんななんだ）鶏の怪異——一体どんな怪異なのだろうか。僕たちを邪魔するであろうことは、容易に想像できるが。

「……さて、ボーナスタイム終了、ですわね。阿良々木暦」

織崎ちゃんが僕を見て、にやりと嗤った。相変わらず余裕に満ちた笑みである。

「もう準備は整いました？ 整いましたわよねえ。十分すぎる時間ですもの——八九寺真宵！ フィールドワークを終了しなさいな！」

織崎ちゃんは、次に八九寺に向かって叫んだ。

そうだ、八九寺。八九寺の奴、あのガラクタの山で何をやってたのだろう？

「おや。もうですか。早いですね。ふふーん、了解です、了解解！

仕方ありませんから頼みを聞いてあげましょう！ 何せ私、神様ですし！」

「……神様がガラクタの上なんかで、何をやっているんですの」

「はい？ 私はまだ、測量していただけですよ。尊敬すべき伊能忠敬さん宜しく！」

伊能忠敬を尊敬する神様なんて聞いたこともない。というか、誰か

を尊敬する神なんて聞いたことねえよ。

まあ、現代の伊能忠敬を名乗ってた位だしな——事実、直江津の地図は完成したし。見せてもらったこともある。

「……仮に何か罨を仕掛けたのであれば、無駄ですわよ。日和号は蛞蝓の滑りごときでは滑らないし、溶けることもない——貴女が仕掛けられる程度の罨であれば、無効化は容易い」

「……はっはっは。罨なんて仕掛けていませんよ、ご安心を。織崎さん」

八九寺は、何故かやり切ったような顔で、ガラクタの山から降りてきた。

果たして八九寺が罨を仕掛けたか、仕掛けていないかは兎も角としても、八九寺はこんな時に無駄なことをするような奴……じゃあないと思う。思いたい。

「では、頑張つて下さいね。阿良々木さん」

八九寺はすれ違い様、僕にウインクした。その愛くるしすぎる仕草だけで思わず襲い掛かりそうになったけれど、そんなことをすればその報いが八九寺の菌型という形になって跳ね返ってきてしまう。大切な戦いなのだ、戦闘前に傷を負ってどうする。

ぐっ、と我慢。この僕が本能だけで動くと思うなよ。

このフラストレーションは、日和ちゃんに向けて発散させてもらおう——何せ見た目は最年少レベルのロリだしな。代わりにはなるだろう。

「お前様よ」

「ん？——うわっ!？」

僕は、忍が無造作に投げた“それ”を、突然のことに慌て、よろめきながらも必死にキャッチした。

危ない危ない、これがあいつらの手に渡るのは、全力で避けたいからな——業物であり、その字は『怪異殺し』。

死屍累生死郎の骨で作られた妖刀——『心渡』!

「使え。まあ、どうせ刃は立たんじやろうが——歯が立たんことはない筈じや。攻撃を弾く程度なら、造作もなからうよ」

「ああ、ありがとう。忍」

僕は『心渡』を、肩に担いだ——クールを気取ってみた訳だが、果たして絵になっっているだろうか？

「織崎ちゃん。これ位のハンデ、いいよな？」

「ええ、勿論構いませんことよ」

二つ返事でOKだった——それはつまり、日和ちゃんを斬ることが出来ないということの証明でもあり、それ故の自信であり、ほんの少しだけ僕は安堵した。

日和ちゃんを傷つける訳にはいかない——何せこの戦いの意義は、日和ちゃんに勝つのではないのだ。

彼女に笑顔を取り戻させることなのだから。

傷のついた笑顔なんて、見るに堪えねえぜ。

「それじゃあ、阿良々木暦。フィールドに入りなさい」

「……ああ」

僕は頷き、観戦する八九寺と忍に背を向け、ガラクタの山へと足を踏み出した——バトルフィールドへと。

足を踏み入れた。

やはり危惧した通り、足場の悪さが尋常ではなかった。どこにも平坦な場所がない——あつたとしても、それは踏めば割れてしまうか、あるいは傾いてしまう程度の、不安定極まりないものであつた。

ここで戦うのか……。

だが、案ずるより産むが易しとはよく言ったもので、思ったよりも戦い辛そうな場所ではなかった。これが裸足とかであれば話は大いに変わるが、僕は靴を履いている。基本的に足の裏を怪我することはないだろうし、まあ、倒れこみさえしなければ比較的安定して戦えそうな気がする。

「——では、これより、阿良々木暦と日和号の決闘を始めますわ」

織崎ちゃんの声が聞こえ、僕は振り向いた——すると、目を疑うような現象が、僕の目前で発生していた。発生というか、起動というべきなのかもしれないが。

飛んでいた。



鶏の怪異が、地から足を離し——空を悠々と飛翔していたのだ。鶏とは空を飛ばない鳥である。それは勿論知っている。

だが、空を飛んだ——幾ら怪異とはいえ、モデルからかけ離れた行動を取るものなのか？ いや、怪異だからこそなのか？ 分からん。

鶏は、僕の頭上を旋回するかのようにして飛翔する——それに気を取られている僕は、全くと言っていいほど緊張感が足りていなかった。

「いざ、尋常に——」

「っ!!」

織崎ちゃんが右手を挙げた——と同時に、僕が立っていたガラクタの地面が隆起した。僕は慌てて後ろに飛び退く暇もなく、ガラクタから滑り落ち、尻餅をついてしまった。

一体何が——とは、思わなかった。

何せ、今にも決闘が始まろうとしているのである。対戦相手が居なければ、話にならないのだ。

対戦相手は、足元に潜んでいたのだ。

僕は前を見た——ガラクタがずると崩れ落ち、滑り落ちる中から現れたのは、人間のような何かであった。

「……よう。日和ちゃん」

——神崎日和。

微刀『釵』——日和号。

その姿は、日和ちゃんとはかけ離れたものであった。背は高くなく、下駄を履き、長かった髪は釵で結われ、さらに刀が4対、頭の櫛から生えていた。そして何より、腕が四本、足が四本、それぞれ対となり装着されていた。

そして四本の腕には、それぞれ刀が握られていた。その内、下段の両手に握られている刀は同一の種類のようなだが、上段の両手に握られている刀は、その二振りとは違う形をしていた。

上段右手には、柄や鍔、そして刀身までもが真っ黒な刀を。

上段左手には、鍔のない、切刃造の直刀を。

どこまでも人間らしい刀——だが、その異質な姿はどうしようもな

く人間ではない。

どこまでいっても——怪異そのもの。

日和ちゃんは両目を開いた。それと同時に、織崎ちゃんの右手は降ろされた。

「——始めっ!!」

決闘の開始——そしてそれに間髪入れず、

「人間・認識」

日和ちゃん——日和号は、言った。

どこまでも冷酷で、ありえないほど冷徹で、どうしようもなく冷血な声で——機械的に。

日和号は、言った。

「即刻・斬殺」

「021」

——微刀『釵』。

別名『日和号』。人間形態の名は『釵日和』及び『神崎日和』。

織崎ちゃんの前祖らしい刀鍛冶・四季崎記紀が作りし千本の変体刀の中でも、際立って特徴的な十二本の刀——『完成形変体刀』が一本である。

身長は六尺八寸、体重は十七貫三斤。ただし、これらは下駄を含む大きさである。

『人間らしき』に主眼がおかれた刀で、その様相はおよそ刀と呼べるものではなく、機械と呼ぶべきものである。

嘗て日和号は、江戸の外れにある『壹級災害指定地域』、その名も『不要湖』を守護していた。四季崎記紀によって作られたのは戦国時代頃であり、数百年に渡って稼働してきた、からくり人形。その守護する姿から、『がらくた王女』の異名を、当時持っていたらしい。

がらくたの山を永遠に巡回し続ける、武器でありながら人である、恋する殺人人形ともいえる刀——侵入者を斬り刻む日和号の長い日々は、ある年終わりを告げた。

某年葉月。完成形変体刀十二本を蒐集すべく幕府より派遣された

女——江戸幕府直轄預奉所軍所総監督へえどばくふちよつかつあずかりたてまつるところいくさどころそうかんとく》(長えしよく分かんねえよ)、『奇策師とがめ』と、その懐刀である男——無刀の剣士(無刀の剣士ってなんだよ)、『鑢七花』によって、無力化、蒐集された。その後、師走。ここで”何か”があり、微刀『釵』は無力化どころか破壊されたという。その”何か”がどういうものだったのかは不明らしく、真相は歴史の闇に葬られている。

そして日和号という存在もまた、この世からその姿を消した——筈だった。

しかしそれから再び数百年の月日が経ち、現代。歴史を改竄せんとする四季崎記紀の子孫に仕える怪異、淡海静が、日和号を蘇らせた。蘇った日和号は自我を持ち、神崎日和と名乗り、織崎ちゃんの元から逃走するも、再び捕獲され、今こうして僕の前に立ちはだかつていたのであった。

これが、微刀『釵』である。

(参考：Hanekawapedia)

[022]

「っ——!!」

戦闘開始と同時に、僕はすぐに戦慄した——今日に至るまで幾つもの死線を潜り抜けてきた阿良々木暦だけでも、相変わらずビビリ癖は直らないようで、この程度のことなら何度か経験しているのに、まだ慣れていないようであった。

明確な殺意を持った攻撃なんて。

食らいなれている筈なのに。

日和号の第一撃は、上段右手の刀を使った攻撃である。刀を真っ直ぐ縦に振り下ろす——僕は立ち上がり、それを紙一重で回避した。

幾ら伝説の吸血鬼由来の再生能力がある程度発揮できるとは言え、積極的に死にたい訳ではないのだ。

怪異の王の眷属が自殺の王とか、何の冗談だよ、って話である。

日和号は、そんな僕の焦りに構わず、すぐさま対となる上段左手の

刀を真っ直ぐ縦に振り下ろした。それもギリギリで避ける。

羽川ペディアによると、日和号は攻撃する際、技名を発音するらしい。それ故にある程度予習しておけば回避は出来るのだが——これはつまり、技でもなんでもないような攻撃で、僕は焦っているという訳だ。

先が思いやられるもいいところである。

こんなものを連発されては堪ったものではないのだが、しかし喜ばしいことに、早速技へと移行してくれた——いや、別に喜ぶようなことではない。

技を早々に繰り出すということは、早々に本気になったということだ——手加減はたったの二撃、あとから全ては本気の斬撃——！

「人形殺法・竜巻」

日和号はそう言うのと、第一の技を繰り出してきた——人形殺法。

それは竜巻の如く、荒々しい斬撃——四本の腕による、四方からの同時の斬り付けである。

（人形殺法・竜巻。

）恐らく日和号が最初に行ってくる攻撃。四本の腕を用いた四方からの斬り付け。

（これは、持っている刀の刃渡にもよるけれど、後方に回避すれば避けられる）

羽川様々である。

僕は脳裏に蘇ったそのアドバイスに従い、後方に回避した——だが、ここは流石の羽川も読めなかったのか、情けないことに僕はダメージを負ってしまった。

決して後方への回避が失敗したという訳ではない。日和号のリーチが、羽川の予想以上に長かったのだ。

斬撃自体は刃の長さ通りなのだろうが、問題はその付属。

付随してくる——風。

斬撃によってかまいたちが生じ、ギリギリ僕を風が斬り裂いたのだ。

斬り裂いたとは言っても、精々服が破れた程度ではあるけれど——

しかし、やはり一筋縄ではいかないようだ。

羽川のアドバイスを基本に立ち回り、その攻撃範囲は、僕自身で測らなければならぬ。

「……まあ、流石に全部羽川に任しっぱなしってのは、情けない話だしな」

そういう意味では、程よい緊張感だ。

知識だけに身をまかせるのではなく、思考もしなければならぬ——楽なことではないけれど、しかし、それが発覚したお陰で、どこか感じていた、反則をしているかのような気持ちよく戦える——。

これである程度は気持ちよく戦える——。

「人形殺法・旋風」

間髪入れずに、日和号は攻撃を繰り返す。

（人形殺法・旋風）

（刀の柄を一つに合わせ、扇風機のように回転させながら突進する斬撃）

次の攻撃も羽川ペディア通りだったが、やはりかまいたちが発生しているようで、「羽」周囲にあるものに傷が刻まれていった。

僕はその扇風機めいた回転の中に、迷いなく『心渡』を差し込んだ。業物であり名刀である刀の使い方にしては些か乱暴であるが、しかし思い通り、回転は停止し、僕も弾かれたが、日和号も同じく弾かれた。

『心渡』には、傷一つ付いていない。

弾かれた日和号は、しかしそれを次なる攻撃の起点とした。

「人形殺法・春一番」

弾かれた日和号は、そのまま後方に倒れまいと、前方に向かって跳んだ。

（人形殺法・春一番）

（前脚二本を絡めるような跳び蹴り）

（しかし、蹴りを放つ前に一旦前方に落ちるので、そこで後方へ回避）  
その通り、日和号は僕の真前に着地すると、二本足で蹴り上げた。僕は後方に回避する。

跳び蹴りと言えば、着地する前に蹴りを食らわせるイメージがあるけれど、しかし残念ながら、それは人形機構的には不可能な動きである。故に必然、それは跳ばず跳び蹴りとなってしまふ。

刀を用いた攻撃でないからか、かまいたちは発生しなかった。お陰でノーダメージである。

取り敢えず安堵する——何せ羽川ペディアによると、この攻撃は本命である回避不能の次の攻撃の前振りらしいからな。

僕はふと上を向いた。鶏は僕たちの頭上を、相変わらず飛翔している。今のところ何をしてもないが……。

「人形殺法・恒風」

しかしめげずに日和号は斬撃を繰り返す。

（人形殺法・恒風）

（刀を横向きに構え、駒のように回転する斬撃）

（上段の刀を左右に、下段の刀を前後に配置して回転するので、しゃがむよりも跳ぶ方がいいかも）

らしいので、僕は跳んだ。

吸血鬼化した僕の跳躍力は、羽川の期待に添えることが出来たようである——そして、やはり羽川の読み通り、回避不能の大技は放たれなかった。曰く、回転しているから狙いが付け辛いかららしい。確かにあの攻撃は、その性質上きちんと狙いを定めなければ効果が発揮されないだろうし。

跳躍したのは、回転を確認してからすぐだったので、かまいたちは届くことはなかった。

跳躍した僕は着地した——だが、その隙を狙い、こちらを向いて停止した日和号は攻撃する。否、それは攻撃というより、足運びと呼ぶべきかもしれないかった。

「人形殺法・疾風」

日和号は目にも留まらぬスピード（とは言え、僕の動体視力はそれを捉えた。にしても速い）で僕に接近した。

当然、この足運びも羽川の情報通りである——だが、情報と違ったのは、この次にくる攻撃であった。

日和号は、こちらへ向かって来る際、上段左手に握られた直刀を、僕に向かつて突き出してきたのだ。

そして、僕は次の攻撃を見て、戦慄した。

「絶刀『鉋』・限定奥義・報復絶刀」

「っ——!!」

そりゃあ絶句もする——”絶刀”。

四季崎記紀が作りし完成形変体刀が一本——羽川が余分に教えてくれた”二本の刀”の内、片方がそれであったのだから。

（絶刀『鉋』限定奥義——報復絶刀。

（刀を前方に突き出すという絶刀『鉋』の奥義で、突くことに適した絶刀らしい技。

（奥義とは言え、結局はそれだけなので、横に避ければ当たらない）

「やっぱ凄えよ、羽川——！」

僕は横に避けた——日和号はそのまま真っ直ぐ突進して行った。

まさか、”日和号が装備する可能性の高い刀”まで当ててくるとは

——どんな脳の構造してるんだ、あいつ。

——”絶刀『鉋』”。

『頑丈さ』に主眼の置かれた刀——世界の何よりも固き、折れず曲がらぬ絶対の刀。その形状は”斬る”ことよりも”突く”ことに向いており、その特性を生かした『限定奥義』が、先程日和号が放つてきた技、報復絶刀である。

閑話休題。

通り過ぎた日和号は、そのまま回転しながらUターン、次なる攻撃を放ってきた。

「人形殺法・腥風零閃」

「!？」

腥風零閃——何だ、その技。

羽川ペディアにそんな技は載っていないなかった、が、別の、類似した技に対するアドバイスはあった。

（人形殺法・腥風。

（刀を高速で左右に動かしながら迫る斬撃）

そして、もう片方が。

(零閃。)

(斬刀『鈍』を嘗て所有していた『宇練銀閣』という男が使用した技。(目にも留まらぬスピードの斬撃——けれど、目視することができれば、避けることは可能)

その二つを融合させた技——腥風零閃。

回転しながら、右手の刀を高速で左右に振る斬撃——先程の足運び”疾風”よりも、それは速いスピードで動かされていた。

僕の動体視力を持ってしてもギリギリだった——が、跳躍することによってなんとか回避した。

しかし——ここで僕は、大人しく跳躍するのではなく、多少無理をしても左右どちらかへ逃げておくべきであった。

腥風零閃。

この攻撃で重要なのは飽くまでも刀を振る速度と回数——回転するスピードは大したものではなく、容易にブレーキをかけることができるものであった。

日和号はすぐさま停止すると、人間には凡そ不可能な角度で空中にいる僕を見上げると、その口を大きく開けた。

否、それは開けたというより、裂けたという方が正確だっただろう——その様相はまさに口裂け女を連想するものであったのだから。

——来る！

「人形殺法・突風」

大きく裂けた日和号の口から舌のように飛び出したのは、槍のような一本の刀であった。

「ぐあっ——!!」

飛び出した刀は真っ直ぐに僕の心臓に向けて突き進む——僕は無理矢理体勢を変え、ギリギリ『心渡』で刀を弾くことに成功した。

それで日和号は多少体勢が崩れた——だが、僕の方は空中だったが故に大きく体勢を崩し、着地に見事失敗した。全身を強く打つ。

日和号は刀を露出させたまま、僕の方へと高速で近付き。

「人形殺法・雨風」



「う、うおおっ!!」

露出させた刀を、膝、上半身を折り曲げることによって、僕に向かつて突き立ててきた——羽川ペディアには載っていなかった技だったが、突風の回避に失敗した場合、日和号が仕掛けてくるであろうモーションとして、予測はされていた。

ので、これはこれである程度予習は出来ていた——僕は日和号の方へと転がり、逆に日和号の足に打撃を与え、転ばせようとした。

実際、日和号はよろめいた——が、僕を飛び越えるようにしてまさかのバク宙、何事もなかったかのように、向こう側へと降り立った。

刀がスルスルと、再び日和号の体内に収納されていく——危ねえ。確かにあれは回避不能だ——得物があつたからよかつたものの、なかつた場合、どうやって回避すりゃあいいんだ？

僕は慌てて立ち上がる——が、日和号はその隙を突き、上半身を前方に倒し、上段両腕を前方に向けて構え、下段両腕を情報に向けて構えた。刀の向きは上段が後ろ側、下段が前側。

「人形殺法・鎌鼬」

そう言うと同時に、日和号は腕を凄まじいスピードを回転させた。それは宛ら車輪のようであり、車のように僕に突進してきた。

紙一重で左に避ける——だが、鎌鼬という名前だけあつて、かまいたちが僕の足を斬り刻んだ。

「っ!!」

思わず叫びそうになった——が、歯を食いしばる。この程度の傷なら、すぐに治る。騒ぐようなことじゃあない。

だが、ガラクタは修復されない。何かの破片や石の塊、廃品といったものもまた、斬撃とかまいたちによりズタボロに刻まれている。破片や起伏が増え、斬り刻まれなかつた貝殻や石辺が舞う。その所為でより動き辛くなる。

その点、日和号は足が四本もある。その安定感たるや。

「人形殺法・嵐」

次なる攻撃を日和号は仕掛けてくる。

（人形殺法・嵐）

(上下の片腕を揃えた斬撃。

(攻撃を加えるか、不可能な体勢に追い込まれるまでは決して止まらない)

その通り、今までの攻撃は必ずどこかで打ち止めてきたが、今回の斬撃はまるで止まらない。どこまでも回避する僕を追いかけ、斬り刻もうとしてくる。

「くっ——！」

僕は『心渡』を構え、右腕の斬撃をガード、というか弾いた。日和号の腕は弾かれ、僕も同じく弾かれた。

体勢さえ崩せば、この攻撃は止まる——また『心渡』に助けられた僕であった。

「——ん？」

ちらりと僕は『心渡』を見た——そして、一つ気付いた。

『心渡』に傷が付いている。

いやまあ、恐らくスキルでレプリカは幾らでも量産できるのだろうし、傷が付いたこと自体はそこまで気にしていないが——しかし、問題は理由である。

人形殺法・旋風の回転——斬撃の深さなら、あれの方が深かった筈なのに、なぜあの時は傷が付かず、今回は傷が付いた？

上段右手に握られた刀——か。

先程使ってきた技からそんな予感はしていたが——そう考えれば、納得がいく。それに外見もまた、聞いていた特徴と一致する。

——” 斬刀『鈍』”。

これもまた、四季咲記紀が作りし完成形変体刀が一本——『切れ味』に主眼が置かれた刀。ありとあらゆる存在を一刀両断にできる、鋭利な刀。

仕組みまでは詳しく知らないが、『心渡』はこの刀に触れてしまったらしい——さっきの”旋風”で弾いたのは、この刀ではなかったのだろう。

だとすれば幸運だった——もしもあの時、『心渡』に当たったのが『鈍』だったなら、間違いなく『心渡』は切断され、僕は今以上の苦戦

を強いられることとなつただろう。

心の中で大汗をかくチキン野郎、阿良々木暦——チキンと言えば相変わらず飛んでいる鶏だが、あいつは結局なんなんだ？ 相変わらず何も仕掛けてこないし——ただ、”飛べる鶏”というだけの怪異なのか？

そんな僕の心中に構わず、日和号はその場で回転し、新たなる斬撃を繰り出す。

「人形殺法・砂嵐」

（人形殺法・砂嵐）

（回転しながら左右及び上方に斬撃を飛ばす技——この状態の日和号に近付くのは無謀）

（ただし、もしも可能ならば、これは大きな反撃チャンスでもある）

可能ならば——。

ああ、出来るとも。

僕はすぐさま体勢を低くし、日和号に足蹴りを放った。

（下方向には斬撃は無い——軸足を蹴ることが出来れば、転ぶでしよう）

その預言通り、日和号は転倒した。

ついに日和号に一杯食わせた瞬間である——だが、日和号のことだ、すぐに立ち上がるだろう。

この隙を逃すわけにはいかない——僕は『心渡』で『鈍』を側面から弾いた。『鈍』は勢いよく日和号の手から離れ、弾き飛んだ。

そして、空中でキャッチ。

僕は左手で『鈍』をキャッチした——右手には『心渡』、左手には『鈍』。

男なら誰でも一度は憧れるであろう。そう、二刀流である。

名刀と名刀の二刀流——平行世界でも二刀流をしたことがあるけれど、あれは両方とも『心渡』だった。両方とも同じ刀と、両方とも違う刀——モチベーション的にも全く違う。

後は口に刀を咥えれば、某海賊のような三刀流が完成である——いやまあ、あんな自由のきかなさそうなフォームをとる気はないけれど

も。

「人形殺法・台風」

だが、刀を奪われたことで動揺するようなメンタルを日和号は所有していない。というか、そもそもメンタル自体がない。何事もなかったかのように立ち上がると、日和号は斬撃を繰り返した。

人形殺法・台風——刀を荒々しく振り回す斬撃。二刀流になって調子に乗った僕は、その斬撃を両方の刀でガードしようとした。したが。

結果的にはガードに成功したのだが。

そのガードは、今までのものとは違った——それは左手の刀によるガード。

斬刀『鈍』——あらゆるものを斬り裂く刀。

あらゆるもの——それは、完成形変体刀も含まれていた。

『鈍』でガードした、日和号下段左手の刀——それは弾かれることなく、刀は真つ二つに斬り裂かれた。

切断出来たのだ。

「っ——!!」

「人形殺法・天狗風」

日和号はそう言うと、「台風」を途中で停止させ、後方へのバックステップをくりだした。”天狗風”——”疾風”と同じく、攻撃用ではない補助的な技。

日和号は後方へと回避した——回避した。

ついに、日和号が防衛行動をとったのだ。防衛行動をとるまでに、追い詰めたということ——何せ主要となる刀のうち二本を失ったのだ。幾ら感情のない日和号とは言えど、危機感は覚えるのだろう。

……さて。

と、僕は思う。

羽川ペディアによれば、この日和号には動けるタイムリミットのようなものがあるらしい。それはつまり、こいつを動かす燃料が切れるまで、ということなのだが、さて。

あれだけ動き回ってくれたのだ、そろそろ停止してくれるか——？

「……………お」

思わずそんな声が漏れた。

というのも、今や日和号の手には、刀が一本たりとも握られていなかったからだ——足下には、手放された二本の刀が転がっている。

斬ったのでも、弾いたのでもなく——自ら刀を捨てた。まるでガラクタか何かのように。

これは、”あれ”が来るか？

僕は身構えた——そして予想通り、日和号は刀を手放して自由になったその手を、地面についた——そして、逆立ちをするように、下半身を持ち上げた。

腕を脚代わりに、姿勢を変えたのである。

随分と低い位置になってしまった双眼で、日和号は僕を見つめた。

「微刀『釵』」

そして、日和号は。

「限定奥義」

冷えた鉄のような——そんな声を発した。

「人形殺法・微風刀風」

途端——浮き上がっていた日和号の四本の脚が回転を始めた。

それは徐々に回転を速めていく——何度も何度も回転し、旋回し、速度を上げながら——。

「っ!!」

脚の回転によって、風圧とかまいたちの両方が僕を襲う——僕は思わず後ずさった。

と、同時に。

日和号は四本の腕を肘のところまで折りたたみ、そしてその腕を伸ばす衝撃で、バネのように跳ね上がった——日和号の体は浮かび上がり、そしてそのまま、降りてここなかつた。

それはつまり——日和号の飛翔。

自力での飛行——脚が四本あったのは、安定さを高めるためであり、同時にその脚をプロペラの羽のように使用するためであった。

（微刀『釵』 限定奥義・微風刀風。

（空中に飛び上がった、頭部に生えた刀とプロペラのように回転する脚、そして風圧とかまいたちによって攻撃する技。

（日和号が追い詰められた時、この技は発動される）

もうなんか、羽川には絶対脚を向けて寝られない。脚どころか、頭でさえも向けられねえ。とんでもねえよ、あいつ。

ばねえよ。

などと感嘆している暇を、日和号は与えてくれない。日和号は飛びながら僕に向かって急降下、突進を繰り返した。

「くっ——!!」

僕は左方向に、転がるようにして前転回避。その際、両手の刀は手放さざるを得なかった。僕の両手は、今、何も握っていない。

初めは両者、刀を握って戦っていた——だが今や、双方とも刀を握っていない。

吸血鬼と、機械人形。

得物なしの、ガチバトルである。

ガチバトルというには、少々僕にハンデがあるけれど——僕は空を飛ぶことができないのに対し、あいつは空を飛べる。

吸血鬼も本来なら、空を飛べるのだが——かく言う僕も、春休みの頃は飛べたのだが、今の僕は吸血鬼度が極限まで上がっているとはいえ、発揮できるスキルはあの時の10分の1以下である。翼を生やすなんて芸当はとても出来ない。

日和号は上昇してから空中を一回転、再び急降下突進。だが先程と違ったのは、日和は口を大きく開け、刀を露出させていたことである——刀と言っても、あの槍のような刀ではない。

それは刀というより、刃というべきか——。

「人形殺法・山嵐」

（日和号の歯は全て、刃になっている）

「っ!!」

僕は、起き上がろうとした頭を再び下げた——人形殺法・山嵐。歯ならぬ刃で、対象を噛み切る技。

歯の代わりに刃が生えていることは知っていたけれど、こうして攻

撃に使われると、見えていたあの四本の刀よりも恐怖を覚える。

あんなもんで噛まれたら、歯型が付く程度では済まない——肉を刻まれ、血管が裂かれ、骨まで断たれてしまう。

日和号は再び通り過ぎて上昇——すると、とうとう“あいつ”に動きがあった。

「な、何だ——？」

ずっと空中を旋回していたものの、一切手を出さなかった鶏の怪異——そいつがついに動いたのだ。

鶏は日和号に近付くと、近付くどころか、その身体にくっ付いた。空中で合体したのだ。

合体というと、まさしくロボットである——変形ともう一つ、合体だつてロボットのお約束だ。

合体変形ロボとか言うし。

とはいえ、あの鶏は怪異であつて、ロボットではない筈である——あれがどういう怪異なのか、まだ僕は何も知らない。あれと合体すること、どうなるのだ？

「っ……………!!」

その問いは、すぐに解決した——いやはや、何と分かりやすい変化なのだろう。僕は思わず青ざめてしまった。

日和号の色とは、裏腹に。

「マジかよ……………!?!」

日和号が、燃えている。

否、正確に言えば、その脚、その腕、その刃が、赤く赤熱しだしたのだ——まるでその名の通り、燃え盛る太陽のように、真っ赤に染まったのだ。

こんなもん——予想できるか!!

「人形殺法・業火魔風」

「な、何だよそれ——」

思わず叫んだ——いや本当、困惑である。どうしてこうなったのか。僕は思わず、叫んでしまった。

「——なんでこんなもん、あいつは予想できたんだよ!!?」

(日和号は、日光をエネルギー源にして動く。太陽電池を内蔵しているということ。)

(けれど、怪異として復活した以上、その弱点は補われているかもしれない——それどころか、その”太陽のエネルギー”を利用してくるかもしれない。)

(例えば——太陽のエネルギーを利用して、刃に熱を伝導させる、とか)

「あ、頭マジでおかしいよあいつう!!」

まさか扇ちゃんと同じ台詞を言う羽目になるとは。やっぱり僕とあの子は、どう足掻いても表裏一体であり、それでいて同一であるらしい。

いや本当頭おかしいぜ。

何でこの的確に当ててくるのだ——しかも間接的に、まだ生じてさえいなかった筈の、存在を知らなかった筈のこの怪異の正体まで暴きやがった。

何が、『何でもは知らないわよ、知ってることだけ』だ!

知ってること以外でも知ってるじゃあねえか、お前——!!

僕は、紅に染まった日和号の突進を一旦、再び避けた——と同時に、日和号の身体に飛び付いた。

日和号は僕をぶら下げたまま、高く高く飛翔する——そして、

「人形殺法・温風」

赤熱した下段の腕で、僕の腕を掴む——その手は刃のように尖っており、そして爪は、小さな刃のようだった。

「あ、あづぶづぶづ、づづづ——!!」

痛いのか熱いのか、もう訳が分からない。日和号の刃は僕の腕に深く食い込み、斬り刻む。そして同時に、その熱で肉を焼き焦がす。焼肉の良い香りがしてくる。いや、全然良くなって、悪いのだけれども。だが、それでも僕は手を離さなかった——まあ確かに熱いし、痛い。けれど、それはあの地獄の業火と比べれば、生温いものであった。

「太陽の日差しは——こんなもんじゃあねえんだよっ!!」

春休みの日差しに比べれば——あの、地獄の幕開けとなった業火に



比べれば。

痛いし、熱い——けれども、暑くない。

痛みも熱さも、全てが劣っている。

人形殺法・業火魔風。

それは確かに、万人にとって脅威となる、最悪の魔界の業火かもしれない。けれど、地獄と魔界は、比べるまでもねえんだよ。

それに。

魔界は、化物——魔物であるヴァンパイアにとっての、ホームグラウンドだ。

日和号にとつてのガラクタ山のように。

魔界にいる限り、僕が負けることはない！

「っーか……」

僕は痛み能耐えながら（最初の悲鳴でも分かるように、痛いものは痛いし熱いものは熱い。けっこう辛いよ、これ）、いつまでも日和号にしがみついている鶏の首根っこを掴んだ。

「お前はいつまでも、日和ちゃんにくっついてるんじゃないやあねえ！ この変態鶏がああああ!!」

僕は痛みを紛らわすために叫びながら、『心渡』を捨てた場所が真下に来ると——握り締めた鶏を引っ掴み、日和号から飛び降りた。

それは超高度からの飛び降り。普通ならこの時点で死亡は確定し、飛び降り自殺となってしまうところだが——生憎僕は自殺なんてしない。

というか、だから、出来ないんだって。

当然の如く、着地は失敗した。だが、掴んだ鶏をクッション代わりにすることで、その衝撃は食らったものの、地面への直撃はなんとか避けたのである。

いや、そもそも鶏をクッション代わりにしなくとも、僕が地面に激突することはなかっただろう——だって。

僕は真下を見た。

八九寺が仕込んでくれた——この蛞蝓のクッションがあるのだから。

だからこそ、僕はここで刀を捨てた。そして迷いなく、落下できた。八九寺は確かに、嘘を吐いては居なかった。だってそれは日和号に対する罨ではなく、僕への安全策だったのだから。

お陰で助かった——まあ、気持ち悪いという感情は多少あるものの、そんなもん、助けられたという事実のお陰でとんとんである。いや、とんとんどころか、助けられたことの方が余りにも大き過ぎて、余りの方が大きくなってしまっている。

僕がその安全策に気付いたのは、戦いの最中であつた——”鎌鼬”のとき、僕は『貝殻』があるのに気付いた。何故貝殻があるのだろうか？ 貝殻をガラクタというには、少々厳しい——そう考えた一瞬後、すぐに答えが浮かんだ。

八九寺は、蝸牛の神様だ。そして眷属として、蛞蝓を従えている。また、最近、あの忌々しい『逆さ蛤』を眷属に加えたのだ。

蛤は貝殻の一種である。それは巻貝ではなく、二枚貝だが——しかし、巻貝でない分、多くの蛞蝓を収納出来た訳だ。巻貝はあくまで、一匹分でしかないのだから。

蛞蝓から、偽りの蝸牛へ。

蛞蝓は蝸牛の近縁種であり、それ故、この融合は八九寺にとって造作もなかったのだろう。いや、それどころか、案外これは負担を減らす行為だったのかもしれない。

何せ八九寺は蝸牛の神様だ。そりゃあ蛞蝓より、蝸牛の方が支配しやすいだろうし。

そんな訳で、僕が落下するのを観戦していた八九寺は、そのタイミングで、蛞蝓を解放したのである——もし僕がそれに気付かなかつたらどうするつもりだったのかは定かではないが、これはまあ、八九寺の期待に添えられたということの良いのだろうか？

まあ、その辺は後でなんとも言えよう。

重要なのは——今だ。

「ぐっ……………」

僕は伏せながら、左手で鶏を押さえつけながら、蛞蝓の上に乗った刀——妖刀『心渡』を右手で掴み、そして。

ざくり、と。

もがく鶏の頭に刀を突き刺した。

そしてその瞬間、動きを止めた——それは鶏だけではなく。

空中を飛んでいた日和号もだった。

この鶏の正体——それは、太陽電池そのものだった。

太陽電池といっても、パネルではなく、太陽のエネルギーを溜めた電池という意味である。

この鶏は、日和号と僕の真上をずっと旋回していた。それはつまり、日和号へ太陽エネルギーを送っていたということに他ならないのである——実際、あの鶏が僕の頭上に来た瞬間、日和号は現れた訳だし。

鶏との合体も、つまり、太陽エネルギーを直接日和ちゃんに送り込んでいたということになる。そこは全く、羽川の読み通りであった。凄えな。

だが、その鶏は今この瞬間、『心渡』によって貫かれ、死んだ。それはつまり、太陽エネルギーの消失を意味し、日和号の停止を誘発することとなったのだ。

当然、空中で動きを止めれば、物理の法則、万有引力の法則に従い、日和号は真つ逆さまに落下する——！

「っ!!」

僕は慌てて立ち上がった。左手を鶏から離し、右手を刀から離すと、日和号の落下地点へと駆け出した。

凄まじいスピードで落下する日和号——僕は残った体力を全て使い、全力疾走した。それは、八九寺を襲う時と大差ないレベルのスピードだったかもしれない。

そしてそのスピードまで到達した僕に、掴めない、抱けない口りはこの世に存在せず。

当然のように。

日和号は、スライディング気味に飛び込んだ僕の身体を、押し潰すかのように落下したのであった。

「ぐうっ……………っ」

僕は思わず呻いた——が、それは疲労によるものであり、日和号を受け止めた時の重さに耐え切れなかった訳ではない。

日和号は、思ったより軽かった。押し潰すことなんて、とても出来ない程に。

弱々しく、小さかった。

「っ……………はあ……………」

思わず僕は嘆息をついた。そして、日和号の髪に“絡まった”、釵を抜いた。

釵を抜くと同時に、日和ちゃんの髪がばらりと解けた。そしてばらけたのは髪だけではなく、日和ちゃんの体もだった。

人間と呼ぶには余分過ぎるパーツ——二本の腕と、二本の足が、ポロポロと、ボロボロと、バラけ、ガラクタのように崩れ落ちた。

微刀『釵』。

『刀』を失い、『釵』を失った彼女——残るのは、『微』だけである。

『微』、即ち、『美』だ。

微刀『釵』。そのネーミングに隠された秘密——人間らしさに主眼の置かれた刀である日和号は、それそのものも人間を模してはいるけれど、それと同時に、四季崎記紀という刀鍛冶の、『人間らしさ』を垣間見ることの出来る刀でもあった。

日和号のベースとなったのは、嘗て四季崎記紀が愛した女性だという。愛——それは機械には決して持ち得ない感情であり、そして、どうしようもなく人間らしい感情なのだ。

しかしこの愛について語る事を、人間は気恥ずかしく思うもので。かく言う僕も例外ではないし、そしてそれは四季崎記紀もまた例外ではなかった。

微刀——つまり、美刀。

釵とはつまり、女性の暗喩。

四季崎記紀の人間らしさ——気恥ずかしさが、その名前には込められていた。

武器でありながら人である、恋する殺人人形。微刀『釵』。

美しさのみが残るといことはつまり、『人間らしさ』だけが残ると

言うことで。

そんなことを考えているうちに、瞬きした一瞬で、日和号は、神崎日和へと変形した。背は元どおりになり、口も耳まで避けてはおらず、爪は、少し尖ってはいるけれど、刃と呼べるようなものではない。「……………」

僕は、日和ちゃんを抱きしめた。今にも折れてしまいそうな、小さな体——けれど、それはちゃんと実態のある、太陽には遠く及ばない程度の温度を持った、一人の児女であった。

静寂が訪れる——そしてその静寂は、気が付いた日和ちゃんの一言で、破られた。

「……………ごめんなさい——阿良々木お兄ちゃん」

僕は、思わず綻んでしまった。

満身創痍の児女を抱きながら笑いを浮かべるなんて、傍目には変態のように見えるだろうが、生憎僕はあの、児女に飛び付いただけで興奮し、熱を帯びていた鶏とは違って変態なんかではない。

僕は、ロリコンじゃあないからな。

[023]

「……………そんな馬鹿な」

織崎ちゃんは、日和ちゃんをおぶり、尚且つ『心渡』、『鈍』、『鉋』を持ち、ガラクタの山から見事生還した僕を見て、心底驚いたような顔で、声で、そう言った。

「あ、ありえないですわ。ま、ま、まさか、ひ、ひよ、日和号が——そんな——！」

「……………動揺しすぎだぜ、お前」

僕はそんな織崎ちゃんの横を通り過ぎて、八九寺や忍の元へと帰った。

「お疲れ様でした、阿良々木さん」

「かかつ、うぬにしてはよくやった方ではないか？ 78点位はくれてやっても良いかものう」

劳いの言葉を掛けてくれる二人——お前らしくねえぜ。僕は

てつきり、なんでもっと早く済ませられなかったあの、なんでそんなボロボロなのじゃだの、そんな罵詈雑言を予想していたのだが。

「……僕の方こそ礼を言うぜ。八九寺、忍。お前らが居なかったら、僕は勝てなかったよ」

僕は『心渡』を忍に返却し、そう言った。

「はっはっは！ いやそうでしょうね！ 何せこの八九寺真宵大明神様々が居なければ、貴方は今頃爆発四散して木っ端微塵でしたからねえ！ はっはっは!!」

「かかつ！ かかつ！ そうじゃろうそうじゃろう！ 何せこのクールでハードな忍野忍様々が居らねば、お前様は今頃切り刻まれて四散しておるからのう！ かかかつ!!」

「そんなんだからお前ら、汚れてるつつつてんだよ!!」

全く……ちよつと感謝したらこれである。困った連中だけ。日和ちゃんを見習ってほしいものだ。

……でもまあ、それはそれで、『人間らしさ』でもあり、『こいつらしさ』なんだろうな。

だってその台詞聞いた瞬間、すっげー安心したもん。ああ、やつぱお前らだなあ、って。

どうしようもなく、八九寺真宵と忍野忍だなあ、ってな。

「……阿良々木お兄ちゃん。降りしてください。もう、大丈夫です」

その時、背中の日和ちゃんが言った。

「そうか？ じゃあ、降りすぜ」

「はい」

僕は日和ちゃんを背中から降ろした。地面に降り立った日和ちゃん、少しだけよろめいたが、しかしその二本の足で、しっかりと直立した。

「日和さん！ 大丈夫でしたか?! このお兄ちゃんに乱暴されませんでしたか!? もしされたなら、どんな些細なことでもこの八九寺お姉ちゃんに報告してくださいね！ すぐに天罰を下しますからね!!」

「大丈夫じゃったか刀娘！ もし我があるじ様がうぬを傷つけたとい

うのなら、どんな些細なことでもこの忍お姉様に報告するがよい！  
すぐ様天罰を下してくれよう!!」

「おい、お前ら、おいこら」

すぐ様日和ちゃんに擦り寄っていくロリコンビ。ふぎけんな、似たような外見のロリの癖に、何がお姉ちゃんだお姉様だ。キレるぞこら。つーかキレてるぞこら。

ロリコンビつーか、ロリコンどもめが！

つーか、日和ちゃんは実質的八九寺よりも年上なんだからな。いや、下手すると忍よりも年上かも……作られたのが戦国時代な訳だから。

一番年上のキャラが、一番年下の外見をしているとは、忍のアイデンティティを奪いかねないキャラ設定である。

「はっ、そんなアイデンティティなど知るか。ちゅーかそんなもんアイデンティティなどではないわ」

「何だよ、織崎ちゃんに対してはキャラ被りを恨んでた癖に」

「それはそれ、これはこれじゃ」

「勝手だなお前……」

そんなかんじで、僕たちは日和ちゃんを中心として争うのであった。全くこんなあどけないロリっ娘の癖に、なんつー魔性なのやら。

「……………魔性はいいですけれど、あの、誰かを忘れておりませんこと？」

と、僕たちの楽園を邪魔する声が入り込んできた。織崎ちゃんの奴である。

「ああ、悪いな。完全に忘れてた——え？ いやだから、もう僕たちの勝ちで良いだろ。『日和号』はもう戦闘不能なんだから」

日和号はもう、神崎日和に変わった時点で『日和号』としては戦闘不能なのだ。もうケチの付けようもなく、僕たちの完勝である。

「……………さて、それはどうでしょうね」

「は？」

織崎ちゃんは、意地の悪そうな笑みを浮かべた——なんだ、まだ何かするつもりなのか？

と、僕が思うと同時に、織崎ちゃんは腕をクロス、そしてその指先から蜘蛛の糸が放たれた。

「っ!!」

「なっ!?!」

「あん?」

「!!」

織崎ちゃんは跳ねた——そして、空中に着地した。否、空中ではなく、空中に張り巡らした糸の上に、着糸した。

「まさかまさか! あなた方がここまで甘いとは、私思いもしませんでしたわ!!」

「な、何——」

「そこに釵日和が居るということはつまり、また日和号を解き放つことが可能ということですよ!?!」

「っ——!?!?」

僕は慌てて日和ちゃんを見た——まずい!! 僕は日和ちゃんに駆け寄った、だが——

「もう遅いですわ!! さあ、再び目覚めなさい、”微刀『釵』”!!」

「っ——!?!」

「ひ、日和ちゃん!!」

微刀『釵』——その言葉を聞いた途端、日和ちゃんは苦しみだした。そして、体の変化が始まった。

少しずつ日和ちゃんの背が伸びる——その爪と歯は刃となり、双眼は光り、その声が機械音声じみた反響を持つ音へと変わっていった。

日和号——!?!

「し、忍!・八九寺! その刀を、なんかどうにか——!」

「っ!!」

僕は二人に指示を出した。だが、織崎ちゃんの言う通り、時既に遅し——日和ちゃんは『鈍』と『鉋』を両手に掴み、僕に向かって突進してきた。

「なっ——!?!」

「人形殺法——」



僕は思わず、目を瞑った。

情けないものである、さつきまであんなに戦っていた筈なのに、いざ気が緩むとこれである。だから僕はチキンなのだ。

弱くて薄い——名古屋コーチンにさえなれない、その辺の市販レベルのチキン。

こうして目を瞑ればどうにかなる訳でもないだろうに——僕が斬り刻まれてしまうという事実は、事実は——。

「——仇の風!!」

「っ!!」

——事実は、そもそも存在しなかった。

人形殺法・仇の風——両手の刀を上斜め前に突き出す、耐空の斬撃。

その斬撃は僕には当たらず——かまいたちさえ当たらず。

僕は恐る恐る目を開けた。

目の前には、日和ちゃんはいない。

僕は後ろを向いた。

そこに居たのは——日和ちゃんだった。

日和号でもなければ、微刀『釵』でもない、神崎日和。

その刀が狙うのは、空中で笑みを凍らせた、織崎ちゃんだった。

「……な、なんのつもり、ですの?」

「こういうつもりです」

「わ、私はお前の主人ですよ? 主人に刃を向けますの?」

「だから、仇の風と言ったではないですか」

「お、お前は、わ、私の、新兵器で——日和号で——」

「あたいは日和号ではありません。ましてやあなたなんかの武器でもありません」

日和ちゃんは、深呼吸して、噛みしめるように、自分に言い聞かせるように——こう言った。

「あたいは、神崎日和です」

それは、これ以上ないほどの——主人に対する反抗の意を表してい

た。

反抗するという、『人間らしさ』を表していた。

「あたいは、傷つける刀ではなく——阿良々木お兄ちゃんたちを守る刀になります」

「……………それは、私たちの敵になる、ということでご宜しいのですわよね」

「そうですよ」

「……………ちっ」

織崎ちゃんは舌打ちすると、再び跳躍し、着糸した。

「……………退きますわよ、静」

「んっふふ——いいのかい、ご主人？」

「良い訳ありませんわよ——けれども、この状況は私にとって余りにも不利ですわ。今は、退くしかありませんの」

そう言うと、織崎ちゃんは僕たちを、日和ちゃんを含めた僕たちを睨んだ。その顔からは余裕綽々の笑みはもう消え失せていた。

「でも……………阿良々木曆、忍野忍、八九寺真宵……………神崎日和。次はありませんわ——次は、本気で、殺す」

殺す。

それはハツタリではなく、本気の殺意なのだろう。この状況でハツタリをかます程、織崎ちゃんに余裕があるようには見えなかった。

淡海が、手を叩く——と同時に、雲だらけの空から、巨大な物体が落ちてきた——降りてきた。

その物体は、まるで糸で吊られているかのように織崎ちゃんの真横で停止した。それは、見覚えのある物体、というか怪異だった。

織崎ちゃんと、淡海のアジト——確か名前は、豪那。甲殻類の怪異——！

淡海は浮上し、そのまま豪那へと入り込んだ。そして織崎ちゃんも同じく、扉を開け、豪那へと入り込んだ。前回と違うのは、一切の捨て台詞を残さなかったというところだ——本気、ということなのだろう。

ガラガラと音を立てて、扉は閉められた。と同時に、糸で釣り上げ

られるような不自然さで、豪那は浮上し、雲の中へと消えた。

「……………」

僕たちは、呆然としてそれを見送った。そして顔を見合わせた。夕イミングを合わせた訳でもないのに、それは寸分違わずびつたりの夕イミングだった。そして、揃いも揃って、苦笑いを浮かべたのであった。

「024」

後日談というか、今回のオチ。

見事織崎ちゃんの撃退に成功した僕たちだったが、残念なことに僕たちはとことんまで汚れており、再び醜い争いを始めた。

その議題は、こうだ——誰が日和ちゃんを保護するか。

「僕の家は警察官の家庭なんだぜ。実際過去に何度も、身寄りのない子を迎え入れていたこともあった。阿良々木家が、一番日和ちゃんの家に向いてるぜ！」

とは僕の談。

「儂も我があるじ様に賛成じやのう。我があるじ様の言うことに、間違いはない。そして儂の言うことはそれ以上に間違いはない。儂が言うのじやからそうなのじや！」

とは忍の談。

「やれやれ、こんな変態ツーマンセルが闊歩する家なんか日和ちゃんを預けられる訳がないじゃないですか。ここは私の北白蛇神社を提案致しましょう！ 何せ神様の住まう家ですし、健全以外の何物でもありません！」

とは八九寺の談。

とまあ僕たちは言い争った訳だけれど、当然、そんな言い争いだけで事が解決する筈がない。僕たちは再び血生臭い争いを始めようとしたのであった。しかしそこへ日和ちゃんの一声。

「では、じゃんけんというもので決めてはどうでしょうか」

ああ、何て平和的な案なのだろう。心の底まで血に塗れた獣たる僕たちとはまるで違う。真っ白で汚れなき、穢れなき児女。僕たちはい

たく感銘を受けた。

悟りつて、こういうことなのかな。

僕たちは、じゃんけんをした。じゃんけんと言うと如何にも平等なものに見えるが、しかし今回に限っては平等でも何でもない。

何せ、阿良々木家派が二人居るのだ。僕と忍——対する八九寺家派はたったの一人、八九寺オンリー。どう見積もっても、僕たちの勝率の方が高いのだ。

そんな訳で、僕と忍は勝ち誇っていた訳だが——しかし、かの有名なジョースター一族の方は言った。『相手が勝ち誇った時、そいつは既に敗北している』——僕たちは、勝ち誇ってしまった訳で。

で……負けた。

一瞬で負けた——僕と忍がチョコキで、八九寺はグーだった。

何やってんだよ。こんな所でペアリングの影響を受けてんじやねえよ。つーか、僕の考えが読めるんなら、違うのを出せよ。

しかし勝ち負けは勝ちであり、負けは負けである。僕たちは潔くとは言えないもの、結局は負けを認めざるをえなかった。

「日和さん！ やりましたよ！ これからよろしくお願いしますね、

日和さんっ！」

「はい！ あたいこそ、不束者ですけどよろしくお願いします、八九寺お姉ちゃん！」

こんな嬉しそうな二人を見て、勝ちを宣言できる訳ないからな。

それに。

こうなるのが、案外一番良い形だったのだろうと思う。

たった一人で、あの北白蛇神社で暮らしていた八九寺は、これでもう一人ではないし、たった一人で、家族もいない日和ちゃんも、これでもう一人ではない。

家族——それは、僕が持つていて、この二人が持つていないものであった。

ならば、これこそが最高のパターンなのだろう。結局のところ、僕たちの目的は果たせたのだから。

日和ちゃんの笑顔を取り戻す——家族を手に入れた二人は、満面の

笑みを浮かべていた。それは太陽のように、注視できないほどに眩しくて、穢れた吸血鬼であるところの僕たちは、思わず苦笑いを浮かべるしかなかったのであった。

《裂物語 完》

《読了感謝》

《裔物語に続く》

## ウラガタリ ひよりブレード (上)

「001」

「〈物語〉シリーズ恒例、メインキャラクターのフルネームから始まる前説！ 今回は神崎日和ちゃんです！」

「ふむ。このヒヨリに関しては、もう語ってよいのかの？」

「いえ、彼女がちゃんと登場してから語ってください」

「むう。じゃあなんじゃ、儂らはこれを見て何を語ればよいのじゃ。我があるじ様の屁理屈染みた無駄に長いこの前書きの何を語れと？」  
「いきなり辛辣ですね!？」

「いきなり本音を誤解を恐れずに言わせてもらうがな、儂はこの分かったようなことをべらべらと語る部分はいらないと思っておる。普通に直行で本編を始めればよいものを、こんな風にグダグダと語ってしまうから読者が離れていくのじゃ、と儂は思う」

「いやいや何を仰るのですか忍さん。寧ろこの部分があるからこそ、集客効果があるのです！ 確かにここは本編とあんまり関係ありませんけれど、この「001」で今後の展開をそれとなく、或いは露骨に示唆する事によって、読者が引き付けられるんじゃないですか！  
分かってませんね貴女は」

「じゃあうぬよ！ 通算閲覧数のグラフをみても分かるが、どんどん閲覧数が減ってきておるのは何故じゃ!？ これの所為ではなかったのか!？」

「いや絶対違うでしょう!？ それは純粋に作者の腕前に由来するものですから！ ある意味関係ありますけれど、実質無関係です！」

「おいおい迷子娘よ、まるで読者の気持ちを分かったように言うのう。かかっ！ なんと傲慢なやつであろうか！」

「分かりますとも！ このハーメルン、というか昨今の小説で一番重要、ラノベ三大要素と呼ばれるものが、この作品には一切存在しないのです！ そういう面から考えてもこの小説が伸び悩むのは当たり前と言うべきでしょう」

「ラノベ三大要素？」

「ずばり——転生！ 異世界！ チート！」

「ずばりすぎるわ直球すぎるわ!! 数多ある小説を一括りに纏めるような単語を使いおつて！ ちゅーかこれ評価1の嵐を叩きこまれたらどうするんじや!?!」

「大丈夫、その時は作者が謝罪しますから」

「謝罪でどうにかなるのか……」

「いや、別にこれらを悪口として使っている訳ではありませんよ？」

ただ、最近のラノベはこの三要素がふんだんに盛り込まれてあるものが多いなあと思っただけです」

「オブラートに包めとるようで包めておらんぞうぬ」

「まあでも実際、そこまで目くじらを立てるような要素でないことは誰の目にも明らかでしょう。ほら、この小説だってチートキャラが大半を占めてますし」

「儂とかな」

「転生ブームだつて、ぶつちやけちよつと前に前世ネタが流行つたのと似たようなものですし。異世界ネタなんかは、最早古典的なネタと言っても差し支えがないものですしね」

「考察するのう。本編と全く関係無い話を」

「あ、そうでした本編！ 忘れてました——えつと、ああそうだ！ これら三つのジャンルの共通項は、いずれも自然界ではありえない、どうしようもなく人工的なものである！ ……みたいなかんじで絡めるっていうのは」

「微妙じやのう……しかもまた文字数を食いそうな話を」

「もういいじやないですか文字数なんてこの際！ 本編なんて一話平均約一万八千字ですよ！ 今更ですつて」

「じゃから敬遠されるんじやないのかのう、この小説……」

「002」

「すみません忍さん、私さっきの忍さんのご意見に大賛成ですつ!!」

「分かりやすいくらいあっさりと掌を反したな」

「いやあ、やっぱりいいかもしれませんよね阿良々木さんの無駄無駄無駄なモノローグ！ 何エピソードに偽装した前振りとかいう意味不明なことやってるんですかこの方は！ いちいち私を襲う際にそんなこと考えるのやめてほしいですよ全く！ いや襲う事自体もやめてほしいですけども！」

「なんじやうぬ、襲ってほしいのではなかったのか？ 嫌よ嫌よも好きのうち、みたいな理由で」

「い、いやあの……答えにくい事言うの止めて下さいっ！」

「かっ！ 凶星か！ なんじやうぬ、見た目に違わぬ乙女な思考回路しておっ！ このツンデレ娘め！」

「ツンデレじゃありませんっ！ それにそのあだ名は戦場ヶ原さんのものでしょう！」

「むう。それはそうなんじやが、しかし最近日本文化に浸っていくうち、『あれ？ もしかしてツンデレ娘って、全然ツンデレ娘じゃなくね？ ツンデレっていうか、デレ駄々洩れじゃね!?!』と思いはじめてな」  
「デレ駄々洩れというのは微妙なところですが……まあ最近はツンデレではありませんよねあの方は」

「かといってヤンデレとやらでもなからう？ なんなんじやろうなあ奴は。まともな出番がなさすぎて、この儂でもキャラをしつかりと把握しきれておらん」

「まあ戦場ヶ原さんでさえ自分のキャラを忘れがちですしね」

「そこで儂は考えた！ 『あれ？ もしかして迷子娘の方がツンデレ娘じゃね？ そもそも迷子娘だって迷子娘じゃなくね?!』とな！」

「最近の私が迷子状態からめでたく脱したのは間違いありませんが、私がツンデレだというあなたの見解には異議を唱えさせて頂きたいですね！」

「ほう？ 儂に意見するか？ よかろう来るがよい！ 儂の判断がこれっぽっちも間違っておらんことを、うぬの論理を論破し証明してくれよう！」

「では言わせて頂きますがね忍さん。ツンデレと呼ばれる人種が何故



デレの気持ちを隠してツンを表に出すと言う、余りにも非効率的かつ矛盾した行動をとるかお分かりですか？」

「知る訳なからう。日本人でもない奴に何を求めておるんじやうぬ」「恥ずかしいからです！ 自分の気持ちを素直に相手に伝えようと思つても、『きやつ！ こんなこと○○君に言うの恥ずかしいわ！

こんなの私のキャラじゃないし、もしかしたら誰かに見られてるかも……私の気持ちがバレたら、きつとみんなの笑い物だわ！ そんなの嫌っ！』みたいな羞恥心が邪魔することによって、本音と建前がちや混ぜになつて溶け合い、その結果、放つておいた絵の具のように固形化してとげとげしくなつてしまふというのが、ツンデレという連中です」

「ほう。……なんじや今の演技」

「触れないで下さい。それこそ恥ずかしいですから」

「ふむ……で、うぬは？ そんなこと考えておらんと？」

「当たり前です！ 私はそんなうじうじしてるような奴とは一味も二味も違うのです！ その場その場で自分の気持ちに正直に生きる……それがこの私、八九寺真宵なのですっ！」

「じゃあさっきの発言はなんじやい」

「いやいや、あれも一応本音ですからね？ ええまあ確かにいつも嫌がつているのは振りですよ否定しません。ですが、本当にやめてほしいと思つているのもまた事実！ あの方の変態行為はどんどんエスカレートしてきますし、今と昔ではレベルが違ふのです」

「確かに、うぬがあの方の発言をしたのは半年ほど前じやつたな」

「そう！ よつてここから導き出される結論は……私はツンデレではない、けれども真のツンデレはあなたです、忍野忍さんっ!!」

「なんじやと!?!」

[003]

「待て、ここで章転換するのか!?!」

「ええ。ちよつと今回は一章につき喋りすぎですし。だいたい一千文

字を心がけましょう」

「ま、まあそういうことなら……つて待て。これではツンデレ議論が、結局儂がツンデレでした、という形で終わってしまうではないか！ 儂はそのような勝ち逃げ許さんぞ！」

「いやいや、この結論はあなたが何言おうと絶対に覆らない不変の真理です。読者百人に聞けば百人中九十九人がイエスと答える程度に」  
「おい、ノーが一人いるではないか！ そやつの意見を無視するな！」  
「だってその一人つて忍さんですから。無効票です」

「じゃあ最初から聞くな！ ちゅーか儂は読者ではない!!」

「まあまあ忍さん。あんまり前章の話を引き摺るのはよくありませんし、本編についてちゃんと話しましょう。お役目を忘れてはなりませんよっ。」

「うぬ、この収録が終わってから覚えておれよ……」

「さ、切り替えて行きましょう！ おっと、どうやら日和ちゃんが漸く登場したシーンのようですね」

「……そうじゃな。あと、うぬがゴッドカースト最下位級というのが明らかになったシーンでもある」

「いやあ本当、困りますね。神様業界でもカーストなんてものがあるとは、この八九寺真宵の目を以てしても見抜けませんでしたよ」

「どこの南斗五車星じゃ……儂が神をやっておった頃は、別にそんなことなかったんじゃがなあ」

「そりやああなたを虐められるやつなんてそうそう居ませんよ。私はその時の話をよくは知りませんが、あなたその時全盛期だったのでしょうか？ そりやあ誰もあなたを敵に回したくありませんって」

「そうかの？ かかつ、まあ儂の全盛期は本当になんでも出来たからう。比喻でもなんでもなく、やろうと思った事は大概実現できたほどのパワーを誇っておった時期じゃしなあ」

「はあ……羨ましいですね」

「そう良い事でもなかったがな……『くらやみ』に襲われたし、何よりあの訳分からん幽霊に怨まれておるし」

「淡海静さんですか」

「なんなんじやろうな、あやつは。正直儂としては面倒くさいからさつさと成仏するなり滅ぶなりしてほしいもんじや」

「まあまあそう言わずに。どうせt……【裁物語】の次くらい物語までの命ですし、初期キャラ勢として寛容な気持ちで受け入れて差し上げましょう」

「偉そうじやな」

「神ですから」

「ちゅーか【裁物語】なんて言ってしまったってよかったのか？ 二つ先の物語じやろう」

「あー大丈夫です。このウラガタリが世に出る時点では既に【裁物語】というタイトルは公表されてますからね」

「ならよいのじやが」

「004」

「どうも今回は変なところで章転換が発生するな」

「文字数縛りです。仕方ありません」

「もうその縛りなくしたらどうじや？」

「いいえそうはいきません！ 前にも言いましたが、このウラガタリには一話平均文字数を下げるといふ役割が別にありますからね。あんまり長くする訳にはいかないのです」

「あんまり詐欺とかし過ぎると読者から叩かれるぞ……ちゅーか叩かれそうな要素多すぎないか？ この小説」

「利益を求めすぎると、必ずどこかで綻びが出来てしまいますからね……叩かれているだけの内ならまだいいですけど、既存の読者が離れてしまうという展開だけはなんとか避けられるギリギリのラインを模索していきたいところです！ 恐れ多くもこんな小説を宣伝してくださった方たちだっていますし、やりすぎないようにしませんと」

「まあ、読者がゼロ人にならない限りはどうとでもなろうよ」

「いや、流石にそのレベルまで警戒しなければならぬ領域まで来る

と本当洒落になりませんか」

「しかしこんな風にだらだらと本編と全く無関係な雑談をしていては、その日はそう遠くないかもしれないぞ?」

「珍しくまともな事言いますね……本編ですか。阿良々木さんの日頃の行いが祟っていますね」

「こやつ何かにつけて自分はロリコンじゃない宣言をするが、しかし態々そんなことを自分から言いだすと言う事は、自分がロリコンであると自白しているようなもんじゃと言う事に何故こやつは気付かんのかのう」

「別に指摘された訳でもなんでもなく、自分から唐突に釈明を始めていますからね。自覚ありですよこれは!」

「これ以上こやつの症状が進行してしまえば、いつか必ず刑務所行き間違いなしじゃな。かかつ! 両親に捕まえられる息子とは、なんと皮肉な事よのう」

「ご両親だって——いやそもそも息子さんを捕まえたくないでしょうけど——まさか性犯罪者として息子さんを逮捕することになるとしたら、どんな気持ちになるのでしょうか?」

「まあまず署内での肩身が狭くなるじゃろうな。そして降格され、いずれは職を失う羽目に……」

「親不孝者過ぎますね……」

「地獄に突き落とされたような気分になるじゃろうなあ——まあ一番ダメージがでかそうなのが妹御たちじゃろうが」

「ああ、確かに。妹さんたちって二人とも阿良々木さんのことを何だかんだで好いてますからねー」

「じゃな——うぬ、あやつらと会った事あるのか?」

「いえ。ですがさ……見回り中にお見かけする事はありますね。特徴は阿良々木さんからそれとなしに聞いていますので、一発で分かります」

「ほう? ではうぬ、我があるじ様さえ知らぬ妹御たちの一面を見ておると言うことかの?」

「そういうことになりますね! ふふ、後でお教えしましょうか?」

妹さん達のデートの様子とか」

「姿が見えんのを良い事に何やつとるんじやうぬは……まあ暇つぶしに聞いてやる」

「いやあ、なんか阿良々木さんに圧勝した気がして、気分いいですね!!」

「いい性格しとるなあ、うぬは」

「005」

「アニメ《終物語》 第4巻及び第5巻》、今月27日に発売予定です!」  
「なんじや急に」

「いえ、本編でも宣伝はしていますが、ここでも一応やっておこうと思  
いまして! 何せ忍さんが大活躍の回ですし! ほら見て下さいこ  
のパッケージ! 全盛期の忍さんと死屍累生死郎さんが背中合わせ  
に立っていますよ! かつこいー!」

「生死郎のやつまでパッケージ進出か……一方で儂のもう一人の巻属  
は、まだ一度もパッケージイラストに描かれておらん、と」

「阿良々木さん……」

「アロハ小僧、カイキ、生死郎がパッケージ進出する中、まだパッケー  
ジになつとらん男どもは、あの気に食わん吸血鬼ハンター三人組とよ  
う分からん折り紙使い、そして我があるじ様……なんでこんなマイ  
ナーメンバーの中に主人公が混ざつとるんじや」

「だ、大丈夫ですよ! きつと【終物語(下)】ではパッケージもらえ  
ますつて!」

「どうだか……【暦物語】でも微妙じゃしなあ」

「ちつちつち、違いますよ忍さん」

「あん?」

「2016年6月29日発売アニメ《暦物語》BD&DVD! ちゃん  
とここまで言いきって下さい! 全く、何年この仕事やってるんです  
かあなたは!」

「なんでこんなことで怒られにやあならんのじや?!」

「宣伝に命掛けて下さい！」

「宣伝に命を掛ける小説とかマジで聞いた事ないわ！」

「あなた吸血鬼でしょう？ 命の一つや二つくらい掛けても痛くも痒くもないでしょうに！」

「昔の話じゃ！ 今は不死性を殆ど失っておるし」

「はあ、嘆かわしいですね……」

「嘆かわしいのはうぬじゃ……我があるじ様も言っておるが、礼節は守らんとそろそろ冗談抜きで打ち切りになるぞ」

「おかしいですね。何故だか今回のウラガタリは死と隣り合わせなような気がしますよ」

「概ねうぬの所為でな」

「ところでパチンコと言えば、パチスロ《偽物語》が」

「宣伝はもういい！ さつきから本編についてこれっぽっちも語っておらんぞ！」

「稼働してはいますが、18歳未満の方は絶対に立ち寄らないで下さいって言おうとしたんですが」

「……お、おう」

「私が宣伝ばかりすると思ってるんですか？ 心外ですね！ 謝れください謝れください！」

「さつきからの行いの所為じゃ！ 謝れくださいってなんじゃ、日本語を喋れ！」

「謝れって言うのもキャラに合っていない気がするので」

「なんじゃその理由……」

「【其ノ壹】、ここまでです！」

「006」

「はい、こっから【ひよりブレード 其ノ貳】です！」

「いやいや今のでオチがついたのか!? ついとらんじゃろう!」

「いえ、オチとか関係なく千文字に到達したので」

「雑じゃなあ……」

「まあ話数も章も切り替わったので切り替えて行きましょう——アニメにする、この話からオープニングが挿入されますね」

「オープニングか。ヒヨリが歌うのかの？」

「ですね。刀語第八話エンディングでお馴染み、『からくり眠り談』をイメージしています」

「……それ本当にこの話から良いのか？ ネタバレ過ぎやせんじやろうか」

「別に大丈夫でしょう。タイトルの時点で読者の大半は正体を察していらつしやったでしょうし」

「ひよりブレードか——まあそれは次回のウラガタリで、じやな。まだ今回で正体は分かん」

「ですね——それはそれとして。阿良々木さんは相変わらず醜態を晒していきますね。流石は鬼です」

「トポロジとかなんとか言われても分かる訳無かろうに。なんじやトポロジって。トーラスとドーナツの違いくらい意味が分からん！」

「トーラスですか……どうやらそのトーラスというのも、トポロジ関連の単語らしいですよ」

「なんじやと!?!」

「【こよみトーラス】でメインキャラだった方が何を仰っているのです」

「おのれ……いや、僕は常々思うのじやが、なぜ【こよみドーナツ】ではなく【こよみトーラス】なのかさっぱり分からんのじや。なんなんじやろうな？ 予測不能性を出したかったのかの？」

「結構タイトルから予想したものと内容が違う話が多いですよね、【暦物語】って」

「【こよみマウンテン】【こよみなツシング】【こよみデッド】はまあ確かにその通りじやった。【こよみストーン】や【こよみフラワー】、【こよみサンド】【こよみウオーター】【こよみツリー】は分かる。【こよみティー】【こよみウインド】もよしとしよう。じやが問題は【こよみトーラス】……と【こよみシード】じや」

「なんで一瞬言葉に窮したんですか」

「いや……並べてみると案外そのままタイトルじゃない、って思ってた」  
「まあ問題なのは何故ドーナツではなくトーラスなのか、という話ですし」

「あれ本編ではトーラスという単語よりドーナツの方がよっぽどよく出てきていたと思うんじゃないかな。しのぶドーナツへの布石か？」

「どんなストーリーになるんですかそれ……」

「儂がポンデライオンとその仲間たちと激闘を繰り広げる熱血な物語となるろう」

「熱血ですかー」

『《傷物語Ⅱ 熱血篇》、2016年夏公開！ 我があるじ様の貴重な雄姿、見逃すでないぞー！』

「あなたも結局宣伝してるじゃないですかっ!？」

「007」

「いやあ、まさにこの時は天にも昇るような心地じゃったわい！

ドーナツの山をひたすらに食い続けると言う快感……こんなもの知ってしまえば、もうこれより少ない量のドーナツなんかでは我慢出来ん！」

「いやあ、阿良々木さんには本当に無理をさせてしまいましたね。この場を借りてお礼をいいますようか」

「賛成じゃな！ 今回ばかりは儂も心から礼を言うぞー！」

「店員さん、本当にありがとうございます！ あと阿良々木さんも」  
「名も知らぬ店員よ、儂はうぬに本心からの謝辞を述べよう！ ありがとうございます！ あと我があるじ様」

「ではここで忍さんに質問です！ 今回食べたドーナツの中で、どれが一番美味しかったですか？」

「むう……うぬはなんと残酷な質問をするのじゃ？ 儂に？ 選べと？」

「む、無理ですか」



「全部美味に決まっておろう？ いやまあゴールデンチョコレートがやっぱり一番のお気に入りではあるよ？ あるけれども！ ミスタードーナツで販売されておるドーナツが不味い訳ないじやろうがそれくらい考えて物を言え宣伝娘!!」

「宣伝娘!?!」

「うぬによく似合っておろう？ うぬは迷子でもツンデレでもない……宣伝娘じゃ!」

「ぐっ……じゃ、じゃああなたはどんなんですか!? あなただつてミスタードーナツの宣伝をこごぞとばかりに叩きこんでくるじやないですかっ！ あなただつて立派な宣伝娘です!」

「よいかハチクジ。人間誰でも生きておるだけで何かを意識的に、或いは無意識的に宣伝してしまう存在——言わば、命ある広告塔のじゃ」

「おつと何か言い始めましたよ」

「そう考えれば、どうじゃ？ 別に宣伝娘というあだ名が悪いものではないように思えるじやろう？ じゃつて当たり前のことをしておるだけなのじゃから！ これは蔑称でも悪口でもなんでもない——宣伝娘とはつまり、ただの娘であることと同義じゃ!!」

「ストレートに悪口じやないですか!!」

[008]

「誰の頭がサザエさんみたいじゃと!?!」

「ひとつことたりとも言つてませんから!! アトムとさえ言つてませんから!! 条件反射的に危ないネタを使うのは止めて下さい!!」

「別に良からう。ある意味タイムリーなネタじゃし」

「タイムリーだからこそやめろと言つているんですつ!」

「まあ、僕はよく知らんからこれ以上何をネタにすれば分からん。これ以上は控えよう——微妙な知識でネタに走ればファンから袋叩きにされることは目に見えておる」

「よく知らないなら止めましょうよ」

「この栗の木、元ネタはなんじゃったかの？」

「三度栗伝説ですね。詳しくはググってくれと分かれますけれど、この話に出てくる栗の木とは完璧全くの別物です。あくまで栗が三つ生っているという点、ただそれだけの元ネタです」

「もつと良いネタはなかったのか？　なんでまたこんな微妙な形で採用しておるんじゃ」

「その答えはただ一つです。栗に関する伝承が中々見付からなかったから！　はい、以上です！」

「もつと詳しく調べろよ。もうちよつとやりようがあつたじやろうが」

「まあこの栗の木自体が飽くまで前座に過ぎませんし、それに本当はこの木のシーンって、当初のプロットでは存在しなかった後付けのシーンなんですよね」

「ほう？　そうなのか」

「えーつと……まあこれくらいなら言っちゃってもいいですかね？」

この後【其ノ参】で栗鼠の怪異が登場するんですが、本来この回で登場するメイン以外の怪異って、実はそいつだけだったんですよね。いやまあ私と忍さんとかは省いたうえで」

「ではちよつと前に登場した蛤も？」

「はい。あれは本当に後付けですね！　当初はあれ、影も形もありませんでしたから」

「ほほう。となると……初期プロットってどんだけ薄味だったんじゃ」

「プロットとは言いますが、あくまで大雑把な流れでしかありませんけど。基本この物語って、最初に結末を決めて、どうやってそこに持って行くか考えながら概ねの流れを作っていくという手法を用いられて作っています」

「ふむ。つまり、言ってしまうえばそもそもラスト以外全てが後付けでしかないと言う事か」

「そういうことになりますね。しかもこのシリーズ自体実は衣、■、裂、■、裔、裁の順でプロットが組まれていますので、裔物語と裁物

語は物語自体が後付けみたいなものなのです」

「はー、計画性のない……」

「ですね。……そして作者の計画性のなさが最も如実に表れているのが、このウラガタリな訳で……」

「じゃな……」

「009」

「〈物語〉シリーズ オフシーズン最新刊【業物語】、好評発売中！ お

求めはお近くの書店にて!!」

「やはり開口一番に宣伝してきたなこの娘」

「本編にも書いてあるように、宣伝ネタはこちらでしか出来ませんか。そして作者ネタもここだけですし——まあやれるときに好き放題やっておきましょうという寸法です！」

「ふむ。しかしそうか、これが書かれたのは【業物語】発売前だったのじゃな……時間の流れというのは全く早いほう」

「あなたが言うのと重みがありますねー。何せ約六百年も生きて吸血鬼なんですから！ しかし六百年……気も遠くなるような時間ですけど、そんな期間、いったい何をしてお過ごしになられていたのですか？」

「何をして、と言われてもな——まあ、その辺の国をぶらぶらと歩き歩いておっただけじゃよ。孤高の旅人というやつじゃ」

「孤高ですか。憧れますね！ たった一人で、誰の目も気にせず国から国へと渡り歩く旅行者……くう！ かつこいいですっ！」

「そんな楽しいものでもなかったがな……特に、人間だった頃は毎日が地獄じゃった」

「地獄ですか」

「そう、地獄——まあその辺りは【業物語】を読んできれば概ね察することが出るじゃろうて」

「やっぱりあなたも宣伝娘ですよ……何言ったところで宣伝に帰結するじゃないですか」

「かかつ——まあ、もうこの会話が世に放たれる時点では【裔物語】が完結しているらしいので言ってしまうが、ここからの展開、特に【裁物語】以降からは【業物語】を読んでおらんとかなり辛い部分も出てくると思うのじゃよ。少なくともアニメオンリー派は何が何だか分からんじやろう」

「まあアニメオンリー派の皆様にいきなり核心に触れるレベルのネタバレをぶち込んだこの小説ですし、その辺もう今更な気もしますけどね……そしてそれも伸びない要因の一つ、と」

「今後の展開も、原作がどう出るかによつて大幅な路線変更を強いられ、その結果意図せずに最新刊のネタバレを組み込まざるを得ない時だってあるしな。まあ【裁物語】は完璧に意図してのネタバレ全開なのじゃが」

【裁物語】は一番路線変更を余儀なくされましたからね——というか忍さん、これ【裂物語】のウラガタリですよ？ あんまり先々のことについて語りまくるのはちよつと控えましょう……今後のウラガタリのネタが無くなってしまいます」

「えー？ いいじやろうが、どうせウラガタリなんて殆ど誰も見とらんのだじゃし」

「そういうこと言うのやめましょう!! 第四回目にしてウラガタリ自体の意義を問うのはやめて下さいっ!!」

「いや実際儂思うんじゃよなー。本編だけを待っておる読者は、ウラガタリを放送しておる間は失望したような気分になるじやろう？

人離れるじやろう？ あら不思議打ち切りに！」

「……まあ言いたいことは分かりますよ。確かにこのウラガタリの形態は何らかの改善が必要でしょうね」

「じやろう？ よしー。じゃあこれは次回のウラガタリの議題ということで、今回のウラガタリはここまで！ 【其ノ貳】、終了じゃー！」

「強引ですね!!」

## ウラガタリ ひよりブレード (下)

「010」

「いきなり謎の場面から始まりましたね」

「謎だね」

「これをいきなり見せつけられた読者の心情が知りたいですね。急展開に次ぐ急展開で無茶苦茶じゃないですか」

「うーん。確かにこの構成は疑問に思う所だね——そもそもこの《ひよりブレード 其ノ参》って、このシリーズでは圧倒的に短い話なんだよね」

「そうです。恐らくそこが大半の読者が抱いていた疑問点だとあたいは思うのですが——なんで他は千の位で四捨五入したら二万字になるような話ばかりなのに、これはこんなにも短いのでしょうか？」

「ええっと。一応それにはちゃんとした……とは言い難いけれど、理由があるんだよ。もともとこの《ひよりブレード》っていう話は全四話構成になる筈だったの。でも【裂物語】自体は全六話で構成される予定だったらしいよ。ほら、【歴物語】の《まよいカースト》。あれって初期設定では《第肆話 まよいカースト 其ノ壹、其ノ貳》になる予定だったんだよね。でもいざ書いてみると《ひよりブレード》が思いの外長くなっちゃって、逆に《まよいカースト》は短くなっちゃったんだよ。それで、【裂物語】は《ひよりブレード》オンリーの全五話になっちゃったの」

「は、はあ」

「でも《まよいカースト》をそのままお蔵入りにしちゃう、っていうのはちよつと問題があつてね。この話、元は本編の一部だっただけあつて今後の物語の伏線を張る話だったの。だからカットする訳にはいかない。じゃあどうするか、って作者さんが考えたところ、ちよつど配信が始まった短編アニメ【暦物語】——あ、そういえば、この【暦物語】の配信期間は2016年4月30日土曜日までなので、まだ見ない方はお早めにご視聴下さい」

「おお、流れるような宣伝。ウラガタリにおける暗黙の了解である宣

伝もあつさりとマスターしてしまうとは、流石永遠の委員長と呼ばれるだけあります」

「委員長は関係ないけどね。というか何そのキャッチコピー……話を戻すけど、そう、【歴物語】が始まって、そこから着目を得て——というかほぼ丸パクリして作られたのが短編集【歴物語】なの。《まよいカースト》は本当に短編以外の何物でもなかったから、その【歴物語】に含まれることになったんだって」

「はあ……そういう裏事情があつたのですね」

「うん。……えつと、話しちやつても良かったんだよね？ このウラガタリって副音声とは違って、こういう裏設定とかを語るのが主な趣旨なんだよね？」

「そうなのですか？ すみません、あたいそこまで詳しく聞いていないもので……でも、きつとそうだと思います」

「んん。副音声とは大分勝手が違うなあ。これは気を引き締めてかからないとね」

「気を引き締めて、ですか。引き締めると言えば、羽川さんって引き締まったいい体してますよね」

「はい!？」

「むちむちと言えば確かにそうですが、けれど太っているのかといえはそうではないという絶妙なラインを保ったボディライン……阿良々木お兄ちゃんの言っていた通りです」

「あの男、純粋な子どもに何を吹き込んでいるの……」

「011」

「ほらほら日和ちゃん、そんなことを言っている間にシリアス展開が始まってるよ。本編ではおふざけがなくなりつつあるよ」

「あ、本当ですね……ああ、ここですか……」

「一気にテンション下がったね」

「いやもう本当、ここに関しては阿良々木お兄ちゃんや八九寺お姉ちゃん、忍野お姉ちゃんに申し訳が立ちません……あたいの軽率な行

動の所為で皆さんを危機に晒すことになってしまったのですから」

「過ぎた事は悔やんでも仕方ないよ。それに日和ちゃんはやんと反省してるんでしよう？　じゃあそんな風に引き摺る必要は、ないんじゃないかな？」

「ですが……」

「引き摺る」と反省する”は全然違うんだよ、日和ちゃん。”反省”はずつと心に抱いておくべきものだけれど、”引き摺る”っていうのはいつまでも続けていちゃあ駄目なことなんだよ。いつまでもそのことを気に病んで引き摺っちゃうのは仕方のない事かもしれないけれど、でもそれは殊勝という言葉からはかけ離れている——寧ろ悪いイメージを与えてしまうことが多々ある。だから、ちゃんと反省したなら、もうそれでこの件に拘るのは終わり。あくまでもこの一件は今後の成長のための一部分でしかないと思うべきだと、私は思うな」

「羽川さん……はい。助言、ありがたく頂きます」

「助言だなんて。私はただ思っただ事を言っただけだよ。そんな大袈裟なことじゃあない——それに、あんまり私が言えた事じゃないしね」

「いいえ！　あたい、羽川さんの言葉にいたく胸を打たれました。羽川さん！　羽川さんのこと、羽川先生って呼んでいいですか!？」

「先生!?!　いやいや、なんで先生!?!　普通に呼んでくれていいんだよ?」

「ふ、普通……羽川お姉ちゃん、とかでしようか」

「うん。それでいいよ」

「ですが、お姉ちゃんなんて呼び方では羽川お姉ちゃんの偉大さが分からないと思うんです！　皆さんには伝わりませんよ！　それでもいいんですか!?!　あたいは嫌です!!」

「私は偉大なんかじゃないって……もう本当、あの二人には今度会った時お説教しないと」

「いえ、これはあたいの意見です。確かに多少あの二人に引き摺られている面もなきにしもあらずですけど、羽川お姉ちゃんの背中から後光が見えるのは否定しようがありませんよ、はい」

「後光なんか発してません！」

「最早太陽と見紛うほどの明るさです」

「もう！ 日和ちゃん、あんまり人をからかうものじゃないよ」

「ですか？ あたいは褒めていただけなのですが……褒められるのを嫌がるだなんて、羽川お姉ちゃんはひねくれ者なんですわね」

「ひねくれ者……なんだか新鮮な評価だけれど——うん、そうかも」

「へー。じゃあ、同じひねくれ者でも、八九寺お姉ちゃんよりもよっぽどこじらせているということなんですね。分かりました、後で然るべき方に報告しておきます」

「うん!？」

「012」

「微刀『釵』——ね」

「はい。これがあたいの真名です」

「奇策士とがめと鑢七花が八月に蒐集した刀——これって、どうなの？ 日和ちゃんはその蒐集された”微刀『釵』”そのものなのかな？」

「えっとですね……実はそれ、あたい自身もよく分かっていなくて。あたいはその頃の記憶を確かに持っていますけれど、かと言って同一かと問われると……どうなんでしょう？」

「ふむふむ……じゃあやっぱ日和ちゃんは、その”刀集めの際に蒐集された日和号”を雛型、モチーフとして作られた模造怪異ってことなのかな？ 現代に蘇えったと言う訳では無くて、あくまでもその記憶を引き継いでいる別物の怪異、なのかな」

「そうなのですか？」

「いや、推測でしかないけれどね」

「推測ですか……そこですよ、羽川お姉ちゃんの強みって」「強み？」

「阿良々木お兄ちゃんが言っていました。羽川お姉ちゃんはその知識も半端ではありませんが、ただ知識として留めておくだけではなくて、きちんとそれらを有効活用してしまうところが、羽川お姉ちゃんの”



本物”たる所以だと」

「本当阿良々木くんは大袈裟だね……どれだけ私を神格化すれば気が済むのよ」

「おや。ひねくれお姉ちゃんがまた何かひねくれたことを言っています」

「う……………」

「やれやれと言わざるを得ませんよ、羽川お姉ちゃん。貴女はもう少し横柄になるべきだとあたいは思いますね。そんな風に謙虚なばかりだと、逆に鬻蹙を買ってしまいますよ——先程の言葉をお借りすれば、殊勝という言葉からはかけ離れていると言わざるを得ませんね」

「おつと…………そのまま返されちゃった」

「確かに謙虚というのはきつと美德なんでしょうけれど、でも美德だって行き過ぎれば悪徳になってしまいますよ。なんてあたいが言わなくても、羽川お姉ちゃんはきつと百も承知なのでしょうけれど……………あの、何でしたっけ？ 何でもは知らないけど、何でも知ってる、みたいな…………えつと…………」

「…………何でもは知らないわよ、知ってることだけ」

「はい、そうです。ありがとうございます」

「はあ……………んん？」

「あ。別にこの後何もないですよ？ からくり人形ゆえか、あたいは人を諭すということが大の苦手です……………はい、今のは貴女からその台詞を引き出すためのものでした」

「…………ん、オツケー。分かった、概ね分かったよ……………うん。前にもこんなことあったな……………」

「では、次に参りましょう」

「……………そうだね」

〔013〕

「見事に攫われてしまいましたね」

「だね。でもある意味、ヒロインらしいといえばヒロインらしいかも」  
「律し鼠……何故ここで栗鼠がモチーフとして選ばれたのかというのは、この金髪ねーちゃんが語っている通りなのですかね？」

「金髪ねーちゃんって……えっと、それはメタ的な意味ではなく？」  
「いいえ、メタ的な意味です」

「だよ。逆にそうじゃなかったらどう答えれば良いのか分からなかったよ……とは言っても、名前の設定は殆ど阿良々木くんが地の文で言っちゃってる通りなんだよね。栗鼠っていうのはその名の通り鼠だし、”律し”っていうのも名前からの連想——ただし、この”りっし”は”りす”からの連想ではなく、実際は”りっす”からの連想なの」

「……それって、何か違うんですか？」

「うん。連想という点では同じだけれど——”栗鼠”っていう字はね、元々は漢語で”りっそ”或いは”りっす”っていう読み方だったの。それが日本語における”りす”の語源とされているんだって」  
「はー。えっと、じゃあつまり、この”律し”を連想するにあたって、実は”りす”という読み方は無関係だった、ということですか？」

「そういうこと。”りす”になる一つ手前が、本当の語源だね」  
「な、なるほどです！」

「栗鼠が登場怪異として選ばれた理由は、織崎さんが告白してくれている通りだね。身動きがとれなくなった隙に日和ちゃんが攫われるというこの流れがまず決まっていて、どうやってその結果に至るか肉付けしていく中で、作者さんがぱつと浮かんだのは、実は鼠なんだって。病原菌のイメージだね——でも、ただ鼠が襲いかかるだけじゃあ展開的に芸がないから、そこに栗というギミックを追加する事の出来る栗鼠に白羽の矢が立ったんだとか」

「ほう。つまり、ほぼ適当に選ばれたと言っても過言ではないということですね！」

「まあ、そこまで深い意図はなかったみたいだし、適当と言えば……まあ、適当なんだろうね」

「適当で作られた癖にこんなに強いのですか。ストーリー上の補正が

かかり過ぎではないでしょうか」

「ストーリーによる補正、というかタイミングによる補正だね。阿良々木くんたちは完全に虚を突かれた形だし、なまじ忍ちゃんが怪異探知能力を少しだけ持っていたというのも相まって、こればかりはタイミングが悪かったね。それこそ、初期設定の鼠だったら、きつとすぐに居場所を特定されて倒されていただろうし」

「なるほどです。なんだかんだで、最適な形に収まった、ということなのでしょうかね」

「だね——其ノ參、ここまで」

「014」

「八九寺お姉ちゃん肝が据わっていらつしやいますね。だからこそ、あたいはあの方を信仰しているのですよ」

「そうだね。八九寺ちゃんって、阿良々木くんが親友と呼ぶだけあってやっぱり彼とそっくりなんだよね——誰かを放っておけないお人好しさんなんだよ」

「お人好しですか。……あたかもこんな風に、誰かの為に奔走できるようになりたいですね」

「日和ちゃんならきつとなれるよ。あ、でも、奔走するのはいいけれど、暴走しちゃ駄目だよ？　ちゃんと冷静になって行動しないと」  
「ふむ。それもそうですね。冷静——確かにオーバーヒートは避けなくてはなりませんね。機械的に言えば」

「それは違うキャラの口癖だよ……っていうか、日和ちゃんってオーバーヒートしちゃうの?」

「はい。あまりにも日光が強すぎる日に激しい動きをしてしまうと、なんだか体がぼかぼかかと火照って来るのです。しかしそのまま行動を続行してしまうと、そのままどんどん熱くなって暑くなって、終いには体内から炎が漏れ出してしまうのです!」

「炎が漏れ出すって、それ相当な大事だよね!?　え、それって怪異モードの時だけ?　それとも、人間モードの時も?」

「人間モードの時もです」

「いや、軽く言うけれど日和ちゃん、それ普通に生命の危機に直結すると思うんだけど……」

「大丈夫です。そうならないために、あまりにも体内温度が上昇すると自動的に冷却水が放出される仕組みになっていきますゆえ」

「汗とはまた違うんだね」

「はい。でも出来るだけ人間らしくということなのか、水は冷たい塩水を使用しています」

「妙なこだわりが感じられるね……」

「まあ滅多なことではオーバーヒートなんてしませんかね——夏真っ盛りの日差しの時くらいですよ」

「ふうん。……でもそれって、江戸時代頃の話だね。今の時代の猛暑日と比べると——日和ちゃん、大丈夫？」

「何がですか？」

「……なんだか日和ちゃんの今後が凄く心配になってきたよ。多分昔の猛暑日と今の猛暑日とは、結構な差があると思うんだよね。それに年々暑くなってるし……日和ちゃんに限らずとも、精密機器にとっても現代の夏は煉獄と形容してもおかしくはないからね」

「れ、煉獄ですか？ 地獄なら聞いたことがありますけれど……獄刀の暗喩ですか？」

「獄刀？」

「あ、違うんですか。お父様——あ、四季崎記紀様のことです——が仰っていたのですが」

「……獄刀——四季崎記紀——え、日和ちゃん、それって」

「いえ、違うのならばお気になさらないで下さい。それにあたいの体の事も。あたいは羽川お姉ちゃんが思っている以上に頑強ですから」

「……そう？ うん、なら安心だね」

「はい。安心して下さい」

「了解——」

「暴力的な妹さん方をお持ちなのですね、阿良々木お兄ちゃんは」

「暴力的……とは、ちよつと違うけどね。火憐ちゃんも月火ちゃんも、まだちよつと加減つてものが分かってないだけだよ」

「それはあまりフオローになつていないような気がしますよ羽川お姉ちゃん……阿良々木お兄ちゃんの言を信じるならば、妹さん方はもう既に十三歳を過ぎておられる筈。ならば立派な大人と言えるでしょう。なのにまだ未熟と言うのは、些か発達が遅いように感じます」

「うーん……確かに江戸時代において、女子は早いところでは十三歳から大人として扱われていたと言うけれど、今と昔では基準が違うからね。今は男子も女子も二十歳から大人として扱われることになっているし——昔はそれだけ社会進出が早かった訳だから、育て方も今よりよつぽど厳しかったんじゃないかな？ ……まあこの辺りは、日和ちゃんの方が詳しいかな」

「あ、いえ。ご期待に添えず歯がゆいのですけれど、あたいは世を知らないもので……生まれてからずっとお父様の工房の警備を任されていたため、かの時代の文化などは全く知らないのです。知っていたとしても、本当に少しだけです」

「そうなんだ。ある意味箱入り娘だったんだね、日和ちゃん」

「ですから今は毎日が楽しくて仕方ありません！ 阿良々木お兄ちゃんや八九寺お姉ちゃんと街中を自由に歩き回ると言うのは、この神崎日和にとつて無類の幸せであります！」

「自由、か。うん、日和ちゃんのその気持ち、ちよつと分かるな」

「分かりますか！ 流石羽川お姉ちゃん、何でも分かっていますね！」

「何でもは分からないわよ、分かっていることだけ」

「おお、変則パターン！」

「うーん、小さい子のフリを無視するのはあまりにも大人気ないからのもつてみたけど、今のはちよつとしっくりこないわね……何その会心の笑みは」

「ふふふ……ああいえ。これで阿良々木お兄ちゃんに良い報告が出来るということを密かに喜んでいただけです。お気になさらず」

「うん、全然密かじやないから。おもいつきり表に出てたから——今ので確信に変わったよ、日和ちゃん」

「はい？ 何がですか？」

「阿良々木くんの陰謀だよ——もう間違いない。いや、それまでの日和ちゃんの発言でもう分かり切っていたのだけれど、決定打がなかったからね……うん、これが終わったらすぐ旅に戻ろうかと思っていたけれど、お陰で寄るところが出来たよ」

「??」

「気にしないで——じゃあ、そんな訳で次にいこうか」

「あっはい」

「016」

「傷物語〈Ⅱ 熱血篇〉、2016年夏ロードショー！ です！」

「律儀に宣伝するね」

「八九寺お姉ちゃんの意志を継いでおりますゆえ——それに、傷物語には羽川お姉ちゃんも出演していらつしやるのでしょうか？ だったら尚の事です」

「う、うーん……私にとっては、あんまりあの頃の話って知られたくないことなんだよね。この点は、阿良々木くと完璧に意志が一致してる」

「そうなのですか？ えーっと……なんでしたっけ？ 【傷物語Ⅰ

鉄血篇】では、羽川お姉ちゃん、下着を晒したんでしたっけ」

「うん、まあね……いや、下着を晒したっていうのなら、もう【猫物語】とかでも達成しちゃったりしている訳だけれど……」

「下着を晒したくらいでどうしたというのです？ というか、あの程度のものを晒したくらいで恥ずかしがってでは羽川お姉ちゃん、江戸時代では暮らせませんよ。昔はふんどしか、或いは履いていないかのどちらかでしたからね」

「いや、そんな極論を言われてしまうと困るんだけど」

「因みにあたいは言うまでもなく履いています」

「誰も聞いてないのに自分からなんというカミングアウトを!」

「当然でしょう。だってあたい機械ですよ? 先程申し上げました通り、一応日光が動力源なので割と熱には強いですが、万が一の為に出来る限り体を冷却しなければなりません。ならば、余計な布は出来るだけ着けない方がいいに決まっています」

「い、意外とまともな理由だった……」

「地肌を晒すのと比べれば、下着を晒すなんてなんてことないでしょう?」

「いやまあそうなんだけど……多分【熱血篇】では、地肌なんてレベルじゃないものを晒しちゃうと思うんだよね……」

「胞衣えなですか?」

「そんな訳ないでしょう!? いや分類的には近いかもしれないけれども——待って待って日和ちゃん、もうこの話はやめよう? このままだどこの小説、割と真面目にR-18タグをつけなくちゃいけないから」

「はー。なんだかもう遅いような気がします、はい。承りました」

「他人事みたいに言うけれど、大概日和ちゃんの所為だからね」

「017」

「うーん、このシーンは私にとっては黒歴史みたいなものだね」

「え? そうなのですか? やつと登場したシーンであり唯一登場したシーンだというのに、黒歴史とは。此は如何に」

「いや、もう少し考えていれば、残る十一本の刀の情報を阿良々木くんに送るという選択が出来た筈なのに、それをしなかったなんて……大失態だよ。寝起きがはつきりしているとは言ったけれど、やっぱり寝惚けていたみたいだね」

「はあ。寝惚けですか。人間は大変ですね」

「日和ちゃんはそういうこと、ないの?」

「基本的にはありませんね。確かに睡眠から覚めた後は記憶の読み込みに少々時間がかかるため受け答えが曖昧になります」

「うん、それを人は寝惚けてるって言うんだよ日和ちゃん」

「なんと。初耳ですねそれは」

「そうなんだ……機械も大変だね」

「いえ、そうでもないです——やっぱり大変なのは人間ですね」  
「ん？」

「あたいが記憶を読み込む際は、人間モードの時だけなのですよ。機械モードの際のあたいは、そもそも人間的な意識、理性というものを所持していませんから、記憶を読み込む必要性がないのです」

「へえ。記憶を”読み込む”っていうと機械っぽいけれど、実際は人間モードの時だけ、か。確かに、あべこべっぽいのはあくまで表現の問題であって、機械としての日和ちゃんを考えれば当たり前のことだね」

「その通りです。羽川お姉ちゃんともあろう者がこのようなことをすぐに分からないとは、寝惚けているのですか？」

「……そう言われても仕方ないとは思いますが、中々イラっとくる煽りだね、それ」

「時差ボケしているのですか？」

「それとこれとは関係ないとは思いますが、確かに時差ボケはちよつとあるかも。たまに一分くらい間違えちゃう時があるし」

「……あたいは時間の間違いなんてありませんが、多分人間基準ではその程度のことを時差ボケとは言いません」

「うん？ そうかな。でも時間を間違えちゃうなんて、私時間を意識するようになってからは一度もないよ？」

「羽川お姉ちゃん。少々言い辛いのですが、貴女本当に人間ですか？」  
「純粋な……とは言い難いけれど、一応人間です」

「ですか。……なんだか貴女は、人間という生命体が所持する基本スキルのハードルをどんどん上げていらっしやるように思うのですが」  
「そう？」

「いや自覚しましょうよ」



「……………」

「は、羽川お姉ちゃん？　なんだかお顔が怖いですよ」

「……………ああ、ごめんね。この嫌な子が嫌らしく阿良々木くんを妨害しているシーンをみると、ちよつと心の奥深くからざわつとした感情が湧きあがって来るもので」

「扇お姉ちゃん、ですか。この方のことお嫌いなんですか？」

「ううん。別に嫌いじゃあないよ。ただ嫌なだけ。生理的に受け付けられないだけ。見ていると思わず燃やしたくなる程度に不快な気分になるだけ」

「それを世間一般では嫌いというのでは」

「私は扇ちゃんとは違うからね。扇ちゃんは私のことを嫌っているのでしょうけれど、私にとってはそんなの、後輩の僻み以外の何物でもないんだよと無理矢理言い聞かせているからね。先輩として、後輩のことを安易に嫌いって言っちゃうのは大人気ないでしょう？」

「でも嫌いなんですよね」

「否定はしないよ」

「羽川お姉ちゃんにも嫌いな人って居たんですね……………」

「うーん。そうだね……………苦手な人はいるけれど、嫌いとはまでいくと……………どうだろうか？　扇ちゃん以外には思い付かないな」

「苦手な人。羽川お姉ちゃんが苦手としている方……………誰ですか？」

「そうだね——まず、臥煙伊豆湖さんはちよつと苦手かな。あの人の前に立つと、なんだか全部が全部見透かされているような気分になって——忍野さんも同じような方だけれど、その見透かし方が違うというか」

「はあ。会ったことがありませんね」

「ドラマツルギーさんとエピソードくん——は、ちよつと違うかな。苦手とはまた違うジャンルというか——双子の吸血鬼や二人組の信徒も、苦手って訳ではないね」

「はあ。誰一人知りませんね」

「うん。だろうね。知ってたらびっくりだよ」

「あたいは羽川お姉ちゃんのようにはなれませぬね——読者の皆様が羨ましいです。この話についてこれるだなんて」

「そうかな。私の苦手意識の話なんて、聞いても誰も得しないよ?」

「ええ、得はしませんでしょうけれど、羽川お姉ちゃんの一言一言には多大な徳が含まれておりますゆえ」

「神格化しすぎ……」

「あたいのこと、苦手ですか?」

「ある意味、苦手になってきたかも……」

[019]

「いよいよ決戦が近いですね」

「近いね」

「これはもう我慢できません、一気に読み進めてしましましょう!」

「まあ、特に話すような裏設定なんかも、この場面では無いからね——この怪異に関する設定は、もうちよつと先で」

「では、其ノ肆ここまでです!」

[020]

「其ノ伍です!」

「色々触れたいところがあるから先に言っちゃうけれど、羽川ペディアって呼称はもう少しどうにかならなかったのかな」

「おや、不満ですか」

「不満というか、不適切というか。encyclopedi aは百科事典という意味だけれど、そこまで言われるほどの知識量は誇っていないよ」

「はいでした。羽川お姉ちゃん特有の過剰な謙遜」

「いやそんなんじゃ」

「じゃあ聞きますけれど羽川お姉ちゃん。貴女は広辞苑とやらに載っている言葉を全て記憶していますか?」

「え？ それは勿論。覚えてるよ」

「だそうです。皆さん、これからは一切の遠慮なく、羽川お姉ちゃんを羽川ペディアさんと呼びましょう」

「いや待って、それとこれとは関係ないよね!？」

「はい、これ以上羽川ペディアという言葉に触れるのは時間の無駄です。では次の話題へ参りましょう」

「急に仕切ってきたね!？」

「どうです？ このあたいの姿。挿絵がないので、参考として『刀語 第八巻』を見て頂く事になりますけれども」

「どうって……うーん、阿良々木くんにはああ言ったけれど、やっぱり、どこからどう見ても刀には見えないよね。どう見てもからくり人形だよね」

「そうですよね」

「いや、日和ちゃんが言っちゃうともうおしまいでしょ」

「いえいえ、あたかも常々不思議に思っているのですよ。どうしてお父様はあたいを、”からくり”ではなく”刀”と言い張るのか。虚刀流もそうですけれど、あの方は自分が作成したものを刀と言い張らなければならぬとでも思っているんじゃないでしょうか」

「どうだろうね……でも、変体刀の中には西洋甲冑やくない、それにそもそも刀身自体がないものだってあるし、どれだけこじつけを重ねたところで、それらをきっぱりと刀であると断言するのはやっぱり無理があると思うな」

「ですよね」

「だから貴女が言っちゃうと元も子もないから」

「021」

「がらくた王女……あたい、そんな陰口を叩かれていたのですか」

「知らなかったの?？」

「はい。初耳です。がらくた王女……王女はまあ良いとして、がらくたというのは、どうでしょう? これは最早悪口と言っても差支えな

いいのではないでしょうか」

「日和ちゃんのことをがらくたって言うてるんじゃないと思うよ？  
あくまでもがらくただらけの場所にいる王女だから、がらくた王女っ  
ていうだけで」

「さて、どうでしょうね……まあ実際、あの頃のあたいは怪異ではあり  
ませんでしたから、一切の感情を持たない殺戮マシンでした——陰  
口も、悪口も、甘んじて受け入れましょう」

「そう——日和ちゃんがそれでいいなら、私は何も言う事なし。……  
ねえ日和ちゃん」

「はい。なんででしょう」

「これ、私は知らないんだけどね。師走——つまり、日和号が破壊され  
た時、一体何があったの？」

「さあ？」

「いやいや……」

「あたいはただ言われた通りに動いていただけでしたからね。命令の  
背景なんて知る必要がありませんでしたから」

「でも、壊された時のシチュエーションとかは？ 覚えてないの？」

「中々酷なことを聞きますね……いえ、なんとなくは。確か、気に食わ  
ない邪魔な雑魚と一緒に嫌々ながら共闘して、瞬殺されたような気  
が」

「言い方……よっぽど嫌だったんだね」

「はい。あの女……誰でしたっけ。確か、はいがおう灰賀欧とかいう奴だった気  
がします。ええ、そうです。間違いありません」

「灰賀欧……確か、将軍家直属の御側人『十一人衆』の一人、だったよ  
ね」

「そうです。よくご存じですね。流石、何でも知っていらっしやる」  
「言わないよ」

「言いませんですか。……いや、本当に邪魔でした。ぶっちゃけ、あの  
女に従うくらいなら金髪ねーちゃんに従っていた方がよっぽどまし  
というものです」

「そっまで言っつ？」

「どちらにも気に食わないですが、金髪ねーちゃんはあたいの邪魔をしないでしようからね。のびのびと斬殺出来ます」

「日和ちゃんって、結構過激な子なんだね……」

[022]

「いやあ、凄まじい濃度の戦いでしたね」

「凄いね日和ちゃん。日和ちゃんってあんなに強いんだ」

「いえいえ。凄いと言うなら羽川お姉ちゃんですよ。なんであたいの繰り出す技を全部知ってるんですか。あたいの手の内全て読まれてるじゃあないですか」

「別に凄くもなんともないよ。私はただ、原典に書かれてある事だけを阿良々木くんに教えただけなんだから」

「はいはいみなさーん。まーた羽川お姉ちゃんのせんがくひさい主張タイムが始まりましたよー。いえーい！」

「何そのハイテンション……いや、いくらなんでも浅学非才とまで言う気はないよ。そこまでいくと謙遜なんてレベルを通り越して嫌味にしか聞こえないからね」

「あれ、自覚あつたんですか」

「流石にそれくらいはね。私も昔と比べてちゃんと成長してるんだよ」

「昔はどこまで自分を卑下してたんですかね……」

「でもね日和ちゃん、こればかりは誰にだって出来ると思うよ。だって、別に考えてない訳だし……本当、本に書いてあつたことそのままなんだから」

「そうなんですか？ ではこのとき本が手元に合つたんですね。凄い偶然です」

「え？ いやなかったけど」

「え？」

「ん？」

「んー……すみません羽川お姉ちゃん。それはつまり要約すれば、”

思い出して” あれらの対策を伝えたということですか？ 何も見ず？ あれだけの量を？ 正確に？」

「うん」

「羽川お姉ちゃん」

「何かな？」

「それは……あの……」

「どうしたの？」

「いや、どうしたの？ って……そんな風になんでもないような言い方しますけど、人間基準で考えれば、多分それは異常ですよ」

「異常は言い過ぎだと思うな」

「言い過ぎではありません。というかこの言葉でさえ足りません——何ですか貴女は。流し読みした程度の本の内容を正確に覚えて、しかもそれをぱっと思い出せるのか……そんなことが出来るのは機械くらいですよ。羽川お姉ちゃん」

「ん。んー……そうかも？」

「そうなんですよ。全く……貴女、世の中の機械のうち何パーセントかは倒せますよ」

「大袈裟な……あ、そういえば」

「え、話題変えるんですか」

「いや、だってまだこの鶏怪異についての設定をお話してないし……一応今後の予定では、もうこの怪異は登場しない可能性が高いから、ここで言うっておかないと」

「はあ。そうですか。ではどうぞ」

「えつとね。まずこの怪異は鶏の怪異だけれど、より厳密なことを言うなら、東天紅鶏の怪異なの。東天紅鶏というのは、日本三大長鳴鶏の一種としても知られている天然記念物指定の鶏。だから名前はその東天紅をもじって、『陽天紅』っていうんだって」

「陽天紅ですか。……えつと、何故そこで鶏を選んだのですか？」

「ほら、鶏って朝を告げることで有名じゃない？ だからまず、時間系の要素として候補に挙げられたのよね。そしてもう一つ、太陽に関する逸話があるかどうか——ほら、日和ちゃんと太陽って、切っても切

り離せない関係じゃない？ だから、太陽の要素を持つ鶏が選ばれたの。鶏って、太陽信仰とは非常に縁のある生物だからね」

「はー。では、何故数ある鶏の種類の中から、東天紅を選んだのですか？」

「そこはあんまり深い意味はないみたい。ただパツと目に入った名前が、偶然にも太陽を連想させる”紅”、”天”、これはこじつけっばいけれど、太陽の昇る方角である”東”——これらの要素を見事に内包した名前だったからっていうのが理由なんだって」

「なるほどです。栗鼠のときもそうですけれど、一応それなりに考えられて怪異は設定されているんですね」

「うん。怪異は設定が重要だからね」

「ですね」

[0233]

「”反抗”か——確かに、誰かに対して反抗の意を示すことが出来るのは命ある生き物だけだね。ただプログラムされるままに動く機械には絶対に出来ない、決して許されない行為」

「いやあ、この時は結構危なかつたですよ。ギリギリで意識を保っていましたからね。本当——金髪ねーちゃんに対する反抗心でなんとか耐えましたけれども、こればかりは改めて見てもひやひやします。場合によってはこの時本当に『日和号』が復活して阿良々木お兄ちゃんを切り刻んでしまいかねませんでしたから」

「ああ、この苦しそうにしているのって、別に織崎ちゃんを油断させるための演技って訳じゃあなかつたんだね」

「はい。普通に苦しかったです。だからここで解放された時の解放感と言ったらとてもとても筆舌に尽くしがたく——いやまあ解放されたんですから解放感があるのは当たり前のことなのですけれども——勢いにのつたのでこの物語のキメの台詞を担当させて頂きました」

「キメ顔だった？」

「だったかもしれませんがね。あたいはキメ顔でそう言った」

「でも、操られるがままだった機械人形が心を得て、操り主に叛逆するっていうのは、現実ではありえないことだけれどもフィクションでは結構王道のストーリーだったりするのよね。心なき存在が触れ合いによって意志を手に入れる——日和ちゃんの出典である【刀語】も、そういうストーリーだよ。感情無き剣士が、感情だらけの女に愛され、次第に感情を得る」

「はあ。しかし、鑪七花は果たして奇策師とがめに叛逆したのでしょうか?」

「どうだろうね? 最終巻が失われているから、どうとも言い辛いのだけれど……もしかしたら、うん。やっぱり命令に背いちやったのかもね。意志を持つということ、自己を手にするということは、必ずその過程で他者を否定しなくちゃならないのだから」

「歴史は闇の中に、ですね」

「いつか知りたいね。結末」

「024」

「後日談、というか今回のオチです!」

「あはは……もうこれは阿良々木くん我真面目な折檻が必要みたいだね……」

「って、羽川お姉ちゃん目が怖いですよ!」

「ははは、にやつはつは……にやははははは」

「ど、どうなさりましたか羽川お姉ちゃん!? なんだか言葉遣いが乱れていますよ!」

「おっと。いけにやいいけにやい。ちょっと怒りの感情が露わににやつてしまったか。吾輩としたことが、最期の最後でにやさけにやい姿をさらしてしまったにやあ」

「怖い怖い怖いですよ!」 な、なんか目が猫っぽくなっていますし、猫耳まで生えて——え!? 羽川お姉ちゃんってそういうキャラだったんですか!」

「いやいや、本来ならばこのようにや現象が起きる事はありませんにやい。」



はつきり言つて吾輩も混乱の渦中にあるが、しかしどうもこのウラガタリ空間では色々カオスなことが起こるのだろうか？ 聞いているぞ。忍ちやんの完全体が嘗て乱入してきたという事件のことは」

「だからつてかおす過ぎませんか!? 待つて下さい、今の羽川(?) お姉ちゃんつて、どういう状況にあるのですか？ もう何が何だか……」

「多分、ブラック羽川と苛虎の喋り方が入り混じっているのだろうかにや……だが安心しろ、吾輩の人格はさつきまでと変わらず、羽川翼だにや」

「安心できると本気でお思いですか」

「まあ無理だろうにや」

「頼みますから早く元に戻つて下さい。多分ですけれど、今の貴女の状態には読者の皆さんも戸惑つていると思いますので」

「ああ……頑張つてあとがきまでには元に戻ろう」

「お願いしますよ本当に……」

「だが何故このようにや現象が起こるのだろうか？ いや、深い意味はにやさそうにやのにはあるが、しかし吾輩はどうも氣ににやつて仕方がにやい。考えるだけ無駄で理解するのは無理で考察するのは無茶にやのだろうが——」

「そ、そうですか……つていうかあの、すみません、この火の粉をどうにかして頂けないでしょうか？ さつきからちらちらと舞つているのですが」

「すまにやい。あとがきまでにはにやんとかする」

「じゃあ本編はここまでですので早く何とかして下さい。あとあたいを怖がらせた補償として”斜め77度の並びで泣く泣く嘶くナナハーン7台難なく並べて長眺め”を高らかに復唱して下さい」

「くつ……了承した——にや、にやにやめにやにやじゆうにやにやどのにやらびでにやくにやくにやにやにやにやはんにやにやだいにやんにやくにやらべてにやがにやがめ!!」

「いよっしやあ!! やりましたよ阿良々木お兄ちゃあん!! この神崎日和、みっしよんこんぷりーとしましたあ!!」

「燃やし尽くしてやる」

「あつ、すみませんやめてや  
m

## 畜物語

### 第肆話 しるしスパイダー 其ノ壹

〔001〕

織崎記と僕たちの戦いは、この物語をもつて一旦区切りを迎える。とは言え、ここまではまだ前哨戦に過ぎず、彼女にとってはまだ戦いは始まってさえいなかったのかもしれないけれど、兎に角、一区切りだ。

春休みの戦争。

僕はこの戦いを、始めにそう呼称した——鎧を轢き、蛤に惑わされ、刀と決闘し、振り回されたこの一週間、怪異現象に遭いに遭い、首を何度も突っ込んだこの一週間。その区切りが、今回の戦いである。

首を突っ込んだとは言うものの、正直なところを言えば、僕は非常に辟易している。あの地獄の春休みからこつち、なんと約一年間怪異現象に遭いつばなしなのだ。その大半が自業自得のだけれども、しかし今回に関しては完全に巻き込まれたに等しいのだ。こうなる切っ掛けを作ってしまったのは僕にせよ、まさかその所為で命を狙われるなんて、誰が予想出来たことだろう。

そりやあうんざりもする——し、もうどこか諦めに似た感情さえ覚える。

怪異に遭えば怪異に惹かれる——なんて言われたものだけれど、幾ら何でも惹かれすぎではないだろうか。或いは、惹きすぎではないだろうか。吸血鬼には魅了のスキルがあると聞くが、こんなところでそんなもん、発動するなって話だ。しかし、そもその始まりが、僕が美しき金髪近眼の吸血鬼に魅了されたことだというのだから、怪異に惹かれたのが原因だというのだから、因果応報とも言える結果だろう。

とは言え。

にしても。

嫌気が差すのは否定出来ない——どうして織崎は、僕を狙うのだろうか。

彼女の目的は、一体何なのだろうか——それがある程度明かされるのが今回の物語な訳だが、しかしそれでもきちんと理解出来たとは正直言い難い。それは僕の理解力のなさに所以するものなのかもしれないけれど——しかし。

だとしても。

僕は彼女を、理解しようとは思わない。否、理解し得ないのだろうか。僕と彼女は、絶対に分かり合えない。

精々分かったのは、それくらいだ——ならば今回の戦いに何の意味があつたのか、と問いたくなる。尊い犠牲を払ってまで、僕が彼女と戦う意味が、果たして本当にあつたのだろうか？

僕は。

これも最初に述べた通り——この一連の事件を、語りたくはないのだ。特にこの物語はバッドエンドであり、一片の救いもない。

だが。

それでも、語らなければならない——彼女の為にも、彼女の勇姿を、僕は語る義務がある。

あいつが生きた歴史を、一つでも多く遺すためにも。

〔002〕

それは、3月31日の事だった。3月31日と言えば、世間一般の方々にとって、ある程度特別な意味を持つ日であることだろう。

年度の終わり。

いや、年度と乱暴に一括りにしたけれど、実際にはもう少し正確な名前が存在する。今僕が言った年度とは、会計年度、或いは学校年度と呼ばれるものことである。

4月1日から3月31日までの、一年間——恐らくこの日本という国において、最も一般的な年度であるそれだろう。そして、3月31日と言えば、年度末。これもまた一般的な認識であることには恐らく

疑いの余地もない。  
が。

残念ながら僕が3月31日と聞いて思い浮かべるのは、思い浮かんでしまふのは、あの地獄のような春休みのことなのであった——血も凍るほど美しい吸血鬼と遭った、あの期間。

いや、別に3月31日に限らない。あの辺り周辺になると、自然と思い出してしまうのだ。想起してしまうのだ。

夢に見るほど——悪夢に見るほどに。

ならばその日、つまりは、かの春休みから約1年が経過した3月31日も例外ではなく、僕はその地獄を脳裏で延々と走馬灯のように繰り返しながら、町の大型書店へと向かっていたのであった。

直江津町唯一の大型書店と言っても過言ではないこの場所は、僕が最前に行っている書店である。大型書店だけあって、田舎町と言えども侮るなかれ、品揃えは粒揃いだ。学術書からBL本まで、色々売っている。

件の春休みも、ここに来たものだ——あの時は、なんだろう、受験生らしく参考書でも買いに来たのだろうか。きつとそうだ。

「いえいえ、違うでしょう。性的浮世絵本を買っていらつしやったのでしょうか?」

「エロ本を情緒溢れる風に訳すな!」

さて、そんな訳で、どうして僕が今回この書店へとやってきたのかと言えば、それはこの、古風な同行者が原因であった。

ちよつと前の話。

いつものように八九寺や日和ちゃんと遊ぶため、僕は北白蛇神社へと向かった。ぶっちゃけ、家に居ても特にこれといってやることもないし、今現在の僕はとある事情で金欠なのでこれくらいしかやることがないのだ。

それに、つい先日起こったあの事件——あれの解決のキーとなったのは日和ちゃんだったので、僕が出張するようなことではないかもしれないけれど、しかし僕としては心配で心配でならないのである。

あの事件が解決してからというもの、北白蛇神社は目に見えて綺麗

になった。それには日和ちゃんの尽力が関係してもいるのだろうが、一番は八九寺を虐めていた神が撤退したからという理由からだろう。こちらへ降臨する手段はもう通じないと判断したのか、あれからめつきり、落ち葉の山が精製されることはなくなった。

とは言え、僕としては気を緩めることができない——心配性と言われてしまうかもしれないけれど、正直なところ、あれがもう二度と北白蛇神社に降り立たないとはとても思えないのである。いつかまた再び、今度は完全に降り立ってしまうかもしれない。僕はそれを警戒している。危惧している。

ので、僕はこうして北白蛇神社に足繁く通っている訳だ——別に八九寺と日和ちゃんに会いたいとかそういう訳ではないので留意して欲し……あつ、遊ぶためとかもう最初に書いてる……。くそつ。

「ご安心ください。態々そんな事で悔しがらずとも、読者の皆様はしっかりと分かっていますよ。貴女は幼女と遊ぶことを生きがいとする男であると」

そんな訳で、北白蛇神社へとやって来た訳である。

境内に居たのは八九寺と日和ちゃん。いきなり誤解を招くような発言を仕出かしてくれた八九寺だけれど、当然、賢明なる読者の皆様はこれが百パーセント八九寺の冗談であると理解しておられる筈なので、別に僕は気にしていない。

「いえいえ阿良々木さん。寧ろ賢明なる読者の皆様だからこそですよ。特にアニメを視聴なさった皆様であれば、貴女の先程のモノローグがどれだけ欺瞞に溢れているかよくお分かりの筈です」

「言い掛かりをつけるな八九寺。僕は清廉潔白だ。欺瞞などない」

「阿良々木暦という男は、恩人でも恋人でもなく時に幼女を優先する男だと」

「ああ、言ってたなそんなこと！」

しかもそれアニメで放送されたのって比較的最近じゃねえか！

記憶に新しすぎるわ！

「残念でしたね阿良々木さん！ 今更イメージアップを狙おうとして

も、もう既に貴方はロリコンキャラとして全読者に認識されているのですー!」

「何だと!？」

「いや今更驚くことですか!? 逆に!」

なんということだ。あれだけ前回『僕はロリコンじゃない』と連呼したというのに、まだそんな認識が残っているというのか。そんなイメージが付くようなこと、僕、何かしたか？

「主にセクハラでしようね。私への」

「おいおい八九寺。そのセクハラというのは言われ慣れているからスルーするとしても、そうさ、僕があんな行為をするのは君にだけじゃあないか。それでロリコンなんて言われるのは心外だ」

「ほう。では忍さんや斧乃木さん、日和さんにはそのような行為を行わないと」

「当たり前だ」

僕は胸を張った——胸を張っていうほどのことでもなさそうな気がするけれど。

「僕はお前一筋だ」

「問題発言過ぎませんかねそれ」

まあ、ひたぎに聞かれたら軽く半殺しにされそうな台詞ではあるが——しかし当たり前のことだが、この場にひたぎは居ない。なのでこの発言を咎める者は誰も居ないのである。

「ほう。では阿良々木お兄ちゃんは戦場ヶ原ではなく八九寺お姉ちゃんをとると。めでたきことです。あたいは褒めますよ。ええ」

「え、日和ちゃん、急にどうしたの?」

刀ではなく箒を持った日和ちゃんが言う。この間購入した巫女のような白い着物を着ている。

「だってあたいは八九寺お姉ちゃんの心者第貳号ですから。八九寺お姉ちゃんの妨げとなる方はおしなべて等しくあたいの敵ですから」

「マジかよ」

うーむ。まさか日和ちゃんにこんなキャラ属性があったとは……この間戦場ヶ原について教えたのが仇となってしまったか。

「でもまあ、日和ちゃん。そうは言ってもひたぎは冗談抜きで僕の彼女だからさ、せめて呼び捨てはやめてくれないか？」

「……じゃあガハラで」

「普通に戦場ヶ原お姉ちゃんとかじゃ駄目なのか!？」

「なりません。会ったこともないような方をお姉ちゃんと呼ぶほど、あたいは気安い女ではありませんので」

「厳しいなおい！」

八九寺に対する忠誠心が尋常でない日和ちゃんであった——当の八九寺は気が気でないようだが。そりゃあそうだ、八九寺はひたぎが苦手なのだから。

ひたぎの方も、そういうえば子どもが嫌いなのだったか——だとすれば、日和ちゃんとひたぎだけは絶対に合わせちゃ駄目だな。

合わせちゃならん。

と、そんな具合に僕は二人と雑談を交わしていたのであった。これが良い具合に時間潰しになってくれるのである。僕にとっては楽しい時間潰しになるし、もうデメリットが見つからない最高のひと時なのである。

え？ 向こうにとつてのデメリット？ 知らん。きつと二人だつ

て僕と同じ気持ちの筈さ。そう願ってる。違ったら泣く。

「ときに阿良々木お兄ちゃん」

日和ちゃんが言う。

「なんだよ」

「書店、とやらは、いったいどのようなところなのでしょう？」

「……………」

まあ、そんな訳で。

僕と日和ちゃんは、この町唯一と言ってもいいこの大型書店へとやって来たのである。

時系列は現在へ。

僕と日和ちゃんは、書店見学を実施した。僕としては特に欲しい本があったという訳ではなかったのだけれど、しかしこうして日和ちゃんに頼まれてしまえば断ることは出来ない。小さい子には優しい男、



それが僕のキャッチコピーなのだから。

「稚児性愛ですか」

「普通にロリコンと言えー!」

「っーかだから、ロリコンじゃねえ!!」

何故伝わらないのだろうか。僕はロリコンではなく、フェミニストなのだ。性犯罪者と一緒にしないで頂きたい。

「いえいえ阿良々木お兄ちゃん。あたいたい位の児を愛でるということは、あたいにってはそれ程変わったことではないのですよ」

「ん? あ、そうか。日和ちゃんって、一応江戸時代出身なのか」

「正しくは、戦国時代ですけれども」

そう言いながら日和ちゃんが興味を示したのは、歴史関連の列。戦国時代出身故か、やはり自分の居た時代についてどう書かれているのか興味があるのだろうか。

「あたいはずっと不要湖をお護りしていましたから、その頃の世の中を、あまりよく知らないのです」

「ふうん……じゃあ何でその時代がロリコンに寛容って知ってるんだよ」

「その言い方には誤りがあるような気がしますけれども……いえ、まあ、元ご主人様が、まあ、ええ、はい」

「随分濁すな……」

まあ、気持ちには分からなくもない。この文脈で濁すということは、つまりそういうことなのだろう。自分の作者がロリコンであったなどとは、流石に言い辛いのだろう。

「……念の為に釈しておきますけれども、我がご主人様が愛したのは、元ご主人様とはそこそこに歳の離れた娘というだけで、阿良々木お兄ちゃんの考えているような稚児とは違いますよ」

「何だ、そうなのか」

その程度のことならわざわざ濁さなくても良かったのではないか、と思うが。

「あたいは性質たちが変わってこうして稚児となっているだけであって、真の姿はもう少しお姉さんお姉さんしているのですからね」

「……………」

……してたっけ？

日和ちゃんの言う真の姿というのは、恐らく「微刀『釵』」としての姿のことなのだろうけれど——確かにあの時日和ちゃんの背丈は伸びていたし、今のようなロリっぽさは無かったけれど、しかしお姉さんお姉さんしていたかと言えば……。

まあ、機械だから解りにくかったのかもしれない。もしかしたらあの時僕がちゃんと見ていなかっただけで、胸はそれなりにあったかもしれない。恐らく可能性は低いだろうが。

「でも日和ちゃん。僕は今の君の姿の方が、可愛らしくて大好きだぜ」  
「そのような言葉、今の世では罪扱いなのでしよつかね」

「まあ、気の知れた相手になら大丈夫だろ。多分」

今や幼女に接触すること自体が事案となってしまう時代である。声を掛けるなど以ての外、故に道案内する事さえも命懸けとなっているのだ。正直、僕としてはそういう姿勢は過剰であると思うし、あまり快く思っていないのだが。

まあどちらにせよ、突然出会った幼女に『大好きだぜ』なんて言うことは、今も昔も事案となることには変わりあるまい。こればかりは時代とかそういうのは、一切関係ないだろう。いや、幼女に限らずとも。

日和ちゃんは棚に収納された本を片っ端から漁っている。どれもこれも、僕が読んだこともないような本である。それを速読している。

いや、速読というのはまだ控えめな表現であろう——最早それは読んでいるとはとても言えないようなスピードであった。例えるなら、完成したパラパラ漫画を見る時のページめくりのスピード。

「ひ、日和ちゃん？ それ、本当に読めてるのか？」  
「読めてます」

「そんな急いで読まなくてもいいんじゃないか？ なんなら、1冊くらいは買ってやれるぜ」

金銭的に厳しいけれども。

「お氣遣いなく。ここで全て読み切りますので、阿良々木お兄ちゃんにはめいわくを掛けさせません」

「そうか？ ならいいけど……」

まあ僕にとっては良いというだけで、本屋さんからしてみればたまったものではないだろうが——幸いこの大型書店は特定の本は立ち読みが許されているので、そこまで咎められることはないだろうけれど。

「……………」

日和ちゃんは一心不乱に本を手を取っては素早くめくり、すぐに棚に戻し、そしてまた本を手取る——それを繰り返す。

別にそうしなれば読解できないという訳ではないのだろうし、もう少し落ち着いて読めばいいのではないかと思うが……意図を聞きたいところではあるが、今の日和ちゃんを邪魔するのは何だか憚られる。肩に触っただけで切り刻まれそうな雰囲気さえ感じる。勿論、刀は持っていない訳だけでも。

「……………」

かと言って何もしないというのは暇である。僕も日和ちゃんの棚の向かいにある棚から本を一冊取り出した。

「……………これは」

僕はその本を手に取り、タイトルを確認した瞬間、思わず声を漏らしてしまった——勿論、それは偶然であり、別に狙ったという訳ではない。本当に偶々なのだ。

——『完成形変体刀蒐集報告書 刀語 其ノ壹』。作者『江戸幕府直轄預奉所戦所総監督 奇策士とがめ』。

これは、である。

思わず周りを見回してしまった——だが、近くにいるのは相変わらず秒速読に興じている日和ちゃんだけで、金髪少女やら黒髪の女やらは確認出来ない。

というか、焦ってしまっただけで、ここは歴史関連のコーナー。これがあっても、別に不思議なことではない——まさかこれを引き当ててしまうとは思わなかったけれど。

四季崎記紀が作りし十二本の完成形変体刀——それらのモデルが江戸時代に存在し、そしてこの『奇策士とがめ』がそれらを蒐集したということは、既に羽川から断片的に教えてもらっていた。ならば羽川はどのようにしてそれを知ったのかという話になる。羽川にその知識を与えた”何か”はある筈だと思っていた。

何でもは知らない、知ってることだけ。

成る程、こうしてこの書店にあったのであれば納得である——この町にはこの大型書店とは別に図書館があるけれど、もしかしたらそこにも同じものがあつたのかもしれない。売られているということはつまり、量産されているということ。

とは言え……こんな簡単に見つかるとは。

僕はもう一度タイトルを確認した——”其ノ壹”だつて？

じゃあ其ノ貳や参は——あつた。

其ノ壹が収められていた場所のすぐ隣に、十冊収められていた。貳、参、肆、伍、陸、漆、捌、玖、拾、拾壹が。

「……ん？」

と、僕は首を傾げる——これら一冊一冊が変体刀一本一本に対応しているとは仮定すれば、其ノ拾貳がある筈なのだが。

……そう言えば、羽川ペディアによれば、師走に起きた出来事は歴史の闇に葬り去られているとか——一冊一冊が月毎に対応しているとも仮定すれば、其ノ拾貳はもともと存在しないのか？

どうして？

それが——”何か”？

同じく羽川ペディアによれば、師走に”何か”があつたという——何なのだろう？

僕は一卷をばらばらと読んでみた。内容は現代語に訳されており、読めないのではないかと内心抱いていた心配は解消された。

どうやらこれは、作者を投影したキャラクターとその懐刀『鑪七花』の旅物語らしい。この一卷は『とがめ』と『鑪七花』の出会いと、”絶刀『鉋』”の蒐集劇が書かれていた。

成る程、架空の刀鍛冶か——完成形変体刀というのは、この物語を

基にして作成されたものよようだ。

多分これは、源氏物語とか、そういう類の物語だろう。実際の歴史ではなく、それこそ織崎ちゃんの言う所の“偽りの歴史”というやつだ。

僕は一卷を棚に戻した。そして、残りの巻も読むことにした。

まあ普通に物語として面白いというのもあったけれど、しかし大きかったのは、あの『変体刀』がこの『刀語』を参考にして作られたものであるということがほぼ確定したからだ——”絶刀『鉋』”。

折れず曲がらぬ絶対の刀と呼ばれるそれは、確かに僕は知っている。というか、実際に戦った。日和ちゃんと対戦した際、彼女がもう一つの変体刀と共に使用したからだ。

そしてそれは今、北白蛇神社に安置されている。

「……………」

変体刀は十二本。この巻数だと一本の正体は掴めないが、しかし残りの十一本を知ることが出来る。知ることが出来るなら、対処法だつてある筈だ。

僕は二巻目を手に取ろうとした。

取ろうとした。

したのだが。

「っ——！！」

やってしまった——思わずそれを、目に入れてしまった。いや、”

それ”ではなくて、”そいつ”なのだが。

手が止まる。

何でお前がここにいるんだ？ いや、理由は山ほど思い付くものだけれど、どうしてこのタイミングで出てくるんだよお前！

僕は日和ちゃんを振り向いた——そして”そいつ”を見た。

文庫本を手にした”そいつ”——つまりは、僕の可愛い後輩であるところの、神原駿河がこちらへ向かってくるのを。

[003]

僕は戦慄した——戦慄したということはつまり、慄いたということだ。恐怖を覚えたということだ。いや、最早それは恐怖どころではなく畏怖だったかもしれない。戦いに慄くと書いて戦慄だけれども、戦う前にもう慄いている時点で勝負は決したと言えるのかもしれない。かつた。

自分でも何を言っているのだとツッコみたい——訳のわからないことを言っているのは重々承知だけれども、それはつまり、それ程までに僕が焦っているということ。桁違いの焦燥の表れなのである。

いやもう……なんでお前が!?

一応、必要ないと思うけれど、神原駿河についての注釈を挿れておくでしょう。

神原駿河。

直江津高校二年生であり、今年の春から三年生に進級する、僕やひとたぎ、羽川の後輩である。

神原駿河と言えば、我が母校で知らない奴は殆ど居ないであろう大スターだ。弱小バスケットボールをたった一年で全国大会にまで導いた怪物である。いや、学校内どころか、その噂は校外にまで轟いている。もしかしたら町の外にまで轟いているかもしれない。

そんな大スターと僕が知り合いなのは、当然、怪異絡みである。彼女の左手には色々あつて悪魔が宿っている。読者諸兄もよくご存知であろうあの悪魔——泣き虫の悪魔、レイニー・デヴィルである。

その悪魔関係で紆余曲折あり、僕と彼女は知り合いな訳なのだが——まあここまで聞けば常識人であると勘違いされる方が居るかもしれないけれど、しかしそれは多大なる間違いだ。いや、もしかしたら本当に常識人かも知れないけれど、しかしそんな素振りは全く僕に見せてこない。

奴の本性をたつた一言ズバリで言い表すならば、変態、その一言に尽きる。

フロイトの後継者を自認し、この物語でエロ担当と言えば神原、神原と言えばエロ担当という方程式が生じているほど、エロい。

レスでBL好きな腐女子でネコで受けてロリコンでマゾで露出狂

で欲求不満とかいう、そっち方面でも怪物みたいな女なのだ。

さて、以上、神原の説明を終えたところで、そこで日和ちゃんである。

奴は先ほど述べた通り、変態である——もしも彼女が今、日和ちゃんを発見してしまえば、どうなる？

考えるだに恐ろしい……！

奴を日和ちゃんに近づけさせる訳にはいかない。フル装備の日和ちゃんならまだしも、今の彼女は一切の装備なし、丸腰の児女なのだ。自衛などとても出来まい。

幸い、今の神原は日和ちゃんに気付いていないようだが、しかしそれも時間の問題だろう。同じ空間にロリが居るといふ事実を、もしかしたら第六感か何かで感じ取っているかもしれない。あいつならそれくらいしかねない。僕でも出来るほどのだから。

奴を妨害しなければ——僕は日和ちゃんを振り向いた。

「……………」

やはり一心不乱に秒速読中。これなら、この場から離れることもあるまい。

「日和ちゃん、ちょっと僕、向こう見てくるよ。ここで大人しくしてろよ」

「はい。承りました」

とは言え一応断っておく——無断退場は流石にマナー違反だ。というか、ある意味僕は日和ちゃんのお目付け役、お守りなのだから当然のことだし、そもそも退場するなという話だが。

しかし、これも日和ちゃんを守るため。お守りというなら、これこそ当然のことである。降りかかる可能性のある火の粉は防がねば——未然に防げるのであれば、尚のこと。

僕は通路に出た。

その瞬間。

「おおー！ 阿良々木先輩！ 奇遇だな!!」

僕が出現し、そして視認した瞬間——神原は僕に向かってそう言い、全力疾走してきた。

読者諸兄にはもう一つ言わねばならないことがある——神原の足の速さについて、まだ語っていなかったか。

いや、足の速さというか、脚力というべきか——こいつ、べらぼうに運動神経がよく、バスケットボールのエース如きに収まらないレベルのものを持っている。

こいつが本気を出せば、体育館の床が抜けたり分身したり、空中で二段ジャンプが出来るとかいう噂さえある——そんな噂が立つほどの足の速さを保有している。

さて、そこで現在の状況である。そんな残像が発生する程のスピードで、僕に走り寄ってくる——この恐怖が、お分かりだろうか。

もう感覚的には、自動車が全速力で向かって来ているかのような感覚である。実際に自動車に撥ねられたことがあるけれど、正直恐怖はあの時の比ではない。

況してや、かつてこのスピードでタックルされたり飛び膝蹴りされたりした身である——恐ろしい。

「ぎゃあああああ!! 神原!! ストップ!! ストップ!!」

なので、こんな情けない叫び声を上げてしまったことも致し方ないのである。

まだマシなのは、こいつはちゃんとブレーキが効くということだ——僕にぶつかるか否やのギリギリで、神原は停止した。その背後には土煙が舞っている——なんで屋内で土煙が舞うんだよ……。

「おいおいどうした阿良々木先輩。貴方らしくもない。あんな叫び声を上げるなんて」

「僕は大概あんな叫び声を上げっぱなしなんだがな、神原」  
情けないことだが。

だって、そんなピンチ多すぎだもん。仕方ないじゃないか。

「つーか、僕を見つけるや否や全力疾走するな。お前に全力疾走で向かってこられたら、僕は遙か彼方の壁まで吹き飛んでしまう」

「これはこれは。全く私も買いかぶられたものだな! 私如きの全力疾走なんて、阿良々木先輩にとってはロリっ子のタックル程度にしすぎないだろう?」



「それ結構な大ダメージだよ！」

精神的に大ダメージだ。お前のは物理的にだが。

「つーか神原。お前なんでここに居るんだよ」

「またまたあ。阿良々木先輩の方がこの私の行動理由を見抜いておられない筈がないだろう。どうした、答え合わせがしたいのか？ ならば素直にそう言えばよからう」

「お前は僕を買いかぶりすぎなんだよ神原後輩。皆目見当つかねーよ、お前みたいな不思議キャラの行動原理なんて」

「私が不思議キャラとは！ 私程単純な奴もおるまい。私は変態だ」

「それは分かっている。この世の誰もが分かっている。分からないのは公衆の場で堂々と変態宣言をするその頭の中だ！」

「女子は皆変態なのぞ？ ならばこうして宣言することは、つまり、自分が女子であるということの証明なのだよ阿良々木先輩」

「お前の変態的な思い込みに全国の女子を巻き込むな、迷惑だ！」

つーか、全女子がお前みたいなレベルで変態だったら、それはこの国の終わりだ！

「しかし阿良々木先輩も変態だろう？ 何を責めることがある」

「おい待て、今の流れでそれを言うとな、まるで僕が女子にカウントされているかのようなのだけれど。誤解を招くタイミングで誤解を招く発言をするな」

「え？ 違うのか？ てつきり阿良々木先輩は女子の持つ形態の一種だと思っていたのだが……」

「女子の持つ形態ってなんだ！ 女子は女子だし、男子は男子だし！ 変形も変態もしねえよ！」

「しかし変態であることは認めるだろうか？」

「変態という名の紳士と呼べよ」

ここで反論出来ない男子なのである。しかしここで反論出来る男子が、果たしてこの世にそもそも存在するのだろうか？ つーか、ここで自信を持って反論出来ると宣言出来る奴以外には僕を責める権利はないぞ。

「男子は全員変態なんだよ。覚えとけ神原後輩」

「貴方の思い込みに全国の男子を巻き込むな！ 迷惑だ!!」

「逆ギレされた!?!」

しかも僕の台詞を改変した上で、更に強めの語調で!

人の台詞をパクるとは、許せん奴である——あんまり僕も人のことを言えたものではないような気がするの、気の所為か?

「いや違う……何で僕は本屋で後輩と変態トークに花を咲かせようとしているんだ」

「花? 花だと!?! 流石阿良々木先輩! この流れで更に自分が変態であることをアピールするとは、次元が違うなあ!」

「次元が違うのはお前の方だ神原! 花と聞いてどうしてそういう方向に思考が向く! 何を考えた!」

「いや、花と言えば阿良々木先輩、処女の暗喩だろう」

「文脈的に考えてそんな暗喩は含んでいないことくらい分かってくれ頼むから!」

「頼むから!?! くつ、そ、そうは言ってもだな阿良々木先輩、私にも心の準備という奴がだな」

「分かったよ! 変態度ではお前の完全勝利だよ! だからもうそっち方面の思考から離れてくれ!」

くそつ、全国の女子がこんなレベルなのか!?! だとすれば、マジで地球終わってんぞ!

「ところで阿良々木先輩。貴方はどうして書店などに居られるのだ?」

「それはごつちの台詞だ神原。お前なんでここに居るんだよ」

つーか、それを最初に聞いた筈だ。どうしてこの台詞からあんな方向にまで逸れたんだ。逸れたというか、拗れたというか、拗らせているというか。

「ふつ、阿良々木先輩。先ほどの会話で、私はしっかりと答えを示した筈なのだがな。それさえも解読出来ないとは、阿良々木先輩らしくないぞ」

「悪いが阿良々木先輩は暗号を解くのが苦手なんだよ。つーか、さっきのどこに答えがあった」

ただひたすらに変態トークしかしていなかったような気がするのだが。

「そう、だから、言っただろう？ 私は変態だ、と」

「……まあ、言っただな」

「つまり、私はBL本の新刊を買いに来たということだ」

「分かるかそんなもん!!」

まあそんな所だろうとは思っていたけれども！ 思っただけけれども！

「全く。私は早くこの本をレジに持って行きたいというのに、阿良々木先輩が唐突に現れたので、こうして時間をとってやっているのだぞ？ 謝られることはあれど、怒鳴られる謂れはない」

「謂れしかねえよー！」

相変わらず先輩に敬意の欠片もねえ後輩だな！ 扇ちゃんでももうちょっと敬意を払ってるような気がするわ！

「え？ つーか、お前もうすぐに帰るつもりだったの？」

「当たり前だろう。BL本より優先することなんて、私には皆無だ」

「マジか……」

それはそれでどうなのかと思ったけれど、しかし、気持ち的に、がっかりと膝をつきたくなるような気分だった——阿良々木暦、痛恨のミス。

なんだよそれ……じゃあマジでこの時間は何だったんだよ。完璧に時間の無駄じゃねえか。骨折り損じゃねえか。実際には骨を折られそうになっただけだけれども。

「……ああ、そう。じゃあ、悪かったな邪魔して……うん、もう行ってくれていいぜ」

「む？ そうか？ では遠慮しないぞ？ いいのか？」

「僕に何を遠慮することがあるんだよ。つーか今まで遠慮してたのかよお前」

「これはこれは見縊られたものだな。いくら私と云えど、遠慮という言葉くらい知っているぞ」

「そこまで見縊ってねえよ」

寧ろ知らなかつたら大問題だ。色々な意味で。

「ではさらばだ、阿良々木先輩！ っ武運を！」

「何のだ！」

僕のツツコミが聞こえたかどうかは定かではないが、神原はそう言うのと、再びBダッシュでレジへと走り去って行った。

土煙に包まれながら、僕は呆然と呟いた。

「……疲れた」

緊張の糸がいつきに解けた——いや、何で後輩と喋って緊張しなきゃならないんだ。

僕はUターンして日和ちゃんの元へ戻ろうとした——が、しかし。

「——っ!!!」

こればかりはどうしようもなかった——神原のように偶然目に入ったという訳ではないだろう。意図的なものだっただろうから。

僕の視線は、通路の突き当たりへと向けられていた——そこに居たのは日和ちゃんでもなく、神原でもなかった。

それは、金髪の女だった。

そいつはにやりと、僕を見て嗤った。

「004」

「たっだいまー！ 阿良々木先輩！」

「何い!？」

眼前にいる、ゴスロリ染みた服装をした金髪少女を見て、僕が今にもシリアスモードになろうとしていたその時、何故か神原がまさかのカムバック。

いや、マジで何で!？」

「お前、帰ったんじゃないのかよ!？」

「帰ろうとしたはしたのだが、しかし何故か出られなくなっていな。どうしようもなかったので、阿良々木先輩のところへ戻って来たのだ」

「え!? 帰れなく——?」

僕は反射的に、再び前方の少女を見た。嗤っている。

「そうだ」

「それは——どういう?」

「それが私には分からないから、こうして阿良々木先輩に頼っているのではないか」

「頼るも何も、状況が分からなくっちゃあどうすることも——壁みたいなものが、自動ドアの向こうにあったとかか?」

「いや、壁……なのか? あれは」

壁……ではないのか? 神原の反応から察するに、どうやら違うようだ。

僕はてつきり、ぬりかべ的なものをイメージしたのだが——いや、なんでもかんでも怪異に絡めるのは良くない。全部を全部怪異に押し付けるのは、それは横暴というものだろう。

なんでもかんでも妖怪の所為ではないのである。

「壁というか……『糸』というか」

「糸?」

「うん。ドアが開いたら、すぐ目の前にびっしりと張り巡らされていて——引き千切ろうとしたのだが、全くビクともしなかった。まるで鋼か何かで出来ているかのような糸だった」

「鋼の——糸」

「抜けられるほどの隙間もなくて、どうしようもなかったので、こうして戻って来た訳なのだ——どうだ、阿良々木先輩。何か分かったか?」

「……いや」

何も分からない。

ことはなかった——分からなくはあるけれど、しかし、心当たりはあった。

鋼の糸——蜘蛛の糸は、鋼の数倍の強度を誇るという。実際に見た訳ではないが、神原の言う『糸』の特徴と似通った部分がある。

それに、今この場に”あいつ”がいるということは——十中八九、

それは怪異の仕業だ。

悪意の——仕業だ。

奴は嗤っている。神原は、彼女の存在に気付いていない。

「……神原」

「なんだ、阿良々木先輩」

「歴史本のコーナーに、凄いスピードで速読している児女が居る筈だ。お前はその子のことを見張っている」

「児女だと!？」

「そこに反応するな」

ああもう、だから嫌だったというのに……神原とこうして接触したのは、日和ちゃんを神原から守るためだったというのに。本末転倒もいいところだ。

「とにかく……一瞬たりとも目を離すな。絶対にその子のそばを離れるなよ。二人一緒にいるんだ、いいな」

「……どうやらシリアスな展開のようだな」

「理解が早くて助かるよ」

こういう時は真面目な後輩。なんだかんだで、頼れる奴なのだ。

「つまり、その子を襲うのはご法度ということだな」

「そうだ。もし襲ってみろ、お前をぶった切るぞ」

「はっはっは。阿良々木先輩にぶった切られるのであれば、本望だ」

「やめろ。いやマジで襲うなよ」

「安心しろ阿良々木先輩。私を誰だと思っている?」

「稀代の変態神原駿河と思っている」

「正解だ!」

「認めんじやねえよ!」

やっぱ心配だなあ、こいつに預けるの……いやいや、流石にそこまですぐの読めない奴ではあるまい。多分。きっと。

信じてるぞ。

信じてるからな!

「だが、阿良々木先輩は? どこへ行くつもりなのだ?」

「解決策を探す。怪異に関しては、お前よりも僕の方が場数は多い――

―安心して日和ちゃんという

「まあ、その通りではあるが……心配だな。信じるぞ?」

「信じる。僕もお前を信じるから」

「その信頼に応えられるかどうか、正直自信がない」

「自信を持つてくれ。頼むからそこだけは自分を信じてくれ」

「……なら、任せたぞ。阿良々木先輩」

「ああ、任せとけ。神原後輩」

「ご武運を、と言うと、神原はすぐさま歴史のコーナーへと向かった。暫くして絶叫のような音が聞こえたような気がするが、もうそれは無視だ無視。」

信じてるからな。

信じてるからなあ!!

一方僕はというと、通路を直進した。突き当たりに向かって、まっすぐに。

目の前にいる少女は相変わらずニヤニヤとした嗤いを崩さない。僕が彼女を視認してからかなり経っているが、それでも彼女は同じ姿勢で立ったままだ。疲れないのだろうか?

金髪がどんどん迫ってくる――それに反比例するように、僕の足がどんどん重くなるのを感じた。

関わりたくない。

あんな、ある意味堂々としている奴に絡みたくないのだ――頭の中が分からないといえ、こいつのことも分からない。僕は彼女のことを、実質何も知らないのだから。

「……………」

「つか、僕に気付いているならそっちから寄ってこいよ。君、僕が近寄らなかつたらずっとそこで立っているつもりだったのか?」

改めて考えると、どうして僕はわざわざ自分から寄っているんだ……結局自分から首突っ込んでるじゃねえか。

だからか? 巻き込まれたとかそういうことを言わせないために、自分からは動かず、僕に近付かせているのか? そうだとすれば随分な策士ではあるが……。

さして。

僕は足を止めた。

「……遅かったですわね」

僕がこれ以上進む気が無いのを察してか、金髪少女——言うまでもなく織崎記な訳だが——は、話し掛けてきた。

「待ちくたびれましたわ」

「いやそれは君が悪いだろ」

「005」

君はいつからそこに居たんだよ。無駄に力使うようなポーズして立ってるから、そんな足が震える程疲れるんだよ。

織崎ちゃんのポーズに関してはもう触れないので、結局どんなポーズをとっていたかについては読者諸兄のご想像にお任せする。各自、おもしろポーズを想像して遊ぼう。

「何の用だ織崎ちゃん。僕はもう暫く君に会いたくない気分だったのだけれど」

「酷いですわね。私は貴方に会いたくて会いたくて仕方ありませんでしたのに。こんなに足が震える程」

「足が震えているのは君が馬鹿だからだ」

「……本当、私に対してはとことんまで辛辣ですわね。怖い殿方ですわ」

「僕は君が怖いよ……」

「こいつこそまさにどういう思考回路で動いているのかが不明すぎる。訳が分からない。純粹に馬鹿なのかもしれないけれど。」

「で？僕は君と雑談する気なんて微塵もないのだけれど——何の用なんだよ」

「急かしますわね」

「そういうのいいから」

「ちっ」

舌打ちするなら帰れや。



時間稼ぎは十分しただろ。

「……この書店から出れなくなっているのだけれど、あれは君の仕業か」

「それを教えて、何か私に得がありますの？」

「……………」

うぜんんだよ。こっちが舌打ちしたい。

なんというか、あの魔法少女とは別のベクトルで苛々させてくる奴である——あっちはまだ可愛げがあったような気がするが、こっちはただただ苛立たしいだけ。

「……まあ、その通りですわよ。ええ。あれは私の仕業——私の蜘蛛が成せる業ですわ」

織崎ちゃんは偉そうに踏ん返り返って言う。無い胸を誇張しながら言う。

まあ織崎ちゃんが貧乳であることとかは心底どうでもいいとして

——やはりそうか。織崎ちゃんの仕業だったか。

「……………」

「はい？」

「僕らをここに閉じ込めて、君は何がしたいんだ？　僕らを始末しようってのか？」

織崎ちゃんの目的は、僕達の暗殺なのだ——暗殺対象に見つかっている時点でそれはもう暗殺ではないような気がするけれど。

「いえいえ。そんなまさか。このような公共の場で人殺しをするなど、とても私には出来ませんわ。それに、この場には殺害する道具がありませんもの」

「……刀は持っていないってことか」

「その通りですわ」

「信じられると思うか？」

「我が御先祖様に誓って、刀は持ってませんわ」

「……………」

彼女にとって、その御先祖様というのがどれ程重要なものなのか、僕は知らない。だが、これまでの言動から、この子が御先祖様を敬つ

ているというのは、恐らく偽らざる事実だろう。

とは言え、僕はこの子のことを殆ど何も知らない訳だし、確実なこととは何も言えないのだが。

「じゃあなんで——」

「取引をしましょう、阿良々木暦」

再び糸を仕掛けた意図について尋ねようとしたところを遮り、織崎ちゃんは取引とやらを申し込んできた。

「なんだよ」

「今この書店は、私が張り巡らせた蜘蛛の糸によって覆われていますわ——言うなれば、蜘蛛の牢獄と化していますの」

センス無いな……。なんでわざわざ言ったんだ。

「絶対に脱出不可能な牢獄——阿良々木暦。貴方がこうして私に接触して来たということは、この糸を取り払って欲しいからなのでしよう？」

「……ああ、そうだ」

「では、取引をしましょう」

「ああ……それさつき聞いたよ。早く言えよ」

「ちっ」

「舌打ちやめろ」

どこまで印象を悪くすれば気が済むんだ君は。舌打ち一回につき相当な読者が君の敵に回っている筈だぞ。

「ふん。私の評価など、目的の達成には一切支障ありませんわ……別に好かれようとも思ってませんのよ、私」

「分かったよ。分かったから要点だけを喋れ。無駄な台詞が多いんだよ君は」

「ぐぎぎぎぎぎ……」

「そういうのいいから」

……読者諸兄には非常にお見苦しい姿を見せていることを謝罪します。いや、本当に僕、この子と喋りたくないんだよな——なんていうか、蝕まれるというか、心が荒んでくる。何故だろう？

「……阿良々木暦。私と二人きりになりなさい」

「嫌だ」

「即答ですわね?!」

それ以外に僕の答えは無かった——君と二人きりとか、貝木と二人きりになるのと同じくらい嫌だ。いや、それは言い過ぎた。貝木と二人きりになる方が嫌だ。

何せ、今のほぼ二人きりと言ってもいいこの状況でここまで苛立たされているのだ。本当に二人きりになれば、どこまで僕の堪忍袋の尾が保つか分かったものではない。

「まあ、そう言うと思っていましたわ。だからこそ、こうして糸を仕掛けたのですわよ」

「……なんだよ、脅しか?」

「脅しですわ」

「脅しかよー!」

脅しを取引とは言わない。誰かこいつに日本語を教えてやって欲しい。

「このまま貴方が私と二人きりになることについて同意しませんと、ずっといつまでもこの問答が続きますわよ? そうすれば、神原駿河と日和号……神崎日和は、いつまで経ってもここから出られませんわね。ああ可哀想に」

可哀想と思うなら糸を解けよ。

……冗談は置いておいて、成る程そう来たか。いやまあこの状況での脅しなんてこれ以外には考えられなかったのだけけれど。

別に僕が犠牲になる分にはまだしも、そうだ、この書店には今、僕以外の人も居るのだ。言うなれば、この書店に居る全員が人質にとられているということである。

織崎ちゃんは引き退るつもりはないと言っているが、恐らくそれは本当だろう。この子はこういう所できつちりしてくる、と思う。それをされたら僕は苛々するので、それを基準として語っているだけなのだ。

『はい』を選択しなければ延々と同じ会話が繰り返されるようなものである——それは僕の世界衛生上非常に良くないし、他の人達にも

迷惑だ。

馬鹿とか言つて悪かった。この子、ちゃんと考えてやがる——まあ、僕たちを何度も嵌めようとしてそれに何度も失敗している辺り、イレギュラーには弱い子なのだろうが。

しかしイレギュラーに弱いということは、それだけ綿密に計画が立てられているということに他ならない。それは非常に厄介だ。

僕は織崎ちゃんに聞いた。

「……なんで僕と二人きりになりたいんだ？」

そもそも、まずここが謎である。僕と二人きりになることによつて、彼女になんのメリットがある？ どういう目的なのだ？

「そりゃあもう、当然、貴方を殺す為ですわよ。お忘れかしら？ 私は貴方を殺す為に、こうしてお話しして差し上げているということを」

「……………」

わざわざ上から目線で言う必要があるのかどうか小一時間問いたくはあるが、しかし、目的ははっきりした——僕を殺す為。

確かに、僕を殺すなら二人きりの時が一番だろう。大抵僕が誰かと居るときは、その誰かに毎回邪魔されているのだから。僕一人だけなら、御しやすいのだろう。

織崎ちゃんは続けて言う。

「勿論、貴方のメリットもありますわ」

「僕の？」

僕に何のメリットがあるというのだろうか。正直、デメリットしか思い浮かばないのだけれど。

「私と二人きりになれば——私の目的をきっちり分かりやすく教えて差し上げますわ《……………》」

「……………」

織崎ちゃんの目的——歴史を修正すること、だったか。

最初に彼女と戦つた時、一応教えてもらいはしたのだが、如何せんいまいち要領を得ないものだった。僕の理解力の問題なのかもしれないけれど、きちんと把握できたかどうかは疑わしい。

それを今度は、ちゃんと、分かりやすく説明する——それについて

彼女にメリットはあるのかどうか不明だが、しかし、僕にとっては確かにメリットだ。

僕は振り向いた。恐らく神原と日和ちゃんは、僕のことを待っているに違いない。ならば、早いとここの会話を終わらせなければ——どの道選択肢は一つしかないのだ。

僕は再び織崎ちゃんに向き直った。

「——いいよ。分かった。その取引、受けて立とう」

「……取引成立、ですわね」

「ああ。じゃあ、僕はこれで——」

「では、今から行きましようか」

「え?」

さあ終わった、これで帰れるぞ——と安堵したのも束の間、織崎ちゃんは僕の胸ぐらを掴んだ。

「え? え? え?」

「だから、行きますわよ。二人きりになれる場所へ」

「え? い、今から?」

「今から」

「ちよ、ちよつと待て! そんなの聞いてな——」

「行きますわよ!!」

聞いてないとは言うものの、まあ確かに、考えてみればそれ以外に可能性はなさそうなものである——どうやら苛立っていた所為か、冷静な思考が出来ていなかったらしい。仮にここまで計算尽くだとすれば恐ろしいが——。

織崎ちゃんはそう言うと、僕を左手で掴んだまま、右手を前に突き出した——すると彼女の五本の指先から、糸が発射されたではないか。

スパイダーマンかよ! と、ある意味的外れなことをツッコもうとしたが(織崎ちゃんは女子なのだから、スパイダーウーマンと言うべきだろう)、しかしそんな言葉を言うほどの余裕は、僕にはなかった。

何故ならば、織崎ちゃんは僕の胸ぐらを掴んだまま、その糸を引き戻した——糸を引き戻したというか、糸に引っ張られたと表現すれば

いいのかよく分からないけれど、その反動で織崎ちゃんは、僕を掴んだままの高速移動を実現させた。

これこそまさにスパイダーウーマンである——街中ではなく書店であり、地面スレスレの移動である点は大いに違うけれども。

「ぎゃああああああつ!!!」

そんな突然の高速移動に、僕は思わず悲鳴を上げた——途中で一瞬歴史コーナーを通り過ぎた際、神原の驚いたような顔が見えた。

そしてそのまま無茶苦茶なカーブを繰り返し、僕たちは自動ドアから高速で射出された——既にドアの先には糸はなく、約束通り、糸はしつかりと解除してくれたらしい。

そんな訳で、僕は織崎ちゃんに、二人きりになれる場所とやらに拉致された訳である。

やっぱり、情けない悲鳴を上げながら。

第肆話 しるしスパイダー 其ノ貳

「006」

「さて、私の豪勢なる屋敷に着くまで、暫く雑談に興じませんか?」

「帰っていいか」

「そんなに嫌ですの!」

「嫌だ」

スパイダーマン顔負けの糸による高速移動により書店から退出した僕と織崎ちゃんだが、少し離れた場所で停止し、何故か歩きで向かうことになったのだ。

何でだ。

僕はてつきりあのままの状態で連れて行かれるものと思っていたのだが——というか、そっちの方がこいつと絡まなくて済むので良かったのだが。いや、絡むというのは物理的ではなく、会話的な意味でだ。

「絡って字、ふふ、糸が入ってますわね」

「だから何だ」

「……そこから繋げるのが貴方の役割ではありませんこと?」

「生憎だが僕は繋げられるような糸を持っていない。糸を使って縫合するのは君の役目だ」

「上手くありませんわね」

「そうだ、僕は上手くないんだ。じゃあ帰っていいか」

「待って下さいまし!!」

必死に引き止めてくる織崎ちゃん。わざわざ袖まで掴んで引き止めてくるのだから、きつと只事ではないのだろう。僕は唯々諾々とそれに従って待て、どうして只事じゃないんだ? 袖を引っ張って止めるくらい、それ程珍しいことでもないだろうに。

「あつぶねえ……また何か思考がおかしくなりかけたぜ」

危ない危ない。

もう少しで車内の二の舞になる所だった。

「くっ……やはり一度私の糸を認識した相手に仕掛けるのは無理がありましたわ」

やはり何かしていたらしい。懲りない奴である。また引つかかり掛けていた僕が言えたことではないのだけれど。

僕は取り敢えず織崎ちゃんに着いて行く。唯々諾々ではなく、不承不承着いて行く。糸云々は抜きにしても、今ここでこいつから目を離せば解放された神原や日和ちゃん達に何を仕出かすか分からない。

それに。

「つーか織崎ちゃん。その僕を洗脳しかけた能力も含めて、本当にちゃんと説明してくれるんだろっな？」

「当たり前ですわ。我がご先祖様に誓って、嘘ではありませんの」

「……その妙なご先祖様信仰も、説明してくれるんだよな？」

「……それを教えて、何か私に得がありますの？」

「……………」

だから信用出来ないんだよ。

そういうこと言うから信用してもらえないんだよ君は——つーかその台詞もいい加減基準が分からない。どう考えても能力について説明する方が一切得がないような気がするのに、どうしてその先祖信仰については頑なに隠すんだ。

価値観が無茶苦茶すぎる。

だから、その”ご先祖様に誓って”という言葉の重みもふわふわしたものだ。あくまで僕が抱いている希望的観測に基づき、この子を信用しているだけ——そこに根拠も何もない。

「……まあ、教えられることは教えますわ。その辺りは誠心誠意、答えさせて頂きますの」

「そうかい」

誠心誠意は間違いなく嘘だろうが、教えてくれるというのは、本当だろう——先ほど述べた通り、これも僕の根拠なき希望的観測だが。「だから、もう少しだけ私に対するその態度を軟化させても良いのではなくて？ 私がこうしてそれなりに歩み寄って差し上げているというのに、そちらからは離れていくばかり。これでは人間関係などと



ても築けませんわ」

「その人間関係をぶち壊そうと、ぶち殺そうとしているのが君な訳なのだけれど」

どの口が言う。

「つか、軟化させているというのであれば、『私に何か得がありますの?』と言うのをまず止めろ。あれが一番腹立つ。

「……なあ、君は何がしたいんだ? 僕を殺したいんじゃないのか? なんて態々雑談しようとするんだよ。それこそ、君に何か得があるのか?」

「それを教えて、何か私に得が——」

「……………」

「……………」

苦々しそうな顔で黙り込んだ織崎ちゃん。どうやら、自制しようとする気はあるらしい。その所為で余計この子の意図が分からなくなっただけがあるが。

「一応聞いておくけれど、君は僕たちを殺そうとしてるんだよな?」

それは今でも変わらない立場なんだよな?」

「当たり前ですわ。何を仰るのかと思えばそんなこと。はっ、もう少しまともな質問は出来ないものですか? 阿良々木暦」

「……………」

うぜえ。素直にそう思った。

本当に雑談する気があるのかと疑ってしまう——いやまあ質問には一応答えてくれたから別にそれ以上は今の会話に望まないけれど、もう少しまともな喋り方は出来ないものなのだろうか。

「しかも煽りも微妙だしな……ひたぎの二分の一にも満たねえよ」

「殺害対象と私を比較するの、止めてもらっていいのです?」

「おっと、思わず声に出ってたか」

「わざとらしいですわね……そっちこそ煽りがなってますんことよ、阿良々木暦」

「悪いが僕のお喋りスキルは通常会話に全振りしている。煽りなんか振ってるポイントは無えよ」

まあ、僕のお喋りスキルなんてたかがしれているのだが。それこそ、ひたぎの二分の一にも満たない。僕は語彙が少ないのだ。

「語彙が少ないと言っても、そこは受験生でしたし、そこそこ語彙はある方なのではなくて？ 少なくとも私よりはありそうですわよ」

「煽っても何も出ないぞ」

煽りどころか、煽ても下手らしい。話術だけでは、正直なところ僕の圧勝なのではないだろうか。

「僕から出るのはただ一つの台詞だ。織崎ちゃん、帰っていいか」

「事あるごとに帰ろうとするのやめて頂けますこと!？」

「だってまだ着かねえのかよ。いい加減にしろよ。会話も全く弾まねえし——っかそもそも、何で君と僕はこうして雑談っぽいことをしながら歩いているんだよ。あのワイヤーアクションはどうした」

ワイヤーアクションというか、ウェブサーフィンと言った方がいいのかもしれないけれど——何せワイヤー以上の強度を誇っているものの、究極的には蜘蛛の糸なのだから。

多分。

「……いやいや、阿良々木暦。貴方には常識がありませんの？ 普通こんな真昼間にあんな目立つ事、する訳がないでしょうに。馬鹿ですの？ 死にますの？」

「馬鹿であることは否定しないし死なそうとしているのは君だが、そこまで言われる謂れはない」

いちいち煽らないと喋る事が出来ないのだろうか。嘗てそんな子に出会った事があるけれど、その子と比べたら差が歴然過ぎる。どう考えても彼女の方が上だろう——地濃は別に織崎ちゃんの暗殺リストには入っていないかった筈なので、遠慮なく比較出来る。

……まあそれはさておきとして——成る程、確かに常識的な理由である。というか、尤もな理由だ。今僕たちの頭上には燦々と輝く太陽がある。真昼間もいいところだ。いくら田舎町とは言え、時間が時間が故に目撃される可能性も夜よりは圧倒的に高いのだ。

どうしてこの程度の事を思いつかなかったのだろうか——先程図書館で交わした会話で、織崎ちゃんは人目につきたがらないという事

を知った筈なのに。いや、織崎ちゃんに限らずとも、そもそも怪異現象を一般の方に見せるといふのは余りにもリスクが大きすぎる。

怪異を目撃することは、即ち怪異に惹かれやすくなることを意味する。それは決して喜ばしい事ではないだろう。怪異なんて、本当は知らなくても良い、知らない方が良いものなのだから。

世の中には知らない方がいい事もあるというが、怪異とは正しくそれなのだ。

「まあ、私も一角の専門家もどき。怪異を公に晒すような真似は、出来るだけしたくはありませんのよ」

織崎ちゃんは言う。その言葉に納得しかけたが、しかしよく考えてみればそもそも公衆の面前、というか公共の場である図書館内でのウエブサーフィンを行ったことについてはどう説明をつけるつもりなのだろう。

「……ふん。あれについては貴方の拉致を優先した形になりましたわ。言い訳も何ありませんの」

「堂々と拉致宣言してんじゃねえよ」

あの連れ去り方は拉致と呼んでも差し支えないものだったけれど、自覚があったのか。タチ悪いな。

……ん？ あれ？

待て待て、僕何が見落としてないか？ 何か織崎ちゃんに関わる新情報がさらつと出されたような気がするのだが、気の所為か？

織崎ちゃんが怪異の専門家、なんて——そんな事、今まで聞いた事あつたっけ？

「……………ちっ」

「あ、無かったんだ」

どうやらこの少女、ここに来て失言してしまったらしい。しかもこの反応から察するに、このまま隠し通しておくつもりだった事なのかもしれない。

うん、やっぱこの子、色々残念だ。

「……織崎の血統であるところのこの私を残念と評すとは、阿良々木暦、それは私の血統を侮辱するに等しい事ですわよ」

「おいおい、自分の血統を盾に使うなんて、本当にその織崎の血統とやらを誇りに思ってるのか？」

「っ……!! 思っていますわ!! 貴方に、貴方に何が分かりますの!!」  
「え、いや、だから何も知らないんだけど……」

声を荒らげる織崎ちゃん。凶星だったのか、或いは本当に血統を侮辱されるのが嫌なのか。どちらだ。

どちらにしても、沸点が低すぎるような気もするが——人の事を言えないけれど。

「ぐぎぎぎぎぎ……! いつもいつもお前らは、織崎の血統を馬鹿にする——馬鹿にして、改竄して、改悪する!!」

「お、おい、落ち着けよ織崎ちゃん——」

「これが落ち着いて——!!! っ……」

今にも僕に掴みかからんとする程の気迫——だが、ここで自制を試みるあたり、決して理性的ではないということなのだろう。或いは、これも演出か。

『鎧』の時も日和ちゃんの時もだが、この子は演出に拘る節がある。もしかしたらこの激昂さえ演技なのかもしれない。それくらい疑ってかからねばならない。

「ふ、ふっ……ま、まあ良いですわ。私は無知には寛大ですの。ええ、寛大ですとも! 今この場で貴方を必殺仕事人三味線屋の勇次さんよろしく絞殺しない程度には、私寛大ですわ!」

「比較的ネタが古いよー!」

まあ古いと言っても、それなりに有名なネタだし知名度は高いと思うけれど、しかし彼が必殺仕事人シリーズに登場したのは10年以上前なのだ。もしかしたら今の若い子たちは知らないかもしれない。

「糸を使って暗殺するというあの手法は、同じ糸使いとして非常に勉強になりますわ。実際あれを見て、豪那のギミックを思いついた位ですし」

「あ? 豪那のギミックだと?」

「あっ」

「……………」

苦々しそうな顔で口元を抑える織崎ちゃん。どうやらまたドジっ  
たらしい。

なんだろう、問うに落ちず語るに落ちるといふか……もうこの子は  
自分から喋らない方が身の為なのではないだろうか？

この子、拷問とかしなくても勝手にペラペラ喋ってくれるタイプの  
子だと思ふんだ。

「……後で説明しますわ」

「お、おう」

多分、織崎ちゃんとしてはこのまま必殺仕事人で雑談を回したかつ  
たのだろう、すっげー落ち込んでる。口を滑らすから……。

「まあそれは兎も角阿良々木暦。そろそろ目的地到着ですわ。良かつ  
たですわね、もうすぐ私との雑談タイムは終わりですわよ」

「え？ あ、ああ。そうなのか」

思わず曖昧な返事を返してしまった——ああそうだ、僕こいつと喋  
るの嫌いだったんだっけ。すっかり忘れていた。あんまりにもこの  
子が失敗ばかりするから、同情心のようなものでも芽生えてしまつた  
のだろうか？ 嫌いなことを忘れるなんて。

「なんでだろう、もう少し君と喋っていたかったという気持ちが僕の中  
にあるんだが」

「どういう心境の変化ですの……というか何故今頃そんな心変わりを  
？ もっと早く心変わりして下さいまし」

「いやあ、もっと喋ればもっとポロリを狙えるかな、と」

「私そんな安い女ではありませんことよ。甘く見ないで下さいまし」

「別に甘く見てるわけじゃねえよ」

「じゃあ辛く見ていますの？」

「辛口ではあるかもしれないし見て辛くなる程墓穴掘ってるけど辛  
く見てはいない」

「というか、辛く見るって何ですよ」

「知るかよ！ 君が言い出したんだらうが！」

辛く見るなどという日本語は存在しない。……よな？ あつたら  
ご一報を。

「大体、私はギャルゲーで例えると、攻略難易度最難関のキャラですよ？」ときメモで言うところの藤崎詩織ですわ」

「君はどうして微妙に古いネタを使うんだ？」

最近の子がついてこれないと思う。

織崎ちゃんに限らず、今更だけどさ。

「ふん、バーチャルアイドルの先駆けとなったかの有名人も、今や過去の存在なのですわね。歴史の流れというものは残酷ですわ」

まあ、結構なブームを巻き起こしたからな。キャラ名義で曲を出すという、最近ではあまり珍しいことではなくなった手法を最初に行った訳だし。そういう意味では、〈物語〉シリーズの先輩とも言えるのか？

「しかし、そんな時代があったことを考えると、今のバーチャルアイドルの進歩ってすげえな。ラブライバーだっけ？ あれが流行語大賞に入ったりする時代だもんな」

「ですわね。昔からすれば考えられませんわ。それに最近ではバーチャルキャラクターそのものがライブをする時代ですものね。スプラトゥーンとか、記憶に新しいですわ」

「あ、ごめん。そういう割と最近のゲームにまで話を広げられると僕が付いていけない」

主人公として不甲斐ないと思うけれど、残念ながら僕はゲーム機を購入するようなタイプじゃないのだ。専らゲーセン派である。

今の子にとっては最近のゲームについての雑談の方が付いてくれるのだろうか……。――

「……そういう意味じゃ、君の方が話題の範囲は広いんだな。なんか負けた気分だ」

「何の勝ち負けですの……というか、どうせゲーセン派と言っても最近の筐体は知らないのでしょうか？ ラブ&ベリーとかマリンマリンとか、その辺りの知識で止まっているのでしょうか？ ゲーセン派ときえ呼ばせんわ」

「くそっ、そのマリンマリンさえ分からない……」

ムシキングとかなら分かるが、何故そんなマイナー所を。普通にダ

ンレボとか言えよ。

時代の流れを感じて悲しくなるじゃあないか。

「なんでゲーム関連の話題になるとそんなに活発化するんだよ君は」  
「だって好きですもの。ゲーム。歴史の流れを感じられて、素晴らしいですわ」

「へえ……」

「ゲーム&ウォッチとか、今でも偶にやってますわ」  
「お前千石と気が合いそうだよな」

確かあいつ、妙にマイナーなレトロゲーが好きだった筈。この子と  
なら対等に語らせるかも……？

「嫌ですわ。私、あれの性格そのものが嫌いですので。それに私は別にレトロゲームに造詣が深いという訳ではありませんの」

「そうかよ」

「なんて言ってるうちに到着ですわよ阿良々木暦。目的地到着ですわ」

「え？ マジかよ。もう雑談終わりなのか？」

「初期と態度が違いすぎますわ……」

それは僕自身も思った。雑談が出来るっただけで態度を軟化させるとか、チョロ過ぎる。

名残惜しい所だが、しかしここからは多分シリアスパートだ。切り替えねばならない。忘れがちだが、この子は僕たちの命を狙う暗殺者なのだから。

織崎ちゃんと僕の眼前に建っていたのは、一軒の屋敷だった。荒廃気味の見た目をした屋敷。僕はこの屋敷に見覚えがある。

先程会話の中に出てきた、”豪那”だろう。

織崎ちゃんは扉を開けた。

「さあお入り下さいまし、阿良々木暦。ミルクティーの一杯や二杯や三杯や四杯や五杯や六杯や七杯や八杯や九杯でも飲みながら、語って下さいまし」

語るのは、君の方なのだが。

屋敷に入った僕は、驚愕することとなった。一度入ったことのある屋敷なので、それだけ油断していたということなのかもしれない。

屋敷の中に入った瞬間は前回と同じような、廃墟と呼ぶに等しい内部構造だったのだが、織崎ちゃんが扉を閉めた瞬間、辺りに散らばるがらくたや瓦礫などは一つ残らず金銀財宝へと姿を変えた。壁や天井、床が黄金色に変わり、部屋の中には金色のコーヒーターブルと玉座を連想させるようなアイアンチェアが二脚現れた。

突然の眩しさに目を細めた——この様相自体は前回見たけれど、まさか扉を開けてすぐこの部屋とは。内部を改造することも出来るってことか。前はもう少し歩いた先にこの部屋があったのだが。

「さあ、お掛けになってお待ち下さいまし、阿良々木暦。私アフタヌーンティーの用意をさせていただきますわ」

「あ、ああ。どうも——って、アフタヌーンティー!？」

「そうですねよ? それが何か」

「いや、それが何かって、そんなすました顔で言われても……」  
「?」

不思議そうに首を傾げる織崎ちゃん。常識が無いような人を見る目で僕を見るな。

アフタヌーンティーと言えば、イギリスにおける上流階級文化だった筈である。そんなもんをさらっと経験していいのか?

僕の葛藤を気にせず、織崎ちゃんは着々と慣れた手つきで準備を始める——待て待て、話を勝手に進めるな。どうすればいいんだ。僕は何をすればいいんだ。

「別に何もしなくて結構ですわ。後、そんな風に突っ立っていないで早く座って下さいまし。用意の邪魔ですわ」

「あ、ああ。悪い」

僕は椅子に座った。座り心地は悪くない。

次々とテーブルの上が充実していく。アフタヌーンティーと聞けばまず思い浮かべるであろう三段のケーキスタンド、恐らくミルク



ティーが入っているのであろう大きめのティーポット、ミルクティーが既に淹れられたティーカップとソーサ、クリームのようなものが入った瓶など。どれも金色だったり翡翠色だったり、明らかに一般の店では売っていないような代物ばかりであった。

織崎ちゃんは最後に真っ白い皿を僕と自分に配ると、向かいの椅子に座った。

「さあ、頂きましようか」

「待て待て待て待て!! ちよつと待て!!」

「なんですの? 松野チヨロ松」

「確かに声というか中の人は同じだし攻略難度の低いチヨロいキャラであることは認めるけれど、しかし織崎ちゃん、僕の名前は阿良々木暦だ!」

「そうですの。じゃあ早く頂きましよう」

「だから待てや!!」

「なんですの? 阿良々木暦」

「いや、そんなささらつと普通にアフタヌーンティーを始めようとするな。ちゃんと説明してくれ。何なんだこれは、どういう意図があつてこんな事になった。僕はこれにどう反応すればいいんだ。っーか、どう食べればいいんだ! 僕アフタヌーンティーのマナーなんて知らねえよ!!」

上流階級の人々が発祥となった文化には、必ず大量のマナーが付いて回る。恐らくそれはこのアフタヌーンティーも例外ではないだろう。きつと食べる順序や食べ方と言つたマナーがある筈だ。

しかし、残念ながら僕はそういつたマナーは一切知らない。阿良々木家は一般的な中流階級であり、マナーも何もあつたものではない。況してや外国の文化など、僕が知る訳がないのだ。羽川やひたぎ、忍あたりは知つてそうだが、生憎僕はこういう知識はからつきしなのだ。だから勝手に始められても何をどうすればいいのか全く分からない。

ただただ慌てふためき、混乱する事しか出来なくなつてしまふという無様な姿を読者にお見せすることとなつてしまふのだ。

「別にそこまで深く考える必要はありませんわ。普通に食べれば良いのですわ」

「君にとっての普通と僕にとっての普通は間違いなく違うと思うのだが」

「マナーに拘る必要はありませんわ——楽しんで食べれば、それで良いんですの」

「この状況で楽しめというのか」

酷すぎる。況してやこの後織崎ちゃんの目論見やら何やらが語られるというのに、それを楽しんで聞けというのか。

「だからどうしてそんなに拘りますの？ 貴方は正式な手順を踏まないと何も出来ない呪いにでも掛かっていますの？」

「いや……そんなもんなのか？」

「そんなものですわ——別にここは本場イギリスではありませんし、どうしても何らかのマナーを守りたいなら……まあ取り敢えず、サンドイッチからお食べになれば如何？」

「……じゃあ、そうさせてもらうよ」

ケーキスタンド下段の皿にはサンドイッチが盛られていた。挟まっているのは、キュウリか？

このサンドイッチを取る動作にも、何らかの作法があるのかもしれないが、あまり聞きすぎるのも良くないので、僕は手近なものを取ることにした。

「いただきます」

「T u c k i n」

「え？ 何だつて？」

「……これまで説明しなければなりませんの？」

「あ、いえ。別にいいです」

僕は慌ててサンドイッチを手を取った。駄目だ、落ち着こう。タツキン？ 何だそれは。頂きます的な意味か？ 落ち着け。落ち着こう。いちいち今聞かなくてもいい、今度羽川とかひたぎに聞けばいい。無学さに泣きたくなるけれど、気にしない。

サンドイッチを一口。

挟まっていたのはやはりキュウリだった。噛んだ瞬間、あの独特な固い感触が歯にぶつかった。

うん。普通に美味しい——パンもパサパサしていたりしている訳ではなく、味付けも良い。最高の味という訳ではないが、文句をつけるような所は僕程度の舌では思い浮かばない。

「これ、織崎ちゃんが作ったのか？」

「ええ。お口に合ったようで何よりですわ」

織崎ちゃんはミルクティーを飲む——そう言えば、何でティーカップのすぐ隣の小皿にマカロンが大量に乗ってるんだ？ 何でティーカップの隣なんだ？

……まさか、気に入ったのだろうか？ 斧乃木ちゃんのハプニング（恐らく故意）の所為で、織崎ちゃんのミルクティーにマカロンが混入してしまったことがあった。あの時の反応を見る限り美味しかったらしいが……。

「私、その国独特の文化というものが好きなのですわ。文化には歴史がよく反映されていますもの——アフタヌーンティーはイギリス独特の文化。元々は第7代ベッドフォード公爵のご夫人であるアンナ・マリアが、女性向けの社交の場として始めたものなのです」

「女性向け……じゃあ僕普通にアウトじゃねえか」

「今と昔では違いますわよ？ 今では男性も参加してますわ」

「だ、だよな」

「もしも今でも女性向けであれば、女装しなければなりませんわよ、貴方」

「やめろ。女装の話はするな」

色々トラウマなのだ。もう僕は異性を演じたくはない。

「つーか、女装なんかで参加できるわけねえだろう」

「当たり前ですわね。打ち首まっしぐらですわ」

「怖い！」

そんな厳しくしなくてもいいだろう、と思うけれど、よく考えてみればそれは今の時代でも同じではないだろうか。物理的に死ぬか社会的に死ぬかの違いだけで。

「何でアフタヌーンティーなんだ？ 普通にミルクティーを出してくれるだけでも僕としては十分だったのだけれど」

「一応貴方は殺害対象とは言え、客人であることには間違いありませんわ。前回とはいざ知らず、今回は全て織り込み済み——客人に対して急拵えのぞんざいな歓迎をしたとなれば、ご先祖様に顔向け出来ませんわ」

そう言うのと織崎ちゃんはサンドイッチを食べた。僕もそれにつられて食べる。

——そう、ご先祖様。

僕は別に織崎ちゃんとアフタヌーンティーを楽しみに来た訳ではない。織崎ちゃんから全ての説明を受けるため、ここへ拉致されてきたのだ。

「そのご先祖様つてのは、誰のことを指してるんだ？」

「決まっていますわ。私へと連なる全ての人々——全てのご先祖様。誰か特定のご先祖様に対する敬意ではなく、この織崎という血統全てに対する敬意ですわ」

「なんでそんなに敬っているのかは、教えてくれるのか？」

「教えて、私に何か得でもあ……まあ、ええ。いいでしょう」

台詞を自制してくれた。代名詞と呼べる台詞だったのかもしれない。なんか申し訳ないな。

「というか、別にそこまで理由はありませんのですけれどね——普通に物心ついた時から、私はこの血統に誇りを持っていましたわ。もしかしたら、お母様とかお父様に刷り込まれたのかもしれないけれども……まあ今は、自分の意思で敬っておりますわ」

「そのご両親は、今どうしてるんだ？」

「死にましたわ」

「死つ……」

「別に珍しい事ではありませんでしょう？ 特に貴方にとっては。今まで貴方はそういった——親を亡くした方々と接してきたはず。羽川翼を始めとして、神原駿河、老倉育なんかもそうですわね？」

「……だからといって、慣れねえよ」

「というか、慣れてはいけない。これが大人というのであれば兎も角、その挙げられた奴らは皆二十歳にも満たない奴らなのだ。決して普通とは言えたものではない。」

「なんで亡くなったんだ」

「知りませんわ。10歳くらいの頃、でしたかしら……気付いたらいつの間にか亡くなってましたの」

「いつの間にかって」

「そうとしか表現出来ませんわ。元々放任気味なご両親でしたし、顔を合わせるのもまあ、偶にくらいでしたし——だからどのタイミングで亡くなっていったのか、分かりませんの。ああ、別に気の毒にとか、そういう言葉は要りませんわよ？ 寧ろ私はあの方々により深い感謝を抱くことが出来るようになったのだから、私としては悲しい事ではありませんわ」

「より感謝？」

「私をご先祖様を心から敬っているのは、先程説明した通りですわ」  
「……………」

先祖という言葉の定義は、既に亡くなった数世代前の血縁者全般を指す。つまり織崎ちゃんは、そんな放任気味であったというご両親が、ご先祖様と呼ぶべき存在となったが故に心から感謝できるようになったということか。

それは——良いことなのだろうか？

「良いとか悪いとか、そういう話ではありませんわ。そんな価値観で私は行動していませんの。ご先祖様になったのだから敬うべき——ただそれだけのシンプルな話ですわ。敬う対象が増えたところで、私は別に苦にも感じませんし」

「……そのご先祖信仰は、僕たちを狙う理由と関係があるのか？」

「大いにありますわ。尤も、関係あるのはご両親なんて浅い世代ではなく、もっと遡った昔の世代——織崎が、”四季崎”であった頃の世代ですわ」

「四季崎——」

四季崎と言えば、思い浮かぶのはかの刀鍛冶。完成形変体刀とやら

を作りあげた、仮想の登場人物。

四季崎記紀——。

「そう、私は四季崎記紀の子孫。そしてその血統を受け継ぐ末裔——という話は、この間しましたわよね？」

「……まあな」

確かにこの間はそんなことを言っていた。だが、四季崎記紀というのは仮想の人物なのではないのか？ それとも、あの物語のモデルとなった人物が居て——それが、織崎ちゃんの先祖？

「その微妙な顔を見ると、どうやら私の血筋に掛けられた最悪の呪いを知ったようですわね」

「え？ 最悪の呪い？」

「そう——最悪というか、改悪と言うべきですかしら？」

「改悪——」

とは、どういうことだ？ 呪い？ 何のことだ。

「——いまいち、ピンとこないんだが」

「……でしようね」

織崎ちゃんは溜息を吐き、サンドイッチを手にとって食べた。僕も食べる。

「所詮そんなところでしようよ——私の誇り高き血統は、そうやって呪われ、穢され、封じられていく」

「封じられ……？」

「歴史というのはデリケートなものですわ」

織崎ちゃんが言う。

「人は昔に戻ることが出来ませんわ。それはタイムマシンでも発明されなければ、絶対に覆されることのない常識ですの。そしてそれは恐らく、永遠に覆されることはない」

永遠に覆されることはない。決して叶うことのない、人類の夢——  
夢物語。

実際、僕と忍は過去へ戻ることの難しさをよく知っている。身をもって味わっている。あの時実際に向かったのは別ルートの過去であつただけけれど、しかしその際忍が用いた怪異エネルギーは凄まじ

い量であった。

曰く、時間遡行とは時間の流れに逆らうこと、言ってしまうえば流れのある川で流れに逆らって泳ぐようなものであり、先の時間に進むより遙かに難しい、とか。

「過去に立ち返ることは出来ても戻ることは出来ない——そしてそれ故に、過去は歴史となり、その当事者しか知りえないものとなるのですわ」

「当事者しか——知りえない」

「過ぎてしまったことはどうすることも出来ないとは、正しくその通りですわ。歴史を正しく認識することが出来るのはそこに居合わせた当事者だけ。当事者以外がその過去——歴史を正しく認識することは、どう足掻いても不可能なのですわ」

織崎ちゃんはミルクティーにマカロンを入れた。ああ、やっぱり気に入ってたのか、それ。

「だからこそ、歴史はデリケート。特に当事者が居なくなり、誰も真実を知らなくなつた歴史というのは、言ってしまうえば誰でもその歴史を改竄することが出来るということに等しいのですわ。お分かり？」

「ああ……まあ」

織崎ちゃんはスプーンでマカロンを掬い上げ、食べた。美味しそうだ。

「誰も知るものが居ないなら、幾らでも歴史をでっち上げることが出来る——改竄し、改悪することが出来ますの」

織崎ちゃんは苦々しげな表情で言う。

「そしてそれは、不都合なものを隠す時に最も活用されますわ……私の血筋を隠す時のように——変体刀の真実を隠す時のように」

「変体刀の——真実」

織崎ちゃんはケーキスタンド中段のスコーンに手を伸ばした。僕もそれにつられ、思わず手を伸ばした。まだサンドイッチを食べ切っていないが、いいのだろうか？

「貴方の四季崎記紀に対する反応から察するに、あの本——『刀語』を読みましたのでしょうか？」

「……ああ」

「あれこそ最も最悪な改悪。私の血筋を冒瀆する、血統の歴史を穢す呪いなのですわ」

「……それはつまり、あの本には四季崎に関する何らかの描写が改変されていたりしているってことか？　一応言っておくけれど、僕はあの本を全部読んだ訳じゃあないぜ。一巻しか読んでない」

「それで十分ですわ」

織崎ちゃんはスコーンを齧った。僕も齧る。普通に美味しい——外側はカリツとしていて、中はしっとりとしている。これがスコーンか。

「……そして貴方は、あれが架空の物語だと、そう知ったのでしょう？」

「え？　ああ、まあ」

巻末の翻訳者コメントに、そう書いていたからな。そうでなかったとしても、あの刀集めが実際にあった出来事ならば歴史の参考書に載っていてもおかしくはない筈。なのにそんなことが書かれている参考書は一冊もなかった、つまり、あれは創作ということである。

「その認識が既に間違っているのですわ。阿良々木暦」

「え——」

「あれは決して架空の物語ではありませんわ。実際に過去に起きた、歴とした事実であり正史——幕府より遣わされた『奇策士とがめ』、虚刀流七代目当主『鑪七花』、その姉である『鑪七実』、そして日本最強の剣士『鏑白兵』、さらに奇々怪界な鎖を纏った忍『真庭蝙蝠』——全てが実在の人物で、歴史改竄の被害者達なのですわ」

織崎ちゃんはスコーンを食べた。

「008」

あの物語は実は正史であり、登場人物は皆実在した、なんて言われなくても納得できる筈もない。それは僕から言わせてみれば、浦島太郎や桃太郎が実在すると言っているようなものに思える——例えば些か



幼稚すぎたかもしれないけれど。

仮に織崎ちゃんの言う通り、あれらが全て正史とするならば、ついこの間まで血眼になって歴史を勉強していた僕が知らないのはおかしい。日本全国を行脚するという大規模な刀集め——そんなものが実際にあったならば、参考書どころか教科書に載っても何ら不思議ではない筈だ。

「そこが改竄なのですわ——事実を恰も架空であるかのようにする、これも立派な改竄ですわ」

困ったものですわね——と言い、織崎ちゃんはミルクティーを飲んだ。

「……仮にその話を信じるとしても、じゃあなんでその事実は改竄されたんだ？ 理由が思い浮かばない」

一体どれが検閲の琴線に触れたんだ？ 真庭忍軍だろうか？ あの荒唐無稽さが、ある意味一番架空染みているように思えたのだが。いいえ、まにわには関係ありませんわ……いえ、多少は関係ある、のかしら？」

「まにわにとって……」

「真庭忍軍の愛称ですわ。あのまま読み進めていれば何れ登場する愛称。概ね好評だったらしいですわよ」

「しかも好評だったんだ……」

馬鹿ばかりなのかあの世界は。もうちよっとセンス良い愛称は無かったのかと思うけれども。

まあそんなことはどうでもいいや。

「真に危険視されたのは、四季崎の血統そのものですわ」

「四季崎の血統……」

「そう」

織崎ちゃんはスコーンをひと齧り。

「どうも四季崎の血統を嫌う何者かによって事実は隠蔽されたらしいのですわ。一説では、それは同じく四季崎の血統であったとも言われておりますけれど——というか、私が調査した結果、そう結論付けたのですれけども」

「調査なんてしたのか」

「ご先祖様を敬い血統を愛するこの私が、一切の調査を行わないと思  
いまして？ 四季崎の末裔たるこの私が、この世界の違和感に気付か  
ないと思いませんか？」

「この世界の——違和感だつて？」

「そう、違和感」

織崎ちゃんはミルクティーを一口飲んだ。僕もつられて飲む。

「改竄された世界には、必ず何らかの違和感が生じるものなのですわ。  
それは先の大乱の首謀者たる『飛騨鷹比等』が証明している」

「飛騨鷹比等？」

「……貴方、これからあの本を読む気はありますか？」

「……どうだろう」

正直、無さそうな気がする。幾ら現代仮名遣いに直されているとは  
いえ、古風な文章であることに変わりはない。古風な文章というのは  
それだけで、なんとなく読み辛いように感じるものなのだ。

「ならもうネタバレ気味に言ってしまうでしょう——飛騨鷹比等とは  
我が四季崎の血統に抗おうとした存在ですわ」

「抗おうとした……」

「そう。酷いものですわよね？ 自分を産んだ血統に対して歯向かお  
うだなんて、身の程知らずも良いところですよ」

「自分を産んだ……つまり、そいつは四季崎の血統ってことか？」

「いいえ。無関係ですわ」

「……？」

「けれど、全くの無関係という訳ではありませんの」

織崎ちゃんはスコーンを食べた。僕の皿にあるスコーンは一向に  
無くなる気配がない。

「飛騨鷹比等とは、四季崎の血統により筋書きに加えられた存在です  
の。それは他の方も同じこと、ですわ」

「……訳分かんねえ」

僕は必死に整理を試みた——が、分からない。筋書きに加えられた  
？ どういう意味だ？ 四季崎の血統じゃないなら——え？ どう

いう事だ？

「四季崎とは、占術師の家系ですわ。これは以前言いましたわね」

「ああ、聞いた……それがどう関係あるんだ」

「未来は過去とは違いますわ」

織崎ちゃんは脚を組んだ。

「未だ誰も見ないから未来——故に、故意で未来を変える事は決して出来ませんの。当事者一人さえ居ない先の話を改竄するなど、普通は土台無理な話なのですわ」

「じゃあ——」

「ですけども、未来が見えるのであれば話は違えますわ」

織崎ちゃんが言う。

「未来を観測できるなら、同じくコントロールも出来るということですから——占術師たる私の誇り高きご先祖様は未来を視、そしてそれを改竄することが出来た。そしてその手段の一つが、この——」

織崎ちゃんは、右手を高く掲げた。すると一瞬の瞬きの内に、その右手には黒い刀が握られていた。禍々しい雰囲気を放つ刀。

「——完成形変体刀、ですわ」

完成形変体刀の十二本が一本——”毒刀『鍔』”。

「四季崎記紀はこの刀——千本もの変体刀を全国各地にばら撒いた。本来の未来ではありえなかった数々の、オーパーツとも呼ぶべき刀——それにより、未来は改竄されましたの」

「……その改竄の結果生まれたのが、飛騨鷹比等ってことか」

「その通り」

四季崎ちゃんは『鍔』を椅子にもたれ掛けさせるように置いた。

「飛騨鷹比等は、歴史が改竄されたものであるということを生まれた時から感じていましたわ——それはご先祖様の目論見通りであり、『鍔』の影響でもありましたわ」

『鍔』？　なんだろう、と思ったが、胸の内に秘めておく。恐らくこれは口が滑った類の奴だ。反応してしまえば、話が面倒臭くなる。ただでさえ説明をだるく感じているであろう読者は多いだろうに、これ以上余計な会話を展開する訳にはいかない。

「飛騨鷹比等とは、四季崎の血統により生み出された安全装置。歴史改竄がおかしな方向に進んだ結果、それをさらに修正する役割を負わされた存在——であった筈なのだけれど、これがまあ見事に歯向かって……お陰でこんな結末を迎えてしまったとも言えるのですわ」

「……こんな結末つてのは、四季崎の血統自体が改竄されたことを言っているのか？」

「その通り——本名は不明ですけど、本来四季崎の血統である筈の『否定姫』と呼ばれるご先祖様が、奇策士とがめの報告書に何やら細工したらしくて。お陰で本来は『四季崎』であったところを、『織崎』へと改竄されたという訳ですわ」

名前が時代を経て変質するというのは、数え切れない程の例がある。それは表記が間違っていたり訛ったりしていくうちに変質していくもので、例を一つ挙げるとするならば、『浪白公園』もその一つだ。これは本来『白蛇公園』であったところが表記揺れにより変化し、名前が変質してしまったことに由来する。

だが、そういう事か——四季崎なんて、どう表記しても三文字が二文字にならないし、頑張つて縦に並べてみても織崎にはとても見えな。しかしそれが偶然ではなく意図的な改竄であったのであれば、この変質も納得がいく。

「名前というのは非常に重要なものなのですわ。それは貴方も、お分かりですわよね」

「ああ。分かってる」

今まで何回か言ってきたことなので簡潔にするが、名前というのは使い方によってはその存在を縛ったりすることが出来る強力な呪いのようなものなのだ。

「その細工により、四季崎は封印されましたわ。四季崎は架空の苗字となり、現実には存在する四季崎は織崎という苗字へと改竄された——私のご先祖様は皆、架空のものにされたのですわ」

現実には存在しない、物語上にしか存在しない——偽りの血統にされたのですわ！

織崎ちゃんは語気を強めて言った。そしてクールダウンの意か、ミ

ルクティールを一気飲みした。

……そういう事情だったのか。

歴史の改竄とはつまり、彼女のご先祖様が生きた時代そのものが、ありもしないものとして処理されたということだった。時代が無くなったということは、当然その時代に住む人々もまた架空の存在として処理されるということに他ならない。

織崎ちゃんは、それが我慢ならなかったのか。自分の先祖を、信仰と言っても過言ではない程に敬う彼女にとって、それは我慢できない程の改悪だったのだ。

——僕ならどう思うのだろうか？

自分のルーツが完全に消されたとしたら——僕は、どう思うのだろうか？

……正直、そこまで重要視することはないだろう。僕は血筋を尊重するような奴じゃない。系図を眺めたことなんて、一度たりともない。

だから僕には測りかねる——織崎ちゃんはそれを知った時、どれ程怒り狂ったのだろうか。

それは誰にも想像出来ないだろう。彼女と同じくらい、先祖を敬っている人にしか、知りえないことだろう。

「……………ん」

僕は皿に乗っていたスコーンを食べた——と、その時思った。

——で？

って。

いやまあ、織崎ちゃんが言う”改竄”の意味は分かったし、ご先祖様への敬愛は分かったのだけれど、しかし肝心な所が分からない。

「——それでどうして、君は僕たちを殺そうとしているんだ？」

「……………」

そう、何よりの問題はこれなのだ。そもそも僕たちは、じゃあなんでこの子に命を狙われているのだ、という話である。

今の説明では全く説明出来ない——別に僕たちが歴史を改竄した張本人であるという訳でもないのに。

「……私が貴方たちを狙うのは——」

織崎ちゃんが言う。

「——貴方たちが、本来あるべき歴史を破壊しているからですわ」

[009]

「僕たちが、歴史を——壊しているだって?」

「そうですわ」

「えつと……つまり、どういうことだ? 僕たちはその、改竄された歴史の上で生きているから、とか——そういう意味か?」

「いいえ、違いますわ」

違うのか。

「じゃあ、どういう意味だ? 僕たちが歴史を破壊している——どうやって?」

全く、身に覚えがないのだが。

「でしようよ。ふん、当事者はいつだって無自覚にデリケートなものを破壊する——それがどれだけ尊い歴史であろうと、いとも容易く破壊する——それが、私には、我慢ならない!!」

「っ!!」

な、なんだ? 織崎ちゃんは激昂したようにテーブルを叩く。

僕は織崎ちゃんの逆鱗に触れてしまったというのか? 無自覚に破壊する? 分からない。全てが分からない。

この子は、何が言いたいんだ?

「私が言いたいのは——」

織崎ちゃんは立ち上がり、僕を睨んだ。

「——貴方たちが存在しているから、四季崎の歴史は復活しないということですわよ!!」

そう叫ぶと、織崎ちゃんはティーポットに入っているミルクティーを一気に飲む——クールダウン、なのか?

……これだけ激昂して言ってくれたのだが、それでも、全く分からない。どうして僕たちが居れば四季崎の歴史は復活しないんだ?

そもそもさっきの話では、四季崎が目論んだ歴史改竄というのは結局失敗して、手痛いカウンターを食らったという話だったように思うのだが——復活も何も、それは僕たちが居なくても結局不可能であるように思えるのだが。

「だから……貴方たちが存在している所為で、本来あった筈の世界観が塗り潰されているということですよ！ 貴方たちが住む世界観に！」

「待ってくれ、本当に意味が分からない。え？ 僕たちの住む世界観？ 分からん分からん」

「何故分からないんですの!! 貴方なら、他の誰よりも理解することができる筈だというのに!!」

「え!?!」

「貴方なら——このルートの主人公である阿良々木暦なら、理解出来るでしょうがっ!!」

「っ……………」

しゅ、主人公だと？

……いやまあ、散々メタ発言気味に主人公主人公言ってきた僕ではあるけれど——ん？ ”ルート” だと？

”ルート”——つまり、平行世界……別時空……。

「……えつと……待ってくれよ、もうちよつとで何とか思い付きそう……………」

「……………」

世界観を塗り潰した——この世界観という単語を、ルートに置き換えてみると、どうなる？

僕たちの世界観が塗り潰した——僕たちが住むルートが、本来あるべきルート——つまり、その『四季崎の改竄が失敗した後に生じる未来』を、塗り潰した…………？

別ルートと別ルートが融合して——片方のルートは、消え去った…………？

「つと……つまり……僕たちの住むルートと、その四季崎の改竄が失敗したルートが融合して……それで……元あったルートは僕たちの

ルートに、上書きされた……?」

「……概ねそれで良いですわ」

「あ、良いんだ」

……いや良くねえよ。何が良いんだよ。

「……あの、織崎ちゃん? 一つ言っただい?」

「……どうぞ」

「これ……僕たち、とんだとぼっちりなんだけど!!?」

「……」

織崎ちゃんは僕を睨んだまま、ケーキを食べた。

……いや、食ってんじやねえよ。

「ルート融合って……いや知らねえよ!! なんだよその理由!? 計り知れなさすぎるだろうが色んな意味で!! それを教えられて、僕たちに何が出来るんだよ!!? それで僕たちを殺して何になるってんだ!!?」

動機は分かった、だがその結果どうなるのかが全く分からない!!」

織崎ちゃんは僕を鬼の形相で睨みつつケーキを食べた——いやだから食ってんじやねえよ! 鬼の形相になりたいのは、こつちなんだよ! つーか鬼だけだ僕は!

「そんな訳の分からない理由で僕たちは君に狙われていたのか!? そんな理由で僕たちに納得しろってのか!? 納得なんて出来る訳ないだろうが!!」

「……分かりませんか?」

「ああ、分からない。これと僕たちを殺すことについて何がどう繋がるのかこれっぽっちも分からない。説明しろ、織崎ちゃん」

「……ふん」

織崎ちゃんはミルクティーを飲んだ。

「それを教えて——私に何か得でもありますか?」

「っ——!!」

——ここでその台詞を使うのか。

それが僕の激昂を狙ったものだとするれば、大した策士だ——惚れ惚れする程だよ、本当に。

何せ僕はその狙い通り、すっかりキレてしまったのだから。



僕は立ち上がろうとした——立ち上がって何をする訳でもないけれど、いつまでも見下されているのを我慢するなど、今の僕には到底出来ないことだった。

が——それは叶わぬ願いだった。

僕は椅子から立ち上がることが出来なかった——まるで何かによって止められているかのように、椅子に縫い付けられているかのように。

或いは——糸か何かで縛られているかのように。

「し、しまった——!!」

「ふふふ、馬鹿ですわねえ」

織崎ちゃんは僕を見下したまま嗤う——いや本当、何が『しまった』だ!

何で僕はこんな簡単な事に気付かなかった——初めてこの部屋に入った時も、全く同じ手口で拘束されたじゃあないか! 僕には学習能力が無いのか!?

というか、これが罠である可能性を一切考慮していなかった——何故考えなかった!?! どうして僕はこのこと、こんな——!!

蜘蛛の糸か!?! いやでも、僕は一度仕掛けられそうになった時、それに気付いた! なら、これは蜘蛛の糸とやらではなく——!!

「いいえ、しっかりと蜘蛛の糸ですわよ。阿良々木暦」  
「なっ……!!?!」

「私がただ雑談をしているだけと思いませんか? この私が、あんな分かりやすいどうでもいいタイミングで糸を仕掛けると思いませんか?」

あれはフェイクではなく、本命は別にあつたとは思わなかった訳ですのね?」

「っ……………!!」

道中、僕は一度糸を仕掛けられた事に気付いたけれど、あれさえも作戦に織り込み済みだったというのか!?! 本命の糸は別にあつた——フェイクに気を取られて、気付かなかつたってのかよ!?!

あの雑談もまた、僕に疑念を抱かせないための隠れ蓑ってことか! ということはこの歓迎もまた、僕を動揺させる事によって余計な事

を考えさせない為に用意されたもの——!!

「蜘蛛は用意周到なのですわ。糸をありとあらゆる方向に張り巡らせ、獲物が引つ掛かるのを待つ——張り巡らせるのも滅多やたらではなく、確実に獲物を狩る為に計算し尽くした末に糸を張る。それは私も同じですわ、阿良々木暦」

「く、蜘蛛——」

「そう、蜘蛛。節足動物門鋏角亜門クモ綱クモ目に属する生物の総称——そしてその中でも私がこの身に宿すのは、ジヨロウグモの怪異」  
織崎ちゃんは、そう言いながら毒刀『鍍』を拾い上げた。

『死霊蜘蛛』!!」

「っ…………!!」

織崎ちゃんは『鍍』を構えた。

死霊蜘蛛——それがこの怪異の名前か。

いや、名前が分かったからなんだって言うんだ？ このままこの怪異の事をこの状況で教えてもらえるとほんとにも思えない。今は考察は後回しにして、優先すべきは、ここからの脱出だ——!!

「し、忍!! この糸、斬ってくれ!!」

僕は影に棲む相棒に向かって叫んだ——忍の持つ妖刀『心渡』は、例外を除いてあらゆる怪異を一刀の下に斬り伏せる。そしてそれは死霊蜘蛛の糸も例外ではない!

だが——。

「し、忍? お、おい?」

「…………ふふふっ」

影からは、何の応答も無かった。

「う、嘘だろ? 寝てるのか? し、忍——起きろ、忍——!!」

「無駄ですわ無駄ですわ無駄ですわ!! 何故この私がこの屋敷まで貴方を連れて来たか、少しは考えて下さい!! ただアフタヌーンティーを披露する為だけに連れて来たとお思いかしら?!」

「っ——!!」

な、何かあるのか? この部屋に、何か仕掛けられているのか?

その所為で忍は、反応しないのか!? だとすれば、どれだけ僕は馬鹿

なんだ——愚かなんだ!!

「周りをよく見渡してご覧下さいまし! 阿良々木暦!!」

「ま、周り——っ!?!」

僕は首だけ動かして周りを見た。金色。金色。金色——だが、その金色の壁に、幾つか不自然な箇所があった事に気付いた。その個所は長方形で、奇怪な模様と文字が書かれていた。

「ふ、札——!!」

「ご名答!! 私がこの部屋に貴方を再び招待したのは、誰にも貴方を助けさせない為——この札はあらゆる怪異をこの部屋に寄せ付けない! 予め例外に設定しておいた私の死霊蜘蛛と、貴方という吸血鬼もどき以外は!! 扉が開かれない限り、この部屋に現れることは絶対に出来ない!!」

「なっ——」

た、助けは——忍の助けは、期待出来ないってことか? 外部からの、助けしか——!

「外部からも不可能!! 私が札を内側にしか貼っていないとお思いかしら!?! 当然外側にも貼ってある——この豪那は、先程言った例外を除いて、怪異の因子を持つ者には決して見つけられない!!」

「っ——!!」

「神である八九寺真宵にも、悪魔を宿す神原駿河にも、蛞蝓豆腐の因子を持つ千石撫子にも、猫と虎を飼う羽川翼にも、蜂の針が刺さった阿良々木火憐にも、しでの鳥である阿良々木月火にも、吸血鬼の搾りかすである忍野忍にも、式神である斧乃木余接にも、貴方のダブルである忍野扇にも、微刀『釵』たる神崎日和にも——誰も開けることはできないし、見つけられない——助けに来る者は、誰もいませんわ!! おーっほっほっほ——!!」

「な——そ、それは——それは——」

笑い方にツッコむ気力さえ起きない僕は、ただ謔言のようにことばにならない単語を繰り返す事くらいしか出来なかった——助けは来ない。ここまで絶望する言葉が今までであっただろうか?

人は一人で勝手に助かるだけ、とは言うけれど、そして僕自身もよ

く引用するけれど、結局のところ、僕は誰かに何度も助けられてこうして命を繋いできたということを、否応なく認識させられた。

織崎ちゃんは刀を構えた。真つ黒な刀身を持つ異様で禍々しい刀——毒刀『鍍』！

「全て、全てが織り込み済み——全て私の予定通りで思惑通り。これで貴方を、確実に殺すことが出来る」

目の前にあったテーブルが横にスライドした。僕と織崎ちゃんを隔てるものは、もう何もない。

「ま……待つて……待つてくれ、織崎ちゃん——」

「主導権は私にありますわ。阿良々木暦。貴方は最早この場において何の権限も持つていない」

「ま、待て！ は、話し合おう！ 話せば分かる——」

「いいえ分かり合えませんわ！ それは貴方も先程理解したことでなくて!？」

「っ!!」

「ふっ、ふふふふ——」

織崎ちゃんは嗤いながら、僕に躍り寄る——そして、僕の首に刃を近付けた。

「冥土の土産に教えて差し上げますわ、阿良々木暦。私の事を、もう一つだけ」

「や、やめろ。冥土の土産なんて言うなよ、それじゃあまるで僕がこのまま殺されるかのようじゃ——」

我ながらあまりにも往生際が悪いと思う。だが、僕はここで死ぬ訳にはいかない——こんな所で、死んでたまるかよ！

「こんな、無様な死に方——!!」

「私こそ、四季崎記紀最後の遺品、四季崎という血統の末裔、全てを織り交ぜ創り上げられた、最後にして最強の変体刀——『究極形変体刀・

”織刀『銘』”』!!」

「っ!!」

究極形変体刀だと——織刀『銘』!？」

それは——何というか、極秘も極秘の情報なんじゃあないのか!？」

そんなものを聞かれても無いのに教えるなんて——勝ち誇ってやがる、織崎記——!!!

「この銘にかけて、私は貴方を殺す!! さらばですわ、阿良々木暦!! 阿鼻地獄で苦しんで苦しんで苦しみ抜いて堕ちろ!! 直に友達を一人残らず送ってやる!!」

織崎ちゃんは、刀を振りかぶった。

「死ね——阿良々木暦!!!」

「っ——」

僕は目を閉じた——それは絶望だったのだろう。もう確実に助からないという、絶望——実際、助かる手段が、算段が、全く浮かばなかったのだ。

畜生。

これでおしまいなのか、僕は——春休みに何度も死んで、ついこの間も殺されたばかりだったのに——こんなにも、死ぬのが怖いなんて。

当たり前だ、死ぬ事に慣れる訳がない。ましてや今回は間違いなく生き返ることなど不可能なのだから。

夢渡を使える忍は動けない。

もう——無理だ。  
と。

諦めたその瞬間である——この部屋を覆い尽くす黄金よりも眩い光とともに、そいつが現れたのは。

扉を開けて、後光を浴びながら現れたのは。

「っ!!?」

僕は織崎ちゃんのそんな声に驚き、一瞬瞼を開けた、が、眩しさに目を細めた。織崎ちゃんは素早く僕から離れ、扉の方を睨んだ。

「——随分と豪華絢爛な場所で乳繰り合ってるわね、暦。外側からは全然分からなかったけれど」

「っ——!!」

僕もまた、目を細めたまま、扉の方を向いた。

「お、お前は——まさか——そんな——」

「しかし曆。この私に何の説明もなく伏線もなく、こうしてラブホテル紛いの場所で浮気するなんていい度胸じゃない。全く呆れるわ。海豚だつてもう少し立派な学習能力を持っているというのに、ちつとも学習しないのね」

そこに立っていたのは、僕がよく知る人物だった。というか、よく知るどころか――。

「――ひ、ひたぎ――」

どころか、僕の彼女だった。

戦場ヶ原ひたぎ。

ひたぎは言い放った。

「本当、馬鹿な彼氏を持つと賢い彼女は苦勞するわね」

そんな毒舌さえ、最早天使の言葉のように聞こえた僕が居た。

第肆話　しるしスパイダー　其ノ參

〔010〕

「戦場ヶ原ひたぎ!?　な、何故ここに貴女が——よりよって、貴女が!?!」

ひたぎの登場により取り乱す織崎ちゃん。既に彼女は僕から離れた場所で構えをとっている。構えというのは、左手を床につけて腰を屈めるといふ、あの蜘蛛男っぽいポーズのことだ。尤も、右手には刀が握られているので全く同じとはいえないが。

僕も織崎ちゃんと同じ気持ちではあった——なんでここにひたぎが居るんだ?

まだ衝撃は抜けないし冷静に思考できるとはとても言えないのだけれど——というかこんな状況に陥っているというのが冷静な判断を欠いた結果なのだけれど——いや本当、何故?

だってここまで、伏線も何も無かったじゃねえか。唐突過ぎるだろ。ご都合主義すぎないか?　この展開。

助けられた当事者がこんなことを考えている始末なのだから、織崎ちゃんはずっと困惑しているのだろう。そりゃあこんな展開、たまつたものじゃあないだろうし。

だがひたぎは、僕たちのそんな困惑を全く意に介さないかの如く、「ふん」

と鼻で笑った。

如くつつーか、本当に意に介してねえ。

「随分と驚いているようね。どうしてこの戦場ヶ原ひたぎ様が、こんな風に後光を背負って救世主的登場を果たしたのか、理解出来るだけの頭がないって顔をしているわ」

救世主とか自分で言うなや。

まあ実際救世主っぽいので、何も言えないが。つつーか言える立場じゃねえよ、僕。

「……説明してくれますの?　何故ここに貴女が居るのか」

「徳の無いであろう貴女に教えて、私に何か得があるというのかしら」  
「……………チツツ……………!!」

今まで僕が聞いた中では最大級の舌打ちをする織崎ちゃん。よりにもよって自分の煽りの代名詞を、更に煽り性能を高められた上で敵にそのままお返しされたとあつては、このプライドの高い女子のこゝと、そりやあ怒る怒る。

というか、ひたぎもこの台詞はそれを計算して言ったわけではないだろう。多分、ただのいつも通りの毒舌の一環だった筈である。何せ彼女は織崎ちゃんと初対面だし、この台詞を知っている筈がないのだから。

そんな苛立つ織崎ちゃんを見て満足したのかひたぎは、

「まあ、どうしてもというのであれば、優しいひたぎ様が教えてあげることゝも吝かではないのだけれど」

と言った。教えちゃうのかよ。

まあしかし、そこは気になるところではあつた。何故ひたぎはここが分かつたんだ？ いやそれよりも、どうして僕が囚われているということが分かつたんだ？

それにそもそも話、ひたぎは織崎ちゃんと初対面どころか、彼女のことを知らなかつた筈。それが何故——？

「簡単な話じゃない。私の暦への、愛よ」

何故そこで愛っ!?

「冗談は苛立つから止めて下さいまし。真面目にお答えなさってくださいるかしら?」

「あらまあ。そこは『何故そこで愛っ!』と突つ込むところでしように。あーあ、興を削がれた失望しました。もう教えたくなくなつたわ」

……………僕のツツコミは模範通りだったのか。一字一句違わなかつたぜ。いや、別に模範になろうとするつもりはなかつたのだけれど。

どっかで聞いたことあるようなツツコミだしな。

「でも、私はとても慈悲深いのもう一度だけチャンスをあげる。暦が土下座すれば、考えてあげないこともないわ」



「ちよつと待て、どうして僕が土下座するんだ!? そこは織崎ちゃんじゃあないのか!」

「確かに暦の土下座は結構な割合で見掛けるから、読者にとつては最早価値は皆無だけれど、個人的に暦の土下座を見たいのよ。彼氏が土下座する姿つて、萌えない?」

「萌えねえよ! 彼氏が土下座するのを見たい女なんて、お前以外に居ねえよ! つーか、居てたまるか!」

「あら、人の趣味を否定するだなんて偉くなったものね暦。偉そうに言っちゃつて。もう気分は菅原道真公かしら?」

「ひたぎ、僕は菅原道真公を名乗れるほど賢くないんだ」

「偉そうの部分は否定しないのね」

「否定するよ!」

全く……彼氏が捕縛されている状況でボケを吹っかけてくるとは、こいつ本当に僕の彼女なのか? と、思ってしまったわもないこともないが——それでも、そういう部分も含めてひたぎは僕の彼女なのだ。

遅いと言うべきか、或いは凶太いと言うべきか——だからこそ、僕はひたぎが好きなだけけれど。

……いや、なんというか、このやりとりでちよつとした安心感を覚えている僕が居るのだ。未だピンチなのは実はほぼ全くと言っていいほど変わっていないのだけれど、それでも、こうしていつもみたいなのやりとりで、少しだけ心が軽くなってしまったのだ。危機感が無いとも言えよう。

まさかひたぎとのやりとりで安心するとは——約一年前、ひたぎを受け止めた時はとても想像出来なかつただろう。長生きはしてみようものだ——なんて、状況どころか吸血鬼的な意味でもそぐわないような事を考えていると、いつの間にか体が自由に動けるようになってたことに気がついた。

「ほら、土下座してくださいまし。阿良々木暦」

僕を見下しながら織崎ちゃんが言った。

……なるほど、納得いかないが納得した。どうやら織崎ちゃんは何が何でも理由を聞きたいらしい——で、また僕に土下座しろと。

はあ……もう土下座ネタ何度目だよ。

なんて呆れつつも、取り敢えず僕は椅子から立ち上がり、二人の女子に注視される中床に膝をついた。普通の、つまりは健全な人間であればこのような状況で土下座するなんて羞恥で死にたくなるのだろうが、生憎僕は健全とは程遠い奴なのであった。

両手を床につける——注視される如きで心が折れるような僕ではない。何せ去年のゴールドデンウィークの殆どを土下座で過ごしたという壮絶な……いやいや、普通普通。大人になったら誰だって幼女に睨まれながら土下座するんだから、普通普通。自説は曲げねえぞ。

頭を床に擦り付けるかの如く接地させた。織崎ちゃんが息を呑む声が聞こえた（ような気がした）。多分今の僕の背中からは後光か何かが見えることだろう。それ程までに美しい土下座を、僕はしている自負があった。

土下座マイスター阿良々木暦、ここにあり。

「ふむ」

パチパチと拍手の音が聞こえた。あのひたぎが拍手したと!? いやまあ織崎ちゃんの可能性もなくはないが——というか自分の彼女を何だと思ってたんだ僕は。

「成る程、確かに惚れ惚れするような土下座ね。流石は暦。職員室で土下座して留年を回避出来たのも頷ける、納得のいくクオリティだわ」

「くっ……」

ここでそれを言うか。数ある僕の武勇伝、というか無勇伝の中でもよりよってそれをチョイスするか。

「けれど」

と、僕が密かに黒歴史を掘り返されたことでダメージを受けていると、ここでひたぎが指をパチンと鳴らして言った。

けれど——逆接の言葉？

というたった五文字の考察をしたかしないかの一瞬、土下座した僕の隣を一迅の疾風が駆け抜けた。

「っ!？」

一迅、駆け抜ける、というワードは少し前につけられた僕のキヤツチコピーを想起するものだが、ここでこのワードが思い浮かんだのは必然だったのだろう——何せその駆け抜けた一迅の疾風は、そのキヤツチコピーを僕につけた奴だったのだから。

僕は思わず頭を上げて背後を見た。そこでは織崎ちゃんが“何者か”によつてうつ伏せに組み伏せられていた。その“何者か”というのが——。

「これ以上動くな！ 場合によつては処女を散らすぞ！」

この、あまりにも状況にそぐわない限りなくアウトに近い台詞を吐くのは、そう、御察しの通り、僕の後輩であるところの神原駿河であった。

つーか、本当にR—18タグ付けなきや駄目になるじゃねえか！

流石にその発言はまずいんじゃないか!?

「か、神原駿河——!?!? ぐっ……!!」

組み伏せられた織崎ちゃんがもがく——が、神原の拘束はまるで引き剥がせない。寧ろ余計締められているようにさえ見える。

今織崎ちゃんの両腕は神原の左手によつて締め上げられている。

神原の左手と言えば、あの悪魔——レイニー・デヴィルの左手である。今は包帯が巻かれているので視覚的には分からないが、その尋常ならざる怪力は正しく怪異そのものと言えた。

「ご苦労、神原。後で色々労ってあげるわ」

「色々……色々だと!? 本当か戦場ヶ原先輩！」

「ええ。だからもう暫くそいつを拘束しておきなさい」

「合点承知！」

「ぐあぁっ……!!」

織崎ちゃんが悲鳴を上げた——更に締め上げがキツくなつたらしい。色々で何を想像したのかは想像したくないので読者に解釈を丸投げするが、ひたぎに絆されて神原の奴、張り切つてやがる。

「か、神原駿河あ——な、何故ここに——ぐあぁっ」

「何故何故って、少しは自分で考えようとは思わないのかしら？ 人に答えを求めるより先に自分で考えなさいよ」

ひたぎが言い放った。その声は抑揚がなく、冷淡そのもの——初期のキャラだ。

「私は貴女のことをまるで知らないし興味も無いのだけれど、貴女は私のことを知っているようだからこの態度を見て概ね理解出来るでしょう——結構怒ってるのよ、私」

「っ……………!!」

ひたぎは扉から離れ、部屋の中へと這入った。そしてつかつかと織崎ちゃんの元へ近づいて行く。

「私の独占欲を舐めないことね、織崎さん。私の彼氏を拘束して寝取ろうなんて、そんなことを私が容認するとも思ったかしら？ そんなことをして、私が勘付かないとも思ったのかしら？」

ひたぎは織崎ちゃんの頭元に立ち塞がった。かと言つて織崎ちゃんに何か危害を加えることもなく、そのまま遙か高いところから織崎ちゃんを見下ろしたただけだった。この怒り様からするに、昔のひたぎなら間違いなく文房具による乱舞が始まっていたところである。

「だとすれば愚かね。私は恋人の為なら何処へだって付いていく女なのよ。例えば火の中水の中草の中森の中……土の中蜘蛛の中貴女のスカートの中まで」

ここからだと言表情は見えないが、多分蜘蛛の中って言った辺りでドヤ顔をしていたと思う。織崎ちゃんの表情を見る限り。

「まあぶっちゃけて種明かししちゃうと、特にこれといって暦の危機を感じた訳ではなく普通に私用で偶然外を歩いていたら、これまた偶然何やら慌てている神原と遭遇し、あらかしらと思つたので引き止めて拷も……優しくお尋ねしたところ、暦が何者かに攫われたと言っじゃない」

何やら物騒な単語を言いかけたような気がしたがそこはスルー。いちいちそんな所まで突っ込んでいたらキリがない。折角話してくれているのにその話の腰を折るのは余りにも意味が無さすぎる行為だ。心の中だけで突っ込んでおこう。

ツツコミ担当としてはあるまじき姿勢だと思われるかもしれないけれど、しかしこういう風にちゃんと空気を読んでツツコミを行うの

がプロフェッショナルというものである。昔のように節操のない僕とは違うのだ。

「そんなこと聞かされちゃったものだから、『おっとこれは呑気にして場合じゃないわ！ 今すぐ暦の惨状を見に行かないと人生の半分以上を損しているようなものじゃない！』と思ったので用事を放棄して全力を尽くして暦を搜索したという訳よ」

「お前僕を本当なんだと思ってるんだよ!？」

思わず突っ込んでしまった。突っ込まずにいられなかった。

僕もまだまだだなあ。

「決まってるじゃない。彼氏ビエロよ」

「ルビがおかしいぞひたぎ！ 本意を隠しきれてねえぞー！」

「—おっとこれは失態。流石は行間を読むことに關しては他の追隨を許さないテレパシストこと阿良々木暦。惚れ惚れするわ《やれやれこの男ってば、少しルビがおかしかったくらいでやいのやいのと。どうしようもないほど自惚れてるわね》」

「本意どころか本音がだだ漏れだぞひたぎ！」

しかも文字数の限界を超えている所為で最早ルビとしてさえ機能していない。

「五月蠅あらかいわね本当ピーチクパーチクごめんとなさいねいね」

「入れ替わってる入れ替わってる！ もう隠す気さえないな!？」

とまあ、メツタメタなボケとツツコミは兎も角。これこそ空気に合っていない。空気どころか次元に合っていない与太は兎も角。

「まあ、どうして僕の状態を知れたのかは分かったけれど、じゃあどうやってこの場所を見つけたんだ？」

幾らこの町が田舎とは言え、建物はそこら中にある。少なくとも100軒以上はあるだろう。その中からこの一つを引き当てるというのは相当な確率だ。宝くじの一等を当てる確率には及ばないであろうが、それでも気が遠くなるような低確率であることには間違いないだろう。

僕が捕らえられた場所が、外観的には古びた屋敷であるとは言え、だ——いや、寧ろそんな外観だからこそ、都市部より古びた民家が多

めなこの町においては結構なカモフラージュになりかねないのかもしれない。

「だからそれをこれから話そうとしていたところで、暦が余計な茶々を入れて茶化しに来たのじゃない」

「……………」

僕の所為らしかった。

後付けめいているが、確かに邪魔をした感は否めない。行間は読めても空気は読めない阿良々木君なのであった。

……昔はこのフレーズ、ひたぎのものだった筈なのになあ。

「簡単な話。神原の行動におかしなところがあつたから、そこを重点的に探索してみたら如何にも怪しそうなお屋敷があつたので、何かしらと思つて扉を開けてみたらまあビンゴ。暦が殺されようとしている、なんて、ヒーローショーで言えば怪人が戦隊ヒーローの必殺技を受けて今にも爆発四散するという、観客の熱狂が最高潮となるシーンだつたという訳」

「……………」

どうやら相当僕のことを心配してくれていたらしい。ここまで僕を貶めてくるということは、ひたぎのテンションは恐らく今マックスなのだろう。

怪人扱いされているにも関わらず、その発言者が僕のことを心配してくれているなんて真逆とも言える解釈が出来るのは、世界広しといえど、まあ僕だけだろう。彼氏だからこそ出来る芸当である。

いや別に、怪人扱いされて嬉しい訳ではないが。概ね事実っぽくはあるけれど……吸血鬼もどきだし。

それはそれとして……神原の行動？

「神原が露骨に探索を避けていた一帯があつたのよ。そこから中跳び回っていたのにも関わらず、何故かそこだけ見落とされてた箇所が」

「不甲斐ない限りだ……この神原駿河、一生の不覚と言えるだろう」

「ああ、なるほど……」

織崎ちゃんが言うには、今回この屋敷には怪異避けが仕掛けられて

いたらしい。故に、レイニー・デヴィルという怪異を宿した神原はこの屋敷を見つけられなかったのだ。

「範囲さえ絞られれば、後は運だったわ。幸い、私の日頃の行いがとてもよろしい所為か、一発でこの屋敷を見つけられた訳なのだけれど」……外観で分かったんじゃないのかよ。

日頃の行いが良いとかいう露骨なボケはスルーするとして——そういう事情があつたのなら、確かにこの場所を見つけることが出来たのも頷ける。

怪異に見つけられない、それは逆に言えば、怪異を宿さない純正な人間であれば見つけられるという事だ。重し蟹が取り祓われることによつて怪異を宿さない、普通の人間であるひたぎだからこそ、ここを発見する事が出来たのだ。

まあそういう理屈もあるが、しかし丁度神原と遭遇したというのは、中々神がかり的な展開ではある——それこそ、運の問題だ。

どうやら恋人運が相当強いらしい。日頃の行いは兎も角として。

「はい、以上。戦場ヶ原ひたぎの独白タイムでした。理解出来たかしら？ えっと、織崎さん」

「……………ぐ、ぎぎぎぎぎ……………」

歯軋りする織崎ちゃん。相当悔しいだろう——何せ入念に施した対策が余りにも完璧すぎたが為に、ひたぎによる早期の発見を許してしまったのだから。

ひたぎはそんな織崎ちゃんを見下している。よく見るチープな悪役のように、それを見て満足げな笑みを浮かべたりはせず、ただただ氷のような無表情。いや、霧氷情と言うべきか。昔なら霧氷常だったところだが。

「そんな訳だから、このまま貴女を殺人未遂及び銃刀法違反の罪で警察に突き出してもいいのだけれど——どうする？ 神原」

「どうするもこうするもないな。敬愛すべき阿良々木先輩を殺そうとしたとは全く許しがたい。このまま腕をへし折ってやりたい気分だ。全く、どこの誰がそんな事思いつくものか！」

「お前だよ」

「そうね。暦を傷付けようとしただなんて、全く呆れるわ。どこの誰がそんな乱暴な事考えつくのかしら。ああ怖い」

「お前だよー！」

かなり初期の方で僕を殺そうとしたり傷付けたりした奴に、こうして今助けられているというのは不思議な感覚ではあるが。

……よく考えたら阿良々木ハールム（ ）って、そういう連中ばかりで構成されてるな。

「昨日の敵は今日の友という奴ね。この場合、昨日の敵は今日の友、明日は愛人で明後日は恋人、かしら？」

「明日が最悪だなおい！」

挟まっちゃいけないものが挟まってるよ！ にしても早過ぎるけども！

「しかしその理屈だと、阿良々木先輩はどれだけの恋人、或いは愛人を作っているのだろうか……」

「やめろ！ その理屈を前提として話を進めるな！」

というか、そもそも阿良々木ハールム（ ）はもう既に崩壊した筈だ。少なくとも千石、羽川はもう脱退している。神原は微妙なところだが……いや、何を存在しない組織について無駄な考察を繰り広げているのだ。

「つたく、シリアスな雰囲気がもうこれっぽっちも残ってねえよ……どうするんだこれ。グダグダもいいところじゃねえか」

唯一残っていると言えるシリアス要素と言えば、僕たちを睨み続けている織崎ちゃんくらいである。いや、それさえもシリアスな笑いと化しつつある。

「おかしいな……忍が睨んでいた時期は普通にシリアスな雰囲気を醸し出していた筈なのに、どうしてこうも違うんだ？」

「状況の違いじゃないかしら？ ほら、忍さんの場合は自主的だったけれど、今の場合、強制的にそれしか出来ないようにされているからじゃない？」

「強制的なのは、忍も似たようなもんだったが……ポーズが駄目なのかな？」



土下座みたいな格好で睨んでいても、威厳も何もないからな。三角座りも似たようなものではあるが、忍の場合、素で発するプレッシャーがあったから。

「……まあ確かに、ちよつとシリアスが薄れているのは事実ね」

と言うとひたぎは手をパンと叩いた。仕切り直し。空気を戻す。

「さて神原。まだそのままにしておいて。取り敢えず警察を呼ぶことにしましょう——どうせそれ位しか私たちに出来ることはないのだし」

「了解だ！」

ひたぎはポケットから携帯電話を取り出した。

警察に突き出す、か——酷く現実的な決着に拍子抜けしたけれど、しかし確かに僕たちにはそれ位しか出来ないのであった。

幾ら向こうから仕掛けてきたとは言え、実質的には僕は何の傷も負わされていないのだ。ならばこの状況で、仮に織崎ちゃんの腕でも折ろうものなら、逆にこちらが悪者にされかねない。過剰防衛と見なされないとは限らない。

この件は怪異絡みでもあるので、何らかの専門家に身柄を引き渡すという案もあるが、今この町に専門家は居ない。一応斧乃木ちゃんが居るけれど、彼女との連絡手段を実は今僕は持ってないし、かと言って臥煙さんに頼るといいうのも、出来れば避けたいところ。

ならば現実的な方法で解決するしかあるまい。怪異という非現実的なものが絡んでいながら、結局最後に頼るのは現実的なものであるということに、思うところはあられるけれど。

「あら」

と、僕が取り留めのないことを考えていたらひたぎが呟いた。

「……、圏外じゃない」

「011」

圏外。それはつまり、携帯電話を用いた外部への連絡が不可能なことを意味する言葉。

「圏外——」

いくらここが田舎町とは言え、山中ではないのだから圏外となることはあり得ない。あり得ないのに今そういう現象が発生している。

怪異。

怪しくて、異なる。

普通なら意味不明すぎて動転するところだが、しかし妙に納得してしまった——あれだけ綿密な計画を立てた織崎ちゃんが、携帯電話なんていう如何にもな抜け道を許す訳がない。

一般人が来たところで、殆ど意味のない状況を作ることが出来る——

「ふっ」

「っ!!」

僕たちは一斉に織崎ちゃんの方を向いた。織崎ちゃんの姿勢や表情は変わらないが——しかし、口だけが笑っている。

「ふっ、ふ、ふふふ、ふはははは——残念でしたわね。戦場ヶ原ひたぎ」

「!!」

「ぐっ……」

織崎ちゃんが再び呻いた。何かを感じ取ったのか、神原が締め付けを強くしたのでろう。

「……ふふ——もう貴女はここから無事に帰ることは出来ませんわ……自分から態々殺されに来るだなんて、まさに飛んで火に入る夏の虫——蜘蛛の糸に引っかかる愚かな羽虫のよう——」

「それ以上喋るな！ 余計に痛くするぞ！ 場合によっては」

「腕を折る？」

「っ！」

「ふふっ」

「ここに来て饒舌になる織崎ちゃん——なんだ？ 何を考えたんだ？

明らかにさつきまでとは違う。その喋りには余裕を孕んでいる。この状況を脱する方法でも、まさか思い付いたのか——。

「否定する——私は貴女がたの余裕を完膚なきまでに否定しますわ。

神原駿河、阿良々木暦——戰場ヶ原ひたぎ」

「……何が言いたいのかしら。申し訳ないけれど、私はアウストラロピテクスの言語は解さないの」

この不気味な状況で猿人呼ばわり出来るとは、流石はひたぎ。肝が据わってやがる。

織崎ちゃんはそんな毒舌を意に介さないかの如く嗤う。

「余裕綽々ですわねえ……でもそれも、ここまでですわ」

織崎ちゃんの腕がピクリと動いた。

「っ!! 神原! 織崎ちゃんから離れ——」

「ボーナスタイムは、もうおしまいですわ!!」

僕の叫びを塗り潰すが如く織崎ちゃんは叫んだ。と同時に、織崎ちゃんの手から——正確に言えばその十本の指先から、白い糸のようなものが飛び出した。

「ぐっ!?!」

堪らず神原は織崎ちゃんの腕を離し、すぐさま離脱した——すると織崎ちゃんは即座に四つん這いになり、その姿勢のまま跳躍、天井に逆さまになって張り付いた。

「神原!」

「私は大丈夫だ! それより、そいつが——!」

「このまま貴女がた全員、逝なす!!」

織崎ちゃんは再び指から糸を噴射。それにより床に転がっていた毒刀『鍍』を掠め取った。毒刀が織崎ちゃんの手にも再び渡る。

まずい——ここには織崎ちゃんの糸が張り巡らされている。言うなれば、織崎ちゃんのメインフィールド。織崎ちゃんが解放されたとなればここに長居するのは、それこそ本当に死を待つようなものだ——

「ひたぎ! 神原! 今すぐここから——」

「否定しますわ!! その逃亡を否定する!! 否と定めて否定します、わ!!」

「なっ!?!」

織崎ちゃんはまたも僕を遮るかのように叫び——毒刀を斜め下の

床に向かって投げ飛ばした。

切っ先を先にして、隼めいた速度で進む刀——その先に居るのは、ひたぎ。

嘘だろうか？

僕はすぐに駆け寄ろうとした——だが、全盛期の頃ならいざ知らず、僕の行動スピードなんて神原の二分の一にも満たない。

神原も走り出そうとする——が、間に合わない。いくら怪異を宿しているとはいえ、それは目ではなく左手だ。吸血鬼の視力でぎりぎり視認できる程のスピードの刀を見てから走り出すには、余りにも致命的なラグがある。

ひたぎが回避するのを期待できるか？ いや、無理だ。何度も言うように、ひたぎはただの人間である。怪異を宿した僕たちが対処出来ないものを、どうやって避けるというのだ。

マジかよ。

てめえ——織崎記——!!

「ひたぎ——!!」

果たしてこの声さえ、刀のスピードに勝ったかどうかは甚だ疑問であった。

僕は走ろうとした——が、結局、間に合わなかった。ひたぎを突き飛ばすことも、或いは肩代わりすることも出来なかった。勢いを殺すことさえも。

刀は運動の第一法則に従い、ひたすらに風を切り——そして、ひたぎを斬った。

「っ——!!!」

「ぐっ……」

天井から放たれた刀は床に突き刺さり、停止した。その刃には、薄っすらと血が。

だが、不幸中の幸いと言うべきか——天井から、しかも逆さまの状態の攻撃だった故か、狙いは大きく逸れ、ひたぎの左腕を掠めただけで済んだ。

串刺しにされるといふ最悪な事態は免れた形になる訳だが——し

かしそんなことが気休めになる筈もなく。

掠めたとは言え、刀はしつかりとひたぎの肉を斬った——傷跡からは、ただそれだけとは思えない程の血が、噴水のように溢れ出て、床と僕を濡らした。

ひたぎはよろめき——膝について、俯せに倒れ込んだ。血をどくどくと流しながら。

「012」

「ひ、ひたぎいいっ!!」

「せ、戦場ヶ原先輩っ!!」

遅まきながら、漸くひたぎに駆け寄った僕たちはひたぎの名を呼んだ。だが、ひたぎはそれに答えない。

思わず最悪の事態を想定してしまった——慌ててひたぎの脈を確認する。

……脈はある。生きてはいる——だが気絶しているようだ。

「くっ、血が——血が止まらない——戦場ヶ原先輩!! 戦場ヶ原先輩!!」

神原がひたぎの傷口を押さえた。血は一向に止まる気配を見せず、溢れ続けている。

ひたぎの顔色がどんどん悪くなる——言ってしまうばただ掠っただけで、こんなにも血が噴き出るものなのか!? 或いは、毒刀『鍍』の特性——!?

「あ、阿良々木先輩!! 血が!! ど、どうすれば——」

「と、取り敢えず腕を縛れ!!」

「そんなこと分かっている!! だから、紐みたいなものを探してくれ!!」

「神原!! お前のその左手に巻かれた包帯は何のためにあるんだ!!」

「あっ!?!」

慌てて神原は包帯を解く——普段の神原ならすぐにも思いついただろうが、どうやら相当動転しているらしい。包帯が解けきると、

その下からは猿のように毛深い悪魔の左手が頭となった。

たどたどしくひたぎの腕に包帯を巻いていく神原——神原が巻いていた包帯は長く、ひたぎの患部を何重にも巻くことになったが、巻いたそばから包帯が真っ赤に染まり、全て巻き終わっても血は滲み出てきていた。強く縛っても、少し勢いが衰えるだけだった——いや、衰えただけマシと言うべきか。

「ちっ」

「……………!!」

僕と神原は天井を見た——毒刀は再び糸によつて巻き上げられ、織崎ちゃんの手元にある。

「惜しいですわね……………もう少し横に逸れていれば、戦場ヶ原ひたぎの腕を貫けましたのに」

「お前……………」

「あら、怖い。そんな怖いお顔で睨まないでくださいまし、御二方。私怖くて震え上がってしまいますわ。ふふふ」

織崎ちゃんは戯けたように嗤う。

落ち着け。キレるな。

冷静さを失うな——それが織崎ちゃんの狙いの筈。ここでキレようものなら、織崎ちゃんのと二発目をモロに喰らう。場合によっては、ひたぎに更に追撃を加えてくる可能性さえ——!!

「……………阿良々木先輩」

「……………なんだ、神原」

さつきまでの慌て具合から一変、冷たく、冷淡に神原が言った。織崎ちゃんの煽りで、逆に冷静にさせられたのか。

「もう——あれに、何をしてもいいか」

「……………」

いや、冷静でもない。

寧ろ、行き着くところまで行き着いた末が今のテンションか——ここで僕がゴーサインを出してしまえば、間違いなく神原は暴走するだろう。神原が暴走すれば、何をするか分からない。

神原の左手に宿る悪魔——今は大人しいが、激情に呼応して何らか

のアクションを起こしてしまいかもしれない。そこまですれば本当にどうしようもなくなる。それこそ、臥煙さんに頼るしなくなってしまう。今の腕は包帯という名の封印が解かれているのだ——どうなるか想像もつかない。

僕は織崎ちゃんを見た。ニヤニヤと嘲るような嗤いを浮かべている。

……………。

「どうしますの？ どうしますの？ ふふふ」

「……織崎記」

神原はあくまでも静かに言う。

「そうやって笑ってられるのも今の内だ——お前は、超えてはならない一線を超えた」

神原は左手を握りしめた——露出した、猿めいた悪魔の左手を。

「私は、お前を絶対に許さない。例えどんな理由があろうとも」

「……意気がりますわね。神原駿河。私と貴女が戦って——それで？」

まさか、私に勝つ事を前提としていますの？」

「そうだ」

「はっ！ これはお笑いですわねえ。そんじよそこらの喜劇なんか比にもならない程笑えますわ」

とは言うが、織崎ちゃんの目は笑っていない。僕たちを憎々しげに睨み付けたままだ。

つまり、僕たちと同じ目ということである。

「阿良々木先輩——どうなんだ」

神原が再び僕に尋ねた。

僕は言った。

「……僕に理由を求めるな、神原。僕はお前の手綱を握っている訳でもないし、保護者でもない。それはお前が考えるべきことだ」

「……………」

「でも、今回だけは言ってる」

僕は横目で倒れたひたぎを見た。

「——やるぞ、神原」

「——承知した」

言うや否や、神原は跳躍した。

当然、幾ら神原と雖も、たった一回の跳躍で天井に到達できる程の跳躍力を持っていない。脚力と跳躍力は別物であり、しかも助走なしの跳躍である。

神原が天井に到達し、織崎ちゃんに攻撃する為にはもう一段階ジャンプしなければならなかった。二段ジャンプである。

しかし神原も人の子、空気を踏むことなど絶対に不可能だ。二段ジャンプが特技とか言っていたような気がするが、実際に出来る筈がないのである。ならばどうするかと言えば、簡単な話。僕を踏み台にすればいい。

神原がジャンプすると共に僕もジャンプした。吸血鬼ブースト無しの跳躍力では神原の方が上な為、自然、神原が僕の上方に落ちてくる。そこで、土台となった僕を踏むのだ。

僕もジャンプした理由は、少しでも神原の高度を上げる為。地上で土台に徹するより空中で台となった方が、神原が僕を踏む高さは高くなるため、普通より更に高い跳躍が期待出来るわけだ。

僕を踏んだ神原は期待通り、天井にまで到達する程の跳躍を見せた。織崎ちゃんに向けて、左手を伸ばす。十分に織崎ちゃんに届く距離だ。

「……はあ」

神原の左手が、織崎ちゃんを捉えた——。

「……もう、手加減しませんわよ?」

——が、織崎ちゃんはその手を逆に掴み。

「虚刀流・桔梗」

神原と共に落下しながら、その腕を捻り上げた。

「つ——!! ぐあつ——!!」

「神原!？」

「虚刀流・矢車草」

そしてそのまま床と激突する直前に空中で車輪染みて一回転、神原を床に叩きつけた。織崎ちゃん自身は神原を踏み付け更に追撃を加



えると共に踏み台代わりにして跳躍、そのまま体操選手めいた4回転を決め、空中に張り巡らされた糸の一本に着糸した。

とか、いや、そんな冷静に解説してる場合じゃねえんだが！ か、神原!!

「神原!?.. だ、大丈夫か！ 生きてるか!」

「くっ……なんとか、生きてるぞ……阿良々木先輩」

呻きながら神原が起き上がる。あれだけの攻撃を食らって立ち上がろうとするとは、こいつのガッツには本当に驚かされる。

だが、神原に任せてばかりはいられない。驚いてばかりいる訳にはいけないのである。

「虚刀流……って、どういうことだ。織崎ちゃん——君は一体、なんなんだ?」

僕は僕として時間稼ぎに興じる——多分この場で僕と神原どっちが動けるのかと言えば、間違いなく神原だ。ならば僕は話術サイドとして、神原の体力がある程度回復するまで場を持たせなければならぬ。

虚刀流と言えばかの『刀語』において無刀の剣士・鑢七花が使用した武術の筈。それをどうして織崎ちゃんが?

「だから、言いましたでしょう? 私は全てを織り交ぜ鍛え上げた最強にして最後の刀……究極形変体刀・織刀『銘』——虚刀流を使えない訳が無いでしょうに」

肩を竦めて織崎ちゃんが言った。

……そうなのか?

いや、だからどうして使えない訳が無いのだろうか——虚刀流とその織刀とやらに、一体どんな関係があるんだ? 或いは、四季崎と何らかの関係が——?

「あら?.. 知りませんか? 虚刀『鑢』について」

「虚刀『鑢』?」

「ああ……そういえば、貴女あれを一巻しか読んでいなかったのですわよね?.. なるほど、それならば知れる筈がありませんわよね」

虚刀『鑢』——また新たにワードが出て来た。必死について行こう

と考察する僕。語り部が置いてけぼりになるといいうのは、色々と由々しき事態だ。

「えっと、つまり……その名前から察するに、虚刀流という流派そのものがその、虚刀『鑢』なのだ——みたいなものか？」

「そうそう。鋭いですわね。いえまあ、刀の名前まで知らされれば、誰にだって辿り着ける答えではありますけれど」

正解だったらしい。

取り敢えず置いてけぼりにされずには済んだ訳だが——しかし、要は織崎ちゃんはその虚刀流を使うことが出来るということだ。その事実だけが、今の僕たちに必要な情報である。虚刀流のルーツとかそういうのは、後で調べればいい。話題を振っておいて何ではあるけれど……。

「そりゃあ体格の問題とかはありますし、原典よりは劣化していることは否めませんわ。しかし、それでも貴女がたを八つ裂き出来る程度の心得はありましてよ」

と言い、織崎ちゃんは挑発的に指をポキポキと鳴らす。

「……その割には、私を一撃で殺しきれてないぞ？ 手加減しないと  
か言っておいて、はっ、そんな程度か？」

神原が起き上がり、こちらも挑発的なことを言った。それを見て聞いて織崎ちゃんは鼻を鳴らす。

「減らず口を叩きますわね。ご自分の立場、お分かり？ 地の利はこちらにあるし、身体能力的にも私の方が上——私が本気で殺そうとすれば、貴女がたなんて瞬さ」

「ならどうしてそれをしないんだ？ 実際に行動に示さないと、単なるハツタリにしか思えないんだがな」

「死にたいと？」

「お前に出来るものなら、な」  
「……………」

織崎ちゃんと舌戦を繰り広げる神原。もうなんだか僕はいらぬような気がしてきたが、いらぬどころか足手纏いのような気がするが、それは兎も角。

織崎ちゃんは押し黙り、僕たちを睨んだ。さらに強く。

「……………ちっ」

そして舌打ち。

「本当……………貴女がたは本当……………」

「阿良々木先輩！ もう一回だ——」

「豪那あ!!」

神原が僕とのコンビネーションアタックを再び仕掛けようと促すと同時に、織崎ちゃんは叫んだ。

豪那——それはこの屋敷の名前であり、或いはこの怪異の名である。

その叫びによつてこの怪異が反応したのか——一拍置いた後、屋敷全体がぐらぐらと揺れ始めた。床が、壁が、天井がみしみしと音を立てる。床に散らばっていた金色の山々は崩れ、あちらこちらへ忙しく転がり、滑りだした。

「な、なんだこれは!? 阿良々木先輩！ 何がどうなっている!」

「知るかよ！ いや概ね予想は付いているが、どう説明すればいいのか分からん!」

「逃げた方がいいか!？」

「逃げた方がいい!!」

「よし!!」

どういう意図があつて怪異を起動させたのかはさて置き、中に居て碌な事がないだろうことは流石に分かる。僕と神原はひたぎを回収し、屋敷の外へ出た。

なんて安穩に事が運ぶ訳がなく。

「っ!!」

ひたぎを担ぎ、さあ逃げるぞと意気込み扉の方を向くと、大量の障害物が邪魔しているではないか。大量の障害物とはつまり、崩れた財宝の海のことだ。無駄に多い!

「このぐちゃぐちゃ感、私の部屋を思い出すな!」

「そんな連想は本来あつてはならない連想だ!」

この間整理してやったというのに、どうやらまた散らかり始めたら

しい。いい加減自分でやれよと思いつながらも今はそんな愚痴を言つてられる状況でないことは重々承知なので、ごちゃごちゃ言わず大量の障害物を押し退けて進む。

押し退ける、などと簡単に表現したが、実際はそんな甘いものではない。押し退けられないような巨大物体もあったし、抜き身の刀も障害物に紛れて存在していた。コピーアンドペーストしたように瓜二つの刀が大量に。

なので、結構な迂回を余儀なくされた——さらに蜘蛛の糸が張ってあったりするのでタチが悪い。揺れはどんどん強くなり、津波めいて呑まれそうになったりして、四苦八苦しながら脱出したのであった。その過程で僕たちの体力は矢張り削られ、外に出た頃には満身創痍だった。

「くそ、あの女……整理くらいちゃんとしとけと言いたい……!」

「多分織崎ちゃんもお前にだけは言われたくないだろうよ……」

織崎ちゃんに限らず、全人類が。

僕たちは振り返ってガタガタと震える屋敷を見た。周囲の地面は盛り上がり、所々亀裂が走っている。屋敷だけでなく、僕たちの足元にまで振動が伝わってきた。

僕たちが脱出を成し遂げてから僅か数秒後、屋敷の屋根から何かが飛び出し、空中に降り立った。織崎ちゃんだ。

「お前は、どういうつもりなのだ!! 何が目的なのだ!!? 私たちをどうしたいんだ!!」

地鳴りに打ち消されまいと大声で叫ぶ神原。それに対して織崎ちゃんも何か言ったようだが、地鳴りに打ち消されて何も聞こえなかった。

「くっ……あいつ、声が小さすぎるぞ!」

「お前がでかすぎるだけだ神原!」

「阿良々木先輩は背が小さいな!」

「別に今はボケを入れるような場面じゃねえよ! つーか背丈については言及すんな!」

「髪は馬鹿みたいに長いにな!」

「ひたぎが喋れないからって毒舌成分を補わなくていい！　そしてそれについても言及すんな！」

アニメ版花物語では視聴者の皆様から相当な罵詈雑言を浴びせられたこの髪型だが、僕は好きでこんな髪型にしている訳ではない。誰が好き好んでこんな心象最悪な髪にするものか。いやだからそれは置いておいて。

「っ！　阿良々木先輩！　や、屋敷の下から何か出てくるぞ!?　こんな馬鹿みたいな会話をしている場合ではないではないか！」

「そうだよ！　今シリアスパートなんだよ!!」

余りにも緊張感がない会話ではあるが、お互いに興奮しすぎてテンションがおかしいことになっているのだ。どうか許してほしい。

そして、そう。神原の言う通り、屋敷の下から亀裂を広げて何かの顔を覗かせ始めた。それは段々と姿を現していく——突き出た目、蟹のようなハサミに足——甲殻類めいた容貌の怪異がその姿を現した。

甲殻類の怪異・豪那——！

「な、何だこいつは!?　こ、こんなの!?　こんな怪獣みたいなのが、か、怪異!?!」

明らかに動揺した風な神原。無理もない。これ程巨大な怪異など今まで遭遇したことがないのだから。怪異どころか、そもそも普通の生物でさえ、こんな大きさのやつは中々居ない。

「……え!?　ま、まさか！　阿良々木先輩！　わ、わ、私はこいつと戦わなければならぬのか!?　嫌だ!!　死んでも嫌だ!!　というか死ぬから嫌だ!!」

「僕だって嫌だ!!　だから逃げるんだよ神原!!　絶対勝てねえから!!　これ絶対勝てねえから!!」

「分かった!!　じゃあ戦場ヶ原先輩を私に渡せ!!　さっさとこんな場所からはおさらばだ!!」

「待て神原!!　その言葉から察するに、お前はこの阿良々木先輩を置いていくつもりなのか!?!」

「どうせ殆ど不死身なのだから、せめて囮として一生を終えてくれ!!」  
「矛盾してる!!　不死身なのに一生を終えるとか矛盾してる!!　僕が

死ぬこと前提じゃねえか!! つーか、先輩をナチュラルに囮にすんじやねえ、神原後輩!!」

「大丈夫だ!! 戦場ヶ原先輩は、ちゃんと私が面倒を見るから!! 彼氏の代わりとしてな!!」

「お前大勝利じゃねえか畜生!!!」

なんて事を言い合いながら逃げる僕たち。まさかこの行動についてとやかく言う輩は居まい。逃げるというのも立派な戦略だ。どう考えても百パーセント負ける相手に戦いを挑むのは、そんなもん愚か者を通り越してただの無謀な馬鹿のすることである。僕たち二人ともその無謀な馬鹿にカテゴライズされることが多い身ではあるが、流石に無理。これは無理。絶対無理。理屈抜きで無理。

轟音を背後に聞きながら逃げる馬鹿二人組。多分このシーンをアニメ化すると、これ本当に〈物語〉シリーズか? となること請け合いだらう。というかそもそも本編じゃなくて二次創さまあいい。

脇目も振らず走る僕たち。土煙がそんな僕たちを嘲笑うかのよう。に我先と追い越していく。どれくらい距離を取れた? 振り向きたいが、振り向くと非情な現実を突きつけられそうなので、振り向きたくても振り向けない。

しかひこのままどこまでも逃げ続ける訳にもいかない訳で、必ずどこかで立ち止まらなくてはならない。そして何らかの方法であの圧倒的な重量の暴力に立ち向かわなければならぬのだろう。なのでその対策を考えなければ、という方向に思考がシフトし始めたところで、目の前に”何か”が舞い降りた。

「ぐあっ……!!」

「!? どうした、阿良々木先輩!!」

「いや、何でもない……くっ!!」

どう見ても何でもありに見えるだろうが、まあ、何でもある。誤魔化しにもなっていない。

この光景にはデジャヴを感じた——土煙の中舞い降りる着物の女。こいつとの初遭遇も、確かこんな感じだった。

「んっふっふっふっふ」

そして、こんな気持ちの悪い笑い声を出すのだ——そう、僕たちの行く手を阻むように降り立ち塞がったのは、織崎記の従者・淡海静。怪異を作る怪異である。

けれど、ここで立ち止まるのはこいつの思う壺である。神原もそれに気付いたのか、

「阿良々木先輩！ あれは、殴っていい相手か!？」

「ああ、殴っていいやつだ!」

「心得た!!」

と、左手を構えた。それを見た淡海静はにたりと笑う。

と同時に、再び何かが僕たちと淡海を遮るようにして降ってきた。今度は舞い降りるとか降り立つとかではなく、落ちるようにして降ってきた。そして、ゆらりと立ち上がる。

「っ!!」

「あ、あれは——!?!」

驚愕の声を上げる神原。そりゃあそうだ——何せ神原と同じく拳を構えたその人型存在は、雨合羽を着た猿だったのだから。

泣き虫の悪魔——レイニー・デヴィルの完全版である!

「ぐうう——おらあああああつ!!」

一瞬怯みながらも、そんな己を鼓舞するようなシャウトを発して神原は悪魔に殴りかかる。悪魔は右手で殴り、拳と拳がぶつかった。

悪魔と左手と悪魔の右手——互いに利き手であり(完全版の方に利き手という概念があるのかは不明だが)、その破壊力自体にはそこまでの差はないだろう。だが、一部が悪魔なのか、或いは全身が悪魔なのかで、その均衡は大きく左右される。

「つつあああつ!!」

この場合、神原は左手だけが強靱な悪魔で、その他の部分は華奢な——とは言い難いが——女子高生の肉体である。反して完全版はその名の通り全身が強靱な悪魔で出来ている。このアドバンテージは凄まじいのだろう、神原の体はぶつかった拳ごと後方に跳ね返された。

「神原っ!!」

流石に立ち止まらざるをえない。僕は踵を返して神原の元へ駆け寄ろうとするも――。

「く、来るな！ 阿良々木先輩!!」

「っ!!」

そう、こいつはこういう奴なのだ。己を顧みないような戦い方をし、その自己犠牲をよしとするような奴なのだ。蛇の時も、或いは鎧武者の時も、その性格はフルに発揮された。

「私に構うな!! そのまま走って逃げろ!!」

「だが神原――」

「私と戦場ヶ原先輩の命、どっちが大事なのだ!! それくらいの優先事項を間違えるな!!」

「っ!!」

まるで自分の命が軽いような言い方をしてくれる。僕にとっては両方が重いというのに――僕みたいなことを、不死身でもないのに言ってくれる。

ひたぎは未だ気絶している。

どちらかを選択する――どちらも選択するのが今風のヒーローなのだろうが、生憎僕はそんなに強くないのである。

ならば、選択の余地はない。

「――悪い、神原!!」

神原を信じて――そうするしか――!!

「やるじゃないか。ちよつとは判断力がついたね、鬼いちちゃん」

「え!?!」

「あらっ?」

――と、僕がらしくもなく、恐らく正しいのであろう選択をしかけるギリギリの所で、淡海の背後にあたる場所からそんな機械音声のような平坦な声が出た。

「頭下げて」

「っ!!」

端的な命令に迷わず従う僕。ひたぎを庇うようにしてしやがんだ。

アンリミテッド・ルールブック  
「例外の方が多い規則」



と同時に頭上を、思わず仰け反りそうな風圧が通り過ぎた。土煙が一気に晴れる。

僕は恐る恐る顔を上げた——目の前にあったのは悪魔の残骸と着物の切れ端、そして。

「やあ、鬼いちゃん。待ちくたびれたかい？ 僕だよーん」

なんて戯けて人差し指を突き出したポーズをとっているのは何を隠そう、死体人形・斧乃木余接なのであった。

「斧乃木ちゃん——な、なんでここに」

「説明は全て後回しだ。僕としてもじつとしちやいられないからね」「え？」

「さっさと掴まれって事だよ、鬼いちゃん」

「あ、はい」

言われるがままに僕は斧乃木ちゃんの腰に抱きついた。さつきから言われるがままではあるが、しかし童女の言いなりになるというのは誰しも大人になれば云々。

ひたぎをお姫様だっこした斧乃木ちゃんはぼくを引き摺って神原の元へ——こいつ、順序間違えやがったな。

「君は、一体——」

「説明してる暇はないよ、神原駿河。鬼いちゃんみたいに掴まるか、或いはそのまま死ぬか、好きな方を選んで」

「童女に掴まれたと!? 掴んでいいのか!？」

「どうでもいい変態発言は聞き流してやるからさっさとしろ」

「了解だつ!!」

神原は勢いよく斧乃木ちゃんの腰に抱きついた。喜びすぎだろお前。気持ちは分からなくもないが——。

「しっかりと掴まって。途中で振り落とされても、僕は知らん振りしてるから」

と脅すようなことを言ってから、

アンリミテッド・ルールブック  
「例外の方が多い規則、離脱版」

斧乃木ちゃんは跳躍した。僕や神原なんか及びも付かないような高度へと、猛スピードで。

第肆話 しるしスパイダー 其ノ肆

〔013〕

突如駆けつけて来てくれた斧乃木ちゃんのアンリミテッド・ルールブック例外の方が多い規則によってサルベージされた僕たちは学習塾跡へと到着した。大気の暴力を一身に浴びせられつつも、何とか死地からの逃亡に成功したのである。

しかしその移動には代償がある。この例外の方が多い規則アンリミテッド・ルールブック離脱版は、爆発的に上昇することでその場からの離脱を可能とする必殺技なのだが、先程大気の暴力と表現したようにその衝撃は馬鹿にならない。

どれくらい馬鹿にならないかと言うと、生身の人間がブラックアウトしてしまうくらい——或いは、吸血鬼もどきである僕でさえも失神しそうになりかねない程、と言えばその脅威は分かりやすいか。

つまり、それが代償である。結論を言えば、神原は例に漏れず気絶した。何度も言うように神原は左手以外は全く普通の生身な人間であり、いくらそのメンタル面には特筆すべきものがあるとは言え、気力では生理現象をどうすることも出来ないのであった。況してや神原はこの移動を経験したことはなく、完全に不意打ちだったというのもそれに拍車を掛けていた。

「ふう。危ないところだったね、鬼いちゃん」

スカートをはたき、両手を広げてくるりと回転して僕の方を向いた（アニメ版で斧乃木ちゃんがよくやるあのムーブだ）斧乃木ちゃんは言った。

「全く、僕が目を離すとすぐにこれだ。何度も繰り返し言うけれど、僕は貴方の保護者じゃあないんだからね。もう少し慎重に行動して欲しいものだ」

「ああ……悪いな」

「そうだね。本当に悪いね。悪いのは鬼いちゃんだね」

「……………」

「鬼畜だね。鬼だね。鬼いちやんだね。もうこれは悪鬼と呼ぶべきじゃあないかな？」

「そこまで言われなくちゃならないのか……？」

僕が助けられた立場ゆえに反論し辛くなっているのをいいことに言いたい放題の斧乃木ちゃんだった。

「まあそんな話は本当にどうでもいいから置いておこうか、悪鬼いちやん」

「置いてない。引き摺りまくってるぞ」

「言い辛いから悪鬼ちゃんでもいい？」

「最早お兄ちゃんという言葉の原型が残っていない！」

「そういう訳で悪鬼ちゃん。今から僕たちがおかれていますであろう状況について、知りたいだろうからさらっと簡潔に一回だけ説明するからく聞いてね。聞き逃しがあっても二度と言わないから」

「え？ お、おう」

余談もそこそこに、斧乃木ちゃんは即座に話題を変更した。というよりは、話題を元に戻したというのが正しいか。

僕は慌てて意識を斧乃木ちゃんの話に傾ける。二度と説明しないというのなら、多分本当に説明は一回しかしないのだろう——それに、何やら急いでいるらしい斧乃木ちゃんを引き止めるのは、それこそ悪い。悪鬼ちゃんである。

「あの織崎記とかいうなんだかよく分からない奴が本格的に動き出した、っていうのは察してるよね？」

「本格的……なのか？ とうか、あの鎧の一件以来からこっち、あいつらは本格的に動き出しているように思えたのだけれど」

「違うよ、馬鹿」

ストレートに罵倒された。

「あれはあくまでも前哨戦に過ぎない。鎧の件も、何やら鬼いちやんがまた首を突っ込んだらしいもう一つの件も、あれは全て特定の対象を狙った規模の小さいものだったのさ」

「特定の対象を狙った……いやでも、織崎ちゃんが今回狙ったのは、実質僕一人だけ。それに、そもそもあいつの目的が特定の人物に対する

攻撃だったんじゃないあ」

「違うよ、馬鹿」

またストレートと同じ文面で罵倒された。

「その特定の対象の中でも、さらに特定の対象だったということだ——鎧の時、あいつが狙ったのは僕と貴方だっただろう？　例えば貴方の妹さんとかを、狙ったりしてたかい？」

「……ああ、そういうことか」

特定の対象というより、特定の集団と呼ぶべきなのかもしれない——今までの攻撃は全て、一箇所に固まっていた数人を狙ったものであった。

「え？　じゃあ、つまり——」

「そのつまりだよ、鬼いちやん。あいつ、とうとう全方位に対して攻撃を仕掛け始めた」

「なっ……!?!」

全方位に対して——固まっているところを叩くのではなく、分散している状態でも攻撃する。

それはつまり——つまり——。

「もう安心は出来ないということだよ、鬼いちやん。油断もしちや駄目だし、隙も与えちゃ駄目だということだ。少なくとも僕が確認した限り、この街に住む対象の殆どが攻撃を仕掛けられている」

「っ………!!」

対象の殆ど——僕、ひたぎ、神原を除いた数名が、僕たちの与り知らぬうちに襲撃を受けていた？

「そ、その殆どって、誰だ」

「まず、八九寺真宵」

「八九寺!?!」

いや、エクスクラメーションマークとクエスチョンマークを使ってしまったけれど、しかしこれは意外ではなかった筈だ。今までの戦いで僕たちが勝利するキーとなったのは、言うまでもなく八九寺である。ならば、問答無用で危険視されてもおかしくはない。

「千石撫子」

「千石!!」

エクスクラメーションマークをさらに増やしてしまったが——そういうえば、千石もあいつの攻撃対象に入っていたが……よりにもよって……!

「千石は、大丈夫なのか!」

「今はね。あの娘が気付かない内に片付けたから、恐らく被害はないだろう」

「そうか……」

色々故あつて、僕は千石と関わる訳にはいかない。だから彼女を助けることが出来ないのだ——この思考がもう烏滸がましくさえあるが。

「人は一人で勝手に助かるだけ、つてかい?」

「まあな——あ、そうだ。忍野は? 確かあいつも狙われてた筈」

「そこまでは分からない。あの人に関してはまずコンタクトが取れないからね」

「そつか……」

まあ。

あいつは普通に大事なさそうな気がするけどな。どうせ今も軽薄な笑いを浮かべている筈だ。聞いおいてなんだけれども。

「じゃあ、貝木……いや、臥煙さんは?」

「なんで今貝木お兄ちゃんの名前を出したのに踏み止まったのさ」

「いや、改めて考えたら、あいつの安否はどうでもいいかなって……」

どうでもいいというか、考えるだけ無駄というか——実質命を救われた訳だからそう邪険には出来ないけれど、だからといって僕のあいつに対する好感度が上がるとか、そういうことはないのだから。

「臥煙さんは……多分、大丈夫と思う」

「え、ちよつと待って。何その煮え切らない口調」

斧乃木ちゃんにしては妙に濁す発言であった。僕は思わず待ったをかけてしまった——いやだって、よりにもよって臥煙さんのところでそんな喋り方する?」

「実は、臥煙さんと連絡がとれないんだよね。圏外とかじゃあなくて

……ラインしても返信が返ってこないんだ。既読にさええない」  
「……………」

ラインだの既読だの聞き慣れない文字列はこの際放っておくとして、しかしニューアンスは伝わってくる。

臥煙さんが返信を返さない？ あのデジタルの具現である臥煙さんが？

「それ……結構大変なことじゃないのか？」

「うん。大変なことだ」

「……………」

余りにもあつさりと片付けてくれたが、僕としては堪ったものではない。もうここまで来たら恥も外聞もかなぐり捨てて臥煙さんに助けを請おうと内心思っていた僕であるが、連絡がつかないとすれば話が変わってくる。

というか、危機感がヤバい。専門家の元締めであるあの人が身動きのとれない状況というのが、どれほど危険なものなのか、という話だ——大変なことどころじゃあ、済まないぞ。

「それはつまり……専門家には、頼れないってことなのかい？ 斧乃木ちゃん」

「そうだよ、鹿馬」

「いや、ここでそういうボケを挟まなくていいから……」

そういうことらしい。厳密に言えば斧乃木ちゃんが居るけれど、この子はあくまでも式神なのだ。言ってみれば、偽の専門家のようなものである。

「絶望した……どう足掻いても負けしか見えない状況に絶望した……」

「悪鬼ちゃんこそ中途半端にボケを挟んでんじゃねーよ。中の人ネタなんて分かる人少ないんだから」

駄目だしを食らう僕。まあ内輪ネタは通じる人と通じない人が居るし、避けた方が無難なのは確かである。

「それに、絶望するのはまだ早いよ。今からとっておきの絶望情報を教えてあげよう」

「は？ これ以上に僕が絶望することがあると思ってるのか？ 僕の絶望は浅いぜ？」

「残念だけど、絶望に底はないんだよ。人は絶望すると、どこまでも堕ちていけるんだ」

斧乃木ちゃんはいつも通りの無表情で、機械的にその絶望情報とやらを述べた。

結果を先に言えば、僕は決して絶望しなかった。ただ、落ちるところまで落ちて、絶望の底に着陸したというだけの話だった。

絶望の底は、名前を変えて、ちゃんと存在していたということを知った。意識しただけの、簡単は話だった。

「貴方の妹さん——偽物の方が、既に一回殺された」

それを聞いた瞬間僕の体を駆け巡ったのは、憤怒という感情であった。

「014」

偽物の方の妹。

つまりそれは、小さい妹の方を意味していた——阿良々木月火。

月火が、殺された——。

「詳しく説明してくれ、斧乃木ちゃん。どういうことだ」

「うん、分かった。説明してあげるからさ、まずは僕の頭から手を離してくれないかな」

「え？ あ……ごめん、つい」

「ついじゃねえよ。万力の如き力で締め付けるな」

僕は斧乃木ちゃんの頭から手を離れた。どうやら無意識に斧乃木ちゃんの頭をがっしりと掴んでいたらしい——掴んだというか、締め付けていたらしい。斧乃木ちゃんは痛そうに頭をさすった。

「幾ら僕が死体だからって、痛みを感じない訳じゃあないんだよ、全く——いや、詳しく説明も何も、その文面通り受け取ってくればそれでいい」

「月火ちゃんは……生きてるのか？」

「生きてるよ。気絶してるけどね」

殺されたのにも関わらず生きてるかどうかを尋ねる質問をするというのは矛盾しているようではあるが、しかし月火は、死んでも蘇る——言わば不死性を所有している。

鳥——しでの鳥。不死身の怪異であり、特殊な方法を使うしか殺す手段はない——それが、阿良々木月火の正体なのである。

「丁度その時、僕も居合わせていたからね。あのフェニックスが殺されたのは自室でだったから」

「どうして——何が、どうやって、月火ちゃんを殺したんだ」

「僕を今追っ掛けている怪異が、その性質を使つて、阿良々木月火を殺したのさ」

「斧乃木ちゃんを追い掛けている……つて、斧乃木ちゃん、もしかして今その怪異から逃げてる最中なの？」

「そうだよ、馬鹿」

「な、なんでそれをもっと早く言わなかったんだよ!？」

悪いことどころではない。斧乃木ちゃんの命に関わる問題ではないか。命というか、存在というか。

つまり斧乃木ちゃんは、その月火を殺した怪異から逃亡していると、同じく逃亡していた僕たちを救出してくれたということになる。

この子は天使か何かなのだろうか？ 斧乃木ちゃんの有能さが止まるところを知らないぞ。

「どんな怪異なんだ？」

「さあね。でも形だけ見れば阿良々木月火と同類だ」

「同類……人型？」

「鳥型だよ。鳥——鳥の怪異だろうね」

「鳥……」

鳥。

鳥類カラス科のグループ。黒い鳥の代表格とされ、不吉の象徴としても知られている。また鳥類の中では最も知能が発達しているとされ、それ故か神話や伝説の登場は多い。



「多分八咫鳥から分化した怪異と僕は睨んでいる。火を吐いてきやがったからね」

「火を吐いて——」

八咫鳥、と言えば、恐らく相当な知名度を誇る怪異伝承だろう。こういった話に疎い僕でさえなんとなくは知っているのだから。

曰く、太陽の化身だとか、導きの神だとか、三本足だとか——この中の一つくらいは、読者諸兄も聞いたことはあるだろう。

「でも、八咫鳥って、火を吐くものなのか？」

「そんな話を僕は聞いたことがない。でも、黒くて炎とくれば、太陽の化身とも呼ばれるこの八咫鳥をベースとした怪異だろうことは十中八九間違いない」

「ふうん……」

斧乃木ちゃんがそういうのならそうなのだろう——過信するなどは言われたが、つつい斧乃木ちゃんの言うことを信じてしまう。それに斧乃木ちゃんが言った言わないに関わらず、僕自身炎に関わる鳥といえば、その八咫鳥か、或いはヒクイドリ辺りしか思い浮かばないし。

「つてことは、三本足か？」

「いや、普通に二本足だよ」

「そうなの？」

「そもそも八咫鳥の初出とされる古事記では八咫鳥が三本足だ、なんて記述はないのさ。三本足になったのは別の怪異伝承と同一視されたことに由来する」

「へえ……普通の鳥とその怪異、見分けがつくのか？」

「僕ら怪異側から見れば一目瞭然だけど、専門家でもない人間側からは見分けがつかないだろうね。外見的には」

斧乃木ちゃんは言った——三本足ならばいざ知らず、二本足となれば普通の鳥と大差ない、のだろう。特徴を聞く限りでは……。

まあ、三本足だからといって見分けがつきやすいかと言われるれば、別段そんなことはないのだけれど——足なんて普通注視しないし、気付かなさそうだ。

「ただ、普通の鳥より少し大きめかな。その程度だよ」

「大ききなんか分かんねえよ——じゃあ、そいつが今ここに向かつてるってことか？」

「違う」

今度は馬鹿とは呼ばれなかった——ボケる時間的余裕が少なくなってきたのかもしれない。

「多分そいつは僕を見失っている筈だ——じゃあ勿論、他の奴を殺す方向にシフトチェンジするに決まってる」

「なっ……!!」

「だから急いでるって言ってるのさ。あんまりもたもたしていると、また貴方の偽妹が死にかねない。いや、彼女だけじゃなく、阿良々木火憐や千石撫子にも火の手がまわりかねない」

「っ——!!」

どうやら、思った以上に事態は深刻らしい。甘く見ていたつもりはなかったが、そんな程度の心算では甘かった。甘く見ていたつもりではなく、甘く見てはならなかったのだ。

月火が何度も死んでいい訳では、決してない。だがしかし、月火と違い、火憐や千石は不死性を持っていない。二人とも、殺されれば普通に死ぬ一般人なのだ。

「一般人と言うには、些か逸脱しているような気はするけれどね。ただ蜂の針が刺さったままの阿良々木火憐は兎も角、千石撫子は一時であれ、神様にまでなった存在なんだから」

斧乃木ちゃんが空をちらりと見て言う——そろそろタイムリミットが近付いてきたのだらう。これ以上斧乃木ちゃんを拘束してしまふのは最悪手だ。

「そうは言っても、確かに鬼いちちゃんの言う通りだ。殺されれば普通に死ぬ——だからこそ、僕は本来こんな所で油を売っている訳にはいかないのさ。今すぐにでも行動を起こさなくちゃならない」

「た、助けてくれるのか？」

「最善は尽くしてみる。でも最悪の状況も覚悟しておいてよね。今の僕はお姉ちゃんと離れているし、100パーセントの力を出せない——

「しかも相性が悪すぎるしね」

「相性——」

「火を吐いてくるって言ったでしょ？」

様々な媒体でゾンビは火に弱いというのが通説とされている。その法則はどうやら斧乃木ちゃんにも当てはまるらしかった。

「だから、僕がやられた上に阿良々木火憐と千石撫子も死んで、阿良々木月火が死の無限ループに突入してしまうというパターンも一応想定して欲しい」

「したくねえよそんなパターン！ そんなもん、地獄絵図じゃねえか！！」

「それ程までに今回の攻撃は苛烈ってことだよ——まあ千石撫子に何かあれば、彼女の中にある蛞蝓の因子がアクションを起こしてくれるかもしれないけれど」

「蛞蝓……」

「そういえば貝木がそんなことを言っていたような——確か、蛞蝓豆腐だったか。」

「蛞蝓と聞くと八九寺を思い出すが、そうか……いやでも、自然消滅するとか言ってたような……。」

「だから因子つつつってるだろ。状況考えて考察しろ。そんなの貴方が考えるべきことじゃないんだよ。貴方が考えるべきことは、だから別のことだ」

「別のこと？」

「織崎記のことだ」

斧乃木ちゃんは直立不動の姿勢で告げる。告げ続ける。

「もう時間が本当にないし質問も受け付けないから、話の腰を折らないでね。ツッコミも禁止相槌も禁止。アーユーオーケー？」

「オ、オーケー！」

「こんな切羽詰まった斧乃木ちゃん見たことねえぞ……逆に言えば、それだけかかってない非常事態だということか。」

「第一、今この町は織崎記の手中に落ちている。あいつが宿しているであろう蜘蛛の怪異に由来する糸が、町中を包み込んでいる。」

「第二、その糸の所為で僕たちはこの町から出ることは出来ない。同じく入ることも出来ない。」

「第三、これをおうにかするには織崎記を説得するか、或いは怪異の力を保てなくなるほどまでに痛めつける必要がある。」

「第四、さつき言った事情で僕はこれ以上貴方に協力出来ない。だから織崎記を倒すのは、鬼いちゃんたちの役目になる。」

「以上、分かったよね」

「さらつと何てこと言いやがるんだ君は!?!」

町が蜘蛛に覆われている!?! 出入り出来ない!?! 僕にあいつを倒せ!?! そんなもん無茶振りもいいところだろうが!!

「それこそなんでもっと早く言わなかったんだよ! 超特急で片付けられる話じゃねえだろうが!!」

「貴方がごちゃごちゃ質問して来なければもう少し詳しく話せたんだ。貴方が悪い。悪いのは鬼いちゃんだ」

「くっ、マジかよ……!」

確かに、質問を重ねて話題を膨らましてしまったけれど……斧乃木ちゃんの助けは期待出来ない、その上僕にあの圧倒的な戦力を誇る織崎ちゃんを倒せ?

無理だろ。

「何弱気になつてるのさローストチキン」

「料理済みかよ」

「もうチキンは否定しないんだね——貴方、自分が吸血鬼もどきだつてこと忘れてない?」

「いや、覚えてるよ。でも今の僕に残されてるスキルなんて——」

「うん、たかが知れてるね。でも今回だけだ。今回だけ、僕が許可をあげる」

「許可?」

斧乃木ちゃんは言った——それは、偽の専門家としては絶対にやってはいけないことだったのだろうと思う。けれど、そんなことを言っている余裕がある程、事態は優しくないのであった。

「吸血鬼化——ギリギリまでの吸血鬼化を、専門家として許可しよう」

吸血鬼化の許可を言い渡した後、斧乃木ちゃんは再び跳んだ。阿良々木家か、千石家のどちらへ向かったのかは定かではないが——僕に出来ることは、間に合ったことを祈るしかない。

跳び去る直前、斧乃木ちゃんは言った。

「この町の監視役として派遣されておきながらここまで事態の進行を許してしまった全責任は僕にある。貴方が吸血鬼化して、その所為でまた不測の事態が起きたとすれば、それもまた僕の責任にしてほしい」

「全責任……待てよ斧乃木ちゃん、それは言い過ぎだろう。君に責任なんてあるもんか。こんなの、幾ら君でもどうこう出来たような話じゃないだろうに」

「あるんだよ——社会に属するってことはそういうことだ。立場があるということはそういうことなんだよ。甘くないんだ——何か事態が起こったとき、必ず責任問題が発生する。そしてその責任問題は全て、責任者に収束する——当たり前のことだ」

「当たり前前って……そんなもんで、割り切れるかよ！」

「感情論なんて何の意味も持たないよ、鬼いちゃん」

「っ!!」

そう言い残し、斧乃木ちゃんは跳躍した。

とても許容出来るような話ではなかった。まだ僕が子供だからそう思うのかもしれないけれど——余りにも無慈悲で、非合理で、不条理な話にさえ思えた。

だが、思えただけで、僕に何が出来る？

自分の事だけで手一杯の僕が——それさえも不十分な僕が、そんな圧倒的なルールに対して何か出来ることがあるのか？

……無いだろ。

僕はひたぎと神原を見た。二人とも意識がないという、酷い状態だ。

……………無いだろ。

無力すぎる——吸血鬼の力を借りないと、恋人さえも守れないなんて、友達の力にさえなれないなんて、情けないにも程がある。

時間が無いっていうのに——ただ立ち尽くしているだけなんて、嘆かわしいにも程がある。

「……………だろ？ 忍」

「……………」

もういつそ、自虐的とさえ呼べる、凡そ最悪な呼び掛けだったが——僕の影に住む吸血鬼の成れの果ては、それに応えるかのように現れてくれた。

忍野忍である。

「……………」

「……………お前を責める気なんてないよ。責められるべきは——責任を負うべきなのは、僕だ」

申し訳なさそうに俯き、黙ったままの忍に、僕は言った。

織崎ちゃんに囚われていた際、忍はアクションを起こさなかった。けれど、それについてどうして責めることが出来るんだ？ あの屋敷には怪異を避ける境界が張られていた訳だし、それにこのこ付いて行ったのは僕自身だったのだから。

悪いのは、僕だったのだから。

「……………これからどうするつもりじゃ、お前様」

「どうするもこうするも無えよ——これ以上、好き勝手させる訳にはいかない」

ひたぎが斬られ、神原も傷を負い、月火は殺され、八九寺、千石、火憐も危機に晒されている。斧乃木ちゃんも、いつ斃れてしまうか分からない。

「忍」

「なんじゃ」

織崎ちゃんを倒すべく動けるのは、僕と、そして後二人しか残されていないのだ。いや、その二人でさえ、もしかしたら危険な状況にあるかもしれない。

けれど——その二人に僕は、賭けてみる。

僕は忍に聞いた。多分その時の顔は、気持ち悪い程にシリアスだったかもしれない。

「……扇ちゃんと言和ちゃんが今どこにいるか、分かるか」

「そこにおるではないか」

「え、嘘」

忍が指差した先に停まっていたのは、闇のように真っ黒い色をした、見覚えのある車だった。そしてその見覚えのある車から見覚えのある児女が走ってくる。

うん……まあ、一目瞭然なんだけれど、忍野扇と神崎日和だった。

なんだろう、嬉しい筈なんだけれど、凄く微妙な顔をしていたと思う。

こんなすぐ近くまで来てたって……何だよ、さっきまでの僕はなんだったんだよ。気持ち悪いくらいシリアスな顔ってなんだよ。ただ滑稽なだけだったんじゃないかよ。だだ滑りじゃねえかよ。

「やつと見つけました、阿良々木お兄ちゃん！ どこへ行ったのかと探しましたよ！」

「うん。なんかごめん、日和ちゃん……」

「何をあたいを置いて行ってしまったのですか！ お陰であたいはそこのお姉ちゃんと二人きりになってしまったのですよ！」

「それは本当にごめん、日和ちゃん」

神原の奴、どうやら性欲を抑えきれなかったらしい。いやまあ悲鳴っぽいのが聞こえていた時点で概ね予想出来ていたが……。

「じろじろと見られていて、とても心安くありませんでしたよ」

「ああ、実害は無かったのか」

ほっと胸を撫で下ろす。意外とあいつは自制心の効く奴だし、滅多なことはないと思っていたよ。思っていたよ！ ちゃんと思つてたよ!!

「忍野お姉ちゃんも、お久しぶりです。お変わりなきようで」

「うむ。うぬは装いが変わっておるがな」

「はい。阿良々木お兄ちゃんが買ってくれた服です。いたく気に入っ

ております!」

「かかつ、そうかそうか。それは良かったわい」

なんか忍が普通に優しいお姉ちゃんになりきっているのはもう置いておくとして（後で追求してやる）、僕は聞いた。

「日和ちゃん、何でここが分かったの？ いやそれもそうだけど、何で扇ちゃんと……」

「おやおや？ 私が居てはお邪魔でしたか？ 阿良々木先輩」

車から降りた扇ちゃんがこつちに歩いて来ながら言った。

「いや、邪魔って訳じゃなくてさ」

「はっはー。そうですねえ。尊敬すべき阿良々木先輩に邪魔扱いなんてされたら、思わず泣いてしまいますよ」

「心にもないことを言うな。……そうじゃなくって、どうして日和ちゃんと合流したんだ？」

場所が分かったのは、あの鎧の件の時と同じ理屈として——どうして日和ちゃんを車に乗せて僕のところまで来たんだ？ そんな、僕を助けるようなことを。

「そこまで深い敵対関係ではなかった筈ですけどね、私たちは——深くはありませんが、複雑な敵対関係です」

扇ちゃんは袖をゆらゆらと揺らしながら言う。

「いやなに、ここまで事態が進行してしまえば、最早私ではどうにも出来ないと思っちゃってね。私は安全弁として存在が許されている訳ですし、事態を悪化させるようには動けませんからねえ」

「……………」

「ですから安心してください。今回の私は貴方を止める気はありませんよ。それに、これ以上手を貸す気もありません。静観させて頂きます」

「静観……まあ、下手に妨害されるよりは、よっほどいいけどさ」

「でしよっつー」

扇ちゃんはにこにここと笑っている。とても笑う余裕のない僕とは全くの正反対に。

「納得いきませんか？」



「……そりゃあな」

今まで僕を、何らかの形で妨害してきた彼女が、どうして今回は特例じみた行為に打って出たのかが分からない。寧ろ今回こそ、暴走してしまいそうな僕を止めてきそうなものなのに。

「ほら、バランスですよ、バランス。バランスを保つため——不肖私はメメ叔父さんの姪っ子ですからね。町全体が人質に取られているような今の状況では、少々バランスが傾いていますから。それに……」

「それに？」

「……いえ、この辺にしておきましょう。確かな理由は実際そんなところですし、この先の展開は読めませんからね」

「あっそ……」

仄めかすようなこと言うなよ、気になるじゃねえか。

と思ったけれど、追求はしない。答えてくれるとは思えないし、僕には必要ない情報なのだろうと思うから。

「まあいいけどさ……じゃあ、その代わりと言ってはなんだけれど、一つ頼まれてはくれないか？」

「おや。阿良々木先輩が私に頼み事を。おやおや、おやおやおや」

薄笑いは浮かべたままではあるが、どこか驚いたような感情の混じった顔で僕を見る扇ちゃん。

「何だよ。僕が誰かに頼み事をするのが、そんなに珍しいか？」

「はい、比較的珍しいと思いますけれど——まさか私をお頼りなさるとは。どういう風で心情が吹き回されたのですか？」

「風の吹き回しと心情の変化を一つに纏めるな……。いや、深い意味はないよ。ただこれを頼めるのは今の所君だけかなって」

「ははあ、そうですか……えっと、では私は何をお願いされるのでしょうか？」

「この二人のことだよ」

僕は気絶している神原とひたぎを掌で示した（気絶している奴を顎とか指で示すのは人としてどうかと思ったので）。

「二人を、家まで送ってやって欲しいんだ。頼めるかい？」

流石にこの二人を守りながら戦うのは無理がある。ここから先は

多分、化物の戦いだ。人間であるひたぎと神原は、言っちゃあ悪いが足手纏いになってしまふ。神原に関しては、体纏いと言うべきかもしれないが。

「はっはー。恋人と友人を、ある意味宿敵とも言えるこの私に託しますか。ギャンブラーですね、阿良々木先輩」

「ギャンブルって程じゃねえよ。二人をこのまま置いておく方が、よっぽどリスキーなギャンブルだ」

そもそも僕は賭けは好まない。実直に動くタイプなのだ。不確定要素を背負ったまま戦うなんて、とても耐えきれたものではない。

「え？ でも阿良々木先輩、さつき二人に賭けてみるとかなんとか、思ってますでしたっけ？」

「何で知ってるんだよ!?!」

「私は何も知りませんよー。貴方が知ってるんでーす」

おちゃらけたような口調でいつもの台詞を言う扇ちゃん。この辺りは羽川にない要素だよなあ。

「くそっ……さつきのあの一連の流れは相当滑稽だったから、性格を後から改竄することできなかったことにするという計画が大失敗だ」

「はっはー。私の前で、勝手な歴史の改竄は許しませんよー」

言いながら、扇ちゃんはくるりとターンした。無駄にムーブがあざといんだよ君は。萌え袖とか、何なんだ。

「了解です。この阿良々木先輩の頼れる後輩である忍野扇、承りました。神原先輩と戦場ヶ原先輩を、見事送り届けてみせましょう」

「えっ？ 頼まれてくれるの?」

「あれ？ 意外そうですね」

「いや、まあ……そりゃあ」

いつもならこの辺りで何らかの舌戦を仕掛けてきそうなものなのだが……何だ今日の扇ちゃんは。妙に優しいぞ。優しすぎて逆に怖い。

偽物なんじゃあないかと思えてくる——いや、偽物だろこいつ。

「中々酷い偏見をお持ちですねえ、阿良々木先輩。偏見はよくありませんよ?」

「日頃の行いの所為だろうが」

「ははー。ですから言っているでしょう？ 私は阿良々木先輩の敵ではなくて、嘘や誤魔化しの敵なのですから。何も貴方を害する為だけの存在ではありません」

「……そう、なのかな」

「そうです」

まあ、扇ちゃんがそういうのならそうなのだろう……なんて一概に片付けられないけれど、ここで言い争っていても何も始まらない。生産性がなさすぎる。

「じゃあ……よろしく頼む」

「いえっさー」

と言うなり扇ちゃんは神原とひたぎをひよいと、まるで米俵を担ぐかのようにして持ち上げた。旧老倉家の扉を壊した時といい、実は結構パワフルなんだよな、この子。

二人を担いだ扇ちゃんはそのまま車へと向い、二人を後部座席に放り込んだ。雑な……。

「では失礼しますね、阿良々木先輩——もうこの事態が解決するまでは、きつと会うこともないでしょう。では」

と言いながらひらひらと手を振り（というか袖を振り）、扇ちゃんは運転席に乗り込んだ。エンジンがかかり——扇ちゃんの乗る黒い車は走り去って行ったのだった。

……正直、拍子抜けした感がある。

いや、別にこれは扇ちゃんを悪く言う訳ではないのだけれど、彼女が現れると色々面倒というか、時間が掛かると言うか……今回もそれを覚悟したのだが、特に何もなくなっさり行ってしまった。

ちよつと、邪険にし過ぎちゃったかな？

「まあ、あやつに対してはあれくらいで丁度良かろうよ。お前様が気を揉むようなことではない」

暫く黙っていた忍が言った。

「黒娘のことはさて置き、じゃ。うぬ、どうするっ？」

「どうするって……日和ちゃん、どうするっ？」

「え？ あたいに振りますか？ あたいはただお兄ちゃんたちの指図に従うのみですので……忍野お姉ちゃん」

「ほら、お前様がさつきと決めん所為で一周してしまっただけではないか！ どうするつもりなんじゃこの優柔不断！」

「僕の所為かよ!? ……じゃあ、忍」

僕はまず忍に呼び掛けた。戦うことを前提としても、まずやるべきことをやろう。

「僕の血を吸え。一滴くらいは残して」

「なんじゃ、ケチ臭いのう。一滴くらい飲ませてくれてもよかろうに」

「それやっちゃうと本当に取り返しがつかなくなるからな……」

僕の血をもしも一滴残らず吸い尽くされてしまえば、色々面倒なことになる。斧乃木ちゃんにとてもじやないが背負わせることの出来ないような事態が発生してしまう。

不測どころの騒ぎじゃあないのだ——それをすれば確実に織崎ちゃんに勝てるだろうが、今度は別の方向から攻撃を受けかねないのである。そうなると、今度は社会的に殺されかねない。

「まあよいわ——どうせ血なんて、ポンデリングの五分の一にさえ及ばぬような味じゃしの」

「それは吸血鬼としてどうなんだよ」

問題発言だった。吸血鬼の成れの果てとは言え。

「ちゅーか、そもそもなんで儂らはこんな不味いもんを好んで吸っておったのじゃろうな？ 今となっては不思議でならん」

「吸血鬼のアイデンティティを吸血鬼が否定するなよ！ お前それでも元怪異の王か!」

「怪異の王？ そんな称号知らんわ。儂の肩書きと言えば、ミスタードーナツマススコットキャラクター代表取締役じゃろうに」

「そんな肩書き聞いたことねえよ！ つーかそんな役職ねえよ！ 百歩譲って仮にあったとしても、その役職についているのはお前じゃなくってポンデライオンさんだ！」

「くっ！ ……ここまで儂がドーナツ好きを推しておるのというのに、ま

だあやつは台頭しておるのか……もはや太陽を超えた強敵と言わざるを得んな！」

「太陽に対する評価が低すぎる！」

あらゆる方面に喧嘩を売りかねない発言である。スポンサーさんが撤退しかねない程の。

「そもそもスポンサーなんざおるのか、こんな小説に」

「スポンサーというか提供は居るよ」

〈物語〉シリーズプレシーズンは、ハーメルンの提供でお送りしております。

「申し訳程度の提供文じゃのう……」

「そう言うな。あんまりメタ発言をしすぎると本当に打ち切りにされちまうかもしれないんだから」

「打ち切りに怯える物語というのは如何なものかと思えますけれどもね」

「まあ、敵が多そうなのは確かだけどな」

媚びるところで媚びていかねば。

閑話休題。

「それじゃあ忍、頼む」

「はいはい」

「吸血鬼が血を飲むのを嫌そうにするな……」

吸血鬼どころか蚊でさえねえじゃねえかお前。

ここで漸く、忍は僕の首筋に齧りついた。鋭い牙が刺さり、血が座れていくのを感じながら、僕は次に日和ちゃんに言った。

「日和ちゃん。今回戦うにあたって君の力を借りると思うんだけど、協力してくれるかい？」

「言うまでもございませぬ。勿論です。あたいはお兄ちゃんたちを守る刀なのですから」

と言うと、神崎ちゃんは足元に置かれていた二本の鞘から刀を抜いた。片方は太刀で、もう片方は直刀。

「斬刀『鈍』と絶刀『鉋』。ある意味、あたいの同胞達ならぬ同胞太刀——ですわね」

「いや、そこまで上手くねえよ」

上手いこと言った、みたいなドヤ顔をしていたので思わずツツコンでしまった。まあ実際そんなに上手くないしな。

「……ん？ 同胞……」

と、ここで僕は気付いた。そういえば、日和ちゃんはこの完成形変体刀について、一体どの程度まで知っているのだろうか？ 日和ちゃんの正体は、『鉋』や『鈍』と同じく完成形変体刀である微刀『釵』。ならば、他の刀の名前や特徴を知っていてもおかしくないのではないか？

「日和ちゃん。君、完成形変体刀についてどれくらい知ってるの？」

「はあ。どれくらい、とは」

「つまり、その名前とか特徴とかのことだよ」

「はあ。……そうですね。全ては知りませんが、何本かの同胞については知っております」

「何本か」

「はい。あたいを除いて、” 斬刀『鈍』”、” 絶刀『鉋』”、” 賊刀『鎧』”

” ——あと、” 千刀『？』”、” 薄刀『針』”、” 双刀『鎚』”、”

悪刀『鏢』——以上の七振りです」

「な、七振り……」

その多さに思わず動揺してしまった——まさかこんな近くに情報源が居たとは。今まで思い浮かばなかったのが不思議でならない。

けれど、日和ちゃんは僕のそんな震え声を失望のものとしてとらえてしまったのか、

「お役に立てなくて申し訳ありません。惜しむらくはあたいの励み足らず……」

「い、いや。全然そんなことねえよ」

「阿良々木お兄ちゃんのお望みに添えられなかったとあれば、八九寺お姉ちゃんからどのようなお叱りを受けるか……!」

「安心しろ。もし叱られたらその八九寺お姉ちゃんを僕の所まで連れてこい。お仕置きするから」

どうやら八九寺お姉ちゃんは日和ちゃんに何らかのトラウマを植

え付けたりらしい。許せん。日和ちゃんが叱られようと叱られまいと、後でお説教だ。

僕は日和ちゃんに、七振りの内聞いたことのなかった四振りについて尋ねた。即ち、千刀『?』、薄刀『針』、双刀『鎚』、悪刀『鏢』についてである。日和ちゃんはすべての全てに答えてくれたが、結構細かいところまで把握していた。流石は同胞というべきか。

という訳で、以下にその四振りについて大雑把に記していこうと思う。僕自身、教えてもらったことについての整理を兼ねて。

千刀『?』——”多さ”に主眼の置かれた、いくらでも換えが利く恐るべき消耗品としての刀。その名の通り千本で一本の刀であるらしく、その刀は全てが同じ長さ同じ強度同じ模様であり、そこには一寸の狂いもないらしい。

薄刀『針』——”脆弱さ”に主眼の置かれた、羽毛のように軽く硝子細工のように脆い美しき刀。その薄さは向こう側が透けて見える程で、少し体の軸をずらしただけで壊れてしまうという。

双刀『鎚』——”重さ”に主眼の置かれた、凄まじい質量の塊であり持ち上げることさえ満足に敵わない石刀。その名前は鞘も掴も刃文もなく上下も曖昧なことに由来するらしい。薄刀もそうだが、四季崎記紀はどうしてそんな刀を作ったのだろうか。

悪刀『鏢』——”活性力”に主眼の置かれた、変体刀十二本の中で最も凶悪な一振りであるという。それ以外の情報は得られなかったが、何がどう凶悪で、活性力とはなんなのか——何にせよ、相手にしたくない刀である。

以上が、完成形変体刀の名前と特徴である。最後の悪刀だけは微妙なところだが、新たに三本もの刀の特徴が分かったというのは非常に大きな収穫である。僕は日和ちゃんに感謝の意を述べた。

と同時に、僕を目眩が襲った——吸血が完了した際に発生する貧血染みた症状だ。首筋から牙が離れたのを感じてから、僕は立ち上がって数度跳ねてみた。感覚を合わせるためである。

「よし、これで準備は……万端とは言い辛いけれど、出来たな」  
僕は言った。

「そうじゃのう。かかつ、怪異の王の血が騒ぐわい」

そう言つて忍は肩を回す——今の忍の姿は、影縫さんと戦つた時と同じくらいの年齢にまで成長していた。つまり女子高生レベルである。腰あたりまで伸びた髪はそのままに、服は直江津高校の制服を思わせるようなものになつていた。それよりは幾分かゴージャスだが。「……あたいの元あるじ様のらうぜき、重ね重ねお詫び申し上げます」

日和ちゃんはそんな謝るようなことを言つて、刀を両手に構えた。

僕は空を見た——吸血鬼度が上がった今なら見える。確かに斧乃木ちゃんの言つていた通りだ。空一面には織崎ちゃんが仕掛けたであろう蜘蛛の糸が其処彼処に広がつていた。

町を覆い尽くす——死霊蜘蛛とやらの巢。

「どうする？　このまま、奴を手を拱いて待つか？」

「いや、そんな時間は掛けられない。これ以上斧乃木ちゃんに負担は掛けられないしな」

「では、何から始めましょうか」

「そうだな」

僕は再び空を仰いだ。

織崎ちゃんが今どこに居るのかは定かではない。探せば見つかるだろうけれど、その探す時間も、今回は省略してやろう。

僕は言つた。

「じゃあまず——あの蜘蛛の糸を、ばつさり斬るぞ!!」

「かかつ!!」

「承りました!!」

「そうはさせませんわよ!!」

「何だ?!」

勢い込んで戦いを始めようとしたところで、突如頭上からそんなまるで悪の狼藉を止めるヒーローの如き台詞が聞こえてきた。今度は僕だけでなく、忍と日和ちゃんも上を向いた。

僕たちの視線の先——空中に幾重にも張り巡らされた蜘蛛の糸の上。そこではミニスカートを履いた金髪少女、つまりは僕たちの敵である織崎記が腕を組んで仁王立ちし、僕たちを憎々しげに睨んでい



た。

まさに今、戦いの火蓋が切つて落とされるといった雰囲気だったのだが……この視点からだと、色々と締まらないのであった。

第肆話 しるしスパイダー 其ノ伍

「016」

「全く。あんな必死になって逃げなくてもよいのではなくて？ 私、傷付いてしまいましたわ」

頭上の織崎ちゃんが言う。その手にはいつもの毒刀『鍍』ともう一振り、見たことのない刀が握られていた。いや、それは本当に刀なのかどうかさえ定かではない。

というのも、刀身が見えなかったからだ。吸血鬼の視力を持ってしても、その刀は柄と鍔だけで構成されているように見えた。けれどもそれが刀であろうと断じたのは、刀身があるであろう場所で、光が不自然に反射していたからである。

あれは恐らく、薄刀『針』——薄さに主眼の置かれた硝子細工のような刀。それならば、刀身が見えないのにも納得はいく。刀身が透明であれば、見えなくてもおかしくはない。

「傷付いたっつーか、僕の友達を傷付けてくれたのはどこのどいつだ。可愛い妹まで狙いやがって」

狙うどころか、殺しやがった訳だが——まあそれについては下手人は別に居るのだが、こいつの息が掛かっていない訳がない。よってこいつの所為である。

「のこのこと儂らの前に出てきたこと、しっかりと後悔させてやろう。まあ安心せい。別にうぬを殺すつもりはないのじゃ——精々、半殺しくらいじゃろう」

「……吸血鬼度を上げましたのね」

悪役じみた台詞を言う忍の姿を見て、織崎ちゃんは僕たちの吸血鬼度がギリギリまで上昇していることを悟ったようだ。小さく歯噛みするのが見えた。

「……そんな程度で、私に勝てると思っておりますの？ 中途半端に戦闘体制になったところで……結果は同じでしょうに」

「うぬが負けるという結果じゃろうっ？」

「あなた方が負けるという結果ですわよ!! 曲解しないでくださいまし!!」

「うわ怖っ。なんじゃあの女子、ヒステリー症候群か何かなのか」

「あんな風にすぐ怒るって、今まで何にも考えずに生きてきたのでしようね」

「ぐぎぎぎぎぎ!!」

歯軋りする織崎ちゃん。なんだかこの子、登場して最初はすぐに反撃されて歯軋りしてるような気がするんだが。スロースターターののだろうか？

「今まで何も考えずにいい!? それはそっくりそのままお前に返してやりますわよ、微刀『釵』、いや神崎日和!! お前にだけは言われたくありませんわ、機械人形の分際で生意気に!!」

「なんじゃあやつ……キレすぎじゃろ」

「哀しいですね……頭の病なのですよきつと」

「日和ちゃん、君って結構言うことキツイよな」

頭の病とか、中々言わねえぞ……まあそれくらい毒がなくちゃ、僕たちの世界観についてこれないのかもしれないけれど。

……あれ、でもこの子って、もうちよつと純粹系のキャラじゃなかったっけ？

「さあ、どうでしたっけ。昔の話は忘れてしまいました」

「いや、初期は君、無邪気キャラだった筈だぞ。少なくとも煽るようなキャラじゃなかった筈だ」

八九寺か。

あのロリ神様に毒されたのか。

「まあ怪異というのは、人間からの影響をモロに受けるからの。無邪気であったのなら尚更、そういう悪影響も受けるじやろうよ」

「えー」

そうか……もう純粹だった頃の日和ちゃんは居ないのか。悲しいなあ。

まあそりゃあなあ。悪影響が服を着て歩いているような僕たちと絡んでたら、そりゃあそうなるよな。うん、割り切ろう。気を遣わなく

て良くなったってことで割り切ろうか。

「……私思うのですけれど、戦闘前にこういうギャグ染みた無駄な雑談するのって何なんですか？ あなた方流の儀式か何かですか？」  
「お前そんなこと言い出したらこのシリーズの在り方自体が問題になってくるからやめろ」

そもそも本来は雑談がメインのシリーズなのだ。寧ろこんな風にもバトル展開になることの方が珍しいし、ぶっちゃけシリーズの空気に合っていないのである。

「まあもういいですわ……私には無関係ですし。あなた方がどれだけおふざけに走ろうとも、私はシリアスを貫き続けますわ」

「マリンマリンだのバーチャルアイドルだの言ってたやつが何言ってるんだ」

「ですからあれは貴方を油断させるために話を合わせてやったのでしょうに!! 何ですか?! 私の親切心を無下にするつもりですか?!」  
「油断させるためという前提がある時点で、僕に対する親切心がこれっぽっちも読み取れねえよ!」

「というか、だからこれですわよ! この会話が無駄だと言っているのですわよ!」

「知らねえよ! 元々の火種を蒔いたのはお前だ!」

「ぐぎぎぎぎ……!!」

悔しそうに歯を食いしばって僕らを睨む織崎ちゃん。

まあ確かになあ。雑談から繋がってバトルが始まるって、締まらないよなあ。そこは常々僕も思っていたところではある。

けれども、今この状況で一番締まらないのはあいつ自身だということに、織崎ちゃんはまだ気付いていない——見下げられている僕らにははつきりと分かることなのだが。

「……忍、日和ちゃん」

僕は小声で二人に呼び掛けた。ミニ作戦会議。

「なんじゃ」

「如何なさいましたか」

小声で返してくる二人。

「そろそろあれに触れるか？ 多分あれを指摘したらバトルが始まると思うんだけど」

「そうじゃのう。いい加減見ていて痛々しくなってきたしな」

「ではどうぞ、お任せします。阿良々木お兄ちゃん」

「僕かよ……だろうとは思ってたけどさ」

ミニ作戦会議終了。僕は再び織崎ちゃんの方を、つまり上を向いた。

「織崎ちゃん」

「なんですの」

——さあ、ここが難関である。これから僕があいつに突きつけるのは、恐らく読者ももう気づいているであろう事実なのだけれど、これをどう言い放つてやるか、それが問題なのである。

ストレートにいくか、或いはオブラートに包むか、何らかの暗喩を使うか——表現方法が多々あるのが言葉の難しいところであるのだが、しかしそんな中から一番のチョイスを求められるのが語り部である。

ならば今回何が一番良いのか。それは最早言うまでもなく絶対的に答えは出ている。伊達に何年も語り部をやってきた訳ではないのだ。言ってしまうえば、最早僕はベテランの域に達している。

だからこそ失敗は許されない——失態を見せる訳にはいかない。そういうメタ的な事情は横に置いておくとしても、これから始まる織崎ちゃんとのバトルを一步リードした状態から始めることが出来るかどうか、この一言に掛かっている。

さあ言うぞ。言つてやる。

さーん、にーい、いーち。

はい。

「お前外目からは想像出来ないほど、子供っぽいパンツ穿いてるんだな」

「これはそういう柄のストッキングですわ」

「!？」

「!？」

「!?」

なんだと!? ス、スパッツ——!!?

そう、織崎ちゃんは僕たちを糸の上から見下している訳だが、逆に言えば僕たちは自然と下から上を見上げる形になる。で、今織崎ちゃんは何を思っているのかミニスカートを履いているのである。

そう、スカートの中身がモロに丸見えなのであった。

それを指摘することによって織崎ちゃんの心理的動揺を誘い、隙について吸血鬼パワーで即座に制圧、残りのセクションは雑談で埋め尽くしてやろうと画策していたのである。

のであったのだが。

だったのに。

ス、スパッツ——だと!?

「まさか私が下着を見られることを考慮せずにこうして立っていると  
思いましたの? 残念、私はそこまで考えなしではありませんこと  
よ」

「くっ——!!」

やられた——なんでそんなパンツの柄が書かれたスパッツなんか  
穿いてるんだとか、もうちよっという柄はなかったのかとか、色々  
突っ込みたいところはあるのだが、もうそんなこと言ってられるよう  
な状況ではない。そんな立場ではもうない。

今のはどう考えても完全に的外れな指摘だった。こんなことでは、  
当然バトルの主導権を握れるはずもない。見事にカウンターを食  
らってしまった。

忍も日和ちゃんの表情にも驚愕が浮かんでいる。そりやそうだ、パ  
ンツ柄のスパッツとか、分かる訳ねえよ。

まずい。前代未聞レベルのピンチだ。このバトル、一気に暗雲が立  
ち込めてきた感がある——たかだかこの程度で大袈裟な、と思われる  
かもしれないけれど、これは僕のキャラ的な沽券にさえ関わってきか  
ねない問題なのである。

今まで幾度となく（不本意ながら）女子のスカートを捲り、（どうい  
う訳か）数々の下着を巡ってきた所為で（全く遺憾なのだが）変態扱

いざれてきた僕が、ここに来てこんな初歩的なミスを犯してしまうとは——織崎記、なんて恐ろしい奴なんだ。

「恐ろしいのは貴方ですわよ阿良々木暦。こんな限りなくどうでもいいことにどれだけの文字数を消費しますの？ 馬鹿ですよ？」

「くっ……！」

言い返すことが出来ない。反論というアクションを完全に封じられてしまった。

「ふふふ……何だかよく分かりませんが、あなた方に致命的なダメージを与えられたのであれば、態々特注で作った甲斐がありましたわ」

「特注だ?!?!」

この野郎、さらに爆弾を投下してきやがった！ いや、この事実のどこがどう爆弾なのかは全く分からないけれど、しかし何故だかさらに追い討ちを掛けられたような気分になってしまった。

特注って。こんなもんを特注って。

だったら尚更、もつといい柄にしろよ！

「お前様、気を持ち直せ。動揺しておるのは十分伝わってくるが、失敗は失敗じゃ。諦めるしかない」

「くそっ!!」

織崎ちゃんへの第一撃の筈だったのに、僕らが一撃を食らってしまっただのである。自分で自分の首を絞めた形な訳だ。

「哀れですわねえ、阿良々木暦。おほほほほ！」

「哀れむな！ マジで哀しくなるからやめろ！」

「ならその哀しい気分のまま、逝ね!!」

「何っ!?!」

織崎ちゃんは高笑いした——と思った次の瞬間、本当に瞬きした一瞬——スカートの中身を晒す織崎ちゃん（地の文での精一杯の抵抗）と張り巡らされた糸しかなかった空中に、突如大量の刀が現れた。否、現れたというより、ぶら下がっていたというのが正しい。

どこからともなく垂れている糸一本一本に、刀が一本一本括り付けられている。その刀はどれも同じような形をしていた——いや、”同

じような” というのは少々語弊があつた——” ような” は余計だつた。

同じ。

全てが全く同じ——その長さは一寸足りとも違わず、その模様は一部足りともずれない。

完全に同じ刀、そしてそれが大量にあるということは——。

「千刀『？』——!!」

『多さ』に主眼の置かれた、消耗品としての刀——四季崎記紀が作りし完成形変体刀が一本・千刀『？』！

「あら。知ってましたのね——まあ予想はしてましたけれど。刀についての情報がある程度知る日和号がそちらに居る以上、知っていて当然とさえ思っておりましたわ」

「……………」

これを教えてもらったの、実はついさっきなんだけだな。

「ですが、そんなものをハンドテと思うような私ではありませんわよ」

と、織崎ちゃんが言った——と同時に、ぶら下がっていた大量の千刀が、一斉に雨のように落下してきた。全てが同じタイミングで。

「っ!!」

この攻撃に、僕はデジャヴを覚えた——そうか、『鎧』の時、既に織崎ちゃんはこの刀を使っていたのかも——いや、今はそんなこと、どうでもいい!

「し、忍！ 日和ちゃん！ 僕の下に隠れ——」

「及びません、阿良々木お兄ちゃん！」

それこそ『鎧』の時よろしく、また刀の雨に打たれようとした僕だったが、その時日和ちゃんが動いた——片方の刀を鞘から抜いた。

刀——『斬れ味』に主眼のおかれた刀・斬刀『鈍』！

「微刀流・腥風零閃！」

日和ちゃんは傘になろうと屈んでいた僕を踏み（踏まれてばっかだな僕）、刀の雨に向かって錐揉み状に回転しながら跳躍した——そして斬刀を目にも留まらぬ速さで左右に動かし、降ってくる千刀を次々と斬り裂いていく。斬り裂かれた刀はその場で消滅していった。



「……えっ!?!」

次々と斬られていく千刀——それを見て僕は驚嘆した。いや、僕が驚いているのは、刀が斬られると消滅していくことではない——それも驚くべきポイントではあるが——そこではなく。

完成形変体刀が斬られている——傷一つ付けることも叶わなかった、『心渡』さえ敵わなかった変体刀が、まるでただの飴細工であるかの如く、切断されていく。

——だから、斬刀なのか？

あらゆるものを斬る刀——『心渡』では斬れないものさえ、両断することの出来る刀。

そういえば、北白蛇神社に現れた謎の階段。あれを斬ったのも、この斬刀だった。そしてあれもまた、『心渡』では斬ることの出来ない、実体化した怪異——。

そういう性質なのか？ この刀は。

実体化した怪異を斬ることの出来る刀——目には目を、歯には歯を、新種の怪異には新種の怪異を、ということか。

「ちっ……」

織崎ちゃんの舌打ちが聞こえた。

「だからその刀は渡したくありませんでしたのに……ハンデと言うなら、その刀があなた方の手に渡っている時点で、もうハンデみたいなものでしたわよ」

「ハンデ——」

たしかに、織崎ちゃんとしては堪ったものではないだろう。何せ本来ならば、僕たちはあの刀の一本さえ斬ることが出来ない筈だったのだから。それをこうして容易に斬ることが出来るようになったということは、織崎ちゃんから見れば僕たちが大幅に戦力アップしたことになる。

妖刀『心渡』と斬刀『鈍』——チートレベルの刀を二振りも所有していることになるのだから。

ハンデなんて生易しいものではない。

「ですが——もうこれ以上あなた方に逆転する隙は与えせんわ!」

そう言うと織崎ちゃんは、糸の上で一度飛び跳ねた。そして再び糸を踏み、その反動を利用して、さらに高く跳び上がった——弦のように張り巡らされた糸は振動するようで、トランポリン染みた技を可能にした。

跳んだ織崎ちゃんは空中で体を縦方向に百八十度回転させた。スカートが重力により捲り下がる（またはや無駄な抵抗）が、織崎ちゃんはそれを構うことなく、さらに上方に張られた糸を下から蹴り上げ——その反動を再び利用し、縦方向に何度も回転しながら僕たち目掛けて落下してきた。

「織刀流——」

「っ!!」

「——旋断双刃!!」

両手に刀を構えたまま高速で回転しながら落下する姿は宛ら二枚刃のピザカッターのようであった。慌てて僕たちは左右に避けた。僕と忍は左に、日和ちゃんは右に（尚、忍と日和ちゃんは見事なステップで回避したが、僕は失敗して尻餅をついた。見るに耐えない）。

「っ……………!!」

僕は戦慄した——回転を止めて二本の刀を太鼓のバチの如く振り上げたまま地面に膝をついた織崎ちゃん。彼女の両脚から僕たちがさつきいた場所より更に向こう側へ、地面に深い亀裂が出来ていた。もしも僕たちが横ではなく後ろに逃げていたら、間違いなく真っ二つになっていただろう。

そして、その斬れ味もそうだが——明らかに刃が届かない程の遠方まで斬り裂かれている。衝撃波か何かを起こしたのか？ 刃渡りが全く意味をなしていない。

「ちっ、残念ですわ。真っ二つに出来ると思いましたのに——まあそれも、時間の問題でしようけれどね」

織崎ちゃんはそう言いながら立ち上がった。

「……………織刀流っていうのは——何なんだ？」

僕もそう言いながら立ち上がる。だがこの質問は、些かこの緊迫した状況では的外れともいえる指摘だったかもしれない——虚刀流、微

刀流ときて、織刀流——。

「なんでもかんでも刀の名前の後に流をつけりゃあいってもんじやねえぞ」

「まるで私が適当に名前を付けたとでもいうような物言いは止めてくれませんか？　その微刀流とは違って、私の流派は虚刀流と全刀流に連なる由緒ある流派——」

「全刀流？」

「あつ」

「……………」

どうやら、図らずもまた新情報をさらつと言ってしまったらしい。

口のガード、ちよつと緩すぎないか？

「……………まあ……………いいですわ」

「いいのかよ」

「……………ええ——どうせそのうちバレる情報でしたし——それに、名前だけを知ったところで、それがどんな流派かはまだ言っておりませんし。故に大したハンデにはならないでしょう」

なんだかただの開き直りのように思える言葉だったが、確かに織崎ちゃんの言う通りである。名前を知ったところで、それがどのような流派なのかは分からないのである。全刀流……………全ての刀を扱える流派、とか？

織崎ちゃんは、右手に持つ刀を僕に向けた。刃が薄く、不可視と言っても過言ではない刀・薄刀『針』——。

「どのみちあなた方はここで死ぬのですし、究極的には何を言ったところで何の意味もないのですけれど——千が一つ、万が一つ、億が一つのこともあるかもしれないので、これ以上は教える気はありませんの」

織崎ちゃんは言う。

「……………相変わらずとんでもない自信だな、織崎ちゃん。言っておくが、僕を今までの僕と思って掛かっちゃあ、後悔することになるぜ」

睨みを利かせながらハツタリを利かせる僕。いや、ハツタリと言うほどでもない筈である。織崎ちゃんの力は実質殆ど未知数と言って

も過言ではないが、その死霊蜘蛛とやらがどれだけ強力にせよ、吸血鬼に匹敵する怪異ではないに違いないのだから。

ノースイフキング  
怪異の王——吸血鬼。

「ふん。貴方こそ、私を舐めて掛かると後悔することになりますわよ」  
織崎ちゃんはそれでも、不敵に笑う。自分の敵ではないとでも言い  
たげに嗤う。

「あなた方は私の蜘蛛を知らない。本当の私を知らない。織刀『銘』——  
——全てを織り交ぜた刀の力を、何一つ知りませんの」

織崎ちゃんがそう言った直後。

「!!」

織崎ちゃんの姿が、ふらりと揺れたかと思うと——突如として消えた。

「なっ——!?!」

「お前様!! しゃがめ!!」

「っ!!」

忍が叫ぶ——僕はすぐさましゃがみこんだ。否、それだと僕が能動的にしゃがんだように聞こえるかもしれないので言い直すと、叫んだと同時に忍が僕の頭を押さえ込み、地面に叩きつけた。つまり、半ば無理矢理しゃがまされた訳である。

しかし、そんな見ようによつては仲間割れにさえ見えそうな行為をどうして責められようか。忍が僕を押さえ込んでくれなければ、僕も忍のようになっていたに違いないのだから。

押さえ込まれたとほぼ同時——それはコンマ零零秒レベルのことだったと思う——に、僕の頭上を何か凄まじい風圧、或いは爆発が通り過ぎていった。そして、大量の血が僕の頭に重くのしかかった。

「っ——!!!」

僕は慌てて上を向いた。そして戦慄した。

そこには。僕の頭上で、頭のない金髪の吸血鬼が、血をドロドロと首の切断面から垂れ流していたのだから。

「し——忍——っ!!!」

僕の頭を掴む手から力が抜け、どちゃりと音を立て、忍の体は血の

海の中に突っ伏した。

と思った次の瞬間、僕を濡らした血が、地を海に変えた血が、一斉に蒸発した。そして血がなくなっていくと共に、突っ伏した体から美しい金髪を持った頭が生えてきた。

頭の付け根から始まり、美しい髪の毛先まで——一瞬で再生すると、金髪金眼の吸血鬼は目を見開き、僕の首根っこを掴んで立ち上がらせた。

「お、忍野お姉ちゃん——」

日和ちゃんの驚いたような声が聞こえた。そういえば彼女は忍の再生を見た事が無かったのだったか。

「油断するなよ。お前様、ヒヨリ——一瞬でも気を抜けば、死ぬぞ」「っ!!」

何事も無かったかのように体勢を整えた忍は、氷のように、血も凍るほど冷たい声で言った。

忍にここまで言わせたことのある相手は、果たして今まで居ただろうか。一瞬でも気を抜けば死ぬ——千石と戦った時以来だろうか。そんなようなこと、あの吸血鬼退治の三人組に対してさえ言わなかったが。

否応なしに気が引き締められる——甘く見ていた。さつき同じような反省をした筈なのに、僕はどこかで、この吸血鬼の力を過信しているのだ。

過剰な信頼は身を滅ぼす——斧乃木ちゃんに何度か言われた言葉だ。

「惜しいですわね。どうやらもう少しスピードを上げる必要があるらしい——まあ、幾らでも限界なんて、限度なんて超した殺戮を見せて差し上げますわよ」

掴み上げられた僕が振り返ると、そこには先ほどと同じように薄刀を僕に向けた織崎ちゃんが居た。

だが、さつきとはどこか違った——どこかという言葉でぼかすには余りにも露骨すぎたけれど、しかし僕はそれに気付くのに数秒を要してしまった。いや、気付いていたのかもしれないけれど、それに気付

いたということに気付かなかつたのだ——そんな一瞬さえ、命取りになりかねないというのに。

くない——織崎ちゃんの胸元に、乳房と乳房に挟まれるようにして、くないのよなものが突き刺さっていた。そのくないからは視認することが出来るほどの電気がバチバチと弾け飛んでいた。

あれは、なんだ？

「混乱しているようですね——ふふ、無理もありませんわ。この刀については、神崎日和も知りませんものね」

胸元から電気を進らせながら、日和ちゃんが言った——なんかさつきより血相がよく見えるのは気の所為か？

「どこまでも過激に参りますわよ。どれだけ警告タグが増えようとも知ったことではありませんことよ。寧ろ、打ち切りになってしまえば良いのですわ——いえ、悪いのかしら？」

そんなメタ染みたことを言うてから、織崎ちゃんは悪鬼の如き笑みを浮かべ、瞬きする一瞬よりも遙かに短い速度で、僕の目の前に現れた。

「っ!!」

「否定しますわ。私は否定する——あなた方の存在を、この世界の存在を、この物語の存在を——!!」

同時に、目も眩むような閃光が僕の視界を埋め尽くした。そして再び視界が戻ってきたと思えば、今度は視点が少しずつ下がっていくのを視認した。

背後から声が聞こえた。

「私にときめいてもらいますわよ——阿良々木暦っ!!」

「017」

「ぐはっ!!」

吹き飛ばされた織崎ちゃんは地面にぶつかってバウンドし、四度目のバウンド後にずぎぎぎと仰向けになって地面に滑り込んだ。地

面は舗装されている道路とかではなく小石がごろごろ転がっている荒地だ——俯せよりはマシだろうが、結構なダメージに違いない。

何せ僕が言うのだから——僕自身も全く同じことになっていた。相打ちというか……僕の方がバウンドが一回多かったしその上俯せだったけれど、受けたダメージは織崎ちゃんと大差あるまい。

いや、寧ろ織崎ちゃんの方が大ダメージか。

何せ、完全に攻撃を見切られて、制された上で、刀を破壊されたのだから、その精神的ダメージはあのプライドの高い高飛車な少女のこと、馬鹿にできないものがあるう。

地面には小石に混じり、ガラスのような破片が混じっていた。それは他でもない、完成形変体刀が一本・薄刀『針』の残骸。織崎ちゃんの手には柄が握られているが、その刀身はもう残っていなかった。

薄刀『針』——破壊。

「そ、そんな——薄刀が——私の——全刀流が——」

上半身だけを起こし、手の中にある薄刀だったものを見つめながら、うわ言のように呟いた。

「馬鹿な——馬鹿な——否定しますわ、ひ、否定しますわ、こ、こんな——」

「残念じゃったな、現実じゃ」

「っ!!」

僕と織崎ちゃんの間割り込むようにして、忍が降りてきた。背中に生えた翼は忍が降り立つと同時に変形し、豪華なマントになった。「かかつ。所詮そんな美術品での攻撃なんぞ、からくりが分かってしまえば大したことはない。うぬも相当眼に自信を持つておったようじゃが——儂の観察眼も、そう捨てたものではなからう?」

「っ……………!!」

偉そうに腕を組み、踏ん反り返る忍。全盛期程ではないにせよ、今の彼女には火憐程度の胸があるので、図らずも強調する形となった——いや、こいつのことだから強調したのかもしれない。

実際、織崎ちゃんの猛攻を掻い潜り一撃を入れ薄刀を壊すことが出来たのは、半分以上が忍のお陰だということは何人たりとも否定しよ

うがないだろう。それに彼女が居なければ、今頃僕は1ミリ四方の肉塊になって小石の仲間入りを果たしていたかもしれないのだから。

「まあ、うぬではなく、その美術品自体は褒めてやってもよい出来じゃったぞ？ 儂自身驚いた——ただ薄っぺらいだけの出来損ないと思っておったが、まさかあのような利点があつたとはな」

そう、あれは想定外だった。予想外だった。忍が看破してくれなければ、僕はあの性質を永遠に見抜けなかっただろう。いや、永遠にというのは言い過ぎかもしれないけれど——いやいや、見抜く前に殺されていたと考えれば、案外言い過ぎではないのかもしれない。

薄刀の性質——これが分かったことにより、この戦いはぐつと楽になった。一度目は防がれた日和ちゃんの奥義・微風刀風〔神風嵐〕もそれからクリーンヒット。それによって体勢を崩した織崎ちゃんに忍が一撃を見舞い、それによって隙が出来たところを僕が『心渡』で斬りかかったのである。

ぶっちゃけ、薄刀の正体が分かってからはずっと僕たちのターンだった。ワンサイドゲームと言っても過言ではなかっただろう。あれ程までに息の合ったコンビネーションアタックが実現したのも、強力な一撃を放つ忍と、常に起点となってくれた日和ちゃんが居てこそのこと。

だから、正直僕要らないんじゃないかと思つたが……まあ盾という役割を全うしたってことで、僕の参加を許してほしい。

「さて、と。まだやるか？ うぬの自慢の刀が一本なくなった訳じゃが、まだやるか？」

「……い、一本……な、な、なくなった程度で」

「千刀か？」

「っ!!」

「かかつ」

僕の側からは忍の金髪とマントしか見えないけれど、きつと今彼女はお馴染みのあの顔をしていることだろう。血も凍るような、凄惨な笑みを浮かべているのだろう。

「無駄じゃ無駄じややめておけ——どうせまた利用されるのがオチ



じゃぞ？ 『千刀巡り』じゃったか……もうあれは儂らに通用せん」

「……………」

煽るなあ。

忍さん煽るなあ——僕は日和ちゃんに起き上がらせてもらいながら思った。

『千刀巡り』——これもまた”多さ”に主眼のおかれた千刀の利点を生かした技だったのだろうが、しかし運用方法が悪かった。

空中に張り巡らされた糸に繋ぎ、刀を落下させては元に戻すという戦法は脅威ではあったが、それはつまり、抜き身の刀を糸に近付けているということに他ならない。

だから”それ”を利用した——繋がれた大量の刀を使い、空中の糸を切断したのだ。

空中の糸は二段構造になっていて、織崎ちゃんが足場として使う一段目、そして千刀や双刀、或いは使用しない刀などを吊り下げておく二段目に分かれている。千刀は落下しても一段目の糸を切らない位置に配置されているが、その落下する刀を揺らしてしまえば、刃は糸に届いてしまうのだ。

我ながらこれに気付くのに遅かったと感じたが——しかもこれを見抜いたのは僕ではなく日和ちゃんだ。相手の攻撃を自分の攻撃に変換する——僕みたいな吸血鬼パワーごり押し奴には思いつかない戦法であった（言ってしまうえば忍もごり押し戦法なのだが、あいつの場合手数と火力がとんでもないので僕とは比較にならない）。

結果、一段目の糸を切り裂くことに成功した。糸の足場がなくなつたお陰で、今こうして僕たちは地に着いている。

「ぐ——うう」

織崎ちゃんが呻きながら立ち上がる。さっきまで小綺麗だった服には土や砂が纏わりつき、金色の髪は幾分か燻んでしまっている。

「……………」

ボロボロな見た目ではあるが……しかし、翡翠色の目からは全く衰えない殺意が読み取れる。そうまでして、そうまでなつて、どうしてそんなにも。

歴史の改竄——ルートの融合——多分この件に関しては、実際に”ルート”が存在することを知っている僕ならば理解出来るはずなのだろうけれど、しかしそれでも、到底受け入れられる話ではない。

「っ……………ぐっ……………」

僕たちを殺したからといって、果たしてそれが何になるというのか

——主人公。

織崎ちゃんは僕を指してそう言っていた。

正直に言うけれど、僕にはそれが、狂人の戯言にしか聞こえなかった。狂人呼ばわりするというのは道徳的に許されることではないけれど、しかしこればかりは狂っていると思ってしまうのである。

「……………」

今まで散々メタ的に主人公主人公言ってきたけれど、あんなの冗談みたいなものである。実際のところ僕はその辺に居るような冴えない男でしかない。ただちよつと元伝説の吸血鬼の眷属になってしまったというだけの奴でしかない。

冗談を真に受けられても困る。

「……………」

だって考えてもみてほしい。

最強で無敵で無敗なチート系巻き込まれ系やれやれ系主人公が好まれる昨今、こんなサンドバックが意志を持って歩いているような奴が主人公な訳ないだろう。ちよつと考えれば分かることである。

別に僕は最強でもないし、敵はいっぱい居るし、寧ろ勝利自体が珍しい。チートというなら忍の方がチートだし、巻き込まれるどころか自分から首を突っ込んでいるし、やれやれなんて格好つけてる余裕は一切無い。

だから誤解しないでね。

「……………」

などと誰に向けた訳でも無い言い訳じみたことを考えていると、織崎ちゃんが言った。ふ？ 魅？

「ふ——ふ——ふふふふふ——ふふふ——」

「阿良々木お兄ちゃん、あいつ笑ってますよ。いかなることでしょう

？」

日和ちゃんの言う通り。織崎ちゃんは突如、発作を起こしたかのように笑い出した。その目は相変わらず笑っておらず、僕たちの方をしっかりと見据え、睨んでいるけれど。

「な、なんだよ——何がおかしい」

「ふふ、ふふふ——いえいえ、あなた方は何もおかしくありませんことよ——ただ、面白い演出が思い浮かびましたね？ ふふふ——ああ、さぞあなた方は絶望することでしょうね——ふふふ、ふふふ！」

「は、はあ？」

演出、だと？

絶望——どういうことだ。

要は妄想で笑っているということなのだろうが——だが、ヤバい。何かヤバい。

言葉に出来ないけれど、雰囲気が変わったからとしか言いようがないけれど、しかし、もう一瞬でも隙を与えることは出来ないということとを察するには、十分過ぎるほどの嗤いだった。

「忍!!」

「分かっておるわ!!」

「微刀流・疾風!!」

僕と同じく危険性を感じたのか、忍と日和ちゃんが攻撃した——ここで僕が動いていないのが、なんとも情けない限りであったけれど——。

忍の爪が左から襲い。

日和ちゃんの刀が右から襲う。

しかしそれらが織崎ちゃんに届くより、ほんの少しだけ速く——

『悪刀七実』——【勝紅草】!!」

織崎ちゃんがそう叫んだ瞬間、視界が真っ白に染まった。

[018]

暫く思考停止してしまった——だが、暫くして、光に目が慣れてき

たところで、その光の正体が分かった。

電気だ。織崎ちゃんの胸に刺さったくないから、その尋常ではない光は放たれていた。光というか、電光というか。

そう、電気——先程までとは比べ物にならない量の電気がくなくから発せられているではないか。雷撃は四方八方に閃き、触れたものを容赦なく焼き焦がした。

「っ——!?!」

「きゃっ?!」

触れたもの——それには忍と日和ちゃんも含まれていた。日和ちゃんは斬りかかったところで即座に手を止め、後方へジャンプし回避した——服が焼け焦げたが——そして忍も即座にマントを盾代わりにして離脱、マントは言うまでもなく散り散りに燃え去った。

「お、お前!」

「ffffffffffふふふふふふ!!! mmmももう快進撃はここまでですわわわよ!!! gggggggg——さあ、さあ、さあ、掛かってきななななさいまし!!! wwwww私に触触触られるのであれば!!! 来るがいいですわ!!!」

「っ——!?!」

所々呂律が回っていない不明瞭な、しかし狂ったような大声で織崎ちゃんは言った。

狂ったようなというか、狂っているとしかもう思えない——明らかにあれ、あいつ自身もダメージを受けている。しかも結構易からぬものを。

そこまでするか。

ここまでするか。

「お、おい! もうよせ! 見ているこっちが辛い!」

「sssss知りませんわよ貴方のののの感想なんて!!! 安心なさいmmまし、私が死ぬことは決してない!!! nnnnn何故ならばこの刀こそ、使用者の生命力力を活性化させ、無理矢理無理矢理にで??生き延びさせる、最も尤も凶悪な刀なななな——”悪刀『鏢』!!!”」

「悪刀——」

あれが、あのくないが、悪刀だと。

くないなのに刀とは——いやまあ機械人形よりはよっぽど刀っぽいからまあまあ良しとするにしても、あれが、織崎ちゃんさえよく知らなかった凶悪なる刀か。

使用者の生命力を活性化させ、無理矢理にでも生き延びさせる——  
どういうからくりだ？ 電気で肉体に刺激か何かを与えているのだろうか？ その辺りの医学知識には疎いので、それくらいしか思い浮かばないが。

その性質は確かに”悪”だ。つまりそれは不死身と呼べる存在になることであり、不死身ということは、死にたくても死ねないということでもある。

どんな苦痛を味わおうとも、どんな責め苦を受けようとも、決して死ぬことが許されない——それは地獄以外の何物でもないだろう。死んでは生き返る、生き返らせられる、地獄。

春休み、嫌という程味わった。

成る程、確かに凶悪である。凶悪極まりない。悪刀というその銘に相応しい性質と言えるだろう。

「さて……どうする、お前様よ」

忍が言った。

「このままでは攻撃もままならんぞ」

「……あいつが自滅するまで待つってのは」

「それはそれでアリかもしれませんが」

日和ちゃんが言った。

「あたいはあいつの<sup>悪</sup>刀のことをよく知りませんが、あいつが持っている雷の量には、きつと限りがある筈です。改竄……というか、改悪されていなければの話ですけれども」

「改悪……」

雷を有する刀というだけでも結構なオカルトではあるが、しかしあくまで人の作ったものであるから、必ず限界は存在する筈なのである。

しかし今、あの刀は怪異として現れている。ならばその限界が取り

払われている可能性も、少なからず存在するのだ。

常識と異なるからこそ、怪異。

「FFFFFFFFFFFF!! 何なら試してみます? m m a まあ、この雷が尽き月るまで、?????方生きられるわ訳ないのですけれどね!!! おほほほhhhhhh!!」

「っ……………」

痛々しい。

とても直視出来ない——目をギラギラと煌めかせながら痙攣し、尚も強気で僕たちを殺そうとする彼女が、あまりにも哀れに見えてくる。

そんなに殺したいか。

僕たちを。

「さあ、さあ、近付いて来い!!! 死ににににに来い!!! k k k k k k っ、来ないなら——k k k こちらから、行??ますわよ!!!」

「っ!!!」

織崎ちゃんが狂って叫ぶ。僕たちは思わず身構えた——だが、それは大きな間違いだった。

僕たちは、織崎ちゃんがこちらへ走ってくると思ってしまったのだ。先程の台詞から、雷を纏った突進か何かをしてくるのだと勘違いしてしまったのだ。

”行く”をそのままの意味として捉えてしまったのである——”

行く”は”来る”ではなかった。

”攻撃する”というだけの意味——もつと言えば、”行く”というより”行かせる”が正解だった。

「FFFFFFFFFFFF!!! FFFFFFFFFFFFF!!! 双刀『鎚』限定奥義・双刀之狂犬!!!」

織崎ちゃんは痙攣しながら、指から糸を放って空中に吊り下げられた双刀を回収、すると共に、刀が手元に戻ってきた瞬間、織崎ちゃんはある方向を向き、空高く双刀を放り投げた。

……………何だと?

「何やっとなるのじゃ、あやつは? 遂に雷にやられたか」

忍が言った。

「そうだとすれば、案外早く限界が来たようじゃのう——かつ、何じゃ、所詮は見掛け倒しか」

悪刀はあくまでも生命力を活性化させる刀。しかしそれは（多分）通常使用した場合の話であり、このレベルのオーバードーズをしてしまった場合、そもそも体がその雷に保つかどうか分からないのである。

事実、織崎ちゃんは今悪刀の影響でボロボロではないか——脳に何らかの悪影響が及んでいても何らおかしくは……

「——っ!!」

と、その時である。日和ちゃんが突如、先程双刀が投合された方向へと走り出したではないか。

「ど、どうした!?!」

「そんな——そんなまさか——っ!!」

「お、おい!?!」

「FFFFFFFFFFFFFFFF!!」

走り出した日和ちゃんを追って、僕と忍も駆け出した。だが、そんな日和ちゃんの前に電撃を撒き散らしながら織崎ちゃんが立ち塞がる。日和ちゃんは足を止めた。

「あ、あなた——あなた——」

「WWW私の目論見にn気付くのノ之乃が遅過ぎましたわね、神崎日和——FFFFFFFF」

日和ちゃんの手はわなわなと震えていた。

織崎ちゃんが嗤う。

「目論見……?」

僕はクエスチョンマーク混じりに呟いた。

答えはしつかりと返ってきたのだけれど、しかしこれに関しては答えなんて必要ななかった。答えを聞く前に、誰よりも一番に、僕が気付くべきことだった。

あの場所に、他の誰よりも足繁く通った、この僕こそが——。

「HH八九寺真?の住まう社・北白蛇神社——FFFFFFFF、今頃はきは

きつとt t t t t空高くから降ってきた石のかたまりたまりまりり  
によつて、また崩壊???)かもしれませんわね。 F F F F F F F F F F!!」

「019」

「よくも、八九寺お姉ちゃんのお社を——!!!」

織崎ちゃんから直に答えを教えられ、自分の勘が的中してしまつて  
いたことを否応なしに知つてしまった日和ちゃんは、僕より先に激昂  
した。

眩い雷を纏う織崎ちゃんに向かって、二本の刀をプロペラのように  
回転させながら突進した——プロペラは閃く雷撃をある程度弾くこ  
とが出来ていた。その様子は宛ら土中を掘り進む掘削機のようにあ  
り、そして見事、織崎ちゃんのすぐ近くまで接近することに成功した。

「微風刀風【神風】——」

「虚刀流最終奥義・七花八裂【改】!!!」

「——ぐぎやあつ!!!」

だが結果として、近付けただけだった——日和ちゃんは微刀流奥義  
を放とうとするも、それより織崎ちゃんの方が僅かに早かった。

虚刀流最終奥義・七花八裂——虚刀流奥義と呼ばれる七つの技を連  
続して繰り出す技で、それを食らつた相手は——名前通り八つ裂きと  
はいかないけれど、それに近い状態にまで身体を破壊される。実際に  
食らつた僕が言うのだから間違いない。

そして今現実として、その光景が目映っているのだから、間違い  
ようがなかった——間違いであつてほしかった。

「ぐっ、うげっ、ぎっ——いい——」

「っ——!!!」

宙を舞う日和ちゃん——その体は腰辺りから上の上半身、下半身に  
分かれ、さらに左腕が引き千切られていた。

——随分と長い間、僕はそれを見つめているような感覚に襲われ  
た。ただ衝撃で時間が鈍化しているだけだけれど、それは本当に味  
わつたことのないような経験だった。



臥煙さんに殺された時は、あれはあくまで走馬灯だったし、吸血鬼ハンター連中や忍との戦いに関しては、動体視力的な問題もあるので今回のこれと同じとは言い難い。

歯車のような形をした肉を飛び散らしながら、結晶が混じる血を撒き散らしながら、日和ちゃんは地面に向かう。

せめて受け止めるくらいは出来なかったのか——僕は情けないことに、そんな悲惨な状況にある日和ちゃんを、ただただ惚けて、突っ立って、見ていることしか出来なかったのである。

だから、日和ちゃんの上半身を受け止めたのは忍だった。ゆっくりと落下する日和ちゃん、よりも速いスピードで落下地点へと走ると、彼女の上半身を受け止めたのであった。

当然、受け止められなかった左腕と下半身は無残にもぐちやりと地面に落下した。そしてそれを契機に、時間が加速し出したのである。

「っ——ひ、日和ちゃんっ!!!」

だから、遅えよ——そうツツコみたくなるけれど、しかしそんなツツコミを入れる資格も、入れられる資格も、僕には無いのだった。

「ぐえっ、がっ、ごぼぼ——うぐえっ」

「っ!!」

遅まきながら、僕は日和ちゃんに駆け寄った。日和ちゃんの口からは血が止めどなく溢れ、血で口の中が一杯なのだろう、まともに喋ることさえ出来なくなっていた。

「ぼ、僕の血で——な、治るだろ?!」

そう思った僕は迷いなく、同じく左腕を『心渡』で切断した。左腕があつた場所からは血が噴き出し、地面と日和ちゃんを濡らした。

吸血鬼の血には、他者の傷を癒す力がある。吸血鬼もどきの僕の血が果たしてどこまで通用するかは分からないけれど、しかし吸血鬼度はギリギリまで上げている。きっと効果はある筈だ。

ある筈なんだ。

ある筈、なのに。

「お前様」

「な、な、なん、なんで」

「……………」

忍が首を振った。

「なんで、治らないんだよ」

そう、傷は全く治らなかつた。

勿論、失われた下半身までもが復活する、なんてそこまでの効果は希望していたものの、期待はしていなかつた。僕としては精々、傷口が元通りに塞がる程度に治すことが出来れば、万々歳だった。

でも、そんな低い志さえ、達成出来なかつた。

全く、何の効果もなかつた——日和ちゃんの身体中に刻まれた傷が、一つ足りとも消滅しなかつた。塞がらなかつた。

忍が言う。

「吸血鬼の血は、血の成分がある程度同じ相手でなければ機能せん。同属は言うまでもないが、人間にも効果があるのは、吸血鬼と人間は同じような血を持っているからじゃ」

「…………お、同じよう、な」

「言うなれば、輸血と同じ原理じゃな。まあ僕は医学に関してはからつきしじゃが……輸血する血は同じ血液型のものでなければならぬという話を聞いたことがある。それと同じじゃよ」

吸血鬼は人間の血を吸って生きる。それはつまり、人間の血と吸血鬼の血は、何らかの形で波長が合うということに他ならないのである。だから、吸血鬼の血は人間に作用する。

しかし、日和ちゃんは人間ではない。”人間らしき”に主眼の置かれた怪異——刀である。

微刀『釵』。

機械人形である彼女は、そもその話体内を巡る血はない。今こうして流れ出ている血は、あくまでも血を模したもの——人間を模したものでしかない。そしてそれはガワだけであり、その実態はまるで違う要素で構成されているのだろう。

だから、人間の血とは違うから、吸血鬼の血は日和ちゃんに対し、何の影響も及ぼさないということか。

マジかよ。

嘘だろ。

「嘘だろ……」

「嘘ではない……事実、回復しておらんじやろうが」

「……………」

忍は冷静な面持ちで言う。その声も冷淡そのものだ。

「な、な、なら、し、忍。お前の血は」

「無理じゃよ。こればかりは儂にも出来ぬ——チートチートと言われる儂ではあるが、こうして出来ぬこともあるのじゃよ」

皮肉のように、吐き捨てるように、忍は言った。

日和ちゃんの体には、無数の傷が付いていた。あちこちが歪に変形し、服もビリビリに破け、もう普通に胸が露出していたりするのだけれど、金属光沢のある肋骨が見えたり歯車みたいなものが漏れ出したりして、そんなことを気にしている余裕もなかった。

少し前までは笑顔を浮かべていた顔も、ズタズタに引き裂かれていた。後頭部から眉間に向かって深い傷痕があり、そこからは止めどなく血が溢れ出ている。思わず僕は日和ちゃんの顔に触れた——が、その瞬間、日和ちゃんの作り物めいた片目がポロリと落下し、地面を転がった。

織崎ちゃんは、絶望と言っていた。

これか。

こんなものを思い浮かべて、あいつは、噛っていたのか。

「……………」

「……………」

僕は派手な光を放つ織崎ちゃんの方を向いた。

「FFFFFFFFF!!! FFFFFFFF!!! あーあ残念んです話ワ  
わねえ、阿良々木暦!!! 神崎日和!!! FFFFFFFF、私を甘く見るか  
ら、こういうことになっとなっとなってしまうのですわよ？ おほ  
ほ、おほ、ほ、ほほほ、ほほほほhhhhhh!!!」

「……………」

「……………」

僕は『心渡』を構えた。それと同時に、忍は日和ちゃんをゆつくりと地面に降ろし——そして自身も体内から、『心渡』を取り出した。

恐らくそれは、今僕が持つているような複製品ではない。死屍累生死郎の鎧から作り出された、真正正銘、本物の妖刀『心渡』。

「……………」

「……………」

最早、僕と忍の間には言葉さえ要らなかった。ペアリングされていることによつて、僕の考えていることは忍にダイレクトに伝わるから——というのもあるだろうけれど、恐らく、僕と忍の気持ちが一致したという要因が大きいに違いない。

”織崎記を八つ裂きにする”——!!

僕と忍は全く同じタイミングで駆け出した。走るスピードは忍の方が速かったというのは、言うまでもないだろうけれど、きっと僕のスピードもかなりのものだったと思う——吸血鬼補正抜きにしても。具体的には、八九寺に背後から襲い掛かる時レベルのスピードに匹敵しかねないほどであつたと思う。

走りながら、忍は左手で刀を構え、右手の爪を虎のように鋭く尖らせた。

一方の僕は両手で刀を構えるくらいであつた。しかもいまいち様になつていないような、不恰好な姿で。

織崎ちゃんは舐め腐った笑みを浮かべながらガクガクと痙攣している——さつきまではその姿に同情心さえ芽生え掛けたけれど、今は全くそんな気持ちはなかった。

ただひたすらに、馬鹿にされているとしか思えなかった。舐められているとしか思えなかった。余裕ぶっているようにしか見えなかった。

電撃が僕たちを襲う——が、その電撃は僕の前方を走る忍が振るう怪異殺しによつて次々と切り裂かれ、消滅していった。

あくまでも怪異殺しが切れないのは、完成形変体刀本体のみ。電撃は刀から放たれる副産物的な怪異現象でしかない。よつて、怪異殺しは正常に作用する。

雷撃を無効化しながら走る忍と僕——その時、織崎ちゃんが体を捻るような姿勢をとった。

来る！

「k y k y k y 虚刀流最終奥義・七花八裂【応用編】——」

だが、その技はもう既に見切っていた。最初に放たれるのは、体を捻り相手に拳を突き出す技・柳緑花紅。だがこの技は直線的な攻撃であり、左右に分かれた上で、更に跳躍してしまえば当たらないのであった。

応用編とやらがどんな技かは知らないが、一撃で沈めてやる、織崎

記——！！

「——と見せかk k k k けて真庭に忍法・足軽&虚刀流・杜若！！！」

「何じやと!?!」

「なっ!?!」

僕たちは揃いも揃って、そんな情けない声を出してしまった——全くお笑いである。いくら気持ちが一致しているからといって、知能レベルまで一致しているのは如何なものだろうか。

完全に騙された——フェイントを掛けられた。

織崎ちゃんは僕たちから逃げるように、凄まじいスピードで駆け出した——その際にまたもや電撃が放たれたが、危うく忍が再度作り出したマントで防御した。

僕たちは織崎ちゃんを視界にとらえた——が、僕は絶句した。

織崎ちゃんが走り出した先、そこに居たのは、横たわっていたのは、日和ちゃんだったのだから。

情けないにも、程がある。

まだ痛み付けようというのか。

「やめろ!!! てめえ——」

「g g g g g g 安心下さp s i いまし!!! 私はもう手を下すつもりはg ございませんの!!! F F F F ふ、私はただこいつに近付いて、一言言っただけ——」

「っ!!!」

まだ僕たちは地に足を着けていない。攻撃がス力振りして不恰好

に宙に浮いているだけ。

だが、そんな状況で、忍は何かを察したのか、目を見開いて言葉になつていないような叫びをあげた。

ただ一言言つてやるだけ？

ただ一言？

「神崎日和——否、微刀『釵』」

白く光る織崎ちゃんが、先程までとは違う明瞭な声で言った。

「はあっ——ぐっ、げあ——」

「貴女の怪異として与えられた役割は——果たして何だったかしらね？」

呻く日和ちゃん。

そして、僕は漸くここで気付いた——遅ればせながらも程があるけれど、手遅れにも程があるけれど。

待て。

待つてくれよ。

おい。

おいおいおいおいおい。

待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て待て——

「貴女——阿良々木暦を殺すことが存在理由の怪異、ではありませんでしたっけ？」

「やめろおおおおおおおおおつ!!!」

多分、この時の僕は、本当に頭の中が真っ白だったのだと思う。いや、或いは、真っ黒に塗りつぶされていたのだと思う。

真っ黒い、真っ暗い、暗闇のように。

『くらやみ』のように。

織崎ちゃんが、日和ちゃん存在理由を述べた、その瞬間。

織崎ちゃんと日和ちゃんの頭上に『くらやみ』が生じた。

黒。圧倒的な黒——世界の法則にして、修正者。間違いを正す者。

『くらやみ』。

微刀『釵』——神崎日和は、本来僕たちを殺すために生まれた怪異だった。実際、それを遂行するために彼女と僕は戦った。

そしてその結果、彼女は僕を殺すのではなく、守ることを選んだ——選んでしまった。

それは誤りの選択肢だった。

性質、或いは存在理由と間違った行動をとる怪異には天罰が下る。その執行者が『くらやみ』なのである。

神崎日和は僕を守る怪異になった——それは、世界の法則から見れば、許されることではなかったのである。

そして今、それをこうして指摘されたことにより、その間違いが露呈した。

間違いを正す。

『くらやみ』は、そのまま垂直に落下した。いや、落下したという表現はおかしい。なぜなら『くらやみ』は、そもそもそこに存在していないのだから。

落下するための質量など持っていない。

移動した——日和ちゃんと織崎ちゃんの方へと。

「ふふふふふ!!」

織崎ちゃんは『くらやみ』を後方回転によって避けた——が、日和ちゃんはお分かりの通り、動けない。

なすすべもなく。

『くらやみ』が、日和ちゃんの上半身を呑み込んだ。

しかしそれだけでは飽き足らず、『くらやみ』は更に織崎ちゃんへ向かって移動した——てっきり織崎ちゃんを呑もうとしたのかと思っただけで、そうではなく、目的は織崎ちゃんの後ろにあるものだった。

日和ちゃんの下半身。

織崎ちゃんは嗤いながら側転回避。『くらやみ』が通り過ぎた。そして通り過ぎた後には、日和ちゃんの下半身は残っていなかった。

だが、まだ残っている——『くらやみ』はまたもや方向転換、織崎ちゃんの方へと向かう。もういつそのこと織崎ちゃんも呑み込んで欲しい——という気持ちを嘲笑うかのよう、というか実際嘲笑いながら、また織崎ちゃんは回避、『くらやみ』は日和ちゃんの左腕を呑み込み、そして暫く血や歯車の付着した地面を削り取り——何事もな

かったかのように、あっさりと消えた。

その間、僅か五秒にも満たない出来事。

たった五秒足らずで——日和ちゃんがこの世に存在した証が、一つ残らず、消滅してしまっただのであった。

「……………」

僕は遅蒔きながら、唾然とするより先に織崎ちゃんを睨んだ。

織崎ちゃんはギラギラと煌めく目付きで嗤っている。

忍もまた、血も凍るような目付きで睨む。

この面子の中では、僕の睨みはいまいち迫力のないものに思えるかもしれない——なので、僕は思いつきり息を吸って。

心の底から、湧き上がる怒りと憤りと悲しみと哀しみと恨みと怨みを乗せて、叫んだ。

「織崎イイイイイイイイイイイイイイイイイツ!!!」

友達を作ると人間強度が下がるとは、我ながらよく言ったものである。

お陰で人間強度どころか——人間性さえ捨ててもいいと思えてしまったよ。

僕は刀の柄を、思いきり握り締めた。



第肆話 しるしスパイダー 其ノ陸

[020]

「織崎いいいいいつ!!! お前だけは——お前だけはあああああつ!!!」

日和ちゃんが死んだ——殺された。その事実は僕から冷静さを一片も残さず奪い取るのにあまりにも十分過ぎた。

キレてしまった——もう十分だ。ひたぎが重傷を負い、月火が殺され、日和ちゃんが消し去られた。もう、これ以上の犠牲を出す訳にはいかない。もう十分だ。

僕は怒号を上げながら『心渡』を構え、織崎ちゃんに突進した。

『心渡』を構えている、つまりは、織崎ちゃんを斬るつもり満々だった訳だ——一応相手は自分より年下の女子。そんな相手に刀を振り上げ、あまつさえそれで傷付けるなど、紳士にあるまじき行動であることは認めよう。認めるが、それがどうした。向こうは散々好き放題やってくれたのだ、当然傷付けられる、斬られる覚悟くらいあつて然るべきだ。

僕は紳士だけでも、しかしあくまで変態という名の紳士だ。真面目な紳士な訳ねえだろうが。つーかここまでされて尚うじうじと躊躇っているようでは、それこそ真面目な意味でも紳士じゃあないだろう。

ばつかりと。

ぎっくりと。

全身全霊を込めて斬ってやる——と意気込んでいざ走り出したと思つたら、脇腹に鋭い蹴りを食らった。

「げふっ!?!」

織崎ちゃんは確かに僕の前方に居る。なのに横からキックだと? どういうことだ。今までも相当おかしかったが、とうとう気とか超能力とか使い出したのか、と思ひながら僕は吹っ飛ばされた。またもやざりつと肌が削られた。削られすぎだろ僕。山葵じゃねえんだぞ。

「ぐあぁっ」

「落ち着けよお前様」

呻きながらすぐさま起き上がる——今の僕にしてはかなり早い回復速度だ——前に居たのは沈痛な面持ちをした忍だった。その台詞から察するに、僕を蹴つたのは忍らしい。

「落ち着け……似たようなことをやってヒヨリがやられたのをもう忘れたのか、お前様は」

「忍……いや、まあ……覚えてるよ」

覚えてはいた。だが、一瞬完全に怒りに支配されていた僕の頭の中にその記憶はなかった。ただひたすらに、織崎を斬り殺すことしか考えていなかった。

そうだ。日和ちゃんがそもそも動けなくなったのは、織崎に煽られ、怒りに駆られて斬りかかったからだ。あのまま忍に止められず突進していたら、斬り殺すどころか八つ裂きにされていたかもしれないかったのか。

「気持ちには分かる、が、考えて行動せよ。感情に支配されるな。激情に駆られた者が勝てる道理などないぞ」

「……なんかお前らしからぬ言葉だな」

「仕方あるまい。心にもないことを言っておかねば儂とてガチで殺してしまいそうなんじゃあいつ」

「心にもないことって」

「刃の下の心さえ捨て去りたい気分じゃ。ただのブレードになりた  
い」

「キスショット・アセロラオリオン・ブレード？ ……ハートアンダー  
の有り難みが分かるな」

「そうじゃな。スーサイドマスターのネーミングセンスはやはり侮れ  
ぬ」

「スーサイドマスター？」

「忘れろ」

「あっはい」

なんか今、忍に関する非常に重要極まりない情報が出たような気が

したが、忘れろと言われたので取り敢えず追求しない。

「ふふふ——おやおや、さっきまでの怒りはどうしましたの？ もうギヤグパートですよ？ はっ、仲間が消されたというのに雑談とは、能天気な連中ですわねえ。おほほほ！」

もう完全に喋り方が元に戻った織崎。胸元の『鏢』からは先ほどと変わらないレベルの電撃が迸っているのを見る限り、どうやらあの狂ったような喋り方も僕たちの油断を誘うための演技だったらしい。それにまんまと嵌ってしまったから……。

……誤解しないでほしい。僕は日和ちゃんが消されたことを忘れた訳ではない。ここ最近の行動のお陰で僕のことを忘れっぽい奴とお思いなさっている読者も居るだろうけれど、そしてそれを否定される訳でもないけれど、ついさつき起こったようなことを忘れるほど僕の記憶力は残念ではない。

人が一人死んだのだ。

忘れられる訳ねえだろ。これをマジで忘れていたなら、もうそれは僕が若くして認知症になってしまったことに他ならない。こんな戦いさつきと終わらせて病院に直行せねばならなくなる。

勿論、怒りはこれっぽっちも忘れていない。けれど、忍の言う通り、まず僕たちに必要なのはクールダウンすることである。憤怒に頭をやられることは織崎に負けるということを、日和ちゃんが身をもって証明してくれた。日和ちゃんの後追いをしたいのは山々だが、しかしそれをすると日和ちゃんの命が無駄になってしまう。それは日和ちゃんへの不敬に他ならない。

だから喋る——いつも通りのように話して、クールダウンを図ったということである。

「ほらほら、私はまだ生きてますわよ？ ピンピンしてますわよ？

健康優良そのものですわよ？ 仇をとりたくありませんの？ ほらほら、ほらほらほらほらほらほらほらほらほらほら！！！！」

「ちっ……！！」

「お前様、もうあいつ殺したい」

「落ち着けて言ったのお前だろうが……！！」

煽ってくる織崎。普段ならばこの程度の煽りで苛立つような僕たちではない……いや、そんなことないか……僕たち普通に煽り耐性ねえわ。

「闇雲にやったって負けるだけだって——兎に角あいつが疲れ切つて隙を晒すまで待とう！」

「私が疲れ切る？ はっ!!」

鼻で笑う織崎。その反応だけでも怒りで自然発火現象を起こしてしまいそうな気分だ。

「無駄なことを！ 『鏢』がその効力を発揮している限り、私は決して死なないし疲れることもない!! 寧ろジリ貧になって死ぬのはそちらの方ですわよ!!」

「でも、それだけ電気を消費してるんだ、もうじき限界が来るんじゃないか？」

「ああ、成る程——おほほほ!! ああ愚か!! なんて愚かなのでしよう!? ふふふ、まさか静が、『鏢』を現世に復活させるにあたって何も改良——いえ改悪かしら——していないと、本気で思ってたらしやる!？」

「……………」

「そんな訳ないでしょう——怪異と化した『鏢』に、限界なんて存在しませんわ!! こうして突き刺さっている限り、永遠に！ 電気を発し続けるのですわ!!」

「……………」

「どうやら、日和ちゃんの読みは正しかったようだ——悪刀『鏢』に限界はない。保有する電気が尽きることはない。」

つまり、織崎は永遠に、この戦いが終わるまで常にスタミナマックスのパフォーマンスで戦い続けることが出来るということだ——くっそマジか。

『鏢』の電池切れが望めないとなれば、『鏢』でもどうしようもないほどにまで織崎を斬り刻むか、或いは『鏢』を織崎から引っこぬくらしいが無効化する方法がない。

……なんかさつきから斬り殺すとか斬り刻むとか、僕の思考が相当

危ないことになっている。落ち着け落ち着け。ぜんぜん落ち着けてないじゃないか。語り部として適切な言葉遣いを心掛けねば。

『針』は壊された、『鎚』はこの場がない——けれどもまだ『?』と『鍔』がありますわ!! ”千刀巡り”を封じた? それか!!

「!! お前様、来るぞ!!」

「っ! お、おう!!」

「どうした!!」

語り部としての心構えを新たにすると、戦いにおよそ関係ないことを考えていたところ、忍の言葉で戦闘に引き戻された。

織崎は指先から大量の糸を放出し(指一本につき糸一本という訳ではない。二本三本と出している。ふぎけん)、その糸は空中に吊り下げられている『?』に結ばれた。そして織崎が腕を振るうと、刀を吊り下げていた糸がほどけ、新たに結ばれた糸に引つ張られた大量の刀が僕たちに向かって振り下ろされた。

十本どころではない刀の雨——『心渡』で弾いてそれらをガードする。弾かれた刀は吹き飛ばされて地面に突き刺さる。

”千刀巡り”を破った? ああん!! ならこれはどうですの!!”

僕のテンションもそうだが、織崎のテンションもおかしなことになっている。口調が崩れている——冷静さを欠き始めたのか、或いはそれも演出か——なにせよ、攻撃の手を緩める気は一切ないよう

で。吹き飛ばされた刀には糸が繋がっている。その糸の出処は織崎だ。その糸を絡め取ることによって、先程よりは平面的ではあるが、高速移動が可能になった織崎は僕たちの周りをぐるぐると飛び回る——『鏢』から漏れ出す電撃が線を引き、追いかけることもままならない。目で追うのはまだ容易だが、しかし吸血鬼の視力は光に弱い。故にいつも以上に閃光が目眩しになってしまう。

「千刀流——二刀・十文字斬り!!」

「弾け!!」

「おう!!」

高速射出された織崎ちゃんの手に握られていたのは『鍔』と『?』の

うちの一本。両手をクロスさせて繰り出された斬撃——忍の指示通り、僕は『心渡』でそれを弾いた。『?』の方は織崎の手を離れ宙を舞った。

「嗚呼悪いですわ悪いですわ悪いですわ悪いですわ——お前が悪い悪い悪い悪い!!! 真庭忍法・渦刀!!!」

が、刀は糸で結ばれている。腕が振るわれ、弾かれた一本が回転しながら僕の元へ——

「右斜め!!」

「おう!!」

「しやがめ!!」

「ああ!!」

「左、弾け!!」

「くっ!!」

「ジャンプ!!」

「ぐっ……!!」

「かわせ!!」

「具体的に頼む!」

「上! 上! 下! 下! 左! 右! 左! 右!」

「どこのコナミコマンドだよ!」

忍に指示を出されながら苛烈な攻撃を避け、弾いていく。なんだかポケットなモンスターになったような気分だが、かわせでちゃんと反応出来ない所はあれらに劣ると言われても文句は言えない。

「一文字斬り!!」

「くっ!!」

飛んできた刀を『心渡』で弾く。

「渦刀!!」

「っあ!!」

降ってきた刀を『心渡』で弾く。

「虚刀流・雛罌粟!!」

「ひいっ!!」

手刀を避けながら同時に上昇してきた刀を弾く。

「織刀流・剣花両成敗!!」

「ぐぎいつ!!」

両手の刀で斬りつけた後に横一文字に斬る技。片手を犠牲にして防いだ。

「悪刀『鏢』限定奥義・悪刀大砲!!」

「ぐああーっ!!」

刀を一旦捨て、『鏢』から電撃を最大出力で放つ技。モロに食らい、炭化した僕は錐揉み回転しながら吹き飛び、地面に激突。体の半分くらいが炭化と激突の影響で崩れた。

くそっ、強え……防戦一方だ。いや、防戦さえ出来ていない。一方的な虐殺だ。

ぐちやぐちやになった頭（比喻ではない）で僕は考える——さつき見た攻撃について、働きが鈍い頭で考察する。

さつき食らった攻撃の中に、隙をつけそうな攻撃はあったか、封じれそうな攻撃はあったか——記憶が曖昧なのは炭化の影響であって、障害とかではない筈だ。

「大丈夫か」

忍の声が聞こえた。と思うと、体が濡れる感触があった。忍の血だ。一応このまま放っておいても自力で回復するが、それだと遅いと判断しての行動だろう。

身体中の感覚が蘇るのを感じた。見た目的には黒い人型の焦げた物体に徐々に色が付いていくという、気味の悪いものであろう。

「だ、大丈夫だ……なんとか」

「じゃあさつきと立て。休んでる暇などないぞ！」

「人使い荒いなあー！」

全身に力を込めて起き上がる。すると確かに休む暇のないことが分かった——僕たちの周囲を閃光が走っている。復活したてなので目が慣れない。閃光が僕の方へ突進してくるのは分かったが、ちゃんと距離感が測れない。

「ええい、しゃんとしろ!!」

「うぐっ！」





僕は日和ちゃんのことを思い出しながら、忍の背後にそうつと歩いていく。思い出しているといつても、ノスタルジイに浸っている訳ではない。浸るならこの戦いが終わってからということくらい、いくら僕でも弁えている。

思い出しているのは、日和ちゃんの攻撃方法だ。絶刀『鉋』を用いた攻撃——限定奥義・報復絶刀。これであいつを倒す。

確か、『鉋』を突き出して、斬るのではなく刺す攻撃——直刀である『鉋』ならではの技。

僕は静かに構えた。とは言っても所詮日和ちゃんの見様見真似だ——見るだけでマスター出来れば良いのだが、流石にそんなこと一介の男子に出来ない。そんなことを出来るようになるには無人島か何かに放り出される、みたいな過酷な環境にまで追い込まなければ不可能だろう。

ポジショニングは、ここでいいか——忍の真後ろ。

このまま忍が織崎を倒してくれば、それで万々歳なのだが、しかしそうもいくまい。”あの攻撃”——僕を焼き焦がした”悪刀大砲”とやらがある。幾ら忍とはいえ、基本的に吸血鬼の回復力抜きのパワーはそんなに強くない。ドラマツルギーのように筋骨隆々な奴だと話は別だろうが、忍は見た目華奢なお嬢様だ。耐久力は人間である僕と変わらないか、或いはそれより少し上か——それくらいだ。

”悪刀大砲”が放たれば、忍もまた焼かれることは間違いない。だが——そうなった時こそ、チャンスだ。

忍にはあまりにも悪すぎるし、血も涙もない作戦ではあるが、しかしこの戦いに勝つためなら、きつと忍も許してくれる筈だ。ドーナツ五十個で許してくればめっけもんである。

いつだ——いつ来る——くそつ、思い付いた方がいいが、タイミングが分からない！

滑稽なもんだ。眼の前では血で血を洗うような戦いが繰り広げられているというのに、僕は身動き一つ取れない、なんて。

そんな自虐的なことを考えていると、突然その時がやって来た。

「死ね、忍野忍!! 悪刀大砲!!!」

「くっ——!!!」

一際大きくなった光が忍を貫く。身体のあちこちが黒く染まり、そこから閃光が迸る——忍の胴体が炭化する。

その瞬間を逃さず、僕は慌てつつもそのまま刀を突き出した——忍の体を貫くようにして。

「——なっ!!?」

織崎の驚愕の声が聞こえた。そりゃあ、向こうからしてみれば突然忍の胴体から刀が生えてきたように見えるだろうし、何より味方ごと貫くなんてこと、考えつかないと思っていたのだろう。

だが、残念だったな織崎。

こちらとら日和ちゃんが消し去られたその瞬間から、人間性を捨てる覚悟くらい出来てんだよ!!

「絶刀『鉋』 限定奥義・報復絶刀!!」

叫ぶように言い放ち、僕は刀を押し込んだ——忍の次に刀に触れたのは、織崎ではない。

織崎の身体に突き刺さる、悪刀『鏢』だ。

悪刀『鏢』がその効力を発揮している限り、僕たちに勝機はない。かといって簡単に抜くのは不可能だ。

じゃあ逆に考えればいい。

引いて駄目なら押ししてみる——押し込んで、押し込み切り、突き落とせばいい。

僕は力任せに刀を押し込んだ——その所為で忍の体が崩れたが、幸いにも電撃は途中で中断されたので、僕よりダメージは少なく済んだようだ。というか、全身大火傷を負ってはいるものの、肩から上は殆ど無傷に等しい。

『鏢』の柄が織崎の身体にめり込んだ。そして『鉋』の刀身を使って、さらに押し込む——!!

「ぐがっ——!!?」

「おらあっ!!!」

更に勢いを込めて、深くまで押し込み——そして遂に、電撃が止まった。

カラン、という音が聞こえた——それは、悪刀『鏢』が無効化されたことを想像するに容易かった。

「021」

僕は刀を引っこ抜き、『鉋』を振って血を払った。

「——あ」

さっきまで『鏢』が刺さっていた場所には大穴が開いていた。雷の影響か、その穴は『鏢』の幅よりも明らかに大きい。流れ出す血の所為で向こう側は見えない。

織崎がそれを見て驚愕に目を見開き、小さく呻いた。唇から鮮血が漏れ出す。

——拍置いて。

「ぐぎやあああああああああああああああああああああああああああ  
あああああつ!!!」

織崎の悲痛な悲鳴とともに、胸から血がどばつと噴き出した。慌てて飛びのいたものの、服や顔に噴き出した血がふりかかり、どす黒く染まった。

「いやあああああああああああああああああつ?!?!?!? い、痛い痛い  
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い  
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い  
あああああああつ!!!」

胸元を抑え、聞いたこともないような声（あくまでこいつから聞いたことない声だ。これくらいならそもそも僕自身何回も発したことがある）で叫びながら、血の海の中に仰向けに倒れこんだ。噴き出し漏れ出す血は全く止まらず、倒れこんだ所為で赤い噴水のように見える。

「ちっ……なんじゃいお前様……儂を利用したな」

復活した忍が言う。早えよ復活。

「あー……わ、悪かったよ。でもさ、ほら、勝つためだし、大目に見て

欲しいなー、って」

「勝てばよかろうなのだ理論で許してもらえと思うな!! 儂を誰じゃと思っておる!? ドーナツ五十個程度では許さんぞ!!」

「くそっ! 読みが甘かった!」

ドーナツで許してくれそうなのは間違いなさそうだが、どうやら五十個では少なく見積もり過ぎたらしい。辛い。財布が辛い。財布一つか債務がどんどん溜まっていく。

「痛い——痛い——た、助けて——助けて——」

広がり続ける血の海の中、織崎は譫言めいて息も絶え絶えに呟く。

「ああん? 助けてじゃと? かかつ、虫が良いにも程があるぞ、うぬ」

忍が言い放った。

「ここまで散々危害を加えてきたのじゃからな、当然、自分が死ぬ覚悟くらい出来ておろう」

「嫌だ——嫌だ嫌だ——ご、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい——」

「命乞いとは……情けないの」

「あ、謝りますわ——謝りますから、た、た、助けて——」

「気を許すなよお前様。どうせ演技じゃよ演技」

「ああ、分かってるよ……それに」

僕は刀を構えた。

「どっちにしろ……許す気なんてないさ」

「いぎやあつ!!」

『鉋』を織崎の左腕の付け根に刺した。

忍がそれを見て凄惨な笑いを上げる。

「かかつ! このまま放つとしてもじき出血多量で死ぬというのに、まだ攻撃を加えるか! 流石鬼畜じゃのう。冷血の称号くらいは譲ってやろうか?」

「いらねえよ、そんな称号……」

僕は苦しみ呻く織崎を見下ろした。もがき苦しむ織崎——それを見て、憐憫の感情は全く湧いてこなかった。ただただ、仄暗い感情

しか湧いてこなかった。

「うぐっ……えぐっ……ごっつ、ごめんっ、なさいっ……」

こんな風に涙を流している織崎を見ても、全く同情する気にならなかった。なれる訳がない。こいつにはもう、哀れむ余地なんてこれっぽっちもない。恋人、妹、友達、幼女のフルコース。ここまでやって今更命乞いとか、ふざけるなという話である。

「……ひくっ……」

命乞いはもう無駄と分かったのか、しゃくる声しか発しない。僕と忍は何も喋らず、その様子をただ眺めていた。

今の僕たちを冷酷だと思う方は多いだろう。というか大半がそんな意見であると思受けられる。僕たち——少なくとも僕はそんな意見も肃々と受け止める気だけれど、彼女を許す気はない。

ないったらない。

扇ちゃんの時とは訳が違う——あいつの本命の標的はあくまで僕だったけれど、こいつはその扇ちゃん含む全員が本命の標的だ。野放しには出来ない。

もしここで僕がこいつを許してしまえば、ここまで追い詰めた努力が水の泡になる。開放された織崎は間違いなく反撃してくるだろう。今の無防備な状態でそれをされたら、今度こそ終わりなのだ。

もつとも、そんな体力が今の織崎にあるのかという話だが……。

「……」

もはやしゃくる気力さえなくなったのか、呻き声一つ上げなくなった。この出血量だ、じきに事切れるだろう。

……はあ。

あのエピソードにも、ギロチンカッターにさえもやらなかったことを、とうとうやってしまったのか。あの忍野に静止されたつてのに——人殺しになってしまった。

改めて冷静になって考えてみると、結局、人殺しという点では僕たちは同じ穴の貉だったのだ。織崎は日和ちゃんを、忍はギロチンカッターを、そして僕は織崎を——。

どうしようか。

多分、この件に関しては臥煙さん辺りが揉み消してくれる可能性が高い。恐らく僕も罪に追われることはないだろう。或いは、最小限にまで刑罰が抑えられるか。

けれど、それでいいのだろうか……。

「……まあ何にせよ……帰ったらまず、自首しねえとな」

というか、家に帰るという行為自体が自首と言っても過言ではない。何せ僕の両親は警察官だ。わざわざ交番にまで行く必要もなく、ただ両親が帰ってくるのを待っているだけで自首は成立する。

「暫く迷惑掛けると思うけど、まあ、悪いな忍」

「いや待てよ。何普通に自首の流れになつとるんじや。揉み消してくれるならもうそれで良いじやろうが。正当防衛じや正当防衛。証拠はそこら中に残っておるのじやから、普通に素知らぬ顔で日常を過ごせよ」

「お前、ミジンコメンタルの僕にそんなこと出来ると思ってたのか？」

「ミジンコを例えに使うな。ミジンコが可哀想じやろうが」

「そうだよ、ミジンコでさえもつとメンタル強い、っておい。流石にミジンコより下つてことはねえだろうよ」

「まああの辺の生物にメンタルなんて概念があるのかどうかはまず問題じゃよな」

「メンタルつつか、本能だよな、ああいう生き物つて……」

僕は織崎の傍に転がる刀を拾った。『?』のうちの一本だ。

「さて——今後の身の振り方は……まあ帰りながら考えるとして、後片付けだ、忍。この千本、どうにかしてくれ」

「いや無理じやろ。どんな無理難題じや。儂にどうしろと言うんじやうぬは」

「身体の中に仕舞うとか、そんなかんじで」

「儂の体内を四次元ポケット扱いするでないわ！ 一本ならまだしも、千本ってなんじやい！ まだ針千本の方がよっぽどマシじや！」

「お前なら出来るよのぶえもん」

「その一言だけで済まそうとするなボケ」

うーん、無理か。

まあ十中八九無理だろうと思っていたけれど、そこは常識外れな吸血鬼パワーでどうにかしてくれるのかとちよつとだけ期待したけれど、まあ、流石にな。

「しかし織崎の奴、どうやってこれだけの量を運搬したんだろうな?」「さあ。あのでかい怪異の中に収納して運ばせたのではないか?」「いや目立ち過ぎだろ」

「或いは、元々空にぶら下げていたか、じゃな。こやつのは『鎧』の一件辺りから張り巡らされておつたらしいし、儂らが気付いておらんかっただけで、実はずつとそこにあつたのかも」

「それはそれでかなり目立つと思うけれど……そんなところ、なのかな?」

僕は針山ならぬ剣山を見てうんざりした気持ちになった。これ本当どうしようか……。

「お前様よ。折角斬刀とやらが残っておるのじゃし、もうそれで一本残らず斬ってしまえばどうじゃ? そうすれば運搬の必要も何もあるまい」

「んー……いや、何というか、一応これ怪異な訳だし、もしかしたら専門家の人にとっては研究対象になったりするのかな、と思つてな。出来るだけそのままにして蒐集した方がいいのかな、って」

ましてやこれらの刀は、あらゆる怪異を斬り屠る妖刀『心渡』でも斬ることの出来ない”新種”。専門家たちがどういうものを求めるのか、どういうタイプの人が居るのかは知らないけれど、こういう新種の怪異に興味を抱くような奴が居てもおかしくないだろう。正弦とか、そんな奴っぽい。

「わざわざ恩を売る必要なんてあるのか? どうせもう儂ら無害認定食らってるんじゃないし、別に胡麻をする必要もないと思うのじゃが」

「いやほら、それで何とか斧乃木ちゃんを罰? みたいなものを軽く出来ないかな、と」

「けっ!」

斧乃木ちゃんの名前を出した途端露骨に機嫌が悪くなった忍さん。『けっ!』て。今時そんな苛立ち方する奴いねえよ。

「今回の件で一番働いてくれたのって、多分斧乃木ちゃんだぜ？　と  
いうか、現在進行形で働いてくれてるだろうし」

「……まあな」

渋々というふうな忍さん。

「つーか、そうだ。斧乃木ちゃんだ。今頃斧乃木ちゃんは炎の怪異？  
と戦ってるんだろうか。危ない危ない、こんなところで雑談してる  
暇はなかった。早く撤収して、加勢しなければ。」

僕は織崎の近くに転がるもう一振りの刀を手にとった。血に塗れ  
た毒刀『鍍』。

「……………」

今まで結構な頻度で織崎が使ってきた刀だが——思い入れでも  
あったのだろうか。確かに、比較的シンプルながらも細かい装飾がな  
されている。ゴージャス好きなこいつの事だから、気に入っていたの  
かも。

「……………」

んー。

僕は『鍍』をまじまじと見た。なんというか、言葉にはし辛い妙な  
雰囲気醸し出している刀だ。オーラとでも言うのか——。

……………。

「……………」

「……………おい、どうしたお前様」

「……………やっぱ、もう一回刺しといた方がいいかな」

「あん？」

僕は『鍍』を握った。何だか目の前に靄が掛かったような気がする  
が、気の所為だろう。

「おいおいマジかよお前様……ぱないの。流石の儂もドン引きじゃ  
ぞ。死体蹴りどころか死体斬りを敢行しようというのか」

「いやだってほら、まだピクピク動いてるぜ。どうせ死ぬだろうけど、  
確実に息の根を止めないと、こいつなら復活してきかねない」

「……………お前様がそれでいいなら、別に止めはせんが」

「ん」



僕は刃を下に向け、大きく振り上げた——狙うは心臓。確実に突き刺して殺す。

気に入っている刀で止めをさされるのだから、こいつとしても本望だろう——せめてもの優しさだ、受け取りやがれ。

「じゃあな、織崎記」

僕は刀を振り下ろした。

「022」

「っ——!!?」

『鍍』の刃は、確かに織崎の心臓を貫いた。確かな感触があった——だがしかし、『鍍』を織崎に刺した途端、傷口から禍々しい、黒と紫が混じったような色の液体が噴き出してきたではないか。

慌てて僕は刀を手放し、飛びのいた。

「な、なんだ!? 何が起こった!?!」

「ちっ！ 余計なことをしておっぺお前様！ 何柄にもなく冷血漢気取つとるんじや馬鹿もんが!!」

「れ、冷血漢なんて気取った覚えは——」

あれ、そう言えばなんで僕はこいつをまた刺したんだ？ いや、さつきだけじゃあない、そもそも左腕を刺したのも……どうしてだっけ——？

いよいよ記憶障害が始まったか、と思っただけれど、今は僕の身体異常なんてどうでもよくて、問題は織崎の異常だ。

「ぐぎやががごごごがががごごぎぎぎぎやぎやぐゆげげごごよぎゆぎやぐぐぐぎぎぎぎ!!?!」

手足をばたつかせながら悶え苦しむ織崎。痛みによって再び意識が戻ったのか——断末魔の叫びか。

黒紫の液体は瞬く間に地面の赤を塗り潰し、織崎自体さえも塗り潰した。最早最初の方の姿の面影もない。

「し、しぎやぎ、しぎぎぎ、し、しぎや——しぎやぎ、しぎやぎ、しぎ、しぎ、シキザキ——」





「随分こっぴどくやられたようだねえ、ご主人……」猛毒刀与」まで使っちゃって、もうギリギリってどこかい？ 死の瀬戸際だねえ」

「しきざき、しき、しきざききき四季崎、しき、しきざ、記紀き……！」  
「んふふ……まあ命があるだけマシかね？ まだ死んでもらっちゃあ困るよ、ご主人……あなたにはまだ働いてもらわなくっちゃあねえ」  
働いてもらわなくちゃあ、って……どういことだ？ こいつは織崎の従者——言ってしまうえば、使い魔みたいな奴ではなかったのか？  
立場が逆転しているように思えるのだが——。

「んん？ 不思議そうな顔してどうしたんだい阿良々木。わちきの顔に何かついてるかい？」

「……どうい事だ、淡海静」

「何が？」

「お前は、織崎の使い魔か何かじゃなかったのかよ。つーか、どうい立場なんだお前は」

「立場なんてどうでもいいだろう？ わちきが使い魔だとか従者だとか、そんなことはくだらない、どうでもいいことさ」

「っ……てめえ」

「鬼いちゃん。こいつとは何喋っても無駄だよ」

「斧乃木ちゃん」

人差し指を構えた姿勢で斧乃木ちゃんが言った——よくよく見れば指先が少し欠けているように見える。肉体的にもノーダメージとはいかなかった訳か。

「僕もなんとかして会話を持ちかけてみたけれど、こいつ全く取り合おうとしないんだ。のらりくらりと躲しやがる——いや、そもそも土俵に立とうとしていないというか」

「土俵に——立とうとしていない」

会話をする気のない相手というのは、言葉の通じない相手以上に厄介だ。言葉が通じないだけならばまだ諦めがつくが、なまじ言葉が通ずるだけ、会話を仕掛けてしまう。織崎はまだ会話をする気があったようだが、こいつにはその気さえないということか。

どうでもいい——。

「それは違うさ人形。わちきはただお前に興味がないだけであって、その阿良々木とはある程度お喋りしようという気はあるんだよ？」

ただそれを阿良々木が拒んでしまうだけで」

「だから……なんでお前は僕にそんな執着するんだよ」

「教えない。お前にとつてそれはどうでもいいことだろうか？」

「お前会話する気ねえだろ！」

「あるよ。ただそれはお前が仕掛けるんじゃない、わちきがお前に喋り掛けるんだよ。お前がわちきの質問に答えてくれればそれでいいのさ」

「そんなん会話じゃねえだろうが！ 言葉のキャッチボールが成り立ってねえよ！」

「んふふつ……まあいいさ。究極的にはお前だつてどうでもいいんだし……わちきはただ、その金髪を殺せばそれでいい」

会話を平然と切り上げ（やっぱ会話する気ねえよこいつ）、忍の方を向く淡海。

「ふん、儂はうぬなんぞの恨みを買った覚えはないがのう？」

「お前になくてもわちきにはあるんだ……腸が煮えくり返りそうな程の怨みが、怨念が！ そうでなければわざわざこんなどうでもいい世界になんぞ蘇らねえんだよ!!」

「ギイイイイイイイイツ!!」

淡海の叫びに呼応するように、巨大怪異（確か名前は豪那）が吠えた。まるで金属が軋むような鳴き声……っーかこいつ吠えるのか。

こいつの鳴き声は兎も角として、淡海静の激昂した姿というのは初めて見た。いや、そもそもこいつがまともに感情を出した姿なんて初めてだ……忍には心当たりが無さそうだが、いったいこいつは——？ 「まあどうでもいい……どうでもいい……今はまだね。今はご主人の体調が優れない……ご主人が復帰し次第、忍野忍——旧キスシヨツト・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード、お前を殺す。散々トラウマをほじくり返して絶望の中で死んでもらうよ」

「おいおい。こいつが苦しみぬいて死ぬのは僕にとつては迎合すべきことだけれどさ、まさかこの状況から逃げ切れると思ってる訳？」

忍が斧乃木ちゃんを睨む。なんでこの子はいつも自分からギロチン台に首を突っ込むようなことを……。

「死体人形は黙ってな。逆に言うけれど、この状況でわちきたちが離脱出来ない訳ないだろ？ お前らは全員満身創痍なんだから。脳味噌腐ってるのかい？ 死体だけに」

急に饒舌になった淡海。織崎がボロボロだからか？ 織崎がご主人ということは、織崎の状態が状態故に支配が弱まっているとか、そういうのか？ 今更ではあるが。

淡海は織崎を引き上げた。織崎は痙攣しながらぶつぶつと何かを呟いている。

「じゃあそんな訳で、わちきたちはここら辺で去るとしよう。また今度会おうじゃないか——ほらご主人。糸、やって」

「き、きき、きき……」

ふらふらとよろめきながら、織崎は指から糸を放った。糸は豪那、鴉に巻きつき、リールのようにキリキリと引き上げられていく。浮遊する。

「お、おい。行かせちまっていいのか？」

「仕方ないよ。このまま連戦になっても、どうせ負けるだけだしね。仕切り直してくれるというのなら、有り難く甘受しよう」

「おい、お前さっきの威勢のいい啖呵はどうしたのじゃ」

「あんなのハツタリに決まってるだろ。それくらい考えろよバーカ」

「いや馬鹿はうぬじやろう。奴らが逃げる気なかったらどうするつもりだったんじや」

「その時はあなたたちを、特にお前を道連れにして死ぬつもりだったよ」

「おいお前様、こいつ斬っちゃってよいか」

「よい訳ねえだろ」

そんな会話をしながら、僕たちは浮遊していく淡海たちを見上げていた。上昇して、上昇して——ある地点で奴らの姿は掻き消されたように見えなくなった。

あれだけ目立つ大きさのものが見えなくなったとなると、もしかす

ると本当に千刀はずつと僕たちの頭上に設置されていたのかも……まあ、千刀は一本残らず置き去りにされてしまった訳なのだが——そんなかんじで。

完全勝利ではなく——かと言って敗北したという訳でもなく。勝ちとも負けとも言えない奇妙な後味の悪さを残し、今回の戦いは幕を降ろしたのである。

「023」

後日談、というか今回のオチ。

織崎たちが居なくなつた後、僕たちが行つたのは戦後処理である。

後始末——そこら中に残された戦いの痕跡を綺麗さっぱり消し去る作業である。

後始末と言うとゴミ拾いを思い浮かべる方が大半だと思うけれど、僕たちが行つたのはゴミ拾いではなく、ゴミを斬ることだった。

斬刀『鈍』による切断作業——残された千本の刀と極悪な刀を斬り裂いていく作業である。これらをゴミと一括りにするのは些か乱暴かもしれないけれど。

ついさつき僕たちはこれと同じ発想をしたのだけれど、もしかしたら何かの役に立つかもしれないと思い、取り敢えずそのままにしておいたのである。その旨を斧乃木ちゃんに話したところ、

「別にそんなの気にしなくていいよ。気にせずばっさりやっちゃつて」

との事だった。さっきの葛藤はいつたい。

そんな訳で、僕はひたすらに地面から生えた刀を薙いでいく単純作業に従事した訳である。で、忍と斧乃木ちゃんはというと、

「おいお前様、まだそこに残つておるぞ。ちゃんとやれ」

「ほらほら、とつととやる。キビキビ動いて、ほらほら」

揃つて僕を急かしてくるのであった。

「お前らもちよつとはやれよ！ 何で僕だけなんだよ！」

「仕方あるまい。斬刀は一本だけじゃし、わざわざ持ち手を取っ替え

引つ替える必要性もなからう？ 寧ろ一人でやった方がよっぽど効率が良い」

「不平不満を言ってる暇があるなら手を動かせ。話はそれからだ」  
「くそっ……！」

正直こいつらの言いなりになるのはごめんなのだが、しかしこの二人の働きを考えれば、とても言い返すことも出来ない。それに僕の働きはどう見積もってもこの二人より劣っている。僕がやったことと言えば、織崎ちゃんにちよつと止めを刺しすぎたことくらいである。後は捕まったり吹き飛ばされたり復活させちやったり……口クなこととしてねえな僕。

「そもそも、あの止めだって、別にやろうと思えば儂にも出来たのじゃぞ？」

「はっ？」

唐突に何を言い出すのだこいつは。僕の唯一とも言える功績さえ打ち砕きたいか。

「悪刀大砲」じゃったか？ あの攻撃を放つ際、あやつ両手の刀を捨てておつたろう。一瞬じゃったが確かに儂は見たぞ。もし儂にもう一度攻撃のチャンスがあれば、そこを突いて確実に仕留めておつたじやろう」

「気付いてたのかお前……」

”悪刀大砲”——もうこの世から消え去った悪刀『鏢』の限定奥義で、『鏢』に込められた電撃を最大出力で放つ技（多分）。それを放つ際織崎は、両手に持った刀を一旦捨てていた。恐らく、電撃が刀に悪影響を与えてしまうことを危惧しての行動だろう。

忍さえ手を焼いた、どころか体を焼いた攻撃だが、あの電撃さえ無効化できれば一転して最大のチャンスへと変貌してしまう。だから僕は忍を盾にして（ごめんなさい）電撃を無効化し、アタックした訳なのだが……。

「……いやでもさ、実際に戦ってたら、前兆なんて分からなくないか？

あいつが技名を叫ぶ時には、もう遅いし」

「実際に戦っている方が、寧ろ分かりやすいぞあれは」



「え？」

「あれを放つ頃になると、あ奴の動きの苛烈さが明らかに増した。おそらくモーター的な原理であれだけの電撃を生み出しておったのじゃろうな」

「モーター的な……そうなのか」

「そう言えばそうだったか？ どうだっけ……それは気付かなかつたな。」

「苛烈とは言え、まあ視認出来ん程ではなかったがな——手回し発電機を思い出してみよ。あれと似たような原理じゃ」

「なるほど」

「どうしてこいつが手回し発電機を知っているのかはともかくとして——つまり、あいつは激しく動くことによつて発生する電気を『鏢』に蓄電、溜まったところで一気に放出していたということか。だから、あの技を連続で繰り出すことが出来なかった。」

「所詮仮説でしかないがな——そもそも動くことによつて発生する電気ってなんじやいという話じゃしろう」

「はあ」

「そんな会話を交えながら、のたりのたりと何とか千本斬りを達成した。」

「僕は『鉋』も斬ろうとした——のだけれど、どうも斬る気が湧かなかった。織崎に決定打を与えた刀だし、何より日和ちゃんが使用していた刀というものもある。」

「日和……ふうん、死んだんだあの子。まあ会ったことないけど」

「あれ、そうだっけ」

「そうだよ——まあ、残念だったね、とだけ言っておこう」

「……残念、か」

「残念というなら、僕ではなく日和ちゃんの方だろう。結局あの子は自我を持つてから僅か数日でこの世を去ったのである。色々振り回されたが、今から思えばもっと色々な場所に連れて行ってやればよかった。あいつだつて、きつとまだ遊び足りなかった筈なのだ。これが『くらやみ』に吞まれたのでなければ、未練たらたらで亡霊として

復帰してきそうな程に。

けれど、『くらやみ』はそういうものじゃあないのだ。あれは怪異を殺すものではなく、”消す”ものなのだ。間違いを犯した存在を消し去る——天国にも地獄にも行けないであろうことは間違いないと思うけれど、なら日和ちゃん意識はどこに行ってしまったのだろうか。永遠の暗闇の中に吞まれた彼女は、どうなったのだろうか。

想像も出来ない、想像を絶する事だ——こんな結末なんて、到底認められるものではなかったけれど、認めざるをえない。

「……この二本は、北白蛇神社にでも祀ろうかな。たつたこれだけだけれど、一応あいつの形見な訳だし、斬るのは躊躇われる」

「北白蛇神社——そういえば鬼いちちゃん。その北白蛇神社の方で何かが倒壊するような音が聞こえたんだけど、何があったの？」

「倒壊?！」

そう言えばそうだった。織崎の奴、北白蛇神社の方角へ双刀『鎚』を投げ飛ばしたのだった。願わくば外れて欲しかったところではあるが、どうやらそうは問屋が卸さなかつたらしい。

「マジかよ……八九寺は、まさか日和ちゃんの後追いでねえだろうな」

「さあね。その辺までは知らない。あの鴉を追い払うのに精一杯だったから、ちゃんと見てないんだ」

事も無げに言うが、この斧乃木ちゃん、話を聞くところによると、なんと初撃で月火が攻撃を食らった以外、一切の危害を出さずにあの鴉どもを追い詰めたらしい。相性が悪いにも関わらず、よくぞやってくれたものだ。

「まあ僕だつて有終の美を飾りたいからね。或いは立つ鳥跡を濁さず、か——どうせこの後罰を受けるだろうし、最後にいい仕事が出来て良かったよ」

「おいおい最後だなんて……そんな寂しいこと言うなよ斧乃木ちゃん」

「かかつ、そうじゃオノノキ」

「忍姉さん」

「うぬが何も罰を受けることはない。うぬはよくやったのじゃ、寧ろ  
勞われるべきじやろう」

おお、なんだか忍が珍しいことを言っているぞ。斧乃木ちゃんを庇  
うだなんて。成長したなあ。

「忍姉さん……」

「よくやったなオノノキ！ よくぞやりきったな！ ああ凄い凄い！  
わーわー！ はい、有難くも儂が褒めてやったのじゃから、後腐れ  
なく処刑されてこい」

「このババア……」

……いつも通りの忍だった。まるで成長していない。

「どうせ罰を受けるなら、いっそお前に一撃入れてから——」

人差し指を忍の頭に向けた斧乃木ちゃん——二人の間には僕が挟  
まっているの、その指は僕の頭にも向けられていたことになるのだ  
が——一触即発かと思ったその瞬間、バイブレーションじみた音が斧  
乃木ちゃんのスカートの中から聞こえた。斧乃木ちゃんは一瞬ビク  
リとしてから服の中を弄った。

「今の描写からエロいことを考えた奴は徹夜で腹筋しろよ」

「いや居ねえだろ……何故腹筋？」

「僕は筋肉が好きなのさ。知ってるでしょ？」

斧乃木ちゃんはスカートの中からスマホを取り出した。誰かから  
の連絡のようだ。ちようど斧乃木ちゃんの待遇について喋っていた  
タイミングでの連絡……計ったようなこのタイミング、まさか。

「はい、こちら斧乃木余接……はい……はい……うん、了解。え？  
……うん、うん……」

斧乃木ちゃんの敬語とか初めて聞いたぞ。最終的にいつもの口調  
に戻ったけれど。

「うん……オツケー。はい、鬼いちちゃん」

「え？」

なんて思っていると、斧乃木ちゃんがスマホを差し出してきた。

「何ぼやっとしてるの。代わられてことだよ」

「え？ あ、は、はい」

何故か敬語になる僕。想定外のことにより少し焦りながら、僕はスマホを受け取った。

「は、はい。代わりました、阿良々木暦ですけど……」

『やあこよみん。暫くぶりだね』

「っ！ 臥煙さん……」

『ん？ どうしたんだい？ そんな驚いたような声なんて出しちゃつてさ。電話の主が私だつてことは、タイミングとかから察してたんじゃないのかな？』

何故分かった！

いやまあ、その通りである。あんな如何にもなタイミングで携帯を鳴らしてくるような人は、臥煙さん以外に僕は知らない。羽川でさえやってこないし……というか羽川から連絡が来ること自体稀なのが。

悲しいなあ。

『はっはっは。みんな何故かそう言うんだよ。私からの連絡はまるでタイミングを計ったようだ、なんてさ。はは、幾ら私は何でも知っているからって、それはちよつと暴論だね。そう思わないかい？ こよみん』

「いや……すみません、僕も思っていました」

『だろうね。知ってるよ』

「……えっと、何のご用件でしょう」

『ああそうそう。用件だ用件。いやあすっかり忘れていたよ。大事なことを忘れてしまうだなんて、私も歳なのかな？』

「……………」

ツツコミ辛いこと言うなや！

取り敢えず笑って誤魔化しておいた。

『いや何、こよみんに一つお願いがあつて連絡したんだよ』

「お願い？」

『そう、お願い——こちらの状況は余接に話しておいたからその辺は後で聞いてもらうとして、こよみん、友達として、私のお願いを聞いてくれないだろうか』

「友達として——」

『そうだよ。私と君は友達の筈だ。記憶違いがなければね』

「……まあ、友達、なんででしょうか」

『んん、煮え切らないね……まあいいや。じゃあ内容だけちやつちやと言おうか』

いいのかよ。結局問答無用じゃねえか。

臥煙さんからのお願いとなると、複雑なことを要求されることが予想される。メモを取らねば……まずいぞ持っていない。

「えつと……すみません、メモがないのでまた後でにしてくれますか？ 後でこちらから連絡を入れますので」

『メモなんて取るまでもなく、単純明快な頼みだ。そのお願いは聞きかねるね。何せこちらとしても時間がないんだよ』

……臥煙さんにとつての単純明快と僕にとつてのそれとは、酷く乖離がありそうな気がしてならないのだが——時間がない？ 斧乃木ちゃんに教えたという、臥煙さんの状況が気になるところだな。

『ははは、心配しなくていいよ。本当に簡単な話だ——』

——なんて臥煙さんは言っていたけれど、確かにその”お願い”自体は言うだけなら簡単な話ではあった。けれどその裏にある要求と実行難易度は、決して易しいものではなかったのである。

お願いの内容とは、こうだ。

『——君には、”逢我三山”という山に登ってほしい。勿論目的はただ山登りを楽しんでもらうだけじゃあないよ。連なる三つの山を縦走した先にある”逢我滝”——そこに住むといわれている”仙人”つてやつに会ってきてほしいんだ』

山に登れ。

仙人に会え。

言うは易し行うは難しという言葉があるけれど、その言葉を臥煙さんに真正面からぶつけたくなるような気分になった。

『ま、言うは易し行うは難しという言葉もある。無理強いはしないよ』  
先回りされた。

『でもこよみん——友達の頼みは聞いておいた方が、後々良いことが

あるかもしれないよ』

「……………」

別に脅迫じみたニュアンスが含まれていた訳ではなかったけれど、  
”友達”という言葉を盾にされると、人間強度の下がりきった僕は首  
を縦に振るしかないのであった。

《裔物語 完》

《読了感謝》

《裁物語に続く》

ウラガタリ しるしスパイダー（上）

「001」

「〈物語〉シリーズ恒例となっております、メインキャラクターのフルネームから始まる前説です。今回は金髪ねーちゃんですね」

「金髪少女は人類の宝だと思う人、挙手！ はいっ!!」

「はあ。いや、あたいはそうは思いませんね」

「何故に!？」

「金髪なんて、いかにも不真面目そうと言いますが、淫乱そうと言いますか……あれのどこに魅力を感じるのか、あたいはさっぱり分かりません」

「随分偏見に満ちているんだな、神崎ちゃん。いや、まあ確かに、女子の目から見ればそう映るのかもしれないな——金髪がヨーロッパで反映した理由を知っているかい？ 氷河期の頃、危険な狩りや遠出の影響で男の数が少なくなり、その結果、男女比率が不均等になったのだ。当然、女達は男を取り合う。その戦いで優位に立ったのが、金髪の女たちなのだ。金髪は女子の魅力を最大限に引き上げる——その顔はまるで少女のように初々しく見えるにも拘わらず、どこか熟した色気も感じさせる——金髪が美しいと感じるのは、金髪とはセックスアップीलのために繁栄した髪色だったからなのだ！ 分かったかい、神崎ちゃん?」

「力説しますね……まあ概ねあたいが抱く金髪のイメージはその本質とすぐわぬことはないということとは分かりましたけれど」

「うむ。しかしそういう事情から鑑みると、金髪でない女性が金髪の女性にあまり良い印象を持たないというのは、至極当然のことだと思うぞ。まあ私は大好きだがな」

「じゃあ貴女は女ではないのですか？ 両性具有？ 人格破綻？ 二重人格?」

「うん、前書きの段階でもう分かっていたが、君って相当な毒舌だな……しかも両性具有って……私でも中々口にしないぞ」

「じゃあ半月とか」

「……一応私は君の言っていることは理解できる。理解は出来るが、しかし神崎ちゃん。一応これR—18タグのついた作品ではないし、もう少しマイルドに話さないか？ いや、私は別にいいんだが」

「ほう。変態を自称していたような方が怖気づくのですか。タグ如きに。げに笑えますね。まさかぽつと出のあたいのようなオリキャラに変態で負けるなんてことはありませんよね？ だとすればあまりにも貴女の存在意義が分からなくなります」

「中々聞く事のないような斬新な煽りをしてくるな、君は……え？ 本当にいいのか？ リミッター外しちゃってもいいのか？ いいんだな？」

「どうぞどうぞ。よしなに」

「よし、良いだろう——正直見た目ロリっ子の前で修正されかねないエロネタを語りまくるのは心理的に抵抗があるが、しかし君が許可したんだからな？ よし！ じゃあ次の章から私は全力を出すことにしようか——最近は【花物語】とか【愚物語】の所為でファクション変態の汚名を被りがちな私ではあるが、ここでその汚名を洗い流してみせる！」

「どう考えても逆だと思いますが、まあどうぞ頑張ってくださいね」

[002]

「よし、神崎ちゃん。まずは服を脱いで全裸になるがよい」

「いきなり如何なさいましたか？ いきなり狂ったようなことを仰りやがっていますすけれども」

「やかましい!!! 貴様戦場ヶ原先輩を敵視していたのか!! おのれ許し難い!! キャラ被りもそうだが、それ以上に戦場ヶ原先輩を嫌っているというその事実が何よりも気に食わん!! ほら、早く服を脱いで陶器のように真っ白でスベスベとした肌を、今のうちに読者に見せつけるがいい!! 次に君が肌を晒す時、君の体は蚯蚓腫れだらけになっていることだろう!!!」



「まぞひすとだけではなくさでいすともありましたか。流石変態です  
ねお断りします全力で」

「そうか。ならば土下座するしかあるまいな」

「貴女も土下座することに抵抗を感じないタイプの人種でしたか」

「土下座が嫌いな人間など居るまい。見下される感覚のおかげで脳内  
麻薬ならぬ脳内■規制■」

「貴女の頭を一度斬り裂いて脳を眺めてみたいですね。腐女子？  
だけあって相当腐ってそうです」

「褒め言葉だ」

「腐りきったチーズでも頭蓋の中に詰まっていますかね貴女は」

「腐ったチーズと言えば、■規制■」

「残念でしたね。■規制■」

「そうなのか？ ふむむ、機械の体というのはそういう面でも便利  
なのか……」

「憧れましたか？」

「別に。そういう面も含めて、私は人間の■規制■」

「はあ。左様ですか——まあ、人間の体を機械のものに完全に置換す  
る技術は未だ存在していないらしいので、どうせ無理ですけれども」

「ああ。体を機械にするためには、銀河鉄道に乗ってアンドロメダ星  
雲のどこかにある星に行かねばな」

「そんな星があるんですか!？」

「あれ、神崎ちゃん知らないのか？ 銀河鉄道999」

「ああ、漫画の話ですか——はい。知りませんね。あたい、そういう  
さぶかる”とやらにはまだあまり詳しくないものでして」

「そうなのか。ふむ。まあ私も大して知らないのだがな。私が読むの  
はBLだし」

「びーえるとは」

「男同士の美しい恋物語のことだ」

「ほう。同性愛ですか。重いテーマを描いていますね」

「いやそんなシリアスに思わなくてもいいけどな」

「近付いた結果がこれですよ。全く、阿良々木お兄ちゃんの苦勞が無駄になってしまったではありませんか。よくもやって下さいましたね作者さん」

「阿良々木先輩も大袈裟だな。というか、私を一体全体どれだけレベルの高い性犯罪者と見做しているのだ。私は阿良々木先輩のように現実でロリに手を出す気はないというのに」

「何を仰る。現在進行形で貴女はあたいをエロいようにエロいようにと浸食しているではありませんか」

「元凶は君だろうが！　あと、私的には浸食と言うより調教と言った方が好みだ」

「調教ですか。あたいはどちらかと言えばする方が好みですかね。いや、別に調教になんて一切興味はありませんし、あくまでされたくないからする方に回るというだけですけれども」

「私はされる方が好きだ」  
「でしようね」

「いやあ、戦場ヶ原先輩の言葉責めは本当に気持ちが良いんだよなあ……最近ではドン引きされてやってくれないのが残念だが」

「じゃああたいが戦場ヶ原の代わりになって差し上げましょうか」  
「それは断固拒否する」

「そうですか——というか、改めて考えるとどうなんですかね？　この会話は。ドン引きと言うのなら、もう既に読者様の大半がドン引きなさっていると思うのですが」

「いやあ、ドン引きしてるのは所詮女子に幻想を抱いている男性読者だけだろう。問題ない」

「それを問題ないと言い切れる貴女の精神力が問題だと思います」

「そもそも、この〈物語〉シリーズはそういう男子の幻想を打ち砕くために存在していると言っても過言ではないのだぞ？　美しい理想を抱いている思春期真っ盛りの健全な男性読者に対し、ダーティーな現実を突き付けるのがこのシリーズだろうが。今更何を心配すること

がある」

「鬼畜ですか貴女は」

「鬼畜は阿良々木先輩だ。或いは鬼畜ギャルソンか」

「鬼畜ギャルソン？」

「BL小説だ」

「男子同性愛小説ですか」

「言い換えるな！　なんだかエロさ、というか、禁書感が強くなるではないか！」

「まあ、世が世なら禁書認定されて焼かれていたでしょうが。あ、でもご安心ください。あたいの居た時代はそういうのには結構肝要ですから」

「らしいな。というか、意外と江戸時代の人とか、そういう昔の人が書いた小説とか絵って、妙にエロいからな」

「今では閲覧制限が掛けられそうですね」

「それでも何故か掛けられないのが、現代社会の不思議の一つだと思うのだから」

「芸術だからですかね」

「アニメや漫画、小説は芸術品ではないとも言うのか！　くそっ、規制め!!」

「規制にはいつもお世話になっています」

「004」

「神原お姉ちゃんって、意外とシリアスな雰囲気もちやんと出せるんですね」

「当たり前だ。私をなんだと思ってるんだ君は」

「おふざけ全開の変態お姉ちゃん」

「変態お姉ちゃん!!　おお……また斬新な呼び方をしてくれるではないかっ！　良い、良いぞその呼び方！」

「しまった、悦ばせてしまいましたか」

「これからは私の事を、変態お姉ちゃんと呼ぶがよい!!」

「いえ、流石に変態お姉ちゃんと毎回呼ぶことに抵抗がない私ではありません。機械だけに」

「分かりにくいボケをやめないか。しかもあんまり上手くない」

「ほう、厳しいですね。流石は〈物語〉シリーズ次期主人公と謳われているお方です」

「そんなことを謳われた覚えはない……というか、阿良々木先輩の後釜なんて荷が重すぎる。私には無理だ」

「いえいえ。阿良々木お兄ちゃんの意志を継ぐことが出来るのは貴女しかいないと、八九寺お姉ちゃんも仰っておりますゆえ」

「八九寺Pか」

「八九寺Pです」

「八九寺ちゃんなあ。いつか会ってみたい、会ってハグしたいと思っているのだが、どうも会う機会がなくてな。実はどんな子なのか、ちゃんとは把握していないのだ」

「あれ、そうなんですか。八九寺お姉ちゃんに会いたいのであれば、北白蛇神社に来れば会えますよ」

「なにっ!!」

「目を輝かせないで頂きますか——って、何おもむろに立ち上がっているのですか。座って下さい。しつとだうん！」

「やかましい!!」

「やかましい!？」

「これがじつとしていられるか!! くそっ、北白蛇神社かー!! よりによつてあそこかー!! あそこは色々要因縁があるから苦手なんだよな……いや、苦手意識を克服することも出来ずして、どうして少女と戯れることが出来ようか!! 今こそ、バスケットボールで養った根性の見せ所だ!! よし、今度北白蛇神社へ行こう!!!」

「ほう! ということは、八九寺お姉ちゃんの新たな信者になって下さるのですか?」

「私は日本全国全てのロリを信仰している。阿良々木先輩には及ばないが」

「左様ですか。でしたら是非いらして下さい。お賽銭を持参すること

を忘れずに来て下さい」

「お賽銭か。どれくらいが良いだろうか？ 十万円までなら出せるが」

「……………神原お姉ちゃんって、富豪の娘なのですか？」

「ふふ。まあな！」

「……………お嬢様という言葉のイメージがガラガラと崩れていくのを感じますよ」

[005]

「あ、阿良々木先輩が連れて行かれたぞ!! 阿良々木先輩が拉致された!!」

「だいなみつくにやりやがりますねー、あの金髪ねーちゃん」

「まずい！ このままでは阿良々木先輩の処女が、あの金髪ビッチに奪われてしまうぞ!!」

「金髪ビッチって……………いやいや、阿良々木お兄ちゃんは男ですから、言うならば貞操ではないでしょうか」

「おいおい神崎ちゃん。まさか君がそんなに甘い思考回路の持ち主だったとは思わなかったよ——ふふふ、私を挑発しておいてその程度か？」

「む……………じゃあどういふことなのですか」

「菊、とだけ言っておこうか」

「あー。成る程。理解しました。面白い発想をなさいますね。最早穴だったらなんでもいいという人間の、というか貴女の業の深さをしみじみと感じました」

「おいおい日和ちゃん、この程度で業が深いなんて言っているのは、この人間社会で生きていけないぞ？ 世の中にはやおい穴というものがあつてだな」

「ほう？」

「■ 規制 ■」

「へー。業が深いというか、ただただ不快で馬鹿と言うべきですね。」

現実的に考えてありえないことをよくもまあ想像出来るものです。どうかそもそもよく思い付きますねそんなこと」

「ふっ。腐女子の妄想力を舐めないで頂きたいな。というか、私なんに腐女子の中ではまだまともな方なんだぞ？ 遺憾ながら」

「魔境なんですね。いえ、魔境というか魔族というか」

「私は悪魔なマゾだぞ！」

「史上最低な自己紹介ありがとうございます」

「日和ちゃんって、何だか私に対してはちよつと、こう、冷めてないか？」

「そうでしょうか？ あたいは比較的いつも通りでいるつもりですけども……仮にそう思われるのでしたら、きつと私は無意識のうちに貴女の言動に対して引いているのでしようね」

「ふっ、勝った」

「変態度で買って喜ぶような奴は生まれてこのかた初めて見ました」

「おお！ つまり、私は神崎ちゃんの初めてをもらったということだな！」

「もう少し言い方はどうにかならなかったのでしょうかね」

「愚問だな！ 私は常に自分の思いつく限りで最高の表現を使って喋っているのだから！」

「貴女の辞書はぶち壊れているのですか？」

「いいや、私の辞書は決して壊れていない……何故ならば、最初から私の辞書はこのようにカスタマイズされていたのだからな！」

「ほう。不良品でしたか。これは失礼」

「不良品と言うなら、君も相当なものだと思うけどな！」

「失礼な!! このあたいが不良品ですって!?! 変態お姉ちゃん、言っでいいことと悪いことがこの世にはあるのですよ!!」

「まさかの地雷だった!?!」

■ 黒駒 ■

## 裁物語

### 第五話　しのぶハート　其ノ壹

〔001〕

忍野忍の過去というものを僕は全くと言っていいほど知らない。生涯を共にするツーマンセルでありながらも、僕が彼女について知っているのは精々”忍野忍”という名前を与えられてからの話くらいだ。或いは彼女がまだ鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼”キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード”という名前の頃のほんの数ヶ月、神を騙っていたころの話しか知らない。

約600年生きたこの金髪少女について、この通り僕は本当に何も知らないのである。彼女が積み重ねてきた歴史はあまりにも膨大で、知っても知っても知り尽くせない程のものであることは重々承知なのだけれど、しかしそうは言っても僕は彼女について無知過ぎる。六百分の一さえも、僕は彼女の歴史を把握出来ていない。

こんなに近くに居ても、一心同体と言っても過言ではない状態であつても、である。

いや、それが悪いと言っているのではない。そういう話では断じてない。誤解を恐れずに言えば、別に僕は誰かと付き合う上でその過去に何があつたのかということの特段知る必要はないと思つている。何せ自分自身、僕自身がその過去つてやつを語りたがらない性質なのだから。

自分の嫌なことを他人に強要するな、という話だ。

ならば何故こんなことをだらだらと書き連ねて居るのかと問い詰められれば、残念ながら気の利いた答えを僕は用意することが出来ない。

そう思つたから——今回の件を通して、ふとそう思つたから、こんな話をしているだけだ。忍野忍という存在についての無知を知ってしまったから、こんな話をしているだけなのだ。

だからと言って、別に彼女に過去を逐一問い質すなんてつもりは一切切なく、ただ思っただけ。思い知らされただけ。

結局のところ、今回はそんな物語だ。僕が、そして忍が、自分の積み上げてきた過去と向き合う物語。言ってしまうえば、ただ自分の年表をひたすらに読み進めていくだけのお話。

いや、読み進めていくと言うより、読み上げられると言った方が正確なのだろうか。見せつけられる——まあ言うまでもなく、僕らのような奴らが自分から進んで能動的に黒歴史を見つめ直すなどまずあり得ないことなので、この注釈は不要だったかもしれない。

ともかく、誠実に、或いは不誠実に、己の過去と向き合う物語——自分の積み重ねてきた罪を自覚し、裁きが下るなんて、僕たちとしてはついこの間似たようなことがあったのでご勘弁願いたいのだけだ——まあそんなかんじで、語っていこう。

僕と忍の珍道中、始まり始まり。

〔002〕

なんて大手を振って始めようとしたけれど、しかしメタ的なことを言わせて頂くとこのシリーズ、一応前回の裔物語で一区切りを迎えているのである。それに結構間が開いているのでストーリーをお忘れの読者もおられるかもしれない——いやまさかこの裁物語から読み始める方は居ないだろうが、一応区切りは区切り。おさらいをしなくてはならないのである。

そんな訳で、阿良々木暦の一年間。

僕こと阿良々木暦は、高校三年生の春休み、吸血鬼に襲われた。血も凍る程美しい、金髪金眼の鬼だった——鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼、怪異の王にして怪異殺し。今や失われたその名はキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード。

ややあって彼女の眷属となった僕は、並み居る吸血鬼退治の強豪——同族殺しの吸血鬼・ドラマツルギー、ヴァンパイア・ハーフ・エピソード、新興宗教の大神官・ギロチンカタと戦い、さらに主人とも手



刀を交え、結果として僕は吸血鬼性の少し残った吸血鬼もどきの人間に、彼女は力を殆ど失って人間もどきの吸血鬼となったのであった。

この地獄以来、僕は様々な怪異に立ち遭うこととなる。猫、蟹、蝸牛、猿、蛇、そしてまた猫——お陰で僕は羽川翼と友達になり、戦場ヶ原ひたぎと恋仲になり、八九寺真宵と親友になり、神原駿河に憧れの目を向けられて、千石撫子と再会できた訳なので、一概に悪いことだらけとは言えない。

悪いことと言うのなら、ある意味において夏休みに起こったあれこれは”悪いこと”だったのかもしれない——阿良々木火憐の蜂、鳥の阿良々木月火——詐欺師・貝木泥舟、暴力陰陽師・影縫余弦、その式神・斧乃木余接——恩人・忍野メメの大学時代におけるサークル仲間とやらの立て続けに起きた遭遇は、改めて考えるとこの夏休みにおいてはまだ多少はマシな出来事だったのだろう。

問題は、夏休み最終日である。夏休み最終日に起こったことは、今思い出しても暗闇に包まれたような気分させられる——タイムスリップ、世界の滅亡、八九寺の成仏、死屍累生死郎の復活と決闘。そして、『くらやみ』——僕の卒業式まで続く一連の事件の伏線が張られたのが、この夏休みだった。

夏休みが終わり、僕たちの通っていた私立直江津高校に一人の少女が転校してきた。その少女の名は、忍野扇。神原より一個下の後輩だ。彼女が転校してきて以来、僕は今まで積み上げてきた債務の一括払いを余儀なくされた——なあなあにしてきた事を、精算させられた。その中でも強く僕の胸に焼き付いて離れないのは、言うまでもなく老倉育と千石撫子の件である——特に千石撫子の方は、僕が一月頃に直面したある”変化”に深く関わったのである。

大学受験が目前に見えてきた頃、僕の体は度重なる吸血鬼化の影響を受け、純正の吸血鬼と化していた。忍に血を吸われて吸血鬼になるのとは訳が違う、最初から生まれつきの吸血鬼に。ここから僕は斧乃木余接の監視下におかれることになる——もっとも、二月に主人である影縫余弦が姿を消すことによって、その監視は無力化されてしまっただけだ。

そんな二月を経て三月——この件について数行で説明するのは不可能なので、かなりぎつくりと説明や経緯を省かせてもらおう。僕の地獄巡りについて詳しく知りたい方は、原作を読むか今後放送されるアニメを見て欲しい——ついに僕は、夏休み以降の事件を引き起こした”黒幕”、即ち忍野扇と対面し、一応の決着をつけた。とは言うものの、僕と彼女の対決は未だ続行中なのだけれども。

卒業式の事件をなんとか乗り越え、見事に春休みへの突入を許された僕ではあったが、やはり平和に過ごすことは出来なかった——鏡の事件もさることながら、それ以上の脅威が今現在文字通り僕たちに襲いかかっているのである。

それが、この作品の読者諸兄が知る所である、織崎記との戦いだ。四季崎記紀という嘗て存在したという伝説の刀鍛冶が作成した十二本の完成形変体刀を巡る戦い——僕たちを暗殺せんとする織崎記と僕たちは何度か戦い、そしてついさつき、完全勝利とはいかなかったが、何とか勝ち星を挙げることに成功したのである——何人もの犠牲を出して。

[003]

「おお、阿良々木先輩か！ よく来たな。ちよつと待ってくれ、今服を着るから」

「え？ 着るの？ 脱ぐんじゃないくて？」

回想は終わり——時系列は現在へ。

織崎ちゃんとの戦いを終えた僕たちは、休む間もなく——いやちよつとだけ休んで——神原の家へとやってきた。

どうして神原の家に、心身ともに疲弊した体を押してまで向かったのかというと、簡単に言えばお見舞いである。

お見舞い。

病気見舞いという訳ではない——こと神原については彼女のお部屋の汚部屋っぷりが極まっているのでいつかそれが祟って病気になるだろうと確信しているがそうではなく、少し前に負った怪我の見舞

いである。

勿論怪我というのはそこら辺で転んだとか、幼女に噛まれただとかそういう話ではない。そんな話ではなく。

少女の蹴りを喰らい、悪魔に吹っ飛ばされた——先程の戦いで、神原は八面六臂の大活躍をしてくれたものだが、その代償として彼女は多少のダメージを負ってしまったのである。

責任も感じるというものだ——何せ神原を戦いに巻き込んでしまったのは、他ならぬ僕の愚直さなのだから。織崎に易々と釣られて監禁されてしまった僕の所為なのだから。

そんな訳で、こうして神原の家を訪ねて来たのである。神原の見舞いと、もう一人のことも——。

「おや、どうした事だろう阿良々木先輩。そういう返しをするのは普通こちらからではなかったか？ 私の裸を所望か？」

「そんな訳ねえだろ。いや、確かにお前の裸はかなり見応えがあるけれど、そうじゃねえよ」

「見応えがある！……なんだ、それならそうと早く言え！ 待っている、今着かけた服を脱ぐ！」

「服は着とけ！」

僕は今、神原の部屋の前に居た。神原の部屋の襖は閉まっけていて、開けようとしたら冒頭のセリフが飛んできたのである。

つまり、僕は廊下に立って、こんな会話を大声でしている訳だが……神原の祖母さんからの僕の評判は大丈夫だろうか。

「いや。いつも僕がここに来ると言うと、お前はいつも何かと理由をつけて脱ごうとするからな。真逆の反応だったから、びっくりしただけだ」

敢えて常識的なことを言わせてもらえば、現代日本において何かと脱ごうとするその行為こそが常識と真逆な行動であり、今の神原こそが常識的な行動な訳で——僕が来る前は脱いでいたらしいので、突き詰めれば結局現在進行形で常識外れな訳だが。

「じゃあ、別に私の裸を見たいという訳ではないのだな」

「当たり前だ。健全なる紳士として、当然のことだぜ」

「しかし健全なる男子としては、女子の裸を見たいのではないのだろうか」

「不健全な女子が健全な男子を語るな」

「否定しないのだな」

うん。

そりゃあそうよ。

「ならば阿良々木先輩は……今、本音としては私の裸を見たいのではないのか？ 見応えがある裸をじっくりと眺めたいのではないか？」

「何訳の分からん誘惑をしてるんだお前は。なんでそんなに自分の体を見せたいんだよ」

「見せたいのではない、見せつけたいのだ！」

「うるせえ！ もうお前さっさと逮捕されてしまえ！」

「ふっ、いいのか？ 私が逮捕されていいのか？ その場合、私は今ままで阿良々木先輩が犯してきた様々な奇行を逐一有る事だけを告げ口するぞー！」

「有る事無い事じゃねえのかよ！」

「だって無い事を言うまでもなく、有る事だけで阿良々木先輩は有罪だろう」

「くっ……！」

言い返せない僕が居た。

いや、勿論行き過ぎたことは神原の前では一切やっていない。やっていない筈なのだが、僕の事だからいまいち信用出来ない。少なくとも神に誓って言うことは出来ない程度には。

我ながら情けない……くそっ、どれもこれも全部口りって奴らの所為なんだ！

「そ、それはそれとしてだ、神原！ もういいか？ 入っても」

「ん？ ああ、別にいいぞ。もうとうの昔に着終わった。寧ろ早く入ってくるがよい。いつまで突っ立っているつもりだ？」

「じゃあ言えや！ お前僕をエスパーかなんかと勘違いしてるんじゃないねえだろうな!？」

「吸血鬼パワーで透視出来るんじゃないのか？」

「寧ろなんで出来ると思ってたんだよお前は！」

「だって阿良々木先輩、羽川先輩のパンツの色当てを外したこ」

「よし入るぞ!! もういいな!!」

これ以上余計な事を言われては堪らない。今神原が口走りやがった情報は今まで全力で隠してきたトップシークレット、決して悟られる訳にはいかないのである。

僕は襖を勢いよく開けた。

部屋の中には相変わらず本の山とゴミが散乱していた。少し前に部屋の掃除を（僕が）した筈なのに、こうもすぐに汚すことが出来るのかと最早感心してしまう。どうやってるんだらうか。

しかしいつもと違うのが、そんな汚部屋の真ん中に大きな空白地点があつたことである。まるでミス터리サークルのようにその場所だけには一切不要なものがなく、驚くべきことに床に敷かれた畳がしっかりと見えていた。

サークルの中に居るのは、ちゃんと服を着た神原ともう一人——ぐつたりと横たわつた女が。

僕の彼女。

戦場ヶ原ひたぎが居た。

「004」

先刻勃発した織崎記との戦い——僕は愚かにも易々と馬鹿みたいにあつさりのこの織崎に先手を取られたのは、先程触れた通りである。僕は織崎に拉致監禁され、あと一步で殺されるところだった。

そんな時助けに来てくれたのが、ひたぎと神原だったのである。僕を拉致監禁した記念すべき一人目であるひたぎに助けられたというのは、何か因縁というか、皮肉じみたものを感じるが——兎も角、この二人のおかげで僕はすんでの所で命を繋いだのである。

それで織崎がちやっちゃと逃げてくれれば良かったのだが、そうはいかなかった。あろうことに奴は、ひたぎと神原に襲い掛かったのである。

その際、神原だけでなく、ひたぎも決して無視出来ないダメージを負ってしまったのである——重症を負ったのである。

切り傷。

それは擦り傷ではあったが、そんな言葉で片付けていいようなものではなかった。ひたぎは織崎の所有する完成形変体刀が一本”毒刀『鍍』”で斬られたのである。

傷口自体は、それこそただの擦り傷、切り傷程度のもだったが、しかしそんな規模の傷口なものにも関わらず、異常に出血量が多いのである——ひたぎはその後、気を失ってしまった。恐らく出血多量による貧血の所為だろう。

そして、その状態は今も続いている。

僕はひたぎの側に屈み込んだ。

「……全く目を覚まさない。脈はあるし、生きているのだが——見ている通りだ」

さつきまでのハイテンションが嘘のように、神原が神妙に言った。

「出血の方は、ある程度マシになってはいる。けれど、それでもまだ止まった訳じゃないんだ」

「まだ止まらないのか」

「どれだけ腕をキツく縛っても、止まらないのだ」

「……出血の勢いが下がった事だけが、まだマシになったってところか——気休めにもならないな」

ひたぎの左腕には包帯が巻かれている。恐らく初めは真っ白かったであろう包帯も、今や少しずつでも確実に流れ続ける血によって赤く染め上げられている。

「阿良々木先輩。包帯を取り替えるから、手伝ってくれ」

「……ああ、勿論」

神原主導で包帯が取り替えられていく。包帯の取り外しについて神原は一家言あるため、慣れた手つきで取り替えていく。その間に僕は何を手伝っていたかといえば、腕を縛って出来る限り血を流させないようにすること。傷付けられた時はこんな小細工何の役にも立たなかったのだが、今はある程度毒が薄まっているのか、勢いはしつか

りと弱まっていた——完全に出血を止めることは出来ないものの。

神原は巻いた包帯を縛った。それを確認して僕は手を放した。すると、巻いた側からじわと赤色が滲み出てきた。

「戦場ヶ原先輩は……大丈夫なのだろうか」

神原が言う。

「もしもこのまま血が止まらなかつたらどうなる？ いざとなれば輸血という手段があるが、これはどう説明すれば良いものか……」

「……その辺も含めて、だな」

「どういうことだ？」

「ん、いや——なんでもない」

ひたぎの傷を治す方法は、十中八九あの人が知っている。あの人には知らないことなどない、のだから——だからこそ、僕は”お願い”を拒否できる立場にないのだ。

「まあ手取り早いのは、これをやった張本人から解決手段を聞き出すってことだが……無理だろうな」

「あの女……ちよつとでも油断すべきじゃなかった。あそこで、動きを封じるついでに、腕の二、三本は折っておくべきだった！」

「腕は三本もねーよ」

「腕が三本ないなら、足もついでに折っておくべきだった！ 両足とも！」

「えげつねえなおい」

流石にそこまでいくと過剰防衛と思ってしまう。普通に腕だけで良いのではないだろうか。

「何を言う阿良々木先輩！ こっちは命を狙われているのだぞ！ 寧ろこっちら四肢だけで済ませてやるというのだから、手心を加えている方だろう！」

「まあお前の気持ちは分かるよ、すつげー分かる。ただ、やられたらやり返すと言っても、限度があるだろうって話だよ」

「むう。いつもなら『流石阿良々木先輩！ 敵に対して慈悲を向けるとは、生まれついでの紳士だな！』などと言って褒めてやるところだが、今回ばかりはとてそんなことを言えるテンションではないな」

「微妙に上から目線なのが気になるが……」

「阿良々木先輩。まさか、ここまでされて尚、円満に解決出来ればいいな、なんてことを思っているのではあるまいな？」

「……………」

神原は正座し、自分の太ももを枕にさせるように、ひたぎの頭を乗せた。要は膝枕である。

「だとすれば、言っておく——無理だぞ。絶対に無理だ。保証する」

「……………なんでそう思う？」

「この件に関わっているのが、阿良々木先輩だけではないからだ」

「それは、まあ」

織崎の標的は僕ではなく、僕”たち”だ。僕だけが標的ならばもつと話は簡単になっていいる筈だし、ましてやひたぎが傷付けられることもなかった、かもしれない。

「多分あなたは許してしまうだろう。拉致されようが、殺されかけようが、絶対に許してしまうだろう——口で何と言おうとも、だ」

「……………」

許す。

許してしまう。

「それだけ聞くと、まるで聖人か何かみたいだな。けれど神原、いくら僕でもそんなこと——」

「そんなことあるから、今こうして私たちは恋人関係、或いは愛人関係にあるのではないか」

「誤解を招く発言をするな。恋人関係はひたぎとだし、お前とはただの友人関係だ」

「私は一度、いや二度、阿良々木先輩を殺そうとしたのだ。そんな相手と愛人だか友人だかになるなど、はつきり言わせて頂くが、正気の沙汰じゃあない」

「……………今更過ぎるぜ」

それについては今まで何度も指摘されたし、警告もされた。けれど、別にその一件の後、神原は僕を殺そうとはしていない。なら、もうそれでいいのではないだろうか？



……こういう態度こそ、なあなあにするってやつなのだろうが——  
”あの子”が正したがる部分なのだろうが。

「そんなところが阿良々木先輩らしきであることは知っているさ。尊敬もしている。でも、そんなことが出来るような人間はそうそう居ないだけで言わせてくれ」

神原はひたぎの額を撫でながら言った。

「例えどれだけ謝ろうとも、同じ穴の貉であろうとも、私があいつを許すことは未来永劫無い」

私は聖人なんかじゃないんだ。どちらかと言えば悪魔の側だからな——神原は自嘲的にそう言った。

僕だって聖人じゃねえよ、寧ろ退治される側の吸血鬼だ——などと言うのは、的外れもいいところな指摘なのだろう。

神原が言いたいのはそのうちのことではない。そういうことではないのだ。

誰か一人でもしこりが残っていれば、それは円満な解決とはとても言えない。そう言いたいのだ。

……許してしまうのか？

妹と友人を殺されて、恋人を傷付けられ、自分自身も殺されかけておきながら。

それでも僕は、全て解決すると終わり良ければすべて良しの精神で許してしまうのだろうか？

僕は——。

「……すまない。少し出過ぎたことを言ってしまったな」

「いや、こつちこそ……悪いな。そんなこと、言わせちまって」

「阿良々木先輩が謝ることではないさ。阿良々木先輩の性質は、重々承知しているからな。今更謝られたところで、ぶっちゃけ特に何も思わない」

「せめて何か思ってくれ！」

最早諦められているのだろうか。

羽川にさえ軽く更生を諦められた僕なのだから、そりゃあ神原ならどうの昔にどうしようもないと悟っているんだろうな。

……無性に扇ちゃんに謝罪と感謝の気持ちを伝えたくなくてきたぞ。

「はあ……駄目だな。こういう重い空気にしたくない為に、さっきまで散々道化を演じてきたが、やはり私には道化の才能さえもないようだ。ははっ」

「待て、自虐を始めるな。つーか部屋に入る前のあれは演技だったのかよ」

「当たり前だろう。こんな状態の戦場ヶ原先輩を前にして……まともにはしゃげる訳あるまいよ。憧れの人が生死を彷徨っているのにヘラヘラとボケているようでは、もうそれはただのサイコパスだ。或いは本当に呆けているのか」

「そんなこと考えてたのかお前」

なんかこう、今まで僕が神原に抱いていたイメージが崩れていくような感覚を覚えた。いや勿論、やる時はやるしきめる時はきめる奴だってことは、蛇や鎧武者の事件を通して知っていたが、思っていた以上に真面目というか……。

「今まで、なんか悪かったな」

「待て！ 謝るな！ さっきみたいな理由ならいざ知らず、そんな理由で謝られると、ただでさえ最近薄くなりがちな私のキャラが本当になくなってしまう！ やめろ！ 私を真面目キャラに仕立て上げてあげないでくれ！」

「多分そんなことで声を荒らげたのは神原、歴史上お前が初めてだよ！」

いや待て、思わずツツコンでしまったが、今の反応さえも偽りのものだったのかも——もしやこいつって、本当はただ僕に合わせて戯けてるだけなんじゃ——。

「やめろ!! 私のイメージが下がるっ！ ほら見ろ阿良々木先輩、このBL本の山を！ これでもあなたは私がまともな人間だと言っているのか!? レズな私をそれでもまともだと!?!」

「いや、別にBL本くらい健全だろうよ。男子としては受け入れ難いものではあるけれど、まあ、普通だろ」

「やめろお!! 普通って言うなあ!!」

「いいじゃねえか、普通。普通最高」

「やめろやめろやめろ!! 幾ら阿良々木先輩と言えども、これ以上のキャラ封じは断じて許さんぞ!! そうき、私は阿良々木先輩と違ってなんでもかんでも許すような女じゃないのだ!!」

「さっきまでの話と無理矢理繋げるな! つられてあのシリアスなシーンがただの茶番に思えてくるだろうが!」

……ん?

おつと、なんか前にもあったぞこの展開。確か以前は夏休みの頃で、同じ感じで神原を弄ってて、それから——どうなった。

……なんか、嫌な予感がするぞ。

「お、おい、神原。あんまり熱くなるな! ふ、普通でいいじゃないか! サイコパス扱いされるよりはよっぽどいいだろ!? な!?」

「駄目だ!! サイコパスレベルに苛烈な性格のキャラでなければ、この激動の時代を生き抜くことは出来ない! 真面目だけが取り柄なんていう優等生キャラが好かれる時代は終わったのだ! どう控えめに見ても狂っていると思えないようなキャラクター共が蔓延る昨今、個性を全面的に押しださねば、生き残れん!!」

メツタメタなことを言いながら、神原がじりじりと近付いてくる。

僕は座りながらも後退したが、指先が壁に触れてしまった。

「やめろ神原!! それ以上僕に近付くな!!」

「かくなる上は再びだ!! 今度は阿良々木先輩のパンツだけでは無い、全部脱がせて全裸にして、ついでに私も全裸になってやる!!」

「や、やめろー!! やめろー!!」

そう言うや否や、神原は跳び上がって一気に距離を詰めた。そしてそのまま僕はされるがままに仰向けにされてしまった。

「阿良々木先輩! ご覚悟!!」

「ぎゃー!! ぎゃー!!」

「ええい、暴れるな! パンツが脱がせ辛いだろうが!!」

例え演技だろうがどうだろうが、絶対安静な重症人が居る同室ではしやぎ回り、あまつさえ規制に引っかかるようなことをしているよう

な僕たちは、わざわざ個性を押し出す必要すらもなく、もう十分狂っているのかもしれない。かかった。

かもしれないというか、もう、確定的に。

[005]

またも発動、章変えリセット。

やっぱり何も起きてないよ。起きてないったら！

「ふう……いい汗をかいた！」

「何も起きてねえつつつてんだろが！　そういうこと言うな！　誤認される！」

それはそれとして。

それはそれとして！

「じゃあまあ……そろそろ帰らせてもらおうよ。別にこのまま僕が居たって、何も出来ることはなさそうだからな」

「え？　もう帰るのか？　いやまあ確かに阿良々木先輩は包帯もロクに巻けないし、腕を縛ったりする程度しか役に立たないけれど」

「お前は少し遠慮してもんを覚えろ」

何が普通だ。

個性しかねえじゃねえか。

「せめて、昼ご飯くらい食べていったらどうだ？　ああ、勿論私の手料理ではないが」

「そりゃあ有難い提案だけれど、昼食はもう決まってるんだよ」

有難い提案というのは本心だ。神原のおばあちゃんの作るご飯は何度か御相伴に預かったことがあるけれど、その時出された料理はまるで旅館に泊まった時に出される料理のようで、非常に美味しかった。

だから食べたいのは山々ではあるのだけれど、生憎今日の昼ご飯は”ある場所”で食べることが決まっている。いや、それはもう昼ご飯と言っているのか微妙なものではあるが……。

「好意だけでも受け取っておくよ」

「うむ！ ついでに行為も受け取ってくれ！」

「神原、少しは真面目な素をちらつとだけでも覗かせてくれていいんだからな？」

本当、八九寺とは違うベクトルで日本語の難しさを教えてくれる奴である。

「むう……では、何を食べてくるのかは知らんが、代わりに私が代金を肩代わりしよう。はい、五万円」

「おいこら待て」

僕は平然と五万円を突き出した神原の肩を掴んだ。

「な、なんだ阿良々木先輩！ 急に肩なんか掴んで——はっ！ 分かったぞ阿良々木先輩！ このまま押し倒すつもりだな!? 昼食とこののは、そういうことだったのか！」

「そういうことな訳ねえだろうが!!」

「ならば是非もない！ 召し上がれ！」

「五万円を手に持った状態でそんなこと言われても可愛くもなんともないわ!!」

五万円さえ視界に入らなければ可愛いのは認めるけども！

「神原、お前のその行動の意図を聞こうか」

「五万円か？ それとも召し上がれ？」

「どっちも聞きたいが、取り敢えずは五万円の方から聞こうか!」

僕は神原の肩から手を離れた。

「何を思っって五万円を出した！ 何の魂胆があつて、どういうつもりでその行為に打って出た!」

「え？ いやあ、昼食を食べていけないなら、せめて昼食代だけでも出してやろうと」

「何をどうしたらそんな思考に辿り着くんだよ!? つーか五万って……そんな額をよく渡そうって気になれるな!? しかもお前のことだから、別に返さなくてもいいとか言うんだろ!」

「おお、流石阿良々木先輩だ！ 私のことなどお見通しということだな！ いやはや恐れ入った！」

「僕はお前が怖いよ!!」

知っている方は知っているだろうが、神原家は裕福な家庭なのである。つまり有り体に言ってしまうと、こいつはいいところのお嬢様的な奴なのである。とても信じられないし信じたくもないだろうが。

「つーかそんなの抜きにしても……後輩から金を借りる先輩が何処にいるんだよ。先輩つーか、もう僕OBだぜ」

「そうか。そこまで言うなら、じゃあ要らないな」

「おいおい待てよ、要らないとは一言も言っていないぞ」

僕は神原の手を掴んだ。その手に握られているのは五枚のお札。諭吉さんが描かれている。

「ただな、僕は先輩として注意を促しているだけだ。今後はこんな風に軽率にお金を使うなっことを。飽くまでも今後だから、今回は有難く使わせて頂きますが」

「阿良々木先輩……」

神原は憐れむような目つきで僕を見た。自分から出しておいて、それはしないのではないだろうか。

念の為に言っておくが、僕は普段から金にがめつい強欲な男ではない。常に謙虚な男の中の男、どっかの詐欺師とは違うのである。ただ、実の所今現在、僕の全財産は限りなくゼロに等しいのだ。先日ドーナツパラダイスで、僕の財布の中身は纏めてパラダイスに飛んで行ってしまった。今僕の財布を潤しているのは、妹に土下座して貸してもらった一万円札だけなのである（借りたのは当然火憐にだ。あいつは利子の概念を理解していない）。

「分かった……分かったぞ、阿良々木先輩！ お金に困窮しているというのなら、仕方ない！ 追加の二万円だ！ 持って行け！」

「お前さつき僕が言ってたことちゃんと聞いたのか？」

とまあそんな感じで。

中々話が纏まらなかつたものの、神原から五万円を借りた僕は（追加の二万円は当然固辞。ちゃんと利子をつけて返す約束もした）神原家を後にした。

なんだか結果だけ見ればお金を借りるために神原家を訪れたように見えるかもしれないが、違うぞ。僕は飽くまで、神原とひたぎの様

子を見に来たんだからな。

僕は徒歩で昼食場所へ向かった——時刻は午前十一時頃過ぎ。今日は4月1日で、俗に言うエイプリルフールである。

だからと言って別に嘘を吐いたりする気はないので安心してほしい。僕は貝木と違って信頼できる語り手だ。それに、エイプリルフールなどと言って嘘を吐いていいのは午前中までだと聞く。もうすぐ正午であり、流石に嘘を吐くにも遅過ぎるだろう。

「……………嘘か」

嘘。

というか、冗談であって欲しかった。

日和ちゃんが『くらやみ』に呑まれたのは、ほんの数時間前の話である。彼女が呑まれた時、日付はまだ3月31日であった。

…………これが4月1日だったらどうだという話ではないが、ふとそんなことが頭をよぎった。あと少しで月を跨げたのに、ぎりぎりですれが許されなかった少女のことが思い浮かんだ。

許されず、裁かれた少女のことを。

「そのように暗い気持ちになるな、お前様。暗いのはお前様の影だけで十分じゃつちゅーの」

「忍」

ふと気付くと、僕の影の上に麦わら帽子を被った金髪幼女が立っていた。幼女は——忍野忍は、暑そうに手のひらで顔を煽いだ。

「やれやれ、これだから太陽というやつは。春だろうと夏だろうと関係なく眩しい日光と暑さを送り込んでくる。やはり早急に滅さねば、そろそろ儂の身が危ないのう」

「暑いつつっても、まだ4月だぜ。そんなこと言ったら7月8月、どうするんだよ」

「たわけ。儂はこれでも一応は吸血鬼なのじゃぞ？ 幾ら搾かすとは言え、吸血鬼には変わりないのじゃぞ？ 4月だろうが7月だろうが、陽の光はいつだって儂らの天敵じゃ。並の吸血鬼なら、4月どころか冬の日光にさえ燃やし尽くされてしまうわ」

「それでも、まだマシつちやマシなんだろう？」

「マシっちゃマシじゃ。しかしそれは大した違いではない、微々たるものじゃ。分かりやすく例えれば、カスタードクリームとエンゼルクリームの違い程度のものじゃ」

「それ割と大きいじゃ……」

ドーナツと言つても、基本的に僕は標準的な形のチョコレートとかフレンチクルーラーとかしか食べないからよく知らないけれど。

「なら今日食べれば良いじゃろう。よかったな、食うものが決まって」  
「涎が垂れてるぞ。お前横取りする気満々じゃねーか」

そう。今日の昼ご飯はミスタードーナツで食べることになっていたのである。

そもそも何故ミスタードーナツかと言うと、先日の戦いで忍の活躍を労うためである。いや、活躍というなら神原もひたぎも、それに斧乃木ちゃんや扇ちゃんだって活躍したのは間違いないけれど、問題は戦闘の過程で、僕が忍を「絶刀『鉋』」で刺し貫いてしまったことにある。

一応ちゃんとした戦略であり、あの行動が織崎の隙をついたのが僕たちの勝利を決定付けたのだが、しかし忍に一切断りなく突然背後から刺してしまったのである。当然、怒られた。

だから辛いとは言ったが、これは償いという側面もまた強いのである——幸い、僕より実年齢上大人な忍さんはドーナツ十個程度で手を打つと仰って下さった。故に一万円を借りたのである。まあ予想外な収入があつたので、ここは十五個くらい購入してやろうと思つてくれるけれど。

ちよつとしたサプライズである。他人のお金でサプライズとは格好悪いけれど。

つーか、普通に情けないわ。

「かかつ、何を食べようかの？ やはりゴールデンチョコレートは外せん。ポン・デ・リングは当たり前として、フレンチクルーラー、オールドファッシュョン……」

神妙な顔をしてドーナツ名を羅列する忍。多分、こいつは全部覚えている。形と味に至るまで。



「エンゼルフレンチ、ハニーディップ……おお、そうじゃ！ 何やらチラシに、和ドーナツなるものが記載されておった記憶があるぞ！ 確か抹茶味だったような……ふむ、抹茶はそこまで好かんが、まあミスタードーナツの製品じゃ、美味いに決まっておるから食ってみるか」  
「抹茶味って、別にどこが作ろうともそんな大きく変わらねえだろ。無難なものにしとけばどうだ？」

「馬鹿かうぬは!! 聖地たるミストを、そんじよそこらの店と一緒にするなよ!! 次元が違うのじゃ次元が!!」

「分かったよ！ つーかうるせえ！」

叫ぶ僕たち。周りに人は殆ど居ないにせよ、さぞ目立つ光景であるだろう——が、しかし今回ばかりは、僕たちはまだ目立っていない方だと断ぜざるをえなかった。

「……なんだあの人たち」

僕たちの視界に入ってきたのは、オリーブ色のローブを着た十人強くらいの集団だった。ローブには大きな十字架があしらわれており、何人かは首から十字架のネックレスをぶら下げていた。そんな連中が白昼堂々と公道を歩いているのだから、異様以外の何物でもない。  
「っ……………」

恐らく、普通の人から見れば、この奇怪な集団は、それこそ怪しげな宗教団体にしか見えないだろう。しかも十字架、日本由来の宗教団体であるとは思うまい。絶対に誰も関わろうとしない筈だ。

僕も御多分に漏れず、関わりたくはなかった。なので僕は身を出る限り縮こめさせて、目立たないように、素早く集団の横を通り過ぎた。僕の気持ちを汲んでか、忍は即座に影に沈んでくれた。

通り過ぎた後も、暫くは早足で歩き続けた。そして、ミスタードーナツの店舗が見えたところで速度を緩めた。

忍が影から浮上する。

「なんじゃ、奇妙な連中も居たものじゃのう。真昼間から、あんな目の痛くなるような十字架なんか身に付けて、暇な奴らめ」

忍は振り返って毒付いた。

「じゃがまあ、あれは勧誘の仕方を間違えておるわ。もつと身を潜め

て誘わねば、誰もあんな胡散臭い宗教に入るまいよ。かかつ！ さて、お前様よ！ あのような連中のことなど忘れて、ドーナツを食おうではないか！ 目的地はすぐそこじゃ！ 走れー！」

「お、おうー！」

走れと言われても、どうせ歩いて50歩も掛からない距離。一応走ったけれど、到着に30秒さえも掛からなかった。

ミスタードーナツに到着。

「かかつ！ かかつ！ さあさあドーナツ、ドーナツじゃ！ 入るぞお前様っ！」

「へいへい」

楽しそうにはしゃぐ忍。どう見ても性質が外見に引つ張られてやがる幼女を見ながら、僕はさっきの集団のことを考えていた。

あれは。

見たことのない姿ではなかった——忘れる筈もない。忘れることなんて出来る訳がない。あのローブを見たのは、そう、今から丁度一年前。

一年前の春休み、僕はあれと同じ服を着た男と会った。

「……………」

「む？ どうしたお前様。焦らしプレイか？」

「プレイとか言うな——急かすなよ。じゃあ、入ろうぜ」

「うむー」

「……………」

忍はミスタードーナツのドアを開けた。僕は忍に続いて入店し、ドアを閉めた。

一抹の不安を胸に抱きながら。

[006]

「ばないの！ ばないの！！ じゃっばないのー!!!」

「一口毎に叫ぶな。他のお客さんもいるんだから、もうちよい静かにしろ」

本日のミスタードーナツは、客足はやはりそこまで多くはなかったものの、ちらほら席が埋まつていた。ドーナツといえばおやつという印象があるけれど、それは逆に手早く済ませられるということであり、お客さんはスーツ姿の人が殆どだった。

僕と忍は空いている席に座った。僕のトレイの上には、チョコレートドーナツと忍に薦められたカスタードクリーム、エンゼルクリーム。あと、新商品だというコットンスノーキャンデーのストロベリーヨーグルト。また、これは買ったのは僕ではないけれど、ポン・デ・リングとフレンチクルーラー、それにフィナンシエドーナツのプレーンとやらが。

忍のトレイにはゴールデンチョコレートが二つ、オールドファッシュョン、オールドファッシュョンハニー、エンゼルフレンチ、ハニーデイツプ、チョコリング、ストロベリーリング、フィナンシエドーナツのチョコ、及びシユガー。そして話題の和ドーナツであるわらびもちサンドあずきホイップ、わらびもちサンドあずき抹茶、オールドファッシュョン抹茶、オールドファッシュョン抹茶チョコ、抹茶黒蜜スティック。そして手にはポン・デ・抹茶クリームが。

総額、二千八百四円。十個のドーナツを二十円引きで買えるクーポン券があつたので、二百円安く買えた。

「なんじゃこれ！ 超美味くない!! いやね、そりやあそうじゃよ、ミスタードーナツのドーナツが美味くない訳がないのは十分分かっておつたよ？ しかしやはり心の何処かで、『まあ抹茶は抹茶だしなあ』という気持ちがあつたのじゃ！ しかしなんじゃこれは！ そのような僕の疑念を一瞬で消し去りおつたわ！ 僕が間違つておつた、ごめんなさい！ 僕もまだまだ甘かった……そう、甘い！ 抹茶と言えば苦いという印象が非常に強いが、このドーナツはそうではない！ 確かに抹茶特有の苦味も混じっておるが、しかしほのかに混じる甘みがそれを見事に中和しておる——否！ 中和ではない、互いが互いを引き上げておるのじゃ！ こういうのを芳醇というのか!? お互いに殺しあうのではなく、引き立てあつておる！ 一歩間違えば均衡が崩れてしまうにも関わらず、何という絶妙な味作り!! しかも!! こ

ここにポン・デ・リング自体の持つ独特のもつちりとした食感が加わってこれは……ぱない!! ぱないの! お前様!!」

「そうか。美味しいか。よかったな」

「うむ! 開発者の頭を撫でてやりたい!」

「でもやっぱ上から目線なんだな」

長い食レポを聞きつつ、僕はコットンスノーキャンデーを食べた。うん。美味しいな。多分部類としてはかき氷に分類されるのだろうけれど、そういう氷を強調したようなシャリつとしたものではなく、スノーなんて名前の通りのフワツとした感触。その理由は多分、氷が極限まで薄く切られているからだろう。手間をかけて作られているのを感じるぜ。

「うーむ……お前様、なんか妙な感覚を覚えんか? 何かこう、時空が歪んでいるというか、時期が狂っておるというか」

「忍、そういうことは口に出しちゃいけない約束だぜ」

「なんだか、一ヶ月ほど後に発売される筈の商品を食べているような気がする」

「それ以上言うんじやない。メタ発言は大概にしておけよ忍」  
色々と危険すぎる。

いやまあ、時空の歪みはもう今更過ぎる話ではあるんだが——プリキュアなんてまさにその最たるものだし。今じゃあプリキュア、魔法つかいだもんな。

なんてメタな話題は置いておくとして。

「……忍」

「なんじやい」

僕はスプーンをトレイに置いた。

「さっきの連中——あれ、なんだと思う」

「ただの宗教団体じやろ。それ以上でもそれ以下でもない——ましてや、それ以外でもなからう」

忍は即答した。まるでこの話題を避けたいかのよう。

「それは分かってるよ。そうじゃなくてさ」

「お前様は儂に何を求めている? 儂は信仰なんぞ知ったことではな

いし、宗教なんてこれっぽっちも興味はない。ましてや新興宗教の事  
なんて、知るものか」

「……気付いてたのか」

「お前様よ、儂の目をなんだと思つとるんじや？ あれだけ堂々と、何  
も変わつとらん服装で、しかもそれが大量におるときた。嫌でも思い  
出すわい。否が応でも思い出してしまふ」

そう言うと思は、ドーナツを次々に食った。がぶがふと。むしゃむ  
しゃと。もぐもぐと。

見るからに気分を害したらしい——当たり前だ。寧ろあれを見て  
平静としている方がおかしいのだ。

新興宗教——忍はそう言った。

僕と忍の認識が正しければ、あれは名もなき宗教団体。果たしてい  
つ頃成立した団体なのかは知らないけれど、忍によると”最近”らし  
い。尤も、それは忍がまだ真つ当な吸血鬼だった頃に聞いた話。今で  
はどうか知らないが、少なくともあの頃の忍の時間観は、ぶっちゃけ  
当てにならないと言つてもいいので、もしかすると五十年ほど前だつ  
たりするのもかもしれない——いや、いつ出来たかは、どうでもいいん  
だ。

問題は。

「問題は——なんであの集団が、ここに居るのかつてことだ」

あの教団の教義、それは、”怪異の否定”。

この世には怪異なんて存在しない——そう言い張る団体である。  
その中でもあの団体が標的としているのは、他でもない、吸血鬼。

信仰による吸血鬼退治の専門家集団。それが連中の裏の顔である。

「……意趣返し、かの。身も蓋もない言い方をしてしまえば、復讐か」

「復讐——」

「あやつらのトップはここで死んだからもう。……ま、他人事でもな  
いが」

「他人事どころか、寧ろ僕たちは当事者だろ……つーか、下手人か」

あの団体『新興宗教』の大司教にして、裏特務部隊第四グループ  
に属する黒部隊の影隊長（やはりいつ思い出してもガチガチの直訳で

ある)は、僕たちの住むこの町で死んだ。

殺されたのだ——伝説の吸血鬼に、喰われて死んだ。

「つつても……それで今更、僕たちを退治する、なんて言われてもな。確か僕たち、無害認定は解かれてない筈だぞ」

「無害認定については知らん。じゃが、それが海を越えた向こう側の専門家連中に対しては有効なのかどうかは、はつきり言って怪しいところじゃぞ、お前様」

忍はゴールドデンチョコレートを頬張りながら言った。口の端にチョコレートが付いている。舐めたい。

「あのガエンがどれだけの権限を持っておるのかは知らぬが、しかし世界全体の専門ども全てを束ねておる訳ではあるまい——精々が日本という一国内が統治範囲という程度じゃろうしな」

「まあ……そりやそうだ」

仮にこの世界の全専門家を束ねる存在なのだとすれば、そもそも僕たちなんかの前には現れない筈である。いや、確かに今日の前で口の端に付いたチョコレートをペロペロ舐めている幼女は、昔は世界に名を轟かせた伝説の吸血鬼の成れの果てだけれど、だからと言ってここまで良くしてくれることなんてあるだろうか？

まあ、立ち振る舞いはフランクな様でいて、それでもやっぱり雰囲気は大物のそれだけ——あの人はそういう、世界クラスって訳じゃない気がする。

それでも、エピソードを呼び寄せたりしてたけど……まああれは、あくまでも依頼って形だから。

「つつてもまあ、そもそも日本国内においても無害認定って、微妙な所だしな——正弦みたいに、無視してくる奴も居ないとも言切れない」

「海外なら尚更じゃな。となればもう決まりじやろ。あやつらは農らを退治しに来た——それ以外に考えられるか？」

「……確かに、それが妥当だよな」

僕はコットンスノーキャンディーをスプーンですくった。食べた。

僕たちを退治しに来た——か。

確かに。確かに、それが妥当だし、一番ありえそうな線だ。あいつらとこの町の関わりなんて、ほぼそれ位しかないだろう。或いは態々こんな田舎に勧誘活動をしに来た訳でもあるまいし。でも。

何かが引つかかる——そもそも、何故今になって狙いに来た？ 僕たちを退治するなら、春休みが終わった直後の段階で大挙して押し寄せてきてもおかしくはないのに。

どうして今？

一周忌——なんて概念は、むこうにあるのだろうか。仮にそんなかんじの理由で復讐するというのなら、随分と暴力的な宗教もあつたものだが。

いや、暴力的ではなくとも、連中は非人道的ではあるのか。

何せトップが平然と人質をとるといふ卑劣な真似をやってくる団体だ、他の連中だってまともな奴らじゃあないだろう。

それに復讐と言われても、こつちとしてはいい迷惑だ。確かにあいつらは人類の味方で正義の味方なのかもしれないけれど、それでも僕は“あいつ”を心底から肯定することは出来ない。

人間としても。

吸血鬼としても。

やはり許せないのである——ほら、やっぱり僕にだって許せない相手ってのが居るじゃあないか。いや、今そんなことを考えても仕方ないのだけれども。

だからまあそんな訳で、本当に復讐だとすれば、当然撃退する覚悟はあるが——本当に復讐なのであれば。

引つかかる——何かを忘れているような感覚があるのだ。ちよつと前までは嫌という程味わった、まるで歯に小骨が挟まっているような気持ちの悪い感覚が。

「……でも、このまま関わらずに済むなら、それに越したことはないけどな。もしかしたら僕たちの知らない間に、臥煙さんとか斧乃木ちゃん辺りが解決してくれるかもしれないし」

「オノノキ嬢は兎も角、ガエンに任せるのは日和見的な観測が過ぎる

と思うが……ま、そうじゃな。目には目を、歯には歯を、吸血鬼には吸血鬼を——そして、専門家には専門家を、じゃ。連中のことはあやつらに任せておくのがよかろう。無理に口を挟む必要も、首を突っ込む意味もないわ」

「だな」

僕はコットンスノーキャンデーの残った果汁と氷をスプーンでかきこんだ。忍もなんだかんだと言いながら、喋りながらも食べ進め、最後の一口を食べ終えた。

「うむ！ 満足じゃ！ 儂は満足じゃぞ、お前様よ！」

「そうかい。じゃ、最後にドーナツを幾つか買って、帰るか」

「む!？」

忍はテーブルから身を乗り出し、心配そうな顔で僕をジロジロと眺めてきた。金色の両目が僕の目を凝視する。僕はたじろぎながらも見つめ返す。

「な、なんだよ?」

「お前様……お前様は本当にお前様か?」

「当たり前だろ。僕はお前のご主人様、阿良々木暦だぜ」

「そ、そうか? むう……」

「?」

忍は腕を組み、元通りに座り直した。

「なんだよ。僕、何かおかしいことしたか?」

「した。物凄くおかしいことをした。うぬらしからぬことをしたぞ」

「僕らしからぬこと? なんじゃそりゃ」

「だって、お前様……儂が何も言わずとも、自発的にドーナツを買おうといいたすなど、お前様らしくないではないか」

「あー……」

それか。

どうやら忍は、僕が『ドーナツを買って帰ろう』と言ったことに困惑したらしい。まあ確かに、いつもなら忍にねだられるまでは買わないからな。

「どうい風風の吹き回しじゃ? 儂、この後うぬに何かされるのか?」



「人聞きの悪いことを言うな。……あと、別にお前のために買うドーナツって訳じゃないぞ」

「なんじゃと!!?」

忍は再び身を乗り出した。今度は怒りに満ちた顔で、まるで金色の炎が揺らめいているかのような目で、僕を睨み付けた。

「おいおいお前様よ? 聞き間違いかろう? 今、なんと? 儂のためのドーナツではない、とか、なんとか聞こえたような気がするが? おい?」

「そう言ったんだよ、その通りだったの——離れろ忍。顔が近い!」  
「ふん!!」

忍は腕を組み、踏ん反り返るようにして座り直した。

「失望した。呆れた。呆れ果てたぞお前様! 少しは気の利いた奴になったなと労ってやろうと思つたら、これじゃ!! はっ! いっそのことうぬの腹に穴を開けて人間ドーナツにしてやろうか!」

「やめろ! まあ、落ち着けよ忍。別に今回は持ち返らなくても、十分食べただろ? それで我慢しろよ。元伝説の吸血鬼の鷹揚さの発揮どころだぜ」

「儂に鷹揚さなど存在せぬ!!」

「言い切りやがったこいつ……!」

しかも胸を張って自慢げに。いやいや、自慢げにすんなや。誇るな誇るな。

「ちゅーか、なら誰の分じゃ? まさか、お前様自身の分という訳ではあるまい?」

「まあな」

「じゃあ誰の分じゃ? 儂を差し置いて、誰に?」

「八九寺の分だよ」

「ハチクジい?」

忍は怪訝な顔をした。

「解せぬ」

「いや解せよ……ほら、八九寺の家——北白蛇神社。あそこが今どうなってるのかまだ見てないじゃん。だから、この後見に行くついでで

八九寺にドーナツのお土産でも、みたいな」

「解せぬ……」

「はあ……じゃあお前も一緒に食べればいいじゃねえか。八九寺が許可してくれるかどうかは知らねえけどさ——斧乃木ちゃんの情報が正しければ、多分あの神社倒壊してると思うんだよ。流石に八九寺の奴も、漸く見つけた家が速攻で潰れたとなっっちゃあ落ち込んじゃまってるだろうし」

「ぬうう……」

忍は苦虫を噛み潰したような顔をした。流石にここまで聞いても尚文句を言うような気は、ないのだろう。

成長したなあ。

「なんなら、お前が選ぶか？ 別にいいぜ。どうせ僕、センスのいい選択なんて出来ないし」

「儂が食う訳でもないのに、選ばねばならぬのか……お前様、鬼畜じゃのう」

「いや、だからお前十分食べただろ……ほら忍。お前のセンスを見せてくれよ。鷹揚さはなくても、ミストを知り尽くしてるお前ならセンスあるチョイスぐらい楽勝だろ？」

「……………」

忍は立ち上がった。僕もそれをみて立ち上がった。

「……まあ？ 儂はミストの妖精じゃし？ ミストの看板娘じゃし？ そりゃあ確かに素晴らしい完璧なチョイスをするなど造作もないことじゃがな？ ぶっちゃけ目を閉じても匂いだけで選べるし？」

よし、ちよろいぜ。ミストが関わるとマジでちよろいところ、全然成長してないな！ いや、匂いだけでドーナツを判別出来る領域に達してるってのは、ある意味成長か？ 何の役に立つのか分からない成長だが。

「ふ、ふん！ 仕方あるまい！ うぬがどうしてもという方には仕方ない！ この儂のクールでハードなチョイスを、しかとその目に焼き付けるが良いわ!! かかかつ!!」

「おう！ その意気だ！ 頼むぞ忍！」

「かかつ！ かかつ！」

さつきまでの不機嫌が嘘のようにご機嫌になった忍は、スキップ混じりで陳列棚へ向かった。ショーケースをまじまじと眺め、目を輝かせながら選ぶ忍は、誰がどう見ても、外見相応の幼女にしか見えないのであった。

第五話　しのぶハート　其ノ貳

〔007〕

ミスタードーナツを後にして、数十分後。僕たちはお土産のドーナツ（忍野忍セレクション）を片手に北白蛇神社までの階段を上っていた。

北白蛇神社はこの山のてっぺんに建っており、通うのも一苦労なのである。そしてそういう地理的な事情もまた参拝客が増えない理由の一端を担っている。

まあ一応こんな場所に建設された理由はちやんとあるのだが、しかしそれを事細かに説明すると無駄に長くなってしまうので割愛するとして。

「なあ忍……」

「なんじゃ」

「改めて思うんだが——お前のそれ、せこくないか？」

「それとはなんじゃ？　せこい？　何のことやらさっぱりじゃ」

「お前のその……影に潜るスキルだよ！」

そう。今僕は自分の足で階段を上っているのだが、一方でこの忍はと言うと、最初の方は普通に僕の隣で同じく上っていたのだが、中腹付近で、

「疲れた。めんどい」

と言うと、さっさと僕の影に潜ってしまったのである。楽をしたいがために。

　　楽するために！

「なんで諦めちゃうんだよ！　最後まで登り切ろうぜ！」

「えー」

「いや『えー』じゃなくてだな」

「お前様も酷なことを言うようになったのう……あのな、我があるじ様よ。まあそうかつかするでない。まずは儂の言い分を聞け。そうすれば納得するじやろう」

「……………」

忍は言い分……というか言い訳を始めた。

「よいか。まず僕は疲労しておる」

「ああ、疲労してるな。僕もだけど」

「さつきドーナツを食べたばかりじゃ」

「ああ、食べたばかりだな。僕もだけど」

「うむ」

忍は満足気に頷いた（想像）。

「ドーナツを食べた幸福感に満たされた後疲労すると、どうなるか分かるか？」

「……より一層辛くなる、とかか」

「そうじゃ！ 勿論言うまでもなくこの僕にこの階段を登りきる事が出来るほどの筋力や体力がないと言うつもりなど毛頭ない。じゃがな、一度幸福感に浸ってしまえば、その次に襲ってくる疲労というもの通常以上の辛苦に感じてしまうものなのじゃ……分かるか？」

「まあ、分からなくてもない」

「じゃろう？ ……そして、疲労が溜まるとどうなる？」

「……筋肉痛？」

「違う！ あーもーなんで分からんのかなーこの鈍感め！」

罵倒された。言い訳中に罵倒するとは、中々思い切ったことをする幼女である。

「答えは『眠くなる』じゃ！ いいか！ つまり僕が言いたいののはじゃな、今僕は非常に眠い！ 昼寝をしたいのじゃっ！」

「偉そうに言うなや！ 何が言い分だ、結局のところお前楽するどころか僕が上る時間を利用して惰眠を貪ろうとしてるだけじゃねえか！」

「そうじゃ！ 分かったか！ 分かったら黙って黙々と階段を上るといい！ 僕は眠いんじゃ、喋るな！ 考えるな！ ひたすらに上れ！」

「うるせえよ！ お前まさかそんな理由を話して許してもらえらると思ってるじゃねえだろうな！」

「なんじやと!? まだ文句があるのか!?」

「文句しかねえよ! 言いたいことが山のようにあるわ! 山登りだけにな!」

「はああ~~~~」

影の中から呆れたような溜息が聞こえた。

こつちが溜息吐きたいっての。

「……あのなら、お前様」

「なんだ」

「お前様は、影に縛られた者の気持ちを考えてことがあるか? 自由に動くことを許されず、ずっと闇の中で過ごす日々を、想像してみたことはあるか?」

「……ない、けども」

確かに、考えたこともなかった。

忍は続けた。

「辛いぞ。辛苦じや——このような山を登る事なんかとは比較にならぬほどの苦行じや。そのような日々を、儂は送っておるのじやぞ」

「……いやでもお前、なんか僕の影の中ではゲーム作って遊んでるとかなんとか」

「それはそれ、これはこれじや、たわけ! 儂が今話しているのはそういう話ではなくてだな! もつと、こう……なんかあれじや! そう、今までの生活との差を語っておるのじや!」

「差……」

「そ、そう! 環境の差じや! かかつ、お前様は儂の何を知っておる? 儂が日本に来るまでの生活を、うぬは考えたことがあるか? ン?」

「お前が日本に来るまでの、生活——」

……考えたこともない、というか、考えようとしなかった。考えるという選択肢を、僕は能動的な排除していた。

今は今で、昔は昔——忍がキスショットであった頃、どう過ごしていたか。

まるで想像もつかない。

いや、忍の過去だけに限らず、吸血鬼は普段何をして過ごしているんだ？ 春休みの僕は、羽川と雑談したり漫画を読んだりしてた訳だが――。

「ほら、分からんじやろう？ かかつ。そうじゃ、僕はうぬが想像も出来ぬような毎日を送ってきた……うぬは春休みとやらの期間中を地獄と表現したが、僕にとっては毎日が地獄じゃった。死んでは蘇り、死んでは蘇り――何度も何度も、同じ事の繰り返し、無間地獄じゃ」  
忍は感慨深げに言った。影に潜っている所為で、その表情は見えない。

僕は階段を上り続けた――いつの間にか、頂上まで後少しといったところまで到達していた。

「じゃからお前様よ。僕がこうして影の中で一時の休息をとることくらい、許してくれてもよいではないか。もう後生じゃ、寝かせてくれ」  
「忍……」

「お前様……」  
「……………」

僕は思ったことを率直に言った。

「……で、それと階段を上らないことに何の関係があるんだ？」  
「ちっ!!」

影の中から舌打ちが響いてきた。

「気付きおったか……僕が途中から論点を華麗にすり替えたことに」  
「いや華麗でもなんでもなければ論点のすり替えさえまともに出来てねーよ。ただ話が脱線しただけだろうがよ――お前の毎日？ ああ、そりゃあお前は純正の吸血鬼だったからそうだろうな。それは気の毒とは思うぜ。思うが、それとこれとは関係ないぞ」

「ええい小賢しい！ お前様、いつからそんな細かいことをぐちぐちと言うようになった？ 僕の知るお前様は、もつとストレートで爽やかな好青年だったぞ！」

「勝手に記憶に補正をかけるな！ ストレートだの爽やかだの、そんなもん僕から遠くかけ離れた形容詞だ！ いやまあストレートと言えば単純な行動しか出来ないのをストレートと言うかもしれないが

！」

「つか小賢しいというならお前の方が小賢しいわ！ 出来てないにせよ、論点のすり替えなんてことを企みやがって！」

「はっ！ ああそうじゃそうじゃその通りじゃよ！ 疲れることはしたくない、昼寝したい！ それだけじゃ！ ほら、潔く認めてやったぞ！ もう言及するなよ。次何か言ったら、うぬのエロ本を家中にはら撒いてやる」

「うっそだろお前」

やめろ。

それはマジで洒落にならん。やめろ。

「どうじゃ？ もう何も言わぬか？ おっと、もうミスタードーナツは食わせないという手は通用せんぞ。ここ最近で僕は沢山のドーナツを食べた。暫くはまあまあ満足じゃ」

「マジかよ」

「じゃあなんであんなに駄々捏ねたんだと言いたくなるが、しかし先んじて僕の手札を封じてきたか……こいつ、学習してやがる。」

「……あーはいはい、分かったよ。どうせあとちよつとだけだし——寝ろよ。ただし、僕はお前を起こさないからな。八九寺とドーナツを食べてる最中にお前を起こそうなんて気は一切ないからな、覚悟しとけよ」

「かかっ！ 儂を甘く見ておるな？ ドーナツの気配があれば儂は自動的に起きるわ！ 起こしてもらおうまでもない！」

「くそっ、ドーナツ厨め……！」

「出来ればミスド厨と呼んで欲しいもんじゃの。もしくはミスドの看板娘」

「お前みたいなものぐさ、看板娘になれる訳ねえだろうが」

「どうせ1日も保たずに面倒臭がつて、結局さっさと辞める未来しか見えない。」

マスコットキャラの仕事量を舐めるなよ。

——それつきり、忍の声は聞こえなくなつた。多分本当に寝てしまったのだろう。



昼寝だの惰眠だの言ったが……しかし、改めて考えてみれば、そもそもこれが吸血鬼にとつての普通なのだ。昼に眠り、夜に起きる——疲労というなら、そもそも昼に活動している時点で相当疲労が溜まっているのかもしれない。

……まあ、だからと言ってせこいなあと思わない訳ではないのだが。

影に縛られ、自由に身動きがとれないと言っても、その状況を自分の利益となるように使っているのだから、辛いだなんだと言っても説得力は皆無な訳で。

「……けどまあ」

考えさせられる話ではあった。

忍野忍——僕は彼女の過去を何も知らない。キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードについて、僕は余りにも無知だ。今更だが、気付いてしまった。

いや、とつくに気付いていたのだ。だが、敢えてそれを話題に出さなかった。

忍野忍は忍野忍であり。

キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードは、失われた名前なのだから。

寧ろ過去を詮索する方が間違っている——そう思っていた。どっちなのだろう？

僕はパートナーとして、忍の過去——キスショットのことを、知るべきなのか？

或いはパートナーだからこそ、知らずにいるべきなのか？

……いや、それはまた今度考えよう。今は、八九寺だ。想いを馳せるなら神社のことであり、八九寺のことだ。

切り替えていこう。

既に残る階段はたったの一段となっていた。僕は最後の段に足を掛け、そして、僕の視線は鳥居をくぐり本殿へと向けられた。

向けられる、筈だったのだ。

倒壊して、見るも無残な本殿を見て想いを馳せる筈だった。

けれど。

そこで僕が見たものは。

「008」

「おや？ ……これはまた、珍奇な来客です」

予想外の事態に固まり、最後の段に片足を乗せたまま僕は硬直してしまつた。

——何故。

何故、この北白蛇神社にお前達が居るんだ。

本来八九寺が居る場所に居たのは、あの可愛らしいツインテールの少女ではなく、十字架をあしらつたローブを着た大人の男女たちだつた。

『新興宗教』の信者たち。

理解が追いつかない僕を尻目に、その中の一人が声を掛けてきた。日本語で喋つたその滑らかな金髪の男は、首を、そして胴をこちらに向けた。

「私の記憶が正しければ、私たちがここに居る間はこの境内に何人たりとも入り込めない筈だつたのですが……」

男は首を傾げた。開いているのか閉じているのか分からない糸目からは、その真意は読み取れない。

「どうやら手違いがあつたようですね。或いは、こちらが騙されたか——何れにせよ、困つたことになりました」

男はそう呟くと十字架を握つた。  
十字架——吸血鬼最大の弱点の一つ。

「ですが、私は赦しましょう。我らが神の御言葉に従い、赦しましょう——嗚呼、喜ぶといい。貴方は今救われました。今赦されました。貴方の罪は清められました」

十字架を天に掲げ、男は独り言のように言った。  
なんなんだ、こいつは。

騙された？ 誰に？ 赦す？ 神の御言葉？ ただでさえ理解が

追いついていない僕の脳に追撃を掛けるのはやめて欲しい。全く理解出来ない。

ただ、あの狂信的な態度——あの姿は、まさしく”あの男”を連想させるものであった。いや、その態度だけではない。髪型こそ違えど、その佇まいや糸目は。

あの狂信者。

ギロチンカッターにそっくりだ。

男は暫く天を仰ぎ、そして漸くこちらを向いた——しまった。さっきの間に逃げれば良かった。

けれど、何故か出来なかった。

嫌な予感がする。連中を見掛けてからずっと続く胸騒ぎがさらに大きくなっている。

「さて……改めて、ご挨拶申し上げます。こんにちは、青年よ。私には我らが教団で大司教を務めさせて頂いております、エッジナイフです。貴方にも我らが御神の加護があらんことを」

男——エッジナイフは深々とお辞儀した。日本人でないにしては随分綺麗なお辞儀である。僕は会釈を返した。

大司教……確か、生前ギロチンカッターはこの教団の大司教だったという。つまりこいつはギロチンカッターの後を継いだ男つてことか。

「本日はこのような場所にまで御足労頂きまして誠に有り難うございます。……望むべくくんば、貴方のお名前を教えてください」

「……阿良々木、暦です」

「……阿良々木暦サマ、ですか」

素直に名前を教えてしまったが——しかし、どうせ僕が教えようと教えまいと、恐らくこいつらは僕の名前を知っていた。

ギロチンカッターの仇の名を、知らない筈が無いだろうから。

エッジナイフは気持ちの悪い笑みを浮かべた。まるで貼り付けたような、機械がむりやり口の端を曲げたような笑みを。

「ええ、ええ。そうでしょうとも。阿良々木暦。阿良々木暦。我らがギロチンカッター様を殺め申し上げた方。ええ、ええ。存じておりま

すよ。我ら皆、貴方と、そして今は力を封じられた伝説の吸血鬼、キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの名はしっかりと記憶しております」

「っ……………」

知っていたことについては、特に驚きはない。寧ろ予想通りだ。けれど一瞬気後れしてしまったのは、この男から測り知れない程の怨恨、憤怒、殺気が伝わってきたからである。

狂信。

笑みを浮かべているが——その裏に燃え盛る黒い本心を隠しきれていない。いや、そもそも隠そうとさえしていないのか。

笑みというものはそもそも攻撃的なものであるという。笑いとは違い、声を立てない分ねっとりとした不快感を与えることが出来るらしい。実際、この男の笑みは不快としか思えなかった。

営業スマイルなんてものじゃあない。

0円だろうが見たくない。

「…………随分と日本語が、上手なんですな」

僕は絞り出すように言った。

いきなり本題に入りたいのはやまやまだが、向こうがこっちに対して敵意を抱いている分、なんとかしてやり過ぎす方法を考えなければならぬ。春休み、ギロチンカッターを倒すことが出来たのは僕が完全な吸血鬼だったからだし、そもそもギロチンカッターを殺したのは全盛期の忍だ。

あの男の後を継いだというのだから、このエッジナイフという男、そう簡単には突破出来ないだろう。しかも今度は一人だけではない。大勢居るのだ。多勢に無勢、梟の群れの中に放り込まれた蝙蝠、とても敵わない。

故に、少しでも時間を稼ぐのだ。雑談は僕の十八番、成功した例はぶっちゃけ少ないが、いきなり攻撃的な姿勢で向かうのはリスクが高すぎる。

何事も暴力で解決する訳にはいかないのである。

「驚いてしまいました。そんな風に流暢な日本語をお喋りになるなん

て」

「現地の仕事は現地の言葉で——我らがギロチンカッター様の御言葉です。基本です。厳守すべきことです」

「いや、基本と言っても、そう簡単に出来ることじゃあないでしょう。どれくらい勉強したんですか？」

「まどろっこしい事は是非おやめ下さると私としては喜ばしいのですが。私は貴方と雑談に興じるつもりは一滴の血ほどもありません。吸血鬼の眷属と談笑するなど、我が身が穢れます」

「……………」

駄目だ。無理だ。無駄だ。

甘く見ていた——少しくらい話に乗っかってくれるかと期待していたが、そんな控えめな見積もりさえ甘かった。コットンスノーキャンディーのように甘々だった。

こうなったらもう無意味だ。これ以上話を続ける事は最早自分の首を自分で締めるようなもの。本題に入るとしよう——全く、完璧な話術な筈なのに、どうしてこうも通用しない相手ばかりなんだ。畜生。

僕は上りかけの階段を上った。上りきった。

「お前たちの目的は何だ」

「それを貴方に教える理由などありません」

「この神社に何の用だ」

「お答えすることに意義があるとは思えません」

「僕たちの街に何かあるのか」

「私の口からそれを語る義理は一切ありません」

「くっ…………」

駄目じゃねえか。普通に雑談以外でも取り合ってくれねえよこいつ。

このにべもなく断る姿勢、ここ最近よく味わっているあれと似たようなものを感じる。織崎の『それを教えて何か私の得になりますの？』ってやつ。

「じゃあ——」

僕は額の汗を拭った。

「お前は、僕たちを殺しに来たのか？」

「……………」

エッジナイフは答えない。

「お前たちの言う、ギロチンカッター”様”の仇である僕たちを討伐しに来たのか？　ここに居るのは、僕たちの来訪を手ぐすね引いて待っていただけで——」

「ぎゃーっはっはっはっは!!　面白い事を言いやがる、このガキ！」

「っ!？」

返ってきたのはエッジナイフの言葉ではなく、そんな品性の欠片もない笑い声だった。慌てて笑い声のした方を向いた。

腹を抱えて笑っているのは、エッジナイフと同じ服装をした男だった。髪をギラギラとした派手な色合いに染めており、なんといかか神聖さみたいなものがまるでない。いや、元々この連中に神聖さなんて、これっぽっちも感じていないが——。

「けけ！　誰がてめえなんかを殺すかよ！　てめえみたいなガキに構ってるほど、俺たちは暇じゃあないんだぜえ！」

男は喧しくがなりたてた。

「そりゃあ吸血鬼を痛めつけられるならそれに越した事はねえ。だがな、てめえは出来損ないの吸血鬼、吸血鬼擬きの人間だ！　そんな奴を虐めたところでよお、ちいっとも！　楽しくなんかねえんだよなあ!!」

「っ……………」

こいつ……………」

もう今の台詞だけで大体の性格は把握出来た。分かったぞ。こいつ、吸血鬼を玩具か何かとっている。

吸血鬼を虐める、痛めつけることを、娯楽と思っている——さしずめ、こいつは嗜癖で吸血鬼を狩るハンターってところか。

嗜癖…………ある意味では、仕事や私怨、使命よりも厄介かもしれない。何せ嗜癖となれば、仮に見逃して欲しいと頼んでも絶対に見逃してくれないだろうから——楽しみを自ら手放すような人間は居ないのだ。

まあ、こいつが悟りでも開いて、煩惱を捨て去ったりしてるならまだマシだろうが、その可能性は極めて低いだろう。というか、嗜癖で狩るなんて時点で欲望のままに行動してるじゃねえか。

「だってよお。人間はすぐ死んじゃうだろう？　だが吸血鬼って連中は不死！　殺すのに一苦労だし死ぬにも一苦労だ！　どれだけ痛めつけても傷は治っちゃまうが、痛みまでは治らねえ。この俺の気が済むまで、ずうっと！　虐め放題な超良質な玩具って訳だ！　ぎやはは！」

「てめえ——！」

——吸血鬼をなんだと思ってるやがる！

そう言おうとしたが、その前に別方向から女の声が飛んで来た。

「お止めなさい、アクスルシャフト。その吸血鬼くんに失礼でしょう？」

僕は声のした方を向いた。

男——アクスルシャフトを諫めたのは、やはり同じく十字架のロブを着た女。腰にも届くほどの長髪をツインテールに纏めている。

「うふふ、ごめんなさいね、吸血鬼くん。彼には何度も言ってる聞かせているのだけれど、一向に改心する気がないみたいなの。本当に困ったものよねえ……ああ、自己紹介がまだだったわね？　私はコサイスミック。御察しの通り、吸血鬼ハンターよ」

女——コサイスミックが言った。

「うふふ、名前だけでもちゃんと覚えてね……うふふ」

「っ……………」

何故だろうか。このコサイスミックが喋る度に鳥肌が立つ。得体の知れない恐怖感がねつとりと絡みついてくる。

アクスルシャフトとはまた別のベクトルで神聖さを感じない。

「君……うふふ。可愛い顔をしているわ。でもどこか凜々しさを感じる……ふふ。ふふふ。素敵、素敵よ君！　ああ、もう駄目！　私、君に一目惚れしちゃったわ！」

「はっ！」

変態だー！！

こいつ、紛れもない変態だー！ 変態つつーか……ビッチじゃねえか！

分かった、鳥肌の正体が何となく分かった。こいつはあれだ、生理的に受け付けないんだ。神原とは全く別のベクトルで、しかも駄目な方のベクトルで（とは言えどんぐりの背比べだけれど）変態だ。

こいつも言動で分かったぞ。至愛だ。至愛で吸血鬼を狩ってるんだ——至愛。また厄介な……。

おいギロチンカッター、お前こんな集団の大司教なんてよくやってたな。初めてお前に同情したよ。どいつもこいつも煩惱まみれ、欲の塊じゃねえか。アクスルシャフトとコサイスミックは兎も角、エッジナイフさえも全く感情を抑えようとしていないし。

どの辺がどういう風に聖職者なのか、是非ともご教授願いたいものである……つーか何を思っつてこいつらは教団に——いや、それははっきりしているのか。

吸血鬼を狩りたいから、ただそれだけの理由——だろう。

この分だと何のリアクションも起こしてない連中も色々狂ってそうだ。どうかこれ以上誰も喋らないで欲しい。

「ああ、殺したい!! 今すぐに殺したい!! エッジナイフ様、どうかこの吸血鬼くんを殺める許可を!!」

コサイスミックは興奮しながら獲物を手にした。

それは十字架の描かれた銀色に輝く銃。獲物だけは如何にもって感じだな。

「……よろしい。貴女の好きに하십시오、コサイスミック——どの道私たちの敵であることに変わりはないのです。積極的に吸血鬼退治を引き留める理由はありませんから」

「うふふふ!! だって、吸血鬼くん！ 私、君を殺すことを許されちゃったわ！ ふ、ふふ!! ふふふ!!」

「けっ！ 物好きいな奴だな、てめえはよ。そんな吸血鬼擬きぶつ殺して、何が楽しいんだ？ 理解出来ねえ！」

「楽しいとか、楽しくないとか、そういうものじゃあないのよ——私はただ、この愛らしい吸血鬼くんを殺したい！ 吸血鬼退治は娯楽じゃ



あないわ。言うなれば、永遠の誓い——聖なる結婚式！ 私と吸血鬼くんは、これから一つになるの!! うふふ……!!」

意味不明なことを口走るコサイスミック——そして、笑いを浮かべて銃の引き金を引いた。放たれた銃弾が左耳を掠めた。

「っ——!?! い、痛ええええ!!」

掠めた。ただそれだけだったのに、僕は思わず左耳を抑え、叫びながらしやがみこんでしまった——ドーナツの箱が地面に落下した。痛い。

なんだ、この痛みは。掠めた場所が、熱い！ まるで燃えているかのように、熱い！

焼け付くような痛みはじわじわと、熱が伝導するように左耳全体に広がっていく——これは、これは!?

「うふふ、気に入ってくれた？ 銀で出来た銃弾よ！ 気持ちいいでしょう？ じわじわと、ゆっくりと波が伝わって——吸血鬼擬きとは言え、それでも君は吸血鬼。銀だって、ちゃんと撃ち込めば効果があるのよ！」

「っ……………!!」

まずいぞ。この状況——余りにもまずすぎる。

このままじゃあ、無抵抗のままに殺されてしまう。冗談じゃない。こんな変態に殺されるとか、幾ら何でも酷すぎる！ 嫌すぎる！

これならまだ神原に陵辱される方がマシだ——いや言い過ぎた、ごめん今のなし！

痛みは少しずつ治まってきた。だが、すぐに第二撃が来るだろう。今度は避けなければ。この痛みは洒落にならない。ちよつと前に織崎にざくざく斬られたが、一瞬の痛みの大きさとしてはこっちの方が上だ。

忍を呼ぶか——いや待てよ、この状況、間違いなく忍は気付いている。それでも出てこないということとは……どうということだ？

「旧キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードが現れないのを不思議がっていますね？ 旧ハートアンダーブレードの眷属」

「っ！」

相変わらず笑みを貼り付けたままエッジナイフが言った。

「当たり前です。言いましたでしょう？ この境内には何人たりとも入ってこれない——分かりますか？ この言葉の意味が」

「い、意味だど？」

「何人たりとも、とはいええ、その対象が人間であるとは一言も言っておりません」

「え——？」

「この境内に張られている結界は、吸血鬼を排除する結界です。故に、貴方の影に潜む旧ハートアンダーブレードは手出し出来ないのです」  
「な……………いい、いや……………それは——！」

何だそれ!? 後出しすぎるだろ!?

いや確かに人間とは言ってなかったよ、言ってなかったけどさあ!

ふざけんな!!

「じゃ、じゃあ! なんで僕は境内に入り込めてるんだよ! おかしいかないか?」

「そう、おかしいのです。私もそこに首を傾げました。ですから、手違いなのです——どうやらこの結界を掛けた方は、純正の吸血鬼だけを弾く結界と勘違いしたのでしよう。それしか考えられません」

「っ……………!」

そ、そんな、馬鹿みたいな理由で!?

「貴方を狩るのは目的ではありませんでした。貴方がこうしてここに居ること自体が、私たちにとって予定外の事態——ですが、入り込んできたのであれば是非ありません」

コサイスマミックは再び銃口をこちらに向けた。いや、今やコサイスマミックだけではない。エッジナイフを除く全員が、銃を僕に向けている。アクスルシャフトも嫌そうな顔をしながらも例外ではない。

「入り込んできた害虫は駆除しなくてはなりません。家に入り込んできた蚊や蚤を退治するのは、当たり前のことなのです」

どうやらこの教団には殺生の禁止とかはないらしい。まあ当たり前前か。吸血鬼殺しを楽しむような異常者が所属しているような集団

なのだから。

けれど、僕が引つ掛かったのはそこではない。

”家”だと？

「……ここはお前らなんかの家じゃあないぞ」

ここは。

ここは——。

「ここは、八九寺の家……っ!!」

言いかけて、僕は戦慄した。

そうだ、八九寺。

八九寺は今どこにいる。北白蛇神社の家主は、どこに行つた。

嫌な予感が、悪寒がする。不快感——今まで散々感じていた不安、疑問、そのピースが突然埋まっていくような気持ち悪さ。

僕は訊いた。

「……八九寺を何処へやった」

「……成る程」

エッジナイフは腕を組んで頷いた。

「貴方とこの神は親交があつたようですね。ふむ、だから今貴方はここに居る。成る程——これもまた、秘匿された情報ですねえ」

「お前だけが納得してんじゃねえよ。八九寺は何処だ。八九寺に、何かするつもりなのか」

「そうですねえ……八九寺真宵には、私たちの神の依り代になって頂くだけですよ」

「依り代、だと」

「そう。依り代——我らが神がこの世界に顕現するためには、これが一番有効な方法だと考えましてね」

神を顕現させる。言うなればそれは、神下ろしとでも呼ぶべきようなものか。

「そんな——そんなことに、八九寺を！」

「そんなこととは酷いことを仰る。あの方の再臨こそ、我ら教団の、延いては人類全体の悲願だというのに」

「人類全体……？」

「……私は思うのです」

エッジナイフは左腕を挙げた。と同時に、僕を取り囲む連中が力チャリと音を立て、引き金に指を掛けた。

「この世界には神が多すぎる——八百万の神？ 全くお笑いです。人類の信仰は分散されるべきではなく、たった一点に集中されるべきなのです」

「……八九寺を、何処にやった」

「この世に神は何柱も要りません——圧倒的な、ただ一柱だけが存在すればいいのです」

「八九寺は何処だ」

「それこそが真の赦し、真の救い——生きとし生けるものの目指す境地。怪異などという不確かで危険な存在は、一匹たりともこの地上に蔓延らせはしません」

「八九寺は何処だって訊いてるんだ！ エッジナイフ!!」

「さようなら、阿良々木暦——神罰を有難く受けるがいい」

僕の質問には一切答えず——エッジナイフは挙げた左腕を下に降ろした。

「それが貴方への、裁きです」

乾いた銃声が四方八方から聞こえた。今の僕は吸血鬼度が低い故、銃弾の動きは見えない。だが、間違いないと言えることは——一発たりとも、外れることはないだろうということだった。

「009」

「っ——!!」

そう、外れることはない。ない筈だった。

忍の力もかりれない、ただの非力な人間である阿良々木暦は、こんな風に思考する間さえ与えられず、今ごろ蜂の巣にされて阿鼻地獄へと落下している筈だ。

だが、そうはならなかった。

十字架。

僕はビビって閉じかけた目を開いた。

目の前に飛び込んできた——否、落ち込んでいたのは、巨大な十字架だった。僕の体以上の大きさを誇るかもしれない、銀製の十字架が地面を割り、突き刺さっていた。

「こ、これはー！」

次に見えたのは盾だった。勿論言うまでもなく本物の盾ではない。紙で作られた——折り紙で作られた盾だ。それが僕の周りに散乱していた。周囲に散らばっていたのは折り紙だけではなく、恐らく僕に向かつて撃ち込まれたであろう銀の弾丸も転がっていた。

「じゅ、十字架、折り紙——まさか!？」

「はっ、そのまさかだよ。ったく、超ウケるぜ、お前の反応」

エッジナイフたちは振り向き、倒壊した本殿の屋根を見た。僕も、そこに立っている二人の男を見た。

一人は白い学ランのような服を着た金髪の少年。一人は鶴の模様が描かれた着物を着た線の細い男。

——私怨で吸血鬼を狩るハンター、エピソードと。

不死身の怪異を専門とするはぐれ者の人形遣い、手折正弦。

二人とも、嘗て僕の敵だった奴らだ——それが、どうしてここに!?

「やあ——まあ、やあ。暫くぶりだね、阿良々木くん。地獄以来かな？」

あれから現世での生活を謳歌しているようで、何よりだ」

「いや、全然笑えないんですが……」

死人にそんなジョークっぽいことを言われても、皮肉にしか聞こえない。

手折正弦——彼は人形である。

正確には、今日の前に居る手折正弦は、手折正弦という人間が量産した自分の人形である。手折正弦そのものは既に故人であり、奴は天国で悠々自適な生活を送っているらしい——やっぱ皮肉だろ、今の。「……エピソード君ですか。お久し振りですね。一体どういうおつもりですか？ 私たちの妨害をするなどと……ギロチンカッター様に拾われた御恩を、お忘れになりましたか？」

「いいや？ 勿論ちゃんと覚えてるぜ、エッジナイフのおっさんよー

「だがあの神変態に、俺は骨の髄まで心酔してるって訳じゃあねえんだぜ。あくまで俺はフリーのヴァンパイアハンターで、ただの賞金稼ぎだ」

超ウケる——エピソードは言った。

「だからまあ、あんたらに思う所はねーでもねーが、依頼は依頼なんだな。ちやつちやと消えてもらうぜ——おい、ハートアンダーブレードの眷属！」

「え!? な、なんだ!」

突然呼び掛けられたのでしどろもどろな返事になってしまった。

「いつまで棒立ちしてやがるんだ? 超ウケる——さっさと十字架から離れな!」

そう言うや否や、エピソードは一瞬にして雲散霧消した。文字通り——霧に姿を変えたのだ。

エピソードは、世にも珍しい吸血鬼と人間の混血児、即ちヴァンパイアハーフである。身体能力やスキルなどは吸血鬼のそれだが、銀や十字架、太陽などという吸血鬼の目立った弱点は持たないという反則ギリギリな奴である。ただ、吸血鬼最大の特徴である不死性は純正のそれよりは低いらしい。まあ、それ位のハンデがないと本当にチート過ぎるが。

霧に変身するというのも、その吸血鬼に由来するスキルの一つである。ある程度力のある吸血鬼は、肉体を意のままに変えることが出来る。例えば羽を生やしたり、腕を蔓のように伸ばしたり——ギロチンカッターと戦った時は、僕もそれを使用した。

エピソードはパツと僕の目の前に姿を現した。そして地面に突き刺さった巨大な十字架を引っこ抜いて肩に担いだ。

「エピソードくん……君はこちら側だと思っていたのですが」

「はっ! 何勝手に思ってたやがんだ、超ウケる——あんたら、逃げるなら今のうちだぜ。この俺が見逃してやるってんだから、有難くさっさと尻尾を巻いて逃げろ。そんでもって国に帰れ」

「ヴァンパイアハーフが偉そうな口を——!!」

「落ち着きなさい、アクスルシャフト。……ですがそうですね。少々

不敬が過ぎますよ、貴方」

「知るか。だから俺はあんたらの言う神なんて信仰してねーつてのー  
ーっど!!」

エピソードは身の丈以上の十字架を軽々と投擲した。十字架は  
真つ直ぐにエッジナイフの顔めがけて宙を走ったが、エッジナイフは  
ことも無げに立ち位置を変えることによって回避した。十字架は本  
殿の直前で落下し、再び地面に刺さった。

「ちっ」

エピソードは舌打ちすると再び霧になった。そして、刺さった十字  
架のすぐ側に現れた。

「分かったろ? 本気だぜ」

「そのようですね……全く、愚かな子です。私たちは人類の幸福のた  
めにこうして動いているというのに、自らその幸福を拒否するとはー  
ー考えられませんね」

「俺はヴァンパイアハーフだ。人間の幸福なんざ知ったことかよ。俺  
は吸血鬼も人間も、等しく大つ嫌いなんだよ!」

エピソードは引き抜いた十字架を振るった。エッジナイフとその  
他ローブ服はバックステップによって回避。うち何人かは茂みの中  
へと潜り込み、姿を消した。

「……ふむ、どうやら私の助けは必要なさそうだ」

屋根の上に直立して手裏剣型に折った折り紙を両手に持った正弦  
は、散り散りになる教団員を見て言った。

「では私は高みから脅すでしょうか——エッジナイフ。念の為に言っ  
ておくが、今ここは日本で、臥煙さんの管轄地だ。余り臥煙さんの目  
が届く範囲で暴れない方がいい。これは経験者からの忠告だ」

お前が言うなと言いたくなるが、しかし嘗てその管轄地で事件を起  
こしてしまったからこそその脅しと言える。

「私たちは暴れているわけではありません」

「では暴走か?」

「暴走などしていません。私たちは私たちに課せられた使命を粛々と  
こなしているのみ」

「この北白蛇神社は、つい最近復興したばかりの場所。まだ靈的に不安定なのだ。故に、ここに赴任したばかりの神を連れ去られるのはこちらとしては非常に不本意であり、私のようなはぐれ者にとっても迷惑だ」

「靈的に不安定なのは、ここに住まう神が無能だからです。だから、私たちはここに新たな一柱を据えて差し上げようと言っているのです。古き神など捨て、新たな神をここに顕現させる——この間は失敗しましたが、依り代があれば失敗することはまずないでしょう」

——この間。

この一言で、漸くピースが揃った——そうか。あれはこいつらの所為だったのか。

数日前に起きた北白蛇神社の異変。突如現れた謎の階段。そうだ、どうして思いつかなかつたのだ。あの階段には確か十字架模様があった。そこから分かってても良かったようなものなのに。

「神に神を重ねると？ ……無謀なことをする」

「無謀ではありません。蜘蛛の力を借りれば可能です」

「蜘蛛——」

「私たちとしましても八九寺真宵を手放す気は一切ありません。あれは貴重な依り代です」

「ふむ。つまりそれは、臥煙さんの忠告を無視する、ということとして捉えて良いのかな？」

「どうぞ。その”臥煙さん”がどんな人物なのかは知りませんが、私たちは決して歩みを止めることはないとお伝え下さい」

無知というものは、これほど恐ろしいものなのか——僕は思った。臥煙さんを知っている身からすれば、臥煙さんからの警告を蹴るなんてどれだけ命知らずなのだ、と思わずにはいられない。

或いは。

臥煙さんをもものともしない”何か”が、こいつらにはあるとでもいうのか——。

エッジナイフは振り向き、僕の方へ向かって歩き出した。僕は慌てて身構える。



「ご安心ください、旧ハートアンダーブレードの眷属。私たちは取り敢えず今日のところは退散しましょう。貴方に危害を加える気はありませんよ」

エッジナイフの後ろからは残った何人かが付いている。アクスルシャフトとコサイスミツクも居た。

「……待てよ」

「はい？」

僕は格好悪く尻もちをついた状態で言った。

「お前の予定なんてしらねえよ——今僕がお前に聞きたいのは、八九寺を何処へやったのかってことだ」

「……………」

「答えろ！ 八九寺は——!!」

「吸血鬼に話すことなんてありませんよ、阿良々木暦」

「っ……………!!」

エッジナイフたちは僕など気にも留めていないかのように、どんどん鳥居に近付いてくる。

「どうやら貴方がたは勘違いしているようだ——まるで自分が正義であるかのように振舞っている。まるで私たちが滅ぶべき悪であるかのように語っている」

「……………どこが違うっていうんだ」

「全く違いますよ。いいですか、私たちが正義なのです。そして私たちの歩みを阻む貴方がたは纏めて悪なのです」

エッジナイフは言った。

いけしやあしやあと、そんなことを言った。

「人質をとるような正義が——居てたまるか」

「人質ではありません。生贄です。正確には生きていませんが」

「お前、それでも人間か」

「人間ですよ。貴方がたと違って、純粋な」

「っ……………」

ギロチンカッターも、似たようなことを言っていた。いや、あいつの場合は自分を人間ではなく、神だとほざいたが。

結局。

結局のところ、これがこいつらの本質か。ギロチンカッターだけじゃあなく、この集団そのものが、狂っていたのだ。

エツジナイフたちは鳥居を潜り——階段に足を掛けた。

「待てよ……待てよ!! 八九寺は——」

「……………」

もうエツジナイフは一瞥さえもしなかった。アクスルシャフトも、コサイスマミックも、その他教団員も皆、全くの無反応のまま、鳥居の下を潜り——そして遂には見えなくなつた。

## 第五話　しのぶハート　其ノ參

〔010〕

八九寺真宵が。僕の友人である可愛らしい神様が拉致された。その事実を受け入れるのに暫く時間を要してしまった。

いや、受け入れていない。受容する気はない。ただ現実を事実として理解しただけであって、現実を認識しただけであって、そのまま粛々と「じゃあ仕方ない」と引き下がる気は微塵もない。当然、八九寺を取り戻すに決まっている。

「ははっ、ガキ一人に対して随分マジになってやがるじゃねえか。超ウケる」

そう言つてエピソードはケタケタと笑った。

「超ウケるっつーか……僕としては、あんたたちに文句を言いたくない訳じゃあないんだぞ」

「はあ？　おいおい文句だと？　俺らに助けってもらつておいて文句だ？　こいつはウケるマジウケ」

「助けてもらつたことについては——まあ、感謝してるよ」

実際、忍も封じられたあの状況では僕に出来ることなんて地べた這いずり回つて逃げることしか出来なかつた訳で——いやそもそもそれさえも出来なかつた訳で——そんな体たらくであいつらを追い出すなんてことは到底不可能だったろう。

人は一人で勝手に助かるだけ、という言葉引用して謝辞義務から逃げる気は一切ない。

「けれど、どうしてみすみす、あいつらを見逃したんだよ。一人くらい捕まえて人質にするとか……」

「はっ！　人質い？　笑わせるぜ、旧ハートアンダーブレードの眷属よ。俺にそんな器用なこと出来ると思つてんのか？　俺に出来るのは、この十字架で後遺症の残らない程度にぶっ殺してやることだけだつてのによ」

「ぶっ殺すことしか出来ないつてのは、専門家としてどうなんだ……」

？」

「お前勘違いしてねえか？ あくまで俺は吸血鬼『退治』の専門家なんだぜ、生け捕りの専門家じゃねーんだよ」

「そう言われちゃ反論も何も出来ないけれど——というか」

僕は難癖じみた問いを切り上げ、本題を切り出した。いや、難癖じみたとは言うけれど、この質問の根幹はその本題な訳であって。

「僕を助けに来た……って、どういうことだよ」

一番気になっているのはとどのつまりそこなのだ。どうしてこの二人が、よりにもよって僕と因縁浅からぬこの二人が、僕を助けに来たのかということだ。方向性は違えど彼らは吸血鬼を敵視している。それこそ、どちらかと言えば教団側につきそうなものだと思ったのだが。

「誰かからの依頼なのか？」

「当たり前だろ。俺が自分から進んでお前なんか助けねえよ。じゃなきゃ、仮に近くを偶然通りかかったとしても素知らぬフリして見殺しにしてたぜ」

「いやその場合は助けてほしいな」

吸血鬼を嫌っているエピソードに対しては贅沢な願いかもしれないけれど。

「エピソードくんをあまり責めないであげてほしい、阿良々木くん。わたしだってきつと、依頼が無ければエピソードくんと同じ行動をとったろう」

「正弦、それフォローのつもりなのか？」

「フォローじゃあないさ。それがわたしたちの共通認識だってことだよ——吸血鬼ハンターと不死身の怪異の専門家。わたしたちにとって、きみは自発的に殺す対象であれ、助ける対象ではないということさ」

「……まあ、それは、そうだろうな」

としか言えない。

エピソードに対してもそうだが——どちらかと言えば、僕にとっての危険度はこの男、手折正弦の方が上なのだ。何せ正弦は臥煙さんの

派閥の外に居るが故、僕の無害認定を無視することが出来る。エピソードはまだ臥煙さんとの繋がりがあるから、無害認定が機能してそうだけれど。

——だから。

どうしようもなく——ある意味では貝木以上に、僕と正弦は相容れないのだ。

だからこそ、どうしてそんな男が僕を助けてくれたのかと思う訳で。地獄でのこともあったし、別に彼が血も涙もない奴とは思っていないけれど（寧ろオカルト研究会メンバーの中では一番まともとさえ思っている）、それにしてもである。

「わたしがどうしてきみを助けるのか——なんて、態々わたしが説明するまでもなく、もうきみなら分かっているんじゃないのかい？  
分かるままでいなくなるとも、予想するくらいは出来ているだろう」

正弦は崩れた屋根の上に座って折り紙を折りながら言った。格好だけ見れば、僕との会話が非常に面倒くさそうである。

まあこいつ、普段人形とばかり話しているからいまいち生きた人間と話すのが苦手らしいし……まさか本当に面倒くさがっている訳じゃあ、ないよな？  
それはそれとして。

予想——か。

予想——は、している。個人的な予想は二つある。

「……多分、臥煙さんに依頼された——或いは、忍野に頼まれた？」

「そうだよ。正解だ」

「ああ、やつぱそうなんだ……どっちが？」

「どちらも正解だ」

「え？」

どちらも、とは？

「厳密に言えば、臥煙先輩の指顧を受けた忍野が僕たち二人に依頼してきた、というのが満点回答だ」

「ああ、そういう」

確かにその場合、忍野を間に挟んでいるだけで実際は臥煙さんから

の依頼を受けたとも言える。それに、忍野に頼まれたとも。

……ストリートに考えれば正解は両方ではなく忍野の方だと思っただけれど、まあ、どっちでもいいや。

「あいつは『助ける』なんて表現を使わなかったがね。実際のところ、わたしたちに依頼されたのはきみの道案内なのさ」

「道案内？」

「臥煙先輩に頼まれたろう？ 逢我三山へ向かえって」

「あ、ああ。……そういえば僕、オーケーしちゃってたな」

逢我三山を登れ。

そしてそこに居るといふ仙人に遭え。

文面だけで無理難題なのが分かるが、まーた後先考えずオーケーしてしまっただった……。

「でも、名有りの山だから、道案内が必要って程でもないような気が……ああいや、その山までの道案内じゃなくて、仙人が居るって場所までの案内ってことか？」

そうだとすればとても助かる。何せ山を登った経験なんて、僕は殆どないのだ。夏休みに一度山に登る、というか山を降りたことはあるけれど、あれは寧ろ遭難と呼ぶべきものだったし。この北白蛇神社も山頂にあるが、ほぼ獣道のようなものとは言え階段が設けられているし、山登りって感じはない。

「いやいや、そうじゃあない。普通に、山に着くまでの案内だよ」「えっ」

なんて希望を抱いたが、どうやらこの場合は額縁通りに受け取って良かったらしい。受け取りたくなかった。

「道案内……を、二人がかりで？ おいおい、忍野あいつ僕を常軌を逸した方向音痴だとも思っているんじゃないだろうな？ そんな負の業を背負っちゃあいないぞ、僕は」

土地勘があると胸を張って言える訳ではないが。

「少なくとも、俺はお前を馬鹿だと思ってるぜ。旧ハートアンダーブレードの眷属よー」

エピソードが言った。

「超ウケる——ただの道案内なんかのために、俺たちが動員されると思ってたのか？　そもそもそんなふざけた依頼を受けると思ってたのか？　そこまで金に困ってねーよ」

「ただの道案内、じゃあないのか？」

「ちげーよ……だから言ってるんだろ、お前を嫌々ながらも助けなくちゃあいけないってよ——道案内ってのはあくまでも表現の形であって、実際のところは護衛なんだぜ」

「護衛……ってというのは、つまり」

「その通りだよ阿良々木くん。わたしたちの役目は、きみの護衛——即ち、エッジナイフ率いる教団及び淡海静によって作られた怪異に、きみの役目を邪魔させないようにすることなんだ」

　正弦は折り紙を手裏剣型に折り溜めながらエピソードから言葉を引き継いだ。

「僕の役目——あの、正弦。少し脱線するけれど、質問していいか」

「なんだい？　わたしに答えられることは非常に少ないが、答えられることなら答えてあげよう」

「役目ってというのはつまり、その、山に棲む仙人に遭う、ってことではないんだよな」

「そうだね。概ねその通りだ」

「概ね？」

　概ね、とは煮え切らない言い方をする。まさか、臥煙さんはまだ僕に何かをさせようとしているのか？

　　というか何かをさせるといふなら、そもそもこの役目はどうして僕に任されたんだ？　臥煙さんが多忙なのは知っているけれど、それならそれこそ、今僕の前にいる二人の専門家に任せれば良いようなものを。

「どういうことだよ、正弦」

「そうだね……阿良々木くん。そろそろ時間が惜しい。この件についてわたしが知る範囲についての説明は、下山しながら、山へ向かいながらで話しても良いかな？」

「え？　ああ、はい。勿論」

時間が惜しい、ということとは、タイムリミットでもあるのだろうか？ 何のタイムリミットなのかは知らないが……。

けれども、僕としても時間がない。早く臥煙さんからの依頼を終わらせて八九寺を救出しなければならぬのだ。タイムアップ——八九寺に万が一のことが起きる前に——。

「では、行こうか阿良々木くん」

正弦は折り紙を折る手を止め、屋根の上から跳び上がった——そういえばこの人も影縫さんと同様、地上を歩けない呪いとやらを受けているのだったか。鳥居の上にも乗るのか？

……と思つたら、なんとこの正弦が跳び乗ったのは巨大な十字架の上。エピソードが担いでいるこの巨大な塊のてっぺんだった。

「ちつ……こんな事のために俺を呼ぶなってんだ、臥煙さんめ……」

こんな事というのは僕を助けることなのか、或いは正弦に乗られることなのか。判断の難しいところであった。

「011」

そんな訳で奇妙な下山が始まった。先頭を歩くのは大きな十字架を担ぎ、真っ白い学ランを着た金髪の男。その十字架に乗っているのは一心不乱に折り紙を降り続けながらバランスをとっている和服の男。そして後ろからはフード付きパーカーの男、つまり僕。

一応断っておくが、別に僕は他の二人を描写することによって、相対的に自分をまともに見せようとしている訳ではない。僕をそんな打算的な人間と思わないで頂きたい（まあそんな賢くも賢くもない奴だつてことは周知の事実だろうし、問題ないだろうが）。

「さて……で、何から話そうか？ 阿良々木くん」

「何から……それは、お前が自発的に喋つてくれる訳じゃないのか？」  
「別にそういう形をとつてもいいが、それだと私はさつき聞かれた事だけにしか答えないよ」

「会話下手過ぎんだろ」

いくら人形とだけお喋りしてるからと言って流石にそれはあんま



りである。

コミュニケーション低よ。

「そう、私は俗に言うコミュニケーション障さ」

「真顔で言うな。ボケてるのかどうなのか分からないからツツコミ辛い」

真顔どころか折り紙だつてずっと折ってるし——というか、あの折り紙はどこから取り出してどこに仕舞っているんだ？ くそっ、ここからじゃあ見えない。気になる。聞いてみよう。

「正弦、その折り紙って」

「企業秘密だ阿良々木くん」

「……………」

さいですか。

まあ、今回の本題はそこじゃあないし、これは本筋からかけ離れたことを聞いてしまった僕が悪いだろう。やっぱり気になるけれども。

和服の中が四次元ポケットみたいなことになってるんだろうな、と勝手に解釈して、閑話休題、僕は正弦に訊いた。

「じゃあ質問だ、正弦。というかお前とエピソードに。なんで僕の居場所が分かったんだ？ ただ護衛だっていうなら、僕の家の前で待ち伏せしていてもよかつたらうに」

流星に家の前で待ち伏せは極論だが。

怪しまれる怪しすぎる。

「言つたらう。僕とエピソードくんは臥煙先輩からの指令で動いてると——きみの行動は予想出来なくても、居場所くらいなら簡単に特定出来るしまうのが臥煙先輩だ」

「ああ、そう……………」

臥煙さんか。

あつそう。

いや、もうあの人のに関してはどんなツツコミを入れれば良いのか分からない。何でも知っているると豪語し、実際何でも知っている有言実行の化身みたいな人だし、何を言っても的外れだろうし。だからまあ、うん、そうなんだろうな。

「尤も、あくまでも北白蛇神社はきみの居るであろう場所の候補の一つでしかなかったがね——教団のいざこざのおかげで、私たちはそつちに確定させることが出来たわけだ」

「ふうん……興味本位で聞くけど、他の候補は？」

「神原家とミスタードーナツだった」

「ああ、やっぱあの人だな」

両方とも今日行ったよ。

割と長居したよ。

「教団のいざこざね……あいつら、いったいあそこで何してたんだ？  
というか、お前たちって連中がこの町に来てたこと、最初から知ってたのか？」

「知っていた。否、正確に言えば臥煙先輩が知っていた。だからこそ  
の護衛だよ」

「何でも知ってるなあ」

今臥煙先輩が何をしているのかは知らないが、連絡も碌にとれないほど多忙な中でちゃんとこんな田舎町にも油断なく目を向けている  
辺り、やはり専門家の元締めか。

素直に凄いと思う。

「こんな田舎町、とは言うがね阿良々木くん。私たち専門家からすれば、ぶつちやけこころ一帯はもう封鎖されていてもおかしくないレベルの場所なんだよ、阿良々木くん」

「封鎖!？」

「たった一年の間に発生した怪異現象は数知れず。伝説の吸血鬼が降り立った。挙げ句の果てに怪異を自ら造り出すことの出来る者が二人も居る。ここまでの異常地帯は中々見ないよ」

「そ、そう言われると言葉も出ないが」

確かに一年で色々起こり過ぎたからなあ。しかも怪異だけに止まらず専門家も多々訪れたし（忍野とか正弦とか）、専門家ではないし怪異とは無関係だけれどもぶっ飛んだ人たちとかも来たし（人類最強とか魔法少女とか）、確かに”知っている”人から見れば特異そのもの  
なのか。

……その特異の責任の半数以上が僕にあるような気がしたが、それは置いておくでしょう。

「そんな場所だからこそ、あの教団が目をつけたのだろうね。しかも奇しくもこの町は、先代の大司教、ギロチンカッターの戦死した場所なんだし」

十字架の上で胡座をかいた正弦が言った。

「あいつらは——じゃあ、別に弔い合戦に来たって訳じゃないんだな」  
吸血鬼ハンター、しかもあの教団の言うことなど、僕の立場としてはそうそう信じられたものではないが、正弦の言い草から察するに、本当にその気は無かつたらしい。

だがそうなると気になってくるのは連中の目的だ。この町を選んだ理由は分かった。じゃあ来た理由は？ 吸血鬼退治が目的でないのなら、何をしたいんだ？ 何のために——八九寺を攫った？

「そうだね……悪いけれどその辺りについてはあまり詳しく教えられていない。私たちの任務内容上、それを知る必要はないからね」

……まあ、そりゃあそうか。

何度も聞いたように、この二人の目的はあくまでも僕の護衛でしかなく、それ以上でもそれ以下でもない。敵対してくる組織の素性など知る必要はなく、言って仕舞えばただ排除するだけの任務なのだから。

必要以上の情報を与えるのは色々リスクが大きい。それは勿論僕も、正弦とエピソードも分かっている。

「結局、それは臥煙さんのみぞ知るってことか。その辺の事情は」

「そういうことになるね。八九寺真宵を攫った理由について、多分きみは何よりも優先して知りたいだろうが——私の予想でも聞くかい？」

「予想？ ついてるのか」

「与えられた情報量が少ないから、最早ホラ話と言っても過言じゃないレベルの予想だけだね。例えるなら、私たちのスピノフが映画化する日を予想するようなものだ」

「それはホラ話とかじゃあなくて、ただの口から出任せだ」

スピンオフに拘るなあ。

仮にスピンオフが発売されたとしても、もうその頃にはアニメプロジエクト自体が終わってそうなものだが……でも戯言シリーズのアニメ化が決定したし、案外オフシーズンさえもアニメ化されるのかもな。映画はまず傷物語が終わらなきゃだが。

「いや、そんなレベルの話なら、悪いけど遠慮しておくよ」

「だろうね。私だっていたずらにきみを不安がらせたくないから」

「その一言の所為で酷く不安に駆られちゃったよどうしてくれるんだ！」

わざわざそんなこと言うってことは、十中八九八九寺が危険な目に遭うってことじゃねえか！ 何故そこでそういう、一言多いんだ！

何れにせよ早く八九寺を救出しなくてはならないのは間違いないが……危険ってどんな危険だ？ 例えは？

「八九寺の奴、処女散らされてないだろうな……」

「むむ、神様には処女性が求められるからね。そういう面から見れば確かに心配だ」

「黙ってろコミュ障」

思わず辛辣な言葉を掛けてしまった。もうここまで来ると人形相手にさえまともに話せているのかどうか疑問に思えてくる。

「速攻で処女なんかの心配をするてめえにだけは言われたくねえだろうよ」

「おいおいエピソード、久し振りに喋ったと思ったらなんだい。少女の心配をするのは男として当然のことだろう？ 何もおかしくない」

「黙れや変態」

「むう」

今の発言の何処に変態的要素があったのだろうか？ 分からない。世の中には少女を性的な対象とするロリコンとかいう駆逐されるべき連中が居るのだから、僕の心配は至極真つ当なものだろうに。そういうこと言われると、困るなあ。

ああ、あれか？ 鎧武者の時、ついつい僕の購入したエロ本を見られてしまったのがここにきて響いているのか？ 最早昔のことなん

だから忘れてくれていけば良いなあと思っていたが、どうやら甘かったらしいな。

そうこう話しているうちに下山終了。このまま僕たちは逢我三山へと向かう。

「じゃあ話を元に戻そうぜ、正弦」

「うむ」

正弦はやはり十字架から降りずに頷いた。目立ってしようがない……とは思うが、偶然か作画的か、通行人は一人もいない。見る人が居ないので目立つも何も無い。

あの連中について聞かされていないなら、これ以上追求しても出てくるのは予想という名の不安要素だけだろう。ならば差し当たって訊くべきは一つである。

「僕は逢我三山へ行って、具体的に何をすればいいんだ？ いや、仙人に遭えば良いってのは聞いたけど、それもいまいち要領を得ないし」  
前情報を一切持たずに指令に臨むというのは流石に無謀が過ぎる。それくらい無謀を極めた僕にだって分かる。受験に合格するために、は前もって勉強が必要なのと同じことだ。

「そもそも、まずその仙人ってのがよく分からない。何なんだ？ いや、誰なんだ？ それ」

仙人——怪異現象に巻き込まれたり首を突っ込んだり時には元凶となったりした僕だけれど、生憎そういう系統の知識にはまだまだ疎いのだ。仙人と聞いてもぱっと思いつくのは、杖を持って豊かな髭を生やしたご老体の姿だけである。それだけである。後は神通力を使うとか何とか。

「仙人について、私は知らない」

「知らねえのかよ」

「遭ったことがないからね。そもそも仙人というよりは、生きながらにして怪異と、神と同等の存在になった人間だ。おいそれとお目にかかることは出来ないよ」

「人間」

「そう、人間——長生きして徳を積んだ狐は空狐になる、というのは聞

いたことがあるだろうか？ それと同じさ——長生きして徳を積んだ人間は仙人になる」

「……そうなのか」

空狐についての話は正直なところ初耳なので言及は避けるとして（九尾の狐しか知らねえよ。なんだよ空狐つて）——仙人。

長生きした人間は仙人になる、なんて、もうそれは怪異と呼んでもよさそうなものではあるが……その辺り、素人と専門家の基準の違いが浮き彫りになっている。

でもその言をそのまま解釈するならば、その仙人は一度も死んだことがない訳で——幽霊ともまた違う。生きているのは間違いない。そう考えれば、確かに怪異ではなく人間にジャンル分けされるのかもしれない。やっぱり納得いかないが。

「いや、違う。そうじゃあないさ。怪異と同等になった人間と言ったろう？ 人間と言いつけるには難しいし、やはり無理矢理ジャンル分けするならば仙人は怪異だよ」

「あ、普通にそうなんだ」

「いや、普通とは言うがね阿良々木くん。そもそもこの仙人という連中は非常に特殊で」

「い、いや、もういいよ。分かったから」

「そうかい？」

「ああ」

……今になってようやくだが、正弦との初対面に際して斧乃木ちゃんから言われたことを理解出来たような気がしてきた。

「その仙人が、どういう性質の存在なのかってのは分かった。でもそれじゃあ、どうしてその仙人に遭いにいくのはお前たちじゃないんだ？ 僕なんかよりよっぽど詳しいんだし、この役割の意義も分かっているんだろ？ じゃあなんでわざわざ……」

何度も言うように、僕は怪異について素人である。対してこの二人は専門家で、しかも臥煙さんの意図を理解している。ならば一から十まで説明する手間がある僕がやるより、よっぽど効率的ではないのだろうか？

「けつ、それが出来ねえからお前みたいなガキのところは役割が回ってきたんだろ。超ウケる」

「出来ない……？ いや、僕に出来てお前に出来ないってことはないだろ」

「それが意外とあるんだよ、阿良々木くん」

「正弦」

「うん。意外と」

「何故二回言った」

「どういうキャラでいきたいんだお前は。」

「まあでも多分、今のが正弦の性格の根っこなんだろうな……斧乃木ちゃんの言を信じるならば、こいつって人に土下座をさせるのが趣味みたいな奴らしいし。」

「というのも、どうやらこの山に居るといふ仙人は少々厄介な能力を持ってはいるらしくてね。私たちには手出し出来ないような」

「いや待って。本当になんでそんなのに僕に頼むの？ ねえ」

「臥煙先輩も一度挑んでみたらしいが、驚くべきことに返り討ちにされたらしい」

「あ、あの正弦？ ひよつとしてだけど今回の任務って、事実上僕を処分するためのものだったりしない？」

「だから君に白羽の矢が立ったんだ」

「死ねと」

「どうだろうね」

「否定してほしいなあ」

「どうやら今日が、いや、山登りにかかる距離を考えれば明日か明後日か辺りが僕の命日になるらしい。」

「ふざけんな……ついさっき死に物狂いで戦った後だってのに！」

「日和ちゃんとの再会が早すぎるよ！」

「いや、それは違う。君は死ぬと阿鼻地獄に落ちる予定なんだよ」

「そこを否定してほしいなんて一言たりとも言った覚えはないぞ正弦！！」

「真顔で言うなよ！」

少しは表情にユーモアを滲ませてくれ！

「冗談だよ、安心してほしい。臥煙先輩は何も君を殺そうとしている訳ではないよ」

「お前ユーモアのセンスないよ、悪いけど……」

「そうかな？ でもシミュレーションでは大ウケだったのだが」

「そのシミュレーター壊れてるんじゃないのか」

「は、超ウケる」

「ほら、エピソードくんだったって」

「いや正弦、多分それ嘲りだ」

そもそもエピソードの『超ウケる』は口癖みたいなところがあると思うので、当てにはならないと思うのだが。

「いや、違うな、そうじゃない……私はきみに冗談を披露しに来た訳じゃあないんだ」

「ああそうだろうな」

何思い出したように初期の台詞なんか喋ってるんだ。今更どう繕ってももう手遅れだぞ。

臥煙さん、キャストイング失敗したんじゃないのか。

「返り討ちにされたというのは物理的な話じゃあなくて、心理的な話なんだ」

「お前まさかそれが気休めになってると思ってるんじゃないだろうな」

メンタル面に攻撃を仕掛けてくるなら尚のことである。ぶっちゃけ物理的な攻撃の方がよっぽど良かった。

あの臥煙さんのメンタルが負けた？ は？

「待て待て、そんなもん豆腐メンタル代表の僕になんとか出来ると思ってるのか？ お前を召喚したことについてもだけれど、今回の臥煙さんの意図が本気で分からないぞ」

多忙で疲弊しているのは分かるけれど、せめてここくらいはいつものように冷静な、冷静過ぎて冷え切った判断をして欲しかった。

無理だろこれ。

「つーかじゃあ忍野はどうなんだよ。あいつならやれるんじゃないの



か

忍野ってなんだかんだメンタル強そうだし。どんな精神攻撃を受けてものらりくらりと避け続けそうないメージがある。

「いや、忍野は今別の任務に就いている。こちらに来ることは出来ない」

「……じゃあやつぱり僕なのか？」

「きみだね。まあ臥煙先輩のキャスティングには無駄がない……これも考えあつてのことだ」

「……」

「そう構えなくていい。簡単に言ってしまうば、きみのこれからすることはとても簡単な事なのだからね——仙人に遭って、その仙人から”あるもの”を入手して欲しいというのが、今回きみに与えられた役割だ」

「あるもの？」

仙人から何かを手に入れるって、簡単に言うけれどそれ相当難易度高くないか？ 獅子丸からちくわを引く手繰るくらいの難易度なんじゃあないのか？ いやなんとなくで言っているけれど。

「……簡単じゃあないだろうけれど——僕は何を入手すればいいんだ？ 仙豆とかか？」

「いや、食べ物じゃない。刀だよ」

「刀……」

ボケてもあんまりツツコんでくれない正弦——はまあいいとして——刀？

仙人の刀？

「いや、それは正確に言えば、刀というか柄というか——」

「柄……？」

「いや違うな、そうじゃあない」

「……？」

頼む……普通に喋ってくれ……！ いい加減勿体ぶったような言い方は僕に通じないってことを知ってくれ……！

「忍野が言っていた。特徴を言うよりもその名前を言えば、きみな

「理解してくれると」

「先に言っておくぞ正弦。多分僕、それ知らない」

「誠刀『銚』」

「うん、知らない……誠刀?」

誠刀——『銚』?

瞬間、僕の身体中に電撃が走ったような衝撃を受けた。理解出来た。どうして僕が選ばれたのか、どうしてここに来てそれが必要なのか。

僕は知っている。いや、名前自体は初耳だけれど——厳密に言えば、それと似たような名称の刀群を知っている。

「完成形変体刀か……!?!」

正弦は折り紙を折る手を止めて頷いた。どうして手を止めたのかと言え、今、僕たちは逢我三山の入り口と呼べる場所に到着したからだ。

「そう、完成形変体刀——四季崎記紀が作りし十二本の刀が一本。復活したそれらの内の一振りはこの山に居る仙人、彼我木輪廻が所有している。それを手に入れるべくキャスティングされたのが、阿良々木くん、きみだ」

「っ……!?!」

キャスティング。

そうは言われても、やはりまだ釈然としないものはあった——だが一つだけ確かな事が言えるならば、忍野はとことん僕のことを見透かしているということだった。

散々関わった身としては。

完成形変体刀の名を出された途端——理解しないうちに、全て納得してしまっただけだから。

[012]

「さらばだ阿良々木くん。良い報せを待っているよ」

「じゃあな。いつその後遺症の残らねー程度に死んでこいや」

正弦による説明——ぶっちゃけ肝心なところ（八九寺に関するあれこれ）が明かされていないのが不満だけれど——が終わり、僕たちは結局何事もなく、逢我三山の登山口へ到着した。すると、正弦とエピソードはそんなことを言っただけで背を向けた。

「え？　ここまでボディガードっぽく付き添ってくれてたのにそんなあつさり？　え、帰っちゃうの二人とも？」

僕は思わず聞き返した。唐突さに驚いてなんとも情けないような言い方になってしまったが。

「こ、こっから一人で行けってことか？」

「そういうことだね。まあ……私たちが付いて行った方が安全性は高そうではあるが、取り敢えず私はここまでだ。後は阿良々木くん、君に任せる」

「お、おい！　ちよつと待てよ！　幾ら何でも無理があるぞ！」

「臥煙さんが君に、否、君だけに任せたのは何らかの訳があると思っっている。或いは事情か——何れにせよ、キャスティングされたのは私ではなく、君なんだよ阿良々木くん。キャスティングされたのなら、その役割を果たさなくてはならない」

「キャスティング……け、けど」

……随分とお見苦しい姿を見せているけれど、どうか僕が今不安で不安で仕方ないということを理解してほしい。

山登り。

その行為の過酷さ、苛烈さは、当然誰だって周知の上だろう。その字面からは想像も出来ないほどの艱難であることは想像に難くない。登山による遭難事故は年間約2800件、その内死亡事故にまで発展したものは1000件を超える。それ程までの行為に、僕は今何の装備も持たせられずに、たった一人で、ほぼ何の知識もなく立ち向かえと言われているのである。

いざというときのことを考慮して、山登りはパーティでおこなうのが現代における定石だ。なのになんということだろう、経験が浅い、最早浅瀬よりも浅い僕は一人なのだ。言うなればRPGにおいて、仲間が誰もいない、装備がひのきの棒と木の盾の状態、上位の魔物が

現れるダンジョンに向かうようなものである——いや、そのまますぎて例えとは言えないか。

「……つ、つーか、そうだよ。登山用具。僕、そんなの持ってないぜ。普通こういう場合つてもつと装備を整えないと。だから、あの、せめてそれくらいはくれないか？」

丸腰は絶対に駄目だ。今僕の唯一の所持品はミスタードーナツだけなのだ。これではどうしようもない。腹を満たすことは出来るかもしれないが、それだけである。この箱はそれほど頑丈ではないので、枕にも適さない。打撃にも使えない。

「その辺りは、心配ない。少し登ったところで補給出来るようになってるから」

「なんじゃそりゃ」

「手は打っているということだ——さて、他に何か用はあるかい？ 無いなら、私たちは失礼させてもらうよ」

「……………」

用というか、文句なら僕自身驚くほど湧いてくるのだが……目下の心配事である無装備であるという問題はどうかやらそのうち解消されるようなので（はつきり言って疑わしいが、どうせ駄々を捏ねても正弦たちは登山用具なんて絶対持ってない。言うだけ無駄だ）……。

「まあ……別に、もうないな」

「うん——それじゃあ、私は行く」

正弦は短く返すと、跳躍して近くにあった木の枝に降りた。そして、

「まあ……頑張れ、阿良々木くん」

そんな激励にしては激しきの欠片もない言葉を残して、正弦は枝を揺らして消えた。恐らく木の更に高い場所に上ったのだろう。

「ははっ、超ウケる——じゃ、俺も一仕事してくるぜ、つーわけで！」

エピソードもまた、そう言うど十字架を空高く投擲した。僕はそれに目を取られて視線を空に向けたが、そこに十字架はなかった。そして再び視線を戻すと、やはりエピソード自体も居なくなっていた。

「……………」

……一人残された僕は登山口を見た。登山口には木造の鳥居が建ててあり、『此レヨリ先、逢我三山』『第一ノ山 鬼会山』と書かれた札が取り付けられていた。

鬼会山か……鬼に会う山、なんて、僕からすれば無視出来ない名前である。この名前にどんな由来があるのかは知らないけれど、そう解釈できてしまうからには警戒材料となるに十分なのである。

鬼。

吸血鬼。

いや、もしかすると吸血鬼ではなく、日本古来より伝わる『鬼』が現れる山なのかもしれない。鬼ヶ島に棲んでいるようなのが。

僕は生唾を飲んだ。

どうやっても一歩が踏み出せない——有り体に言ってしまうが、怖い。

山自体が放つプレッシャーに、圧されてしまう。気圧される。

これが複数人ならば多少マシになったかもなのに……たった一人で登山に挑むなんて。

一人で。

「——一人じゃなからうがこのボケええ——っ!!!」

「鬼いいい——っ!!!」

などと考えていたところ、ブルつてたところ、僕の影から金髪の幼女が飛び出してグーパンチを顎にヒットさせてきた。ガックガクの足では踏ん張ることも叶わず盛大に仰向けに倒れこんだ。

夕暮れが近い所為か赤みがかった空——が映った僕の視界を即座に覆い隠したのは眩いほどの金。金髪金眼。

「おい」

「し、忍！いきなり何するんぐえっ!？」

「おーい？」

「な、何だっつてんだ!？」

忍は僕に乗っかり、右手で僕の襟首を掴み左手で腹パンを浴びせてきた。その表情は凄惨な……とはいかずとも、身震いするような笑顔。

「おーまーえーさーまーよー!!」

「ぐっ! がっ! ぎっ! ごっ! はっ!」

「おーまーまーえーさーまーよーまーよーまーよー!!!」

「ひぎい! ぐぎやっ! うげっ! げほお! あばっ!? ちよっ、  
ストップストップタンマンタンマあ!! レッドカード! デッ  
ドボール!!」

「サッカーがしたいか!! ならついでにデッドボールも果たしてやろ  
う!!」

「ぎやあぁーっ!!!」

忍はやりたい放題やって、漸く僕の体の上から下りた。僕は痛みを  
堪えながらなんとか上体を起こした。

「し、忍さん! こ、これは何なんですかあ! 僕、何かしましたか!」  
動転して変な口調になってしまった。八九寺宜しく敬語になっ  
てしまった。

「お前様よ……さつきから黙っておれば、一人一人一人と……あ  
”あ!!? なあに生涯のパートナーのことをすっかり頭の中から削除  
しておるんじや!!」

「そ、そんなことかよ!! いやごめん、素で忘れてた——拳を下ろして  
! 下さい!」

「そうか!?! じゃあやはりサッカーか! 好きじやのうお前様もなあ  
!!」

「やめてっ!! これ以上やめてっ!! 死ぬ!! ある意味死ぬ!!」

「分からぬなあ? うぬの痛みなど分からぬなあ!? 知らんからのう  
!!?」

「嘘つけやペアリングがある癖に!!」

「そんな最早最近ではなかった事にされてそんな設定知るか!! あっ  
たとしても儂はうぬより痛みには強い。等倍とは言え、うぬよりかは  
耐えられるわ!!」

「ひ、酷え! 横暴だ!」

「そういう訳でもういっぱああああっ!!」

「やめろよお!!」

暫くそんなやり取りが続き、僕はぼろ雑巾か何かのように蹂躪された。幼女に。

そして漸くほとぼりが冷め、僕は暴力から解放された。忍は肩で息をしている。

「忘れてた、つつーか……お前、何してたんだよ！ エッジナイフの奴らと対峙したとき出て来なかったのは結界の所為でことで納得するけれど、そこからここに至るまで何してたんだよお前！」

「アホかお前様！ あの今にも死にそうなのヒョロヒョロの前なら兎も角、吸血鬼に恨み骨髄なあの小僧の前で姿を現せと？ 気まずいに決まっておるじゃろうがそれくらい考えろ！」

「ぐっ……確かに」

正弦の形容に悪意を感じるがそれは置いておいて、確かにエピソードと忍が会うのは一波乱ありそうだ。エピソードは忍が襲われた吸血鬼ハンター三人組のうちの一人なのだから。

気まずいなんてレベルじゃあない。下手すれば殺し合いに発展するかもしれない。

「はあ……すーっかり儂のことを忘れおって。一人を強調しおってさらに。怒りを通り越して呆れ果てるわ」

「でも怒ってたじゃん」

「その喉笛搔つ切つてやろうか」

「ごめんなさい」

「ふん！ ま、ボコるだけボコつてすつきりしたし、ここらで水に流してやろう。ありがたく思えよお前様。本来ならばもう少しねちねちぐちぐち虐めてやるところ、じゃが」

忍は視線を鳥居に、その向こうの鬼会山へ向けた。

「……状況は一応把握しておる。急がねばならんのじゃろう？」

「ああ……具体的なタイムリミットは分からないけど、急いでこのミッションをこなさないと、八九寺のもとに行けない」

「らしいのう。やれやれ、お前様は幼女より少女の方が本当は好みか？ あやつの事は本当に忘れんのう！」

「水に流してねえじゃん！」

「ただの嫌味じゃ。笑って許せ」

「許すけど笑っては無理だなあ」

まあ、許す許さないとかじゃあなくて、これについて僕には非しくないのも仕方ないことなのだが。寧ろこつちが許しを請う方なのだが。

「しっかしお前様のチキンっぷりは笑えんのう。なんじゃい、山如きに怖気付きおつて。小学生かうぬ」

「小学生くらいだと怖気付くっつか、喜び勇んで登りそうなんだが……」

「揚げ足をとるな」

「ごめん。足を上げないで。下ろして」

「昨日のことを思い出せよお前様。山登りがあの戦い以上に恐ろしいものか？ 確かにどちらにも死と隣り合わせなのは分かるが、どつちかと言えはどうじゃ？」

「どつちかと、言えば——」

昨日のこと——織崎記との戦い。

血で血を洗う血戦。

勿論忘れてなどいない……けれど、それと山登りとは全く違う。ジャンルが違う。だから比較対象としては相応しくないのだが。

それでも無理矢理選ぶとなると。

「——そりゃあ、山だよ」

「じゃろ？」

忍はそう言うのと歩き出した。僕は慌てて追い掛ける。追い掛けるというか、引っ張られるという表現の方が——ある意味正しいか。

「お、おい忍！」

「かかつ、容易い容易い」

「は？ 容易いつて……」

「結局お前様、何事においても幼女だの少女だのを優先するんじやのう……見よ。うぬ、もう山に入っておるぞ」

「っ！」

僕は忍に促されるまま振り向いた。



パツと見たところ背後には何もなかった。けれど少し視線を上げれば、組み上げられた木があった。

「かかつ！ 恐怖など、所詮その程度のものなのじゃ。少し切っ掛けを与えてしまえばこの通り」

「忍……」

実際。

実のところ、山に入り込んだという事実を、踏み入れたという事実を知らされても恐怖心は少しも湧いてこなかった。いや、ひよつとするとちやんと恐怖心はあるのかもしれない。けれど、全く感じない。忍の事を心配する気持ちの方が遥かに強かった。

僕は忍を見た。

そうだ。

ついついプレッシャーなんかには圧されてすっかり忘れていた——この僕、阿良々木暦が。

時に何よりも少女を、或いは幼女を優先する男だということ。

「……ああ、そうだな」

僕は忍の隣に立った。隣の幼女は凄惨な笑みを浮かべている。

「一人なんてなかなかないぞ？ 特に、うぬはな」

「ああ。一人じゃあない、二人だ——忍。二人で山を登るぞ」

「かかつ！ あー面倒じゃのう、しんどいのう、影の中で休んでいたいのう」

「さつきまで散々休んだだろ。階段さえも上らなかつたんだからな。さぞ体力は有り余ってることだろうよ」

「体力なぞ、さつきうぬをボコボコにしたところで使い果たしたつちゅーの」

「僕だってお前にボコボコにされたところで体力なんて全消費したつーの」

僕と忍はそんなことを言い合いながら、歩き出した。

斜面は少しずつだが急になっていく。果たしてどこまでこの調子が続くのかは不安要素だが——それでも僕は一人ではないのだ。

僕と忍、二人の珍道中。

今度こそ——始まり始まり。

〔013〕

「そうだね。じゃあそこに一人プラスしてみようか」

「よしお前様、帰るぞ」

「待てや」

やはり大手を振って始まりを宣言してみたがここでもそう上手くは締まらなかった。

突如脇道の茂みから現れたのは、なんと式神童女・斧乃木余接。彼女はリュックサックを背負い、両手一杯に荷物を抱えていた。無表情で。

「来るの遅すぎ」

斧乃木ちゃんは言った。

「一体僕がどれだけ待ったと思っっているのさ。この大荷物を抱えて二十分も待たせるとか、鬼かよお前ら。ぴーすぴーす」

「いやまあ、一応吸血鬼だから鬼といえれば鬼だけど……」

二十分しか待っていないのか、じゃあ別にとやかく言うほどでもないじゃないか、というのが正直な気持ちだけれど、しかしそれは通常での感覚である。斧乃木ちゃんはこれだけの荷物を抱え、この状態で二十分も待ったのだ。

そう考えると、悪いことをしたなあと思う……が、よくよく考えてみれば、通常でないといえれば斧乃木ちゃんの腕力は人間のそれを遥かに上回っていた筈。ということは、この荷物、斧乃木ちゃんにとつてはそんなに重くないんじゃないか……。

「はっ、何が二十分じゃ！ うぬの馬鹿力ならその程度の荷物、空気と同程度じやろうによ」

言いやがったこいつ。

「空気と同程度は言い過ぎだよ忍姉さん。幾ら僕が吸血鬼から認められるほどにパワフルだからって重さを感じないわけじゃあないんだよ」

「はーそうか。それはそれは儂の見立て外れじゃったかのう？ 残念じゃよ、その程度の力しかないということを自己申告されて、儂はとでも悲しい。あまりの貧弱さに涙が出てくるわ」

「後期高齢者になると涙腺が緩むんだね。同情するよ忍さん。それにも悪いみたいだ。僕に対する期待が大分に掛けられていたことは重々承知だけれど、人を見る目がないんだねあなた」

「黙れよ人形。儂をあまり煽るなよ、うぬ如き一瞬で爆散させてやるわ」

「やれやれ。どうして高齢者つて自分を美化しすぎるきらいがあるんだらうね？ 若者としては不思議な限りだよ」

「最近の若者は年上に対する敬意というものがたらんよなあ？」

「最近の老人は年下に対する譲歩というものが欠けているよね」

「よし殺す」

「ほーらすぐ暴力に訴えるー。助けて鬼いちやーん、殺されちやーう」

「お前らの諍いに僕を巻き込むな斧乃木ちゃん」

僕は忍を抱き抱えた。じたばたしながら斧乃木ちゃんを睨む忍。

「ええい離せ！ 離せお前様！ 離せばあやつに分からせてやる！」

「離しちやダメだよ鬼いちやん。離そうものなら鬼いちやんごと問答無用で討つ」

「五・一五事件曲解してんじゃねえよ！」

因みにあの事件でかの有名な台詞『話せばわかる』が発せられた訳だが、誤解されがちだけれどあれは犬養毅元首相が苦し紛れに発した言葉ではなく、あくまで冷静な心理状態で暗殺者たちを説得しようとした際発せられた言葉である。まあ問答無用で撃たれたのは間違いないが。

「本当にもう。折角僕が出てきてやったと思っただらこれだ。鬼会山だけにとんでもない鬼ババア、ロリババアに会っちゃった」

「君は君で煽るな。つーか、鬼つーなら僕もだらうが」

「鬼いちやんは鬼というか鬼畜でしょ。何度も言わせるなよな」

「じゃあ何度も言うな。僕は鬼畜じゃない、人畜無害な阿良々木暦だ」「ふーん。じゃあ人畜兄鬼」

「無害をとるな。八九寺みたいなことするんじやねえよ」

昔、八九寺に人畜無害宣言をしたところ、人畜さんとか呼ばれた記憶がある。この文系小学生め、一本取られたよ畜生、と思った記憶が残っている。

「八九寺姉さんね……なんだっけ？　今殻の中に引きこもってるんだっけ？」

「八九寺に殻はない」

「そうだっけ」

「お前は八九寺の何を見ていたんだ」

「そういうあなたは八九寺姉さんの何を見ているの」

「……………」

切り返されたので黙った。ノーコメントを貫く。やましいことなんてないけど。パンツなんてたまにしか見てなかったけど。

「殻に籠るどころか、すっかり引き摺り出されて引き摺り回されてる、らしい」

「ああ、そうだった。大変なことになってるんだってね」

「大変なんてレベルじゃあないぜ。命の危機だ」

「ふうん」

　なんだその反応の薄さは。

　相変わらず糠に釘を刺したような童女である。

　斧乃木ちゃんは不意に荷物を下ろし、ちらっと僕の持っているドーナツの箱を一瞥した。何故？

「じゃあ鬼いちゃん、あんまり時間がないってことは共通認識らしいから、さっさと選んでよ」

「選ぶ？」

「そう」

　と言うと斧乃木ちゃんは固結びを解き、風呂敷を広げた。

　中身の内容は、リュックサックや雨合羽、軍手、サバイバルシート、登山用テントなど。つまり、登山用具である。それが大量に入っていた。なるほど、正弦の言っていた補給ポイントってのは斧乃木ちゃんのことだったのか。

「臥煙さん、どうやら今回はバックアップを惜しまないらしいね。いつもなら『臨機応変になんとかしろ』って無茶ぶり仕掛けてきそうなのに」

「きみから見た臥煙さんってなんなんだ」

「お姉ちゃんの上司、つまりは怪物」

「影縫さんを怪物みたいに……」

まあ、分からなくもないが。

「……おい、お前様。下ろせ。いつまで抱えておるのじゃ」

「ああ、悪い……ってなんで僕謝ってるんだよ」

「忘れておったことについて」

「まだ引き摺ってるのか……」

「一生掛かって謝れ」

「水に長す気さらつさらねえなお前」

僕は忍を離れた。降りた忍はドレスを少しはたいた。

「なんだ、そのままお姫様だっこされておけばよかったのに。楽でしょ？ 楽なんでしょ？ 足腰弱いお婆ちゃんなんでしょ？ いえーい、ぴーすぴーす」

「ほらこうやってこやつは馬鹿にしてくるじゃろう？ じゃから嫌なんじゃないああいうのをこやつの前でされるのは」

「いちいち争うなよ二人とも……えつと、じゃあ、この中から選べばいいんだな？」

僕は忍の頭を撫でながら、風呂敷の上のアイテムを指差した。

「うん、そうだよ。理解が遅いね」

斧乃木ちゃんは片手で横ピースして、もう片方で僕の顔を指差した。

「……なんで指差してんの」

「鬼いちゃんの真似さ」

「やめろ」

洒落になってない。斧乃木ちゃんの指先は怖いのだ。

僕はまずリユックサックを貰い、そこへアイテムを放り込んでいった。軍手、タオル、方位磁針、水筒、サバイバルナイフ、懐中電灯、板

チョコ、ライター、飯盒、十得ナイフ、ザイル、雨合羽、スマホ（ちよつとした説明書付き）……正直全部持っていきたいのだが、流石に風呂敷が必要なレベルの大荷物を抱えて登山など出来るはずもない。リュックサックの大きさも加味して、これくらいが妥協点だろう。「どうか、何もアドバイスしてくれないのな、斧乃木ちゃん」「当たり前さ。だって僕そんなの必要ないし。分からないや。いえーい」

「人選……」

臥煙さん、やっぱり今回のキャスティング駄目じゃねーかよ。

「ただまあ、ど素人鬼いちやんだけに任せると不安だし。一つだけアドバイスしてやろう。ありがたく思え」

「なんでそんな偉そうなんだ……」

「鬼いちやん軍手を選んだけどさ、この登山用グローブを使った方がいいよ」

そう言うど斧乃木ちゃんはアイテム群の中から黒いグローブを手渡してきた。

「いや、それも考えたけど……でも、オーバースペック過ぎないか？」

「おつと何々？ アドバイスしたらしたで反論してくるの？ こつわ。偉そうなのはどつちだろうね」

「いやそこまで言わなくてもいいだろー！」

「鬼会山は、まあ軍手でも大丈夫だと思うけれど、問題はこの次、千針山なんだ」

斧乃木ちゃんは僕のツツコミを無視して言った。

「千針山は尖った岩が沢山あるんだけど、多分鬼いちやんはそれを掴んでのロッククライミングを強いられると思う」

「ロッククライミング？ ……おい待て、そんなことした経験ないぞ」

「そこはノリで」

「舐めてるなきみ」

「だって僕がやろうと思えば例外アンリミテッドルールブックの方が多規則で山なんて簡単に越えられるし」

「羨ましいな……」

というか、登山と言っても、僕としてはハイキングのようなものを予想していたのだ。クライミングなんて考慮に入れてない。いやまあ勝手に思い込んでいたんだろうと言われればそれまでだが。

「だから軍手だと、岩を掴んだ時に繊維を貫いて怪我するかもしれないでしょ？ だから僕はグローブにしろって言ってるんだよ分かったか」

「ああ、分かったよ」

妙に高圧的な態度にはもう突っ込まないぞ。

僕は軍手とグローブを入れ替えた。そこで斧乃木ちゃんがまたもや何か手渡してきた。

「これは……地図？」

「そうだよ。地図というか地形図」

斧乃木ちゃんが渡してきた用紙には、なんだか分からないが何本もの曲線、何らかの詳細のような数字などが描かれていた。等高線のようなものなのか——読み取れないこともないが、しかし難しすぎる。まず現在地が分からない。

「……あの、斧乃木ちゃん。もっとこう、普通の地図はないの？」

「何さ、それじゃあ不満？」

「不満っつーか、これ多分上級者向けの地図だろ。僕、バリバリの初心者だぜ」

「だろうね。そう言うだろうと思ってもう一つ、ほら。初心者向けの地図も用意してきたよ」

「じゃあ最初からそれを渡してくれよ！」

僕は地形図ともう一枚の地図を交換した。今度の地図には詳細な数字などは書かれていないが、道筋は分かりやすい。

「でもこの地形図は臥煙さんが用意したものなんだよ。それを反故にするの？」

「それを言うならもう一つのこの地図だって臥煙さんが用意したものなんだろ」

「違うよ」

「え？ じゃあ誰が用意したんだよ」

「僕だ」

「へえ、斧乃木ちゃんが——つてええ!？」

久し振りに炸裂、阿良々木暦のノリツツコミ。自分で言うのも何だが、結構レアだと思う。

斧乃木ちゃんはキメ顔（それでも無表情）で、両手で横ピースをきめながら言った。

「用意、というか作った、かな。ある意味僕はその役目も兼ねていた」  
「っ、作った？」

「そうさ。全く人使い、いや、怪異使いが荒いよね。この大荷物を抱えたまま、この山を実際に歩いて地図を作れだなんてさ。伊能忠敬は八九寺姉さんの役なのに」

「そ、それはありがとう、つつーかお疲れ様……」

「労ってくれるの？　じゃあ後でハーゲンダッツ買ってね」

「ああ、そりゃあ、うん」

寧ろこつちから買ってあげたいくらいである。一つと言わず二つでも。

「十個は？」

「それはちよつと……」

ハーゲンダッツ、高いんだよ。

しかしまあこの童女、実に働き者である。そうか、ちよつと前に登山なんてやっていたなら、そりゃあ疲れる筈である。待たせてごめんなさい。

僕は斧乃木ちゃんから貰った地図をマップケースに入れた。そしてリュックサックのファスナーを閉めた。

「……ああ、そうだ。あと、テントとストックも欲しいな」

「欲しがり屋さんだね。強欲な奴め」

「きみが持つてきてくれたんだろうが……」

謎の罵倒を受けながら僕はテントの入った手提げのバッグとストックを二本受け取り、地図とストックを忍に手渡した。

「……ん？　おいおいお前様？　なんじゃ？　なんじゃこれ。ストックは分かるが、地図？」



「疑問符ばつか浮かべるな。いやほら、僕両手塞がっちゃうから見辛  
いんだよ。だから道については忍に担当してもらおうかなと」

「おいおい嘘じやろお前様!? 儂、この後お前様の影に潜ってDSも  
どきで遊ぶつもりだったんじやが!」

「嘘だろはこつちの台詞だてめえ! お前そんなこと考えてやがった  
のか!」

「まあまあ喧嘩はよしなよ二人とも。争いは何も生まないぜ」

「斧乃木ちゃん、君にそれを言う権利はない」

「勝手に権利を剥奪されても困るな」

剥奪ではなく、元々そんなものはない。元からそんなの持っていな  
いだろ。

「なあ、頼むぜ忍。僕たちは二人で山登りするんだろ? いや、三人で  
この山を攻略するんじゃないやなかつたのかよ!」

「ん? あれ、僕もカウントされてる?」

「ん? あれ、斧乃木ちゃんも来るんじゃないの?」

「そんな訳ねーだろ馬鹿」

辛辣な言葉を投げ付けられた。そこまで言わなくても。

「え、じゃああの第一声は何だったんだ?」

「あんなのただのノリじゃないか。何本気にしちやっつてんの。僕は登  
山なんかやっつている暇はないんだ、他を当たれよ」

「いや他っついていねーよ……あの、斧乃木ちゃんって、もしかしてこれ  
と、地図を作るためだけに来たの?」

「それだけじゃないよ勿論。ちゃんと他に任務はある」

「あ、やっぱあるんだ。因みに、興味本位で訊くけど」

「興味本位なんかで訊かれたくないね」

「……任務って、どんなやつなんだよ」

「それを教えて僕に何かメリットがあるの? ありますの?」

「どこかの誰かさんの台詞をパクるな」

しかも一番心象悪い台詞を……。

「まあ色々あるんだけど、直近はあれだね、正弦の手伝い」

「正弦の?」

「うん。正弦の足場になるんだ」

「……………」

……そりゃあ、要るな。

あいつは地面を歩けないからな。

……ということはつまり、正弦は未だにあの木に上ったまま動いていないということなのか？　だとすれば少し間抜けだが……：それじゃあ、ある意味斧乃木ちゃんは急がなくていいということになるな。

「そうだよ。だからあなたたちとこうして漫談してる暇なんてないんだ。僕を早く解放してくれ、忙しいんだよ」

「むう……………」

あまり拘束しているつもりはなかったが、アイテムを選ぶのに手間取ってしまったのは事実。だからある意味拘束していたと言える、のかも、しれない（精一杯好意的な解釈）。

「分かったよ。じゃあな、斧乃木ちゃん。また後で会おう」

「は？　おいおいなんだいその投げやりな挨拶は。ちよつと淡白すぎやしない？」

「面倒くせえなおい！」

おっと、思わず本音が出てしまった……：この子は僕に何を期待しているのだろうか。何がしくて何をさせたいのか、とんと分らない。無表情なものも相まって余計に。

「まあいいや……じゃあ、お望み通り僕は行くよ。行けばいいんだよ」

「ああそうじゃ行け行け早く行け」

「うっざいなあ本当」

「うぬが言うな」

「あなたに言われたくない」

意味不明な責任転嫁と軽い煽り合いをしながら斧乃木ちゃんは残ったアイテムを再び風呂敷で包み、持ち抱えた。最初に比べると大分小さくなっているのが分かる。

「それじゃあね、鬼いちゃん。多分また会うことになるだろうと思う

けれど——うん、会えるといいね」

「……おいおい、なんだよ。意味深な言い方するなよ」

「意味深なんかじゃあないさ。そのまま、気を付けて行ってらっしゃいという意味だ」

「……………」

斧乃木ちゃんはそう言うと、僕たちに背を向け山を降りて行った。途中で振り返ることもなく、手を振ることもなかったが、きつとそれに関しては何手が塞がっていたからだろう。

僕は斧乃木ちゃんの後ろ姿が見えなくなるまで見送った。そして、リュックサックを背負い直した。

「よし……………じゃあ、行くか！」

「じゃのうー……………ちゅーか地図係って、儂は何をすれば良いんじゃ」

忍は地図を弄びながら言った。なんだかんだで地図係を務めてくれる気はあるらしい。

「その地図を見て、僕に指示を出してくれば良い。間違ったルートを歩いたら訂正したりとか」

「面倒じゃのー」

僕たちはまた歩き出した。いや、歩きと言うよりは速歩きと言った方が適切だろう。何せ、もう空は赤く染まっている。日暮れが近いのである。

時計を確認したところ、現在時刻は午後四時過ぎ。今は真冬ではないからまだ暗くはなっていないものの、しかしまだ肌寒さの残る4月初日、日没までの猶予はあまり残されていない。

「なんとか今日中に折り返し地点まで辿り着きたかったんだが……………あんまり無理しすぎるってのも悪手だよな」

「じゃな。では、今日はこゝらで休むとするか？」

「ああ、だな。もうちよつとテントが張れそうな場所を探して……………そこで、今日の行進はやめにしよう」

吸血鬼コンビだというのに、夜の行進を避けるという選択をした僕たちであった。

いや、確かに吸血鬼は夜に強いし、僕も忍も不完全ではあるけれど

徹夜一日くらいはなんの問題もない。が、あくまでもそれは通常通りの生活を送っていればの話。今は決して通常通りとは言えない登山の真つ最中なのである。体力は出来る限り温存した方がいい。

それに夜の移動は危険極まる。全盛期レベルの視力なら夜の闇など問題ない、寧ろ昼よりよっぽど見やすかったのだが、今の僕は精々一般の方よりも夜目が利く程度である。具体的には、明かりが一切なくてもぼんやりと周囲が見える程度まですぐに適応出来るなんてレ  
ベル。

はつきり言つて、吸血鬼としての最大の利点は僕たちに備わっていない。その辺ヴァンパイアハーフとは全く真逆だが——何にせよ、あの程度明るさが残っている内に拠点を作っておかないといけない。

僕と忍は暫く歩いて、ギリギリテントが張れるような場所を見つけて、そこにテントを張った。テントなんてロクに張ったことがないので少しばかり不恰好なものになってしまったが——まあ、仕方ないだろう。それに、元々登山用テントというものは居住性が低い。大した差はない筈だ。

無事テントを張り終えた時には、辺りはすっかり暗くなっていた。僕は薪木を集め、ライターで燃やした。焚き火である。

自然でありながらしかし人工的な火の灯に照らされ、僕たちの山における最初の夜が始まった。

吸血鬼の時間が  
始まった。

## 第五話　しのぶハート　其ノ肆

「014」

「暗いのう怖いのも狭いのう」

「うるせえ、吸血鬼が何言ってるんだ」

テントを設営し終えた僕たちは、軽い食事を終えてから中で横になっただけだ。

忍の言う通り、一人で入るのであればそれ程でもないのだろうけれど二人で入るには、このテントは少々狭かった。暗いというのも、明かりなんて精々薄く薄く覗き込んでくる月明かりくらいしかない。どうしてもというなら懐中電灯があるけれど、僕らが僕らなだけに、ぶっちゃけ明かりは必要ない。怖いのは知らん。

「いや、怖いと暗いは冗談じゃよ。しのぶジョークじゃよ。けれど狭いのは確かじゃ。という訳でお前様、出て行け」

「こらこらしのちゃん、滅多なことを言うもんじゃやないよ」

「誰がしのちゃんじゃ。しずちゃんみたいに言うな」

「しずちゃんと言えば、最近ではアニメのイメージが強すぎて原作でのび太くんがしずかちゃんをしずちゃん呼びしているシーンが誤植のように思えてくるよな」

「あれは寧ろ逆なのじゃがな。アニメ版だと声優さんがしずちゃんと発音し辛いからしずかちゃん呼びになったのだとか」

「ふーん……待て待て、そうやってドラえもん知識をひけらかしてさっきの発言を誤魔化すんじゃない」

「うぬが勝手に路線変更したのじゃろうが」

「そうだったか。」

「まあいいや。」

「つべこべ言っておる間に行動したらどうじゃ？　ほら、出口を開けてやるから」

「おかしくないか？　僕が出て行くとかどう考えてもおかしくないか？　逆じゃあないか？」

「おかしくないおかしくない。これ以上なく理に適っており正当じゃ」

「いいや不当だね！ 出て行くなら忍、お前の方だぜ。ほら、影を作つてやるよ。影の中つて案外居心地良いんだろ」

「はああ!?! 阿呆かうぬはー? 確かに魅力的な提案ではあるが、しかしその程度で儂を負かせると思うな! かかっ!」

負けず嫌いな忍さんであった。一度出て行けと言ってしまった以上、後に引けなくなつたのだらう。頑固な奴め。っーか魅力的って認めちゃつてるじゃねーか。

「でもな忍、よく考えてみる。僕が外に出たらお前にとって困ることになるぞ。僕の影で充電できなくなるんだからな」

「儂を携帯の子機のように扱うな。ならうぬはあれか、儂にパワーを与える以外は特に何も出来ないヒモということだよいのか」

「子機の充電器は紐っぽくないぞ。残念だったな」

まあ台座にくっ付いてるんだけども。っーかコードを紐呼ばわりすんなや。そんな機械に弱い年配の方みたいな……。

「僕は台座の方だ。僕の膝は小さな子を座らせるためにある」

「うぬ、あまり迂闊な発言をするなよ。今この場には電話子機ならぬすまーとふおんとやらがある。いつでも変質者として通報できるのじゃからな」

「一瞬でもスマートフォンに手を掛けてみる、お前の無い胸を撫で尽くしてやる」

「むう。そこまで忠誠を誓われると主としては庇いたくなるのう」

もうこの発言が、というか胸を撫でる行為そのものが十分通報理由になりかねないのだけれど……吸血鬼でよかつたと切に思う。

「……この言い訳で八九寺の胸を撫で回したいな」

「そこで元委員長ではなく迷子娘の名前が出てくる辺り救いようがないなお前様。いや、結局どちらも変質者どころか只の屑であることに変わりないが」

「僕は屑じゃない。阿良々木だ」

「噛んでおらんし間違つてもないしこればっかりは不当でもなんでも

ないぞお前様」

酷い言われようである。

まあ。

そんなこと（羽川の胸を揉む）僕は出来ないんだけどな。百歩譲って屑じゃなくてもチキンな阿良々木くんなのだ。

「常々思っておったのじゃがなお前様。最近ハチクジに対するセクハラが当たり前のようになっておるが、ぶっちゃけこれ犯罪じゃからな？ 通り魔じゃよ？」

「なあ忍。そういう今更なことを言うの止めましょうぜ。ちよつと冷めちゃうからさ」

「自分に都合が悪くなったら即座に話を畳みおったぞこやつ」

「いやいや違うんだよ忍、そうじゃあないんだ。確かに僕は八九寺に對するちよつとした出会い頭のスキンシップはほんの少しだけ楽しんでやっているフシはあるよ。そこは否定しない。けれど最近はそのういものにも飽き飽きしてるんだよ、だから僕としてはあの一連の流れから早く卒業したいと思ってるわけなんだ。高校を卒業したと同時にロリラギさんから卒業したい訳だよ。でもそれを許さない読者諸兄という概念がこの世界にあつてだな、僕はみんなの期待を一身に浴びてしまっているんだよ。やりたくないよ？ もう足どころか手も洗いたいくらいなのだけれど、でも仕方ないんだよ、仕方なくなんだよ！ 最早このテンプレートは僕の意思を離れてしまったんだ！ もう自分の意思なんてあつてないようなものなんだよ忍！ 後には引けないんだよ！ くそつ、この状況をどうにか打破出来ないものか……助けてよ、のぶえもん〜！」

「長い！ 吸血鬼だぶるばんち〜！」

「ぐふっ〜！」

いつもの片手ではなく、両手を用いたアツパーパンチ。視界がぐらつと揺れた。

どうやらこののぶえもんは聞く耳を持たないらしい。ドラえもんと違って耳があるつてのになんてこった。

「俺の拳はチャンピオングローブにも等しい。参ったか」

「道具を出さないとか酷いぞのぶえもん！」

「チャンピオングローブと言えば、他にもハイパワーグローブとかスーパースーツなんかがあるが、何が違うのかの？」

「その辺は藤子・F・富士雄先生の記憶違いとかじゃないかな……」

あれだけ膨大な設定量なのだから忘れることだってあるだろう。どれだけ巨匠でも人間なのだから。

いや、寧ろ、巨匠と呼ばれる存在が得てして高齢なことから考えると、”巨匠でも”ではなく”巨匠だからこそ”なのかもしれない。

「……いやいや。案外そうとも言えんぞ？ 儂もある巨匠<sup>マスター</sup>を知ってるが、そやつは人間ではないからな」

「へえ？ そんな知り合いいるのか」

「まあ。とは言え遙か昔の話じゃ——今も生きておるのか、はたまに既に死んでおるのか。知りかねる」

「ふうん……」

当たり前といえば当たり前なのだが——しかし僕は、忍の昔の知り合いなんていうのが存在することを、全く知らなかった。いや、知らなかったどころか、思いつきさえしなかった。

忍の過去。

考えてみたこともなかったが——僕はこの、僕の主人にして従僕であり、あどけない幼女であり艶やかな美女であり、吸血鬼であり吸血鬼もどきであるこのパートナーについて、どれほど無知なのだろうか？

僕は彼女について何も知らない。

何も。

「……なあ、忍——」

——この時、僕が忍に何を訊こうとしたのか、思い返しても定かではない。仮に訊くことが出来たところで——僕はまともな質問など出来やしなかったと思う。

だから。

だから、突然テントが凄まじい音を立て、遙か彼方へ吹き飛んでも吹き飛ばなくても——結果は案外同じだったのかもしれない。



「っ……………!!?」

「何っ……………!!?」

僕と忍は反射的に跳ね起きた。テントは拙いながらもちゃんと張ってあったし、仮に暴風が原因だったとしても、風の音なんて全くしなかった。地面に刺した柱だって、粘土細工じやあるまいし、バキバキに折られて散乱することなんてまずあり得ないのだ。

自然現象ではあり得ない——なら、超自然現象なら。

怪異の仕業なら——あり得ないことなどないのだ。

僕たちの目が、吸血鬼の眼が、この暗闇の中で捉えたのは一人の男だった。

闇においてさえ目も眩むような金髪で。

その目は鋭く金色の光を放ち。

肌は陶器か彫像のように白く。

血も凍るほど美しい相貌であった。

「■■■■■」

男が声を出した。何語で喋っているのだろう、それは理解出来ない言語だったが——一つ分かったことがあるとするならば。

ちらりと覗いたその八重歯が、まるで牙のように鋭く尖っていたことから推察すれば。

この男は——吸血鬼だ。

「015」

「吸血鬼……!」

吸血鬼特有の牙という動かぬ証拠を見せつけられて尚、僕は信じられなかった。吸血鬼だと仮定すれば、テントを吹き飛ばした怪力も説明がつくのだが。

どうして吸血鬼がここに？

こちらにも信じたくはないし思い出さたくないが——今この街には吸血鬼ハンターが居る。しかも一人ではない。手練れのハンターが集団でやって来ているのだ。普通に考えれば、態々そんな状態の場所



地にやって来たことも分かる。切羽詰まって狂い、自暴自棄的になっているのならば理由がないという理由を理解出来る。

ただ、個人的にありそうと思っっているのはもう一つの理由で——二つ目は、則ちこいつが、織崎記の差し金であるという可能性である。正弦の弦を信じるならば、この件は完成形変体刀と何らかの関係があるため織崎が介入してきてもおかしくはない。

いやまあ、会話出来ないことにはそれらも知りようがないけれど。取り敢えずこいらで、僕の相方の意見を聞こうと思う。吸血鬼事情なら、なんだかんだで詳しい筈と踏んだ。

僕は忍を見た。

「忍、お前の意見を聞……忍？」

見ると、如何なることだろうか？ 忍はあの吸血鬼を凝視したまま両手で体を抱え、がたがたと震えていた。

あの忍が。

嘗て伝説の吸血鬼と呼ばれていた存在が、がたがたと。がちがちと。震えていた。

「お、おい？ 忍、どうした！」

「違う……違うぞ……！ お前様、違うんじや、違う！ 違う！」  
「っ……………!?!」

『違う』——って、何がだ？

忍の様子は明らかにおかしかった。尋常でない反応——”怯え”とさえ表現出来そうなそれであった。

「違う、違う——僕は知らん！ 知らんぞ！ 僕は、此奴など知らん！  
うぬなぞ知らん！ お前様よ、僕は、僕は——！」

「お、おい！ 落ち着け！ 落ち着けよ忍！ どうした！」

「……………!」

「黙れっ!! 僕はお前など知らん！ 出鱈目を言うな!! あれはもう既に——!!」

今までに聞いたことのないような金切り声で、男の声をかき消すかのように忍は叫んだ。

何のことだかさっぱり分からない——忍はこいつを知っているのか？ それに、どうやら言葉も解っているようだ。僕が知らないということは、忍がこいつに出遭ったのは、キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードと名乗っていた時期なのか。

言葉が通じるなら交渉が——などと思ったが、無理だ。今の忍は、軽くヒステリーを起こしていると言っても過言ではない。話し合いなど出来るものか。

過去に何があったというのだ？ 忍がこんなに取り乱すとは——こいつは、何者だ!?

「お前様!! こやつを殺すぞ! このような不愉快な存在、この世から消してしまおう!」

「こ、殺すつて——待てよ! 相手は吸血鬼だ! そんな簡単に倒せる訳が!」

「儂に血を吸わせる! 限界まで!! 仮に——仮に、百歩どころか億歩以上譲つてこやつが本当に『あの男』だとしても、限界まで吸血鬼に近付いたうぬなら! 互角程度の戦い出来る筈!」

「な、何言ってる! おい忍! 説明してくれよ!」

「説明などせんでよい!! こやつは儂らの敵であり儂らはこやつを殺す、ただそれだけ、それだけでよい!! それ以外の情報など不必要じゃ!!」

「っ——!!」

何故だ——何故、こんなにも忍は動揺しているんだ。何が忍をそうさせている? あの死屍累生死郎の時に匹敵する程の……いや、それ以上だ。

だが——忍は、間違ったことは言っていない、筈だ。確かにこいつは僕達に対して攻撃を仕掛けてきた、それは間違いない。敵であることは間違いないのだ。

それに何より。

この尋常でない忍の反応が、こいつの危険度を如実に表しているではないか。忍が恐れているものをぼくが倒せるのかは正直なところ甚だ疑問ではあるが——忍の言うこともあまりあてにできない。春

休みの時は、あのハンター三人組との戦闘を『楽な仕事』と評していた程度に、この幼女は敵の見積もりが甘いところがある。

やるか？

やれるか？

やるしか——ない！

もうそれ以上僕は考えなかった。服を引っ張り、忍が血を吸いやすいように首筋を露出させた。

「分かったよ——吸え！ 忍！」

忍は僕に飛び乗り、首筋にその鋭い牙を突き立て——

「超ウケる」

「え？」

——ようとした、その時である。突然、嘲笑うかのような響きの声は何処からともなく聞こえてきた。そして同時に、僕のすぐ横を何か猛スピードで通り過ぎて行った。それは僕の腕を少し掠めたように、焼け付くような痛みが、そこから腕全体に、熱が伝導していくように広がっていった。

この痛みには覚えがある。耳が少し疼いた気がした。

それに、この声——聞いたことがある。いや、どころか——本当、数時間前に聞いたぞこの声！

「■■■■……!!」

さつきとは違う場所に吸血鬼は立っていた。そしてさつきまで居た場所には、まるで墓標のように——巨大な十字架があった。

「くくっ、くくくっ！ 本当ウケるぜ——んな気軽に吸血鬼化しようとしてんじゃあねーぞガキ！ しかも限界ギリギリまでだ？ あれ程痛い目え見たつてのに懲りねえ奴だ。超ウケる」

「なっ……お、お前！ エピソード!? 何でここにいるんだよ!? つーか、どっから出てきた!」

そう、エピソード。さつき確かに僕と別れた筈のエピソードが、何故かここに居た。

「あん？ どっからってそりゃあ、ずうっと霧になって、お前らの後を追ってたんだよ」

「き、霧って——え!?　じゃあ山に入る前のあれは何だったんだ!?

お前、別の仕事に行ったんじゃないやあなかったのか!?

」

「だからこれがその別の仕事だよ、うっせえな!　ごちゃごちゃ抜かしてるとてめえもついでに後遺症の残らない程度に殺してやる!」

「ごちゃごちゃ言いたくもなるわ!!　え!?　じゃあお前、つまりは、ずっと僕達と一緒に居たってことか!?　おまつ……!」

「別に別れるなんて俺は一言たりともいつてねーぞ。てめえが勝手にそう解釈しやがっただけだ、ガキ」

「ええ……」

そう、だったかあ?

そう言われてみれば、まあ、そうだったような気がしないでもない……何にしても酷い屁理屈だ……。

「俺が態々探しに行くより、隠れててめえらに着いて行った方が、こいつを仕留めるには最も確実な手段だと踏んだってことだ。そして、見事にやって来やがった」

エピソードはそう言うのと姿を消した。数秒後、突き刺さった十字架の側に姿を現し、十字架を引っこ抜いた。

「俺としちゃあ、ついでにお前らも死なねーかな程度の気持ちで初撃は見逃したんだが……こりや無理だな。相当ヤバイランクの吸血鬼と聞いていたが、性質がすっかり変わってやがる」

何気に僕達を見殺しにしようとしていたところは、まあ、追求しないとして(そんなに僕達のが嫌いか)——相当ヤバイランクだと。忍が恐れるほどの吸血鬼——え?　マジでなんで僕が倒せると踏んだんだ、この肩に捕まったまま震えていらっしやる金髪幼女は?　

「まあ、仕事が楽になったってんなら大歓迎だ。さっさと死ねや吸血鬼——トロピカレスク・ホームアウェイヴ・ドッグストリングス!」

「~~~~~っ!!」

エピソードは再び十字架を投擲した。吸血鬼は跳躍し、そのままバク転を繰り返してそれを避けた。エピソードは軽く舌打ちし、再び消えた。

トロピカレスク・ホームアウェイヴ・ドッグストリングス——それ







は、鬼会山を越えたのであった。

[016]

千針山。

この山はそう呼ばれているらしい——そして、実際に近くで見ると、なるほどこの名は的を射ていると思った。

そして、斧乃木ちゃんの言っていたことも理解できた——山であることは疑いようはないが、しかし見る限り、どうやら鬼会山のようなまともに休息できるような場所は無いように見受けられる。

岩。

岩山。

鋭く尖った岩があちこちから顔を覗かせている。まだ入り口だというのにこの調子では、果たして頂上はどうなっているのだろうか？

僕は見たことがないけれど——そして諸事情により死後にさえ見ることはできないであろう——針山地獄を彷彿とさせる。

僕は厚手の軍手を取り出した。斧乃木ちゃんの勧めで選んだものだが、大袈裟ではなく、心の底から斧乃木ちゃんに感謝しなければならぬ。もしも彼女のアドバイスが無ければ、今頃僕はもつと尻込みしていたであろうから。

「取り敢えず……今日中とは言わずとも、明日中には超えたいな」

なんだかんだで、鬼会山はほぼ1日での攻略に成功した。だからという訳ではないが、きつとこの山も1日程度で超えられるだろう、という根拠のない自信があった。

愚かにも。

愚かなことに。

「……………」

僕は影に目をやった。けれど、何の声も聞こえないし、何の反応も見られない。

鬼会山を超えた後、ちよつとした激励を掛けてくれた後、忍は僕の影の中へと入って行った。曰く『眠い』とのことだが——きつとそれ

は間違っではないだろうか。何せ結局徹夜で山を越えたのだ。僕だって休息はとりたかったので、その後暫く眠ったくらいだ。

けれど、それだけじゃあるまい。

あの吸血鬼——トロピカレスク・ホームアウェイヴ・ドッグストリングス。あいつと忍がどういう関係だったのかは知らないが、どうやら奴との遭遇は忍のメンタルに甚大なダメージを与えたらしく、眠気とは別に、忍はすっかり疲弊してしまっていた。

あれから結局僕達を追いかけてこないところを見ると、戦いはエピソードの勝利に終わったのだろう——謎は謎のままであった。

トロピカレスク・ホームアウェイヴ・ドッグストリングス。

謎の言葉『スーサイドマスター』。

そして——『アセロラ』。

僕は彼方此方から突き出す岩に気を付けながら、進んで行った。

地味に気になるのは、そこである——『アセロラ』。忍の反応から察するに、きっとそれは『アセロラオリオン』のことなのだろうが——どうしてあの吸血鬼は、忍をそう呼んだんだ？

大抵、嘗ての忍を呼ぶとすれば、それはフルネームか、或いはハートアンダーブレード呼びだった。例外として、眷属である僕と生死郎だけはキスショットと呼んでいる。

けれど、今までミドルネームで呼んだ者は居なかった。たまたまあいつが、ミドルネームで呼ぶ主義の奴だったと考えればそれまでだが……それに、”アセロラオリオン”ではなく”アセロラ。オリオンの部分は僕の聞き逃しかもしれないけれど。

呼び方さえもイレギュラーだった、あいつは一体なんだったのだろうか？

幾ら考えても、僕の頭ではそこから先に進めない。疑問が生まれるだけで何一つ解決しない。これが羽川なら、こんなに思考するまでもなく答えを導き出してしまおうだろう。或いは臥煙さんなら——いや、臥煙さんなら疑問に思う前の段階で、既に知ってそうだ。

つい先程、忍にぼうつとするなど注意されたところだというのに、早速僕は心ここに在らずな状態で歩いていった。さつき僕は何を考え

ていたんだったか——そうだ。日和ちゃんだ。確か、日和ちゃんと一緒に和服を買いに行ったときのことだ。

鬼会山を下っている時のことである。流石にずっと走り続けるのは身が保たないため歩行に切り替えていた。その際、僕はすぐそこにあった木に、真つ白な着物が引つ掛けられてあるのを目撃したのだ。またぞろ怪異か、と思つてその着物を引つ張つたり被つたり畳んだりしたけれど、結局それは何の変哲もない、ただの着物でしかなかった。

誰かが脱ぎ捨てたのだろうか？　だとすれば何の為に——気にはなったものの、それより気になったのは、その着物は日和ちゃんに買ってあげたあの着物と瓜二つだった、ということだ。材質も、色も、大きさも、何ら変わりのないもののように思えた。

これを持って行つたところで何かある訳でもなかったのだが——そういうセンチメンタルな気分もあつて、僕はその着物をバッグに入れた。

改めて考えると、その行為のどれだけ軽率であつたことだろう。はつきり言つて僕のこの行為は実質盗難に等しい。もしもこの服が棄てられていたのではなく、敢えて持ち主が掛けていたとしたら？

いや、周囲に人の気配なんてなかったからその可能性は極めて低いだろうけれど、どちらにせよ最早立派な犯罪と言えた。

……犯罪つーなら、もうこの一年間で色々犯してしまつていような気がするけれど——これでいいのか、警察官の息子。

そんなことを考えていると、いよいよ眼前に崖壁ならぬ岩壁が立ちはだかつた。これの前では、もうこのストックでは意味いだろう。

これはもう置いていくしかないか——いや待て。それはない。ストックは置いていく前提のものではなかつた筈だ。普通のリュックサックならいざ知らず、斧乃木ちゃんから貸してもらつた（厳密に言えば臥煙さんから）ザックは登山用、何処かに収納スペースがあるのでは？

輪っかか？　ザックにいくつかの輪っかが付いている。ここに装着するのか？

取り敢えず差し込んでみた。

「……安定しないな」

今にも滑り落ちそうである。

どうしようか……僕は、斧乃木ちゃんに少しでもレクチャーしてもらうべきだったと少し後悔した。ストック要らずの装備無しで山登りするような彼女である、訊いたとしても知っていたかどうかはちよいと怪しいところではあるけれども。

影の中に仕舞えたりするのかな？ いや、あくまで出し入れ出来るのは、忍のスキルで作ったものだけだったか？ 確か、そうだったかも。

「えっと……」

不味いな。こうしているうちにも時間はどんどん進んでいる。ずっと立ち往生しているわけにもいかない。

仕方なく、ストックを安定しないところに差し込んだままで、僕は登ることにした。

軍手装着。

うむ、さすが登山用。見るからに厚そうだったので指が動くがどうか内心心配していたが、十分動かしやすい。杞憂だったな。

出っ張った岩に手を掛けてみる。ごっごっした感覚はあるけれど、痛くはない。技術つて凄いなだな。

「よし」

不安定要素がある時点で何も良くないが、ともかく、よし。

さあ、登るぞ——ちよつとワクワクしてきた。ロクククライミングなんて初めての経験だから……劇場版【傷物語 II 熱血篇】では校舎の壁を登るといふ荒技を披露していた僕だが、あれは飽くまで演出の一環であり、フィクションであるから、あまり気にしないように。

じゃあ、いくぜ！

僕は改めて気合を入れ、ついに片足も突起に乗せた。

今日中に超えてやらあー！

「ちよいとちよいとお兄ちゃん。何処から出てくるのです、その根拠無き自信は」

「根拠無きって言うな！　つか、今そんなこと言う、な……」  
今にも登ろうとした瞬間——何処から出てきたのか、背後から児女の声が出た。

「……ええ？」

そう、児女だ。

あくまでも声質から特徴を判断しただけであって、この時点では、僕はその児女を”彼女”だと認識していなかった——いや、実際のところ、思い当たってはいたのだ。

けれどあり得ない。

あり得ないのだ。

だって——だって、彼女は。

「お久しぶりでございますね。……阿良々木お兄ちゃん」

僕は降りて、振り向いた。

神崎日和。

彼女はもうこの世界から、消えてしまった筈なのに——？

「017」

僕は夢でも見ているのか？　そんなありきたりな感想を抱いてしまった。それくらい信じられなかったのだ。

「ひ——日和ちゃん、なのか？」

恐る恐る僕は訊いた。そんな僕とは全く真逆と言ってもいいような、まるで太陽のような笑顔で、日和ちゃんと思われる児女は言った。「ええ、ええ。勿論ですよ阿良々木お兄ちゃん。あたいは日和以外の何物でもありませんとも。お久しぶりでございます」

「お、おう、久しぶり……って……か、軽いなおい」

僕たちちつてもっと重い別れ方してなかったっけ？　このシリーズ史上類を見ないレベルで悲惨な別れを経験していなかったっけ？

「まあまあ良いではありませんか。左様なことなど些細なことでございます。ちよいとバラバラにされた後真っ暗闇の中に葬られた程度のことですゆえ」

「それがちよいとしたりした些細な事だと主張するといふのであれば、是非とも教えて欲しいもんだな、大事つてやつを！」

「そりゃあもう、阿良々木お兄ちゃんが斬り刻まれて斬殺されるか、北白蛇神社が倒壊することくらいじゃあないですか？」

「僕の死が神社倒壊と同列なのか……」

この町の要であるあの神社と同等と言われるのは、喜んでいいものかどうなのか。視野を広げて考えれば、神社倒壊の方がよっぽど大事そうだ。

僕は目の前の児女を見た。

隅々まで観た。舐め回すように診た。

ふむ……確かに、見た目は紛う事なく日和ちゃんだ。服装は初期設定のものではあるけれど、真ん丸なオツドアイ、ほんの少し尖った歯、ぷにぷにして柔らかそうな頬、張りがあつて瑞々しい肌——僕は人物鑑定自体にはそこまでの自信がある訳ではないけれど、児女と幼女と童女と少女と羽川だけは絶対に見間違ふ事はないと自負している。

だから僕の間を信じるならば、このらうたき児女は、神崎日和なのだろう。

「……なんで居るの？」

「おや。酷いですね阿良々木お兄ちゃん。あなあさまし——あたいがここに居るのが、ご不満でありますか」

「い、いや。不満じゃねえよ。嬉しい。嬉しい、けど——君……」

僕は再び日和ちゃんを見た——いや本当、どういふことなのか？

僕の記憶が、興奮と焦燥によつて捻じ曲がついていないのなら、確か日和ちゃんはあの絶対者、世界の修正力、『くらやみ』によつて跡形もなく消し去られた筈だ。

まさかあの苛烈な非存在が消し残しを許す筈もあるまい——初代のあいつの時は、それこそ規格外の例外として——形見である二振りの刀を遺して、残さず消し去つた、筈。

「いやはや。あたしも如何なる理由で此処に居るのか、さっぱりでございませう」

「君自身にも分からないのか？」

「はい。理由というなら、あたいだって知りたいですとも」  
「ふむ」

『くらやみ』に呑まれたものが自然復活するとは、正直考えにくい——再生は出来ても復帰は不可能なのだろう。いや、でなければ修正力だの消失者だの、そういうのが完全に意味をなくした名前になってしまふ。

『くらやみ』が『くらやみ』自身を呑み込んでしまいかねない程に。けれど、じゃあそうなると、目の前の彼女は何なんだという話になるのだが——。

「……………」

もしかして。

もしかして——ありえないとは思うが、あり得る一つの可能性として——織崎記が何かしたか。

随分ふわつとした表現だが、何をしたのか分からない以上『何か』と表現するしかあるまい。あいつには未だ何か隠している能力がある筈だ。先の戦いの際、そう感じた。

糸だけじゃないだろう、と。

或いは、あいつのお付き……………なのかどうかさえ定かではなくなってきたあの亡霊、淡海静の仕業か？ 怪異を作る怪異——どういうプロセスを経ているのか見当もつかないが、そういうことが出来るのなら、日和ちゃんを再び生成するのも可能かも……………と思ったけど、無いか。

何せ、また作るメリットが向こうにない——作ったとしても、またこちらに寝返ってしまうのだ、寧ろデメリットである。行動原理から何から何まで意味不明な存在であるが、流石にないだろう。

「……………なんか、考えれば考えるほど、分からなくなってくるな」

今考えるべきことではない、とも思えてくる。

重要極まりない事象ではあるけれど、ぶっちゃけ僕のミッションとは何の関係もないのである。なら、考えるのは、臥煙さんに丸投げしてもいいんじゃないのかな？ なんて。

言われたことだけやってりゃいいのか、とか斧乃木ちゃんなら言い

そうだが、忘れられがちだがこちとら怪異、更には『くらやみ』に關してずぶの素人である。素人にどうしろと、って話だ。

だから……。

まあ……。

うん。

保留！

「じゃあ日和ちゃん。一緒に行こうか」

「変わり身早すぎませんか？」

うるさい。考えることを放棄した僕が児女を放っておくと思うな。懐疑の念は晴れましたか？ あたいはあたいであると、理解して頂けましたか」

「理解はしていないけどな。まあ何にせよ……また会えて嬉しいよ」

「はい。あたいもです」

日和ちゃんはにこりと笑った。

太陽のような笑顔。目が焼けてしまいそうなほど、それは眩しくて。

「おかえり、日和ちゃん」

「はい、ただいまです」

そして同時に、まともな思考回路さえ、焼いてしまいかねないものだった。

〔018〕

「そして逝つてらっしやい、お兄ちゃん」

「いってきま、え？」

……いやまあ。

そりやあ。

そりやあ、そうだよなあ、と。

僕は思った——そんな、都合のいいような事、ある訳ないよなあ、と——僕の腹部に刺さった、血で赤く染まった刃を見ながら、思った。

「っあ——っ!!」



痛みと血が、じわりと広がっていく。

日和ちゃんは何も喋らず、張り付いたような、しかし満面の笑みで、そのまま僕を斬り刻んでゆく。

腹の刃をそのまま上昇させ、肩まで斬られる——後退する僕。ギリギリ半身はくつついているが、まるで嵐のような連続斬りで、身体中の彼方此方に傷が生じ、血がどぼつと噴き出し、流れ出した。

「お、おい……日和ちゃん……何の、つもり、だ！」

「やはり、厄介でございませぬ。吸血鬼というのは」

日和ちゃんは刃の血を振り払って——否、刃と化した両手の爪を振り払って、言った。

「話には聞いておりましたが、ここまでは——普通斬死されておりますよ、その傷では」

「日和ちゃん——いや、お、お前！ 誰なんだ!？」

「誰とは。あたいは神崎日和でございませぬ。今も昔もいつだって——『日和号』でございませぬとも」

「くっ……!!」

ふらふらとしながら、岸壁に触れた——現在、僕の吸血鬼度はそれほど高くない。それでも尚生きていられるのは、腐っても吸血鬼もどきつてところだが——傷の治りは当然遅く、さつきまでなら今頃傷が塞がっていたろうが、今は精々血が止まった程度である。

日和号だと？

血が回っていない、不活性な脳で考える——成る程、初期設定状態で現れたと言うのなら、僕に対し敵対してくるのは全く自然である。気付くべきだった。

彼女は今、簪を付けている。

微刀『釵』——その名が示す通り、日和号としての本性は、この簪に集約されている。以前日和ちゃんと戦った時には、簪を抜き取ると元の日和ちゃん、即ち神崎日和に戻ったのだ。それは裏を返せば、簪こそが、日和号を覚醒させるパーツであることに他ならない。

「阿良々木暦・認識。即刻・斬殺。です」

「っ!!」

再び爪を振り上げる日和号——その姿は嘗て見たメカメカしいものではなく、神崎日和そのものであったし、微妙に台詞が人間らしいものになったような気がするが、しかし本質的には変わらない。

多少無茶でも、やるしかない。

僕は駆け出した——走った、とは、とても言えないようなスピードだ。爪がまた身体を裂いたけれど、それを全力で無視して、手を伸ばす。もっと出てくれアドレナリン。

「！」

日和号が、驚いたような表情を見せた——顔が日和ちゃんのそれなので罪悪感が募るが、なに、傷つけるわけじゃあない。

僕は簪を掴んだ。その間にも多少斬られたが、問題ない——そのまま、引き抜く！

「っしやあー！」

「な”っ……」

引き抜いた僕の手には、しっかりと簪が握られていた。日和号の髪が解け、それと同時に日和号はよろけ、倒れ込んだ。

「は、はあ……」

な、なんとか助かったぞ。流石に二度目だからか、随分とスムーズにいったな。

そもそも、こんな動きが制限されるような場所、日和号にとってはさぞ動き辛かったことだろう——なんて、相手を思いやるという勝者の余裕をかましながら、僕は突き出した岸壁に、渾身の力を込めて、簪を叩きつけた。

パキンッ！ そんな軽い音と共に、簪は壊れ去った——そして、そのまま塵とも霞ともつかない物質となって、消え去った。

「やて……」

まあ、これでハッキリした——わざわざこんな敵対行動をとらせてくるのだ、これは淡海静の仕業だろう。結果としてはやっぱりこちらの戦力を増やすことになったが、少なくとも僕にダメージを与えたのは、確かなのだ。

……多少、引っ掛かるところはあるが——淡海静が、こんな大雑把

な策をぶつけてくるのか、と思わなくもないが、しかし僕はそもそもあいつのことを何も知らない。もしかすると、ああ見えて結構雑な性格なのかも。何でもかんでもどうでもいいと切り捨てる辺り、それっぽい。

僕は日和ちゃんのところへ戻った。爪は元通りだし、別に傷付いてもない。頭は打ったかもだが、大丈夫だろう。

「おーい、日和ちゃん。起きろー」

僕は冗談めかして、軽く日和ちゃんの頬をペチペチと叩いた。  
のだが。

「……………ん？」

感触がおかしかった。オノマトペで表現するなら、ペチペチではなく、ベチヤベチヤといった具合。

「お、おい？ 日和ちゃーひっ!？」

次の瞬間、僕は仰け反った。日和ちゃんの頬を見、次に掌を見た。そして、戦慄した。

それはべつとりと、へばり付いていた。

日和ちゃんの皮膚が、ドロドロになつてくっ付いていたのだ——！  
「なっ……………、これは!？」

日和ちゃんの頬は削げ、そこからは白い骨が見えてしまっていた。何度も見返す。

「そ、そんなつもりじゃあ！ 日和ちゃん!」

再び触ろうとしたところで、ギリギリで手を止めた。もしかするとまた皮膚がとれるかも？ そんなことを考えていたかもしれないけれど、しかし、手を止めた瞬間、そんな考えは吹っ飛んだ。

見ると、骨が剥き出しになった頬から、円状に皮膚が剥がれてゆくではないか。皮膚が溶け、爛れ、垂れ落ちてゆく。僕はそれをただ、恐怖を感じながら見つめていた。

過程が怖いのではなかった。ましてや、そのゾンビのように、腐敗していく様に恐れをなしたのでもない——そんな段階は、去年のタイムスリップでとくに通り過ぎた。

だから、そうではなく——これから何が起きるのか全く予想できな

いのが、何も止める手立てが思い浮かばないのが、只管に怖かった。「な——何が——」

何が起こるんだ。

何がトリガーとなったんだ——僕はさっき簪を折った場所へ目をやった。しかしやはり、簪は完全に消えたのだ、何処にもない。

あれがトリガーだったのだ。ただ抜き取っただけではなく、壊すことによつて発生する現象——日和号が日和号でなくなった瞬間、回帰不可能になった際に起動する機能、なのか。

僕は恐る恐る、溶けてゆく日和ちゃんを見下ろした。

「う……これは……」

その顔は、もう半分以上が骸骨であつた。どうやら融解しているのは皮膚だけのようで、目は眼窩に嵌つたままだ。そしてそれがより一層、彼女をグロテスクに見せかけている。

手足の融解も始まったのだろう、着物の隙間から、液体とも個体ともつかないぐずぐずのものが流れ出した。靴下も、溶けた肉がずれ落ちて累積するのか、下部が膨らんでゆく。

とても正視に耐えるものではなかつた。

これが赤の他人なら——いや、他人だからといって精神的なダメージが少ないかと言えば、多分そんなことはないのだろうが——なまじ日和ちゃんの姿をしているだけに、余計くるものがある。

彼女は、究極的に言えば偽物だったのだ。今まで接してきた日和ちゃんだつて、実質的には偽物であるけれど、これは後から作られた怪異。

模したものを模しただけの。

偽物——。

「っ!!?」

その時である。突如、日和ちゃんの片目が、ぐちゃ、と開いた。その反動で、瞼周辺が崩れ落ちた。瞼がなくなり眼球が露出したその顔は、まるで白骨の人体模型を連想させた。

「……………」

動いたのは瞼だけではなかつた。起き上がろうとしているのか、腕

が、足が、肉を零しながらびたびたと蠢いている。

「眼球は不規則にくるくると回転し、焦点が合っていない——回転とこののは比喻ではない。視神経などは存在しないのか、まるで地球儀のように回っている。」

「……………」

何か喋ろうとしているのだろう、声にならない音が、開いた口から漏れ出している。皮はやはり千切れ、口裂け女もかくやという惨状。そして歯は人間のそれではなく、日和号のそれ、つまり刃であった。

音はノイズまみれで聞き取れない。

「……………」

「……………」

「……………」

口について出た言葉の響きは、もうすっかり児女に対するものではなく——紛れもない、怪異に対してのそれになっていたことに、僕自身驚いた。

この状況で、彼女を日和ちゃんだと思えるほど、僕の頭は日和つていなかった。

「……………」

「……………」

「……………」

日和ちゃんのようなものが、叫び声のようなものをあげた——それもまたノイズまみれだ。まるで、テレビの砂嵐のような、ザザザザ、というような音。

その音は暫く続いた。そして叫びも。五月蠅いというより、どちらかと言えば不快であった。

「……………」

——余りにも遅い判断であったが、僕は背を向け、突き出した岩に手を掛けた。

これ以上ここに居るのは不味い。

だが、遅かった。

遅すぎた——逃げるなら、簪を折った時点で逃げるべきだったの

だ。幾ら何でも余裕をかましすぎた。

やはり日和っていたのは、僕の方だった。

「——人間・認識」

「!!」

声が聞こえた。

それは人間のものではない。合成音声——機械音声のような。ノイズはもうなかった。

僕はちらりと振り向いた——だから、こういうことをせずに逃げろと言うのだ。

倒れていた日和号が、ゆらりと起き上がる——と同時に、まだ張り付いていた肉が、一気に剥がれ落ちた。べちゃべちゃべちゃと、足元に落下する。

足元に。

足元——を見ると、いつの間にか、そもそもの足は四本になっていた。四本とも骨は剥き出しで、足先は錐のように尖っている。

四本足というのは日和号の特徴だったが、しかし、骨なんて通っていないかった筈だ——ましてや肉もなかった。

いやそもそも、日和号に骨なんてなかった筈なのだ。あつたのは骨組みだけで。

まるで人間のような骨を——持つてはいなかった。

「っ……………!!」

それは最早、日和号でも、況してや日和ちゃんでもなかった。四本の足、そして四本の腕を有した、着物を着込んだ人骨——それにしか見えなかった。唯一昔を思わせるのは、精々着物くらいである。

骨の怪異——それには、人間らしきなど微塵も残っていないかった。

「——碑刀『鉾』」

そして、「微刀『釵』」という銘さえも、残っていない——。

「斬殺・漸進」

「019」

「うわあああああつ!!!」

「漸速・斬殺・漸進・惨殺」

「ぎゃあああああつ!!!?」

斬りかかってくる怪異の手は決して止まなかった——否、それは手ではない。人間らしさをかなぐり捨てたこの怪異の腕の先にあるのは、五つに分かれた刃そのものだった。手本来の役割である筈の『ものを掴む』という行為は、あれじゃ絶対出来ない。

碑刀『鈍』。

口上を発した瞬間、僕は慌てて岸壁を登った。ロッククライミングは不慣れな僕だったけれど、しかしいざやってみると、案外出来たものだった——追い込まれば、人間なんでも出来るものなのだ。

しかしそんな感動に浸る暇もなく——起動した碑刀は、すぐさま僕を追ってきたのだ。

つまりは、こいつもまた登ってきたわけだ——鋭利な刃物と化した手足を、まるで鈍のように突き刺し、蜘蛛のような格好で這い上がってきたのだ。岸壁を裂き、砕き、抉ってゆく。

それを目の当たりにした僕は慌てて、無茶苦茶に叫びながら登りきった——が、けれどここは山。この岸壁が終われば次の岸壁。まとも立って休めるスペースは少ししかなかった。

スペースは少しはあった。けれど、問題はその余裕だ、余裕がない——碑刀は速度を全く落とさず上がってくる。僕に休む暇を与えてはくれなかった。

と、そんな訳で、僕と碑刀との追いかっこが始まったのだ——圧倒的に向こうが有利だったし、しかも地の利さえ会得していた。

そう、問題なのは地の利なのだ。

何せ僕は上下運動——ギリギリ左右移動が出来る程度なのに対し、向こうはそうではなかった。

「斬殺・斬殺・漸速・漸進」

恐ろしいことに、ジャンプしてくるのだ——蜘蛛のようと言ったが、これまた蜘蛛のように跳ね、僕に斬り付けようとしてくる。

僕はそれをギリギリでかわしたりギリギリで被弾したりしながら

登るが、ジリ貧である。こちらから向こうへは、まるで攻撃出来ず、ただ一方的に、漸進的とは名ばかりの連続攻撃によってダメージを受けるばかりだった。

「くそっ……うぎゃああっ!!」

悪態を吐く余裕さえもない。一瞬でも隙を見せれば、碑刀は距離を詰めて僕を斬り刻むだろう。それだけはなんとしても避けねばならない。僕は下を見た。

「っ！」

襲ってくるのは碑刀だけではない——ある意味それ以上にタチの悪いものまでが僕を蝕んでくるのだ。

一言で言い表すなら——それはプレッシャーである。

下を見れば簡単に見えた地面は今や遠い。それは本来の目的であるロッククライミングが、皮肉にも碑刀による追い込みのお陰である意味において順調に進んでいるということであったが——しかし、物が事が順調に進んでいる時、その進行が断たれるというのは最も危惧すべき展開である。

分かりやすくトランプタワーを例に挙げてみよう。順調に作り上げていたにも関わらず、最後の最後で、てっぺんを組むのに失敗し、崩壊、全てが水泡と化す——この山登りもそれと同じである。

ここで岩のくぼみに捕まっていられないほどの大ダメージを受けて落下すると、どうなるか？ 本来ならば潰れて死ぬことを考慮しなければならぬが、ここは敢えてそれを排除するとしよう——となると問題となってくるのは、それこそ、ここまでの苦労が水の泡となるのだ。

精神的にも体力的にも疲弊した状況で、一から振り出しに戻る——これだけは、なんとしても避けなければならない。人間にはモチベーションというものがあるのだ。全てが無駄になれば、なんだかんだ言ってもモチベーションは大幅に下がってしまうのは議論する必要もないだろう。

「斬殺・漸切・漸次・斬殺」

襲いくる碑刀を避けて、さらに登ってゆく。



恐らく、既に頂上まであと半分は超えている。ここを耐え凌げば、あとは下りである。転げ落ちてもあんまり問題はない（ズタボロになつてしまうという問題があるけれど）。

だが、この後少し——というところで、とんでもない失敗をやらかしてしまうのがこの僕、つまり阿良々木暦だ。今まで以上に用心しなければ——

「斬殺」

「くっ！」

「漸殺」

「ぐう！」

「全即・漸切」

「ぎいっ！」

——ならないというのに、この攻撃の嵐である。冷静になろうとしても、否応なく焦らされてしまう。

実際、この碑刀に何らかの戦略があるとすれば——僕をここで落としておきたい筈なのだ。焦っているのはお互い同じ——筈だ。あれに感情が残っているのかは分からないけれど……。

碑刀に追い立てられ、追い詰められ、しかし着実に登っていった。勝利はすぐそこだ——ここで言う勝利とは飽くまでもこいつからの逃避だ。倒すのとは違う——頂上まで、あと、ほんの少しだ。

しかし、ここに来て碑刀は、今までと行動パターンを変えてきた。

「漸速・漸進」

「何……っ!?!」

飛び越えた。

僕を飛び越えたのだ——僕を飛び越え、僕の頭の上に、降り立った。いや、突き刺さったと言うべきか。

つまり、道を塞いできたのである。

ただ襲うだけでは大したダメージソースにはならないと判断したのか——全く恐ろしい。何が恐ろしいかって、今まで僕を追っていた間に発揮していた機動力は、あれで全力でなかったということがこれで証明されてしまったのである。

さつきまでの追いかけてこ（こつちからしてみればただの追いかけられっこだが）は、結局こいつにとつて、つまりは作戦の一部にしか過ぎなかったのかもしれない——これこそが、こいつが狙っていたもの。

油断させておいて、最後の最後で逆転する——なんて。

どこまでも悪趣味の塊だ——碑刀『鉾』!!

「即刻・斬殺」

そして、当然ただ先回りし、道を塞ぐだけで止まる訳はなく。

上から下へ、縦横に回転しながら落下するように斬り込んできた。手足全ての刀を使った攻撃——範囲が広過ぎる！ 避けられないんじゃないのか、これ!?

「うあああああああああつ!!」

僕は叫んだ。叫んだところで何が変わる筈もない。

碑刀の速度も止まらない——寧ろ落下している分だけ加速する。加速すればするほど、より深くまで斬り裂かれるだろう。最悪、両断されるかもしれない。

何も変わらないのだ。

だから、結果も変わらなかった。

「っ——!!!」

言葉にならないほどの痛みが背中を襲った。見えないが、バッグは完全に斬り裂かれ、背中までぱっくり割かれてしまっているだろう。血だつて吹き出ているのかも。

けれど、不幸中の幸いといったところか、背中を裂かれたといっても、切り傷は腹側まで貫通していない。皮膚は間違いなく削がれて肉も断たれたが、骨と内臓にまではギリギリ響いていない。

バッグがダメージを軽減してくれた——お陰でなんとか、手を離さずに済んだ。落下するのは奴だけだ。

僕は下を見た。

「……………くっ!!」

碑刀は落下した。したのだが——やはりそう思い通りにはならない。

手足を突き刺し、再び岸壁に張り付いていた。しかしそれは一瞬であり、また跳躍した。

果たして飛び越えてくるのか？ 或いはまたさっきまでのように、下から直接攻撃するのか？ なんて、考える必要は無かったといえよう。

何せ落下したのは奴だけではないのだ——僕のバッグは奴によつてばつきり斬り裂かれてしまった。ならば、重力に従い、その中身が零れ落ちるのは当然であるといえよう。

「漸き——」

飛び上がった碑刀に、大小様々のものが降り注いでゆく。碑刀はこれらを斬り裂きながら跳躍を続けているが、思うように動けないように、明らかに僕のところまで届いていない。

しかし跳躍を諦めようとしていない——が、そこへ、僕が道中拾った（もしかすると盗んだ）着物が、碑刀の頭に覆い被さった。

「漸次・漸進——漸……斬……」

「え？」

碑刀がどこで僕を認識していたのかは分からない。が、一応頭部を使って認識していたのかもしれない——着物が頭に被さったのが奴の視界をふさいだのか、碑刀は両手両足をばたつかせながら、岩壁に突き刺すことも出来ず、落下していった。

つまり……えっ？

「なっ……なんだと」

襲われていた側の言う言葉ではない。

えっと……あれ？ こ、これは……つまり、ある意味では勝った、つてことなのか？

思った以上に呆気ない退場だ。有り難くはあるが……いいのかそれ？

いやまあ、そんなものか——下から再び駆け上ってくるような音は聞こえない。しかしこれで安心するのは余りに早計である。微刀『釵』は足をプロペラのように回転させることによって、跳躍どころか飛翔できた。あれにだって、もしかすると出来るかもしれない。

となれば、だ。

「よし……」

僕はラストスパートを賭け、残った体力全てをクライミングに注いだ——幸い、奴が先に登ってくれたお陰で、窪みが多くなっている。敵に塩を送りやがって！

当然、碑刀はてっぺんまで登りきった訳ではないので、そんな窪みも途中までだが……大分楽だったのは確かである。感謝する気はないが、まあ、グツジョブと思ったことは偽らざる事実であった——なんて、勝者の余裕を振りかざすには、それに見合う実感も何もなかったのだが。

「020」

「お疲れ様じゃったの、お前様」

「なあ忍、ちよつと言いたいことがあるんだが、良いかな？」

「なんじゃ？ 聞くだけ聞いてやろう」

「もつと早く出てこいよおお!!!」

僕はがつくりと両手両膝を地面についた。石ころが痛いし身体中が痛い。

ここは千針山頂上。登りきった僕を労うかのように、性格の悪い言い方をすればタイミングを見計らったかのように、先ほどまで傷心気味だった金髪幼女は姿を現した。

「いやいや……そうは言うがなお前様？ あの状況で儂に出来ることなど何かあったか？ うぬの話し相手になる程度しか出来んかったろうに」

『心渡』でも影の中から突き出してくれば、多少はマシになったかもしれないと思うのだが」

「影がほうぬの真下じゃった。そんなことをしたらうぬも貫いとるわ。腹からバッグまで一突きじゃわい」

「あいつ以上のダメージか……」

「ちゅーか！」

忍は不愉快そうな顔をした。

「あやつはなんじや？ 手は出さんかったが見てはおつた……碑刀、じゃったか？ あれも、あれか。シキザキシルシの刺客か」

「だろう、と思ってる」

だろうというか、思っているというか、ぶつちやけ確信しているのだけれど——つーか他に誰が居るんだよ？ いや、実際に差し向けるのは織崎と違うもう一人の方なんだろうけど、実質織崎からの嫌がらせでことで一まとめにしていだろう。

「ふん。悪趣味と言おうか何と言おうか……何じや、自分で切り捨てておいて、案外あやつら刀娘に未練があったのではないか？」

「未練？ あいつら、あんまそういうのは考えなさそうに見えるんだけど」

未練どころか執着があるかどうかさえ怪しい連中である。特に幽霊の方。

「いやいや、決めつけるのは良くないぞお前様？ もしかしたらあのシキザキシルシか、あるいは幽霊のどちらかが——或いは両方が、お前様並みのロリコンかも知れぬではないか」

「僕はロリコンじゃない。何度言えば分かるんだ」

「かかつ、うぬこそいい加減その返し、飽きてきたのではないか？ 認める、認める！ そうすればうぬはもう二度と、そんな返しをせずともよいのじゃぞ？」

「下手な悪魔の囁きだ……」

駄弁っているうちに、疲労は大分薄れてきた。僕は身体中に力を入れ、立ち上がると、再び歩き出した。今度は下山——気合を入れて用心しない、真つ逆さまだ。

「つーか、まずここで僕が根負けしなきゃならないって前提がおかしいんだよ」

「むっ」

「問題はそんな前提じゃなくて、根底にあるロリコンという言葉の厳密な意味なんだ。ロリという言葉が一体何歳から何歳までをカバーするのか、まずそこから議論を進めようじゃないか。僕がロリコンだ

云々は、その次の問題だ」

「おつ、言い訳じゃ言い訳じゃ」

「言い訳じゃあない。明晰判明ではないことは疑ってかかれて、カントも言っていただろう?」

「カントだかカントーだかなんぞは知らぬが、ふーむ。しかしお前様はそれで良いのか?」

「何が?」

「場合によつては、うぬ、もう逃れられんぞ? そこまで追求し、明晰にするということは、最早疑いの余地をなくすことであつて、これからの反論が厳しくなる訳じゃが」

「何言つてんだ忍。僕は勝ち目のない勝負には挑まない……そういう男さ。知つてるだろ?」

「儂の知る限りうぬはその真逆をいく男だと思ふんじゃが」  
「なるほど」理ある」

ある意味現在、そんな戦いに挑んでいるようなものだしな。  
大自然との戦いというか。

「仮に、万が一つ、億が一つに僕が不利になつたとしても、なかに実用主義に転向すればすばいい」

「せこいのう」

「考え方が変わるのとは人間として当然のことだ。人を構成する細胞はリアルタイムで変化しているのだから、同じ僕なんてあり得ない。そりゃあ考え方だつて変わるといふもんだぜ」

「言えば言うほどせこいのう」  
むう。

まったく、とりつく島もない——足の置き場になる岩はこんなにもあるというのに（上手いこと言った）。

「いいか、忍。ロリコンつてのは、ロリータコンプレックスの略で」

「え、本当にそれ、議論するのか? 知らんぞ? どうなつても儂知らんぞ?」

「心配なんて無用だぜ、忍——そのロリータつていうのは十二歳の少女な訳だが」

「はいアウトー。うぬ即アウトー。迷子娘に対するあれこれを考慮して即アウトー」

「甘いぞ忍！　いいか、八九寺は普通に成長していれば実質今頃二十一歳だし、交通事故に遭った時の年齢は、十一歳だ！　はいセーフ！　どう考えてもセーフ！」

「お前様よ、そんな反論をして、虚しいとは思わんか？」

「お前こそせいぞ忍。そういう精神に訴えかけてくるような真似はよしなさい。お前の想像以上にダメージ入ってるから」

「そもそもじゃ。その元となつたロリータとやらが十二歳だろうがなんだろうが、世間一般、社会的に見れば、十五歳未満の相手を好む趣向こそがロリコンなのじゃから、うぬがどれだけ反論しても、結局ロリコンに帰結するんじゃぞ？」

「お前が言えたことかよ、実年齢約六百歳」

「年齢に触れるな。うぬも儂を後期高齢者呼ばわりするのか？　なら死ね」

「とんだ言い掛かりだ！」

「そもそも外見からして儂は幼女なの！　傍から見ればアウトど真ん中直球じゃ」

「くっ……何故だ!?　どうしてお前——いやお前らは、僕をロリコンってことにしたがるんだ！　もういい加減結論を出せよ、何回したんだこの話題！」

「うぬが認めれば何から何まで全部上手くまとまるのにそうやって駄々こねるから議論が泥沼平行線化して終わらないんじゃ!!」

「嫌だ！」

見苦しい言い合いだった。もう大半の読者が呆れ果てて、ブラウザバックしているかもしれないな……。

閑話休題。

「おい待て、閑話扱いして終わらせるでないわ」

「なら秘技・章変えリセットを使う。僕は何としてでもこの話題を切り上げたい」

「自分で蒔いた火種じやろうに……」

「そもそも、今はこんなおふぎけ気味の会話をしている場合じゃないんだぜ？ 八九寺を救うため、一刻一秒を争う自体だつてのに……忍、お前にはその自覚が足りない」

「そう言われると言いつ返し辛い、しかしそれはお前様も同じではないじゃろうか」

「ふむ」

鋭利なブーメランである。

まあ何せ（ロリコン議論は終わったよ！）緊張感がイマイチ薄れているのは確かである——鬼会山での吸血鬼、千針山での偽日和号と連続で襲い来ただけあつて、少し精神的に疲れ気味なのかもしれない。一周回つて非シリアスに走り過ぎたのかも。

そもそも、本来なら今だつて十分シリアスな状況なのだ——山登り。

登りよりは全然楽とはいえ、まだ千針山を下りきっていないのだ。シリアスになり過ぎるのは良くないけれど、かと言つておふぎげが過ぎると手元が狂つて突き出た岩に串刺しエンドかもしれない。

嫌だぞ、こんな会話が最期の会話になるとか。

「儂じゃつて、こんな馬鹿みたいなやり取りの末でお前様を喪うとか、心底御免じゃ——ま、少し自重すべきだったかの」

霧も出てきたしもう——と、忍。

そう、霧。

濃霧というほどのものではなかったが——しかし、いつの間にか視界に邪魔なモヤが映り込むようになったというのは、正直無視できない。

これは急いだ方がいい——幸い千針山からは後数分で脱出出来そうだが、問題は次の山、カチカチ山である。

今までの山はまだ何となく名前で特徴が先読みできたが——今度こそ訳が分からない。

明らかに雰囲気が違う。名前からして異質感が伝わってくるではないか。

「だからこそ、天候だけでも万全の状態で臨みたいんだよな……。ま



さしく、何が起こるか分からないってやつだ——その上霧で視界を塞がれるとなると、たまったものじゃない」

「ま……吸血鬼の視力も、霧までカバー出来るものではないからの。そこそこ関係はある現象ではあるが」

吸血鬼の視力も、やはり霧の中ではあまり期待できないらしい。嫌なお墨付きを貰ってしまった。

だから、まだ視界を確保できているうちに、なんとなくでもカチカチ山の地形を把握しておきたい。もしこれがまた千針山のような地形だった場合、怪異とかとは全く関係のないところで命の危機に晒されることとなるだろう——その状況自体は今と大差ないが。

正体不明の第三の山・カチカチ山。

最後の登山が、これから始まる——いや、もしかすると。

それはもう——既に始まっているのかもしれない。

## 惨劇童話

### 惨劇童話 せいの山

むかしむかし——四百年ほど前。日本列島の北、東山道の陸奥と呼ばれる国に、精霊山と呼ばれる山がありました。精霊山とはその名の通り精霊の加護が宿った山と呼ばれていました。

春には満開の桜が山を埋め尽くし、桃色の絨毯の上を野兔が跳ね回り。

夏には百日紅の花が太陽に負けじと赤々と燃え、蟬もまた命を燃やして鳴き続け。

秋には紅葉した銀杏の葉が黄金色の輝きを放ち、頬を膨らませた栗鼠が彼方此方へと駆け回り。

冬には趣深く全ての葉が枯れ落ちて、動物たちは静かに眠りに着き。

春が近付き雪が溶けると、その下からは寒さを耐え抜いた生命たちが一斉に顔を覗かせる——本当に精霊が宿っていたのかは定かではありませんが、仮に偽りでもそう思わざるを得ないほどに活気付いた山でした。

ですがそんな資源に満ちた山なので、あちこちからその上質な資源を奪おうとする不届き者が後を絶ちませんでした。元々この山と共に共存してきた人たちは酷く頭を抱えました。彼らは何度も何度もそのような愚か者たちを撃退してきましたが、それでも懲りずに何度も何度も迫る敵にとうとう臆してしまったのです。

人々は困り果てました。このままでは精霊の住まう我らの山が危ない。何とかしなければ。

そして彼らは遂に、今まで潜めてきた爪を、牙を、侵略者に突き立て始めました。

敵は次々と殺められました。何人も。何人も。何人も。何人も。もう撃退なんて生易しい方法はとりません。彼らは山を奪う敵を一人たりとも逃すことなく討伐しました。それを何年も続けていくう

ちに、とうとうその聖なる山に足を踏み入れる者は誰一人として居なくなつたのでした。

退治された者たちの屍は、山の中に置き去りにされていました。その血は植物を育てる恵みの水となり、その肉は動物を育てる美味な餌となり——嘗て山を壊そうとした人たちですが、最期は山の為になつて、腐敗していったのです。

ばら撒かれた肥料のお陰で、山は今まで以上に生き生きとし始めました。今まで見られなかった動植物も増え、山と共に過ごしてきた彼らにとつて、それは我が子が成長するかの如き幸福でした。山は年々成長し、人々は嬉しさのあまり夜通し祭りを開いたとも言われています。

しかし、成長というものはいつか必ず終わりが来るものなのです。今まで活性の一途を辿っていた精霊山は、ある時を境にその成長がぴったりと止まりました。始めの方は人々は何も不思議に思いませんでしたが、しばらくその状況が続くと、漸く「おかしいぞ」と思い始めたのです。しかしそれでもまだそこまで重大な事であるとの認識ではありませんでした。

さらに月日が流れ、今まで成長が止まっていた山は、今度はなんと逆に衰退を始めたのです。動植物は山に現れた新しいものから順に死に絶えていったのです。また、生き物が消えていくに従つて、山や彼らの住む里に蜘蛛が発生するようになりました。ただの二匹や三匹程度なら珍しいことでもありませんが、十匹、二十四匹、五十匹——酷い時には、一日に百匹もの蜘蛛が現れるようになったのです。人々はここでやつと危機感を覚えます。が、それはあまりにも遅すぎる意識でした。

「この山は一体どうしてしまったのだらうっ。」

人々は悩み果てました。どうにかしようにも、原因が分からないのでは手の打ちようがありません。

そうこう悩んでいる間にも事態は酷くなるばかり。生き物はどんどん減少し、それに反比例して増えていく蜘蛛。最早山も里も蜘蛛の

巢だらけでした。

そんな中、今まで山を守るために外界との繋がりを一切遮断していた彼らは、遂にその重い腰を上げました。これは自分たちの手に負えない怪奇現象と考えた彼らは、噂に聞いた化け物退治の専門家を呼ぶことにしたのです。

そうして、一人の専門家がやって来ました。死屍累と名乗るその専門家は、山の惨状を観るとすぐにその怪異現象の正体を見抜きました。

原因は、嘗て彼らが殺めた者たちの怨念でした。屍たちの怨念は時を経て山に染み込み、山を枯らす呪いとなったのです。

問題は、もう専門家でさえも手がつけられないほどにまで自体が進行してしまっていたことでした。専門家は山を封鎖することを提案しましたが、人々はそれに反対しました。山と共に生きてきた彼らにとって、それは半身をもがれるようなものだったのです。

専門家は仕方なく封鎖することを取り止め、その代わりに呪いの進行を遅らせるための方法を教えました。

「山に生贄を捧げるとよい。人間の生贄を。怨念を止めるには最早それしか方法はない」

それを聞いた人々は半信半疑でしたが、藁にもすがる思いで一人の里娘を山へ生贄として差し出しました。今まで一体となって生きてきた彼らにとって生贄の儀式はとても辛いものでしたが、こうするしかなかったのです。

するとどうしたことでしょう。今まで大量発生していた蜘蛛の群れはみるみる少なくなり、枯れていた木々は少しずつですが息を吹き返していったのです。人々は大層喜びました。

専門家は言いました。

「このまじないは恐らく一年ほどしか保たぬだろう。年に一回、里の人間を生贄として捧げるのだ」

もうこの専門家の言葉を疑う者は誰一人としていませんでした。

こうして里には人身御供の文化が生まれ、毎年里で生まれた若い娘を精霊山へ生贄として捧げるようになったのです。そしてそれは

しっかりと効果をあげ、山はじつくりと、けれど確実に元の姿を取り戻していったのです。

それから約十数年後——その年も彼らは、里に住む一人の少女を生贄として山に捧げました。

少女の名前は五十嵐阿良糸。濡れた鴉のように艶やかな黒髪をもった少女で、もうすぐ七歳の誕生日を迎えようとしていました。少女の母親は自分の娘が山の為になることを誇りと思いつながら、阿良糸を精霊山の奥深くに置き去りにしました。

——この頃になると、山に対する敬意をあまり持ち合わせていない子供達は何人か生まれ始めていました。彼らは昔の、精霊が住むとまで言われた山の姿を知らない世代だからです。

この阿良糸もそんな子供達のうちの一人でした。そしてそこそが今までの生贄とは違うところでした。

阿良糸は山から逃げ出そうと、行くあてもなく走りまわりました。しかし、幾分かまともになったとは言えどもやはり根底には怨念が蠢くこの山に人が立ち入る頻度は少なくなりました。彼女のように幼い娘が入り込む事は、昔ならいざ知らず、この頃はありえなかつたのです。ゆえに阿良糸はこの山の事を何も知りません。抜け出す事は出来ません。

「助けて！ 助けて！ 助けて！——」

それでも阿良糸は彷徨い続けました。でも、少女の体力では一日が限界でした。

飲まず食わずで疲れ果て、少女は膝をつきました。すると突然目の前に大きな蜘蛛が現れたのです。少女は虚ろな目で蜘蛛を見ました。

「——嫌だ」

少女の目からは涙が溢れました。

「嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。嫌だ。」

まるで水彩画のようになった世界で蠢く蜘蛛は、そんな少女に近付きます。



阿良糸は再び怨みました。山を。里を。そして自分を貶めた世界そのものにさえ、怨みを向けました。するとその怨みに呼応したかのように、地面からじわじわと、さっきの蜘蛛のような闇が滲み出てきました。阿良糸はそれを一瞥して——こう言いました。

「否定しよう」

たった一言。その一言で十分でした。

今まで押さえつけられていた死者たちの怨念はまるで火山が噴火するかのように際限なく湧き上がり、瞬く間に山を真っ黒に塗り潰してしまいました。闇の這った場所にあつた生命は全て汚染され、動物は死に絶え、植物は枯れ果てました。

「みんなの怨みはこんなものじゃないんだね。じゃあ、もっと、もっと暴れていい。好きにして。私は止めないから——蜘蛛は止めないから」

否定して。

否と定めて否定して。

すると闇は蜘蛛へと形を変え山を下つていきました。この小さな大群が向かった先は、蜘蛛の主が最も恨んだ場所。最も憎んだ場所でした。

阿良糸は笑いました。虚ろに笑いました。どうしようもなく溢れる黒い涙を無視して声が枯れるまで笑い続けました。狂った笑い声は山を越え里にまで届き、人々は狂気の嗤いの中で喰われていったのでした——。

このお話に続きとされるものはありません。この後少女はどうなったのか、精霊山はどうなったのか、このお話から知ることは出来ません。けれど少なくとも、これ以降この山は精霊が住んでいるなどという噂が途絶えたであろうことは間違いないでしょう。

だって今現実の陸奥にあるのは、精霊が住むとまで言われた豊かな生命溢れる山ではなく、死霊が集うとされる灰色の死に絶えた山なのですから。

歴物語（短々編集）

第神話 まよいカースト

〔001〕

八九寺真宵の為に奔走するというのは、実は僕にとつて結構よくあることなのである。あの慇懃無礼な大親友は、結構な割合で厄介ごとを持つてくる。いや、持つてくるというとあいつが悪いように聞こえるけれども、実際のところ殆ど僕が自分から首を突っ込んでいる訳で。

僕は、別にそれを苦には思っていない。寧ろ光栄とさえ思っている。何せ彼女は神様なのだから。

蝸牛の神。

敬うべき存在——地縛霊、浮遊霊ときて神霊とは、凄まじいまでの階級特進だ。

と、ここまでだとまるで僕が八九寺に阿っているように聞こえるかもしれないけれど、全然そんなことはない。何せ僕と八九寺は一切の遠慮がない仲なのだから——そういう意味では、一番の大親友と言えるほどの仲なのだから。

光栄と思っているのは、だからそこなのだ。あの人見知りであるところの八九寺が、僕を友達としてくれていることが、何よりも光栄だ。神様だから、とか、そういうのは後付けでしかないのだ。

だから今回の件に僕が絡んだ——八九寺に言わせれば「一枚噛んだ」のは、こういう理由だ。理由が無いのが理由。

何せ僕の大親友が虐められているなんて、そんなこと、あいつの大親友として、看過できる訳がないのだから。

〔002〕

日和ちゃんとの決闘を無事乗り越えた、その直後の話である。僕たちは扇ちゃんから拝借した車に八九寺、日和ちゃんを乗せ、北白蛇神社へと帰った。



帰ったとは言いが、あくまでもそれが帰路だったのは八九寺と日和ちゃんであり、僕にとっては帰路ではなく、次なる目的地へと向かう路程であった。

「しかしこの車というものは凄いですね！ 馬も牛も使わないのに動くなんて……からくりの進歩を感じます！ いたく感動しました！」  
「君が言うか日和ちゃん」

さて、決闘へ向かう道中では全くと言っていいほど会話がなかったのだが、それが嘘であるかのように車内は賑やかだった。

日和ちゃんは車を知らないらしく——生まれた時代を考えれば当然ではあるが——その騒ぎようと言ったら並大抵のものではなかった。車体の観察だけに10分程度を費やしたという衝撃の事実から察してほしい。

別に、僕はその件について悪い気はしていない。賑やかなのはいいことだし、何より日和ちゃんが笑顔になってくれるのは、僕の本望だ——本望なのだけれど。

しかし、いまいち如何ともし難いのが、日和ちゃんが夢中になっている車は、これは僕の愛すべき愛車であるニュービートルではなく、扇ちゃんの車である、漆黒のフォルクスワーゲン・ザ・ビートルであるということだ。

扇ちゃんめ。

余りにも酷い八つ当たりなのは百も承知だが、この車が、僕のでなくても、よりにもよって扇ちゃんの車であるということに嫉妬心を覚えなくもない。もしもここまでが扇ちゃんの計画だとするならば、僕は完全敗北したと言えよう。舌戦だって、実際は勝利したとは言いがたいのに、更に勝利を重ねてくるとは、流石扇ちゃん、死体蹴りに余念がない。

そんな訳で（どんな訳だ）、心ゆくまで外観を観察した後、漸く日和ちゃんが車内に乗ってくれた。僕は日和ちゃんを後部座席に乗せ（例に漏れず助手席に乗りたがったが、だから僕の運転技術では助手席に誰かを乗せるなんて荷が重すぎるのだ）、ついでに八九寺も乗せてやり、北白蛇神社へと車を走らせたのである。回想終わり。

「ちよつと待つて下さいはにやらぎさん。どうして私がついで扱いなんですか。神様であるところの私をついで扱いするとは、随分と軽んじて下さいますね」

「別にお前を軽んじてはいないけれど、しかし八九寺。僕のことを、言葉を学習していく王子の埴輪の口癖みたいと呼ぶな。僕の名前は阿良々木だ」

「失礼、噛みました」

「違う、わざとだ……」

「かみまみた」

「わざとじゃない!!」

「埴輪居た」

「居てたまるか!」

とは言うものの、一度兜を轢いてしまった身である、バックミラーやサイドミラー、フロントガラスなどから念の為確認したが、埴輪はどこにもなかった。

「だつて八九寺、お前、神通力とか何かそういうかんじの神様パワーで帰れるだろ?」

「何ですかその設定! そんな設定私にはありませんよ! 私はただ蝸牛と蛞蝓を統べる神様というだけです!」

「いいや、あるね。お前なら出来る。出来るさ」

「そんな根拠がどこにありますか!」

「根拠? おいおい、神様がそんな理屈を求めるなよ。俗っぽいぜ」

「何故か怒られました!」

「八九寺お姉ちゃんそんなことも出来るんですか!? 是非見せてください! 出来るだけすぐに!」

「日和さん!?! この男の言うことに騙されてはいけませんよ! こいつはとんでもない詐欺師ですからね!!」

「おおつと!?! 聞き捨てならないな! 僕を詐欺師扱いするな! 変態扱いならまだしも、詐欺師扱いだけは絶対に止める!!」

「そうですか! では今日から貴方はロリコン野郎の変態です!」

「あ、やっぱ変態扱いも止めて!」

「では最低のチキン野郎です！」

「チキン野郎も止めろ！ 僕をチキンと言うな、鶏なんかと一緒にするなあ!!」

鶏と聞くと、つい先ほどまである意味苦しめられたあの怪異が脳裏を過るのだ。そう言えばあれ、結局何て名前だったのだろうか。

「鶏と言えば、あたい、ケンタツキーなる場所を聞いたことがあります！ 行ってみたいですねー」

「どこで聞いたんだ……いやまあ、僕としては日和ちゃんの期待に応えたいのはやまやまなのだけれど、懐がだな……」

「懐刀？」

「響きは似てるけど違う」

「なるほど、お金の問題ですか……では仕方ありませんね。でもいつかは連れて行ってくださると嬉しいです」

「お、おう」

返事はしたのだけれど、この辺りにケンタツキーの店舗は残念ながら存在しない。この田舎町にあるファーストフード店は、精々ミスタードーナツとモスバーガーくらいである。

ど田舎なのだ。

「そう言えば、その”ど”って何なんでしょうかね？ 超弩級の”弩”なのでしょうか？」

「おいおい、日本語のプロが知らないことを僕が知ってる訳ないだろ。しっかりしてくれ八九寺」

「……貴方、高校卒業生ですよね？」

「受験勉強の中に”ど”の由来なんて含まれてねえよ」

「日和さんは知ってますか？」

「申し訳ありません。あたい、世の中をあまり知らなくて……」

「あ、いえ、恐らく大半の方が存じ上げていないことと思いますので、別に気にしなくても」

「このあたいたしたことが、お兄ちゃんやお姉ちゃんの役に立てないなんて。いたく心苦しいです」

因みに、後で羽川に聞いたところによれば、どうやらど田舎の”ど

”は超弩級とかの”弩”とは違うようで、軽蔑や罵るといった意味を付加する働きを持つ接頭語らしい。へえ。

とまあこんな感じで、そういうしながら走行しているうちに、無事に僕たちは目的地に到着した。

北白蛇神社である。

八九寺の家であり、そして今日からは日和ちゃんの家でもある場所——僕は車を元あった場所にも停車させ、車から降りた。

「……………」

僕たちは階段を上る。

階段には、大量の落ち葉が敷かれていた——否、ばら撒かれていた、と言った方が正しいのだろうか？ 八九寺が言っていたことが本当なら、この季節外れの落ち葉は、八九寺を虐めているという許し難い神様の仕業らしいが。

仕業というか、御業というか——しかし御業と表現するには、どうもスケールが小さい。いや、こんな大量の落ち葉を、階段が見えない程になるまでばら撒くというのは、とても人間業とは思えないものではあるが、かと言ってこれが神の仕業とするならば、なんというか、小さい。

なんだか、小学生レベルの悪戯のように思えてくる。いや、確かに規模は小学生レベルどころか、だから人間レベルを遥かに超えたものなのだけれど、発想が小学生レベル過ぎる。

言っちゃあ悪いが、そんな低レベルの神が八九寺を虐めているのだと思うと、腸が煮えくり返る思いになる。煮えたぎった腸でビンタしたくなる。

「腸ですか。日和さん、阿良々木さんの腹を搔っ捌いてやってください」

「了解しました」

「待て待て待て待て!! そんなことしたら先に僕が死んじゃうよ!」  
酷いことを平然と言いやがる。怒りが八九寺の方に向きそうだけ。

しかも日和ちゃん、本当に刀の切っ先を僕に向けている——完成形変体刀が二本、斬刀『鈍』と、絶刀『鉋』。なんでも斬れる刀と、なん

でも斬れない刀である。

「つーか日和ちゃん、そんな命令聞くなよ！」

「ほう。それはどうして」

「ど、どうしてって……」

「答えられないのですか？」

「いや、普通に考えて……え、何？ 日和ちゃんどうしたの？」

「あたいの力が及ぶ限り、八九寺お姉ちゃんのお達しは聞き入れていくつもりなので」

「僕の命令は!？」

「聞きません」

「なっ!？」

「はっはっはっは!! 分かりましたね阿良々木さん!! これからはパワーバランスが逆転しますよ! この私にセクシャルハラスメントを働こうものなら、この頼れる日和ちゃんが、貴方をぶった切りまします!!」

「逆転どころか、今以上にパワーバランスが崩壊するよ!」

つーか今の段階で、そこまで僕が優位に立っているという訳でもなかった。神様と吸血鬼もどきの人間とか、もう肩書きの時点で僕は八九寺に劣っていたようなものなのだ。

そんな感じで。

冗談混じりの雑談を交わしながら（冗談だよな?）、僕たちは北白蛇神社の階段を上り切ったのだった。

「003」

上り切った筈だった。

少なくとも、社へと続く階段は、間違いなく——上り切った筈だ。僕は何度もこの神社を訪れているから、ある程度どれだけ上れば辿り着けるかは覚えているし、八九寺に至ってはここに住んでいる。だから、間違える筈がないのだ。

なのに、今、僕たちの目の前には、本殿の真前には、真っ白に輝く透明の階段が、遙か遠く、天の彼方に向かって伸びていたのだ。

「おや、いつの間に工事が行われたのでしょうか？　鬼の居ぬ間に、ではなく、神の居ぬ間に工事とは、不届き者もいたものですよ！」

「いや、どう考えても工事じゃねえだろ、これは」

工事なんかでなんとかなるような問題ではない。そもそも北白蛇神社の本殿はこの山の頂上にあり、これ以上階段を増やすなんてことは、山そのものを大きくしない限りは不可能なのだ。

僕はその階段に近付いた——透明とは言えど、それは全く形が見えない訳ではなく、言わばガラスのような階段である。透き通る階段を通して、向こう側の本殿が見えた。

「……十字架？」

階段を見て、僕は呟いた。

よく見ると、階段には十字架の模様が描かれていた。余すところなく、階段を埋め尽くすようにして。

「なんで十字架が？」

「神様っぽいと思ったんじゃないですか。ほら、神様と聞かれて最初に連想するのはキリストさんですよ」

「曲がりなりにも日本の神様なんだから、せめて天照大神とか、日本の神様を連想しろよ」

「はい？　ああ、目玉のお袋さんですか」

「何だその呼び方」

「だってあの方、伊邪那岐さんが左目を洗った時に誕生したそうじゃないですか。あの親父さんと似てるじゃないですか！」

「全然違うだろ！　左目しか共通点ねえよ！」

「とても私には、あんな引きこもりを最初に連想するなんてことは出来ませんね。あんな豆腐メンタル、八百万の神様の風上にも置けません！」

「お前が虐められてる理由、なんとなく分かったよ！」

下位カーストじゃなくなつて、そりゃあ反感を買うわ。つーか、悪戯程度で済んでいるのが不思議である。

「それにしても、きらきらとして美しいきざしですね。今のわざはこんなに進んでいるのですか」

「きざはしっ？」

「あ。えっと、あれのことです」

「ああ、階——いや、今の技術はこんなにも進んで……るかもしれないけれど、少なくとも、この町にそんな職人さんは居ねえよ」

居たとしても、こんな場所にある神社にまでわざわざやって来ないだろう。竹林に囲まれた本殿に、洋風というか、如何にも”聖”を前面に押し出したような階段なんて、似合わない。ある意味、嫌がらせのようなものである。

だから、一番可能性が高いのは、元々あつた階段に落ち葉をばら撒くと言う陰湿なことを仕出かした、八九寺を虐めているという神がこの階段を作ったという可能性である。落ち葉と同じく、景観を悪くするためにこの階段を設置したと考えれば、ありえない話ではない。

「ただ、じゃあなんで十字架なんだ、って話だが」

「もしかして、海外の神様なのでしょうか？ 態々こんな極東の島国にまで出勤してくるとは、ご苦労なものですね」

「海外の神様……」

成る程、有り得る。と言うか、それしか考えられない。日本由来の神様が、海外由来のシンボルを使用するとは考え難いからな。

「……そうだとすると、どうしてその外から来た神様は、このようなきざはしを作ったのでしょうか？ あたい、気になります」

日和ちゃんが言った。

そう。犯人が海外の存在であるということが分かった以上、これ以上考えてもその犯人に一撃をお見舞いすることは出来ないということであり、では次に考えるべきは、どうして犯人は、この階段を設置したのかということだ。

「見栄えを悪くするにしても、どうしてきざはしを選んだのでしょうか？ やつぱり、何かわけがあるのででしょうか」

「まあ、あるでしょうね」

景観を悪くするためだけが目的ならば、態々階段を置く必要はない。それこそ、落ち葉を更にばら撒けばいいだけの話だし、それでも足りないというのであれば、そこら中に十字架をばら撒けばいい。な

のにそれをせず、こんな大掛かりな階段を設置する。

「私を本殿に入れないようにするため、ですかね？」

「いやあ、そうだとするなら、本殿の入り口あたりに、何らかのプレートとか、そういうのを置いておけばいいだけの話だろ？」

「標識。はあ、まあ確かに。アニメ化物語でゲスト出演されていた、あの工事中の看板のようなものを」

「何故それを連想した……」

「あれもめつきり使われなくなっちゃいましたね。まあそんなものを置かれたところで、私は怯みませんが」

「うん。だから、一例だよ。こんな大掛かりなもんを設置しなくてもいいって話」

「あ、でもアニメ化物語第2話に登場するあの阿良々木さんに似た看板！ あれを置かれると少々怯んでしまいますね……」

「なんで僕の看板だったら怯むんだよ！ つーか、宣伝っぽいことしてんじやねえ！」

確か僕の記憶が正しければ、本編の方ではこういった宣伝染みた行為は控えるという話だった筈である。早速破るのか。

「いえいえ阿良々木さん。これは短々編であり、歴物語ですよ。本編でもなければウラガタリでもない、第三のコンテンツです！」

「第三のコンテンツ？」

なんだろう、第三のコンテンツというと、どうにもこう、完全版商法のようなものを感じてしまうのだけれど。

「完全版商法というか、番外編商法と言いますか。この短々編集のポジションを例を挙げて説明しますと、〈物語〉シリーズ初のドラマCDであるところの【佰物語】、或いは、現在絶賛上映中の【傷物語I】で配布されている【混物語】のようなポジションであると言えば、分かりやすいでしょうか」

「また微妙な……」

「これらのように、本編とは言い辛い、けれども副音声とかとはまた違う、そんな第三のコンテンツがこれらであり、それと同じく、本編とは言い辛い、けれどもウラガタリとはまた違う、そんな短々編が、こ



の歴物語です」

「だから本編でのルールは通用しない、と」

「はい。こちらでは宣伝ネタは解禁されておりますが、作者ネタは依然として禁止ですので。作者ネタが見たい方はウラガタリを見てください」

「居ないと思うけどな」

ふーん。

まあ、どちらにせよ、メタ発言はどれにでもあるので、人を選ぶのは変わらないけれども。

閑話休題。

「まあそんなメタ的な話は置いておいて、現実を見ようぜ」

「阿良々木さんが日和さん押し倒しているという、どう見ても18禁な現実を見ろというのですか？」

「やめろ、出鱈目を言うな」

「や、やめて下さい阿良々木お兄ちゃん！ あたい、まだ花を散らしたくありません！」

「やめろ！ 出鱈目を言うな！」

釈明しておくが、僕は決してそのような行為に及んでいない。そもそも日和ちゃんを押し倒してなんていない。全てが八九寺と日和ちゃんの出鱈目である。日和ちゃんもノるなつつつてんだよ。

「ふふふ、文字だけというのは実に恐ろしいものです。阿良々木さんがどのような釈明をしたところで、実際はどちらなのかは誰にも分かりませんよ！」

「く、くそう！ 猪口才な！」

つーか、メタ発言は置いてって言ったのに、全然置いてねえじゃねえか！ メタもメタ過ぎるわ！

「はっはっは！ さあ阿良々木さん！ このまま性犯罪者としてその名を轟かせるが良いですよ！！ はっはっは！！」

「てめえ、僕に何か恨みでもあるのか!？」

「恨みというなら恨み骨髓ですよ！ 骨髓どころか延髄にまで染み込むほごです！」

「僕が何をした!？」

「セクハラ」

「真顔で言うなよ! あれはスキンシップだ!」

「違います、あれはセクハラです。誰が何と言おうと性的嫌がらせですよあれは。訴えたら多分私、勝訴出来るほどに」

「そ、そんな……」

僕はがっくりと膝をついた——嘘だろ? お前、そんな風に思ってたの……?

日和ちゃんの目線が痛い……って待て待て、なんで? 何で僕、敗北した加害者みたいになつてんの? 僕どう考えたって被害者なんだが。つーか、虐めだろこれただの!

「虐めではありません。惨めです!」

「お前虐められてるストレスを僕に向けて発散してるんじゃないやあねえだろうな!」

「あ、そうでした! 私虐められてましたっけ」

「もうこの件放置していいな!? もう僕帰っていいか!」

「いや帰っていいかも何も、付いてきたのは阿良々木さんの勝手じゃないですか!」

まあね。

ほっとけないからね。

「あーもう、どうすればいいですかこれ! とうか、何で階段なんですか! どこに続く階段なんですかこれー!」

「癩癩を起こした子供かお前は!」

じたばたする八九寺。じたばたしたいのはこつちだよ畜生。

……ん?

どこに続く階段——ああ、そうだ。

「……ちよつと、この階段上つてみようか」

僕は透明な階段を見て言った。

階段というのであれば、必ずその先がある筈である。

どこへ続くのか——盲点だった。

「え? でも阿良々木さん、階段を上れるのですか?」

「お前僕を舐めすぎだろ」

下に見過ぎである。僕を赤子が何かと勘違いしているのではないだろうか。

僕は溜息を吐き、階段に足を掛けた。

が。

「痛っ!？」

「阿良々木お兄ちゃん!？」

すぐに僕は足を降ろした——な、何だ？ 階段に足が触れた瞬間、足裏に電気が流れたかのような感覚を覚えた。

どうということだ？ と、僕は階段に目を降ろしたが、そうだ、十字架だ。階段には、十字架の模様が描かれている。

十字架。それは、吸血鬼の苦手なものの代表格。しまった、完全に失念していた。

「ほら、だから言ったじゃないですか。上れるのか、って」

「あ、ああ。確かに……」

これは僕に落ち度がある。十字架を最初に確認しておきながら、なんとという失態であろうか。僕の体は日和ちゃんと戦った際、吸血鬼度が増している。なので、まだ吸血鬼度はある程度上昇したままなのだ。だから十字架が効いた。

「くっ……マジかよ、じゃあ僕は、この状況に対して何も出来ないってことか」

足手まといもいいところである。何せ、手も足も出ないのだから。真に舐めていたのは、僕だったようだ。

「では、足手まといの阿良々木さんの代わりに、不肖私が階段を上りましょう」

「いや、駄目だ!」

僕は八九寺を制止した。

過保護と思われるかもしれないけれど、しかし相手は得体の知れない神である。このこれ見よがしな吸血鬼対策の他にも、何らかの対策が施されていないとは限らないのだ。心配性と言われればそれまでだが……。

「阿良々木さん、自分がダメージを受けたから、ビビってるんですか？」

「……あんまり否定出来ない」

まだ僕の足裏には、先程の痺れたような感覚が残っている。ビリつたし、ビビった。

だからさつきより、警戒度が増したのは確かなのだ——少なくともこの階段は、僕に対して敵意を向けている。そして僕への対策が施されているということはつまり、八九寺への対策もまた、然り。

「……では、どうすれば」

「うん、どうしよう……」

何というか、これで僕たちはこの階段に手出し出来なくなった感がある。

相手が僕のことを知っているということは、どこからか知らないが、少なくとも八九寺に関する情報は全て手に入れている可能性がある。場合によっては、日和ちゃんの情報さえも、手に入れているかもしれない。

お手上げ、である。

「差し出がましいですけど」

「ん？」

そう思った直後、日和ちゃんが実際に手を挙げた。

「どうした？ 日和ちゃん。階段を消す方法か何か思いついたか」

「きざはしを消す方ではありませんが……あの、これを置いたわけの方で」

「わけ？」

「はい」

日和ちゃんは言った。

「これ、あたいたちが上るのではなくて……その神様が、ここに来るための、降りるためのきざはし、なのではないでしょうか」

〔004〕

上りではなく、下り。





るのだが――。

「忍、『心渡』を貸してくれ」

「否、『心渡』では斬れん」

「え？」

『心渡』では、斬れないだつて？

「同じことはつまり、こいつは――あの変体刀と、同じような存在  
ということか？」

「違う。階段の方じゃ。あの影はただのまやかし――本体はあの階段  
じゃ」

「か、階段が？」

「あの階段は実体化しておる。どういう原理かは分からんが――兎に  
角、あの影が降りてくる前に、階段をどうにかせよ」

「いや、どうにかせよって言われても！」

「どうにもならないから、こんな状況に置かれている訳で――。」

「幸い、ここにはあの階段を斬ることが出来る『刀』があるではないか」  
『刀』――」

「階段を斬ってしまえば、通路を断ってしまえば、”あれ”は降り立つ  
ことは出来んじやろう」

――それつきり、忍は黙り込んでしまった。

僕は人影を睨んだまま、日和ちゃんに言った。

「日和ちゃん」

「はい」

「頼みたいことがある」

「何なりと」

「……あの階段、斬ってくれないか」

「……斬れる、のでしょうか？」

「多分――その”斬刀『鈍』”を使えば、斬れる筈だ」

「斬刀――」

忍のアドバイス通りに考えるなら、今この状況であの階段を斬るこ  
とができるのは、日和ちゃんの持つ”斬刀『鈍』”しかない。

斬刀『鈍』――ありとあらゆるものを切断する刀。





は階段と一緒に、それらも目の前から消滅した。

「……………」

僕と八九寺の目の前に残されたのは、残心している日和ちゃんと、はつきりと見えるようになった本殿だけであった。

「……や、やっただんですかね?」

八九寺が言う。

「……や、やっただんじゃね?」

僕が言う。

「……はい、やりました」

日和ちゃんが言う。

暫く僕たちは無言だった。プレッシャーから解き放たれた開放感に浸っていたのかもしれない。それ程までに、圧倒的な威圧感、プレッシャーを、あの影は誇っていた。

神——か。

なんとというか、八九寺といつも一緒に居るから、神様が身近に居るから分かっていなかったのかもしれないけれど、本来神と呼ばれる存在は、僕たちみたいな奴にとつて圧倒的で絶対的な存在なんだということ、改めて思い知らされた。

小学生みたい——なんて、とても言えたものではない。

どうしようもなく上位の存在——パワーピラミッドの頂点、最上位カースト。

「……………」

……黙りながら、僕はあの影が発した言葉について、思わず考えた。 ”あれ” の発した奇音は殆どが聞き取れないものだったけれど、その言葉だけは、唯一聞き取ることが出来た——が、それは僕自身の耳を、疑わざるをえないような言葉だった。

それは、単語であり、そして、最近では殆ど耳にしなくなった単語でもあった。

——”ハートアンダーブレード”。

[005]

後日談というか、今回のオチ。

結局、あの奇妙な人影の正体は分からず終いだった。本当にあれが虐めていた張本人だったのか、それとも別の何かだったのかは、あの階段が無くなった以上、知る由もない。

あの後、正気に戻った僕たちは、勝利を喜び合った。そして興奮冷めやらぬ中、境内の掃除を施行した。大量にばら撒かれた落ち葉を掃除した。境内がある程度綺麗になった後、僕は二人に別れを告げ、帰宅した。

次の日。

僕が帰った後どうなったのか気になったので、北白蛇神社に足を運んでみたところ、あの大量にあった落ち葉が綺麗さっぱりなくなっていた。

八九寺曰く、

「朝目が覚めたらこうなっていました」

とのこと。

日和ちゃん曰く、

「朝まで掃いたらこうなっていました」

とのこと。

どうやら僕が帰った後、特に何もなかったらしい。あの階段が再び現れることも、落ち葉が更にばら撒かれることもなかったようだ。

——あの影は、結局何だったのだろうか。僕の聞き間違えかもしれないが、”ハートアンダーブレード”なんて単語が出てくるなんて、全く思いも寄らなかった。

忍の旧名——忍に何らかの関わりがあるということか。もしそうだとすれば、再び僕があの影に相對する日が来るのかもしれない。忍の関係者、関係神ならば、僕にとっても関係があるのだから。

どうやら織崎ちゃんに關するあれこれが終わった後も、或いは、終わるまでも、まだ僕が立ち向かわなくてはならないような、首を突っ込まなければならぬような案件が控えているのだと思うと、少々うんざりするような気分になってしまうのであった。

何せ、自分のことを好き好んでやりたがる奴なんて、そうそう居な

い  
の  
だ  
か  
ら  
。

## 第過話 ひよりウエア

〔001〕

神崎日和について語ることは、今となつてはただの想起でしかなく、ほんの短い間における思い出でしかないのだけれど、しかし物語というものは、実のところ全てが思い出話にすぎないのである。

思い出話——思い出す話。想起する話。

僕たちは未来について語る事は出来ない。夢とか希望とか、そういう未来についてではなく、もつと確実な未来の話を、僕たちは語れない。

未来は未だ来ないから未来なのであつて、ならば必然、来ていないものを語ることは不可能となる。何が起こるのか分からないのに、それがさも当然のように語ることが出来るのは、本物の予言者か、或いはタイムスリップして未来を見てきた人物にしか出来ない。

人はしばしば過去を振り返らなければ生きていけない生き物だと僕は断ずる。そうでなければ、過去そのものを具現化した象徴たる伝記なんてものがこの世に存在する訳が無いし、自分の経験が少なからず内包される、即ち過去が混ぜられた物語というものが生じる筈もない。いや、より極端なことを言つてしまえば、本というものの存在そのものが、もう既に僕の理論を証明しているではないか。

日記や雑記——これらは全て過去そのものであり、過去を振り返るためだけに生まれたものだ。過ぎ去つたことはもう二度と体験することは出来ないというのに、どうして人は振り返りたがるのだろうか？ 思うに、それは精神を安定させるためなのだ。現実から目を反らすという行為に、それは他ならない。

二度と戻らないものというのは、決してもう一度追体験できるようなものではないけれど、それは裏を返せば今自分がどのような行動をとろうとも決して変化することのない不変の事実である。故に、人は時々立ち止まって過去を振り返るのだ。ほんの少しのことで変化してしまう未来を恐れ、その責任から逃れるために。

——なんて、そんな前説もそこそこに、今回はほんの少し過去の物語を語らせていただくこう。これを語るることによって誰が得する訳でもないし、ましてや今後の展開に重要なフアクターという訳でもない、ただ僕の自己満足以外の何物でもないのだけれど。

どうか、お付き合い合いたい。

「002」

「さあ阿良々木お兄ちゃん、今日も社会見学に参りましょう！」

鳥居をくぐるや否や、鶯色の着物をはためかせて日和ちゃんが駆けしてきた。紫陽花色の目がキラキラと輝いている——それを見た僕は思わず目を背けてしまった。何せこちとら穢れきった吸血鬼、片や純粹(どこかの誰かさんたちの所為で汚染が進んでいるような気がしないでもないが)な児女。とても直視できるものではない。え？ 八九寺？ あいつはもう手遅れだから……。

が、目線を横に向けると同時に日和ちゃんも目線と同じ方向に動いてきた。視界の中にアメジストが。眩しい！ また視線を別方向に向けたがまたもや日和ちゃんが視界の中に！

今日は3月31日。日和ちゃんと出会い、一週間以上が経つ。しかもその期間毎日会っているのだから、いい加減この純粹極まる視線に耐えるだけの精神力を手に入れても良さそうなものなのだが。

「何ゆえ避けるのです？ こちらを見てください阿良々木お兄ちゃん！」

「いや、まあ、そうしたいのは僕としてもやまやまなだけけれど、ちよつと目玉が焼けそうでな……」

「焼けそう。ほう。それは何ゆえ？」

背伸びして僕の顔を覗き込んでくる日和ちゃん。開放してくれないのか。

「えつとだな……ほら、僕ってちよつとだけ吸血鬼じゃん？ だから君の目に反射する日光が必要以上に眩しく感じてしまうんだ」

あまりにも苦しい言い訳だった。

けれども日和ちゃんは、

「はあ。左様ですか。それは申し訳ございません、配慮が足りませんでしたね」

と純粹にも信じてくれた。

胸を撫で降ろしたものの、新たに罪悪感がずーんと胸に重くのしかかってきた。ああ、僕って屑だなあ、って思った。

「おや、どうしましたか阿良々木お兄ちゃん。急に項垂れたりなんかして——ははあ。さてはあたいの眼が眩しすぎて脳なづきに負担がかかってしまったのですね。ええ、分かりましたとも阿良々木お兄ちゃん！

さらば、あたいの双眼!!」

「待て待て待て待てえええー!!」

僕は日和ちゃんの両手を慌てて掴んだ。年端もいかない児女らしい少しぷつくりとした指先に付いた小さな爪は、まるで剃刀の刃のように、或いはカッターナイフのように、薄く鋭い刃物と化していた。

日和ちゃんはきよとんとしたような顔で僕の顔を見た。

「日和ちゃん!? 何しようとした!? 今きみ何しようとした!?」

「阿良々木お兄ちゃんがあたいの眼が苦手だと仰るので、裂き出そうかと」

「裂き出すなんて物騒すぎる言葉聞いたことねえよ！ 無茶が過ぎるぞおい！」

「ですが、この眼があるとあたいは阿良々木お兄ちゃんを傷付けてしまいます。それはとても良くありません。だから」

「いやだからじゃねーよ！ きみ自体はそういうことやって大丈夫なのかよ!? あれか、眼がなくても別の感覚器官とかで見れたりするのか!?」

「いえ。視覚を司る部位は眼だけです。この両目を無くせばあたいは何も見えませんよ」

「その癖目玉を切るなんてことをしようとしたのかきみは!! 後先考えようぜ少しは！」

「大丈夫です。あたいは阿良々木お兄ちゃんが、あたいに付き添い、あたいの眼となつてくれると信じていますから」

「仮に不慮の事故できみが両目を失った場合はそれくらいお安い御用だけれど、それが自発的だった場合の話は別だぞ！ 何も手伝ってやんねえからな!!」

「はあ、そうなんですか？ なんと！」

「驚くな……流石にそれはお人好しを通り越して、人格を疑われるレベルだぜ」

僕は日和ちゃんの両手を離れた。指先の刃物が爪に変わっていることを確認したからだ。

「でしたらこの双眼を穿つことは出来ませんね。申し訳ありませんが、どうか耐え忍んで頂きたいです」

「ああ、当然だ」

……なんか、もう見つめられても大丈夫な気がしてきたけどな。日和ちゃんの内面に潜む闇を垣間見てしまったから。

いや駄目、やっぱ無理だ。これが100%混じり気のない善意だと考えると、やはり純粹すぎる。純粹すぎて涙が出てきそうだ。

——さて、今更ながら、僕が何をしにこの北白蛇神社にやって来たか説明しよう。いや、説明するまでもなく、僕はしよつちゆうこの場所を運んでいるから、それに疑問を抱かなくなった読者も多分に居ると思うけれど。

神崎日和が神崎日和となってからの話である——つまり、『日和号』の呪縛から解き放たれて、織崎記とかいう僕たちの命を狙うゴスロリ少女の支配から解放されてからのこと。

出自が出自ゆえ身寄りのない日和ちゃんは、ややあつて八九寺と共にこの北白蛇神社で暮らすことを選択した。勿論僕としてはそれに不満はない——何せ神様と一緒に住んでいるのだ。安全度は高い——が、それでも、ほんの少しばかり心配なので、こうしてこの所毎日、北白蛇神社に通っているのである。だがその度に、僕は日和ちゃんにある事を要求されるのだ。

即ちそれが、『社会見学』である。

厳密に言えば違うらしいが、遙か昔の時代で生きていた日和ちゃんにとって、現代の進化っぷりはどうやら非常に（日和ちゃん風に言う

ならいたく)興味の唆られるものであるようで、見た目相応の好奇心を持つ彼女は、社会見学と称し僕を引き連れて町の散策に出かけるのが恒例となったのであった。

僕は境内を見回した。

少し前までは諸事情により落ち葉だらけだった神域だが、今は日和ちゃんの毎朝の頑張りにより、すっかり綺麗になっている。箒で掃いただけだろうけれど、それだけでも印象はかなり違うのだ。

整理の出来る良い子、日和ちゃん。

……は、いいのだが。

さて、ところでこの神様は何処なのだろうか？ 先程から全く姿を見せない。あのツインテロリストは何処へ。

「日和ちゃん、八九寺はどこだ?」

「八九寺お姉ちゃんですか？ 八九寺お姉ちゃんは絶賛見回り中でございます」

「見回り?」

「はい。この町の見回りというのも、神さまたる八九寺お姉ちゃんのお務めの一つですから」

「はあん」

どうやら、一応は神様としての役割を果たしているようだ。眷属である蛞蝓たちに任せっきりにしない辺りに好感が持てる。

まあ、あいつの場合はもともとこの町を練り歩いていた幽霊だったからな。怠惰にごろごろして過ごすのは性に合わないのかもしれない。いい。

「じゃあ日和ちゃん、今留守番してるんじゃないの？ いいのか、そんな状況で行っちゃって」

「はい、問題はございません。阿良々木お兄ちゃんとの社会見学はあたいの日課ゆえ、八九寺お姉ちゃんもそれを前提として動いていると思われまます」

「日課扱いされてた!?!」

「あたいは早急にこの現代社会に馴染む必要があるのです。なのであたいは学習を自分に課しているのです。日課なのです」



「日課つっても、僕、流石に毎日は来れないぜ。いや、春休みの間は出来る限り毎日来るつもりではいるけれど、僕もそんなに暇って訳じゃあないしさ」

「なんと。阿良々木お兄ちゃんはいつも暇という訳ではなかったのですか。これは大発見です」

「八九寺に侵食されている……!」

バリバリ悪影響受けてるよこの子。多分八九寺の冗談なんかも真に受けてるんだろうな……その辺り真面目というか、機械時代のの名残というか。

こういうのを見ると、八九寺に預けたのはやっぱり失策だったんじゃないかなーとは思うけれど、じゃあ僕の家に関連帰ったら悪影響も何もないのかといえれば多分そんなことはない。

間違いなく。

寧ろ余計酷くなる未来しか見えない。主にでつかい妹とちっさい妹の所為で。場合によっては死体人形の所為で。

「という訳で阿良々木お兄ちゃん、本日はあたいに相応しい衣服を買いに参りましょう」

「衣服?」

「はい」

日和ちゃんはくるりと一回転して言った。灰色の袴がふわりと浮かぶ。

「あたい、考えたのです。八九寺お姉ちゃんがこの神社における神様なのだと思えば、果たしてあたいはこの場にとって、どういう役割の存在なのかということを」

「どういう役割……いや、別に役割なんてないんじゃないかねえの? そんな難しく考えなくても」

「いいえー」

日和ちゃんは目を見開き僕を凝視した。まんまるとした目がキラキラと光っている。眩しいよだから。

「あたいは日頃おかしいと思っていました。どうしてここはお社なのに、神主、或いは巫女が居ないのか。どうして八九寺お姉ちゃんは一

人だけでぽつんと過ごしているのだろう、と」

「巫女……まあ確かに、神社には神様だけで、神主とかは居ないってのも聞かない話ではあるな」

寺に住職が居ないようなものなのかもしれない。いや、住職と神主が同義存在という訳ではないだろうが。

「じゃあ、どうするってんだ？ 新しく、その道の専門家の人を招くのか？ 僕、そんな人脈持ってないぞ」

たとえば昔忍野の神主じみた姿は一度見たことがあるけれど、あれは忍野の本職ではない。ああいうのは特殊な事例である。

「いいえ。阿良々木お兄ちゃんにはそのようなものを求めておりません。聞くだけ無駄であると判断します」

「そういう機械っぽい冷徹な部分、これから直していこうな」

僕が傷付くから。

八九寺め、僕の知り合いが少ないことを言いふらしやがったな。今度キツイお仕置きしてやる。

「ですからね、衣服と申し上げましたでしょう」

日和ちゃんは言った。

「あたいが欲しているのは、巫女服です。巫女や神主を呼ぶのではなく、あたいが巫女になるのですよ」

〔003〕

——日和ちゃん自身が巫女になる。僕はそれに反対しなかった。

理由は簡単、反対する理由がないからだ。というより寧ろ、その案には諸手を挙げて賛成したいとさえ思えた。

これは完全に僕の我儘が入っているのだが、仮にこの神社に神主或いは巫女を配置するとして、ならばその役割を誰が果たすのだろうか？

僕個人としては、どこの誰かも分からないような奴にその役目を担当されたくないのである。

勿論、あてがわれるとすればその道の専門職の方だろうからその方が良いのは、理屈では分かる。けれど感情論を言えば、知人が担当し

た方が気を揉まなくていい分、精神的に負担が掛からないであろうこともまた事実だろう。

そんな訳で、僕としては大賛成だった。日和ちゃんにそういう知識があるのかどうかは不明だけれど、なに、取り敢えず見掛けだけの話だ。何も本気という訳ではないだろう。本気だとしても、僕は良いんだけど。

だがここで一つ問題が生じた。問題どころではなく大問題である。

日和ちゃんの所望する巫女服——そんなものが普通の服屋さんに売っているとは思えない。しまむら位なら僕たちの町にもあるけれど、そこで売っていないであろうことはわざわざ確認するまでもなく明白である。

ならばどこで購入すれば良いのかと考えたところ、僕が至った結論は、『それっぽいものを購入する』である。

……いや、勿論、ちゃんとしたものを買ってあげたいという気持ちは無きにしも非ずなのだが、如何せんそうになると、専門店を探さなくてはならなくなる。当然そんな所、この町にない。それ以外となると、コスプレと呼ばれる部類に足を突っ込んでしまう。流石にこんな児女を連れて行くわけにもいかない。というかだからそんな店ない。究極、僕一人で買いに行けば多少はマシかもしれないが、そもそもこの件の根幹にあるのは、日和ちゃんの社会見学である。日和ちゃん抜きとなると、もう何が何だか分からない。

だから苦肉の策だ——幸い、その辺りはちゃんと理解してくれたようで、

「了解しました。でしたらそれでいきましょう」

と言ってくれた。良い子！ 月火ならこうはいくまい！

そういう訳で、僕たちは駅前のデパートにやって来たのだった。町に唯一存在する大型デパートで、二月中旬辺りに一度来て以来である。あの時は斧乃木ちゃんと影縫さんとの合流場所になっていた。

「いと高き建物ですね！ このような場所があったとは、どうして今まで連れて来てくれなかったのですか！ あな憎しや！」

「だって提案しても全然取り合ってくれなかったじゃねえかよ」

偶に、僕の方から日和ちゃんが如何にも興味を持ちそうところを提案したりするのだが、大抵それは彼女の行きたい場所と噛み合わせず、見事に却下される。

「ふむ。成る程、あたいの所為でしたか。それは申し訳ありませんでした」

「いや、謝るような事じゃねえだろ。大体、プレゼンするときに魅力を伝え切れなかったから却下されてきた訳で……」

「お詫びとして、あたいの袴の下を覗かせて差し上げましょう」  
「待てや!!」

おもむろに袴に手を掛けた日和ちゃんの腕を慌てて掴む僕。なんだか誤解されそうな構図だった。

「どうしてそうなるんだ!?! 日和ちゃん、八九寺に毒されすぎだ!」  
「でも阿良々木お兄ちゃん、この間八九寺お姉ちゃんを宙ぶらりんにして下着を見ている時、すごく良い笑顔でしたよ」

「な、何の話だか分からないな! 仮に、仮に僕がそんな顔をしていたならば、それは下着を見てじゃあなく、八九寺に勝利したことの満足感と優越感に浸っていたからだ! 風評被害もいいところだぞ!!」

「あれ、そうだったのですか? 誤解していてすみませんでした」  
「全く……いや、分かってくれればいいんだけどさ、別に」

あまり人を、少女のパンツを見て喜ぶような変態と思って頂きたくないものである——この主張、何日目だっけ? 何度も言わなくてはならないなんて、僕に対する誤解はとことんまで根深いのだなあ。

そんな感じで誤解を解いて、僕と日和ちゃんはデパートの中に入った。

デパート内にはそれなりに人が居た。幾ら人口の少なめな田舎町とは言え、ここはデパート。今まで訪れた様々な場所のような閑散とした状態とは無縁なのである。まあ、二月に訪れた時は閉店間近の間だったのでは殆ど居なかったけれど。

一階は食品売り場、フードコートなど。因みに、ミスタードーナツはない。

「しかし、昔に比べると良い時代になりましたね。旧あるじ様——四

季崎記紀様のことです。あの金髪のことではありません——は、このような時代に早くなって欲しいものだと言っていました」

「ふうん……まあ、僕はその頃生きてた訳じゃあないから何とも言えないけれど、食糧事情は今と比較にならないくらい厳しかったんだろ  
うな」

「それもそうですが、それ以上に食品の数ですね。圧倒的です。あの頃が」とすれば、今は五とさえ言えるでしょう」

「外国の食品なんて、全然入ってなかったんだろ……だよな？」  
「ですね。鎖国真つ只中でした、はい」

僕と日和ちゃんは二階に上がった。服の売り場はこの階にある。因みに、斧乃木ちゃんたちと待ち合わせたのは、四階のゲームセンターだった。

「えすかれーたー！ 動かずして高所に上ることが出来るとは、からくりの進化をひしひしと感じます。旧あるじ様もこれが欲しいと言  
いておりました」

「旧あるじ様嘆いてばっかだな……」

織崎ちゃんの言を信じるならば、四季崎記紀は刀鍛冶でもあり占術師でもあったという。いや、寧ろ刀鍛冶がおまけで、占術師がメインなんだっけ。

曰く、未来を視ることが出来たらしい。

なまじ便利になった未来を知ってしまった分、誰よりも不便さに嘆いていたのかもしれない。そう考えると、未来を見通すなんて能力も、楽じゃあないのだろう。

まあ、過去のことを憂いても仕方ない。知らないことを嘆いても意味はない。僕と日和ちゃんは地図に従い、売り場に辿り着いた。和服を着たマネキンが目印めて立っていたので、案外地図を見なくても簡単に分かりそうだった。

「等身大の人形ですか。親近感を覚えます——これ、動くのですか？」  
「動かないよ。っーか、動いたら怖すぎるだろ」

「ほう？ 何ゆえ？ 機械人形ろぼっとという概念があるのですから、不自然なことではないでしょうに」

「そりゃあ不自然じゃないのかもしれないけれど……知ってるか？  
恐怖の谷って言葉があつてだな——」

僕が偉そうに、日和ちゃんに知識をひけらかそうとした、その瞬間、  
僕の視界にあり得ないものが飛び込んできた。

いや、それはものではない——人だ。人と言っても、人型のマネキン  
とかではない。真正正銘、生身の人間。

これは天罰なのか？ ちよつとだけ満足感と優越感に浸ろうとした  
のが間違이었다か——紛れもない偶然だったのだろうが、しかし  
僕に反省を促すには十分であつた。

果たしてそこに居たのは、誰であろう——老倉育だった。

「004」

何故？ 何故老倉がこんなところにいるのだ。僕の頭の中が一瞬  
にして疑問と疑問符で埋め尽くされた。

老倉は去年の十月末頃、この町を去つた筈じゃあなかったか？ い  
やそりゃあ二度と戻つてこないってことは無いだろうし、あれから何  
月が経っているので状況は幾らでも変わるだろうが、何故よりによつ  
て今日なのだ。

「阿良々木お兄ちゃ——」  
「っ!!」

僕は日和ちゃんの口元を慌てて抑え、身を屈めて通路に身を隠し  
た。前後にはズラリと並べられたレディースの服。端からみれば不  
審者一直線。

「もがもが」

「ひ、日和ちゃん、ここで僕の名前を呼ぶの、ちよつとだけやめても  
らつていい?」

「むぐぐ」

日和ちゃんは頷いた。必死に状況を飲み込もうとしているのが、ぐ  
るぐると回る目から伝わってくる。僕は手を離した。

「あ、あの? あら……お兄ちゃん、これはいったい?」

「悪い、ちょっと付き合ってくれ日和ちゃん……」

「は、はあ……う？」

僕は服と服の間から、或いは通路から少し顔を出し、周りを警戒した。大丈夫、老倉はまだ気付いていないらしい。

老倉育——僕の元同級生。同じクラスだったが、とある事情で転校し、町から去った筈なのだが……。

老倉は少し離れた場所で服を物色している。どんな服を着ようとかいつの勝手だしそこまで興味は無いが、なのに僕がこうしてストーカーじみたことに手を出したのは、理由がある。

老倉と接触しないためだ——仔細は省くが、彼女は僕のことを蛇蝎の如く嫌っている。宛ら親の仇であるかのように憎んでいる。そして僕自身、あいつには出来るだけ関わらないようにした方がいいと思っている。それが互いのためなのだ。

見つかりたくないならこの場からさっさと逃げ出せば良いのではないかと思っただが、というかぶっっちゃけ今思っているが、この行動に出た当時の思考を思い出して言うと、同じ場所に留まることによつて、違う場所ではったり遭遇する確率を著しく下げることが目的だった。

例えば、仮に僕たちがここから逃げ出したとしよう。暫くの間、僕たちは別の店で時間を潰すだろう。けれどその店に老倉がやってくる確率は？　ゼロではない。有り得る。

つまり、逃げながらも見つかる危機感からは決して逃れられない訳だ——なら、確実に居なくなつたのを確認するまでじつと同じ店で身を隠しておいた方が、後々ばつたり遭遇する確率は低くなる。

迷子になつた時はその場を動かない方がいいというが、逆に見つからないために動かない今の状況はある種矛盾していると言えるだろう。つーかそう考えると、見つかるんじゃないやねえの……？

僕は老倉から出来るだけ目を離さないようにした。さっきの話と関連して、老倉が迷子にならないように見張る保護者の気分だったが、実際はうら若い少女をつけ狙う不審者以外の何物でもなかったのだろう（そもそも老倉の保護者とか、誰が名乗ろうとも僕だけは絶対

に名乗っちゃいけないやつだ)。

「……しかし、服をかうなんて普通の女子らしいところもあるんだな、あいつ」

「事情を全く察せておりませんので突っ込み辛いですが、多分それかなり失礼な物言いなのではないでしょうか」

その通りだった。僕はあいつを何だと思っっているのだろう。

中学生の頃は数学の妖精と思ってたりしたし、高校で再開した時はバリバリに敵意を向けられて怨霊のように感じたりしたが……そうだよ、あいつは人間なんだ。怪異とは全く無縁の人間なのだ。そして、だからこそ恐ろしい。

理由の分からない悪意——ではなく、十分僕もその理由を理解したけれど、それでも恐ろしいことには変わりないのである。

「随分と怖気付いておりますね、お兄ちゃん。らしくないです」

「僕は恐怖を知らない英雄じゃないんだぞ日和ちゃん。小市民を標榜していることを忘れたか」

「初耳ですよそんなこと」

そんなこと一回も言っただいからね。うん。

「はあ。やれやれ見損ないましたよお兄ちゃん。お兄ちゃんがそのようなヘタレとはあたいたい思っっております……」

「ヘタレだよ僕は……って、ひ、日和ちゃん？ ああ、何？ 何で立ち上がっちゃってるの……!?!」

日和ちゃんは立ち上がった。背丈は低いので服の上から少し顔が覗いた程度なのだろうが、僕にとっては冷や汗ものであった。

「待て待て待て待てえ！ ひ、日和ちゃん！ お座り！ お座りー！」  
僕は出来る限り声を殺して日和ちゃんに呼び掛けたが、

「申し訳ありませんがお兄ちゃん。逃げてばかりというのは、如何なものかとあたいは思います。なので、ここらでどうか仲直りをお思いい」

「そうじゃないさういふことじゃあないんだよ!? 君は何も知らないからさういふこと言えるけど、そんな単純な、穩便に済むような話じゃなくて——!」



「お許しください、お兄ちゃん」

「っ!!」

そう言うのと日和ちゃんは、老倉にも聞こえそうな声で――。

「老倉お姉ちゃん――!」

「そこまでだ日和ちゃん!」

老倉の名前を呼んだ、が、そこまでだった。僕は一瞬立ち上がって日和ちゃんの頭を抑え、口には猿轡のように左手を噛ませ、無理矢理しやがませた。

「も(づ)も(づ)」

「悪い……でもマジでやめてくれ。本当……」

「も(づ)も(づ)」

ざくざくと手を噛んでくる日和ちゃん。まるで刃物で刺されているかのような感触だ。というか本当に刃物状態なんじゃ？

僕はその姿勢のまま石のようにじっと身を潜めた。息さえしていなかったかもしれない。冷や汗が際限なく噴き出した。

老倉の声が聞こえた。

「今の声……老倉お姉ちゃんって」

「っ……………」

聞こえてたか……そりやあ聞こえてるよなあ。聞こえてない訳ないよなあ、都合よくいかないよなあ……!

でも落ち着け、落ち着くん……幸いなことに、日和ちゃんは僕の名前を呼んでいない。老倉に僕の存在が伝わる訳はない。まだバレてはいない……。

「子供の声……かしら?」

日和ちゃんは手を噛んでこない。一応じつとしている。けれど僕は手を離さない。油断した瞬間に続きを叫ばれると大変だ。僕が死んでしまう。

「……………ふふっ」

「?」

笑い?

何がおかしかったのだろうか。さっきの子供の呼び声は、偶然自分

の名前と一致しただけだと思ってくれたのだろうか。

なんて、少しほのぼのとした気分に一瞬なってしまったが、それも束の間のことである。

「懐かしいわね……お姉ちゃん。育お姉ちゃん、なんて呼ばれてたわね……ふふふ」

「……………」

何故だろうか、冷や汗が止まらない。ただ子供の頃を懐かしんでい  
るだけだというのに、どうしてこんなに怖いんだ、こいつ。

「撫子ちゃん、私のこと覚えてるかしらね——なんて、覚えてない  
か。隅っこでずうっと、陰気に三角座りしてた私のことなんて」

「……………」

「……………阿良々木い」

「ひっ…………!?!」

声が漏れそうになった。

思わず僕は両手で口を押さえた。日和ちゃんの口から手が離れて  
しまったが——ただならぬ雰囲気を読み取ったのか？ 日和ちゃん  
は何も言わない。

「阿良々木、そう、阿良々木……思い出しちゃったわ。折角忘れてたの  
に……いいえ、忘れてなんかいないわ。あいつはいつだって私を邪魔  
してくるもの、忘れようにも忘れようがない……忘れたくても忘れら  
れない忘れたくない忘れられたくないっ……いいっ……いいっ……!」

まるで金縛りにあったかのように、僕は動けなくなった。隣の日和  
ちゃんは、驚いたように目を丸くしている。

「嫌い……嫌い……嫌い……嫌いと嫌いが嫌いで嫌いの嫌いへ嫌いな嫌いは嫌  
いを嫌い——嫌い、嫌い、嫌いだ、阿良々木いっ!!」

老倉は叫びながら走り出した。見えないが、足音が加速した。

音は僕たちに近付き、遂に真横を通り過ぎ——再び遠ざかっていっ  
た。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………あの、阿良々木お兄ちゃん。すみませんでした」

「いいよ、別に……………こつちこそ、ごめんな」

日和ちゃんは申し訳なきそうに言った。というか頭を下げてきた。「あたいはてつきり、阿良々木お兄ちゃんだけがあの方を気にしていらつしやるのかと思っておりましたが……………どつちもどつちでした。というか、むしろあの方が苛烈と言いますか……………阿良々木お兄ちゃんに迷惑を掛けてしまい、重ね重ね、申し訳ありません」

「いや、日和ちゃんは悪くないよ。ちゃんと説明しなかった僕に責任はある……………それに迷惑っていうなら、寧ろ老倉の方にだ。悪いことしちゃった」

あの様子を見るに、老倉はただショッピングに来ていただけだったのだ。それなのに僕が過敏に反応してしまったが故、それをぶち壊しにしてしまった。

僕から見れば、老倉はタイミングの悪い登場だったけれど、向こうからしてみても、いや、寧ろ向こうの方が、よっぽどタイミングが悪いと思っっているだろう……………実際には、老倉の方は僕が居たことに気付いていなかったのだろうが。

それに日和ちゃんがあのような行動に出たのは、僕の曖昧な態度が原因だ。非は僕にあるとしか言いようがない——謝るなら、僕の方が二人に謝らなくてはならない。

……………少し空気が暗くなってしまったが——イレギュラーは兎も角、僕たちの目的は老倉に会うことではなく、着物を購入することだ。

購入したのは子供用の着物。イメージしているのは巫女なので、真っ白な無地の着物を購入した。ここ最近金の消費が激しいような気がするが、まあ無駄遣いとは言えまい。

ミツシヨンを終えた僕たちはデパートを後にした。幸か不幸か、帰りに老倉と再び遭遇することはなかった。

北白蛇神社への帰路、日和ちゃんが言った。

「本日は……………色々すみませんでした。それに、ありがとうございました」

「だから、謝る必要なんてねえよ。それに感謝されるようなことでも

ないさ。児女に貢ぎ物を贈るなんてことは、男にとっての常識だからな」

「左様ですか？ 男性というのは生き辛い生き物なのです。データに加えておきます」

「お、おう」

まあ、頻繁にねだられるのは流石に辟易とするけれど——でも、せめてもう少しだけ。

折角この時代にやって来たのだから、出来るだけ今を謳歌してほしい。春休みの間だけでも、その手伝いをしてやりたいと思っている。

北白蛇神社に凱旋した僕たちは、それから着物の着付けなどをして、日和ちゃんと暫く遊んでから、僕は家路に着くことにした。

別に門限とかはないし、どちらかと言えば僕については放任気味なので遅くならうと大した問題ではないが、だからと言って夜遅くまで出歩いていい理由にはならない。

その旨を日和ちゃんに伝えると、やはり彼女はいつも通り、少し悲しそうな顔をするけれど、それでも聞き分けよく、機械のように従順に、こう返すのであった。

「それでは阿良々木お兄ちゃん。また明日、お会いしましょう！」

そうやって日和ちゃんは、眩しささえ覚えるほどの満面の笑みを浮かべたのだった。あの笑顔は、沈みゆく夕日とは比べるべくもないものだった。

そしてそれは、日和ちゃんが僕に向けた最後の笑顔であり——最後の別れの挨拶となったのである。

[005]

「……………」

「…………む、どうしたお前様。そのような、眼をくり抜きたくなるほど気持ちの悪い顔をして」

「え？ ……ああ、悪い。顔に出てたか」

——回想は終わり、現在の時系列へ。

今日は四月三日。あれからちょうど三日目であり、そして、日和ちゃんが戦死してからたったの二日目の話。

僕と忍は臥煙さんの依頼を達成するため、山登りに勤しんでいた。いや、正確に言えば、今現在は山を降りているのだが。

三つの山が連なる逢我三山——その第一の山、鬼会山を僕たちは降りていた。現在時刻は午後二時過ぎ。早朝から出発してから殆ど歩きっぱなしである。しかしその甲斐あって、第二の山へは今日中に辿り着くことができそうだ。

「困るのう、お前様よ。あまりぼうつとするでないぞ、たわけ。第二の山——千針山じゃったか——は、あの小憎たらしいオノノキ嬢曰く、山登りというよりロッククライミングのようなものらしいからな。気を引き締めてかかれよ」

「おう、分かってるさ」

千針山——もう既に名前の時点で登るのを躊躇したくなるような山だが、斧乃木ちゃんによればその名前は決して実際の山を裏切っていないらしいというのだから、その気持ちはより一層強くなる。ぶっちゃけ帰りたいたい。

けれども。

この任務は、織崎記と淡海静を討伐するためには必要な過程だ。あの二人を倒すためには臥煙さんの助けが必要なのは間違いないし、何よりこの先手に入れるべきアイテムは、連中の息の掛かった刀なのだ。

退く訳にはいかないのである——あいつらに勝つために。そして何より、日和ちゃんの仇を討つために。

周囲を取り囲む木々が少なくなってきた。その密度は減り、だんだんと生じてきた隙間からは、尖った岩のようなものが顔を覗かせるようになっていた。

気を引き締めろ、阿良々木暦。

次の山でも何があるかは分からないが——後ろばかり振り返って、

過去ばかりを重点している訳にもいかないのだ。  
僕たちの未来を、掴むために。